昭和四年八月十三日印刷
昭和四年八月二十日發行

國譯一切經　阿含部四

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地一番

印刷者　長尾文雄
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地一番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝二一一六番
電話芝三〇四〇番

製本所　兩角製本所

連、汝法を說く時、强く法を說きて師子の如きこと莫れ。大目揵連、汝法を說く時意を下して法を說き力を捨て力を滅し力を破壞し、當に以て强く法を說き師子の如くならざるべし。大目揵連、當に是の如きを學すべし』。その時尊者大目揵連即ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け、白して曰く『世尊、云何が比丘究竟に至るを得、白淨を究竟し梵行を究竟し、梵行を究竟し訖るや。』世尊告げて曰はく『大目揵連、比丘若し樂を覺り苦を覺り不苦不樂を覺れば、彼この覺無常を觀じ、興衰を觀じ、斷を觀じ、無欲を觀じ、滅を觀じ、捨を觀ず。彼この覺無常を觀じ、興衰を觀じ、斷を觀じ、無欲を觀じ、滅を觀じ、捨を觀じ已りてこの世を受けず。世を受けざるに因り、已りてすなはち疲勞せず。疲勞せざるに因り已りてすなはち般涅槃し、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。大目揵連、是の如く比丘究竟に至るを得、白淨を究竟し梵行を究竟し梵行を究竟し訖る』。佛說是の如し。尊者大目揵連佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第二十

後に於て前想すべし。是の如くすれば睡眠すなはち滅するを得べし。若し汝睡眠なほ滅せざれば大目揵連、當に經行道を捨て經行道頭に至り尼師檀を敷きて結跏趺坐すべし。是の如くすれば睡眠すなはち滅するを得べし。若し汝睡眠なほ滅せざれば大目揵連、當に還りて室に入り優多羅僧を四疊し以て床上に敷き僧伽梨を襞みて枕と作し右脇にして臥し、足と足相累ね心明想を作し正念・正智にして常に欲起想を立すべし。大目揵連、床樂眠臥安快を計すること莫れ。財利を貪ること莫れ。名譽に著すること莫れ。所以者何。我一切の法與に會ふべからずと說き、亦與に會ふと說く。大目揵連、我何の法、與に會ふべからずと說くや。大目揵連、若し道俗の法共に合會するは我この法與に會ふべからずと說く。大目揵連、若し道俗の法共に合會すればすなはち多く所說有り。若し多く所說有れば則便ち調有り。若し調有ればすなはち心息まず。大目揵連、若し心息まざればすなはち心定を離る。大目揵連、この故に我與に會ふべからずと說く。大目揵連、我何の法與に共に會ふべしと說くや。大目揵連、彼の無事處、我この法與に共に會ふべしと說く。山林・樹下・空・安靜處・高巖・石室寂として音聲無く遠離して惡無く人民有ること無く隨順し宴坐す。大目揵連、我この法與に共に會ふべしと說く。大目揵連、汝若し村に入りて乞食を行ぜば當に以て利を厭ひ、供養恭敬を厭ふべし。汝若し利・供養・恭敬に於て心厭を作し已らばすなはち村に入りて乞食せよ。大目揵連、高大意を以て村に入りて乞食することゝ莫れ。所以者何。諸の長者の家是の如き事有り。比丘來りて乞食し、長者をして作意せざらしめ、比丘すなはちこの念を作す、誰か我が長者の家を壞れ。所以者何。我長者の家に入るに長者作意せず。これに因りて憂を生じ憂に因りて調を生じ、調生ずるに因りて心息まず、心息まざるに因りて心すなはち定を離る。大目揵連、汝法を說く時、諍說を以てすること莫れ。若し諍說すればすなはち多く所說有り。多く說くに因るが故に則便ち調を生じ、調を生ずるに因るが故にすなはち心息まず。心息まざるに因るが故にすなはち心定を離る。大目揵

八十三、長老上尊睡眠經第十二[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]婆耆痩に遊び[三]鼉山・[四]怖林・[五]鹿野園中に在しぬ。その時尊者大目揵連摩竭國に遊び[六]善知識村中に在りぬ。こゝに於て尊者大目揵連獨り安靜處に宴坐し思惟してすなはち睡眠しぬ。世尊遙かに尊者大目揵連獨り安靜處に宴坐し思惟してすなはち睡眠するを知りたまひぬ。世尊知り已りて卽ち如其像定に入り、如其像定を以て猶ほ力士の臂を屈申する頃の若く、婆耆痩・鼉山怖林鹿野園中より忽ち沒して現れず、摩竭國善知識村の尊者大目揵連の前に往きたまひぬ。こゝに於て世尊定より而も寤めて告げて曰はく『大目揵連、汝睡眠に著す。大目揵連、汝睡眠に著す』。尊者大目揵連世尊に白して曰く『唯然り世尊』。佛また告げて曰はく『大目揵連、所相の如く睡眠に著す。汝彼の相を修すること莫れ、亦廣布すること莫れ。是の如くすれば睡眠すなはち滅するを得べし。[七]若し汝睡眠なほ滅せざれば大目揵連、當に本聞きし所の法に隨ひ、隨ひて受持し廣布し誦習すべし。是の如くすれば睡眠すなはち滅するを得べし。若し汝睡眠なほ滅せざれば大目揵連、當に本聞きし所の法に隨ひ、隨ひて受持し他の爲に廣說すべし。是の如くすれば睡眠すなはち滅するを得べし。若し汝睡眠なほ滅せざれば大目揵連、當に本聞きし所の法に隨ひ、隨ひて受持し心に念じ心に思ふべし。是の如くすれば睡眠すなはち滅するを得べし。若し汝睡眠なほ滅せざれば大目揵連、當に兩手を以て耳を捫摸すべし。是の如くすれば睡眠すなはち滅するを得べし。若し汝睡眠なほ滅せざれば大目揵連、當に冷水を以て面目を澡洗し及び身體に灑ぐべし。是の如くすれば睡眠すなはち滅するを得べし。若し汝睡眠なほ滅せざれば大目揵連、當に室より外に出で四方を觀、星宿を瞻視すべし。是の如くすれば睡眠すなはち滅するを得べし。若し汝睡眠なほ滅せざれば大目揵連、當に定より出でゝ屋頭に至り、露地に經行し諸根を守護し心安くして內に在り、

【一】A. iv. 85.
【二】婆耆痩(Bhaggesu)。
【三】鼉山 (Suṃsumāra-giri)。
【四】怖林(Bhesakaḷāvana)。
【五】鹿野園(Migadāya)。
【六】善知識村 (Kallavāḷa-muttagāma)。
【七】原漢文は「若汝睡眠故不滅者」にして巴利文は「若し斯の如くして住する汝のこの睡眠棄てられずば」なり。故字を「なほ」と讀むは多少無理かと思へどこれを通常の讀方にしては意味甚だしく通じがたきよりこれを採りたり。

と欲［せず］、作證せざるを作證せんと欲せず。彼後時に於てすなはち數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁す。彼數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁し已りて心すなはち欲を生ず。彼心欲を生じ已りてすなはち身熱し心熱す。彼身心熱し已りてすなはち戒を捨て道を罷む。諸賢、猶ほ一無事處に［四］支離彌梨蟲の聲を聞くが如し。彼の無事處に或は王或は王大臣夜止宿し、彼の象聲・馬聲・車聲・步聲・螺聲・鼓聲・細腰鼓聲・妓鼓聲・舞聲・歌聲・琴聲・飲食聲ありて彼若し本支離彌梨蟲の聲を聞けるもすなはちまた聞かず。諸賢、若しこの說を作す有り、彼の無事處に終にまた支離彌梨蟲の聲を聞かずと。是の如きは彼正說すと爲すや』。答へて曰く『不なり、所以者何。彼の王及び王大臣夜を過ぎて平旦各自ら還歸す。彼若し象聲・馬聲・車聲・步聲・螺聲・鼓聲・細腰鼓聲・妓鼓聲・舞聲・歌聲・瑟聲・飲食聲を聞くが故に、支離彌梨蟲の聲を聞かず。彼既に去り已りて還りて聞くこと故の如し』。『是の如く諸賢、無想心定を得、無想心定を得已りてすなはち自ら安住しまた更に求めて未だ得ざるは得んと欲［せず］、獲ざるは獲んと欲［せず］、作證せざるは作證せんと欲せず。彼後時に於てすなはち數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁す。彼數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁し已りてすなはち心欲を生ず。心欲を生じ已りてすなはち身熱し心熱す。彼身心熱し已りてすなはち戒を捨て道を罷む。諸賢、これを一人有りと謂ふ』。その時質多羅象子比丘尋いでその後に於て戒を捨て道を罷めぬ。質多羅象子比丘の諸の親しき朋友質多羅象子比丘戒を捨て道を罷めぬと聞き已りて尊者大拘絺羅の所に往詣し到り已りて白して曰く『尊者大拘絺羅、質多羅象子比丘の心を知ると爲す。餘事に因りて知ると爲す。所以者何。今質多羅象子比丘已に戒を捨て道を罷めぬ』。尊者大拘絺羅彼の親しき朋友に告げて曰く『諸賢、この事正に應に爾るべし。所以者何。如眞を知らず、如眞を見ざるを以てなり。所以者何。如眞を知らず如眞を見ざるに因るが故に』。尊者大拘絺羅の所說是の如し。彼の諸の比丘、尊者大拘絺羅の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

【四】支離彌梨蟲（Cirillika-sadda）。

す。是の如く南方・西方・北方より大風卒に來りて彼の湖水を吹き波浪を動涌す』。『是の如く諸賢、或は一人有り、第三禪を得。彼第三禪を得已りてすなはち自ら安住しまた更に求めて未だ得ざるを得んと欲[せず]、獲ざるを獲んと欲[せず]、作證せざるを作證せんと欲せず。彼後時に於てすなはち數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁す。彼數白衣と共に會し、調笑し貢高にして種々談譁し已りて心すなはち欲を生ず。彼心欲を生じ已りてすなはち身熱し心熱す。彼身心熱し已りてすなはち戒を捨て道を罷む。諸賢、これを一人有りと謂ふ。(5)また次に諸賢、或は一人有り第四禪を得。彼第四禪を得已りてすなはち自ら安住しまた更に求めて未だ得ざるを得んと欲[せず]、獲ざるを獲んと欲[せず]、作證せざるを作證せんと欲せず。彼後時に於てすなはち數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁す。彼數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁し已りて心すなはち欲を生ず。彼心欲を生じ已りてすなはち身熱し心熱す。彼身心熱し已りてすなはち戒を捨て道を罷む。諸賢、猶ほ居士・居士の子の如し。微妙の食を食し充足飽滿し已りて本食せんと欲せるは則ちまた欲せず。諸賢、若しこの說を作す有り、彼の居士・居士の子終にまた食を得んと欲せずと。是の如きは彼正說すと爲すや』。答へて曰く『不なり。所以者何。彼の居士・居士の子夜を過ぎて飢え、已りて、彼若し本用て食せざりし所は還りてまた得んと欲す』。『是の如く諸賢、或は一人有り、第四禪を得、彼第四禪を得已りてすなはち自ら安住し、また更に求めて未だ得ざるは得んと欲[せず]、獲ざるは獲んと欲[せず]、作證せざるは作證せんと欲せず。彼後時に於てすなはち數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁す。彼數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁し已りて心すなはち欲を生ず。彼心欲を生じ已りてすなはち身熱し心熱す。彼身心熱し已りてすなはち戒を捨て道を罷む。諸賢、これを一人有りと謂ふ。(6)また次に諸賢、或は一人有り無想心定を得、彼無想心定を得已りてすなはち自ら安住しまた更に求めて未だ得ざるを得んと欲[せず]獲ざるを獲ん

(3)また次に諸賢、或は一人有り、第二禪を得。彼第二禪を得已りてすなはち自ら安住し、また更に求めて未だ得ざるを得んと欲[せず]獲ざるを獲んと欲[せず]、作證せざるを作證せんと欲せず。彼後時に於てすなはち數白衣と共に會し、調笑し貢高にして種々談譁す。彼數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁し已りて心すなはち欲を生ず。彼心欲を生じ已りてすなはち身熱し心熱す。彼身心熱し已りてすなはち戒を捨て道を罷む。諸賢、猶ほ大雨時のごとし。四衢道中塵滅して泥と作る。諸賢、若しこの說を作す有り、この四衢道泥終に燥かず、また塵と作らずと。是の如きは彼正說すと爲すや』。答へて曰く『不なり。所以者何。この四衢道或は象行き馬行き駱駝・牛驢・猪鹿・水牛及び人民行き、風吹き日炙き、彼の四衢道泥乾燥し已りて還りてまた塵と作る』。『是の如く諸賢、或は一人有り第二禪を得。彼第二禪を得已りてすなはち自ら安住し、また更に求めて未だ得ざるを得んと欲[せず]、獲ざるを獲んと欲[せず]、作證せざるを作證せんと欲せず。彼後時に於てすなはち數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁す。彼數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁し已りて心すなはち欲を生ず。彼心欲を生じ已りてすなはち身熱し心熱す。彼身心熱し已りてすなはち戒を捨て道を罷む。諸賢、これを一人有りと謂ふ。(4)また次に諸賢、或は一人有り、第三禪を得。彼第三禪を得已りてすなはち自ら安住しまた更に求めて未だ得ざるを得んと欲[せず]、獲ざるを獲んと欲[せず]、作證せざるを作證せんと欲せず。彼後時に於てすなはち數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁す。彼數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁し已りて心すなはち欲を生ず。彼心欲を生じ已りてすなはち身熱し心熱す。彼身心熱し已りてすなはち戒を捨て道を罷む。諸賢、猶ほ山泉湖水澄淸平岸なるがごとし。定まりて動搖せず。亦波浪無し。諸賢、若しこの說を爲す有り、彼の山泉湖水終にまた動かず亦波浪無しと。是の如きは彼正說すと爲すや』。答へて曰く『不なり。所以者何。或は東方より大風卒に來りて彼の湖水を吹き波浪を動涌

梵行の慚づべく愧づべく愛すべく敬すべき前にては彼すなはち善く守り善く護り、若し後時に於て世尊の前を離れ及び諸〃梵行の慚づべく愧づべく愛すべく敬すべきの前を離るれば彼すなはち數白衣と共に會し調笑し、貢高にして種々談譁す。彼數白衣と共に調笑し、貢高にして種々談譁し已りて心すなはち欲を生ず。彼心欲を生じ已りてすなはち身熱し心熱す。彼身心熱し已りてすなはち戒を捨て道を罷む。諸賢。これを一人有りと謂ふ。(2)また次に諸賢、或は一人有り、初禪に逮り得。彼初禪を得已りてすなはち自ら安住し、また更に求めて未だ得ざるを得んと欲[せず]、獲ざるを獲んと欲[せず]、作證せざるを作證せんと欲せず。彼後時に於てすなはち數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁す。彼數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁し已りて心すなはち欲を生ず。彼心欲を生じ已りてすなはち身熱し心熱す。彼身心熱し已りてすなはち戒を捨て道を罷む。諸賢、猶ほ大雨時のごとし。村間の湖池、水その中に滿ち、彼若し本の時見し所の沙石・草木・甲蟲・魚鼈・蝦蟆及び諸の水性の去る時來る時走る時住る時、後、水滿ち已りて盡くまた見ず。諸賢、若しこの說を作す有り、彼の湖池、中途にまた沙石・草木・甲蟲・魚鼈・蝦蟆及び諸の水性の去る時來る時走る時住る時を見ずと。是の如きは彼正說すと爲すや』。答へて曰く『不なり。所以者何。彼の湖池の水或は象飲み馬飲み駱駝・牛驢・猪鹿・水牛飲み、或は人、風吹き日炙くに取用す。彼若し本の時沙石・草木・甲蟲・魚鼈・蝦蟆及び諸の水性の去る時來る時走る時住る時を見ざるも後水減じ已りて還見ること故の如し』。『是の如く賢者、或は一人有り、初禪に逮り得、彼初禪を得已りてすなはち自ら安住しまた更に求めて未だ得ざるを得んと欲[せず]獲ざるを獲んと欲[せず]、作證せざるを作證せんと欲せず。彼後時に於てすなはち數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁す。彼數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁し已りて心すなはち欲を生ず。彼心に欲を生じ已りてすなはち身熱し心熱す。彼身心熱し已りてすなはち戒を捨て道を罷む。諸賢、これを一人有りと謂ふ。

この佛の教を論ぜる時その中間に於て競ひて所說有り、諸の比丘の說法訖竟るを待たず又恭敬を以てせず善觀を以てせずして諸の上尊長老比丘に問ひぬ。この時尊者大拘絺羅彼の衆中に在りぬ。こゝに於て尊者大拘絺羅質多羅象子比丘に告げて曰く『賢者、當に知るべし、衆多の比丘この法律、この佛の教を說く時、汝中に於て競ひて所說有ること莫れ。若し諸の比丘の所說訖り已りて、然る後說くべし。汝當に恭敬を以てすべし。當に善觀を以て諸の上尊長老比丘に問ふべし。恭敬せざること莫れ、善觀せずして諸の上尊長老比丘に問ふこと莫れ』。その時質多羅象子比丘の諸の親しき朋友悉く衆中に在りぬ。こゝに於て質多羅象子比丘の諸の親しき朋友尊者大拘絺羅に語げて曰く『賢者大拘絺羅、汝大いに質多羅象子比丘を責數すること莫れ。所以者何。質多羅象子比丘戒德多聞なり。懈怠に似如し然も貢高ならず。賢者大拘絺羅、質多羅象子比丘諸の比丘、所爲の時に隨ひて能く佐助す』。こゝに於て尊者大拘絺羅、質多羅象子比丘の諸の親しき朋友に語げて曰く『諸賢、他心を知らざれば妄に稱不稱を說くを得ざれ。所以者何。或は一人有り、世尊の前に在る時及び諸の上尊長老、梵行の慚づべく愧づべく愛すべく敬すべき前にては彼すなはち善く守り善く護り、若し後時に於て世尊の前を離れ及び諸の上尊長老、梵行の慚づべく愧づべく愛すべく敬すべき前を離るれば、彼すなはち數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁す。彼數白衣と共に會し調笑し貢高にして種々談譁し、已りて心すなはち欲を生ず。彼心欲を生じ已りてすなはち身熱し心熱す。彼身心熱し已りてすなはち戒を捨て道を罷む。諸賢、猶ほ牛の他の田中に入るが若如し。田を守る人捉へて或は繩を以て繫ぎ或は欄中に著く。諸賢、若しこの說を作す有り、この牛また他の田中に入らずと。是の如きは彼正說すと爲すや』。答へて曰く『不なり。所以者何。謂く彼の牛は繩の爲に繫がるゝも、或は斷ち或は解き、欄の爲に遮らるゝも或は破り或は跳ね出でまた他の田に入ること前の如くにして異る無し。(1)諸賢、或は一人有り、世尊の前に在る時、及び諸の上尊長老、

【三】大拘絺羅 (Mahā-Kot-thita)。

習し是の如く廣布するはこれ〻第四・五・六・七德と謂ふ。(8)また次に比丘、欲を離れ惡不善の法を離れ第四禪に成就して遊ぶを得るに至る。是の如く念身を修習し是の如く廣布するはこれを第八德と謂ふ。(9)また次に比丘、三結已に盡き須陀洹を得、惡法に墮せず定んで正覺に趣き、極めて七有を受け天上人間に一たび往來し已りて苦際を得。是の如く念身を修習し是の如く廣布するはこれを第九德と謂ふ。(10)また次に比丘三結已に盡き婬・怒・癡、薄く一たび天上人間に往來するを得、一たび往來し已りて苦際を得。是の如く念身を修習し是の如く廣布するはこれを第十德と謂ふ。(11)また次に比丘五下分結盡き彼の間に生じすなはち般涅槃し不退法を得てこの世に還らず。是の如く念身を修習し是の如く廣布するはこれを第十一德と謂ふ。(12)また次に比丘若し息解脫有れば色を離れ無色を得、如其像定を身に作證し成就して遊び而も慧觀を以て漏を知り漏を斷ず。是の如く念身を修習し是の如く廣布するはこれを第十二・十三・十四・十五・十六・十七德と謂ふ。(18)また次に比丘　如意足・天耳・他心智・宿命智・生死智あり、諸漏已に盡き無漏の心解脫・慧解脫を得、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。是の如く念身を修習し是の如く廣布するはこれを第十八德と謂ふ。是の如く念身を修習し是の如く廣布すれば當に知るべし、この十八功德有り』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

八十二、[一]支離彌梨經第十一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び竹林加蘭哆園に在しぬ。その時衆多の比丘中食後に於て少しく所爲有りて講堂に集坐し諍事を斷ぜんと欲しぬ。謂くこの法律この佛の教を論じぬ。彼の時[二]質多羅象子比丘亦衆中に在りぬ。こゝに於て質多羅象子比丘、衆多の比丘、この法律、

【九】第十三德は如意足、第十四・第十五・第十六・第十七・第十八德は天耳・他心・宿命・生死・漏盡智にあたる。

【一】A. iii. 392.

【二】質多羅象子比丘(Citta Hatthi-Sariputta)。

受けず』。『是の如く若し沙門・梵志有り、正に念身を立して遊行し、無量心なれば彼、魔波旬その便を伺求し終に得る能はずと爲す。所以者何。彼の沙門・梵志空ならずして念身有るが故に、若し沙門・梵志有り、正に念身を立せずして遊行し少心なれば彼、魔波旬その便を伺求し必ず能く得と爲す。所以者何。彼の沙門・梵志空にして念身無きが故に。猶ほ人火を求め槁木を以て母と爲し燥鑚を以て鑚るがごとし。比丘の意に於て云何。彼の人是の如くして火を得と爲すや不や』。比丘答へて曰く『得るなり世尊。所以者何。彼燥鑚を以て槁木を鑚る。この故に必ず得』。『是の如く若し沙門・梵志有り、正に念身を立せずして遊行し少心なれば、彼、魔波旬その便を伺求し必ず能く得と爲す。所以者何。彼の沙門・梵志空にして念身無きが故に。若し沙門・梵志有り、正に念身を立して遊行し無量心なれば彼魔波旬その便を伺求し終に得る能はずと爲す。所以者何。彼の沙門・梵志空ならずして念身有るが故に。猶ほ人火を求め濕木を以て母と爲し濕鑚を以て鑚るがごとし。比丘の意に於て云何。彼の人是の如くして火を得ると爲すや不や』。比丘答へて曰く『不なり世尊。所以者何。彼濕鑚を以て濕木を鑚る。この故に得ず』。『是の如く若し沙門・梵志有り、正に念身を立して遊行し無量心なれば彼、魔波旬その便を伺求し終に得る能はずと爲す。所以者何。彼の沙門・梵志空ならずして念身有るが故に。

是の如く念身を修習し是の如く廣布すれば當に知るべし、[七]十八德有り。云何が十八なる。(1)比丘は能く飢渇・寒熱・蚊虻・蠅蚤・風日の所逼を忍び惡聲捶杖亦能くこれを忍び、身諸の疾に遇ひ極めて苦痛を爲し命絶えんと欲するに至り諸の不可樂皆能く堪耐す。是の如く念身を修習し是の如く廣布するはこれを第一德と謂ふ。(2)また次に比丘不樂を堪耐し、若し不樂を生ずるも心終に著せず。是の如く念身を修習し是の如く廣布するはこれを第二德と謂ふ。(3)また次に比丘恐怖を堪耐し、若し恐怖を生ずるも心終に著せず。是の如く念身を修習し是の如く廣布するはこれを第三德と謂ふ。[八](4)また次に比丘三惡念・欲念・恚念・害念を生ず。若し三惡念を生ずるも心終に著せず。是の如く念身を修

【七】十八德。

【八】この經の末尾に「十八德の内、六七八幷に十三より十七に至る者に闕しては應に第五第十八德の内に在るべし」の文あり。この文の數字正確を缺ぐ、當に第五德は初禪、第六德は二禪、第七・第八德は三禪・四禪なりといふべし。

ずして遊行し少心なれば彼、魔波旬その便を伺求し必ず能く得と爲す。所以者何。彼の沙門梵志空にして念身無きが故に。猶ほ瓶有るが如し。中空にして水無く正しく地に安著す。若し人水を持ち來りて瓶中に瀉せば比丘の意に於て云何。彼の瓶是の如くして當に水を受くべきや不や』。比丘答へて曰く『受くるなり世尊。所以者何。彼空にして水無く正しく地に安著す。この故に必ず受く』。『是の如く若し沙門梵志有り、正に念身を立せずして遊行し少心なれば彼、魔波旬その便を伺求し必ず能く得と爲す。所以者何。彼の沙門梵志空にして念身無きが故に。若し沙門梵志有り、正に念身を立して遊行し無量心なれば彼、魔波旬その便を伺求し終に得る能はずと爲す。所以者何。彼の沙門梵志空ならずして念身有るが故に。猶ほ瓶有るが如し。水その中に滿ち正しく地に安著す。若し人水を持ち來りて瓶中に瀉す。比丘の意に於て云何。彼の瓶是の如くしてまた水を受くるや不や』。比丘答へて曰く『不なり世尊、所以者何。彼の瓶水滿ち正に地に安著す。この故に受けず。是の如く若し沙門梵志有り正に念身を立して遊行し無量心有れば彼魔波旬その便を伺求し終に得る能はずと爲す。所以者何。彼の沙門梵志空ならずして念身有るが故に。若し沙門梵志有り、正に念身を立せずして遊行し少心なれば彼魔波旬その便を伺求し必ず能く得と爲す。所以何者。彼の沙門梵志空にして念身無きが故に。猶ほ力士大重石を以て淖泥中に擲つが如し。比丘意に於て云何。泥受くと爲すや不や』。比丘答へて曰く『受くるなり世尊、所以者何。泥濡り石重し。この故に必ず受く』。『是の如く若し沙門梵志有り正に念身を立せずして遊行し少心なれば彼、魔波旬その便を伺求し必ず能く得と爲す。所以者何。彼の沙門梵志空にして念身無きが故に。若し沙門梵志有り正に念身を立して遊行し無量心なれば彼、魔波旬その便を伺求し終に得ること能はずと爲す。所以者何。彼の沙門梵志空ならずして念身有るが故に。猶ほ力士輕毛毬を以て平戸扇に擲つが如し。比丘の意に於て云何。彼受くと爲すや不や』。比丘答へて曰く『不なり世尊。所以者何、毛毬輕く闔戸扇平立す。この故に

半したる骨鎖地に在るを見るが如し。見已りて自ら比す、今我がこの身亦後是の如く倶にこの法有りて終に離るゝことを得ずと。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(16)また次に比丘念身を修習す。比丘は本息道・皮・肉・血を離れ唯筋のみ相連るを見るが如し。見已りて自ら比す、今我がこの身も亦復是の如く倶にこの法有りて終に離るゝを得ずと。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(17)また次に比丘念身を修習す。比丘は本息道、骨節解散し諸方に散在し足骨・膊骨・髀骨・臗骨・脊骨・肩骨・頸骨・髑髏骨・各異處に在るを見るが如し。見已りて自ら比す、今我がこの身も亦復是の如く倶にこの法有りて終に離るゝことを得ずと。是の如く比丘その身行に隨ひすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(18)また次に比丘念身を修習す。比丘は本息道・骨白きは螺の如く、靑きは猶ほ鴿の色のごとく、赤きは血塗りし若く、腐壞碎末するを見るが如し。見已りて自ら比す。今我がこの身も亦復是の如く倶にこの法有りて終に離るゝを得すと。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。若し是の如く念身を修習し、是の如く廣布する有れば彼の諸の善法盡くその中に在り。謂く道品法なり。若し彼心意解遍滿する有りて、猶大海は彼の諸の小河盡く海中に在るが如くにして、若し是の如く念身を修習し是の如く廣布する有れば、彼の諸の善法盡くその中に在り。謂く道品法なり。若し沙門梵志有り正に念身を立せ

精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(12)また次に比丘念身を修習す。比丘はこの身住するに隨ひその好惡に隨ひ頭より足に至るまで種々の不淨充滿すと觀見す。謂くこの身中髮・毛・爪・齒・麁細薄膚・皮・肉・筋・骨・心・腎・肝・肺・大腸・小腸・脾・胃・摶糞・腦及び腦根・淚・汗・涕・唾・膿・血・肪・髓・涎・膽・小便有りと。猶ほ器を以て若干の種子を盛り有目の士悉く見て分明するが如し。謂く、稻粟種・大麥・小麥・大小麻豆・菘菁・芥子なりと。是の如く比丘この身住するに隨ひその好惡に隨ひ頭より足に至るまで種々の不淨の充滿するを觀ず。謂くこの身中髮・毛・爪・齒・麁細薄膚・皮・肉・筋・骨・心・腎・肝・肺・大腸・小腸・脾・胃・摶糞・腦及び腦根・淚・汗・涕・唾・膿・血・肪・髓・涎・膽・小便有りと。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(13)また次に比丘念身を修習す。比丘は身の諸界を觀ず、我がこの身中地界・水界・火界・風界・空界・識界有り。猶ほ屠兒牛を殺し、皮を剝ぎて地上に布き分ちて六段と作すが如し。是の如く比丘身の諸界を觀ず、我がこの身中地界・水界・火界・風界・空界・識界有りと。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に有りて心放逸無く修行精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(14)また次に比丘念身を修習す。比丘は彼の死屍、或は一・二日六・七日に至り烏鵄に啄まれ犲狗に食はれ火燒して地に埋められ悉く腐爛して壞るゝを觀じ、見已りて自ら比す、今我がこの身も亦復是の如く倶にこの法有りて終に離るることを得ずと。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在り心放逸無く修行精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(15)また次に比丘念身を修習す。比丘は本、息道骸骨靑色に腐爛し食

【五】三十二分身（Dvattiṁsākārā）。巴利文にては（Khuddakapātha III, Visuddhimagga.）p.241. M. III. 90 に出で、漢譯にては「增一」三品の九に出づ。

【六】息道は、巴利文のSarīraṁ sivathikāyaṁ chaḍḍitam（墓所に棄てられたる身）に當るか。然らば「道にやすめる〔もの〕」と讀むべし。

の身中に充滿し、喜無くして樂を生じ處として遍からざる無し。猶ほ青蓮華紅赤白蓮のごとし。水に生じ水に長じ水底に在りて根莖・華葉悉く漬り潤澤し普遍く充滿し處として周からざる無し。是の如く比丘喜無くして樂を生じ身を漬して潤澤し普遍くこの身中に充滿し、喜無くして樂を生じ處として遍からざる無し。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(9)また次に比丘念身を修習す。比丘はこの身中に於て清淨心を以て意解け遍滿し成就して遊び、この身中に於て清淨心を以て處として遍からざる無し。猶ほ一人有り七肘衣或は八肘衣を被り、頭より足に至るまでこの身體に於て處として覆はざる無きがごとし。是の如く比丘この身中に於て清淨心を以て意解け遍滿し成就して遊び、この身中に於て清淨心を以て處として遍からざる無し。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤すれば、心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(10)また次に比丘念身を修習す。比丘は光明想を念じ、善く受け善く持し善く意に念ずる所、前の如く後亦然り、後の如く前亦然り、晝の如く夜亦然り、夜の如く晝亦然り、下の如く上亦然り、上の如く下亦然り。是の如く顚倒せず心纏有ること無く光明心を修し、心終に闇の覆ふ所と爲らず。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(11)また次に比丘念身を修習す。比丘は相を觀じ、善く受け善く持し善く意に念ずる所なり。猶ほ人有り坐して臥人を觀じ、臥して坐人を觀ずるが如し。是の如く比丘相を觀じ善く受け善く持し善く意に念ずる所なり。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行

を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(5)また次に比丘念身を修習す。比丘は入息を念じて即ち入息を念ずるを知り出息を念じて即ち出息を念ずるを知り、入息長ければ即ち入息長きを知り、出息長ければ即ち出息長きを知り、入息短ければ即ち入息短きを知り出息短ければ即ち出息短きを知り、一切の身息入を學し一切の身息出を學し止身行息入を學し止口行息出を學す。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤すれば、心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(6)また次に比丘念身を修習す、比丘は離より喜樂を生じ身を漬し潤澤にして普遍くこの身中に充滿し、離より喜樂を生じ處として遍かざる無し。猶ほ工浴の人、器に澡豆を盛り、水和して摶と成り水漬し潤澤し普遍く充滿し處として周からざる無きがごとし。是の如く比丘離より喜樂を生じ、身を漬し潤澤して普周くこの身中に充滿し、離より喜樂を生じ處として遍からざる無し。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知るを得。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(7)また次に比丘念身を修習す。比丘は定より喜樂を生じ身を漬し潤澤し普遍くこの身中に充滿し、定より喜樂を生じ處として遍からざる無し。猶ほ山泉極淨澄淸し充滿盈流するが如し。四方の水來るも緣より入るを得ること無し。即ち彼の泉底水自ら涌出し外に盈流し山を漬し潤澤し、普遍く充滿し處として周からざる無し。是の如く比丘定より喜樂を生じ、身を漬し潤澤し、普遍くこの身中に充滿し、定より喜樂を生じ處として遍からざる無し。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(8)また次に比丘念身を修習す。比丘は喜無くして樂を生じ身を漬し潤澤し普遍くこ

廣布すれば大果報を得と說くや』。時に諸の比丘世尊に白して曰く『世尊を法本と爲し世尊を法主と爲し法は世尊に由る。惟だ願はくはこれを說きたまへ。我等聞き已りて廣く義を知るを得ん』。佛すなはち告げて曰はく『汝等諦かに聽き善くこれを思念せよ。我當に汝が爲にその義を分別せん』。時に諸の比丘教を受けて聽きぬ。佛言はく『*(1)云何が比丘念身を修習するや。比丘は行けば則ち行を知り、住まれば則ち住を知り、坐すれば則ち坐を知り臥すれば則ち臥を知り、眠れば則ち眠を知り寤むれば則ち寤を知り眠寤むれば則ち眠寤むるを知る。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行し精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(2)また次に比丘は正に出入を知り善觀分別し屈伸・低仰・儀容・庠序、善く僧伽梨及び諸の衣鉢を著け、行住・坐臥・眠寤・語默、皆正にこれを知る。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得。定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(3)また次に比丘念身を修習す。比丘は惡不善の念を生ずれば善法念を以て治斷滅止すること猶ほ木工の師木工の弟子のごとし。彼墨繩を持ち用つて木に拼[四]ひ則ち利斧を以て斫治して直ならしむ。是の如く比丘惡不善の念を生ずれば善法念を以て治斷滅止す。是の如く比丘その身行に隨ひすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤すれば心の諸患を斷じて定心を得、定心を得已りて則ち上如眞を知る。これを比丘念身を修習すと謂ふ。(4)また次に比丘念身を修習す。比丘は齒々相著け舌上齶に逼り心を以て心を治し治斷滅止す。猶ほ二力士一羸人を捉へ處々旋り捉へ自在に打ち鍛ふるがごとし。是の如く比丘齒々相著け、舌上齶に逼り、心を以て心を治し、治斷滅止す。是の如く比丘その身行に隨ひてすなはち上如眞を知る。彼若し是の如く遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤すれば心の諸患を斷じて定心

*十八念身。

【四】拼＝絣＝扳。

卷の第二十

八十一、念身經第十[1]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛、鴦祇[2]國中に遊び大比丘衆と倶に阿惒那揵尼住處[3]に往詣したまひぬ。その時世尊、夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持して阿惒那に入りて乞食を行じ、食し訖りて中後に衣鉢を收擧し手足を澡洗し尼師檀を以て肩上に著け、一林に往詣し彼の林中に入り一樹下に至りて尼師檀を敷きて結加趺坐したまひぬ。その時衆多の比丘中食後に於て講堂に集坐し共にこの事を論じぬ。諸賢、世尊は甚奇甚特なり。念身を修習し分別し廣布し、極めて知り極めて觀じ極めて修習し極めて護治し、善く具し善く行じ一心中に在したまふ。佛身を念ずれば大果報有り、眼を得、目有れば第一義を見ると說きたまふと。その時世尊宴坐に在りて淨き天耳の人「耳」を出過せるを以て、諸の比丘中食後に於て講堂に集坐し共にこの事を論ずるを聞きたまひぬ、諸賢、世尊甚奇甚特なり。念身を修習し分別し廣布し、極めて知り極めて觀じ極めて修習し極めて護治し善く具し善く行じ一心中に在したまふ。佛身を念ずれば大果報有り、眼を得、目有れば第一義を見ると說きたまふと。世尊聞き已りて則ち晡時に於て宴坐より起ち講堂に往詣し比丘衆の前に座を敷きて坐したまひぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『汝等向に共に何事を論ぜるや。何事を以ての故に講堂に集坐するや』。時に諸の比丘白して曰く『世尊、我等諸の比丘中食後に於て講堂に集坐し共にこの事を論じぬ、諸賢、世尊は甚奇甚特なり。念身を修習し分別し廣布し、極めて知り極めて觀じ極めて修習し極めて護治し、善く具し善く行じ一心中に在したまふ。佛身を念ずれば大果報有り眼を得、目有れば第一義を見ると說きたまふと。世尊、我等向に共に此の如き事を論じ、この事を以ての故に講堂に集坐しぬ』。世尊また諸の比丘に告げて曰はく『云何が、我念身を修習し分別し

【一】M. 119. Kāyagatāsati-sutta
【二】鴦祇(Aṅgā)。
【三】阿惒那揵尼住處(Āpaṇaṁ nāma Aṅgānaṁ nigamo)。

致す。若し族姓子鬚髪を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道する者應に當に至心に迦絺那法を受け迦絺那法を善く受け善く持すべし。所以者何。我過去の時諸の比丘是の如き衣を作りて阿那律陀比丘の如きを見ざりき。未來現在に諸の比丘是の如き衣を作りて阿那律陀比丘の如きを見ず。所以者何。謂く今娑羅邏巖山に集坐せる八百の比丘及び世尊、中に在りて阿那律陀比丘の爲に衣を作りぬ。是の如く阿那律陀比丘大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り』佛說是の如し。尊者阿那律陀及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第十九

し。諸賢、若し我が如意足智通作證に於て疑惑有れば彼應に我に問ふべし。我當にこれに答ふべし。諸賢、若し我が天耳智通作證に於て疑惑有れば彼應に我に問ふべし。我當にこれに答ふべし。諸賢、若し我が他心智通作證に於て疑惑有れば彼應に我に問ふべし。我當にこれに答ふべし。諸賢、若し我が宿命智通作證に於て疑惑有れば彼應に我に問ふべし。我當にこれに答ふべし。諸賢、若し我が生死智通作證に於て疑惑有れば彼應に我に問ふべし。我當にこれに答ふべし。諸賢、若し我が漏盡智通作證に於て疑惑有れば彼應に我に問ふべし。我當にこれに答ふべし』。こゝに於て尊者阿難白して曰く『尊者阿那律陀、今娑羅邏巖山に集坐し、八百の比丘及び世尊中に在りて尊者阿那律陀の爲に衣を作りぬ。若し尊者阿那律陀の如意足智通作證に於て疑惑有れば、彼當にこれを問ふべし。尊者阿那律陀答へん。若し尊者阿那律陀の天耳智通作證に於て疑惑有れば、彼當にこれを問ふべし。尊者阿那律陀答へん。若し尊者阿那律陀の他心智通作證に於て疑惑有れば、彼當にこれを問ふべし。尊者阿那律陀答へん。若し尊者阿那律陀の宿命智通作證に於て疑惑有れば彼當にこれを問ふべし。尊者阿那律陀答へん。若し尊者阿那律陀の生死智通作證に於て疑惑有れば彼當にこれを問ふべし。尊者阿那律陀答へん。若し尊者阿那律陀の漏盡智通作證に於て疑惑有れば彼當にこれを問ふべし。尊者阿那律陀答へん。但我等長夜心を以て尊者阿那律陀の心を識り、尊者阿那律陀の如く大如意足有り、大威德有り、大福祐有り、大威神有らん』。こゝに於て世尊患ふる所已に差えて安隱を得、卽時にすなはち起きて結跏趺坐したまひぬ。世尊坐し已りて尊者阿那律陀を歎じて曰はく、『善き哉、善き哉、阿那律陀、極めて善し阿那律陀。謂く汝諸の比丘の爲に迦絺那法を説きぬ。阿那律陀、汝また諸の比丘の爲に迦絺那法を説きぬ。阿那律陀、汝諸の比丘の爲に數々迦絺那法を説きぬ』。こゝに於て世尊諸の比丘に告げたまはく『比丘、汝等迦絺那法を受け迦絺那法を誦習し善く迦絺那法を持せよ。所以者何。迦絺那法は法と相應し梵行の本と爲り通を致し、覺を致し亦涅槃を

知る。彼是の如く知り是の如く見る。欲漏心解脱し有漏・無明漏心解脱し、解脱し已りて、すなはち解脱を知り、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。諸賢、若し比丘有りて戒を犯し戒を破り戒を缺き戒を穿ち戒を穢し戒黒き者、戒に依り戒を立し戒を以て梯と爲し無上慧堂・正法閣に昇らんと欲せんは終にこの處り無し、諸賢、猶ほ村を去ること遠からずして樓觀堂閣有るがごとし。その中に梯を安じ或は十隥を施し或は十二隥あり。若し人有り來り求願して彼の堂閣に昇るを得んと欲す。若しこの梯の第一の隥上に登らずして第二の隥に登らんと欲せんは終にこの處り無し。若し第二の隥に登らずして第三・四に登り堂閣に至り昇らんと欲せんは終にこの處り無し。諸賢、是の如く若し比丘有り戒を犯し、戒を破り、戒を缺き、戒を穿ち、戒を穢し、戒黒き者、戒に依り戒を立し戒を以て梯と爲し無上慧堂正法閣に昇らんと欲せんは、終にこの處り無し。諸賢、若し比丘有り戒を犯し、戒を破り、戒を缺き戒を穿ち戒を穢し戒黒からざる者、戒に依り戒を立し戒を以て梯と爲し無上慧堂正法閣に昇らんと欲せんは、必ずこの處り有り。諸賢、猶ほ村を去ること遠からずして樓觀堂閣有るがごとし。その中に梯を安じ十隥を施し或は十二隥あり。若し人有り來り求願して彼の堂閣に昇らんと欲す。若しこの梯の第一の隥上に登りて第二の隥に登らんと欲せんは必ずこの處り有り。若し第二の隥に登りて第三・四に登り、堂閣に至り昇らんと欲せんは必ずこの處有り。諸賢、是の如く若し比丘有り戒を犯し戒を破り戒を缺き戒を穿ち、戒黒からざる者、戒に依り戒を立し戒を以て梯と爲し無上慧堂正法閣に昇らんと欲せんは必ずこの處り有り。諸賢、我戒に依り戒を立し戒を以て梯と爲し無上正法閣に昇り小方便を以て千世界を觀ず。諸賢、猶ほ目有る人高樓上に住し小方便を以て露地を觀下し千土塹を見るがごとし。諸賢、我亦是の如く、戒に依り戒を立し戒を以て梯と爲し無上慧堂正法の閣に昇り小方便を以て千世界を觀ず。諸賢、若し王の大象或は七寶有り、或はまた八を減じ多羅葉を以てこれを覆ふ。我この六通を覆藏するが如

住し不動心を得、天耳智通を學し作證しぬ。諸賢我天耳を以て人非人の音聲の近遠・妙と不妙とを聞く。諸賢、我已に是の如き定心を得、清淨にして穢無く煩無く、柔軟にして善く住し不動心を得、他心智通を學し作證しぬ。諸賢、我他の衆生の所念・所思・所爲・所行の爲に他心智を以て他心の如眞を知る。欲心有れば欲心有りと如眞を知り、欲心無ければ欲心無しと如眞を知り、有恚・無恚・有癡・無癡有穢・無穢・合散・高下・小大・修・不修・定・不定、不解脱心は不解脱心と如眞を知り、解脱心は解脱心と如眞を知る。諸賢、我已に是の如き定心を得、清淨にして穢無く煩無く柔軟にして善く住し不動心を得、憶宿命智通を學し作證しぬ。諸賢、行有り相貌有り本無量の昔經歷せる所を憶ふ。謂く一生・二生・百生・千生・成劫・敗劫・無量成敗劫、彼の衆生、某と名づけ彼昔更に歷、我曾て彼に生じ是の如き姓是の如き字にして、是の如く生じ是の如く飲食し是の如く苦樂を受け是の如く長壽し是の如く久住し是の如く壽命訖り、こゝに死して彼に生じ、彼に死してこゝに生ず。我生じてこゝに在り、是の如き姓、是の如き字にして是の如く生じ是の如く飲食し是の如く苦樂を受け是の如く長壽し是の如く久住し是の如く壽命訖りぬと。諸賢、我已に是の如き定心を得、清淨にして穢無く煩無く柔軟にして善く住し不動心を得、生死智通を學し作證しぬ。諸賢、我清淨の天眼の人[眼]を出過せるを以てこの衆生の死時・生時・好色・惡色・妙・不妙、善處及び不善處に往來しこの衆生の所作業に隨ひてその如眞を見る。若しこの衆生身惡行・口意惡行を成就し聖人を誹謗し邪見にして邪見業を成就すれば彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄中に生ず。若しこの衆生身妙行・口意妙行を成就し聖人を誹謗せず正見にして正見業を成就すれば彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず善處に昇り天中に上生すと。諸賢、我已に是の如き定心を得、清淨にして穢無く煩無く柔軟にして善く住し不動心を得、漏盡智通を學し作證しぬ。諸賢、我この苦の如眞を知りこの苦習を知りこの苦滅を知りこの苦滅道の如眞を知り、この漏を知りこの漏習を知りこの漏滅を知りこの漏滅道の如眞を

に遊至し衣鉢と倶に行きて顧戀すること無し。諸賢、我已にこの聖戒聚及び極知足を成就しぬ。當にまた諸根を守護するを學すべし。常に閉塞を念じ、明達を念欲し念心を守護して成就するを得、恒に正知を起し、若し眼、色を見るも然も相を受けず亦色を味はず。謂く忿諍の故に眼根を守護し心中貪伺憂戚惡不善の法を生ぜず、彼に趣向するが故に眼根を守護す。是の如く耳・鼻・舌・身［亦然り］、若し意法を知るも然も相を受けず亦法を味はず。謂く忿諍の故に意根を守護し心中貪伺・憂戚・惡不善い法を生ぜず、彼に趣向するが故に意根を守護す。諸賢、我已にこの聖戒聚及び極知足を成就し諸根を守護しき。當にまた出入を知り善觀分別を學すべし。屈申低仰儀容庠序、善く僧伽梨及び諸の衣鉢を著け、行住坐臥眠寤語默皆正にこれを知る。諸賢、我已にこの聖戒聚及び極知足を成就し、諸根を守護し正に出入を知りき。當にまた獨住遠離を學すべし。無事處に在り或は樹下・空・安靜處・山巖・石室・露地・蘘積に至り或は林中に至り或は塚間に在り。諸賢、我已に無事處に在り或は樹下・空・安靜處に至り尼師檀を敷きて結加趺坐し正身正願にして反念に向はず、貪伺を斷除し心諍有ること無く、他の財物諸の生活の具を見て貪伺を起し我が得ならしめんと欲せず。我貪伺に於てその心を淨除しき。是の如く瞋恚睡眠［亦然り］調悔し疑を斷じ惑を度し諸の善法に於て猶豫有ること無く、我疑惑に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我已にこの五蓋心穢慧羸を斷じ、欲を離れ惡不善の法を離れ、第四禪に成就して遊ぶを得るに至りき。諸賢、我已に是の如き定心を得、清淨にして穢無く煩無く柔軟にして善く住し不動心を得、如意足智通を學し作證しぬ。諸賢、我無量の如意足を得き、謂く一を分ちて衆と爲し衆を合して一と爲し、一は則ち一に住め知有り見有り石壁に礙げられずして猶ほ空を行くが如し。地に沒して水の如く水を履みて地の如く、結加趺坐して虛空に上昇して、猶ほ鳥の翔くるが如し。今この日月大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り、手を以て捫摸し身梵天に至る。諸賢、我已に是の如き定心を得、清淨にして穢無く煩無く柔軟にして善く

して耳に順ひ、心に入り喜ぶべく愛すべく、他をして安樂ならしめ、言聲具了して人をして畏れしめず他をして定を得せしむ[る如き]、是の如き言を說き、我麁言に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我綺語を離れ綺語を斷じ、時說・眞說・法說・義說・止息說・樂止息說し事時に順ひて宜しきを得、善く敎へ善く呵し、我綺語に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我治生を離れ治生を斷じ、稱量及び斗斛を棄捨し、財貨を受けず人を縛束せず、斗量を折るを望まず、小利を以て人を侵欺せず、我治生に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我寡婦・童女を受くるを離れ寡婦・童女を受くるを斷じ、我寡婦・童女を受くるに於てその心を淨除しぬ。諸賢、我奴婢を受くるを離れ奴婢を受くるを斷じ、我奴婢を受くるに於てその心を淨除しぬ。諸賢、我象・馬・牛・羊を受くるを離れ象・馬・牛・羊を受くるを斷じ、我象・馬・牛・羊を受くるに於てその心を淨除しぬ。諸賢、我雞猪を受くるを離れ、雞猪を受くるを斷じ、我雞猪を受くるに於てその心を淨除しぬ。諸賢、我田業店肆を受くるを離れ、田業店肆を受くるを斷じ、我田業店肆を受くるに於てその心を淨除しぬ。諸賢、我生稻麥豆を受くるを離れ、生稻麥豆を受くるを斷じ、我生稻麥豆を受くるに於てその心を淨除しぬ。諸賢、我酒を離れ、酒を斷じ、我飲酒に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我高廣大床を離れ高廣大床を斷じ、我高廣大床に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我華鬘・瓔珞・塗香・脂粉を離れ、華鬘・瓔珞・塗香・脂粉を斷じ、我華鬘・瓔珞・塗香・脂粉に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我歌舞倡妓及び往觀聽を離れ、歌舞倡妓及び往觀聽を斷じ、我歌舞倡妓及び往觀聽に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我生色像寶を受くるを離れ生色像寶を受くるを斷じ、我生色像寶を受くるに於てその心を淨除しぬ。諸賢、我過中食を離れ、過中食を斷じ、一食し夜食・學時食せず、我過中食に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我已にこの聖戒聚を成就しぬ。當にまた極知足を學すべし。衣は形を覆ふを取り食は軀を充すを取り隨所に遊至し衣鉢と倶に行きて顧戀すること無し。猶ほ鷹鳥兩翅と倶に空中に飛翔するが如し。諸賢、我亦是の如く隨所

敷き僧伽梨を襞みて枕と作し右脇にして臥し足と足と相累ね光明想を作し正念正智を立し、常に起想を作したまひぬ。彼の時尊者阿那律陀諸の比丘に告げぬ『諸賢、我本未だ出家學道せざりし時生老・病死・啼哭・懊惱・悲泣・憂慼を厭ひ、この大苦聚を斷ぜんと欲しき。諸賢、我厭ひ已りてこの觀を作しぬ、居家は至狹塵勞の處なり。出家學道は發露曠大なり。我今家に在りて鎖の爲に鎖され、形壽を盡くして諸の梵行を修するを得ず。我寧ろ少しの財物及び多くの財物を捨て、少しの親族及び多くの親族を捨て、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すべしと。諸賢、我後時に於て少しの財物及び多くの財物を捨て、少しの親族及び多くの親族を捨て、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道しぬ。諸賢、我出家學道し族姓を捨て已りて比丘の學を受け、梵戒を修行し從解脱を守護し、又復善く威儀禮節を攝し、纖介の罪を見て常に畏怖を懷き學戒を受持しぬ。諸賢、[二]我殺を離れ殺を斷じ刀杖を棄捨し慚有り愧有り慈悲心有り、一切乃至蜫蟲を饒益し、我殺生に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我不與取を離れ不與取を斷じ與へられて後取り、與取を樂しみ常に布施を好み歡喜して悋無くその報を望まず、我不與取に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我非梵行を離れ非梵行を斷じ梵行を勤修し妙行を精勤し清淨にして穢無く欲を離れ婬を斷じ、我非梵行に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我妄言を離れ妄言を斷じ、眞諦言にして眞諦を樂しみ眞諦に住して移動せず、一切信ずべくして世間を欺かず、我妄言に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我兩舌を離れ兩舌を斷じ、不兩舌を行じ、他を破壞せず。これに聞きて彼に告げ、これを破壞せんと欲せず。彼に聞きてこれに語げ、彼を破壞せんと欲せず。離るれば合せんと欲し合へば歡喜し群黨を作さず、群黨を樂しまず群黨を稱説せず、我兩舌に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我麁言を離れ麁言を斷じ、若し所言有れば辭氣麁獷惡聲にして耳に逆らひ衆の喜ばさる所、衆の愛せざる所にして他をして苦惱せしめ定を得ざらしむ[る如き]、是の如き言を斷じ、若し所説有れば清和柔潤に

【二】「中阿含」にてはこれを「聖戒聚」といひ「長阿含」にては「小族感儀戒行」といふ。「中同一四卷梵動經」に出づ。「中阿含」にては三卷「伽藍經」その他に出づ。

れ盡きぬ。賢者、今諸の比丘を倩ひて我が爲に衣を作るべし』。尊者阿難尊者阿那律陀の爲に默然として倩ふことを許しぬ。こゝに於て尊者阿難舍衞を乞食し已り、食し訖りて中後に衣鉢を收擧し、手足を澡洗し尼師檀を以て肩上に著け、手に戸鑰を執りて遍く房々に詣り、諸の比丘を見、すなはちこれに告げて曰く『諸尊、今婆羅邏巖山中に往詣し、尊者阿那律陀の爲に衣を作れ』。こゝに於て諸の比丘、尊者阿難の語を聞き、皆婆羅邏巖山中に往詣し尊者阿那律陀の爲に衣を作りぬ。こゝに於て世尊、尊者阿難手に戸鑰を執り遍く房房に詣るを見、見已りて問ひて曰はく『阿難、汝何事を以て手に戸鑰を執り、遍く房房に詣るや』。尊者阿難白して曰く『世尊、我今諸の比丘を倩ひて尊者阿那律陀の爲に衣を作るなり』。世尊告げて曰はく『阿難、汝何を以ての故に如來に請ひて阿那律陀比丘の爲に衣を作らざる』。こゝに於て尊者阿難即ち叉手を佛に向け世尊に白して曰く『唯願はくは世尊、婆羅邏巖山中に往詣し、尊者阿那律陀の爲に衣を作りたまへ』。世尊尊者阿難の爲に默然として許したまひぬ。こゝに於て世尊尊者阿難を將ゐて婆羅邏巖山中に往詣し、比丘衆の前に座を敷きて坐したまひぬ。その時婆羅邏巖山中八百の比丘有りて世尊と共に集まり坐し、尊者阿那律陀の爲に衣を作りぬ。彼の時尊者大目揵連亦衆中に在りぬ。こゝに於て世尊告げて曰はく『目揵連、我能く阿那律陀の爲に衣を舒べ張りて裁ち割截し連綴してこれを縫合せん』。その時尊者大目揵連即ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ、叉手を佛に向け世尊に白して曰く『唯願はくは世尊、尊者阿那律陀の爲に衣を舒べ張りて裁ちたまへ。諸の比丘當に共に割截し連綴し縫合すべし』。こゝに於て世尊即ち尊者阿那律陀の爲に衣を舒べ張りて裁ちたまひ、諸の比丘すなはち共に割截し連綴し縫合し、即ち彼の一日にして尊者阿那律陀の爲に三衣を成し訖りぬ。その時世尊尊者阿那律陀の三衣已に成れるを知りて則便ち告げて曰はく『阿那律陀、汝諸の比丘の爲に迦絺那法を說け。我今腰痛み小しく自ら息まんと欲す』。尊者阿那律陀白して曰く『唯然り世尊』。こゝに於て世尊便多羅僧を四疊し以て床上に

妙・不妙有るを知る。所以者何。人心の勝如に因るが故に修すなはち精麁有り、修精麁有るに因るが故に人則ち勝如有るを得。賢者迦旃延、世尊また是の如く人勝如有りと說きたまふ。こゝに於て尊者眞迦旃延仙餘財主を歎じて曰く『善き哉、善き哉、財主、汝我等の爲に饒益する所多し所以者何。初め尊者阿那律陀に勝天有りやと問ひぬ。我等未だ曾て、尊者阿那律陀に從ひて是の如き義を聞かず、これを彼の天と謂ひ、彼の天有り是の如きは彼の天なりと』。こゝに於て尊者阿那律陀告げて曰く『賢者迦旃延、多く彼の天有り。謂くこの日月是の如く大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。光々に及ばざるを以て彼我と集まりて共に相慰勞し、論說する所有り、答對する所有り。然も我是の如く說かず、これを彼の天と謂ひ、彼の天有り、是の如きは彼の天なりと』。その時仙餘財主彼の尊者の所說已に訖れるを知りて卽ち坐より起ち自ら澡水を行じ極淨美の種々豐饒なる食噉含消を以て手もて自ら斟酌して飽滿するを得しめ、食訖りて器を擧げて澡水を行じ已りて一小床を取り別に坐して法を聽きぬ。仙餘財主坐し已りて尊者阿那律陀而も爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて坐より起ちて去りぬ。尊者阿那律陀の所說是の如し。仙餘財主及び諸の比丘、尊者阿那律陀の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

八十、迦絺那經第九[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時尊者阿那律陀亦舍衞國に在り娑羅邏巖山中に住しぬ。こゝに於て尊者阿那律陀夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持し舍衞に入りて乞食しぬ。尊者阿難亦復平旦衣を著け鉢を持し舍衞に入りて乞食しぬ。尊者阿那律陀尊者阿難も亦乞食を行ずるを見、見已りて語げて曰く『賢者阿難、當に知るべし、我が三衣麁素壞

【一】迦絺那に就きての詳細は大品第七篇（國譯大藏經論部第十四卷）を見よ。

す。彼生じ已りて極めて止息し得極めて寂靜なるを得。亦壽を盡くし訖るを得。賢者迦旃延、これに因りこれに緣りて彼の淨光天一處に生在し勝・如・妙・不妙有るを知る。所以者何。人心の勝・如に因るが故に、修すなはち精麁有り。修精麁有るに因るが故に人則ち勝・如有るを得。賢者迦旃延、世尊亦是の如く人勝・如有りと說きたまふ』。尊者眞迦旃延また問ひて曰く『尊者阿那律陀、彼の遍淨光天一處に生在し勝・如・妙・不妙有るを知るべきや』。尊者阿那律陀答へて曰く『賢者迦旃延、彼の遍淨光天一處に生在し、勝・如・妙・不妙有るを知ると說くべし』。尊者眞迦旃延また問ひて曰く『尊者阿那律陀、彼の遍淨光天一處に生在し何に因り何に緣りて勝如、妙と不妙有るを知るや』。尊者阿那律陀答へて曰く『賢者迦旃延、若し沙門・梵志有り、無事處に在り、或は樹下・空・安靜處に至り意に遍淨光天を解し、遍滿し成就して遊ぶ。彼極めて睡眠を止むるを得ず、善く息調悔せず。彼後時に於て身壞れ命終りて遍淨光天中に生ず。彼生じ已りて光極めて淨ならず。賢者迦旃延、譬へば燃燈・油炷に因緣するが如し。若し油滓有り炷また不淨なればこれに因りて燈の光生じて明淨ならず。賢者迦旃延、是の如く若し沙門・梵志有り無事處に在り或は樹下・空・安靜處に至り意に遍淨光天を解し遍滿し成就して遊ぶ。彼極めて睡眠を止めず、善く息調悔せず。彼身壞れ命終りて遍淨光天中に生ず。彼生じ已りて光極めて淨ならず。賢者迦旃延、また沙門・梵志有り無事處に在り或は樹下・空・安靜處に至り意に遍淨光天を解し遍滿し成就して遊ぶ。彼極めて睡眠を止め善く息調悔す。彼身壞れ命終りて遍淨光天中に生ず。彼生じ已りて光極めて明淨なり。賢者迦旃延、譬へば然燈・油炷に因緣するが如し。若し油滓無く炷また極めて淨なればこれに因りて燈の光生じて極めて明淨なり。賢者迦旃延、是の如くまた沙門梵志有り、無事處に在り或は樹下・空・安靜處に至り意に遍淨光天を解し遍滿し成就して遊ぶ。彼極めて睡眠を止め善く息調悔す。彼身壞れ命終りて遍淨光天中に生ず。彼生じ已りて光極めて明淨なり。賢者迦旃延、これに因りこれに緣りて彼の遍淨光天一處に生在し、勝・如・

律陀、二解脱中この解脱を上と爲し勝と爲し妙と爲し最と爲す』。尊者阿那律陀告げて曰く『迦旃延、これに因りこれに縁りて彼の光[音]天一處に生在し勝如、妙・不妙有るを知る。所以者何。人心の勝如に因るが故に、修すなはち精麁有り。修、精麁有るに因るが故に人則ち勝如有るを得。賢者迦旃延、世尊亦是の如く人勝如有るを説きたまふ』。尊者眞迦旃延また問ひて曰く『尊者阿那律陀、彼の淨光天一處に生在し勝如、妙・不妙有るを知るべきや』。尊者阿那律陀答へて曰く『賢者迦旃延、彼の淨光天一處に生在し勝如、妙・不妙有るを知ると説くべし』。尊者眞迦旃延また問ひて曰く『尊者阿那律陀、彼の淨光天一處に生在し何に因り何に縁りて勝・如・妙・不妙有るを知るや』。尊者阿那律陀答へて曰く『賢者迦旃延、若し沙門・梵志有り無事處に在り或は樹下・空・安靜處に至り意淨光天を解し遍滿し成就して遊ぶ。彼この定修せず習はず廣めず、極めて成就せず。彼後時に於て身壞れ命終りて淨光天中に生ず。彼生じ已りて極めて止息するを得ず、極めて寂靜なるを得ず、亦壽を盡くし訖るを得ず。賢者迦旃延、猶ほ青蓮華紅赤白蓮、水に生じ水に長じ水底に在る時その時根莖葉華彼の一切、水漬し水澆ぎ水に潤され處として漬らざる無きがごとし。賢者迦旃延若し沙門梵志有り、無事處に在り、或は樹下・空・安靜處に至り意淨光天を解し遍滿し成就して遊ぶ。彼この定修せず習はず廣めず極めて成就せず。彼身壞れ命終りて淨光天中に生じ、彼生じ已りて極めて止息するを得ず、極めて寂靜なるを得ず、亦壽を盡くし訖るを得ず。賢者迦旃延、また沙門・梵志有り、意に淨光天を解し遍滿し成就して遊ぶ。彼この定數修し數習ひ數廣め極めて成就す。彼身壞れ命終りて淨光天中に生じ、彼生じ已りて極めて止息するを得、極めて寂靜なるを得、亦壽を盡くし訖るを得。賢者迦旃延、猶ほ青蓮華紅赤白蓮、水に生じ水に長じ水上に出で水所に住して漬らざるがごとし。賢者迦旃延、是の如くまた沙・門梵志有り無事處に在り或は樹下・空・安靜處に至り、意に淨光天を解し遍滿し成就して遊ぶ。彼この定數修し數習ひ數廣め極めて成就す。彼身壞れ命終りて淨光天中に生

て曰く『賢者迦旃延、彼の光[音]天一處に生在し勝・如・妙・不妙有るを知ると說くべし』。尊者眞迦旃延、また問ひて曰く『尊者阿那律陀、彼の光[音]天一處に生在し何に因り何に緣りて、勝・如・妙と不妙有るを知るや』。尊者阿那律陀答へて曰く『賢者迦旃延、若し沙門・梵志有り、無事處に在り或は樹下・空・安靜處に至り一樹に依り、意解して光明想を作し成就して遊ぶ。心光明想を作すこと極めて盛なり。彼これに齊限し、心解脫これを過ぎず。若し一樹に依らざれば或は二三樹に依り意解して光明想を作し成就して遊ぶ。心光明想を作すこと極めて盛なり。彼これに齊限し心解脫これを過ぎず。賢者迦旃延、この二心解脫、何の解脫を上と爲し勝と爲し妙と爲し最と作すや』。尊者眞迦旃延答へて曰く『尊者阿那律陀、若し沙門・梵志有り一樹に依らざれば或は二三樹に依り意解して光明想を作し成就して遊ぶ。心光明想を作し極めて盛なり。彼これに齊限し心解脫これを過ぎず。尊者阿那律陀、二解脫の中この解脫を上と爲し勝と爲し妙と爲し最と爲す』。尊者阿那律陀また問ひて曰く『賢者迦旃延、若し二三樹に依らざれば或は一林に依り若し一林に依らざれば或は二三林に依り若し二三林に依らざれば或は一村に依り若し一村に依らざれば或は二三村に依り若し二三村に依らざれば或は一國に依り若し一國に依らざれば或は二三國に依り若し二三國に依らざれば或はこの大地乃至大海に依り、意解して光明想を作し成就して遊ぶ。心光明想を作すこと極めて盛なり。彼これに齊限し心解脫これを過ぎず。賢者迦旃延、この二解脫、何れの解脫を上と爲し勝と爲し妙と爲し最と爲すや』。尊者眞迦旃延答へて曰く『尊者阿那律陀、若し沙門梵志有り二三樹に依らざれば或は一林に依り若し一林に依らざれば或は二三林に依り若し二三林に依らざれば或は一村に依り若し一村に依らざれば或は二三村に依り若し二三村に依らざれば或は一國に依り若し一國に依らざれば或は二三國に依り若し二三國に依らざれば或はこの大地乃至大海に依り、意解して光明想を作し成就して遊ぶ。心光明想を作すこと極めて盛なり。彼これに齊限し心解脫これを過ぎず。尊者阿那

されば當にこの大地乃至大海に依るべく、意大心解脫を解し遍滿し成就して遊ぶ。彼これに齊限し心解脫これを過ぎず。これを大心解脫と謂ふ。財主、云何が無量心解脫なる、若し沙門・梵志有り無事處に在り或は樹下・空・安靜處に至り心慈と倶にして一方に遍滿し、成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量に善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲・喜「亦然り」、心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量に善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。これを無量心解脫と謂ふ。財主、大心解脫・無量心解脫、この二解脫義異なり文異なると爲すや、義を一にし文異なりと爲すや』。仙餘財主尊者阿那律陀に白して曰く、もし我尊者より聞ける如くならば則ちその義を解す。この二解脫義既に異なり文亦異なり』。尊者阿那律陀告げて曰く『財主、三種の天有り、[六]光「音」天・淨光天・遍淨光天なり。中に於て光「音」天は彼一處に生在しこの念を作さず、これ我が所有なり、彼我が所有なりと。但光「音」天その往く所に隨ひて卽ち彼の中に樂しむ。財主、猶ほ蠅の肉段に在りてこの念を作さず、これ我が所有なり、彼我が所有なりと。但蠅肉段に隨ひて去り卽ち彼の中に樂しむが如し。是の如く彼の光「音」天この念を作さず、これ我が所有なり彼我が所有なりと。但光「音」天その往く所に隨ひて卽ち彼の中に樂しむ。時に有りて光「音」天一處に集在し身異有りと雖も而も光異ならず。財主、猶ほ人有り無量の燈を然やし一室中に著くが如し。彼の燈異なりと雖も而も光異ならず。是の如く彼の光「音」天一處に集在し身異有りと雖も而も光異ならず。時に有りて光「音」天各自ら散じ去る。彼の時各散じ去る時その身既に異なり光明亦異なり。財主、猶ほ人有り一室中より衆多の燈を出し諸室に分ち著くが如し。彼の燈卽ち異なり光明亦異なり。是の如く彼の光「音」天各自ら散じ去り、彼各散じ去る時その身既に異なり光明亦異なり』。こゝに於て尊者眞迦旃延白して曰く『尊者阿那律陀、彼の光「音」天一處に生在し勝・如・妙不妙・有るを知るべきや』。尊者阿那律陀答へ

【六】一九卷「梵天請佛經」を見よ。

陀夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持し四人と共に俱に仙餘財主の家に往詣しぬ。その時仙餘財主妹女に圍遶せられて中門の下に住まり、尊者阿那律陀を待ちぬ。仙餘財主遙かに尊者阿那律陀の來るを見、見已りて叉手を尊者阿那律陀に向け讚じて曰く『善く來りたまひぬ尊者阿那律陀。尊者阿那律陀久しくこゝに來りたまはず』。こゝに於て仙餘財主敬心もて尊者阿那律陀を扶け抱き將ゐて家中に入り爲に好床を敷き、請じて坐せしめぬ。尊者阿那律陀卽ちその床に坐しぬ。仙餘財主尊者阿那律陀の足に稽首し却きて一面に坐し、坐し已りて白して曰く『尊者阿那律陀、問ふ所有らんと欲す。唯願はくは聽かれよ』。尊者阿那律陀告げて曰く『財主、汝の問ふ所に隨へ。聞き已りて當に思ふべし』。仙餘財主すなはち尊者阿那律陀に問ひぬ『或は沙門・梵志有り、來りて我が所に至り我に語ぐ、財主、汝當に[四]大心解脫を修すべしと。尊者阿那律陀、また沙門・梵志有り、來りて我が所に至り我に語ぐ、財主、汝當に[五]無量心解脫を修すべしと。尊者阿那律陀、大心解脫、無量心解脫この二解脫文異なり義異なると爲すや、義を一にして文異なると爲すや』。尊者阿那律陀告げて曰く『財主、汝前にこの事を問ふ。汝先づ自ら答へよ。我當に後に答ふべし』。仙餘財主白して曰く『尊者阿那律陀、大心解脫・無量心解脫、この二解脫義を一にし文異なり』。仙餘財主この事に答ふること能はざりき。尊者阿那律陀告げて曰く『財主、當に聽くべし、我汝が爲に大心解脫・無量心解脫を說かん。大心解脫とは若し沙門・梵志有り無事處に在り、或は樹下・空・安靜處に至り一樹に依りて意大心解脫を解し遍滿し成就して遊ぶ。彼これに齊限し心解脫これを過ぎず。若し一樹に依らざれば當に二三樹に依るべく、意大心解脫を解し遍滿し成就して遊ぶ。彼これに齊限し心解脫これを過ぎず。若し二三樹に依らざれば當に一林に依るべし。若し一林に依らざれば當に二三林に依るべし。若し二三林に依らざれば當に一村に依るべし。若し一村に依らざれば當に二三村に依るべし。若し二三村に依らざれば當に一國に依るべし。若し一國に依らざれば當に二三國に依るべし。若し二三國に依ら

【四】大心解脫（Mahaggatā cetovimutti）。
【五】無量心解脫（Appamāṇā cetovimutti）。

尊者に問訊す、聖體康强安快無病にして起居輕便、氣力常の如きや不やと。仙餘財主尊者阿那律陀を請し四人と倶に明日の食を供せんと。若し請を受けなばまたこの語を作せ、尊者阿那律陀、仙餘財主多事多爲にして王の衆事を爲し臣佐を斷理す。唯願はくは尊者阿那律陀、慈愍の爲の故に四人と倶に明日早く來りて仙餘財主の家に至りたまへと』。こゝに於て使人仙餘財主の教を受け已りて佛所に往詣し佛足に稽首し却きて一面に住し白して曰く『世尊、仙餘財主佛足に稽首し世尊に問訊したてまつる、聖體康强安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと』。その時世尊使人に告げて曰はく『仙餘財主をして安隱快樂ならしめ、天及び人・阿修羅・揵塔和・羅刹及び餘の種々身をして安隱快樂ならしむ』。こゝに於て使人佛の所説を聞きて善く受け善く持し佛足に稽首し繞三匝して去り、尊者阿那律陀の所に往詣し、稽首して足を禮し却きて一面に坐し白して曰く『尊者阿那律陀、仙餘財主尊者阿那律陀の足に稽首し尊者に問訊す、聖體康强安快無病にして起居輕便、氣力常の如きや不やと。仙餘財主尊者阿那律陀を請じ四人と倶に明日の食を供せん』。この時[三]尊者眞迦旃延尊者阿那律陀を去ること遠からずして燕坐しぬ。こゝに於て尊者阿那律陀告げて曰く『賢者迦旃延、我向に道ひし所、明日我等乞食の爲の故に舍衞國に入らんとは正にこれを謂ふなり。今仙餘財主人を遣して我等四人を請して明日の食を供すと』。尊者眞迦旃延即ち時に白して曰く『願はくは尊者阿那律陀、彼の人の爲の故に默然として請を受けよ。我等明日この闇林を出で乞食の爲の故に舍衞國に入らん』。尊者阿那律陀、彼の人の爲の故に默然として受けぬ。こゝに於て使人尊者阿那律陀默然として受けしを知り已りて尋いでまた白して曰く『仙餘財主尊者阿那律陀に白す、仙餘財主多事多爲にして王の衆事を爲し臣佐を斷理す。願はくは尊者阿那律陀慈愍の爲の故に四人と倶に明日早く來りて仙餘財主の家に至りたまへと』。尊者阿那律陀使人に告げて曰く『汝すなはち還り去れ、我自ら時を知る』。こゝに於て使人即ち坐より起ち稽首して禮を作し繞三匝して去りぬ。こゝに於て尊者阿那律

【三】眞迦旃延（Sabhiya Kaccāna）。

に出でんと。魔波旬、この故に汝今我に語ぐ、弟子を訓誨し教呵することを得ること莫れ、亦弟子の爲に法を說くこと莫れ、弟子に著すること莫れ。弟子に著するが爲の故に身壞れ命終りて餘の下賤の妓樂神中に生ずること莫れ。無爲を行じ現世に於て安樂を受けよ。所以者何。大仙人、汝唐しく自ら煩勞すと。魔波旬、若し沙門梵志有り、弟子を訓誨し弟子を教呵し弟子の爲に法を說き弟子に樂著し、弟子に著するが爲の故に身壞れ命終りて餘の下賤の妓樂神中に生ずれば、彼の沙門・梵志、彼沙門に非ずして沙門と稱說し、梵志に非ずして梵志と稱說し、阿羅訶に非ずして阿羅訶と稱說し、等正覺に非ずして等正覺と稱說す。魔波旬、我實に沙門にして沙門と稱說し、實に梵志にして梵志と稱說し、實に阿羅訶にして阿羅訶と稱說し、實に等正覺にして等正覺と稱說す。魔波旬、若し我弟子の爲に法を說き、若しは說かざれば汝且く自ら去れ。我今自ら應に弟子の爲に法を說くべく、應に弟子の爲に法を說くべからずと知る』。これを梵天請じ魔波旬違逆し、世尊隨順して說きたまへりと爲す。この故にこの經を梵天請佛と名づく。佛說是の如し。梵天及び梵天の眷屬、佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

七十九、[一]有勝天經第八

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。こゝに於て[二]仙餘財主一使人に告げぬ『汝佛に往詣し我が爲に稽首して、世尊の足を禮し世尊に問訊せよ、聖體康强安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと。是の如き語を作せ、仙餘財主佛足に稽首し世尊に問訊したてまつる、聖體康强安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと。汝既に我が爲に佛に問訊し已りて尊者阿那律陀の所に往詣し、我が爲に彼の足を禮し已りて尊者に問訊せよ、聖體康强安快無病にして起居輕便・氣力常の如きや不やと。是の如き語を作せ、仙餘財主尊者阿那律陀の足に、稽首し

【一】 M. 127. Anuruddha-sutta

【二】 仙餘財主(Pañcakaṅga thapati 「第五支と〔いふ〕棟梁。」

光明を放ち一切の梵天を照してすなはち自ら隱れ住し、諸の梵天及び梵天の眷屬をして但その聲を聞きて而もその形を見ざらしめたまひぬ。こゝに於て梵天及び梵天の眷屬各この念を作しぬ。沙門瞿曇甚奇甚特にして大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。所以者何。謂く極妙の光明を放ち一切の梵天を照して而も自ら隱れ住し、我等及び眷屬をして但彼の聲を聞きて而も形を見ざらしむと。こゝに於て世尊またこの念を作したまひぬ、我已にこの梵天及び梵天の眷屬を化しぬ。我今寧ろ如意足を攝むべしと。世尊すなはち如意足を攝め還りて梵天中に住したまひぬ。こゝに於て魔王亦再び三たびに至りて彼の衆中に在りき。その時魔王世尊に白して曰く『大仙人、善く見善く知り善く達しぬ。然も弟子を訓誨し教呵すること莫れ。亦弟子の爲に法を說くこと莫れ。弟子に著すること莫れ。弟子に著するが爲の故に、身壞れ命終りて餘の下賤の妓樂神中に生ずること莫れ。無爲を行じ現世に於て安樂を受けよ。所以者何。大仙人、こは唐しく自ら煩勞す。大仙人、昔沙門・梵志有り、弟子を訓誨し、弟子を教呵し、亦弟子の爲に法を說き弟子に樂著しぬ。彼弟子に著せるを以ての故に身壞れ命終りて餘の下賤の妓樂神中に生じぬ。大仙人、この故に我汝に語ぐ、弟子を訓誨し教呵するを得ること莫れ、亦弟子の爲に法を說くこと莫れ、弟子に著すること莫れ、弟子に著するが爲の故に、身壞れ命終りて餘の下賤の妓樂神中に生ずること莫れ。無爲を行じ、現世に於て安樂を受けよと。所以者何。大仙人、汝唐しく自ら煩勞す。』こゝに於て世尊告げて曰はく『魔波旬、汝我が爲に義を求めざるが故に、饒益の爲に非ざるが故に、樂の爲に非ざるが故に、安隱の爲に非ざるが故に、弟子を訓誨し教呵するを得ること莫れ、弟子の爲に法を說くこと莫れ、弟子に著すること莫れ、弟子に著するが爲の故に、身壞れ命終りて餘の下賤の妓樂神中に生ずること莫れ、無爲を行じ現世に於て安樂を受けよ。所以者何。大仙人、汝唐しく自ら煩勞すと說く。魔波旬、汝この念を作す。この沙門瞿曇、弟子の爲に法を說き、彼の弟子法を聞き已りて我が境界

無熱、「亦然り」淨に於て淨想有りて淨これ我、淨これ我所、我これ淨所たりと。彼淨これ我なりと計し已りてすなはち淨を知らず。梵天、若し沙門・梵志有り、地は則ち地と知り、地これ我に非ず、地我所に非ず、我地所に非ずと「知る」、彼地これ我なりと計せず、已りて彼すなはち地を知る。是の如く水・火・風・神・天・生主・梵天・無煩・無熱「亦然り」、淨は則ち淨と知り、淨これ我に非ず、淨我所に非ず、我淨所に非ずと「知り」、彼淨これ我なりと計せず、已りて彼すなはち淨を知る。梵天、我地に於て則ち地と知り、地これ我に非ず、地我所に非ず、我地所に非ずと「知り」、我地これ我なりと計せず、已りて我すなはち地を知る。是の如く水・火・風・神・天・生主・梵天・無煩・無熱、「亦然り」淨は則ち淨と知り、淨これ我に非ず、淨我所に非ず、我淨所に非ずと「知り」我淨これ我なりと計せず、已りて我すなはち淨を知る』。こゝに於て梵天世尊に白して曰く『大仙人、この衆生有を愛し有を樂しみ有を習ふ。汝已に有の根本を拔きぬ。所以者何、謂く如來・無所著・等正覺の故に』。すなはち頌を說きて曰く、

有に於て恐怖を見、有見無ければ懼れず　この故に有を樂しむこと莫れ。　有何ぞ斷ずべからざらん。

『大仙人、我今自ら形を隱さんと欲す』。世尊告げて曰はく『梵天、汝若し自ら形を隱さんと欲せばすなはち欲する所に隨へ』。こゝに於て梵天即ち所處に隨ひて自らその形を隱しぬ。世尊即ち知りたまひぬ『梵天、汝彼に在り、汝此に在り、汝中に在り』。こゝに於て梵天盡く如意を現じて自ら形を隱さんと欲して而も隱す能はず、還りて梵天中に住しぬ。こゝに於て世尊告げて曰はく『梵天、我今亦自らその形を隱さんと欲す』。梵天世尊に白して曰く『大仙人、若し自ら形を隱さんと欲せばすなはち欲する所に隨へ。』こゝに於て世尊而もこの念を作したまひぬ、『我今寧ろ　[六]如其像如意足を現じて、極妙の光明を放ち一切の梵天を照して而も自ら隱れ住し、諸の梵天及び梵天の眷屬をして但我が聲を聞きて而も形を見ざらしむべし。』と　こゝに於て世尊即ち如其像 如意足 を現じて極妙の

【六】 tathārūpaṁ iddhābhisaṅkhāraṁ abhisaṅkhāreti 「その通りの如意妙作を行ふ」

が悉く我日の自在に諸方を明照するが如くにしてこれを千世界と爲すを識り、千世界中に於て汝自在を得るや。彼々處を知り、晝夜有ること無し。大仙人、曾て更に彼を歴、數彼を經歴せるや』。世尊告げて曰はく『梵天、日の自在に諸方を明照するが如くにしてこれを千世界と爲し、千世界中に於て我自在を得、亦彼々處を知り晝夜有ること無し。梵天、我曾て更に彼を歴、數ば彼を經歴しぬ。梵天、三種の天有り、光[五][音]天・淨光天・遍淨光天なり。梵天、若し彼の三種の天知有り見有れば我亦彼の知見有り。梵天、若し彼の三種の天知無く見無ければ、我亦自ら知見有り。梵天、若し彼の三種の天及び眷屬知有り見有れば、我亦彼の知見有り。梵天、若し彼の三種の天及び眷屬知無く見無ければ、我亦自ら知見有り。梵天、若し汝知有り見有れば、我亦この知見有り。梵天、若し汝知無く見無ければ、我亦自ら知見有り。梵天、若し汝及び眷屬知有り見有れば、我亦この知見有り。梵天、若し汝及び眷屬知無く見無ければ、我亦自ら知見有り。梵天、汝我と一切等しからず、我と盡く等しからず。但我汝より最勝最上なり』。こゝに於て梵天、世尊に白して曰く『大仙人、何に由りて彼の三種の天知有り見有れば汝亦彼の知見有り、若し彼の三種の天知無く見無ければ、汝亦自ら知見有り、若し彼の三種の天及び眷屬知有り見有れば汝亦彼の知見有り、若し彼の三種の天及び眷屬知無く見無ければ汝亦自ら知見有り、若し我知有り見有れば汝亦この知見有り、若し我知無く見無ければ汝亦自ら知見有り、若し我及び眷屬知有り見有れば汝亦この知見有り、若し我及び眷屬知無く見無ければ汝亦自ら知見有るを得るや。大仙人、愛言を爲すに非ざるや、問ひ已りて愚癡を增益するを知らず。所以者何。無量の境界を識るを以ての故に、無量の知・無量の見、無量の種別、我各々知別にして、この地を地と知り、水・火・風・神・天・生主[亦然り]、この梵天を梵天と知る』。こゝに於て世尊告げて曰はく『梵天、若し沙門梵志有り、地に於て地想有りて地これ我、地これ我所、我これ地所なりと。彼地これ我なりと計し已りてすなはち地を知らず。是の如く水・火・風・神・天・生主・梵天・無煩・

【五】巴利文にては光音天（Abhassara,）遍淨天（Subha-kiṇṇa,）廣果天（Vehapphala）の三を擧ぐ。九卷「地動經」註を見よ。光天は「中阿含」にては常に晃昱天と譯せり。

要に非ざるを出要にしてこの出要更に出要の、その上を過ぎ有勝・有妙・有最なる者無しと稱說す。梵天、汝この無明有り。梵天、汝この無明有り』。こゝに於て梵天世尊に白して曰く『大仙人、昔沙門梵志有り、壽命極めて長く存し住すること極めて久し。大仙人、汝壽至りて短く彼の沙門・梵志の一燕坐の頃を知らず。所以者何。彼所知盡く知り所見盡く見ぬ。若し實に出要有れば更に餘の出要その上を過ぎ有勝・有妙・有最なる者無し。若し實に出要なる者有ること無くば更に餘の出要その上を過ぎ有勝・有妙・有最なる者無し。大仙人、汝出要に於て不出要の想、不出要に〔於て〕出要の想あり。是の如く汝出要なるを得ず、すなはち大癡と成りぬ。所以者何。境界無きを以ての故に。大仙人、若し沙門・梵志有り、地を愛樂し、地を稱歎すれば彼我が自在と爲り我が所欲に隨ふを爲し我が所使に隨ふを爲す。是の如く水・火・風・神・天・生主〔亦然り〕。梵天を愛樂し梵天を稱歎すれば彼我が自在となり、我が所欲に隨ふを爲し、我が所使に隨ふを爲す。大仙人、若し汝地を愛樂し地を稱歎すれば、汝亦我が自在と爲り我が所欲に隨ふを爲し、我が所使に隨ふを爲す』。こゝに於て世尊告げて曰く『梵天、是の如し、梵天の說く所眞諦なり。若し沙門・梵志有り地を愛樂し地を稱歎すれば、彼汝の自在と爲り、汝の所欲に隨ふを爲し、汝の所使に隨ふを爲す。是の如く水・火・風・神・天・生主〔亦然り〕。梵天を愛樂し梵天を稱歎すれば彼汝の自在と爲り、汝の所欲に隨ふを爲し、汝の所使に隨ふを爲す。梵天、若し我地を愛樂し地を稱歎すれば我亦汝の自在と爲り、汝の所欲に隨ふを爲し、汝の所使に隨ふを爲す。是の如く水・火・風・神・天・生主〔亦然り〕。梵天を愛樂し梵天を稱歎すれば、我亦汝の自在と爲り、汝の所欲に隨ふを爲し、汝の所使に隨ふを爲す。梵天、若しこの八事、我その事に隨ひ愛樂し稱歎すれば彼亦是の如き有り。梵天、我汝の從來する所の處、往至する所の處を知る、住する所に隨ひ、終る所に隨ひ、生ずる所に隨ひ、若し梵天有れば、大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有りと』。こゝに於て梵天、世尊に白して曰く『大仙人、汝云何が我が所知を知り我が所見を見るや、云何

天の所說に逆らふこと莫れと。比丘、若し汝この梵天の所說に違ひ、この梵天の所說に逆らへばこれを比丘猶ほ人有り樹上より墮ち手足を以て枝葉を捫摸すと雖も而も所得無きが如しと爲す。比丘の所說も亦復是の如し。この故に比丘、我汝に語ぐ、この梵天の所說に違ふこと莫れ、この梵天の所說に逆らふこと莫れと。所以者何。この〔三〕梵天・梵・福祐・能化・最尊・能作・能造なり。これ父にして已有當有の一切衆生皆これより生ず。これ所知盡く知り所見盡く見る。大仙人、若し沙門・梵志有り〔四〕地を憎惡し地を毀呰すれば彼身壞れ命終りて必ず餘の下賤なる妓樂神中に生ず。是の如く水・火・風・神・天・生主〔亦然り〕、梵天を憎惡し梵天を毀呰すれば、彼身壞れ命終りて必ず餘の下賤なる妓樂神中に生ず。大仙人、若し沙門・梵志有り地を愛樂し地を稱歎すれば彼身壞れ命終りて必ず最上尊の梵天中に生ず。是の如く水・火・風・神・天・生主〔亦然り〕、梵天を愛樂し梵天を稱歎すれば彼身壞れ命終りて必ず最上尊の梵天中に生ず。大仙人、汝この梵天の大眷屬坐して我が輩の如きを見ざるや』。彼の魔波旬これ梵天に非ず、亦梵天の眷屬に非ず、然も自ら我はこれ梵天なりと稱說しぬ。その時世尊すなはちこの念を作したまひぬ、この魔波旬これ梵天に非ず、亦梵天の眷屬に非ず、然も自ら我はこれ梵天なりと稱說す。若し魔波旬有りと說かばこは卽ちこれ魔波旬なりと。世尊知り已りて告げて曰はく『魔波旬、汝梵天に非ず、亦梵天の眷屬に非ず、然も汝自ら我はこれ梵天なりと稱說す。若し魔波旬有りと說かば汝卽ちこれ魔波旬なり』。こゝに於て魔波旬而もこの念を作しぬ、世尊我を知り、善逝我を見ると。知り已りて愁憂し卽ち彼處に於て忽ち沒して現れざりき。時に彼の梵天再び三たびに至り世尊を請じぬ『善く來れり大仙人、この處有常なり、この處恒有なり、この處長存なり、この處これ要なり、この處不終の法なり、この處出要なり、この出要更に出要の、その上を過ぎ、有勝・有妙・有最なる者無し』。世尊亦再び三たびに至り告げて曰はく『梵天、汝無常を常と稱說し、不恒を恒と稱說し、不存と存を稱說し、不要を要と稱說し、終法を不終法と稱說し、出

【三】巴利文にては「征服者・非被征服者・一切見者・權威者・主公・造作者・化作者・最尊最勝・有力者・旣生・當生・總ての父。」

【四】地(Paṭhavī,)水(Āpa,)火(Teja,)風(Vāya,)神(Bhūta,)天(Deva,)生主(Pajāpati,)梵天(Brahmā)下に「若しこの八事」の語あるはこの八を指す。

卷の第十九

七十八、[一]梵天請佛經第七

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時一梵天有りて梵天上に住し是の如き邪見を生じぬ。この[二]處有常なり、この處有恒なり、この處長存なり、この處これ要なり、この處不終の法なり、この處出要なり、この出要更に出要のその上を過ぎ、有勝有妙有最なる者無しと。こゝに於て世尊他心智を以て彼の梵天の心の念ずる所を知り卽ち如其像定に入り如其像定を以て猶ほ力士の臂を屈申する頃の若く、舍衞國勝林給孤獨園に於て忽ち沒して現れず、梵天上に往きぬ。時に彼の梵天、世尊の來るを見卽ち世尊を請じぬ『善く來れり大仙人。この處有常なり、この處有恒なり、この處長存なり、この處これ要なり、この處不終の法なり、この處出要なり、この出要更に出要のその上を過ぎ有勝有妙有最なる者無し』。こゝに於て世尊告げて曰はく、『梵天、汝無常を常と稱說し不恒を恒と稱說し不存を存と稱說し、不要を要と稱說し終法を不終法と稱說し、出要に非るを出要にして、この出要、更に出要のその上を過ぎ、有勝有妙有最の者無しと稱說す。梵天、汝この無明有り』。時に魔波旬彼の衆中に在りき。こゝに於て魔波旬世尊に告げて曰く『比丘、この梵天の所說に違ふこと莫れ。この梵天の所說に逆ふこと莫れ。比丘、若し汝この梵天の所說に違ひ、この梵天の所說に逆へば、これ比丘猶ほ人有り、吉祥事來るも而もこれを排却するが如しと爲す。比丘の所說も亦復是の如し。この故に比丘、我汝に語ぐ、この梵天の所說に違ふこと莫れ、この梵天の所說に逆ふこと莫れと。比丘、若し汝この梵天の所說に違ひこの梵天の所說に逆らへば、これ比丘猶ほ人有り山上より墮ち手足を以て空を捫摸すと雖も所得無きが如しと爲す。比丘の所說も亦復是の如し。この故に比丘、我汝に語ぐ、この梵天の所說に違ふこと莫れ、この梵

[一] M. 49 Brahmanimantaka-sutta

[二] 巴利文「常住なり、堅固なり、永存的なり、一切なり、不死の法なり、生れず、老いず、死せず、去らず、起らず、又他のこれに過ぎて上なる出要あるなし。」

已に盡き婬・怒・癡・薄く、一たび天上人間に往來するを得、一たび往來し已りて苦際を得と聞き、或は自ら彼の優婆私を見、或はまた他より數々これを聞く、彼の優婆私是の如く信有り是の如く戒を持し是の如く博聞し是の如く惠施し是の如く智慧ありと。その人聞き已りて彼の優婆私信有り戒を持し博聞し惠施し智慧あるを憶ひ、この正法律を聞き已りて或は心に是の如きを效ふを願ふ。阿那律陀、是の如く優婆私必ず差降・安樂・住止を得。(14)阿那律陀、また次に優婆私某優婆私某村に於て命終りぬ、彼佛の爲に記せられ三結已に盡き須陀洹を得、惡趣に墮せず定んで正覺に趣き極めて七有を受け天上人間に七たび往來し已りて苦際を得と聞き、或は自ら彼の優婆私を見或はまた他より數數これを聞く、彼の優婆私是の如く信有り是の如く戒を持し是の如く博聞し是の如く惠施し是の如く智慧ありと。その人聞き已りて彼の優婆私信有り戒を持し博聞し惠施し智慧あるを憶ひ、この正法律を聞き已りて或は心に是の如きを效ふを願ふ。阿那律陀、是の如く優婆私必ず差降・安樂・住止を得。阿那律陀、如來この義を以ての故に弟子命終れば某は某處に生じ、某は某處に生ずと記說す』。佛說是の如し。尊者阿那律陀及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第十八

(卷十八)婆雞帝三族姓子經第六

(14)人天七往來の優婆私。

塞是の如く信有り是の如く戒を持し是の如く博聞し是の如く惠施し是の如く智慧ありと。その人聞き已りて彼の優婆塞信有り戒を持し博聞し惠施し智慧あるを憶ひこの正法律を聞き已りて或は心に是の如き是の如きを效ふを願ふ。阿那律陀。是の如く優婆塞必ず差降・安樂・住止を得。(10)阿那律陀、また次に優婆塞、某優婆塞某村に於て命終りぬ、彼佛の爲に記せられ三結已に盡き婬・怒・癡薄く一たび天上人間に往來するを得、一たび往來し已りて苦際を得と聞き、或は自ら彼の優婆塞を見、或はまた他より數々これを聞く、彼の優婆塞是の如く信有り是の如く戒を持し是の如く博聞し是の如く惠施し是の如く智慧ありと。その人聞き已りて彼の優婆塞信有り戒を持し博聞し惠施し智慧あるを憶ひ、この正法律を聞き已りて或は心に是の如き是の如きを效ふを願ふ。阿那律陀、是の如く彼の優婆塞必ず差降・安樂・住止を得。(11)阿那律陀、また次に優婆塞某優婆塞某村に於て命終りぬ、彼佛の爲に記せられ三結已に盡き須陀洹を得、惡法に墮せず定んで正覺に趣き極めて七有を受け、天上人間に七たび往來し已りて苦際を得と聞き、或は自ら彼の優婆塞を見、或は他より數々これを聞く、彼の優婆塞是の如く信有り是の如く戒を持し是の如く博聞し是の如く惠施し是の如く智慧ありと。その人聞き已りて彼の優婆塞信有り戒を持し博聞し惠施し智慧あるを憶ひ、この正法律を聞き已りて或は心に是の如き是の如きを效ふを願ふ。阿那律陀、是の如く優婆塞必ず差降・安樂・住止を得。(12)阿那律陀、若し優婆私某優婆私某村に於て命終りぬ、彼佛の爲に記せられ五下分結已に盡き彼の間に生じて般涅槃し不退法を得てこの世に還らずと聞き、或は自ら彼の優婆私を見或はまた他より數々これを聞く、彼の優婆私是の如く信有り是の如く戒を持し是の如く博聞し是の如く惠施し是の如く智慧ありと。その人聞き已りて彼の優婆私信有り戒を持し博聞し惠施し智慧あるを憶ひこの正法律を聞き已りて或は心に是の如き是の如きを效ふを願ふ。阿那律陀、是の如く優婆私必ず差降・安樂・住止を得。(13)阿那律陀、また次に優婆私某優婆私某村に於て命終りぬ、彼佛の爲に記せられ三結

(10)三結を盡したる優婆塞。
(11)人天七往來の優婆塞。
(12)五下分結を盡したる優婆私。
(13)三結を盡したる優婆私。

ひ、この正法律を聞き已りて或は心に是の如き是の如きを效ふを願ふ。阿那律陀、是の如く比丘尼必ず差降・安樂・住止を得。(6)阿那律陀、また次に比丘尼、某比丘尼某處に於て命終りぬ、彼佛の爲に記せられ、五下分結已に盡き彼の間に生じて般涅槃し、不退法を得てこの生に還らずと聞き、或は自ら彼の比丘尼を見、或はまた他より數々これを聞く、彼の比丘尼是の如く信有り是の如く戒を持し是の如く博聞し是の如く惠施し是の如く智慧ありと。その人聞き已りて彼の比丘尼信有り戒を持し博聞し惠施し智慧あるを憶ひこの正法律を聞き已りて或は心に是の如き是の如きを效ふを願ふ。阿那律陀、是の如く比丘尼必ず差降・安樂・住止を得。(7)阿那律陀、また次に比丘尼、某比丘尼某處に於て命終りぬ。彼佛の爲に記せられ三結已に盡き婬・怒・癡薄く一たび天上人間に往來するを得一たび往來し已りて苦際を得と聞き、或は自ら彼の比丘尼を見或はまた他より數々これを聞く、彼の比丘尼是の如く信有り是の如く戒を持し、是の如く博聞し是の如く惠施し是の如く智慧ありと。その人聞き已りて彼の比丘尼信有り戒を持し博聞し惠施し智慧あるを憶ひ、この正法律を聞き已りて或は心に是の如き是の如きを效ふを願ふ。阿那律陀、是の如く比丘尼必ず差降・安樂・住止を得。(8)阿那律陀、また次に比丘尼、某比丘尼某處に於て命終りぬ。彼佛の爲に記せられ三結已に盡き須陀洹を得、惡法に墮せず定んで正覺に趣き極めて七有を受け、天上人間に七たび往來し已りて苦際を得と聞き、或は自ら彼の比丘尼を見、或はまた他より數々これを聞く、彼の比丘尼是の如く信有り是の如く戒を持し是の如く博聞し是の如く惠施し是の如く智慧ありと。その人聞き已りて彼の比丘尼信有り戒を持し博聞し惠施し智慧あるを憶ひ、この正法律を聞き已りて或は心に是の如き是の如きを效ふを願ふ。阿那律陀、是の如く比丘尼必ず差降・安樂・住止を得。(9)阿那律陀、若し優婆塞某優婆塞某村に於て命終りぬ。彼佛の爲に記せられ五下分結已に盡き彼の間に生じて般涅槃し不退法を得てこの世に還らずと聞き、或は自ら彼の優婆塞を見或はまた他より數々これを聞く、彼の優婆

(6)五下分結を盡したる比丘尼。

(7)三結を盡したる比丘尼。

(8)人天七往來の比丘尼。

(9)五下分結を盡したる優婆塞。漏盡の優婆塞・優婆私なきことに注意せよ。

(2)阿那律陀、また次に比丘某尊者某處に於て命終りぬ。彼佛の爲に記せられ、五下分結已に盡き彼の間に生じて般涅槃し不退法を得てこの世に還らずと聞き、或は自ら彼の尊を見、或はまた他より數々これを聞く、彼の尊者是の如く信有り是の如く戒を持し是の如く博聞し是の如く惠施し是の如く智慧ありと。その人聞き已りて彼の尊者信有り戒を持し、博聞し惠施し智慧あるを憶ひ、この正法律を聞き已りて或は心に是の如き是の如きを效ふを願ふ。阿那律陀、是の如く比丘必ず差降・安樂・住止を得。(3)阿那律陀、また次に比丘、某尊者某處に於て命終りぬ、彼佛の爲に記せられ、三結盡き婬・怒・癡・薄く一たび天上人間に往來するを得、一たび往來し已りて苦際を得と聞き、或は自ら彼の尊者を見、或はまた他より數々これを聞く、彼の尊者是の如く信有り是の如く戒を持し是の如く博聞し是の如く惠施し是の如く智慧ありと。その人聞き已りて彼の尊者信有り戒を持し、博聞し惠施し智慧あるを憶ひ、この正法律を聞き已りて或は心に是の如き是の如きを效ふを願ふ。阿那律陀、是の如く比丘必ず差降・安樂・住止を得。(4)阿那律陀、また次に比丘、某尊者某處に於て命終りぬ、彼佛の爲に記せられ三結已に盡き須陀洹を得、惡法に墮せず定んで正覺に趣き極めて七有を受け、天上人間に七たび往來し已りて苦際を得と聞き、或は自ら彼の尊者を見或は他より數々これを聞く、彼の尊者是の如く信有り是の如く戒を持し是の如く博聞し是の如く惠施し是の如く智慧ありと。その人聞き已りて彼の尊者信有り戒を持し博聞し惠施し智慧あるを憶ひ、この正法律を聞き已りて或は心に是の如き是の如きを效ふを願ふ。阿那律陀、是の如く比丘必ず差降・安樂・住止を得。(5)阿那律陀、若し比丘尼、某比丘尼某處に於て命終りぬ、彼佛の爲に記せられ究竟智を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ、更に有を受けずと如眞を知ると聞き、或は自ら彼の比丘尼を見、或はまた他より數々これを聞く、彼の比丘尼是の如く信有り是の如く戒を持し、是の如く博聞し是の如く惠施し是の如く智慧ありと。その人聞き已りて彼の比丘尼信有り戒を持し、博聞し惠施し智慧あるを憶

(2)五下分結を盡したる比丘。
(3)三結を盡したる比丘。
(4)人天七往來の比丘。
(5)漏盡の比丘尼。

高巖に樂居し、寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無く、隨順し燕坐するに非ず。阿那律陀、如來但二義を以ての故に無事處・山林・樹下に住し、高巖に樂居し、寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無く、隨順して燕坐す。一には自ら現法に樂居する爲の故に、二には後生の人を慈愍するが爲の故なり。或は後生の人、如來・無事處・山林・樹下に住し、高巖に樂居し、寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無く、隨順し燕坐するを效ふ有り、阿那律陀、如來この義を以ての故に無事處・山林・樹下に住し、高巖に樂居し、寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無く、隨順し燕坐す』。世尊問ひて曰はく『阿那律陀、如來何の義を以ての故に弟子命終れば某は某處に生じ、某は某處に生ずと記說するや』。尊者阿那律陀世尊に白して曰く『世尊を法本と爲し世尊を法主と爲し、法は世尊に由る。唯願はくはこれを說きたまへ。我等聞き已りて廣く義を知るを得ん』。佛すなはち告げて曰はく『阿那律陀、汝等諦かに聽き善くこれを思念せよ。我當に汝が爲にその義を分別すべし』。阿那律陀等教を受けて聽きぬ。世尊告げて曰はく『阿那律陀、如來趣の爲、人の爲に說くに非ず、亦人を欺誑せず、亦人の歡樂を得んと欲するが故に弟子命終れば某は某處に生じ、某は某處に生ずと記說せず。阿那律陀、如來但清信の族姓男・族姓女極めて信じ、極めて愛し、極めて喜悅を生じ、この正法律を聞き已りて或は心に是の如き是の如きに效ふを願ふが爲の故に、弟子命終れば某は某處に生じ、某は某處に生ずと記說す。(1)若し比丘、某尊者某處に於て命終りぬ。彼佛の爲に記せられ、究竟智を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知ると聞き、或は自ら彼の尊者を見、或はまた他より數々これを聞く、彼の尊者是の如く信有り、是の如く戒を持し、是の如く博聞し、是の如く惠施し是の如く智慧ありと。その人聞き已りて彼の尊者信有り戒を持し博聞し惠施し智慧あるを憶ひ、この正法律を聞き已りて或は心に是の如き是の如きを效ふを願ふ。阿那律陀、是の如く比丘必ず差降・安樂・住止を得。

(1)漏盡の比丘。

上止息を得、彼の心增伺・瞋恚・睡眠を生ぜず、心不樂を生ぜず身頻伸を生ぜず亦多く食せず、心愁憂せず。彼の比丘すなはち能く飢渴・寒熱・蚊虻・蠅蚤・風日の逼る所を忍び、惡聲捶杖亦能くこれを忍ぶ。身諸の疾に遇ひ極めて苦痛を爲し命絕えんと欲せるに至りて、諸の不可樂皆能く堪耐す。所以者何。欲の爲に覆はるゝに非ざるを以ての故に、惡法の纒ふ所と爲らざるが故に叉捨樂無上止息を得るが故なり』。世尊問ひて曰はく『阿那律陀、如來何の義を以ての故に或は所除有り或は所用有り或は所堪有り或は所止有り或は所吐有りや』。阿那律陀世尊に白して曰く『世尊を法本と爲し世尊を法主と爲し法は世尊に由る。唯願はくはこれを說きたまへ。我等聞き已りて廣く義を知るを得ん』。佛すなはち告げて曰はく『阿那律陀、汝等諦かに聽き善くこれを思念せよ。我當に汝が爲にその義を分別すべし』。阿那律陀等教を受けて聽きぬ。世尊告げて曰はく『阿那律陀、諸の漏・穢汚・當來有の本と爲る「もの」煩熱の苦報、生・老・病・死、「これ」如來盡くさゞるに非ず、知らざるに非ざるに因るが故に、或は所除有り、或は所用有り、或は所堪有り、或は所止有り、所は所吐有り。阿那律陀、如來但この身に因るが故に、六處に因るが故に、壽命に因るが故に、或は所除有り或は所用有り或は所堪有り或は所止有り或は所吐有り。阿那律陀、如來この義を以ての故に或は所除有り或は所用有り或は所堪有り或は所止有り或は所吐有り』。世尊問ひて曰はく『阿那律陀、如來何の義を以ての故に無事處・山林・樹下に住し、高巖に樂居し、寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無く、隨順し燕坐するや』。尊者阿那律陀世尊に白して曰く『世尊を法本と爲し世尊を法主と爲し法は世尊に由る。唯願はくはこれを說きたまへ。我等聞き已りて廣く義を知るを得ん』。佛すなはち告げて曰はく『阿那律陀、汝等諦かに聽き善くこれを思念せよ。我當に汝が爲にその義を分別すべし』。阿那律陀等教を受けて聽きぬ。世尊告げて曰はく『阿那律陀、如來未だ得ざるを得んと欲し、未だ獲ざるを獲んと欲し、未だ證せざるを證せんと欲するが爲の故に、無事處・山林・樹下に住し、

【七】巴利文「漏・穢汚、再生の本となるもの、畏るべきもの、苦果を齎すもの、未來の生・老・死、これ等は如來によりて棄てられたり。」

りて久しからず。この三族姓子頗しこの正法律中に於て梵行を行ずるを樂しむや』。時に諸の比丘亦また再び三たび嘿然として答へず。こゝに於て世尊自ら三族姓子に問ひ尊者阿那律陀に告げたまはく『汝等三族姓子並びに皆年少にして新に出家して學び、共に來りてこの正法に入りて久しからず。阿那律陀、汝等頗しこの正法律中に梵行を行ずるを樂しむや』。尊者阿那律陀白して曰く『世尊。是の如し。我等この正法に梵行を修行するを樂しむ』。世尊問ひて曰く『阿那律陀、汝等小時年幼の童子にして清淨にして黑髮、身體盛壯にして遊戲を樂しみ、數ば澡浴してその身を嚴愛するを樂しむ。後に於て親々及びその父母皆相愛戀し悲泣啼哭して、汝をして出家學道せしむるを欲せず。汝等故らに能く鬚髮を剃除し袈裟衣を著し、至信に家を捨て家無くして學道す。阿那律陀、汝等王を畏れて學道を行ぜず、亦賊を畏れず負債を畏れず恐怖を畏れず貧窮を畏れず活を得るが故に而も學道を行ぜず。但生・老・病・死・啼哭。憂苦を厭ひ或はまた大苦聚の邊を得んと欲す。阿那律陀、汝等是の如き心を以ての故に出家學道せざるや』。答へて曰く『是の如し』。『阿那律陀、若し族姓子是の如き心を以て出家學道すれば、由りて無量の善法を得る所を知ると爲すや』。尊者阿那律陀世尊に白して曰く『世尊を法本と爲し世尊を法主と爲し法は世尊に由る。唯願はくはこれを說きたまへ。我等聞き已りて廣く義を知るを得ん』。佛すなはち告げて曰はく『阿那律陀、汝等諦かに聽き善くこれを思念せよ。我當に汝が爲にその義を分別すべし』。阿那律陀等教を受けて聽きぬ。世尊告げて曰はく『阿那律陀、若し欲の爲に覆はれ惡法に纏はるれば捨樂無上止息を得ず。彼の心[四]增伺・瞋恚・睡眠を生じ心[五]不樂を生じ[六]身頻伸を生じ多く食し心憂ふ。彼の比丘すなはち飢渴・寒熱・蚊虻・蠅蚤・風日の逼る所を忍ぶ能はず。惡聲捶杖亦忍ぶ能はず、身諸の疾に遇ひ極めて苦痛を爲し命絕えんと欲するに至り、諸の不可樂皆堪耐せず。所以者何。欲の爲に覆はれ惡法に纏はれ、捨樂無上止息を得ざるを以ての故なり。若し欲を離れ惡法の纏ふ所と爲るに非ざる有れば必ず捨樂及び無

【四】Abhijjhā 貪。
【五】Arati 不樂。
【六】Tandī 倦疲。

喜[亦然り]。心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶべし。比丘、若し汝この定を修習し極めて善く修せば若し東方に遊べば必ず安樂を得、衆の苦患無し、若し南方・西方・北方に遊べば必ず安樂を得、衆の苦患無し。比丘、若し汝この定を修習し極めて善く修せば我尙汝の諸の善法住まると說かず。況や衰退すと說かんや。但當に晝夜に善法增長して衰退せざるべし。比丘、若し汝この定を修習し極めて善く修せば汝二果に於て必ずその一を得ん、或は現世に於て究竟智を得、或はまた餘有りて阿那含を得ん』。こゝに於て彼の比丘佛の所說を聞きて善く受け善く持し、卽ち坐より起ち佛足に稽首し繞三匝して去り、佛の教を受持し、遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に族姓子の所爲の[如く]、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道し唯無上の梵行訖り、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知りぬ。彼の尊者法を知り已りて阿羅訶を得るに至りぬ。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

七十七、[一]娑雞帝三族姓子經第六

我が聞きしこと是の如し、ある時佛[二]娑雞帝に遊び靑林中に在しぬ。その時娑雞帝に三族姓子有り。[三]尊者阿那律陀・尊者難提・尊者金毘羅なり。並びに皆年少にして新に出家して學び、共に來りてこの正法に入りて久しからざりき。その時世尊諸の比丘に問ひたまはく『この三族姓子並びに皆年少にして新に出家して學び、共に來りてこの正法に入りて久しからず。この三族姓子頗しこの正法律中に於て梵行を行ずるを樂しむや』。時に諸の比丘默然として答へず。世尊また再び三たび諸の比丘に問ひたまはく『この三族姓子並びに皆年少にして新に出家して學び、共に來りてこの正法に入

【一】 M. 68, Naḷakapāna-sutta。
【二】 娑雞帝(Sāketa)。
【三】 阿那律陀(Anuruddha,)難提(Nandiya,)金毘羅(Kimbila)「長壽王本起經」を見よ。

比丘、かくの如きの定、去る時、來る時當に善く修習すべし。住する時、坐する時、臥す時、眠る時、寤むる時、眠り寤むる時亦當に修習すべし。また次に亦當に有覺有觀定・無覺少觀定を修習し、無覺無觀定を修習すべし。亦當に喜共俱定・樂共俱定・定共俱定を修習し、捨共俱定を修習すべし。比丘、若しこの定を修し極めて善く修せば比丘、當にまた內心を修觀して心の如く、行極めて精勤にして正念正智を立し、善く自ら心を御し慳貪を離れしめ意憂慼無く、また外心を觀じて心の如く、行極めて精勤にして正念正智を立し善く自ら心を御し慳貪を離れしめ意憂慼無く、また內外心を觀じて心の如く、行極めて精勤にして正念正智を立して善く自ら心を御し慳貪を離れしめ、意憂慼無かるべし。比丘、かくの如きの定、去る時、來る時、當に善く修習すべし。住する時、坐する時、臥す時、眠る時、寤むる時、眠り寤むる時亦當に修習すべし。また次に亦當に有覺有觀定・無覺少觀定を修習し、無覺無觀定を修習すべし。亦當に喜共俱定・樂共俱定・定共俱定を修習し、捨共俱定を修習すべし。比丘、若しこの定を修し極めて善く修せば比丘、當にまた更に內法を修觀して法の如く、行極めて精勤にして正念正智を立し善く自ら心を御し慳貪を離れしめ意憂慼無く、また外法を觀じて法の如く、行極めて精勤にして正念正智を立し、善く自ら心を御し慳貪を離れしめ意憂慼無く、また內外法を觀じて法の如く、行極めて精勤にして正念正智を立し、善く自ら心を御し慳貪を離れしめ意憂慼無かるべし。比丘、かくの如きの定、去る時、來る時當に善く修習すべし。住する時、坐する時、臥す時、眠る時、寤むる時、眠り寤むる時亦當に修習すべし。また次に亦當に有覺有觀定・無覺少觀定を修習し、無覺無觀定を修習すべし。亦當に喜共俱定・樂共俱定・定共俱定を修習し、捨共俱定を修習すべし。比丘若しこの定を修し極めて善く修せば比丘、心當に慈と俱にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心慈と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊び、是の如く悲

七十六、郁伽支羅經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛郁伽支羅に遊び恒水池岸に在しぬ。その時一比丘晡時に於て燕坐より起ち、佛所に往詣し佛足に稽首し、却きて一面に坐し白して曰く、『世尊、唯願はくは我が爲に善く略して法を說きたまへ。世尊より聞き、已りて遠離獨住に在りて、心放逸無く修行精勤し、遠離獨住に在りて、心放逸無く修行精勤するに因るが故に族姓子の所爲「の如く」、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すれば、唯無上の梵行訖り現法中に於て、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知らん』。世尊告げて曰はく『比丘、當に是の如く學すべし、心をして住することを得しめ、在內不動にして無量に善く修し、また內身を觀じて身の如く、行極めて精勤にして正念正智を立し、善く自ら心を御し慳貪を離れしめ意憂慼無し。また外身を觀じて身の如く、行極めて精勤にして正念正智を立し、善く自ら心を御し慳貪を離れしめ意憂慼無し。また內外身を觀じて身の如く、行極めて精勤にして正念正智を立し、善く自ら心を御し慳貪を離れしめ意憂慼無し。比丘、かくの如きの定、去る時、來る時當に善く修習すべし。住する時、坐する時、臥す時、眠る時、寤むる時、眠り寤むる時亦當に修習すべし。また次に亦當に[一]有覺有觀定・無覺少觀定を修習し無覺無觀定を修習すべし。亦當に喜共俱定・樂共俱定・定共俱定を修習し捨共俱定を修習すべし。比丘、若しこの定を修し極めて善く修せば比丘、當にまた更に內覺を修觀して覺の如く、行極めて精勤にして正念正智を立し善く自ら心を御し慳貪を離れしめ、意憂慼無く、また外覺を觀じて覺の如く、行極めて精勤にして正念・正智を立し善く自ら心を御し慳貪を離れしめ、意憂慼無く、また內外覺を觀じて覺の如く、行極めて精勤にして正念正智を立し善く自ら心を御し慳貪を離れしめ意憂慼無かるべし。

【一】一七卷「長壽王本起經」を見よ。

比丘云何が行ぜば必ず般涅槃を得るや』。世尊告げて曰はく『阿難、若し比丘是の如く行ぜば我無く我所無く、我當に有らざるべく我所當に有らざるべく、若し本有はすなはち盡く捨つるを得ん。阿難、若し比丘彼の捨を樂しまず彼の捨に著せず彼の捨に住せざれば、阿難、比丘是の如きを行ぜば、必ず般涅槃を得ん』。尊者阿難白して曰く『世尊、比丘若し所受無ければ必ず般涅槃を得るや』。世尊告げて曰はく『阿難、若し比丘所受無ければ必ず般涅槃を得ん』。その時尊者阿難叉手を佛に向け白して曰く『世尊、已に[一二]淨不動道を說き、已に[一三]淨無所有處道を說き、已に[一四]淨無想道を說き、已に無餘涅槃を說きたまひぬ。世尊、云何が聖解脫なるや』。世尊告げて曰はく『阿難、多聞の聖弟子是の如き觀を作す、若しは現世の欲及び後世の欲若しは現世の色及び後世の色、若しは現世の欲想後世の欲想、若しは現世の色想・後世の色想及び不動想・無所有處想・無想想、彼の一切の想これ無常の法、これ苦これ滅なり。これを自己有りと謂ふ。若し自己有ればこれ生、これ老、これ病、これ死なりと。阿難、若しこの法有りて一切盡く滅して餘り無くまた有らざれば、彼則ち生無く老病死無し。聖は是の如く觀ず、若し有は必ずこれ解脫の法なり。若し無餘涅槃有ればこれを甘露と名づくと。彼是の如く觀じ是の如く見れば、必ず欲漏心解脫・有漏・無明漏心解脫を得、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、更に有を受けずと如眞を知る。阿難、我今汝の爲に已に淨不動道を說き已に淨無所有處道を說き已に淨無想道を說き、已に無餘涅槃を說き、已に聖解脫を說き、尊師、弟子の爲にする所の如く大慈哀を起し、[一五]憐念愍傷し義及び饒益を求め安隱快樂を求むるは我今已に作しぬ。汝等當にまた自ら作すべし。無事處に至り林樹下に至り空・安靜處に燕坐し思惟し放逸なるを得ること勿れ。勤加精進して後悔あらしむること莫れ。こはこれ我が教勅なり、これ我が訓誨なり』。佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

【一二】上の（1）（2）（3）
【一三】上の（4）（5）（6）
【一四】上の（7）
【一五】大正藏本、憐を隣に作る。

如く學し、是の如く修習して、廣く布きすなはち處に於て心淨を得、處に於て心淨を得已りて比丘は或はこゝに於て無所有處に入るを得或は慧を以て解を爲す。彼後時に於て身壞れ命終りて本意に因るが故に必ず無所有處に至る。これを第三に淨無所有處道を說くと謂ふ。(7)また次に多聞の聖弟子是の如き觀を作す、若しは現世の欲及び後世の欲若しは現世の色及び後世の色若しは現世の欲想・後世の欲想若しは現世の色想後世の色想及び不動想・無所有處想彼の一切の想これ無常の法これ苦これ滅なりと。彼その時に於て而も無想を得。彼是の如く行じ、是の如く學し、是の如く修習して廣く布きすなはち處に於て心淨を得、處に於て心淨を得已りて比丘は或はこゝに於て無想に入るを得、或は慧を以て解を爲す。彼後時に於て身壞れ命終りて本意に因るが故に必ず無想處に至る。これを〔二〕淨無想道を說くと謂ふ』。この時尊者阿難拂を執りて佛に侍しぬ。こゝに於て尊者阿難叉手を佛に向け白して曰く『世尊、若し比丘有りて是の如く行ぜば我無く我所無く我當に有らざるべく我所當に有らざるべく、若し、本有はすなはち盡く捨つるを得ん。世尊、比丘の行是の如くば彼盡く般涅槃を得ると爲すや』。世尊告げて曰はく『阿難、この事不定なり。或は得る者有り、或は得ざる有り』。尊者阿難白して曰く『世尊、比丘云何が行じて般涅槃を得ざる』。世尊告げて曰はく『阿難、若し比丘是の如く行ぜば我無く我所無く、我當に有らざるべく、我所當に有らざるべく、若し本有はすなはち盡く捨つるを得ん。阿難、若し比丘彼の捨を樂しみ彼の捨に著し彼の捨に住すれば、阿難、比丘是の如きを行ぜば必ず般涅槃を得ず』。尊者阿難白して曰く『世尊、比丘若し所受有れば般涅槃を得ざるや』。世尊告げて曰はく『阿難、若し比丘所受有れば彼必ず般涅槃を得ず』。尊者阿難白して曰く『世尊、彼の比丘何の所受と爲すや』。世尊告げて曰はく『阿難、行中餘有り、謂く有想無想處なり。有中に於て第一にして彼の比丘受く』。尊者阿難白して曰く『世尊、彼の比丘餘行を受くるや』。世尊告げて曰はく『阿難、是の如し。比丘餘行を受く』。尊者阿難白して曰く『世尊、

〔二〕淨無想道 (Nevasaññā-nāsaññāyatanasappāyā paṭi-padā)。

す、若し色有れば、彼の一切は四大及び四大の造なり。四大はこれ無常の法、これ苦、これ滅なりと。彼是の如く行じ是の如く學し、是の如く修習して廣く布き、すなはち處に於て心淨を得、處に於て心淨を得已りて比丘は或はこゝに於て不動に入るを得、或は慧を以て解を爲す。彼後時に於て身壞れ命終りて本意に因るが故に必ず不動に至る。これを第二に淨不動道を說くと謂ふ。(3)また次に多聞の聖弟子是の如き觀を作す、若しは現世の欲及び後世の欲、若しは現世の色及び後世の色、若しは現世の欲想・後世の欲想若しは現世の色想後世の色想、彼の一切の想これ無常の法、これ苦、これ滅なりと。彼その時に於て必ず不動想を得。彼是の如く行じ、是の如く學し、是の如く修習して廣く布き、すなはち處に於て心淨を得、處に於て心淨を得已りて比丘は或はこゝに於て不動に入るを得或は慧を以て解を爲す。彼後時に於て身壞れ命終りて本意に因るが故に必ず不動に至る。これを第三に淨不動道を說くと謂ふ。(4)また次に多聞の聖弟子是の如き觀を作す、若しは現世の欲想後世の欲想若しは現世の色想後世の色想及び不動想、彼の一切の想これ無常の法これ苦これ滅なりと。彼その時に於て無所有處想を得。彼是の如く行じ是の如く學し、是の如く修習して廣く布きすなはち處に於て心淨を得、處に於て心淨を得已りて比丘は或はこゝに於て不動に入るを得、或は慧を以て解を爲す。彼後時に於て身壞れ命終りて本意に因るが故に必ず不動に至る。これを第一に(10)淨無所有處道を說くと謂ふ。(5)また次に多聞の聖弟子是の如き觀を作す、この世空、空にして神に於て神所有空・有常空・有恒空・長存空・不變易なりと。彼是の如く行じ、是の如く學し、是の如く修習して廣く布きすなはち處に於て心淨を得、處に於て心淨を得已りて比丘は或はこゝに於て無所有處に入るを得、或は慧を以て解を爲す。彼後時に於て身壞れ命終りて本意に因るが故に必ず無所有處に至る。これを第二に淨無所有處道を說くと謂ふ。(6)また次に多聞の聖弟子是の如き觀を作す、我他の爲に而も所爲有るに非ず、亦自らの爲に而も所爲有るに非ずと。彼是の如く行じ、是の

【10】淨無所有處道(Ākiñcaññāyatanasappāya paṭipadā)。

たまふ。既に彼の知法に從ひ正法中に樂住し三昧達に逮び得、法作已に辨ず、【一三】我死を樂はず亦生を願はず、時に隨ひて適く所に任せ、正念正智を立す、鞞耶離の竹林、我が壽彼に在りて盡き、當に竹林の下に在りて無餘般涅槃すべし。

佛說是の如し。尊者阿那律陀及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

七十五、【一】淨不動道經第四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛【二】拘樓瘦に遊び【三】劍磨瑟曇なる【四】拘樓の都邑に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『欲は無常虛僞妄言なり。この妄言の法は則ちこれ幻化欺誑愚癡なり。若しは現世の欲及び後世の欲、若しは現世の色及び後世の色、彼の一切これ【五】魔境界にして則ちこれ魔の餌なり。これに因りて心をして無量の惡不善の法、【六】增伺・瞋恚及び【七】鬪諍等を生ぜしめ、謂く聖弟子學する時爲に障礙を作す。(1)多聞の聖弟子是の如き觀を作す、世尊の說きたまふ所、欲は無常虛僞妄言なり。この妄言の法は則ちこれ幻化欺誑愚癡なり。若しは現世の欲及び後世の欲、若しは現世の色及び後世の色彼の一切これ魔境界にして則ちこれ魔の餌なり。これに因りて心をして無量の惡不善の法、增伺・瞋恚及び鬪諍等を生ぜしめ、謂く聖弟子學する時爲に障礙を作すと。彼この念を作す、我大心もて成就して遊び世間を掩伏しその心を攝持するを得べし。若し我大心もて成就して遊び世間を掩伏しその心を攝持すれば是の如く心すなはち無量の惡不善の法、增伺・瞋恚及び鬪諍等を生じ、謂く聖弟子學する時爲に障礙を作さずと。彼これを以て行じ、これを以て學し、是の如く修習して廣く布き、すなはち處に於て心淨を得、處に於て心淨を得已りて比丘は或はこゝに於て【八】不動に入るを得、或は慧を以て解を爲す。彼後時に於て身壞れ命終りて本意に因るが故に必ず不動に至る。これを第一に【九】淨不動道を說くと謂ふ。(2)また次に多聞の聖弟子是の如き觀を作

【一三】一三卷「說本經」初の頌の最後の二句を見よ。

【一】M. 106, Āṇañjasappāya-sutta.

【二】拘樓瘦(Kurūsu)。

【三】劍磨瑟曇(Kammāssadhamma)。

【四】拘樓の都邑(Kurūnaṃ nigamo)。

【五】魔境界(Māradheyya)。

【六】欲(Abhijjhā)。

【七】鬪諍(Sārambha)。

【八】不動(Āṇañjaṃ samāpajjati)。

【九】淨不動道(Āṇañjasappāyā paṭipadā)。

樂衆會に非ず、住衆會に非ず、合衆會の得に非ざる。謂く、比丘遠離を行じ、二遠離を成就し、身及び心倶に遠離す。これを道は遠離に從ひ樂衆會に非ず、住衆會に非ず、合衆會の得に非ずと謂ふ。(4)云何が道は精進に從ひ懈怠の得に非ざる。謂く比丘常に精進を行じ惡不善を斷じ諸の善法を修し恒に自ら意を起し專一堅固にして諸の善本の爲に方便を捨てず。これを道は精勤に從ひ懈怠の得に非ずと謂ふ。(5)云何が道は正念に從ひ邪念の得に非ざる。謂く比丘內身を觀ずるに身の如く、內覺心[乃至]法を觀ずるに法の如し。これを道正念に從ひ邪念の得に非ずと謂ふ。(6)云何が道は定意に從ひ亂意の得に非ざる。謂く比丘欲を離れ惡不善の法を離れ、第四禪を成就して遊ぶを得るに至る。これを道は定意に從ひ亂意の得に非ずと謂ふ。(7)云何が道は智慧に從ひ愚癡の得に非ざる。謂く比丘智慧を修行し興衰の法を觀じ、是の如き智を得、聖慧明達し分別曉了し以て正に苦を盡くす。これを道は智慧に從ひ愚癡の得に非ずと謂ふ。(8)云何が道は不戲・樂不戲・行不戲に從ひ戲に非ず樂戲に非ず行戲の得に非ざる。謂く比丘意常に戲を滅し樂しみて無餘涅槃に住し心恒に樂しみて歡喜意解に住す。これを道は不戲・樂不戲・行不戲に從ひ、戲に非ず樂戲に非ず行戲の得に非ずと謂ふ。諸の比丘、阿那律陀比丘この大人の八念を成就し已りて然る後枝提瘦の水渚林中に夏坐を受く。我この教を以てし、彼遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤す。彼遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤し已りて族姓子の所爲[の如く]、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すれば、唯無上の梵行訖りて現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る』。この時尊者阿那律陀阿羅訶を得、心正解脫し長老上尊たるを得、則ちその時に於いて頌を說きて曰く、

遙かに我が思念せるを知りたまひて無上世間師　正に身心定に入り虛に乘じて忽ち來り到り
我が心の所念の如く、　爲に說きてまた過ぎたまふ。　諸佛は不戲を樂しみ一切の戲を遠離し

(4)精進。
(5)正念。
(6)定意。
(7)智慧。
(8)不戲。

に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて如其像定に入り、如其像定を以て、猶ほ力士の臂を屈申する頃の若く、是の如く世尊枝提瘦の水渚林中より忽ち沒して見えず、婆奇瘦の鼉山・怖林・鹿野園中に住まりたまひぬ。彼の時尊者阿難拂を執りて佛に侍しぬ。こゝに於て世尊すなはち定より覺め迴顧して告げて曰はく『阿難、若し比丘有りて鼉山・怖林・鹿野園中に遊ぶ者、彼[等]一切をして[皆]講堂に集まらしめ、講堂に集まり已りて還り來りて我に白せ』。尊者阿難佛の敎を受け已りて稽首して足を禮し、卽ち行きて宣勅し、諸の比丘有りて鼉山・怖林・鹿野園中に遊ぶ者、彼[等]一切をして皆講堂に集まらしめ、講堂に集まり已りて還りて佛の所に詣り頭面もて足を禮し却きて一面に住し白して曰く『世尊、諸の比丘有りて鼉山・怖林・鹿野園中に遊ぶ者、已に一切をして皆講堂に集まらしめぬ。唯願はくは世尊、自ら當に時を知りたまふべし』。こゝに於て世尊、尊者阿難を將ゐて講堂に往詣し比丘衆の前に於て座を敷きて坐し、坐し已りて告げて曰はく『諸の比丘、我今汝が爲に大人の八念を說かん。汝等諦かに聽き善くこれを思念せよ』。時に諸の比丘敎を受けて聽きぬ。佛言はく『大人の八念とは謂く道は無欲に從ひ有欲の得に非ず、道は知足に從ひ無厭の得に非ず、道は遠離に從ひ樂聚會に非ず、住聚會に非ず、合聚會の得に非ず、道は精勤に從ひ懈怠の得に非ず、道は正念に從ひ邪念の得に非ず、道は定意に從ひ亂意の得に非ず、道は智慧に從ひ愚癡の得に非ず、道は不戲・樂不戲・行不戲に從ひ、戲に非ず樂戲に非ず行戲の得に非ず。(1)云何が道は無欲に從ひ有欲の得に非ざる。謂く比丘無欲を得、自ら無欲を得たるを知り、他人をして我無欲なりと知らしめず。知足を得、遠離を得、精勤を得、正念を得、定意を得、智慧を得、不戲を得、自ら不戲を得たるを知り他をして我無欲なりと知らしむるを欲せず。これを道は無欲に從ひ有欲の得に非ずと謂ふ。(2)云何が道は知足に從ひ無厭の得に非ざる。謂く比丘知足を行じ、衣は形を覆ふを取り食は軀を充たすを取る。これを道は知足に從ひ無厭の得に非ずと謂ふ。(3)云何が道は遠離に從ひ、

(1)無欲。
(2)知足。
(3)遠離。

在なるが如し。阿那律陀、汝亦是の如し糞掃衣を得て第一の服と爲し汝の心欲無くして、これを行じ、住止して行ず。(2)阿那律陀、若し汝大人の八念を成就し而もまたこの四增上心を得、現法樂居を易くして得、難からずして「得」ば、王・王臣の好き廚宰・種々淨妙の甘美餚饍有るが如し。阿那律陀、汝亦是の如く常に乞食を行じて第一饌と爲し汝の心欲無くして、これを行じ、住止して行ず。(3)阿那律陀、若し汝大人の八念を成就し而もまたこの四增上心を得、現法樂居を易くして得、難からずして「得」ば、王・王臣の好き屋舍或は樓閣宮殿有るが如し。阿那律陀、汝亦是の如く樹下に依りて止まりて第一の舍と爲し汝の心欲無くしてこれを行じ、住止して行ず。(4)阿那律陀、若し汝大人の八念を成就し而もまたこの四增上心を得、現法樂居を易くして得、難からずして「得」ば、王・王臣の好き床座有り、敷くに氍氀毾㲪を以てし覆ふに錦綺羅縠を以てし、襯體被・兩頭安枕有りて　[一二]加陵伽波惒邏波遮悉哆羅那なるが如し。阿那律陀、汝亦是の如く草座葉座を第一の座と爲し汝の心欲無くしてこれを行じ、住止して行ず。(5)阿那律陀、若し汝大人の八念を成就し而もまたこの四增上心を得、現法樂居を易くして得、難からずして「得」ば、是の如く汝若し東方に遊べば必ず安樂を得て衆の苦患無く、若し南方・西方・北方に遊べば必ず安樂を得て衆の苦患無し。阿那律陀、若し汝大人の八念を成就し而もまたこの四增上心を得、現法樂居を易くして得、難からずして「得」ば、我尙汝の諸の善法住まると說かず、況や衰退すと說かんや。但當に晝夜に善法增長して而も衰退せざるべし。(6)阿那律陀、若し汝大人の八念を成就し而もまたこの四增上心を得、現法樂居を易くして得、難からずして「得」ば、汝二果に於て必ずその一を得ん。或は現世に於て究竟智を得、或はまた餘有りて阿那含を得ん。阿那律陀、汝當にこの大人の八念を成就すべし。亦應にこの四增上心を得べし。現法樂居を易くして得、難からずして「得」已りて、然る後枝提瘦の水渚林中に於て夏坐を受けよ』。その時世尊尊者阿那律陀の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲

(2)常乞食。

(3)樹下宿。

(4)草座葉座。

【一二】 一一卷「牛糞喩經」註を見よ。

(5)四方樂遊。

(6)得二果。

七十四、[一]八念經第三

我が聞きしこと是の如し。ある時[二]佛婆奇瘦に遊び[三]鼉山[四]怖林[五]鹿野園中に在しぬ。その時尊者阿那律陀[六]枝提瘦の水渚林中に在りぬ。彼の時尊者阿那律陀安靜處に在りて燕坐し思惟し、心にこの念を作しぬ、道は無欲に從ひ、有欲の得に非ず、道は知足に從ひ無厭の得に非ず、道は遠離に從ひ樂衆會に非ず、住衆會に非ず、合衆會の得に非ず、道は精勤に從ひ懈怠の得に非ず、道は正念に從ひ邪念の得に非ず、道は定意に從ひ亂意の得に非ず、道は智慧に從ひ愚癡の得に非ずと。こゝに於て世尊他心智を以て尊者阿那律陀の心中の所念・所思・所行を知りたまひぬ。世尊知り已りて即ち[七]如其像定に入り如其像定を以て、猶ほ力士の臂を屈申する頃の若く、是の如く世尊婆奇瘦・鼉山・怖林・鹿野園中より忽ち沒して現れずして枝提瘦・水渚林中の尊者阿那律陀の前に住まりたまひぬ。この時世尊すなはち定より覺め尊者阿那律陀を歎じて曰はく『善き哉善き哉、阿那律陀、謂く汝安靜處に在りて燕坐し思惟し心にこの念を作す、道は無欲に從ひ有欲の得に非ず、道は知足に從ひ無厭の得に非ず、道は遠離に從ひ樂衆會に非ず、住衆會に非ず、合衆會の得に非ず、道は精勤に從ひ懈怠の得に非ず、道は正念に從ひ邪念の得に非ず、道は定意に從ひ亂意の得に非ず、道は智慧に從ひ愚癡の得に非ずと。阿那律陀、汝如來に從ひて更に[八]第八の大人の念を受け、受け已りてすなはち思へ、道を不戲樂・不戲行・不戲に從ひ、戲に非ず樂戲に非ず行戲の得に非ずと。阿那律陀、若し汝この大人の八念を成就すれば汝必ず能く欲を離れ、惡不善の法を離れ、第四禪を成就して遊ぶを得るに至る。(1)阿那律陀、若し汝大人の八念を成就し而もまたこの[九]四增上心を得、現法樂居を易く得、難からずして[得]ば、王・王臣の好き[一〇]縅簏有りて種々の衣を盛滿し、中前著けんと欲せばすなはち取りてこれを著け、中時・中後若し衣を著けんと欲せばすなはち取りてこれを著け隨意自

【一】 A. iv. 228. 「佛說阿那律八念經」「增一阿含」四二品の六。
【二】 婆奇瘦(Bhaggesu)。
【三】 鼉山(Suṁsumāragira)。
【四】 怖林(Bhesakaḷāvana)。
【五】 鹿野園(Migadāya)。
【六】 枝提瘦(Cetisu)。
【七】 八卷「侍者經」註を見よ。
【八】 〔八〕大人覺(Mahāpurisavitakka)。
(1)糞掃衣。
【九】 四增上心(Cattāri jhānāni abhicetasikāni)。即ち四禪を指す。
【一〇】 縅簏(Dussakaraṇḍaka)。衣裳を容れる箱。
【一一】 中前は午前、中時は正午、中後は午後。

の念を作しぬ、(8)我寧ろその光明を生じその光明に因りて形色を見、及び彼の天と共に同じく集會し共に相慰勞し論説する所有り答對する所有り、亦彼の天是の如き姓、是の如き字、是の如き生なりと知り、亦彼の天是の如く食し是の如く苦樂を受くと知り、亦彼の天是の如く長壽なり是の如く久しく住し是の如く命盡くと知り、亦彼の天是の如き是の如き業を作し已りてこゝに死し彼に生ずと知り、亦彼の天彼々の天中と知り、亦彼の天上に我曾て中に生ぜしや未だ曾て中に生ぜざりしやを知り、是の如くして我が智見極大明淨なるを得べしと。我智見極明淨の爲の故にすなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。我遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に卽ち光明を得てすなはち形色を見、及び彼の天と共に同じく集會し共に相慰勞し論説する所有り答對する所有り、亦彼の天是の如き姓、是の如き字、是の如き生なりと知り、亦彼の天是の如く食し是の如く苦樂を受くと知り、亦彼の天是の如く長壽なり、是の如く久しく住し是の如く命盡くと知り、亦彼の天是の如き是の如き業を作し已りてこゝに死し彼に生ずと知り、亦彼の天彼々の天中と知り、亦彼の天上に、我曾て中に生ぜしや、未だ曾て中に生ぜざりしやを知りぬ。若し我正に知らずしてこの八行を得ればすなはち一向に説得すべからず。亦我無上正眞の道を得しを知らず、我亦この世間諸の天・魔・梵・沙門・梵志に於てその上に出過する能はず、我亦種々の解脱を解脱するを得ず、我亦未だ諸の顚倒を離れず、未だ生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知らず。若し我正に知りてこの八行を得ればすなはち一向に説得すべく、亦我無上正眞の道を覺るを得しを知り、我亦この世間、諸の天・魔・梵・沙門・梵志に於てその上に出過し、我亦種々の解脱を解脱するを得、我が心已に諸の顚倒を離れ生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る』。佛説是の如し。彼の諸の比丘佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。

(8)自ら天中に生ぜしや否やを知る。

き姓、是の如き字、是の如き生なりと知り、亦彼の天是の如く食し是の如く苦樂を受くと知り、亦彼の天是の如く長壽なり、是の如く久しく住し、是の如く命盡くと知り、亦彼の天是の如き是の如き業を作し已りてこゝに死し彼に生ずと知り、是の如くして我が智見極大明淨なるを得べしと。我智見極明淨の爲の故にすなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。我遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に即ち光明を得て、すなはち形色を見、及び彼の天と共に同じく集會し共に相慰勞し論說する所有り答對する所有り、亦彼の天是の如き姓、是の如き字、是の如き生なりと知り、亦彼の天是の如く食し是の如く苦樂を受くと知り、亦彼の天是の如く長壽なり、是の如く久しく住し是の如く命盡くと知り、亦彼の天是の如き是の如き業を作し已りてこゝに死し彼に生ずと知りぬ。然るに我彼の天彼々の天中と知らざりき。我またこの念を作しぬ、(7)我寧ろその光明を生じその光明に因りて形色を見、及び彼の天と共に同じく集會し共に相慰勞し論說する所有り答對する所有り、亦彼の天是の如き姓、是の如き字、是の如き生なりと知り、亦彼の天是の如く食し是の如く苦樂を受くと知り、亦彼の天是の如く長壽なり是の如く久しく住し是の如く命盡くと知り、亦彼の天是の如き是の如き業を作し已りてこゝに死し彼に生ずと知り、亦彼の天彼々の天中と知り、是の如くして我が智見極大明淨なるを得べしと。我智見極明淨の爲の故にすなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。我遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に即ち光明を得てすなはち形色を見、及び彼の天と共に同じく集會し共に相慰勞し論說する所有り答對する所有り、亦彼の天是の如き姓、是の如き字、是の如き生なりと知り、亦彼の天是の如く食し是の如き苦樂を受くと知り、亦彼の天是の如く長壽なり是の如く久しく住し是の如く命盡くと知り、亦彼の天是の如き是の如き業を作し已りてこゝに死し彼に生ずと知り、亦彼の天彼々の天中と知りぬ。然るに我彼の天上に我曾て中に生ぜしや、未だ曾て中に生ぜざりしやを知らざりき。我またこ

(7)天の出處を知る。

の如き字、是の如き生なりと知りぬ。然るに我彼の天是の如く食し是の如く苦樂を受くるを知らざりき。我またこの念を作しぬ、(4)我寧ろその光明を生じその光明に因りて形色を見、及び彼の天と共に同じく集會し共に相慰勞し論說する所有り答對する所有り亦彼の天是の如き姓、是の如き字、是の如き生なりと知り、亦彼の天是の如く食し是の如く苦樂を受くと知り、是の如くして我が智見極大明淨なるを得べしと。我智見極明淨の爲の故にすなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。我遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に即ち光明を得て、すなはち形色を見、及び彼の天と共に同じく集會し共に相慰勞し論說する所有り答對する所有り、亦彼の天是の如き姓、是の如き字、是の如き生なりと知り、亦彼の天是の如く食し是の如く苦樂を受くと知りぬ。然るに我彼の天是の如く長壽なり、是の如く久しく住し、是の如く命盡くと知らざりき。我またこの念を作しぬ、(5)我寧ろその光明を生じその光明に因りて形色を見、及び彼の天と共に同じく集會し共に相慰勞し論說する所有り答對する所有り、亦彼の天是の如き姓、是の如き字、是の如き生なりと知り、亦彼の天是の如く食し是の如く苦樂を受くと知り、亦彼の天是の如く長壽なり、是の如く久しく住し是の如く命盡くと知り、是の如くして我が智見極大明淨なるを得べしと。我智見極明淨の爲の故に、すなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。我遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に即ち光明を得てすなはち形色を見、及び彼の天と共に同じく集會し共に相慰勞し論說する所有り答對する所有り、亦彼の天是の如き姓、是の如き字、是の如き生なりと知り、亦彼の天是の如く食し是の如く苦樂を受くと知り、亦彼の天是の如く長壽なり、是の如く久しく住し是の如く命盡くと知りぬ。然るに我彼の天是の如き是の如き業を作し已りてこゝに死し彼に生ずと知らざりき。我またこの念を作しぬ、(6)我寧ろその光明を生じその光明に因りて形色を見、及び彼の天と共に同じく集會し共に相慰勞し論說する所有り答對する所有り、亦彼の天是の如

(4)天の飲食苦樂を知る。

(5)天の壽量命終時を知る。

(6)天のその作業に隨ひて生死するを知る。

卷の第十八

七十三、天經第二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]枝提瘦に遊び水渚林中に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『我本未だ無上正眞道を覺るを得ざりし時、而もこの念を作しぬ、(1)我寧ろその光明を生じ、その光明に因りて形色を見、是の如くして我が智見極大明淨なるを得べしと。我智見極明淨の爲の故に、すなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。我遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に、卽ち光明を得てすなはち形色を見ぬ。然るに我未だ彼の天と共に同じく集會せず、未だ相慰勞せず、未だ論說する所有らず、未だ答對する所有らざりき。我またこの念を作しぬ、(2)我寧ろその光明を生じ、その光明に因りて形色を見、及び彼の天と共に同じく集會し、共に相慰勞し論說する所有り、答對する所有り、是の如くして我が智見極大明淨なるを得べしと。我智見極明淨の爲の故に、すなはち遠離獨住に在りて、心放逸無く修行精勤しぬ。我遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に卽ち光明を得て、すなはち形色を見、及び彼の天と共に同じく集會し、共に相慰勞し論說する所有り、答對する所有りき。然るに我彼の天是の如き姓、是の如き字、是の如き生なりと知らざりき。我またこの念を作しぬ、(3)我寧ろその光明を生じその光明に因りて形色を見、及び彼の天と共に同じく集會し共に相慰勞し論說する所有り答對する所有り、亦彼の天是の如き姓、是の如き字、是の如き生なりと知り、是の如くして我が智見極大明淨なるを得べしと。我智見極明淨の爲の故にすなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。我遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に卽ち光明を得てすなはち形色を見、及び彼の天と共に同じく集會し共に相慰勞し論說する所有り答對する所有り、亦彼の天是の如き姓、是

[一] A. iv. 302.
[二] 枝提瘦(Cet[illegible])。
(1)形色を見る。
(2)天と集會・慰勞・論說・答對。
(3)天の姓字生を知る。

極めて修學し、無覺少觀定を修學して極めて修學し、無覺無觀定を修學して極めて修學し、一向定を修學して極めて修學し、雜定を修學して極めて修學し、少定を修學して極めて修學し、廣無量定を修學して極めて修學し、我知見を生じ極めて明淨に定に趣向して住し、精勤して道品を修し生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知りぬ。阿那律陀、その時我これを行じ、住止して行じぬ』。佛說是の如し。尊者阿那律陀・尊者難提・尊者金毘羅佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第十七

學しぬ。阿那律陀、我その時これを行じ、住止して行じぬ。阿那律陀、有時我光明を知りて而も色を見ざりき。阿那律陀、我この念を作しぬ、何に因り何に緣りて光明を知りて而も色を見ざるやと。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、若し我光明相を念じて色相を念ぜざればその時我光明を知りて而も色を見ずと。阿那律陀、是の如く我是の如きを知り已りて竟日竟夜、竟日夜光明を知りて而も色を見ざりき。阿那律陀、我その時これを行じ、住止して行じぬ。阿那律陀、有時我色を見て而も光明を知らざりき。阿那律陀、我この念を作しぬ、何に因り何に緣りて我色を見て而も光明を知らざるやと。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、若し我色相を念じ光明相を念ぜざればその時我色を知りて而も光明を知らずと。阿那律陀、是の如く我是の如きを知り已りて竟日竟夜、竟日夜色を知りて而も光明を知らざりき。阿那律陀、我その時これを行じ、住止して行じぬ。阿那律陀、有時我少しく光明を知り亦少しく色を見ぬ。阿那律陀、我この念を作しぬ、何に因り何に緣りて我少しく光明を知り亦少しく色を見るやと。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、若し我少しく定に入れば、少しく定に入るが故に少しく眼清淨なり少しく眼清淨なるが故に我少しく光明を知り亦色を見ると。阿那律陀、是の如く我是の如きを知り已りて竟日竟夜、竟日夜少しく光明を知り亦少しく色を見ぬ。阿那律陀、その時我これを行じ住止して行じぬ。阿那律陀、有時我廣く光明を知り亦廣く色を見ぬ。阿那律陀、我この念を作しぬ。何に因り何に緣りて我廣く光明を知り亦廣く色を見るやと。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、若し我廣く定に入れば、廣く定に入るが故に、廣く眼清淨なり、廣く眼清淨なるが故に、我廣く光明を知り亦廣く光明を見ると。阿那律陀、是の如く我是の如きを知り已りて竟日竟夜、竟日夜廣く光明を知り亦廣く色を見ぬ。阿那律陀、その時我これを行じ住止して行じぬ。阿那律陀、若し我が心中疑患を生ぜば彼心清淨を得。無念・身病想・睡眠・太精勤・太懈怠・恐怖・喜悅・高心・生・若干想・不觀色・心患[を生ぜば]彼心清淨を得、有覺有觀定を修學して

を生ぜざらんと。阿那律陀、我この患を起さざらんと欲せしが故に、すなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に、すなはち光明を得て色を見ぬ。阿那律陀、若し我が心疑患を生ぜば彼心淸淨を得。無念・身病想・睡眠・太精勤・太懈怠・恐怖・喜悅・高心・生・若干想・不觀色心患[を生ぜば]、彼心淸淨を得、阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我當に三定を修學し、有覺有觀定を修學し、無覺少觀定を修學し無覺無觀定を修學すべしと。阿那律陀、我すなはち三定を修學し有覺有觀定を修學し無覺少觀定を修學し無覺無觀定を修學しぬ。若し我有覺有觀定を修學すれば心すなはち無覺少觀定に順向す。是の如く我必ずこの智見を失はずと、阿那律陀、是の如く我是の如きを知り已りて竟日竟夜、竟日夜、有覺有觀定を修學しぬ。阿那律陀、我その時これを行じ住止して行じぬ。若し我有覺有觀定を修學すれば心すなはち無覺無觀定に順向す、是の如く我必ずこの智見を失はずと、阿那律陀、是の如く我是の如きを知り已りて竟日竟夜、竟日夜有覺有觀定を修學しぬ。阿那律陀、我その時これを行じ、住止して行じぬ。阿那律陀、若し我無覺少觀定を修學すれば心すなはち有覺有觀定に順向す。是の如く我必ずこの智見を失はずと、阿那律陀、是の如く我是の如きを知り已りて竟日竟夜、竟日夜無覺少觀定を修學しぬ。阿那律陀、我その時これを行じ、住止して行じぬ。若し我、無覺少觀定を修學すれば心すなはち無覺無觀定に順向す。是の如く我必ずこの智見を失はずと、阿那律陀、是の如く我是の如きを知り已りて竟日竟夜、竟日夜無覺少觀定を修學しぬ。阿那律陀、我その時これを行じ住止して行じぬ。阿那律陀、若し我無覺無觀定を修學すれば心すなはち有覺有觀定に順向す。是の如く我必ずこの智見を失はずと、阿那律陀、是の如く我是の如きを知り已りて竟日竟夜、竟日夜無覺無觀定を修學しぬ。阿那律陀、我その時これを行じ、住止して行じぬ。若し我無覺無觀定を修覺すれば心すなはち無覺少觀定に順向す。是の如く我この智見を失はずと、阿那律陀、是の如く我是の如きを知り已りて竟日竟夜、竟日夜無覺無觀定を修

眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我今要ず當にこの念を作すべし。我が心中疑患を生ぜず無念患を生ぜず身病想患を生ぜず睡眠患を生ぜず太精勤患を生ぜず太懈怠患を生ぜず恐怖患を生ぜず喜悅患を生ぜず、また自高心患を生ぜざらんと。阿那律陀、我この患を起さざらんと欲せるが故に、すなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に、すなはち光明を得て色を見ぬ。彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中何の患有りて我をして定を失して眼を滅せしめ、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅するやと。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中(10)若干想患を生ず。この若干想患に因るが故に、すなはち定を失して眼を滅し、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我今要ず當にこの念を作すべし、我が心中疑患を生ぜず無念患を生ぜず、身病想患を生ぜず睡眠患を生ぜず太精勤患を生ぜず太懈怠患を生ぜず、恐怖患を生ぜず喜悅患を生ぜず自高心患を生ぜず、亦若干想患を生ぜざらんと。阿那律陀、我この患を起さざらんと欲せるが故にすなはち遠離獨住に在りて、心放逸無く修行精勤しぬ。遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に、すなはち光明を得て色を見ぬ。彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中何の患有りて我をして定を失して眼を滅せしめ、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅するやと。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中(11)不觀色患を生ず。この不觀色患に因るが故に、すなはち定を失して眼を滅し、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我今要ず當にこの念を作すべし、我が心中疑患を生ぜず無念患を生ぜず身病想患を生ぜず睡眠患を生ぜず太精勤患を生ぜず太懈怠患を生ぜず恐怖患を生ぜず喜悅患を生ぜず亦自高心患を生ぜず若干想患を生ぜず、亦不觀色患

(10)若干想(Nānattasaññā)。

(11)不觀色患。

く阿那律陀、我が心中恐怖患を生ず。この恐怖患に因るが故に、すなはち定を失して眼を滅し、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我今要ず當にこの念を作すべし、我が心中疑患を生ぜず無念患を生ぜず身病想患を生ぜず睡眠患を生ぜず、太精勤患を生ぜず太懈怠患を生ぜず、亦恐怖患を生ぜざらんと。阿那律陀、我この患を起さざらんと欲するが故に、すなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に、すなはち光明を得て色を見ぬ。彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中何の患有りて我をして定を失して眼を滅せしめ、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅するやと。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中(8)喜悅患を生ず、この喜悅患に因るが故に、すなはち定を失して眼を滅し、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、猶ほ若し人本一寶藏を求め頓に四寶藏を得、彼見已りてすなはち悅歡喜を生ずるが如し。是の如く阿那律陀、我が心中喜悅患を生ず。この喜悅患に因るが故に、すなはち定を失して眼を滅し、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我今要ず當にこの念を作すべし、我心中疑患を生ぜず無念患を生ぜず身病想患を生ぜず睡眠患を生ぜず太精勤患を生ぜず太懈怠患を生ぜず、恐怖患を生ぜず亦喜悅患を生ぜざらんと。阿那律陀、我この患を起さざらんと欲せるが故に、すなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に、すなはち光明を得て色を見ぬ。彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中何の患有りて我をして定を失して眼を滅せしめ、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅するやと。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中(9)自高心患を生ず。この自高心患に因るが故に、すなはち定を失して眼を滅し、

(8)喜悅患(Ubbilla)。

(9)自高心患。

眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我今要ず當にこの念を作すべし、我が心中疑患を生ぜず無念患を生ぜず身病想患を生ぜず睡眠患を生ぜず、亦過精勤患を生ぜざらんと。阿那律陀、我この患を起さざらんと欲するが故にすなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故にすなはち光明を得て色を見ぬ。彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我またこの念を作しぬ。我が心中何の患有りて我をして定を失して眼を滅せしめ、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼見色光明尋いでまた滅するやと。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中(6)太懈怠患を生ず。この太懈怠患に因るが故に、すなはち定を失して眼を滅し、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、猶ほ力士蠅を捉ふるに太だ緩なれば蠅すなはち飛び去るが如し。阿那律陀、我が心中太懈怠患を生ず。この太懈怠患に因るが故に、すなはち定を失して眼を滅し、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我今要ず當にこの念を作すべし、我が心中疑患を生ぜず、無念患を生ぜず、身病想患を生ぜず、睡眠患を生ぜず、太精勤患を生ぜず、亦太懈怠患を生ぜざらんと。阿那律陀、我この患を起さざらんと欲するが故に、すなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に、すなはち光明を得て色を見ぬ。彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中何の患有りて我をして定を失して眼を滅せしめ、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅するやと。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中(7)恐怖患を生ず。この恐怖患に因るが故にすなはち定を失して眼を滅し、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、猶ほ人の道を行くに四方に、怨賊有りて來り、彼の人見已りて畏懼恐怖し擧身毛竪つが如し。是の如

(6)太懈怠患(Atilinaviriya)。

(7)恐怖患(Chambhitatta)。

しぬ、我が心中何の患有りて我をして定を失して眼を滅せしめ、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明相尋いでまた滅するやと。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中(3)身病想患を生ず。この身病想患に因るが故にすなはち定を失して眼を滅し、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我今要ず當にこの念を作すべし、我が心中疑患を生ぜず無念患を生ぜず、亦身病想患を生ぜざらんと。阿那律陀、我この患を起さゞらんと欲するが故にすなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に、すなはち光明を得て色を見ぬ。彼の見色光明、尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中何の患有りて我をして定を失して眼を滅せしめ、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅するやと。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中(4)睡眠患を生ず。この睡眠患に因るが故にすなはち定を失して眼を滅し、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我今要ず當にこの念を作すべし、我が心中疑患を生ぜず無念患を生ぜず身病想患を生ぜず、亦睡眠患を生ぜざらんと。阿那律陀、我この患を起さざらんと欲するが故に、すなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故にすなはち光明を得て色を見ぬ。彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中何の患有りて、我をして定を失して眼を滅せしめ、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅するやと。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中(5)過精勤患を生ず。この過精勤患に因るが故に、すなはち定を失して眼を滅し、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、猶ほ力士蠅を捉ふるに太だ急なれば蠅即便ち死するが如し。是の如く阿那律陀、我が心中過精勤患を生ず。この過精勤患に因るが故に、すなはち定を失して眼を滅し、

(3)身病想患。

(4)睡眠患(Thīnamiddha)。

(5)過精勤患 (Accāraddha-viriya)。

一し人上の法の而も差降有るを得、安樂に住止す。世尊、我等光明を得てすなはち色を見、彼の色光明尋いでまた滅するを見る』世尊告げて曰はく『阿那律陀、汝等この相に達せず。謂く相は光明を得て色を見ば彼色光明尋いでまた滅するを見る。阿那律陀、我本未だ無上正眞道を覺るを得ざりし時、亦光明を得て色を見ぬ。彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我この念を作しぬ、我が心中何の患有りて我をして定を失して眼を滅せしめ、眼滅し已りて、我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅するやと。阿那律陀、我精勤を行じて懈怠無く身止住し正念正智有り愚癡有ること無く定一心を得ぬ。阿那律陀、我この念を作しぬ、我精勤を行じて懈怠無く身止住し正念正智有り、愚癡有ること無く定一心を得。若し世中、道無くば我見るべく、彼を知るべきやと。我が心中この(1)疑患を生じぬ。この疑患に因るが故にすなはち定を失して眼を滅し、眼を滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我今要ず當にこの念を作すべし。我が心中疑患を生ぜざらんと。阿那律陀、我この患を起さゞらんと欲するが故に、すなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精懃しぬ。遠離獨住に在りて心放逸無く修行精懃に因るが故にすなはち光明を得て色を見ぬ。彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我またこの念を作しぬ。我が心中何の患有りて我をして定を失して眼を滅せしめ、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅するやと。阿那律陀、我またこの念を作しぬ、我が心中(2)無念患を生ず。この無念患に因るが故にすなはち定を失して眼を滅し、眼滅し已りて我本得し所の光明と見色と、彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我今要ず當にこの念を作すべし、我が心中疑患を生ぜず無念患を生ぜざらんと。阿那律陀、我この患を起さゞらんと欲するが故に、すなはち遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤せるに因るが故に、すなはち光明を得て色を見ぬ。彼の見色光明尋いでまた滅しぬ。阿那律陀、我またこの念を作

(1) 疑患(Vicikicchā)。

(2) 無念患(Amanasikāra)。

善逝來りたまふ』。尊者阿那律陀出で、世尊を迎へ佛の衣鉢を攝り、尊者難提佛の爲に床を敷き、尊者金毘羅佛の爲に水を取りぬ。その時世尊手足を洗ひ已りて彼の尊者の敷きし所の座に坐したまひぬ。坐し已りて問ひて曰はく『阿那律陀、汝常に安隱にして乏しき所無きや』。尊者阿那律陀白して曰く『世尊、我常に安隱にして乏しき所有ること無し』。世尊また阿那律陀に問ひたまはく、『云何が安隱にして乏しき所無きや』。尊者阿那律陀白して曰く『世尊、我この念を作す、我善利有り大功德有り。謂く我是の如き梵行[者]と共に行ずと。世尊、我常に彼の梵行[者]に向ひて慈身業を行じ、見と不見と等しく異有ること無し。慈口業を行じ、慈意業を行じ、見と不見と等しく異有ること無し。世尊、我この念を作す、我今寧ろ自ら己心を捨て彼の諸賢の心に隨ふべしと。世尊、我すなはち自ら己心を捨て彼の諸賢の心に隨ひぬ。世尊、我未だ曾て一不可心有らず。世尊、是の如く我常に安隱にして乏しき所有ること無し』。尊者難提に問ひたまへるに答ふること亦是の如し。また尊者金毘羅に問ひて曰はく、『汝常に安隱にして乏しき所無きや』。尊者金毘羅白して曰く『世尊、我常に安隱にして乏しき所有ること無し』。問ひて曰はく『金毘羅、云何が安隱にして乏しき所無きや』。尊者金毘羅白して曰く『世尊、我この念を作す、我善利有り大功德有り、謂く我是の如き梵行[者]と共に行ずと、世尊我常に彼の梵行[者]に向ひて慈身業を行じ見と不見と等しく異有ること無く、慈口業を行じ、慈意業を行じ見と不見と等しく異有ること無し。世尊、我この念を作す。我今寧ろ自ら己心を捨て彼の諸賢の心に隨ふべしと。世尊、我すなはち自ら己心を捨て彼の諸賢の心に隨ふ。世尊、我未だ曾て一不可心有らず。世尊、是の如く我常に安隱にして乏しき所有ること無し』。世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉。阿那律陀、是の如く汝等常に共に和合し安樂にして諍無く、一心一師にして水乳を合一す。頗し[三四]人上の法而も差降有るを得、安樂に住止するや』。尊者阿那律陀白して曰く『世尊、是の如し、我等常に共に和合し安樂にして諍無く一心一師にして水乳を合

【三四】人上之法而有差降(Uttarimanussadhamma-dhammariyañāṇadassanavisesa)『雜阿含』に「過人法究竟知見」といへるもの、出世間の法。

一象、象と等しく身を成し牙を具足す、心、心と等しきを以て獨り林に住するを樂しむが若し。

こゝに於て世尊護寺林より衣を攝り鉢を持して[一九]般那蔓闍寺林に往至したまひぬ。その時般那蔓闍寺林に三族姓子有りて共に中に在りて住しぬ。[二〇]尊者阿那律陀・[二一]尊者難提・尊者[二二]金毘羅なり。彼の尊者等所行是の如し。若し彼乞食し、前に還る者有ればすなはち床を敷き水を汲み、洗足器を出し、洗足蹬及び拭脚巾・水瓶・澡罐を安じ、若し乞ひし所の食能く盡く食すればすなはち盡くこれを食し若し餘有れば器に盛りて覆擧し、食し訖りて鉢を收め手足を澡洗し尼師檀を以て肩上に著け室に入りて宴坐しぬ。若し彼乞食し、後に還る者有れば、能く盡く食すれば亦盡くこれを食し若し足らざれば前の餘食を取りて足るまでこれを食し、若し餘有ればすなはち瀉して淨地及び蟲無き水中に著け、彼の食器を取りて淨洗し拭き已りて擧して一面に著き、床席を收卷し洗足蹬を斂め拭脚巾を收め洗足器及び水瓶澡罐を擧げ食堂を掃灑し糞を除淨し已りて衣鉢を收擧し手足を澡洗し尼師檀を以て肩上に著け室に入りて宴坐しぬ。彼の尊者等晡時に至り若し先に宴坐より起つ者有れば水瓶澡罐空しく水有ること無きを見て、すなはち持ち行きて取り、若し能く勝ふればすなはち擧げ持ちて來りて一面に著き、若し勝ふること能はざれば、則便ち手を以て一比丘を招き兩人共に擧げ持ちて一面に著き、各相語らず各相問はず。彼の尊者等五日に一たび集まり或は共に說法し或は聖默然たり。こゝに於て守林の人遙かに世尊の來るを見、逆へて訶止して曰く『[二三]沙門、沙門、この林に入ること莫れ。所以者何。今この林中に三族姓子有り、尊者阿那律陀・尊者難提・尊者金毘羅なり。彼若し汝を見ば或は不可有らん』。世尊告げて曰く『汝守林の人、彼若し我を見ば必ず可にして不可無けん』。こゝに於て尊者阿那律陀遙かに世尊の來たまふを見て、即ち彼を訶して曰く『汝守林の人、世尊を訶すること莫れ。汝守林の人、善逝を止むること莫れ。所以者何。これ我が尊來り、

【一九】般那蔓闍寺林(Pācīnavaṁsadāya)。
【二〇】阿那律陀(Anuruddha)。
【二一】難提(Nandiya)。
【二二】金毘羅(Kimbila)。
【二三】釋尊を呼びていふなり。

共に會ふこと勿れ。學びて善友を得ず、己と等しからざれば　常に意を堅くして獨り住すべし。　惡と共に會ふこと勿れ。

その時世尊この頌を說き已りて卽ち如意足を以て虛に乘りて去り婆羅樓羅村に至りたまひぬ。こゝに於て婆羅樓羅村に尊者婆咎釋家子有りて晝夜眠らず精勤して道を行じ志行常に定まりて道品[16]法に住す。尊者釋家子遙かに佛の來りたまふを見、見已りて往きて迎へ佛の衣鉢を攝り佛の爲に床を敷き水を汲みて足を洗ひぬ。佛足を洗ひ已りて尊者釋家子婆咎の座に坐したまひ、坐し已りて告げて曰はく『婆咎比丘、汝常に安隱にして乏しき所無きや。』尊者釋家子婆咎白して曰く、『世尊、我常に安隱にして乏しき所有ること無し』。世尊また婆咎比丘に問ひたまはく『云何が安隱にして乏しき所無きや』。尊者婆咎白して曰く『世尊、我晝夜眠らず精勤して道を行じ、志行常に定まりて道品法に住す。世尊、是の如く我常に安隱にして乏しき所有ること無し』。世尊また念じたまひぬ『この族姓子遊行安樂なり。我今寧ろ彼の爲に法を說くべし』。この念を作し已りてすなはち尊者婆咎の爲に法を說き・勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて坐より起ち去りて[17]護寺林に往至し護寺林中に入りて一樹下に至り尼師檀を敷きて結跏趺坐し、世尊また念じたまひぬ『我已に彼の拘舍彌の諸の比丘輩を脫するを得ぬ。數々鬪諍し相伏し相憎み相瞋りて共に諍ふ。我彼の方を念ずるを喜ばず。謂く拘舍彌の諸の比丘輩の所住處なり』。その時に當り一大象有りて衆象の王たり。彼象衆を離れて獨り遊行し亦護寺林に至り護寺林中に入り、[18]賢婆羅樹に至り賢婆羅樹に倚りて立ちぬ。その時大象而もこの念を作しぬ『我已に彼の群象輩を脫するを得ぬ。牝象・牡象・大小象子、彼の群象輩常に前に在りて行き、草これが爲に蹋まれ水これが爲に渾る。我その時に於て彼の蹋まれたる草を食し渾濁せる水を飲みぬ。我今新草清水を飲食す』。こゝに於て世尊他心智を以て彼の大象の心の念ずる所を知りて卽ち頌を說きて曰く、

【一六】 道品法(Bodhipakkhiyā dhammā) 四神足・四念處・四正勤・五根・五力・七覺支・八聖道の三十七助道品をいふ。

【一七】 護寺林 (Rakkhitavanasaṇḍa)。

【一八】 賢沙羅樹(Bhaddasāla)。

を見んと欲せば即ちこれ、これなり。汝等惡意を起してこの童子に向ふこと莫れ。所以者何。この童子の所作甚だ難し。我に命を惠與すと。こゝに於て加赦國王梵摩達哆、王の沐浴を以て長生童子を浴せしめ、塗るに王の香を以てし、衣するに王の服を以てし金の御床に坐せしめ、女を以てこれに妻し、その本國を還す。比丘、彼これ國王刹利頂生王にして大國主と爲り天下を整御し自ら忍辱を行じ、また忍を稱歎し自ら慈心を行じ、また慈を稱歎し自ら恩惠を行じ、また恩惠を稱す。諸の比丘、汝亦應に是の如くなるべし。至信に家を捨て家無くして學道し當に忍辱を行じまた忍を稱歎し、自ら慈心を行じまた慈を稱歎し、自ら恩惠を行じまた恩惠を稱すべし』。こゝに於て諸の比丘佛の所説を聞きてこの言を作せる有り、『世尊法主今且く住し、彼我を導説す。我那んぞ彼を導説せざるを得ん』。こゝに於て世尊拘舍彌の諸の比丘の所行・威儀・禮節・所學・所習を悅可せられず即ち坐より起ちて頌を説きて曰はく、

〔一三〕若干の言語を以て最尊衆を破壞す。　聖衆を破壞する時、　能く訶止する有ること無し。　身を碎き命を斷ずるに至り象牛馬財を奪ひ　國を破り滅亡して盡くるも彼猶ほ故「の如く」和解す。　〔一四〕況や汝小言もて罵りて和合を制すること能はず。　若し眞義を思はざれば怨結焉んぞ息むを得ん。　罵詈責數して説きて而も能く和合を制す。　若し眞實の義を思へば怨結必ず息むを得ん。　若し諍を以て諍を止むれば至竟止められず。　唯忍能く諍を止む。　この法尊貴すべし。　瞋りて慧眞の人に向ひ口に無賴の言を説き　牟尼聖を誹謗するはこれ下賤非智なり。他人義を解せず唯我獨り能く知る。　若し能く義を解する有れば彼の恚すなはち息むを得ん。
〔一五〕若し定んで侶と爲るを得ば慧者共に善を修し、　本の所執の意を捨て歡喜して常に相隨ふ。若し定んで伴を得ざれば慧者獨り善を修す。　王の國を嚴治するが如く象の獨り野に在るが如し。　獨り行ひて惡を爲すこと莫れ。　象の獨り野に在るが如く　獨り行ひて善勝を爲し惡と

〔一三〕Vin. i. 349.
〔一四〕Dhammapada 3, 4, 5. Jat. iii. 212.
〔一五〕Dhammapada, 328, 329. Sutta-nipāta, 45, 46.

恐怖して身毛皆竪ち、すなはち疾かに驚き寤め、起きて長生博士に語ぐ、汝今當に知るべし、我夢中に於て拘娑羅國王長壽の兒長生童子手に利刀を拔き我が頸上に著けてこの言を作すを見る、我今汝を殺さん、我今汝を殺さんと。長生博士聞き已りて白して曰く、天王、怖るゝこと勿れ。天王怖るゝこと勿れ。所以者何。彼の拘娑羅國王長壽の兒長生童子は卽ち我が身是なり。天王、我この念を作す、加赦國王梵摩達哆酷暴無道なり。彼我が父なる、過無きの人を取らへ、その國・倉庫・財物を奪取し怨酷に枉殺し斬りて七段と作す。而も今日已に我が手に在り。但當に怨を報ずべしと。天王、我利刀を拔き王の頸上に著けてこの語を作す、我今汝を殺さん、我今汝を殺さんと。天王、我またこの念を作す、我不是爲り。所以者何。父昔日標下に在りし時終に臨みて我に語げしを憶ふ、童子、忍ぶべし。童子、忍ぶべし。怨結を起すこと莫れ。但當に慈を行ずべしと。憶ひ已りて刀を擧げ還た鞘中に內ると。加赦國王梵摩達哆語げて曰く、童子、汝この說を作す、童子、忍ぶべし。童子、忍ぶべしと。我已にこの義に和す。童子、又言ふ、怨結を起すこと莫れ、但當に慈を行ずべしとはこれ何の義を謂ふぞやと。長生童子答へて曰く、天王、怨結を起すこと莫れ。但當に慈を行ずべしとは卽ちこれを謂ふなりと。加赦國王梵摩達哆聞き已りて語げて曰く、童子、今日より始めて我が所領の國盡く以て相與へ、汝の父の本國を還し持つて卿に付せん。所以者何。汝の所作甚だ難し。乃ち我に命を惠むと。長生童子聞き已りて白して曰く、天王の本國は自ら天王に屬す。我が父の本國は以て還さるべしと。こゝに於て加赦國王梵摩達哆長生童子と共に載りて還歸し、波羅棕城に入り正殿上に坐して諸臣に告げて曰く、卿等、若し拘娑羅國王長壽の兒長生童子を見ば當に云何にすべきやと。諸臣聞き已りて白して曰ふ有り。天王、若し彼を見ば當にその手を截るべしと。或はまたこの語を作す、天王、若し彼を見ば當にその足を截るべしと。或はまたこの語を作す、當にその命を斷ずべしと。加赦國王梵摩達哆諸臣に告げて曰く、卿等、拘娑羅國王長壽の兒長生童子

哆聞きて、すなはち呼び見る。こゝに於て長生博士卽ち加赦國王梵摩達哆の所に往詣し彼に向ひて立ち歡悅せる顏色を以て妙音伎を作す。是の如くして加赦國王梵摩達哆聞き已りて極めて大いに歡喜して自ら娛樂す。こゝに於て加赦國王梵摩達哆告げて曰く、博士、汝今日より我に依りて住すべし。當に相供給すべしと。こゝに於て長生博士卽ち彼に依りて住す。加赦國王梵摩達哆卽ちこれに供給し、後遂に信任し一に以て委付し卽ち衛身の刀劍を持つて長生博士に授與す。その時加赦國王梵摩達哆すなはち御者に勅す、汝駕を嚴るすべし。我出獵せんと欲すと。御者敎を受けて卽便ち駕を嚴り訖り還りて白して曰く、嚴駕已に辦じぬ。天王の意に隨ひたまへと。こゝに於て加赦國王梵摩達哆すなはち長生博士と共に車に乘りて出づ。長生博士卽ちこの念を作す、この加赦國王梵摩達哆酷暴無道なり。彼我が父拘娑羅國王長壽なる過無きの人を取らへ、その國・倉庫・財物を奪取し怨酷に枉殺し、斬りて七段と作す。我今寧ろ車を御して四種の軍衆を離れ各々異處に在らしむべしと。長生博士この念を作し已りて卽便ち車を御して四種の軍を離れ各々異處に在らしむ。彼の時加赦國王梵摩達哆塗路を冒涉し風熱に逼られ煩悶渴乏し、疲極まりて臥せんと欲し、卽便ち車を下りて長生[二]博士の膝に枕して眠る。こゝに於て長生博士またこの念を作す、この加赦國王梵摩達哆酷暴無道なり。彼我が父なる、過無きの人を取らへその國・倉庫・財物を奪取し怨酷に枉殺し斬りて七段と作す。然るに今日已に我が手に有り。但當に怨を報ずべしと。長生博士この念を作し已りて卽ち利刀を拔き、加赦國王梵摩達哆の頸上に著けてこの語を作す、我今汝を殺さん、我今汝を殺さんと。長生博士またこの念を作す、我不是爲り。所以者何。父昔日標下に在りし時終に臨みて我に語げしを憶ふ。童子、忍ぶべし。童子、忍ぶべし。怨結を起すこと莫れ。但當に慈を行ずべしと。憶ひ已りて刀を擧げ還鞘中に內る。彼の時加赦國王梵摩達哆夢に拘娑羅國王長壽の兒長生童子手に利刀を拔き、我が頸上に著けてこの言を作すを見る、我今汝を殺さん。我今汝を殺さんと。見已りて

【二】大正藏本、「長生煩博士」に作る。

と。左右教を受けて卽便ち速かに往きて長壽王を殺し斬りて七段と作す。こゝに於て長生童子波羅㮈城中の諸の貴豪族に勸めてこの語を作す、諸君こゝを看よ、加赦國王梵摩達哆酷暴無道なり。彼我が父拘娑羅國王長壽なる、過無きの人を取らへその國・倉庫財物を奪取し、怨酷に枉殺し斬りて七段と作しぬ。諸君、往きて新繒疊を以て我が父を收斂し七段の屍を取り一切の香・香木を以て積聚してこれを闍維し廟堂に立ちて我が爲に書を作り梵摩達哆に與へて言ふべし、拘娑羅國王長生童子、彼この語を作す、汝後に子孫の爲に患を作すを畏れざるやと。こゝに於て波羅㮈の諸の貴豪族長生童子の爲に勸められ新繒疊を以て卽ち往きて彼の七段の屍を斂取し、一切の香・香木を以て積聚してこれを闍維し、爲に廟堂に立ち亦爲に書を作り梵摩達哆に與へて言はく、拘娑羅國王長生童子彼この語を作す、汝後に子孫の爲に患を作るを畏れざるやと。こゝに於て長壽王の妻長生童子に告げて曰く、汝當に知るべし、この加赦國王梵摩達哆酷暴無道なり。彼汝の父拘娑羅國王長壽なる過無きの人を取らへその國・倉庫・財物を奪取し、怨酷に枉殺し斬りて七段と作す。童子、汝來れ、共に一車に乘りて走り波羅㮈を出でん。若し去らざれば禍將に汝に及ばんとすと。こゝに於て長壽王の妻長生童子と共に一車に乘り走りて波羅㮈を出づ。その時長生童子是の如き念を作す、我寧ろ村々邑々に往至し學を受け博聞すべしと。長生童子この念を作し已りてすなはち村々邑々に往至し學を受け博聞す。博聞を以ての故に卽ち名を轉じて長生博士と爲る。長生博士またこの念を作す、學と爲す所は我今已に得。我寧ろ波羅㮈都邑中に往き街々巷々に住まり歡悅の顏色を以て妙音伎を作すべし。是の如くすれば波羅㮈の諸の貴豪族聞き已りて當に大いに歡喜して自ら娛樂すべしと。長生博士この念を作し已りて、すなはち波羅㮈都邑中に往至し街々巷々に住まり歡悅の顏色をもて妙音伎を作す。是の如くして波羅㮈の諸の貴豪族聞き已りて極めて大いに歡喜し自ら娛樂す。こゝに於て加赦國王梵摩達哆の外眷屬聞き、中眷屬・內眷屬・梵志國師展轉し、乃至加赦國王梵摩達

【二】荼毘卽ち火葬なり。

下を整御し大國土を得、種々の伎藝・乘象・騎馬・調御馳騁・射戲・手搏・擲羂・擲鉤・乘車・坐輦、是の如き種々諸の妙伎藝皆善くこれを知り若干種の妙觸事殊に勝れ猛毅世を超え聰明挺出し幽微隱遠にして摶く達せざる無し。こゝに於て梵摩達哆拘娑羅國王長壽、彼博士と作り名を轉じてこの波羅㮈城中に在りと聞く。梵摩達哆卽ち左右に勅す、卿等速かに往きて拘娑羅國王長壽を收め兩手を反縛し彼をして驢に騎らしめ敗鼓の聲驢の鳴くが如きを打破し遍く宣令し已りて[九]城南門より出でゝ高標の下に坐せしめその辭を詰問せよと。左右敎を受けて卽便ち往きて拘娑羅國王長壽を收め兩手を反縛し彼をして驢に騎らしめ、敗鼓の聲驢の鳴くが如きを打破し遍く宣令し、已りて城南門より出でゝ高標の下に坐せしめその辭を詰問す。この時長生童子尋ねて父の後に隨ひ或は左右に在りて父に白して曰く、天王怖るゝこと勿れ、天王怖るゝこと勿れ。我卽ちこゝに於て必ず能く拔濟せん。必ず能く拔濟せんと。拘娑羅王長壽告げて曰く、童子、忍ぶべし。童子、忍ぶべし。怨詰を起すこと莫れ、但當に慈を行ずべしと。衆人長壽王而もこの語を作すを聞き、すなはち王の道ふ所何等なるかを問ふ。王衆人に答へて曰く、この童子聰明なり、必ず我が語を解かんと。その時長生童子波羅㮈城中の諸の貴豪族に勸む、諸君、施を行じ福を修し拘娑羅國王長壽の爲に呪願せよ、この施福を以て願はくは拘娑羅國王長壽安隱にして解脫を得しめよと。こゝに於て波羅㮈城中の諸の貴豪族長生童子の爲に勸められ、施を行じ福を修し拘娑羅國王長壽の爲に呪願す、この施福を以て願はくは拘娑羅國王長壽安隱にして解脫を得しめよと。加赦國王梵摩達哆この波羅㮈の諸の貴豪族施を行じ福を修し拘娑羅國王長壽の爲に、この施福を以て願はくは拘娑羅國王長壽をして安隱にして[一〇]解脫を得しめよと呪願するを聞き、聞きて卽ち大いに怖れ身毛皆竪つ。この波羅㮈城中の諸の貴豪族をして我に反せしむること莫きや。且らく彼の事を置き我今急に當に先づこの事を滅すべしと。こゝに於て加赦國王梵摩達哆左右に敎勅す、汝等速かに去りて拘娑羅國王長壽を殺し斬りて七段と作せ

【九】四卷「破羅牢經」參照。

【一〇】大正藏本これを「加脫」に作る。

に何に由りて四種の軍もて鹵簿を陣列し白露刄を抜き徐庠して過ぎしむるを得、我遍く観んと欲し亦また磨刀水を得て飲まんと欲すべきやと。妻また我に白して曰く、尊、若し能く得れば我活望有り、若し得ざれば必ず死すること疑無けんと。尊者、妻全からざれば我亦理無しと。梵志國師問ひて曰く、博士、汝の妻見るを得べきや不やと。白して曰く、尊者、見るを得べしと。こゝに於て梵志國師長壽博士を將ゐて妻の所に往至す。この時長壽王の妻有徳の子を懐く。梵志國師長壽博士の妻有徳の子を懐けるを見るが故に、すなはち右膝を以て地に跪き叉手を長壽博士の妻に向け、再び三たび稱說す、拘娑羅國王生ず、拘娑羅國王生ずと。左右に敎勅して曰く、人をして知らしむること莫れと。梵志國師告げて曰く、博士、汝憂慼すること勿れ。我能く汝が妻をして四種の軍もて鹵簿を陣列し白露刄を抜き徐庠して過ぐるを見るを得しめん。亦能く磨刀水を得て飲むを得しめんと。こゝに於て梵師國師加赦國王梵摩達哆の所に往詣し、到り已りて白して曰く、天王、當に知りたまふべし。徳星現るゝ有り。唯願はくは天王、四種の軍を嚴にし鹵簿を陣列し白露刄を抜き徐庠して導引し出でゝ軍威を曜かし水を以て刀を磨きたまへ。唯願はくは天王自ら出でゝ觀視したまへ。天王、若しこれを作さば必ず吉應有らんと。加赦國王梵摩達多卽ち主兵臣に勅す、卿今當に知るべし、徳星現るゝ有り。卿宜しく速かに四種の軍を嚴にし鹵簿を陣列し白露刄を抜き徐庠して導引し出でて軍威を曜かし水を以て刀を磨くべし。我自ら出でゝ觀ん。若しこれを作さば必ず吉應有らんと。時に主兵臣卽ち王の敎を受け四種の軍を嚴にし鹵簿を陣列し白露刄を抜き徐庠して導引し出でゝ軍を曜かし水を以て刀を磨く。梵摩達哆卽ち自ら出でゝ觀る。これに因りて長壽王の妻四種の軍もて鹵簿を陣列し白露刄を抜き徐庠して導引し出でゝ軍威を曜かすを見、幷びに亦また磨刀水を得て飲むを得、磨刀水を飲み已りて憂慼卽ち除き尋いで徳子を生む。すなはち爲に字を作りて長生童子と名け、人に寄せて密かに養ひ漸く已に長大す。長生童子若しこれ利利頂生王なれば天

【八】長生童子(Dīghāyu)。

妙音伎を作す。梵志國師聞き已りて極めて大いに歡喜して自ら娛樂す。こゝに於て梵志國師長壽博士に告ぐ、汝今日より我に依りて住すべし、當に相供給すべしと。長壽博士白して曰く、尊者、我一妻有り、當にこれを如何にすべきと。梵志國師報へて曰く、博士、汝將來して我が家に依りて住すべし。當にこれに供給すべしと。こゝに於て長壽博士卽ちその妻を將ゐて梵志國師の家に依りて住し、梵志國師は卽便ち彼に供給しぬ。後時に於て長壽博士の妻、心憂慼を懷き是の如き念を作す、四種の軍もて鹵簿を陣列し白露刄を拔き徐庠して過ぎしめんと欲す。我遍く觀んと欲す。亦また磨刀水を得て飮まんと欲すと。長壽博士の妻この念を作し、已りてすなはち長壽博士に白す、我が心憂慼を懷き、是の如き念を作す、四種の軍もて鹵簿を陣列し白露刄を拔きて徐庠して過ぎしめんと欲す。我遍く觀んと欲す。亦また磨刀水を得て飮まんと欲すと。長壽博士卽ち妻に告げて曰く、卿この念を作すこと莫れ。所以者何。我等今梵摩達哆王の爲に破壞せらる。卿當に何に由りて四種の軍もて鹵簿を陣列し白露刄を拔きて徐庠して過ぐるを見、我遍く觀んと欲し亦また磨刀水を得て飮まんと欲するを得べきやと。妻また白して曰く、尊、若し得れば我活望有り、若し得ざれば必ず死すること疑無けんと。長壽博士卽便ち梵志國師の所に往詣し彼に向ひて立ち顏色愁慘惡徵聲を以て諸の音伎を作す。梵志國師聞き已りて歡喜するを得ず。こゝに於て梵志國師問ひて曰く、博士、汝本我に向ひて立ち歡悅の顏色を以て妙音伎を作し、我聞き已りて極めて大いに歡喜して自ら娛樂しぬ。汝今何を以て我に向ひて立ち顏色愁慘惡徵聲を以て諸の音伎を作すや。我聞き已りて歡喜するを得ず。長壽博士、汝身に疾患無く、意に憂慼無きやと。長壽博士白して曰く、尊者、我身に患無し。但意に憂慼有るのみ、尊者、我が妻心憂慼を懷き是の如き念を作す、我四種の軍もて鹵簿を陣列するを得、白露刄を拔き、徐庠して過ぎしめんと欲す。我遍く觀んと欲す。亦また磨刀水を得て飮まんと欲すと。我卽ち妻に報へて曰く、卿この念を作すこと莫れ。所以者何。我今此の如し。卿當

軍・歩軍を興し、四種の軍を興し已りてまた自ら軍を引き往きて拘娑羅國王長壽と共に戰ふ。拘娑羅國王長壽、加赦國王梵摩達哆また四種の軍・象軍・馬軍・車軍・歩軍を興し、四種の軍を興し已りて來りて我と戰ふと聞く。拘娑羅國王長壽聞き已りてすなはちこの念を作す、我已に彼に剋つ。何ぞまた剋つを須ひん。我已に彼を伏す。何ぞ更に伏するに足らん。我已に彼を害す。何ぞまた害するを須ひん。但空弓を以て能く彼を伏するに足ると。拘娑羅國王長壽この念を作し已りて晏然としてまた四種の軍・象軍・馬軍・車軍・歩軍を興さず、亦自ら往かず。こゝに於て加赦國王梵摩達哆來りてこれを破るを得、盡く拘娑羅國王長壽の四種の軍衆、象軍・馬軍・車軍・歩軍を奪取す。こゝに於て拘娑羅國王長壽、加赦國王梵摩達哆來りて盡く我が四種の軍衆、象軍・馬軍・車軍・歩軍を奪取すと聞き已りてまたこの念を作す、鬪は甚奇たり鬪は甚惡なり。所以者何。剋たば當にまた剋つべし。伏さば當にまた伏すべし。害さば當にまた害すべし。我今寧ろ獨り一妻を將ゐて共に一車に乘り、走りて波羅㮈に至るべしと。こゝに於て拘娑羅國王長壽即ち獨り妻を將ゐて共に一車に乘り走りて波羅㮈に至る。拘娑羅國王長壽またこの念を作す、我今寧ろ村々邑々に至りて學を受け博聞すべしと。拘娑羅國王長壽この念を作し已りて、即便ち往きて村々邑々に至り學を受け博聞す。博聞を以ての故に即ち轉名して長壽博士と爲る。長壽博士またこの念を作す、學と爲す所の者は我今已に得たり。我寧ろ波羅㮈都邑中に往き街々巷々に住まりて歡悅の顏色を以て妙音伎を作すべし。是の如くすれば波羅㮈の諸の貴豪族聞き已りて、當に極めて歡喜して自ら娛樂すべしと。長壽博士この念を作し已りて、すなはち波羅㮈都邑中に往至し街々巷々に住まりて歡悅の顏色を以て妙音伎を作す。是の如くして波羅㮈の諸の貴豪族聞き已りて極めて大いに歡喜して自ら娛樂す。こゝに於て加赦國王梵摩達哆の外眷屬聞き、中眷屬內眷屬及び梵志國師展轉し悉く聞く。梵志國師聞き已りてすなはち呼びてこれを見る。こゝに於て長壽博士梵志國師の所に往詣し彼に向ひて立ち歡悅の顏色を以て

【七】迦赦即ち迦尸國の王都即ち敵王の國都。

巻の第十七

長壽王品第二（十五經あり）

長壽〔王本起〕・天・八念・ 淨不〔移〕動道・ 郁伽支羅說・ 娑雞〔帝〕三族姓・ 梵天〔迎〕請佛・〔有〕勝天・迦絺那・念身・支離彌〔梨〕・上尊長老睡眠・ 無刺・及び眞人・ 說處最も後に在り・

七十二、長壽王本起經第一[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛 拘舍彌[二]に遊び瞿師羅園に在しぬ。その時拘舍彌の諸の比丘數ば共に闘諍しぬ。こゝに於て世尊拘舍彌の諸の比丘に告げて曰はく『比丘、汝等共に闘諍すること莫れ。所以者何。

若し諍を以て諍を止めんは至竟止むるを見ず。 唯忍能く諍を止む。 この法尊貴すべし。

所以者何。昔過去の時 拘娑羅[三]國王有りて名づけて 長壽[四]と曰ひ、また 加赦[五]國王有りて 梵摩達哆[六]と名く。彼の二國王常に共に戰諍す。こゝに於て加赦國王梵摩達哆四種の軍、象軍・馬軍・車軍・步軍を興し、四種の軍を興し已りて加赦國王梵摩達哆自ら軍を引き、往きて拘娑羅國王長壽と共に戰はんと欲す。拘娑羅國王長壽加赦國王梵摩達哆四種の軍・象軍・馬軍・車軍・步軍を興し、四種の軍を興し已り來りて我と戰ふと聞く。拘娑羅國王長壽聞き已りて亦四種の軍、象軍・馬軍・車軍・步軍を興し、四種の軍を興し已りて拘娑羅國王長壽自ら軍を引きて出で界上に往至し陣を列し共に戰ひて即ちこれを摧破す。こゝに於て拘娑羅國王長壽盡く彼の梵摩達哆の四種の軍、象軍・馬軍・車軍・步軍を奪取し乃ちまた加赦國王梵摩達哆の身を生擒し、得已りて即ち放ちて彼に語げて曰く、汝窮厄の人、今汝を原赦す。後また作すこと莫れと。 加赦國王梵摩達哆また再び三たび四種の軍・象軍・馬軍・車

【一】 M. 128. Upakkilesa-sutta, J. 370 Dighitikosala, Vin. i. 342;「增一阿含」二四品の八、「長壽王經」、「五分律」二四卷、「四分律」四三卷、「六度集經」一卷。
【二】 拘舍彌Kosambī。二卷「世間福經」註を見よ。
【三】 拘娑羅(Kosalā)。
【四】 長壽(Dighiti)。
【五】 加赦(Kāsi)。
【六】 梵摩達哆(Brahmadatta)。

て布施の報を受けて斯恕提の蜱肆王の如くならしむること莫れ』。蜱肆王はこれ布施の主にして不至心を以て施與を行ぜるが故に四王天の小椁樹林空宮殿中に生依しぬ』と』。その時尊者橋燎鉢帝默然として受けぬ。こゝに於て尊者橋燎鉢帝時有りて來り下り閻浮洲に至りて則ち遍く諸の閻浮洲の人に告げぬ『至心に施與し自ら手もて與へ自ら往きて與へ至信に與へ、業有り業報有りと知りて與へよ。所以者何。これを以て布施の報を受けて斯恕提の蜱肆王の如くならしむること莫れ。蜱肆王はこれ布施の主にして不至心を以て施與を行ぜるが故に四王天の小椁樹林空宮殿中に生依しぬ』。尊者鳩摩羅迦葉の所説是の如し。蜱肆王斯恕提の梵志居士及び諸の比丘尊者鳩摩羅迦葉の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第十六

（卷十六）蜱肆經第七

王をして今世後世に受けしむること莫れと。聞き已りて卽ち呼びて問ひて曰く『優多羅、汝實に施を行じ福を修する時我が爲に上座に囑して呪願し、この施若し福報有らば蜱肆王をして今世後世に受けしむること莫れと、是の如きを爲すやと』。優多羅白して曰く『實に爾り天王、所以者何。天王施を行じ福を修すと雖も然も極惡麁弊の豆羮菜茹唯一片の薑なり。天王、この食尙手を以て觸るべからず。況やまた自ら食せんをや。天王、施すに麁弊の布衣を以てす。天王、この衣尙脚を以て躡むべからず、況やまた自ら著けんをや。我天王を敬し所施を重んぜず。この故に天王、我この弊布施の報を王に受けしむるを願はず』。蜱肆王聞き已りて告げて曰く『優多羅、汝今より始めて我が所食の如く當に以て飯食せしむべく我が著衣の如く當に以て布施すべし』。こゝに於て優多羅これより已後王の所食の如くすなはち以て飯食せしめ、王の所衣の如くすなはち以て布施しぬ。その時優多羅、蜱肆王の爲に布施を監行せるに因るが故に身壞れ命終りて四天王中に生じぬ。彼の肆燄王不至心を以て布施を行ぜるが故に身壞れ命終りて[14]樹樹林空宮殿中に生じぬ。尊者[15]橋燄鉢帝數々往きて彼の樹樹林空宮殿中に遊行しぬ。尊者橋燄鉢帝遙かに蜱肆王を見て卽便ち問ひて曰く『汝はこれ誰なりや』。蜱肆王答へて曰く『尊者橋燄鉢帝、頗し閻浮洲中に斯惒提の蜱肆と名づくる有りしを聞けるや』。尊者橋燄鉢帝答へて曰く『我閻浮洲中斯惒提に王有りて蜱肆と名づけしと聞きぬ』。蜱肆王白して曰く『尊者橋燄鉢帝、我卽ちこれなり。本蜱肆王と名づけぬ』。尊者橋燄鉢帝また問ひて曰く『蜱肆王、是の如く見是の如く說きぬ、後世有ること無く衆生の生無しと。彼何に由りてこゝに生じて四王天の小樹樹林空宮殿中に依るや』。蜱肆王白して曰く『尊者橋燄鉢帝、我本實にこの見有りき。然るに尊者沙門鳩摩羅迦葉の降伏所治斷捨する所と爲りぬ。若し尊者橋燄鉢帝還りて閻浮洲に下らば願はくは遍く閻浮洲の人に告げ語りたまへ。若し施を行じ福を修する時は當に至心に與へ自ら手もて與へ自ら往きて與へ至心に與へ業有り業報有りと知りて與ふべし。所以者何。これを以

【一四】樹樹林空宮殿 (Suñña Serisaka Vimāna)。
【一五】橋燄鉢帝 Gavampati 橋梵波提、牛主牛呞。

王また問ひて曰く『尊者、我當に云何にすべき』。尊者鳩摩羅迦葉答へて曰く『蜱肆、汝當に施を行じ福を修し常に長齋を供へよ。若し蜱肆王施を行じ福を修し常に長齋を供ふれば、諸方の沙門・梵志聞く、蜱肆王見有りて長夜に受持しぬ。彼沙門鳩摩羅迦葉の降伏所治斷捨する所と爲ると。諸方聞き已りて盡く當に遠來すべし。彼皆王の信施に及び得べく、王すなはち福有りて長夜にその安樂を受くるを得ん。蜱肆、猶ほ種子碎けず壞れず剖れず坼けず風に非ず日に非ず水中に傷くに非ずして秋時に好く藏するが如し。若し彼の居士深く良田を耕し極めて地を治し已りて、時に隨ひて種を下し雨澤適すれば、蜱肆王の意に於て云何。彼の種生じて增長するを得べきや不や』。答へて曰く『生ずるなり』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、汝亦是の如し。若し當に施を行じ福を修し常に長齋を供ふれば、諸方の沙門・梵志聞く、蜱肆王見有りて長夜に受持しぬ。彼沙門鳩摩羅迦葉の降伏所治斷捨する所と爲ると。諸法聞き已りて盡く當に遠來すべし。彼皆王の信施に及び得べく、王すなはち福有りて長夜にその安樂を受くるを得ん』。こゝに於て蜱肆王白して曰く『尊者、我今より始めて施を行じ福を修し常に長齋を供へん』。その時尊者鳩摩羅迦葉、蜱肆王及び斯惒提の梵志・居士の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて默然として住しぬ。こゝに於て蜱肆王及び斯惒提の梵志・居士、尊者鳩摩羅迦葉その爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、已りて卽ち坐より起ち尊者鳩摩羅迦葉の足に稽首し繞三匝して去りぬ。

彼の蜱肆王施を行じ福を修すと雖も然も極惡麁弊の豆羹・菜茹・唯一片の薑なりぬ。又復施すに麁弊の布衣を以てしぬ。時に監厨者を優多羅と名づけぬ。彼施を行じ福を修せる時蜱肆王の爲に上座に囑語して呪願しぬ、この施若し福報有らば蜱肆王をして今世後世に受けしむること莫れと。蜱肆王聞くに、優多羅施を行じ福を修する時常に爲に上座に囑して呪願す、この施若し福報有らば蜱肆

されば汝すなはち自ら無量の惡を受け、亦衆人の憎惡する所と爲らん。猶ほ彼の虎猪に勝を與ふるが如し』。蜱肆王聞き已りて白して曰く、尊者、初め日月の喩を說きし時我聞きて卽ち解し歡喜し奉受しぬ。然るに我尊者鳩摩羅迦葉に從ひて上また上妙智の所說を求めんと欲しぬ。この故に我向に問ひてまた問ひしのみ。我今自ら尊者鳩摩羅迦葉に歸す』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、汝我に歸すること莫れ。我が歸する所の佛に汝亦應に歸すべし。蜱肆王白して曰く『尊者、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。願はくは尊者鳩摩羅迦葉、佛我を受けて優婆塞と爲したまふを爲せ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん。尊者鳩摩羅迦葉、我今日より始めて布施を行じ福を修せん』。尊者鳩摩羅迦葉問ひて曰く『蜱肆、汝施を行じ福を修し、幾人に施與し能く幾時に至らんと欲するや』。蜱肆王白して曰く『百人に布施し或は千人に至り、一日二日或は七日に至らん』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『若し王施を行じ福を修し百人に布施し或は千人に至り、一日二日或は七日に至らば諸方の沙門梵志盡く聞かん、蜱肆王見有りて長夜に受持しぬ。彼沙門鳩摩羅迦葉の降伏所治斷捨する所と爲ると。諸方聞き已りて盡く當に遠來すべし。七日の中王の施に及ばず。若し王の信施を食するを得ざれば王すなはち福無く、長夜にその安樂を受くることを得ず。蜱肆王、猶ほ種子の碎けず壞れず剖れず坼けず、風に非ず日に非ず水中に傷くに非ずして秋時に好く藏するが如し。若し彼の居士深く良田を耕し極めて地を治し已りて時に隨ひて種を下す。然るに雨澤適せざれば、蜱肆の意に於て云何。彼の種生じて增長するを得べきや不や』。答へて曰く『不なり』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、汝亦是の如し。若し施を行じ福を修し百人に布施し或は千人に至り一日二日或は七日に至れば諸方の沙門・梵志盡く聞く、蜱肆王見有りて長夜に受持しぬ、彼沙門鳩摩羅迦葉の降伏所治斷捨する所と爲ると、諸方聞き已りて盡く當に遠來すべし。七日の中、王の施に及ばず、若し王の信施を食するを得ざれば王すなはち福無く長夜にその安樂を受くるを得ず』。蜱肆

を作し已りて虎に語げて曰く、若し鬪はんと欲せばすなはち共に鬪ふべし。若し爾らずんば我に道を借して過ぎしめよと。彼の虎聞き已りてすなはち猪に語げて曰く、虎、汝小しく住まりて我が祖父の時の鎧を被著するを待て。還りて當に共に戰ふべしと。彼の虎聞き已りてこの念を作す、彼我が敵に非ず。況や祖父の鎧をやと。すなはち猪に語げて曰く、汝の欲する所に隨へと。猪卽ち還りて本の厠處の所に至り糞中に婉轉し身に塗りて眼に至り、已りてすなはち虎の所に往至し語げて曰く、汝鬪はんと欲せばすなはち共に鬪ふべし。若し爾らざれば我に道を借して過ぎしめよと。虎猪を見已りてまたこの念を作す、我常に雜小蟲を食はざるは牙を惜しむを以ての故なり。況やまた當にこの臭猪に近づくべけんやと。虎これを念じ已りてすなはち猪に語げて曰く、我汝に道を借し汝と鬪はずと。猪過ぐるを得已りて則ち還りて虎に向ひて頌を說きて曰く、

虎、汝四足有り、　我亦四足有り、　汝來りて我と共に鬪へ、　何の意にて怖れて而も走るや。

時に虎聞き已りて亦復頌を說きて猪に答へて曰く、

汝毛竪ちて森々たり、諸畜の中下極まる。　猪、汝速かに去るべし、　糞臭堪ふべからず。

時に猪自ら誇りてまた頌を說きて曰く、

摩竭鴦[伽]二國聞く、　我汝と共に鬪はんと　汝來りて我と共に戰へ。　何を以て怖れて而も走るや。

虎これを聞き已りてまた頌を說きて曰く、

身を擧げて毛皆汚る。　猪、汝の臭我に熏ず、　汝鬪ひて勝を求めんと欲せば、我今汝に勝を與へん。

尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、我亦是の如し。若し汝この見・欲取・恚取・怖取・癡取終に捨て

當に知るべし、蜱肆亦復是の如し。若し汝この見・欲取・恚取・怖取・癡取終に捨てざれば汝すなはち當に無量の惡を受け、亦衆人の憎惡する所と爲るべし。猶ほ戲人鬪の爲に他を欺き還りて自ら殃を得るが如し』。蜱肆王また言はく『沙門鳩摩羅迦葉この說を作すと雖も但我この見、欲取・恚取・怖取・癡取終に捨つること能はず。所以者何。若し他國の異人有りてこれを聞けば、すなはちこの說を作す、蜱肆王見有りて長夜に受持しぬ、彼沙門鳩摩羅迦葉の降伏所治斷捨する所と爲ると。迦葉、この故に我この見、欲取・恚取・怖取・癡取、終に捨つること能はず』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く、『蜱肆、(10)また我の喩を說くを聽け。慧者は喩を聞けば則ちその義を解す。蜱肆、猶ほ猪を養ふ人のごとし。彼路を行く時熇糞有るを見るに甚だ多くして主無し。すなはちこの念を作す、この糞以て多くの猪を養飽すべし。我寧ろ取りて自ら重くして去るべしと。即ち取り負ひて去る。彼中道に於て天大雨するに遇ひ糞液流漫してその身を澆汚す。故に負ひて持ち去り終に棄捨せず。彼則ち自ら無量の惡を受け亦衆人の憎惡する所と爲る。當に知るべし、蜱肆亦復是の如し。若し汝この見、欲取・恚取・怖取・癡取終に捨てざれば汝すなはち當に無量の惡を受け、亦衆人の憎惡する所と爲るべし。猶ほ猪を養ふ人のごとし』。蜱肆王また言はく『沙門鳩摩羅迦葉この說を作すと雖も但我この見、欲取・恚取・怖取・癡取、終に捨つること能はず。所以者何。若し他國の異人有りてこれを聞けばすなはちこの說を作す、蜱肆王、見有り長夜に受持しぬ。彼沙門鳩摩羅迦葉の降伏所治斷捨する所と爲る。迦葉、この故に我この見、欲取・恚取・怖取・癡取終に捨つること能はず』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、(11)また我の最後の譬喩を說くを聽け。若し汝知らば善し、若し知らざれば我また說法せん。蜱肆、猶ほ大猪の如し。五百猪の王と爲り嶮難道を行く。彼中路に於て遇ま一虎を見る。猪虎を見已りてすなはちこの念を作す、若し與に鬪はゞ虎必ず我を殺さん。若し畏れ走らば然らば諸の親族すなはち我を輕慢せん。知らず、今當に何の方便を以てこの難を脫するを得べきかと。この念

(10)糞を擔ふ人の喩。

(11)野猪の喩。Sūkara-jātaka (153)參照。

に棄つべしと。彼故き水樵草を捨てず、一日道を行くも新らしき水樵草を得ず。二日三日乃至七日道を行くも猶ほ故のごとく、新らしき水樵草を得ず。第二の商人の主前に在りて行く時前の第一の商人の主及び諸の商人食食鬼の殺害する所と爲りしを見る。第二の商人の主見已りて諸の商人に語ぐ、汝等前の商人の主を看よ。愚癡にして達せず善く曉解せず智慧有ること無く、既に自ら身を殺しまた諸人を殺しぬ。汝等商人、若し前の諸の商人の物を取らんと欲せば自ら恣にこれを取れと。當に知るべし、蜱肆亦復是の如し。若し汝この見、欲取・恚取・怖取・癡取、終に捨てざれば汝すなはち當に無量の惡を受くべし。亦衆人の憎惡する所と爲る。猶ほ前の第一の商人の主及び諸の商人のごとし』。蜱肆王また言はく『沙門鳩摩羅迦葉この說を作すと雖も但我この見・欲取・恚取・怖取・癡取終に捨つること能はず。所以者何。若し他國の異人有りてこれを聞かば、すなはちこの說を作さん、蜱肆王見有りて長夜に受持しぬ。[今]彼沙門鳩摩羅迦葉の降伏所治斷捨する所と爲ると。迦葉、この故に我この見、欲取・恚取・怖取・癡取終に捨つること能はず』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、(9)また我の喩を說くを聽け、慧者は喩を聞けば則ちその義を解す。蜱肆、猶ほ二人許戲して麨を賭くるが如し第一の戲者並に竊みてこれを食し、一二三を食し或は衆多に至る。第二の戲者すなはちこの念を作す。この人と共に戲むるに數々我を欺きて而も麨食を偸み或は一二三或は衆多に至ると。是の如きを見已りて彼の伴に告げて曰く、我今息まんと欲す。後當に更に戲むるべしと。こゝに於て第二の戲者彼處を離れすなはち毒藥を以て用てその麨に塗る。塗り已りて即ち還りてその伴に語げて曰く、來りて共に戲むるべしと。即ち來りて共に戲むる。第一の戲者また麨食を竊みて或は一二三或は衆多に至る。既に麨を食し已りてすなはち[三]戴眼吐沫して死せんと欲す。こゝに於て第二の戲者第一の戲人に向ひて即ち頌を說きて曰く、

この麨毒藥を塗る、　汝貪り食して覺らず。　麨の爲に我を欺くに坐し後必ず苦患を致す。

(9) 賭麨の喩。

【三】眼球を動かさずして上を見る眼をいふ。

を著けて驢車に乘り、泥雨の輷に著きぬ。我彼に問ひて曰く、飢儉道中天雨有りや不や。彼に新らしき水・樵及び草有りやと。彼我に答へて曰く、飢儉道中天大雨を降らし極めて新らしき水有り乃ち樵草饒し。諸賢、汝等故き水樵草を捨つべし。乘をして乏しからしむること莫れ。汝等久しからずして當に新らしき水及び好き樵草を得べしと。諸の商人、我等故き水樵草を捨つべし。是の如くして久しからずして當に新らしき水樵草を得べし。乘をして乏しからしむること莫れと。彼の商人等即ちすなはち故き水樵草を棄捨し一日道を行きて新らしき水樵草を得ず、二日三日乃至七日道を行きて猶ほ故のごとく新らしき水樵草を得ず、七日を過ぎ已りて食人鬼の殺害する所と爲る。第二の商人の主すなはちこの念を作す、前の商人の主已に嶮難を過ぎぬ。我等今當に何の方便を以て難を脱するを得べきと。第二の商人の主この念を作し已りて五百車と即便ち倶に進みて飢儉道に至る。第二の商人の主自ら前に在りて導く。一人有りて傍道より來るを見る。衣服盡く濕ひ身黑く頭黄に兩眼極めて赤く蕍華鬘を著けて驢車に乘り泥雨の輷に著く。第二の商人の主見てすなはち問ひて曰く、飢儉道中天雨有りや不や。彼に新らしき水・樵及び草有りやと。彼の人答へて曰く、飢儉道中、天大雨を降らし極めて新らしき水有り乃ち樵草饒し。諸賢、汝等故き水樵草を捨つべし。乘をして乏しからしること莫れ、汝等久しからずして當に新らしき水及び好き樵草を得べしと。第二の商人の主聞き已りて即ち還り、諸の商人に詣りてこれに告げて曰く、我前に在りて行き、一人有りて傍道より來るを見ぬ。衣服盡く濕ひ身黑く頭黄に兩眼極めて赤く蕍華鬘を著けて驢車に乘り泥雨の輷に著きぬ。我彼に問ひて曰く、飢儉道中、天雨有りや不や。彼に新らしき水・樵及び草有りやと。彼我に答へて曰く、飢儉道中天適ま大雨し極めて新らしき水有り乃ち樵草饒し。諸賢、汝等故き水樵草を捨つべし。乘をして乏しからしむること莫れ。汝等久しからずして當に新らしき水及び好き樵草を得べしと。諸の商人、我等未だ故き水樵草を捨つべからず。若し新らしき水樵草を得ば然る後當

施し福を作して昇上し善果・善報・生天・長壽なるべしと。彼の擔麻者その家に還歸す。父母遙かに麻を擔ひて來り歸るを見、見已りて罵りて曰く、汝罪人來りぬ、無德の人來りぬ。汝この麻に因りて生活し父母に供養し妻子・奴婢・使人に供給するを得ず。又亦沙門及び諸の梵志に布施し福を作して昇上し善果・善報・生天・長壽なるを得ずと。當に知るべし、蜱肆亦復是の如し。若し汝この見、欲取・恚取・怖取・癡取、終に捨てざれば汝すなはち當に無量の惡を受くべし。亦衆人の增惡する所と爲る』。蜱肆王また言はく『沙門鳩摩羅迦葉この說を作すと雖も但我この見・欲取・恚取・怖取・癡取終に捨つること能はず。所以者何。若し他國の異人有りてこれを聞かば、すなはちこの說を作さん、「謂く」蜱肆王見有りて長夜に受持しぬ。[今]彼沙門鳩摩羅迦葉の降伏所治斷捨する所と爲ると。迦葉、この故に我この見、欲取・恚取・怖取・癡取終に捨つること能はず』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、(8)また我の喩を說くを聽け。慧者は喩を聞けば則ちその義を解す。蜱肆、猶ほ商人の如し。その大衆と千乘車有りて飢儉の道を行く。この大衆中に而も兩主有り。彼この念を作す、我等、何に因りてこの難を脫し得んと。またこの念を作す、我この大衆を應に分ちて兩部と爲し、部各五百とすべしと。彼の商人衆すなはち分ちて兩部と爲し部各五百なり。こゝに於て一商人の主五百乘を將ゐて飢儉道に至る。彼の商人の主常に前に在りて導く。一人有りて傍道より來るを見る。衣服盡く濕ひ身黑く頭黃に、兩眼極めて赤く蕎華鬘を著けて驢車に乘り、泥兩の【三】轂に著く。彼の商人の主見てすなはち問ひて曰く、飢儉道中に天雨有りや不や。彼に新らしき水・樵及び草有りやと。彼の人答へて曰く、飢儉道中、天大雨を降らし極めて新らしき水有り乃ち樵草饒し。諸賢、汝等故き、水・樵・草を捨つべし。乘をして乏しからしむること莫れ。汝等久しからずして當に新らしき水及び好き樵草を得べしと。彼の商人の主聞き已りて卽ち還り諸の商人に詣りてこれに告げて曰く、我前に在りて行き一人有りて傍道より來るを見ぬ。衣服盡く濕ひ身黑く頭黃に兩眼極めて赤く蕎華鬘

(8)飢儉の道を行く商人の喩。

【三】車の輪。

不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見る』。蜱肆王また言はく『沙門鳩摩羅迦葉この說を作すと雖も、但我この見、欲取・恚取・怖取・癡取終に捨つること能はず。所以者何。若し他國の異人有りてこれを聞かばすなはちこの說を作さん、［謂く］蜱肆王見有りて長夜に受持しぬ。［今］彼沙門鳩摩羅迦葉の降伏所治斷捨する所と爲ると。迦葉、この故に我この見・欲取・恚取・怖取・癡取・終に捨つること能はず』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、(7)我が喩を說くを聽け。慧者は喩を聞けば則ちその義を解す。蜱肆、猶ほ朋友二人の如し。家を捨て治生す。彼道を行く時初め麻有りて甚だ多くして主無きを見る。一人見已りてすなはち伴に語げて曰く、汝當にこれを知るべし。今こゝに麻有り甚だ多くして主無し。我汝と共に取らんと欲す。自ら重くして擔ひ還歸し資用するを得べしと。すなはち取りて重くして擔ひ、彼道路に於てまた多く劫貝紗縷及び劫貝衣有り甚だ多くして主無きを見る。また多くの銀亦主有る無きを見る。一人見已りてすなはち麻の擔を棄て銀を取りて自ら重くす。また道路に於て多くの金聚而も主有る無きを見る。時に擔銀の人擔麻者に語ぐ、汝今當に知るべし。この金極めて多くして主有ること無し。汝麻を捨つべし。我銀擔を捨てん。我汝と共にこの金を取らんと欲す。重く擔ひて歸りて供用するを得べしと。彼の擔麻者擔銀の人に語ぐ、我この麻擔已に好く裝治し縛束已に堅し。遠くより擔ひ來る。我捨つること能はず。汝且く自ら知り、我を憂ふること勿れと。こゝに於て擔銀の人麻擔を強奪し地に撲著してこれを壞す。彼の擔麻者擔銀の人に語ぐ、汝已に是の如く我が擔を挽壞しぬ。我この麻擔、縛束已に堅く所來の處遠し。我要ず、自らこの麻を擔ひ歸り、終るまでこれを捨てざらんと欲す。汝且く自ら知り我を憂ふること勿れと。彼の擔銀の人卽ち銀擔を捨てすなはち自ら金の重き擔を取りて還る。擔金の人歸る。父母遙かに金を擔ひて來り歸るを見、見已りて嘆じて曰く、善く來りぬ賢子、快く來りぬ賢子、汝この金に因りて快く生活を得、父母に供養し妻子・奴婢・使人に供給しまた沙門梵志に布

(7)二人朋友の喩。

これを求むべしと。その時事火編髮の梵志善く教勅し已りて卽ち人間に至る。後に於て年少すなはち出でゝ遊戲し火遂に滅盡す。彼還りて火を求め卽ち火鑽を取り以て用ひて地に打ちこの語を作す、火出でよ、火出でよと。火竟に出でず。また石上に於て力を加へてこれを打ち、火出でよ、火出でよと。火また出でず。火既に出でず、すなはち火鑽を破りて十片百片とし、棄て去りて地に坐し愁惱して言はく、火を得ること能はず、當にこれを如何にすべきと。この時事火編髮の梵志、彼人間に於て所作已に訖り、還りて本の處に歸る。到り已りて問ひて曰く、年少、汝遊戲せず種火を隨視して滅せしめざりしやと。年少白して曰く、尊者、我出でゝ遊戲し、火後に遂に滅しぬ。我還りて火を求め卽ち火鑽を取りて以て用ひて地に打ちこの語を作しぬ、火出でよ、火出でよ、火出でよと。火竟に出でず。また石上に於て力を加へてこれを打ちぬ、火出でよ火出でよと。火亦出でず。火既に出でず、すなはち火鑽を破りて十片百片とし、棄て去りて地に坐しぬ。尊者、我是の如く求めて火を得ること能はず。當にこれを如何にすべきかと。その時事火編髮の梵志すなはちこの念を作す、今この年少甚だ癡にして達せず、善く曉解せず智慧有ること無し。所以者何。無知の火鑽に從ひて是の如き意を作し火を求索するやと。こゝに於て事火編髮の梵志燥火を取り火母を鑽り地に著けて以てこれを鑽るに卽ちすなはち火出で轉た轉た熾盛なり。年少に語げて曰く、年少、火を求むるの法、應に是の如くなるべし。汝の愚癡にして達せず智慧有ること無くして無知の火鑽に從ひて是の如き意を作し火を求索するが如くなるべからず。當に知るべし、蜱肆、亦復是の如く愚癡にして達せず善く曉解せず、智慧有ること無くして無知の死肉乃至骨髓に於て衆生の生を求む。蜱肆、汝應に是の如く衆生の生を觀るべし。肉眼の所見の如くすること莫れ。蜱肆、若し沙門・梵志有りて斷絕して欲を離れ離欲に趣向し、斷絕して恚を離れ離恚に趣向し、斷絕して癡を離れ離癡に趣向すれば、彼清淨の天眼の人[眼]を出過せるを以てこの衆生の死時・生時・好色・惡色、或は妙・不妙、善處及び

しもの有りや』。蜱肆答へて曰く『正使異人も亦見ること能はず。況やまた左右の直侍人をや』。『蜱肆、汝應に是の如く衆生の生を觀るべし。肉眼の所見の如くすること莫れ。蜱肆、若し沙門・梵志有りて斷絶して欲を離れ離欲に趣向し、斷絶して恚を離れ離恚に趣向し、斷絶して癡を離れ離癡に趣向すれば、彼淸淨の天眼の人[眼]を出過せるを以てこの衆生の死時・生時・好色・惡色、或は妙・不妙、善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見る』。蜱肆王また言はく『沙門鳩摩羅迦葉この說を作すと雖も但我是の如く見、是の如く說く、衆生の生無しと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、また更に惡にしてこれに過ぐる有りや』。蜱肆答へて曰く『是の如し迦葉、また更に惡有り。迦葉、我に右伺有りて罪人を收捕し送りて我が所に詣り、到り已りて白して曰く、天王、この人罪有り。願はくは王これを治したまへと。我彼に語げて曰く、この罪人を取りて、皮を剝ぎ肉を剔り筋を截り骨を破り乃ち髓に至り、衆生の生を求めよと。彼我が敎を受け、この罪人を取りて皮を剝ぎ肉を剔り筋を截り骨を破り乃ち髓に至り、衆生の生を求む。迦葉、我是の如き方便を作し衆生の生を求むるも而も竟に衆生の生を見ず。迦葉、この事に因るが故に我この念を作す、衆生の生無しと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、(6)また我が喩を說くを聽け。慧者は喩を聞けば則ちその義を解す。蜱肆、猶ほ事火編髮の梵志の如し。居道邊に近く、彼を去ること遠からずして商人の宿有り。時に諸の商人夜を過ぎて平旦怱々として發し去り一小兒を忘る。こゝに於て事火編髮の梵志早く起きて商人の宿處に案行し一小兒獨り住して主を失ふを見る。見已りて念じて曰く、今この小兒依怙する所無し。我養はざれば必ず死せんこと疑無しと。すなはち抱きて持ち去り還りて本の處に至りてこれを養長す。この兒轉た大となり諸根成就す。その時事火編髮の梵志、彼人間に於て小事緣有り。こゝに於て事火編髮の梵志年少に勅して曰く、我小事有りて暫く人間に出づ。汝當に種火を愼みて滅せしむること莫るべし。若し火滅すれば汝この火鑽を取りて

(6)事火編髮梵志の喩。

ば漸々冷に就き轉た凝りて厚重なり、堅くして柔軟ならず、色悅澤あらず。是の如く蜱肆、若し人活ける時は身體極めて輕く柔軟にして色悅澤ありて好し。若し彼死し已ればすなはち轉た厚重にして堅くして柔軟ならず、色悅澤あらず。蜱肆、汝應に是の如く衆生の生を見るべし。肉眼の所見の如くすること莫れ。蜱肆、若し沙門梵志有りて斷絕して欲を離れ離欲に趣向し、斷絕して恚を離れ離恚に趣向し、斷絕して癡を離れ離癡に趣向すれば、彼淸淨の天眼の人[眼]を出過せるを以て衆生の死時・生時・好色・惡色、或は妙・不妙、善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見る』。蜱肆王また言はく『沙門鳩摩羅迦葉この說を作すと雖も但我是の如く見、是の如く說く、衆生の生無しと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、また更に惡にしてこれに過ぐる有りや』。蜱肆答へて曰く『是の如し迦葉、また更に惡有り。迦葉、我に右伺有り罪人を收捕し送りて我の所に詣り、到り已りて白して曰く、天王、この人罪有り、願はくは王これを治したまへと。我彼に語げて曰く、この罪人を取り鐵釜中に倒著し或は銅釜中に著け密にその口を蓋ひ下より火を燃し、下より火を燃し已りて衆生の入時出時往來周旋するを觀視せよと。彼我が敎を受けこの罪人を取り鐵釜中に倒著し、或は銅釜中に著け密にその口を蓋ひ下より火を燃し、下より火を燃し已りて衆生の入時出時往來周旋するを觀視す。迦葉、我是の如き方便を作すも衆生の生を見ず。迦葉、この事に因るが故に我この念を作す、衆生の生無しと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、我今汝に問はん、所解に隨ひて答へよ。意に於て云何。若し汝好き極美の上饌を食し晝床に寢ね、汝頗し曾て夢中に於て園觀・浴池・林木・華果・淸泉・長流に意を極めて遊戲し周旋往來するを見しことを憶ふや』。蜱肆答へて曰く『曾てこれ有りしことを憶ふ迦葉』。また問ひぬ『若し汝好き極美の上饌を食し晝床に寢ね、その時頗し直侍人有りしや不や』。答へて曰く『有りしなり迦葉』。また問ひぬ『若し汝好き極美の上饌を食し晝床に寢ね、その時に當り左右の直侍頗し汝の出入周旋往來する時を見

欲すと。この時善く螺を吹く人還、彼の螺を取り水を以て淨洗しすなはち擧げて口に向け力を盡してこれを吹く。時に彼の衆人聞き已りてこの念を作す、螺甚だ奇妙なり。所以者何。謂く手に因り水に因り口に因りて風吹けば、すなはち好聲を生じ四方に周滿すと。是の如く蜱肆、若し人活きて命存すれば則ち能く言語し共に相慰勞す。若しその命終ればすなはち言ひて共に相慰勞する能はず。蜱肆、汝應に是の如く衆生の生を觀るべし。肉眼の所見の如くすること莫れ。蜱肆、若し沙門梵志有りて斷絕して欲を離れ離欲に趣向し、斷絕して恚を離れ離恚に趣向し、斷絕して癡を離れ離癡に趣向すれば、彼清淨の天眼の人[眼]を出過せるを以てこの衆生の死時・生時・好色・惡色・或は妙不妙・善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見る』。蜱肆王また言はく『沙門鳩摩羅迦葉この說を作すと雖も但我是の如く見、是の如く說く、衆生の生無しと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、また更に惡にしてこれに過ぐる有りや。』蜱肆答へて曰く『是の如し迦葉、また更に惡有り。迦葉、我に右伺有りて罪人を收捕し送りて我の所に詣り、到り已りて白して曰く、天王、この人罪有り。願はくは王これを治したまへと。我彼に告げて曰く、この罪人を取り生きながらこれを稱るべし。生きながらこれを稱り已りて還下し地に著け繩を以て絞殺し、殺し已りてまた稱れ。我この人何時極めて輕く柔軟にして色悅澤ありて好しと爲すや。死せる時と爲すや、活ける時と爲すやを知るを得んと欲すと。彼我が教を受けこの罪人を取り、活きながらこれを稱り、已りて還下し地に著け繩を以て絞殺し、殺し已りてまた稱る。彼の罪人活ける時極めて輕く柔軟にして色悅澤ありて好し。彼の人死し已りて皮轉た厚重にして堅くして柔軟ならず、色悅澤あらず。迦葉、この事に因るが故に我この念を作す、衆生の生無しと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、(5)また我が喩を說くを聽け。慧者は喩を聞けば則ちその義を解す。蜱肆、猶ほ鐵丸或は鐵の犁鑱を竟日火に燒く。彼その時に當り極めて輕く柔軟にして色悅澤有りて好し。若し火滅し已れ

(5)熱鐵丸或は熱鐵犁鑱の喩。

すなはち大福を得、若し大福を得ればすなはち天に生じて長壽を得、蜱肆、汝應に是の如く後世を觀るべし。肉眼の所見の如くすること莫れ。蜱肆、若し沙門梵志有りて斷絶して欲を離れ離欲に趣向し、斷絶して恚を離れ離恚に趣向し、斷絶して癡を離れ離癡に趣向すれば彼清淨の天眼の人〔眼〕を出過せるを以てこの衆生の死時・生時・好色・惡色・或は妙・不妙・善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見る』。蜱肆王また言はく『沙門鳩摩羅迦葉この說を作すと雖も但我是の如く見、是の如く說く、後世有ること無く衆生の生無しと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、また更に惡にしてこれに過ぐる有りや』。蜱肆答へて曰く『是の如し迦葉、また更に惡有り、迦葉、我に親々有り疾病困篤なり、我彼の所に往き慰勞して彼を看る、彼亦慰勞して我を視る。彼若し命終れば我また彼に詣り慰勞して彼を看る。彼亦また慰勞して我を視ず、我亦また慰勞して彼を看ず。迦葉、この事を以ての故に我この念を作す、衆生の生無しと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、(4)我が喩を說くを聽け、慧者は喩を聞けば則ちその義を解す。蜱肆、猶ほ人有りて善く能く螺を吹くが如し。若し彼方の土未だ曾て螺聲を聞かず。すなはち彼方に往き夜の闇中に於て高山上に昇り力を盡して螺を吹く。彼の衆多の人未だ曾て螺聲を聞かず、聞き已りてすなはち念ず、これは何の聲と爲す。是の如く極妙にして甚だ奇特を爲し實に愛樂すべく、好く觀聽すべく、心をして歡悅せしむと。時に彼の衆人すなはち共に善く螺を吹く人の所に往詣し到り已りて問ひて曰く、これはこれ何の聲にして是の如く極妙にして甚だ奇特を爲し、實に愛樂すべく、好く觀聽すべく、心をして歡悅せしむるやと。善く螺を吹く人螺を以て地に投じて衆人に告げて曰く、諸君、當に知るべし、即ちこれは螺聲なりと。こゝに於て衆人足を以て螺を蹴りてこの語を作す、螺聲を出すべし、螺聲を出すべしと。寂として音響無し。善く螺を吹く人すなはちこの念を作す、今この衆人愚癡にして達せず善く曉解せず智慧有ること無し。所以者何。乃ち無知の物より音聲を求めんと

(4)螺聲の喩

終りて必ず善處に昇り天上に生ぜば、迦葉、我今すなはち應に卽ち布施を行じ諸の福業を修し齋を奉し、戒を守り已りて刀を以て自殺し或は毒藥を服し或は坑井に投じ或は自ら縊死せん。沙門鳩摩羅迦葉、精進して應に我を比するに彼の盲人の如くすべからず』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、(3)また我が喩を說くを聽け。慧者は喩を聞けば則ちその義を解す。蜱肆、猶ほ梵志の如し。年少の婦有り方に始めて懷妊す。又前婦者已に一男有り。而も彼の梵志その中間に於て忽ちすなはち命終る。命終りての後彼の前婦の兒小母に語げて曰く、小母、當に知るべし、今この家中所有の財物盡く應に我に屬すべし。また應に與に分つべき者を見ずと。小母報へて曰く、我今懷妊す、若し男を生めば汝應に與に分つべし。若し女を生めば物盡く汝に屬すと。彼の前婦の兒また更に再び三たび小母に語げて曰く、今この家中所有の財物盡く應に我に屬すべし。また應に與に分つべき者を見ずと。小母も亦復再び三たび報へて曰く、我今懷妊す。若し男を生めば汝應に與に分つべし。若し女を生めば物盡く汝に屬すと。こゝに於て小母愚癡にして達せず善く曉解せず、智慧有ること無く存命を求めんと欲して而も反つて自ら害し卽ち室中に入りすなはち利刀を取りて自らその腹を決し、これ男と爲すや、これ女と爲すやを看る。彼愚癡にして達せず善く曉解せず智慧有ること無く存命を求めんと欲して反つて自ら害し及び腹中の子[を害す]。當に知るべし、蜱肆、亦また是の如く愚癡にして達せず善く曉解せず智慧有ること無く存命を求めんと欲して反つてこの念を作す、迦葉、若し我を知り我が親々を知るに妙行精進し精勤にして懈らず、嫉妬有ること無く亦慳貪ならず、手を舒べ庶幾し開意放捨し、諸の孤窮に給し常に施與を樂しみ財物に著せず、彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず善處に昇り天上に生ぜば、我今すなはち應に卽ち布施を行じ諸の福業を修し齋を奉し戒を守り已りて刀を以て自殺し或は毒藥を服し或は坑井に投じ或は自ら縊死せん。沙門鳩摩羅迦葉、精進して應に我を比して彼の盲人の如くすべからずと。蜱肆、若し精進の人長壽なれば

(3)自腹を裂きたる婦の喩。

物に著せざれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず善處に昇り乃ち天上に生じ、天上に生じ已りて、すなはちこの念を作す、我等先づ當に一日一夜天の五欲を以て而も自ら娛樂し或は二三四、六七日に至り天の五欲を以て而も自ら娛樂すべし。然る後當に往きて蜱肆王に、天上是の如く、是の如く樂なりと語げ、彼をして現に見せしむべしと。王の意に於て云何、汝竟に當にその所活を得べきや不や』。蜱肆問ひて曰く『迦葉、誰か後世より來り語げぬ、沙門鳩摩羅迦葉、天上は壽長く人間は命短し。若し人間の百歲はこれ三十三天の一日一夜なり。是の如き一日一夜、月三十日、年十二月あり。三十三天の天壽千年なりと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆(2)我が喩を說くを聽け、慧者は喩を聞けば則ちその義を解す。蜱肆、猶ほ盲人の如し。彼この說を作す、黑白の色無し亦黑白の色を見る無し。長短の色無し亦長短の色を見る無し。近遠の色無し亦近遠の色を見る無し、麁細の色無し亦麁細の色を見る無し。何を以ての故に。我初より見ず知らず。この故に色有ること無しと。彼の盲是の如く說かば眞說と爲すや』。蜱肆答へて曰く『不なり迦葉。所以者何。迦葉、黑白の色有り亦黑白の色を見る有り、長短の色有り亦長短の色を見る有り、近遠の色有り亦近遠の色を見る有り、麁細の色有り亦麁細の色を見る有り。若し盲この說を作し、我見ず知らず、この故に色有ること無しとせば彼この說を作すは眞實ならずと爲す』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆王亦盲の如し。若し王この說を作さば、「謂く」誰か後世より來りて語げぬ、沙門鳩摩羅迦葉、天上は壽長く人間は命短し。若し人間の百歲はこれ三十三天の一日一夜なり。是の如き一日一夜・月三十日・年十二月あり。三十三天の天壽千年なりと』。蜱肆王言はく『沙門鳩摩羅迦葉、大いに不可と爲す。應にこの說を作すべからず。所以者何。沙門鳩摩羅迦葉、精進して我を盲の如きに比す。迦葉、若し我を知り、我が親々を知るに妙行精進し精勤して懈らず、嫉妬有ること無く、亦慳貪ならず、手を舒べ庶幾し、開意放捨し諸の孤窮に給し常に施與を樂しみ財物に著せず、彼これに因緣して身壞れ命

（2）盲者の喩。

れば、彼清淨の天眼の人[眼]を出過せるを以てこの衆生の死時・生時・好色・惡色、或は妙・不妙・善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見る』。蜱肆王また言はく『沙門鳩摩羅迦葉この說を作すと雖も但我是の如く見、是の如く說く、後世有ること無く衆生の生無しと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、また更に惡にしてこれに過ぐる有りや』。蜱肆答へて曰く『是の如し迦葉、また更に惡有り、迦葉、我に親々有り疾病困篤なり。我彼の所に往き到り已りて謂ひて曰く、汝等當に知るべし、我是の如く見、是の如く說く、後世有ること無く衆生の生無しと。親々、沙門梵志有りて是の如く見、是の如く說く、言はく後生有り衆生の生有りと。我常に彼の所說を信ぜず。彼またこの語を作す、若し男女有り妙行精進し精勤して懈らず、嫉妬有ること無く亦慳貪ならず、手を舒べ庶幾し開意放捨し、諸の孤窮に給し常に施與を樂しみ財物に著せざれば彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず善處に昇り乃ち天上に生ぜんと。若し彼の沙門・梵志の所說これ眞實ならば、汝等これ我が親々にして妙行精進し精勤して懈らず、嫉妬有ること無く亦慳貪ならず、手を舒べ庶幾し開意放捨し諸の孤窮に給し常に施與を樂しみ財物に著せず。若し汝等身壞れ命終りて必ず善處に昇り天上に生ぜば還りて我に語ぐべし、蜱肆、天上是の如く、是の如く樂なりと。[二]若し汝天上にて、我若し還歸すれば當に何の所得あるべき。蜱肆王の家多く財物有りと、この念を作さば、吾當に汝に與ふべしと。彼我が語を聞き我が敎を受け已りて都て來りて我に語げ、蜱肆、天上是の如く、是の如く樂なりと言ふもの有ること無し。迦葉、この事に因るが故に我この念を作す、後世有ること無く衆生の生無しと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、天上は壽長く人間は命短し。若し人間の百歳はこれ三十三天の一日一夜なり。是の如き一日一夜、月三十日、年十二月あり。三十三天の天壽千年なり。王の意に於て云何、若し汝に親々有りて妙行精進し、勤めて懈らず、嫉妬有ること無く亦慳貪ならず、手を舒べ庶幾し開意放捨し、諸の孤窮に給し常に施與を樂しみ財

【二】この一段原漢文の文字の順序を變へて譯したり。

如く樂なりと。若し當に爾るべくば我すなはち現に見んと。彼我が語を聞き我が教を受け已りて都て來りて我に語げて、蜱肆、天上是の如く、是の如く樂なりと言ふもの有ること無し。迦葉、この事に因るが故に我この念を作す、後世有ること無く、衆生の生無しと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く、『蜱肆、(1)我が喩を說くを聽け、慧者は喩を聽けば則ちその義を解す。蜱肆、猶ほ村邑外に都て圊厠有り深さ人頭を沒し糞その中に滿つ。而も一人有りて厠底に墮沒す。若しまた人有り彼を慈愍する爲に義及び饒益を求め、安隱快樂を求めすなはち厠上より徐々に挽き出し刮るに竹片を以てし拭ふに樹葉を以てし洗ふに暖湯を以てす。彼後時に於て淨く澡浴し已りて香を以て身に塗り正殿上に昇り五所欲を以て而もこれを娛樂す。王の意に於て云何。彼の人寧ろまた先の厠を憶念し歡喜し稱譽してまた見んと欲するや』。蜱肆答へて曰く『不なり迦葉』。『若し更に人有りて彼の厠を憶念し歡喜し稱譽して而も見んと欲せば、すなはちこの人を愛せず。況やまた自ら先の厠を憶念し歡喜し稱譽してまた見んと欲せんはこの處り然らず。蜱肆、若し王の親々妙行精進し精勤して懈らず嫉妬有ること無く、亦慳貪ならず手を舒べ庶幾し開意放捨し諸の孤窮に給し常に施與を樂しみ財物に著せざれば彼これに因緣し身壞れ命終りて必ず善處に昇り乃ち天上に生じ、天上に生じ已りて天の五所欲を而も自ら娛樂せん。王の意に於て云何。彼の天の天子寧ろ當に彼の天の五所欲を捨て、この人間の五欲を憶念し歡喜し稱譽しまた見んと欲すべきや』。蜱肆答へて曰く『不なり迦葉。所以者何。人間の五欲は臭處不淨にして甚だ憎惡すべくして向ふべからず、愛念すべからず。麁澁不淨なり。迦葉、人間の五所欲に比すれば天欲を最と爲し最上・最好・最妙・最勝なり。若し彼の天の天子天の五欲を捨てゝ更に人間の五欲を憶念し歡喜し稱譽してまた見んと欲せんはこの處り然らず』。『蜱肆、汝應に是の如く後世を觀るべし。肉眼の所見の如くすること莫れ。蜱肆、若し沙門・梵志有り、斷絕して欲を離れ離欲に趣向し、斷絕して恚を離れ離恚に趣向し、斷絕して癡を離れ離癡に趣向す

(1)厠に墜ちたるものゝ喩。

て財物に著す。彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。地獄の卒捉へて極めて苦治する時彼卒に告げて曰く、諸の地獄の卒、汝等小しく住まれ。我を苦治すること莫れ。我暫らく去りて蜱肆王に往詣し告げてこれに語りて曰く、彼の地獄の中是の如く、是の如く苦なりと、彼をして現に見せしめんと欲すと。王の意に於て云何。彼の地獄の卒寧ろ當に王の親々を放ちて暫らく來らしむべきや』。蜱肆答へて曰く『不なり迦葉』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、汝應に是の如く後世を觀るべし。肉眼の所見の如くすること莫れ。蜱肆、若し沙門梵志有り斷絕して欲を離れ、離欲に趣向し、斷絕して恚を離れ離恚に趣向し、斷絕して癡を離れ離癡に趣向すれば、彼清淨の天眼の人[眼]を出過せるを以て、この衆生の死時・生時・好色・惡色、或は妙・不妙・善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見る』。蜱肆王また言はく『沙門鳩摩羅迦葉この說を作すと雖も但我是の如く見、是の如く說く、後世有ること無く衆生の生無しと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、また更に惡にしてこれに過ぐる有りや』。蜱肆答へて曰く『是の如し迦葉、また更に惡有り。迦葉、我に親々有り疾病困篤なり。我彼の所に往き到り已りて謂ひて言はく、汝等當に知るべし、我是の如く見、是の如く說く、後世有ること無く衆生の生無しと。親々、沙門・梵志有りて是の如く見、是の如く說く、言く後世有り、衆生の生有りと。我常に彼の所說を信ぜず。彼またこの語を作す、若し男女有りて 〔一〇〕妙行精進し精勤して懈らず嫉妬有ることとなく亦慳貪ならず、手を舒べ庶幾し開意放捨し、諸の孤窮に給し常に施與を樂しみ財物に著せざれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず善處に昇り乃ち天上に生ぜんと。若し彼の沙門・梵志の所說これ眞實ならば、汝等これ我が親々にして妙行精進し、精勤して懈らず、嫉妬有ること無く、亦慳貪ならず、手を舒べ庶幾し、開意放捨し、諸の孤窮に給し、常に施與を樂しみ財物に著せず。若し汝等身壞れ命終りて必ず善處に昇り天上に生ぜば、還りて我に語ぐべし、蜱肆、天上是の如く、是の

〔一〇〕この一段巴利文にては十善業を列擧す。

親々有りて疾病困篤なり。我彼の所に往き到り已りて謂ひて言はく、汝等當に知るべし。我是の如く見、是の如く說く、後世有ること無く衆生の生無しと。親々、沙門・梵志有りて是の如く見、是の如く說きて言く、後世有り衆生の生有りと。我常に彼の所說を信ぜず。彼またこの語を作す、若し男女有りて[九]惡行を作し精進せず、懶惰懈怠し嫉妬し慳貪し手を舒べず庶幾せず極めて財物に著せば、彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ぜんと。若し彼の沙門梵志の所說これ眞實ならば、汝等これ我が親々にして惡行を作し精進せず懶惰懈怠し嫉妬し慳貪し手を舒べず庶幾せず極めて財物に著す。若し汝等身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ぜば還りて我に語ぐべし、蜱肆、彼の地獄の中是の如く、是の如く苦なりと。若し當に爾るべくば我すなはち現に見んと。彼我が語を聞き我が敎を受け已りて都て來りて我に語げて、蜱肆、彼の地獄の中是の如く、是の如く苦なりと言ふもの有ること無し。迦葉、この事に因るが故に我この念を作す、後世有ること無く衆生の生無しと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、我また王に問はん。解する所に隨ひて答へよ。若し王の人罪者を收縛せる有れば、送りて王の所に至り白して曰く、天王、この人罪有り。王當にこれを治したまふべしと。王彼に告げて曰く、汝等將ゐ去りて兩手を反縛し彼をして驢に騎らしめ、敗鼓の聲驢の鳴く如くなるを打破し遍く宣令し已りて城の南門より出で高標の下に坐せしめその頭を斬斷せよと。彼敎を受け已りて卽ち罪人を反縛しそれをして驢に騎らしめ敗鼓の聲驢の鳴く如くなるを打破し遍く宣令し已りて城の南門より出で高標の下に坐せしめその頭を斬らんと欲す。この人死に臨みて彼の卒に語げて曰く、汝且く小しく住まれ。我父母・妻子・奴婢・使人を見るを得んと欲す。我の暫く去るを聽せと。王の意に於て云何。彼の卒寧ろ當にこの罪人を放ちて暫らく去るを聽すべきや』。蜱肆答へて曰く『不なり迦葉』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、王の親々者も亦復是の如し、惡行を作し精進せず、懶惰懈怠し嫉妬し慳貪し手を舒べず庶幾せず極め

【九】この一段巴利文にては十惡業を擧ぐ。

所に往詣してこれに語げて曰へ、蜱肆王斯惒提の梵志・居士に告ぐ、諸賢住まるべし。我汝等と共に往きて彼の沙門鳩摩羅迦葉を見ん。汝等愚癡にして彼の欺く所と爲り、後世有り、衆生の生有りと爲すこと勿れ。我是の如く見、是の如く說く、[七]後世有ること無く衆生の生無しと』。侍人敎を受け卽ち彼の斯惒提の梵志・居士の所に往詣してこれに語げて曰く、『蜱肆王斯惒提の梵志・居士に告ぐ、諸賢住まるべし。我汝等と共に往きて彼の沙門鳩摩羅迦葉を見ん。汝等愚癡にして彼の欺く所と爲り、後世有り衆生の生有りと爲すこと勿れ。我是の如く見、是の如く說く、後世有ること無く、衆生の生無しと』。斯惒提の梵志・居士この敎を聞き已りて侍人に答へて曰く『輙ち來勅の如くせん』。侍人還りて啓す『已に王の命を宣ぶ。彼の斯惒提の梵志・居士住まりて天王を待つ。唯願はくは天王、宜しくこの時を知りたまふべし』。時に蜱肆王卽ち御者に勅す『汝速かに駕を嚴れ。我今行かんと欲す』。御者敎を受け卽ち速かに駕を嚴り訖りて還りて王に白す『駕を嚴ること已に辦ず。天王の意に隨ひたまへ』。時に蜱肆王卽ち車に乘り出でゝ斯惒提の梵志・居士の所に往詣し與に共に行きて尸攝惒林に至る。時に蜱肆王遙かに尊者鳩摩羅迦葉樹林間に在るを見て卽ち車を下り步み進みて尊者鳩摩羅迦葉の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し問ひて曰く『迦葉、我今問はんと欲す。寧ろ聽かるゝや』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、若し問はんと欲せばすなはちこれを問ふべし。我聞き已りて當に思ふべし』。時に蜱肆王卽便ち問ひて曰く『迦葉、我是の如く見、是の如く說く、後世有ること無く衆生の生無しと。沙門鳩摩羅迦葉意に於て云何』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、我今王に問はん。解する所に隨ひて答へよ。王の意に於て云何。[八]今この日月これを今世と爲すや後世と爲すや。』蜱肆答へて曰く『沙門鳩摩羅迦葉、この說を作すと雖も但我是の如く見、是の如く說く、後世有ること無く衆生の生無しと』。尊者鳩摩羅迦葉告げて曰く『蜱肆、また更に惡にしてこれに過ぐる有りや』。蜱肆答へて曰く『是の如し迦葉、また更に惡有り。迦葉、我に

【七】 Natthi paraloko, Natthi sattā opapātikā「他の世界なく、化生の衆生なし。」巴利文には更に「諸の善作惡作の業の果、異熟なし」の語を加ふ。

【八】 迦葉蜱肆に問ふ、この日月はこの世のものか、あの世のものか、人か天か、蜱肆答ふ、あの世のものにして天なり。迦葉いふ、これ他世ある證に非ずや。

卷の第十六

七十一、蜱肆經第七[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時尊者[二]鳩摩羅迦葉拘薩羅國に遊び大比丘衆と倶に[三]斯惒提に往詣し彼の村北[四]尸攝惒林に住しぬ。その時、斯惒提中に王有り[五]蜱肆と名づけ、極大豐樂にして資財無量、畜牧產業稱計すべからず、封戶食邑種々具足し、斯惒提邑の泉池草木一切王に屬し、拘薩羅王[六]波斯匿の封授する所に從ひぬ。こゝに於て斯惒提の梵志居士、沙門有り鳩摩羅迦葉と名づく。拘薩羅國に遊び、大比丘衆と倶にこの斯惒提に來至し、彼の村北尸攝惒林に住す。彼の沙門鳩摩羅迦葉大名稱有りて十方に周聞す。鳩摩羅迦葉才辯無礙にして所說微妙なり。彼はこれ多聞の阿羅訶なり。若しこの阿羅訶を見て恭敬禮事する有れば快く善利を得と聞き、『我等往きて彼の沙門鳩摩羅迦葉を見るべしと』。斯惒提の梵志・居士各與に等類相隨ひて行き斯惒提より並に共に北に出でゝ尸攝惒林に至る。この時蜱肆王正殿上に在りて遙かに斯惒提の梵志居士各與に等類相隨ひて行き斯惒提より並に共に北に出でゝ尸攝惒林に至るを見る。蜱肆王見已りて侍人に告げて曰く、『この斯惒提の梵志・居士今日何故に各與に等類相隨ひて行き斯惒提より並に共に北に出でゝ尸攝惒林に至るや』。侍人白して曰く『天王、彼の斯惒提の梵志・居士、沙門鳩摩羅迦葉有りて拘薩羅國に遊び大比丘衆と倶にこの斯惒提に來至し彼の村北尸攝惒林に住すと聞く。天王、彼の沙門鳩摩羅迦葉大名稱有りて十方に周聞す。鳩摩羅迦葉才辯無礙にして所說微妙なり。彼はこれ多聞の阿羅訶なり。若しこの阿羅訶を見て恭敬禮事する有れば快く善利を得「と聞き」、我等往きて彼の沙門鳩摩羅迦葉を見るべしと。天王、この故に斯惒提の梵志・居士、各與に等類相隨ひて行き、斯惒提より並に共に北に出でゝ尸攝惒林に至る』。蜱肆王聞き已りて侍人に告げて曰く『汝彼の斯惒提の梵志・居士の

【一】 D. 23. Pāyāsi-suttanta「長阿含經」七卷「弊宿經」。
【二】 鳩摩羅迦葉(Kumāra-Kassapa)。
【三】 斯惒提(Setavyā)。
【四】 尸攝惒林(Siṁsapā)。
【五】 蜱肆(Pāyāsi)。
【六】 波斯匿(Pasenadi 梵にPrasenajit)。

りて壽轉た減ぜず形色惡からず未だ曾て樂を失はず、力亦衰へず。云何が比丘、自境界を行ずるに父に從ひて得る所なる。この比丘(七)內身を觀じて身の如く、內覺心法を觀じて法の如し。これを比丘自境界を行ずるに父に從ひて得る所なりと謂ふ。云何が、比丘壽なる。この比丘(八)欲定如意足を修し遠離に依り無欲に依り滅盡に依り出要に趣向し(九)精進定を修し、(一〇)心定を修し、(一一)思惟定如意足を修し遠離に依り無欲に依り滅盡に依り出要に趣向す。これを比丘の壽と謂ふ。云何が比丘の色なる、この比丘禁戒を修習し從解脫を守護し又また善く威儀禮節を攝し纖介の罪を見て常に畏怖を懷き學戒を受持す。これを比丘の色と謂ふ。云何が比丘の樂なる。この比丘欲を離れ惡不善の法を離れ乃至第四禪を得成就して遊ぶ。これを比丘の樂と謂ふ。云何が比丘の力なる。この比丘諸漏已に盡きて無漏を得、心解脫し慧解脫し現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。これを比丘の力と謂ふ。比丘、我更に有を見ず、力降伏すべからず。魔王の力の如し。彼の漏盡の比丘は則ち無上聖慧の力を以て能く降伏す』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第十五

【七】「內身を觀じて身の如く、內覺を觀じて覺の如く、內心を觀じて心の如く、內法を觀じて法の如し」といふべきを約めたるものにして四念處なり。

【八】欲定（Chanda-samādhi）。

【九】精進定（Viriya-samādhi）。

【一〇】心定(Citta-samādhi)。

【一一】思惟定(Vimaṁsa-samādhi)。

めば壽すなはち轉た增し形色轉た好し。我等應に共に更に行善を增すべし。云何が當に共に更に行善を增すべき。我等已に殺を離れ殺を斷じ、不與取を離れ不與取を斷じ、邪婬を離れ邪婬を斷じ、妄言を離れ妄言を斷じ、兩舌を離れ兩舌を斷じ、麁言を離れ麁言を斷じ、綺語を離れ綺語を斷じ、貪嫉を離れ貪嫉を斷じ、瞋恚を離れ瞋恚を斷じ、邪見を離れ邪見を斷ず。然るに故非法・欲惡・貪行・邪法有り。我等寧ろこの三惡不善の法を離れ三惡不善の法を斷ずべく、我等應に共にこの善法を行ずべしと。彼すなはち共に是の如き善法を行ず。善法を行じ已りて壽すなはち轉た增し形色轉た好し。彼壽轉た增し色轉た好くなり已りて比丘、壽二萬歲の人の生子壽四萬なり。比丘、人壽四萬歲の時父母に孝順にして沙門梵志を尊重し恭敬し奉行順事し福業を修習し後世の罪を見る。彼父母に孝順にして沙門・梵志を尊重し恭敬し奉行順事し福業を修習し後世の罪を見るに因るが故に比丘、壽四萬歲の人の生子壽八萬なり。比丘、人壽八萬歲の時この閻浮洲極大豐樂にして多く人民有り、村邑相近きこと雞の一飛の如し。比丘、人壽八萬歲の時女年五百にして乃ち當に出嫁すべし。比丘、人壽八萬歲の時唯是の如き病有り、寒熱・大小便・欲・不食・老にして更に餘患無し。比丘、人壽八萬歲の時王有りて[六]螺と名づく。轉輪王と爲り聰明にして智慧あり、四種の軍有りて天下を整御し己に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶これを謂ひて七と爲す。千子具足し顏貌端正、勇猛無畏にして能く他の衆を伏す。彼必ずこの一切の地乃至大海を統領するに刀杖を以てせずして法を以てし、敎令して安樂を得しむ。比丘、諸の刹利頂生王人主と爲るを得て天下を整御し自境界を行ずるに父に從ひて得し所なり。彼自境界を行ずるに父に從ひて得し所なるに因りて壽轉た減ぜず形色惡からず未だ曾て樂を失はず、力亦衰へず。諸の比丘、汝等亦應に是の如く鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道し自境界を行ずるに父に從ひて得る所なるべし。諸の比丘、汝等自境界を行ずるに父に從ひて得る所なるに因

【六】螺(Saṅkha)「長阿含經」一にては儴佉「中阿含經」一三卷「說本經」參照。

二千五百歳の人亦この念を作す、若し善を學するを求めば壽すなはち轉た增し形色轉た好し。我等應に共に更に行善を增すべし。云何が當に共に更に行善を增すべき。我等已に殺を離れ殺を斷じ、不與取を離れ不與取を斷じ、邪婬を離れ邪婬を斷じ、妄言を離れ妄言を斷じ、兩舌を離れ兩舌を斷じ、麁言を離れ麁言を斷じ、綺語を離れ綺語を斷ず。然るに故貪嫉を行ず。我等寧ろ貪嫉を離れ貪嫉を斷ずべし。我等應に共にこの善法を行ずべしと。彼すなはち共に是の如き善法を行ず。善法を行じ已りて壽すなはち轉た增し形色轉た好し。彼壽轉た增し色轉た好くなり已りて比丘、壽二千五百歳の人の生子壽五千なり。比丘、壽五千歳の人亦この念を作す、若し善を學するを求めば壽すなはち轉た增し形色轉た好し。我等應に共に更に行善を增すべし。云何が當に共に更に行善を增すべき。我等已に殺を離れ殺を斷じ、不與取を離れ不與取を斷じ、邪婬を離れ邪婬を斷じ、妄言を離れ妄言を斷じ、兩舌を離れ兩舌を斷じ、麁言を離れ麁言を斷じ、綺語を離れ綺語を斷じ、貪嫉を離れ貪嫉を斷ず。然るに故瞋恚を行ず。我等寧ろ瞋恚を離れ瞋恚を斷ずべし。我等應に共にこの善法を行ずべしと。彼すなはち共に是の如き善法を行ず。善法を行じ已りて壽すなはち轉た增し形色轉た好し。彼壽轉た增し色轉た好くなり已りて比丘、壽五千歳の人の生子壽一萬なり。比丘、壽萬歳の人亦この念を作す、若し善を學するを求めば壽すなはち轉た增し形色轉た好し。我等應に共に更に行善を增すべし。云何が當に共に更に行善を增すべき。我等已に殺を離れ殺を斷じ、不與取を離れ不與取を斷じ、邪婬を離れ邪婬を斷じ、妄言を離れ妄言を斷じ、兩舌を離れ兩舌を斷じ、麁言を離れ麁言を斷じ、綺語を離れ綺語を斷じ、貪嫉を離れ貪嫉を斷じ、瞋恚を離れ瞋恚を斷ず。然るに故邪見を行ず。我等寧ろ邪見を離れ邪見を斷ずべし。我等應に共にこの善法を行ずべしと。彼すなはち共に是の如き善法を行ず。善法を行じ已りて壽すなはち轉た增し形色轉た好し。彼壽轉た增し色轉た好くなり已りて比丘、壽萬歳の人の生子壽二萬なり。比丘、壽二萬歳の人亦この念を作す、若し善を學するを求

し。我等應に共にこの善法を行ずべしと。彼すなはち共に是の如き善法を行ず。善法を行じ已りて壽すなはち轉た增し形色轉た好し。彼壽轉た增し色轉た好くなり已りて比丘、壽八十歳の人の生子壽百六十なり。比丘、壽百六十歳の人亦この念を作す、若し善を學するを求めば壽すなはち轉た增し形色轉た好し。我等應に共に更に行善を增すべし。云何が當に共に更に行善を增すべき。我等已に殺を離れ殺を斷じ、不與取を離れ不與取を斷じ、邪婬を離れ邪婬を斷じ、妄言を離れ妄言を斷ず。然るに故兩舌を行ず。我等寧ろ兩舌を離れ兩舌を斷ずべし。我等應に共にこの善法を行ずべしと。彼すなはち共に是の如く善法を行ず。善法を行じ已りて壽すなはち轉た增し形色轉た好し。彼壽轉た增し色轉た好くなり已りて比丘、壽百六十歳の人の生子壽三百二十歳なり。比丘、壽三百二十歳の人亦この念を作す、若し善を學するを求めば壽すなはち轉た增し形色轉た好し。我等應に共に更に行善を增すべし。云何が當に共に更に行善を增すべき。我等已に殺を離れ殺を斷じ、不與取を離れ不與取を斷じ、邪婬を離れ邪婬を斷じ、妄言を離れ妄言を斷じ、兩舌を離れ兩舌を斷ず。然るに故麁言を行ず。我等寧ろ麁言を離れ麁言を斷ずべし。我等應に共にこの善法を行ずべしと。彼すなはち共に是の如き善法を行ず。善法を行じ已りて壽すなはち轉た增し形色轉た好し。彼壽轉た增し色轉た好くなり已りて比丘、壽三百二十歳の人の生子壽六百四十なり。比丘、壽六百四十歳の人亦この念を作す。若し善を學するを求めば壽すなはち轉た增し形色轉た好し。我等應に共に更に行善を增すべし。云何が當に共に更に行善を增すべき。我等已に殺を離れ殺を斷じ、不與取を離れ不與取を斷じ、邪婬を離れ邪婬を斷じ、妄言を離れ妄言を斷じ、兩舌を離れ兩舌を斷じ、麁言を離れ麁言を斷ず。然るに故綺語を行ず。我等寧ろ綺語を離れ綺語を斷ずべし。我等應に共にこの善法を行ずべしと。彼すなはち共に是の如き善法を行ず。善法を行じ已りて壽すなはち轉た增し形色轉た好し。彼壽轉た增し色轉た好くなり已りて比丘、壽六百四十歳の人の生子壽二千五百なり。比丘、壽

り安隱にして家に歸り相見て喜歡し慈愍心を生じ極めて相愛念するが如し。是の如く彼の人七日を過ぎて後則ち山野より隱處より出で更に互に相見て慈愍心を生じ極めて相愛念す。共に相見已りてすなはちこの語を作す、諸賢、我今相見、今安隱を得。我等坐して不善の法を生ずるが故に、今これに値ひ且るに親族死盡す。我等寧ろ共に善法を行ずべし。云何が當に共に善法を行ずべきや。我等皆これ殺生の人なり。今寧ろ共に殺を離れ殺を斷ずべし。我等應に共にこの善法を行ずべしと。彼すなはち共に是の如き善法を行ず。善を行じ已りて壽すなはち轉た增し形色轉た好し。彼壽轉た增し色轉た好くなり已りて比丘、壽十歲の人の生子壽二十なり。比丘、壽二十歲の人またこの念を作す、若し善を學するを求めば壽すなはち轉た增し形色轉た好し。我等應に共に更に行善を增すべし。云何が當に共に更に行善を增すべき。我等已に共に殺を離れ殺を斷ず。然るに故共に與へざるに而も取るを行ず。我等寧ろ不與取を離れ不與取を斷ずべし。我等應に共にこの善法を行ずべしと。彼すなはち共に是の如き善法を行ず。善法を行じ已りて壽すなはち轉た增し形色轉た好し。彼壽轉た增し色轉た好くなり已りて比丘、壽二十歲の人の生子壽四十なり。比丘、壽四十歲の人亦この念を作す、若し善を學するを求めば壽すなはち轉た增し、形色轉た好し。我等應に共に更に行善を增すべし。云何が當に共に更に行善を增すべき。我等已に殺を離れ殺を斷じ、不與取を離れ不與取を斷ず。然るに故邪婬を行ず。我等寧ろ邪婬を離れ邪婬を斷ずべし。我等應に共にこの善法を行ずべしと。彼すなはち共に是の如き善法を行ず。善法を行じ已りて壽すなはち轉た增し形色轉た好し。彼壽轉た增し色轉た好くなり已りて比丘、壽四十歲の人の生子壽八十なり。比丘、壽八十歲の人亦この念を作す、若し善を學するを求めば壽すなはち轉た增し形色轉た好し。我等應に共に更に行善を增すべし。云何が當に共に更に行善を增すべき。我等已に殺を離れ殺を斷じ、不與取を離れ不與取を斷じ、邪婬を離れ邪婬を斷ず。然るに故妄言を行ず。我等寧ろ妄言を離れ妄言を斷ずべ

丘、父の壽千歲、子の壽五百歲なり。(7)比丘、人壽五百歲の時壽を盡して父母に孝せず沙門・梵志を尊敬する能はず、順事を行ぜず福業を作さず後世の罪を見ず。彼父母に孝せず沙門梵志を尊敬する能はず、順事を行ぜず福業を作さず後世の罪を見ざるに因るが故に比丘、父の壽五百歲子の壽或は二百五十或は二百歲なり。(8)比丘、今若し長壽有るも或は壽百歲或は至らざる者あり。』佛また告げて曰はく『比丘、未來久遠の時人壽十歲なり。(9)比丘、人壽十歲の時女生れて五月にして卽便ち出嫁す。比丘、人壽十歲の時穀有りて稗子と名づけ第一の美食と爲す。猶ほ今人粳粮を上饌と爲すが如し。比丘、是の如く人壽十歲の時穀有りて稗子と名づけ第一の美食と爲す。比丘、人壽十歲の時若し今日所有する美味酥油・鹽蜜・甘蔗糖彼の一切盡く沒す。比丘、人壽十歲の時若し十惡業道を行ぜば、彼すなはち人の爲に敬重せらる。猶ほ今日若し十善業道を行ぜば彼すなはち人の爲に敬重せらるゝが如し。比丘、人壽十歲の時亦復是の如く若し十惡業道を行ぜば彼すなはち人の敬重する所と爲る。比丘、人壽十歲の時都て善名有ること無し。況やまた十善業道を行ずる有るをや。比丘、人壽十歲の時人有りて彈罰と名づけ周行遍往して家々に彈罰す。比丘、人壽十歲の時母その子に於て極めて害心有り、子亦母に於て極めて害心有り、父子・兄弟・姉妹・親屬・展轉相向ひて賊害心有り。猶ほ獵師彼の鹿を見已りて極めて害心有るが如し。比丘、人壽十歲の時亦復是の如く母その子に於て極めて害心有り子亦母に於て極めて害心有り、父子・兄弟・姉妹・親屬・展轉相向ひて賊害心有り。比丘、人壽十歲の時當に七日の刀兵劫有るべし。彼若し草を捉ふれば卽ち化して刀と成り若し樵木を捉ふれば亦化して刀と成る。彼この刀を以て各々相殺す。彼七日の刀兵劫に於て七日を過ぎてすなはち止む。その時また人有り慚恥羞愧を生じ厭惡して彼の人を愛せず、七日の刀兵劫の時すなはち山野に入り隱處に在りて藏れ、七日を過ぎ已れば則ち山野より隱處より出で更に互に相見て慈愍心を生じ、極めて相愛念すること猶ほ慈母唯一子有り、與に久しく離別し遠くより來り還

くなり已りて、比丘、父の壽四萬歳子の壽二萬歳なり。(2)比丘、人壽二萬歳の時人有り他の財物を盜む。その主捕伺收縛し送りて刹利頂生王に詣り白して曰く、天王、この人我が財物を盜む。願はくは天王、治したまへと。刹利頂生王彼の人に問ひて曰く、汝實に盜むやと。時に彼の盜者すなはちこの念を作す、刹利頂生王若しその實を知らば或は我を縛鞭し或は拋ち或は擯て或は錢物を罰し或は種々苦治し或は標上に貫き或はその首を梟さん。我寧ろ妄言を以て刹利頂生王を欺誑すべきやと。念じ已りて白して曰く、天王、我偸盜せずと。これを困貧にして財物無き者給恤する能はざるが故に人轉た窮困し、窮困に因るが故に盜轉た滋す甚だしく、盜滋す甚だしきに因るが故に刀殺轉た增し、刀殺增すに因るが故にすなはち妄言兩舌轉た增し、妄言兩舌增すに因るが故に彼の人壽轉た減じ形色轉た惡しと爲す。彼壽轉た減じ色轉た惡くなり已りて比丘、父の壽二萬歳子の壽一萬歳なり。(3)比丘、人壽萬歳の時人民或は德有り或は德無し。若し德無き者は彼德有る人の爲に嫉妬の意を起してその妻を犯す。これを困貧にして財物無き者給恤する能はざるが故に人轉た窮困し、窮困に因るが故に盜轉た滋す甚だしく、盜滋す甚だしきに因るが故に刀殺轉た增し、刀殺增すに因るが故にすなはち妄言兩舌轉た增し、妄言兩舌增すに因るが故にすなはち嫉妬・邪婬轉た增し、嫉妬・邪婬增すに因るが故に彼の人壽轉た減じ形色轉た惡しと爲す。彼壽轉た減じ色轉た惡くなり已りて比丘、父の壽萬歳子の壽五千歳なり。(4)比丘人壽五千歳の時三法轉た增す。非法・欲貪・邪法なり。三法增すに因るが故に彼の人壽轉た減じ形色轉た惡し。彼壽轉た減じ色轉た惡くなり已りて比丘、父の壽五千歳子の壽二千五百歳なり。(5)比丘、人壽二千五百歳の時また三法轉た增しぬ。兩舌・麁言・綺語なり。三法增すに因るが故に彼の人壽轉た減じ形色轉た惡し。彼壽轉た減じ色轉た惡くなり已りて比丘、父の壽二千五百歳、子の壽千歳なり。(6)比丘、人壽千歳の時一法轉た增しぬ、邪見これなり。一法增すに因るが故に彼の人壽轉た減じ形色轉た惡し。彼壽轉た減じ色轉た惡くなり已りて比

ら濟ふ無しと。刹利頂生王卽ち財物を出してこれに給與し盜者に語げて曰く、汝等還り去りて後また作すこと莫れと。こゝに於て國中の人民刹利頂生王若し國中に人盜を行ふ者有れば王すなはち財物を出してこれに給與すと聞き、これに由るの故に人この念を作す、我等亦應に他の財物を盜むべしと。こゝに於て國人各々競ひ行じて他の財物を盜む。これを困貧にして財物無き者を給恤する能はざるが故に人轉た窮困し、窮困に因るが故に彼の人壽轉た減じ形色轉た惡しと爲す。彼壽轉た減じ色轉た惡くなり已りて、比丘、父の壽八萬歲、子の壽四萬歲なり。(1)比丘、彼の人壽四萬歲の時人有りてすなはち行きて他の財物を盜む。その主捕伺收縛し送りて刹利頂生王に詣り白して曰く、天王、この人我が物を盜む。願はくは天王治したまへと。刹利頂生王彼の人に問ひて曰く、汝實に盜むやと。彼の人白して曰く、天王、我實に偸盜す。所以者何。貧困を以ての故に若し盜まざればすなはち以て自ら濟ふ無しと。刹利頂生王聞き已りてすなはちこの念を作す、若し我が國中に他物を盜む有り、更に財物を出して盡く給與すれば是の如くして唐しく、空しく國藏を竭さんも盜遂に滋す甚だしからん。我今寧ろ極利刀を作るべし。若し我が國中に偸盜する有れば、すなはち收捕して取らへ高標の下に坐せしめその頭を斬截せんと。こゝに於て刹利頂生王後すなはち勅令して極利刀を作り若し國中に他物を盜む有れば卽ち勅して捕取し高標の下に坐せしめ、その頭を斬截す。國中の人民刹利頂生王勅して利刀を作り、若し國中に他物を盜む有れば卽便ち捕取し高標の下に坐せしめ、その頭を斬截すと聞き、我亦寧ろ效ひて利刀を作り持ち行きて物を劫むべし。若し從ひて物を劫めば彼の物の主を捉へてその頭を截らんと。是に於て彼の人則ち後時に於て效ひて利刀を作り、持ち行きて物を劫め彼の物の主を捉へてその頭を截斷す。これを困貧にして財物無き者給恤する能はざるが故に人轉た窮困し、窮困に因るが故に盜轉た滋す甚だしく、盜滋す甚だしきに因るが故に刀殺轉た增し、刀殺增すが故に彼の人壽轉た減じ、形色轉た惡しと爲す。彼壽轉た減じ色轉た惡

縱・給使・明燈を以てしたまふべし。若し王の國中に上尊名德の沙門梵志者有れば、當に自ら時に隨ひて彼の所に往詣し法を問ひ法を受けたまふべし。諸尊、何者か善法にして何者か不善の法なる。何者か罪と爲し何者か福と爲す。何者か妙と爲し何者か妙に非ざる。何者か黑と爲し何者か白と爲す。黑白の法何より生ずるや。何者か現世の義にして何者か後世の義なる。云何が作行して善を受け惡を受けざると。彼より聞き已りて所說の如く行じたまへ。若し王の國中に貧窮者有れば當に財物を出し用てこれを給恤したまふべし。天王、これを相繼の法と謂ひ當に善く取りて學したまふべし。善く取りて學し已りて十五日に於て從解脫を說く時沐浴澡洗し正殿に昇り已るや、彼の天の輪寶必ず東方より來り、輪に千輻有りて一切具足し清淨自然にして人の造る所に非ず、色火燄の如く光明昱爍ならんと。利利頂生王すなはち後時に於て觀法・如法・行法・如法にして太子・后妃・婇女及び諸の臣民・沙門梵志乃至蜫蟲の爲に法齋を奉持し月の八日十四日十五日に布施を修行し、諸の窮乏せる沙門・梵志・貧窮・孤獨・遠來の乞者に施すに飲食・衣被・車乘・華鬘・散華・塗香・屋舍・床褥・氍氀・綩綖・給使・明燈を以てす。若しその國中に上尊名德の沙門・梵志者有ればすなはち自ら時に隨ひて彼の所に往詣し法を問ひ法を受く、諸尊、何者か善法にして何者か不善の法なる。何者か罪と爲し何者か福と爲す。何者か妙と爲し何者か妙に非ざる。何者か黑と爲し何者か白と爲す。黑白の法何より生ずるや。何者か現世の義にして何者か後世の義なる。云何が作行して善を受け惡を受けざると。彼より聞き已りて所說の如く行ず。然るに國中に民貧窮者有るも物を出して用てこれを給恤する能はず。これ困貧にして財物無き者の爲に給恤する能はざるが故に、人轉た窮困し窮困に因るが故にすなはち他物を盜み、偸盜に因るが故にその主捕伺收縛し送りて利利頂生王に詣り白して曰く、天王、この人我が物を盜む。願はくは大王治したまへと。利利頂生王彼の人に問ひて曰く、汝實に盜むやと彼の人白して曰く、天王、我實に偸盜す。所以者何。天王、貧困を以ての故に若し盜まざればすなはち以て自

志國界を案行し國・人民轉た衰滅に就きまた增益せざるを見てすなはちこの念を作す。刹利頂生王自ら出意して國を治するを以ての故に、國土人民轉た衰滅に就きまた增益せず。猶ほ昔時諸の轉輪王相繼の法を學し國土人民轉た增し熾盛にして衰滅有ること無きが如し。この刹利頂生王も亦復是の如く、自ら出意して國を治す。自ら出意して國を治するを以ての故に、國土人民轉た衰滅に就きまた增益せずと。國師梵志卽ち共に刹利頂生王に往詣して白して曰く、天王、當に知りたまふべし。天王自ら出意して國を治したまふ。自ら出意して國を治したまふを以ての故に國土人民轉た衰滅に就きまた增益せず。猶ほ昔時諸の轉輪王相繼の法を學し國土人民轉た增し熾盛にして衰滅有ること無きが如し。今天王も亦復是の如く自ら出意して國を治したまふ。自ら出意して國を治したまふを以ての故に國土人民轉た衰滅に就きまた增益せずと。刹利頂生王聞き已りて告げて曰く、梵志、我當に云何がすべきと。國師梵志白して曰く、天王、國中に人有り聰明にして智慧あり算數を明知す。國中に大臣眷屬有り經を學し經を明かにし相繼の法を誦習し受持すること、猶ほ我等一切の眷屬の如し。天王、當に相繼の法を學したまふべし。相繼の法を學し已りて十五日に於て從解脫を說く時沐浴澡洗し正殿に昇り已るや、彼の天の輪寶必ず東方より來り、輪に千輻有りて一切具足し清淨自然にして人の造る所に非ず、色火燄の如く光明昱爍ならんと。刹利頂生王また問ひて曰く、梵志、云何が相繼の法我をして學せしめんと欲し、我をして學せしめ已りて十五日に於て從解脫を說く時、沐浴澡洗し正殿に昇り已るや、彼の天の輪寶必ず東方より來り、輪に千輻有りて一切具足し清淨自然にして人の造る所に非ず、色火燄の如く光明昱爍たるやと。國師梵志白して曰く、天王、當に觀法・如法・行法・如法にしたまふべし。當に太子・后妃・婇女及び諸の臣民・沙門・梵志乃至蜫蟲の爲に法齋を奉持し、月の八日・十四日・十五日に布施を修行し諸の窮乏せる沙門・梵志・貧窮・孤獨・遠來の乞者に施すに飲食・衣被・車乘・華鬘・散華・塗香・屋舍・床褥・氍氀・椀

物を出し時に隨ひて給恤す。刹利頂生王後十五日に於て從解脫を說きし時沐浴澡洗して正殿に昇り已るや、彼の天の輪寶東方より來り輪に千輻有りて一切具足し清淨自然にして人の造る所に非ず、色火焰の如く光明昱爍たり。彼亦轉輪王たるを得、亦七寶を成就し亦人の四種の如意の德を得。云何が七寶を成就し人の四種の如意の德を得るや。亦前說の如し。彼の轉輪王而も後時に於て天の輪寶移りて忽ち本の處を離る。人有り、これを見て轉輪王[の所]に詣り白して曰く、天王、當に知るべし。天の輪寶移りて本の處を離る。太子、我曾て父堅念王仙人に從ひてこれを聞く、若し轉輪王の天の輪寶移りて本の處を離るれば、彼の王必ず久しく住せず命久しく存せずと。太子、我已に人間の欲を得、今當にまた天上の欲を求むべし。太子、我鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道せんと欲す。太子、我今この四天下を以て汝に付授す。汝當に如法に治化すべし。非法を以てすること莫れ。國中に諸の惡業非梵行の人有らしむること無かれ。太子、汝後に若し天の輪寶移りて本の處を離るゝを見ば、汝亦當にまたこの國政を以て汝の太子に授け善くこれを教勅すべし。太子に國を授け已りて、汝亦當に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すべしと。こゝに於て轉輪王太子に國を授け善く教勅し已りて、すなはち鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道す。彼の轉輪王出家學道して七日の後彼の天の輪寶卽ち沒して現れず。天輪を失ひ已りて刹利頂生王而も憂慼せず、但欲に染み欲に著し欲を貪りて厭くこと無く、欲の爲に縛せられ欲の爲め觸れられ欲の爲に使はれ、災患を見ず、出要を知らずすなはち自ら出意して國を治す。自ら出意して國を治するを以ての故に國遂に衰滅してまた增益せず。猶ほ昔時諸の轉輪王相繼の法を擧し國土人民轉た增し熾盛にして衰減有ること無きが如し。刹利頂生王も亦復是の如く自ら出意して國を治し、自ら出意して國を治するを以ての故に國遂に衰滅しまた增益せず。こゝに於て國師梵

浴澡洗して正殿に昇り已るや、彼の天の輪寶東方より來り、輪に千輻ありて一切具足し、清淨自然にして人の造る所に非ず、色火焰の如く光明晃爍たるやと。父堅念王仙人また子に告げて曰く、汝當に觀法如法・行法如法なるべし。當に太子后妃婇女及び諸の臣民沙門梵志乃至蜫蟲の爲に法齋を奉持し、月の八日十四日十五日に布施を修行し諸の窮乏の沙門・梵志・貧窮・孤獨・遠來の乞者に施すに飲食・衣被・車乘・華鬘・散華・塗香・屋舍・床褥・氍氀・綩綖・給使・明燈を以てすべし。若し汝の國中に上尊名徳の沙門梵志有らば汝當に時に隨ひて彼の所に往詣し法を問ひ法を受くべし、諸尊、何者か善法にして何者か不善法なる。何者か罪と爲し何者か福と爲す。何者か妙と爲し何者か妙に非ざる。何者か黑と爲し何者か白と爲す。黑白の法何に從ひて生ずるや。何者か現世の義にして何者か後世の義なる。云何が作行して善を受けて惡を受けざるやと。彼に從ひ聞き已りて所說の如く行ぜよ。若し汝が國中に貧窮者有らば當に財物を出して以てこれに給恤すべし。天王、これを相繼の法と謂ひ、汝當に善く學すべし。汝善く學し已りて十五日に於て從解脱を說く時、沐浴澡洗して正殿に昇り已るや、彼の天の輪寶必ず東方より來り、輪に千輻有りて一切具足し清淨自然にして人の造る所に非ず、色火焰の如く光明晃爍たりと。刹利頂生王すなはち後時に於て觀法如法行法如法にして太子后妃婇女及び諸の臣民沙門梵志乃至蜫蟲の爲に法齋を奉持し、月の八日十四日十五日に布施を修行し諸の窮乏の沙門・梵志・貧窮・孤獨・遠來の乞者に施すに飲食・衣被・車乘・華鬘・散華・塗香・屋舍・床褥・氍氀・綩綖・給使・明燈を以てす。若しその國中に上尊名徳の沙門梵志有れば、すなはち自ら時に隨ひて彼の所に往詣して法を問ひ法を受く、諸尊、何者か善法にして何者か不善の法なる。何者か罪と爲し何者か福と爲す。何者か妙と爲し何者か妙に非ざる。何者か黑と爲し何者か白と爲す。黑白の法何より生ずるや。何者か現世の義にして何者か後世の義なる。云何が作行して善を受け惡を受けざるやと。彼に從ひて聞き已りて所說の如く行ず。若しその國中に貧窮者有れば卽ち財

時に於て天の輪寶移りて忽ち本の處を離る。人有りこれを見て堅念王「の所」に詣り白して曰く、天王、當に知るべし、天の輪寶移りて本の處を離る。太子、我自ら曾て古人に從ひてこれを聞く、若し轉輪王の天の輪寶移りて本の處を離るれば、彼の王必ず久しく住せず、命久しく存せずと。太子、我已に人間の欲を得、今當にまた天上の欲を求むべし。太子、我鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道せんと欲す。太子、我今この四天下を以て汝に付授す。汝當に如法に治化すべし。非法を以てすること莫れ、國中に諸の惡業非梵行の人有らしむること無かれ。太子、汝後に若し天の輪寶移りて本の處を離るゝを見ば汝亦當にまたこの國政を以て汝の太子に授け、善くこれを教勅すべし。太子に國を授け已りて汝亦當にまた鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すべしと。ここに於て堅念王太子に國を授け、善く教勅し已りてすなはち鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道す。時に堅念王出家學道して七日の後彼の天の輪寶卽ち沒して現れず。天輪を失し已りて[五]刹利頂生王すなはち大に憂惱愁慼して樂しまず、刹利頂生王卽ち父堅念王仙人の所に詣り、到り已りて白して曰く、天王當に知るべし、天王學道したまひて七日の後彼の天の輪寶すなはち沒して現れずと。父堅念王仙人、子刹利頂生王に告げて曰く、汝天の輪寶を失へるを以ての故に而も憂慼を懷くこと莫れ。所以者何。汝父よりこの天輪を得るにあらずと。刹利頂生王また父に白して曰く、天王、我今當に何の所爲すべきぞと。父堅念王仙人その子に告げて曰く、汝當應に相繼の法を學すべし。汝若し相繼の法を學せば十五日に於て從解脫を說く時沐浴澡洗して正殿に昇り已るや、彼の天の輪寶必ず東方より來り、輪に千輻有りて一切具足し、淸淨自然にして人の造る所に非ず、色火焰の如く光明昱爍たらんと。刹利頂生王また父に白して曰く、天王、云何が相繼の法、我をして學せしめんと欲し、我をして學せしめ已り十五日に於て從解脫を說く時、「我」沐

【五】　一一卷「四洲經」註を見よ。

比丘尼正念を以て良醫と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼正念を成就して良醫と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣正御床有りて敷くに氍氀毾㲪を以てし覆ふに錦綺羅穀を以てし襯體被兩頭安枕有り加陵伽波恕邏波遮悉多羅那なるが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼無礙定を以て正御床と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼無礙定を成就して正御床と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣名珠寶有るが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼不動心解脱を以て名珠寶と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼不動心解脱を成就して名珠寶と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣極淨に沐浴し好香もて身に塗り身極めて清淨なるが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼自ら己心を觀ずるを以て身極淨を爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼自ら己心を觀ずるを成就して身淨を爲せばすなはち能く世尊の法及び比丘衆・戒・不放逸・布施及び定を敬重し奉事す』。佛說是の如し。尊者舍梨子及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

七十、轉輪王經第六[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時[二]佛摩兜麗剎利に遊び㮈林駛河岸に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『諸の比丘、當に自ら法燈を然し自ら己の法に歸すべし。餘燈を然すこと莫れ、餘法に歸すること莫れ。諸の比丘、若し自ら法燈を然し自ら己の法に歸し、餘燈を然さず餘法に歸せざれば、すなはち能く學を求め利を得、福を獲ること無量なり。所以者何。比丘、昔時王有り名づけて[三]堅念と曰ふ。轉輪王と爲り聰明にして智慧あり、四種の軍有りて天下を整御し己に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就し人の四種の如意の德を得。云何が七寶を成就し人の四種の如意の德を得るや。[四]前の所說の如く七寶を成就し人の四種の如意の德を得。ここに於て堅念王而も後

【一】D. 26. Cakkavatti-sihanāda-suttanta「長阿含」六卷「轉輪聖王修行經」。
【二】摩兜麗(Mātulā)。
【三】堅念(Daḷhanemi)、「長阿含經」にては堅固念とあり。
【四】一四卷「大天㮈林經」を見よ。

り成し雜色もて種々に莊飾するが如し。是の如く比丘・比丘尼止觀を以て車と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼止觀を成就して以て車と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣駕御者有るが如し。謂く御車人なり。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼正念を以て駕御人と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼正念を成就して駕御人と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣極めて高き幢有るが如し。舍梨子、比丘・比丘尼己心を以て高幢と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼己心を成就して高幢と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣好道路有りて平正坦然にして唯園觀にのみ趣くが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼八支聖道を以て道路と爲し、平正坦然にして唯涅槃のみに趣く。舍梨子、若し比丘・比丘尼八支聖道を成就して以て道路と爲し平正坦然にして唯涅槃のみに趣けばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣主兵臣有り聰明にして智慧あり分別ありて曉了するが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼智慧を以て主兵臣と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼智慧を成就して主兵臣と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣大正殿有りて極廣高敞なるが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼智慧を以て大正殿と爲す、舍梨子、若し比丘・比丘尼智慧を成就して大正殿と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣高殿上に昇り殿下の人の往來走踊住立坐臥するを觀るが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼以て無上智慧の高殿に昇り自ら己心を觀ずるを爲し周正柔軟にして歡喜遠離す。舍梨子、若し比丘・比丘尼無上智慧の高殿を成就して自ら己心を觀ずるを爲し周正柔軟にして歡喜遠離すればすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣宗正卿有りて宗族を諳練するが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼四聖種を以て宗正卿と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼四聖種を成就して宗正卿と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣名良醫有りて能く衆病を治するが如し。舍梨子、是の如く比丘・

王及び大臣餚饌美食種々の異味有るが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼喜を以て食と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼喜を成就して以て食と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣種々の[一]飲・㮈飲・瞻波飲・蒲桃飲・末蹉提飲有るが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼法味を以て飲と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼法味を成就して以て飲と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣[二]妙華鬘・青蓮華鬘・瞻蔔華鬘・修摩那華鬘・婆師華鬘・阿提牟哆華鬘有るが如し、舍梨子、是の如く比丘・比丘尼三定を以て華鬘を爲す。空・無願・無相なり。舍梨子、若し比丘比丘尼三定を成就して華鬘と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣諸の屋舍・堂閣・樓觀有るが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼三室を以て屋舍と爲す。天室・梵室・聖室なり。舍梨子、若し比丘・比丘尼三室を成就して屋舍と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣典守者謂く守室人有るが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼智慧を以て守室人と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼智慧を成就して守室人と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣諸國邑に四種の租税有り、一分は、王に供し及び皇后宮中の婇女に給し、二分は太子群臣に供給し、三分は國の一切民人に供し、四分は沙門梵志に供給するが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼四念處を以て租税と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼四念處を成就して租税と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣四種の軍・象軍・馬軍・車軍・歩軍有るが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼四正斷を以て四種の軍と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼四正斷を成就して四種の軍と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣種々の輿・象輿・馬輿・車輿・歩輿有るが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼四如意足を以て掆輿と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼四如意足を成就して以て輿と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣種々の車莊有りて衆の好き師子・虎・豹の斑文の皮を以て織

【一】Amba-pāna, Jambu-, Madhu-, Muddhika 八種の漿水の中四種のみを擧ぐ。Niddesa, i. 372.
【二】一四卷「大善見王經」註を見よ。

天冠・珠柄の拂及び嚴飾せる屣有りてその身を守衞し安隱を得しむるが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼禁戒を持するを以て梵行を衞るを爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼禁戒を成就し梵行を衞るを爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣守閤人有るが如し。舍梨子、比丘・比丘尼六根を護るを以て守閤人と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼六根を護るを成就し守閤人と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣守門の將有り聰明にして智慧あり分別ありて曉了するが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼正念を以て守門の將と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼正念を成就して守門の將と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣好浴池清泉平滿なる有るが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼自心を以て浴池泉と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼自心を成就して浴池泉と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣沐浴人有りて常に洗浴せしむるが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼善知識を以て沐浴人と爲す、舍梨子、若し比丘・比丘尼善知識を成就して沐浴人と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及大臣塗身香・木蜜・沈水・栴檀・蘇合・雞舌・都梁有るが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼戒徳を以て塗香と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼戒徳を成就して塗香と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣好衣服初摩衣・錦繒衣・白氎衣・加陵伽波惒邏衣有るが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼慚愧を以て衣服と爲す。舍梨子、若し比丘比丘尼慚愧を成就して衣服と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣好床座極廣高大なる有るが如し。舍梨子、是の如く比丘比、丘尼四禪を以て床座と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼四禪を成就して床座と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣工剃師有りて常に洗浴せしむるが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼正念を以て剃師と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼正念を成就して剃師と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ

卷の第十五

六十九、三十喩經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び竹林加蘭哆園に住し大比丘衆と俱にして共に夏坐を受けたまひぬ。その時世尊十五日に於て從解脫を說きたまひし時比丘衆の前に在りて座を敷きて坐したまひぬ。世尊坐し已りてすなはち定意に入り諸の比丘の心を觀じたまひぬ。こゝに於て世尊比丘衆を見たまふに靜坐し默然として極めて默然たり。睡眠有ること無し。陰蓋を除けるが故に。比丘衆坐し甚深にして極めて甚深、息にして極めて息、妙にして極めて妙なりき。この時尊者舍梨子亦衆中に在りき。こゝに於て世尊告げて曰はく『舍梨子、比丘衆靜坐し默然として極めて默然たり。睡眠有ること無し陰蓋を除くが故に。比丘衆坐し甚深にして極めて甚深、息にして極めて息、妙にして極めて妙なり。舍梨子、誰か能く比丘衆を敬重し奉事する者ありや』。こゝに於て尊者舍梨子卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、是の如く比丘衆靜坐し默然として極めて默然たり、睡眠有ること無し。陰蓋を除けるが故に。比丘衆坐し甚深にして極めて甚深、息にして極めて息、妙にして極めて妙なり。世尊、能く比丘衆を敬重し奉事する者無し。唯世尊有りて能く法及び比丘衆・戒・不放逸・布施及び定を敬重し奉事したまふ。唯世尊有りて能く敬重し奉事したまふ』。世尊告げて曰はく『舍梨子、是の如し、是の如し、能く比丘衆を敬重し奉持する者無し。唯世尊有りて能く法及び比丘衆・戒・不放逸・布施及び定を敬重し奉事す。唯世尊有りて能く敬重し奉事す。舍梨子、猶ほ王及び大臣種々の嚴飾の具・繒綵錦罽・指環・臂釧肘瓔・咽鉗生色珠鬘有るが如し。舍梨子、是の如く比丘・比丘尼戒德を以て嚴飾の具と爲す。舍梨子、若し比丘・比丘尼戒德を成就して嚴飾の具と爲せばすなはち能く惡を捨て善を修習す。舍梨子、猶ほ王及び大臣五儀・式劍・蓋・

捨つる者を見ざらんはこの處り然らず。阿難、我今最後の生、最後の有、最後の身最後の形得、最後の我なり。我これ苦の邊なりと說く』。佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第十四

普周く結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。琉璃樓より出でゝ水精樓に入りて琉璃御床の敷くに氍氀毾㲪を以てし覆ふに錦綺羅穀を以てし襯體被・兩頭安枕有り、加陵伽波惒邏波遮悉多羅那なるに坐し、坐し已りてこの觀を作す。我これ最後の邊なり。欲を念じ恚を念じ害を念じ、鬪諍して相憎み諛謅し虛僞欺誑し妄言するの無量の諸の惡不善の法これ最後の邊なりと。心捨と倶にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。阿難、大善見王最後の時に於て微々の死痛を生ず。猶ほ居士或は居士の子極妙の食を食して小微の煩を生ずるが如し。阿難、大善見王、最後の時に於て微々の死痛を生ずるも亦復是の如し。阿難、その時大善見王四梵室を修習し念欲を捨て已りて、これに乘じて命終り梵天中に生ず。阿難、在昔異時の大善見王は汝異人と謂ふや。この念を作すこと莫れ。當に知るべし、即ちこれ我なり。阿難、我その時に於て自ら饒益を爲し亦他を饒益し多人を饒益し世間を愍傷し天の爲、人の爲、義及び饒益を求め安隱快樂を求めき。その時法を說きて究竟に至らず、白淨を究竟せず梵行を究竟せず梵行を究竟し訖らざりき。その時生老病死啼哭憂慼を離れず亦未だ一切の苦を脫するを得る能はざりき。阿難、我今出世し如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御天人師にして・佛衆祐と號すと。我今自ら饒益を爲し亦他を饒益し多人を饒益し世間を愍傷し天の爲人の爲義及び饒益を求め安隱快樂を求む。我今法を說きて究竟に至るを得、白淨を究竟し梵行を究竟し梵行を究竟し訖る。我今生老病死啼哭憂慼を離るゝを得、我今已に一切の苦を脫するを得。阿難、拘尸城に從ひ、惒跋單、力士の娑羅林に從ひ[17]尼連然河に從ひ求々河に從ひ[18]天冠寺に從ひ我が爲に床を敷きし處に從ひ、我その中間に於て七反身を捨て、中に於て六反轉輪王と爲り、今第七に如來・無所著・等正覺なり。阿難、我また世中天及び魔・梵・沙門・梵志、天より人に至るまで更にまた身を

【一七】尼連然河（Hiraññavati）。金河。跋提河。

【一八】天冠寺（Makuta-bandhana）。

念じたまふこと莫れ。八萬四千の象、八萬四千の馬、八萬四千の車、八萬四千の歩、八萬四千の小王に於て欲有り念有らば唯願はくは天王、悉く斷じ捨離し至終に念じたまふこと莫れと。阿難、大善見王彼の八萬四千の夫人及び女寶の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もてすなはち彼の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて發遣して還らしむ。阿難、彼の八萬四千の夫人及び女寶大善見王の發遣せるを知り已りて各拜辭して還る。阿難、彼の八萬四千の夫人及び女寶還り去りて久しからずして大善見王卽ち侍者と共に還りて大殿に昇り則ち金樓に入りて銀御床の敷くに氍氀毾㲪を以てし覆ふに錦綺羅縠を以てし襯體被・兩頭安枕有り加陵伽波惒邏波遮悉多羅那なるに坐し、坐し已りてこの觀を作す、我これ最後の邊なり。欲を念じ恚を念じ害を念じ鬪諍して相憎み諛諂し虛僞欺誑し妄言するの無量の諸の惡不善の法これ最後の邊なりと。心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。金樓より出でゝ次に銀樓に入り、金御床の敷くに氍氀毾㲪を以てし覆ふに錦綺羅縠を以てし襯體被・兩頭安枕有り加陵伽波惒邏波遮悉多羅那なるに坐し、坐し已りてこの觀を作す、我これ最後の邊なり。欲を念じ恚を念じ害を念じ、鬪諍して相憎み諛諂し虛僞欺誑し妄言するの無量の諸の惡不善の法これ最後の邊なりと。心悲と倶にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。銀樓より出でゝ琉璃樓に入り、水精の御床の敷くに氍氀毾㲪を以てし、覆ふに錦綺羅縠を以てし、襯體被・兩頭安枕有り加陵伽波惒邏波遮悉多羅那なるに坐し、坐し已りてこの觀を作す、我これ最後の邊なり。欲を念じ恚を念じ害を念じ、鬪諍して相憎み諛諂し虛僞欺誑し妄言するの無量の諸の惡不善の法これ最後の邊なりと。心喜と倶にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下一切に

なはち諸根を閉塞すと。阿難、こゝに於て女寶則ち前みて大善見王に往詣し到り已りて白して曰く、天王、當に知りたまふべし。彼の八萬四千の夫人及び女寶は盡くこれ天王の所有なり。唯願はくは天王常に我等を念じ乃ち命終るに至りたまへ。八萬四千の象、八萬四千の馬、八萬四千の車、八萬四千の歩、八萬四千の小王盡くこれ天王の所有なり。唯願はくは天王、常に我等を念じ乃ち命終るに至りたまへと。彼の時大善見王この語を聞き已りて女寶に告げて曰く、妹、汝等長夜に我をして惡を爲さしめ、慈を行はしめず。妹、汝等今より已後當に我をして慈を行はしめ、惡を爲さしむること莫るべしと。阿難、八萬四千の夫人及び女寶却きて一面に住し涕零悲泣してこの語を作す、我等この天王の妹に非ず。而も今天王我等を稱して妹と爲したまふと。阿難、彼の八萬四千の夫人及び女寶各々衣を以てその涙を抆拭し、また前みて大善見王に往詣し、到り已りて白して曰く、天王、我等云何が天王をして慈を行じて惡を爲さゞらしむるやと。大善見王答へて曰く、諸妹、汝等我が爲に應に是の如く說くべし、天王、知るや不や。人命短促なり。當に後世に就くべし。應に梵行を修すべし。生終らざる無し。天王、當に知りたまふべし、彼の法必ず來る。愛念すべからず、亦喜ぶべからず。一切の世を壞す。名づけ曰ひて死と爲す。こゝを以て天王、八萬四千の夫人及び女寶に於て念有り欲有らば唯願はくは天王、悉く斷じ捨離し至終に念じたまふこと莫れ。八萬四千の象、八萬四千の馬、八萬四千の車、八萬四千の歩、八萬四千の小王に於て天王、欲有り念有らば唯願はくは天王、悉く斷じ捨離し至終に念じたまふこと莫れと。諸妹、汝等是の如く我をして慈を行ぜしめ惡を爲さしめざれと。阿難、彼の八萬四千の夫人及び女寶白して曰く、天王、我等今より已後當に天王をして慈を行ぜしめ惡を爲さしめざるべし、天王、人命短促なり、當に後世に就くべし、彼の法必ず來る。愛念すべきに非ず亦憙ぶべからず。一切の世を壞す、名づけ曰ひて死と爲す。こゝを以て天王、八萬四千の夫人及び女寶に於て念有り欲有らば唯願はく天王、悉く斷じ捨離し至終に

し已りて欲を離れ惡不善の法を離れ覺有り觀有り離より生ずる喜樂の初禪に逮り成就して遊び、琉璃樓より出でゝ水精樓に入り、琉璃御床の敷くに氍毹𣰆𣯫を以てし覆ふに錦綺羅縠を以てし襯體被兩頭安枕有り加陵伽波惒邏波遮悉多羅那なるに坐し、坐し已りて欲を離れ惡不善の法を離れ覺有り觀有り、離より生ずる喜樂の初禪に逮り成就して遊ぶ。阿難、その時八萬四千の夫人及び女寶並に久しく大善見王を見ず、各飢虛を懷き渴仰して見んと欲す。こゝに於て八萬四千の夫人並に女寶に詣り白して曰く、天后、當に知るべし、我等並に久しく天王を覲ず。天后、我等今共に天王を見んと欲すと。女寶聞き已りて主兵臣に告ぐ、汝今當に知るべし、我等並に久しく天王を覲ず。今往きて見んと欲すと。主兵臣聞きて即ち八萬四千の夫人及び女寶を送りて大正殿に至り、八萬四千の象、八萬四千の馬、八萬四千の車、八萬四千の步、八萬四千の小王亦共に侍し送りて大正殿に至り、當に去らんとする時、その聲高大にして音響震動す。大善見王その聲高大にして音響震動するを聞き、聞き已りて即ち傍侍者に問ひて曰く。これ誰の聲高大にして音響震動するやと。侍者白して曰く、天王、これ八萬四千の夫人及び女寶今悉く共に來りて大正殿に詣り、八萬四千の象八萬四千の馬八萬四千の車八萬四千の步八萬四千の小王亦復共に來りて大正殿に詣る。この故にその聲高大にして音響震動すと。大善見王聞き已りて侍者に告げて曰く、汝速かに殿を下り露地に於て疾かに金床を敷くべし。訖らば還りて我に白せと。侍者敎を受けて即ち殿より下り則ち露地に於て疾かに金床を敷き訖り還りて白して曰く、已に天王の爲に則ち露地に於て金床を敷き訖る。天王の意に隨ひたまへと。阿難、大善見王即ち侍者と共に殿より來り下り金床上に昇りて結跏趺坐す。阿難、彼の時八萬四千の夫人及び女寶皆悉く共に前みて大善見王に詣る。阿難、大善見王遙かに八萬四千の夫人及び女寶を見、見已りて則便ち諸根を閉塞す。こゝに於て八萬四千の夫人及び女寶王の諸根を閉塞するを見已りてすなはちこの念を作す、天王今必ず我等を用せず。所以者何。天王適ま我等を見てす

欄は金鉤あり。琉璃欄は水精鉤、水精欄は琉璃鉤あり。阿難、彼の多羅園覆ふに羅網を以てし鈴をその間に懸く。彼の鈴四寶にして金銀琉璃及び水精なり。金鈴は銀舌・銀鈴は金舌あり、琉璃鈴は水精舌、水精鈴は琉璃舌あり。阿難、是の如く大殿、華池及び多羅園具足し成じ已りて八萬四千の諸の小國王卽ち共に大善見王［の所］に往詣し白して曰く、天王、當に知るべし。大殿華池及び多羅園悉く具足し成す。唯願はくは天王、意の欲する所に隨ひたまへと。阿難、その時大善見王すなはちこの念を作す、我應に先づこの大殿に昇るべからず。若し上尊沙門梵志有りてこの拘尸王城に依りて住せば我寧ろ一切を請じ來りてこの大殿に集坐せしめ上味極美の餚饌・種々豐饒の食噉含消を施設し手もて自ら斟酌し皆飽滿せしめ、食し竟りて器を收め澡水を行じ訖りて發遣して還らしむべしと。大善見王この念を作し已りて卽ち上尊沙門梵志の彼の拘尸王城に依りて住せる者を請ず。一切來り集りて大正殿に昇り、都て集坐し已るや、自ら澡水を行じすなはち上味極美の餚饌、種々豐饒の食噉含消を以て手もて自ら斟酌し皆飽滿せしめ、食し竟りて器を收め澡水を行じ訖り、呪願を受け已りて發遣して還らしむ。阿難、大善見王またこの念を作す、今我應に大正殿中にて而も欲を行ずべからず。我寧ろ獨り一侍人を將ゐて大殿に昇り住すべしと。阿難、大善見王則ち後時に於て一侍人を將ゐて大正殿に昇りすなはち金樓に入りて銀御床の敷くに氍氀毾㲪を以てし覆ふに錦綺羅縠を以てし襯體被、兩頭安枕有りて加陵伽波惒邏波遮悉多羅那なるに坐し、坐し已りて[一六]欲を離れ惡不善の法を離れ覺有り觀有り離より生ずる喜樂の初禪に逮り成就して遊び、金樓より出でゝ次に銀樓に入りて金御床の敷くに氍氀毾㲪を以てし覆ふに錦綺羅縠を以てし、襯體被兩頭安枕有りて加陵伽波惒邏波遮悉多羅那なるに坐し、坐し已りて欲を離れ惡不善の法を離れ覺有り觀有り離より生ずる喜樂の初禪に逮り成就して遊び、銀樓より出でゝ琉璃樓に入り、水精御床の敷くに氍氀毾㲪を以てし、覆ふに錦綺羅縠を以てし、襯體被兩頭安枕有りて加陵伽波惒邏波遮悉多羅那なるに坐し、坐

【一六】一卷「甚度樹經」註を見よ。

悉多羅那なり。是の如く銀樓に金御座を設け、琉璃樓に水精御座を設け、水精樓に琉璃御座を設け、敷くに氍氀毾毲を以てし、覆ふに錦綺羅縠を以てし、襯體被、兩頭安枕有りて加陵伽波恕邏波遮悉多羅那なり。阿難、彼の大正殿の周匝を繞りて四寶の鉤欄有り、金銀琉璃及び水精なり。金欄は銀鉤銀欄は金鉤あり琉璃欄は水精鉤、水精欄は琉璃鉤あり。阿難、彼の大正殿覆ふに羅網を以てし鈴をその間に懸く。彼の鈴四寶にして金銀琉璃及び水精なり。金鈴は銀舌、銀鈴は金舌あり、琉璃鈴は水精舌、水精鈴は琉璃舌あり。阿難、彼の大正殿具足し成じ已りて八萬四千の諸の小國王、殿を去ること遠からずして大華池を作る。阿難、彼の大華池長さ一由延、廣さ一由延なり。阿難、彼の大華池四寶もて塼壘す、金銀琉璃及び水精なり。その底布くに四種の寶沙を以てす、金銀琉璃及び水精なり。阿難、彼の大華池四寶の梯陛有り、金銀琉璃及び水精なり。金陛は銀蹬、銀陛は金蹬にして琉璃陛は水精蹬、水精陛は琉璃蹬なり。阿難、彼の大華池の周匝を繞りて四寶の鉤欄有り、金銀琉璃及び水精なり。金欄は銀鉤・銀欄は金鉤あり、琉璃欄は水精鉤・水精欄は琉璃鉤あり。阿難、彼の大華池覆ふに羅網を以てし、鈴をその間に懸く。彼の鈴四寶にして金銀琉璃及び水精なり、金鈴は銀舌、銀鈴は金舌あり、琉璃鈴は水精舌、水精鈴は琉璃舌あり。阿難、彼の大華池その中には則ち種々の水華有り、靑蓮華・紅蓮・赤蓮・白蓮華にして、常に水あり常に華あり守視者有りて一切の人を通さず。阿難、彼の大華池その岸には則ち種々の陸華有り、修摩那華・婆師華・瞻蔔華・修揵提華・摩頭揵提華・阿提牟哆華・波羅頼華なり。阿難、是の如く大殿及び大華池具足し成じ已りて八萬四千の諸の小國王殿を去ること遠からずして多羅園を作る。阿難、彼の多羅園長さ一由延廣さ一由延なり。阿難、多羅園中に八萬四千の多羅樹を殖え、則ち四寶を以てす、金銀琉璃及び水精なり。金多羅樹は銀の葉華實・銀多羅樹は金の葉華實にして琉璃多羅樹は水精の葉華實・水精多羅樹は琉璃の葉華實なり。阿難、彼の多羅園の周匝に四寶の鉤欄有り、金銀琉璃及び水精なり。金欄は銀鉤、

て天下を整御し已に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就し、人の四種の如意の徳を得。云何が七寶を成就し人の四種の如意の徳を得るや。[一二]前の所説の七寶四種の人の如意の徳の如し。阿難、こゝに於て拘尸王城の梵志居士多く珠寶[一三]鉗婆羅寶を取り載せて大善見王[の所]に詣り白して曰く、天王、この多くの珠寶、鉗婆羅寶、天王當に慈愍せらるゝが爲の故に願はくは納受を垂れたまふべしと。大善見王梵志居士に告げて曰く、卿等、送獻するも我が須ひざる所なり。吾亦自ら有りと。阿難、また八萬四千の諸の小國王有り、大善見王[の所]に詣り白して曰く、天王、我等天王の爲に殿を作らんと欲すと。大善見王諸の小王に告ぐ、卿等我が爲に正殿を作らんと欲するも我が須ひざる所にして[我]自ら正殿有りと。八萬四千の諸の小國王皆叉手して向ひ再び三たび白して曰く、天王、我等天王の爲に殿を作らんと欲す。我等天王の爲に殿を作らんと欲すと。こゝに於て大善見王八萬四千の諸の小王の爲の故に默然として聽す。その時八萬四千の諸の小國王大善見王默然として聽すを知り已りて拜謁し辭退し繞三匝して去り、各本國に還り八萬四千の車を以て金を載せて自ら重くし并に及び錢と作と不作と[を載せ]また一一珠寶の柱を以て載せて拘尸城に往き城を去ること遠からずして大正殿を作る。阿難、彼の大正殿長さ一由延廣さ一由延なり、阿難、彼の大正殿四寶もて塼壘しぬ。金銀琉璃及び水精なり。阿難、彼の大正殿四寶の梯陛あり、金銀琉璃及び水精なり。金陛は銀蹬、銀陛は金蹬にして琉璃陛は水精蹬、水精陛は琉璃蹬なり。阿難、大正殿中に八萬四千の柱有りて四寶を以て作る。金銀琉璃及び水精なり 金柱は銀[一四]櫨欀、銀柱は金櫨欀にして琉璃柱は水精櫨欀、水精柱は琉璃櫨欀なり。阿難、大正殿内に八萬四千の樓を立て四寶を以て作る。金銀琉璃及び水精なり。金樓は銀覆、銀樓は金覆にして琉璃樓は水精覆、水精樓は琉璃覆なり。阿難、大正殿中に八萬四千の御座を設け亦四寶もて作る、金銀琉璃及び水精なり。金樓に銀御座を設け敷くに氍氀毾㲪を以てし覆ふに錦綺羅縠を以てし襯體被、兩頭安枕有りて[一五]加陵伽波惒邏波遮

【一二】「大天㮈林經」を見よ。
【一三】鉗婆羅(Kambala)。
【一四】「一切經音義」五二卷「説文に柱上の經を櫨といふ、謂く柱の端の方木なり。」同所に「説文に欀は柱の下の石即ち柱の礎なり。」櫨はますがた、欀はいしずゑなり。
【一五】一一卷「牛糞喩經」註を見よ。

垣墻七重有り、その墻亦四寶を以て塼壘す、金銀琉璃及び水精なり。阿難、拘尸王城の周匝七重に四寶の多羅樹を行らす。金銀琉璃及び水精なり。金多羅樹は銀の葉華實、銀多羅樹は金の葉華實にして、琉璃多羅樹は水精の葉華實、水精多羅樹は琉璃の葉華實なり。阿難、彼の多羅樹の間に種々の華池を作る、靑蓮華池・紅蓮・赤蓮・白蓮華池なり。阿難、その華池の岸四寶もて塼壘す、金銀琉璃及び水精なり。その底は布くに四種の寶沙を以てす、金銀琉璃及び水精なり。阿難、彼の池中に四寶の梯陛有り。金銀琉璃及び水精なり。金陛は銀蹬、銀陛は金蹬にして琉璃陛は水精蹬、水精陛は琉璃蹬なり。阿難、彼の池の周匝に四寶の鉤欄有り、金銀琉璃及び水精なり。金欄は銀鉤、銀欄は金鉤にして琉璃欄は水精鉤、水精欄は琉璃鉤なり。彼の池覆ふに羅網を以てし鈴その間に懸る。彼の鈴四寶にして金銀琉璃及び水精なり。金鈴は銀舌、銀鈴は金舌あり、琉璃鈴は水精舌、水精鈴は琉璃舌あり。阿難、彼の池中に於て種々の水華を殖う。靑蓮華・紅蓮・赤蓮・白蓮華にして常に水あり常に華あり、守視者無くして一切の人を通ず。阿難、彼の池の岸に於て種々の陸華を殖う、[9]修摩那華・婆師華・瞻蔔華・修揵華・摩頭揵提華・阿提牟哆華・波羅頭華なり。阿難、その華池の岸に衆多の女有り、身體光澤あり皦潔明淨にして美色人に過ぎ少しく天に及ばず、姿容端正にして覩る者歡悅し衆寶瓔珞して嚴飾具足す。彼惠施を行じその所須に隨ひ飮食・衣被・車乘・屋舍・床褥・氍氀・給使・明燈悉く以てこれに與ふ。阿難、その多羅樹の葉、風これを吹く時極上妙の音樂の聲ありて猶ほ五種の妓工師樂を作し極妙上好諧和の音のごとし。阿難、その多羅樹の葉これを吹く時亦復是の如し。阿難、拘尸城中設し弊惡極下の人有りてその五種の妓樂を得んと欲する有れば即ち共に多羅樹の間に往至し皆自ら恣に意を極めて娛樂するを得。阿難、拘尸王城常に十二種の聲有り、未だ曾て斷絕せず。[10]象聲・馬聲・車聲・步聲・吹螺聲・鼓聲・薄洛鼓聲・伎鼓聲・歌聲・舞聲・飮食聲・惠施聲なり。阿難、拘尸城中に王有り[11]大善見と名く。轉輪王と爲り聰明にして智慧あり、四種の軍有り

【九】修摩那(Sumana)。大形の花ある素馨、Vassiki 同類の花、Campaka 金色花、Sogandhika 白色百合花、Madhugandhika, Adhimuttaka.

【一〇】巴利文にては十種の聲。

【一一】大善見(Mahāsudassana)。

汝亦當にまた相續の法を轉ずべく、佛種を斷ぜしむること莫れと謂ふ』。佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

六十八、[一]大善見王經第四

我が聞きしこと是の如し。ある時[二]佛拘尸城に遊び[三]和跋單[四]力士の娑羅林中に住したまひぬ。その時世尊最後に般涅槃を取らんと欲したまひし時告げて曰はく『阿難、[五]汝雙娑羅樹の間に往至し如來の爲に北首して床を敷くべし。如來中夜に當に般涅槃すべし』。尊者阿難如來の敎を受けて即ち雙樹に詣り雙樹の間に於て而も如來の爲に北首して床を敷きぬ。床を敷くこと已に訖りて佛所に詣り、稽首して足を禮し、卻きて一面に住して白して曰く『世尊、已に如來の爲に雙樹の間に於て北首して床を敷きぬ。唯願はくは世尊、自ら當に時を知りたまふべし』。こゝに於て世尊尊者阿難を將ゐて雙樹の間に至り[六]鬱多羅僧を四疊し以て床上に敷き僧伽梨を疊みて枕と作し右脇にして臥し、足々相累ねて最後に般涅槃を取らんと欲したまひぬ。時に尊者阿難拂を執りて佛に侍しぬ。尊者阿難叉手を佛に向け白して曰く『世尊、更に餘の大城有り、一は[七]瞻波と名づけ二は舍衞と名づけ三は鞞舍離と名づけ四は王舍城と名づけ五は波羅㮈と名づけ六は加維羅衞と名づく。世尊彼に於て般涅槃したまはず。何故に正にこの小土城に在すや。諸城の中これを最も下と爲す』。この時世尊告げて曰はく『阿難、汝これを小土城と爲し諸城の中これを最も下と爲すと說くこと莫れ。所以者何。乃ち過去の時この拘尸城は[八]拘尸王城と名づけ極大豐樂にして多く人民有り。阿難、拘尸王城長さ十二由延廣さ七由延なり。阿難、樓櫓を造立して高さ一人の如く或は二、三、四、高さ七人に至る。阿難、拘尸王城外に於て周匝に塹七重有りその塹は則ち四寶を以て塼壘す、金銀琉璃及び水精なり。その底は布くに四種の寶沙を以てす、金銀琉璃及び水精なり。阿難、拘尸王城の周匝の外に

【一】 D. 17. Mahāsudassana-suttanta. 長阿含三卷「遊行經」(大正藏一の二一頁中欄以下參照。
【二】 拘尸(Kusinārā) 拘尸那竭・鳩尸那城。
【三】 和跋單(Upavattana)。「遊行經」にては生處。
【四】 力士(Malla)。末羅族。
【五】 雙娑羅樹 (Yamaka-sālā)。二本並びて生えたる娑羅樹。
【六】 鬱多羅僧 (Uttarasaṅga)。上衣と譯す。僧伽梨(Saṅghāṭi)安陀衣(Antaravāsaka)とこれを三衣といふ。
【七】 Campā, Sāvatthi(Śrāvasti), Vesāli (Vaiśāli), Rājagaha(Rājagṛiha), Bārāṇasi(Vārāṇasi), Kapila vatthu (Kapilavastu).「遊行經」にてはこの上娑祇(Sāketa)を擧げ、巴利文大般涅槃經にては鞞舍離、迦維羅衞を省きて沙祇と憍賞彌とを加ふ。
【八】 拘尸王(Kusāvati)。拘舍婆提。

曰く、汝惡受惡報と妙受妙報の兩道の中間に於て我を送れと。こゝに於て御者すなはち惡受惡報と妙受妙報の兩道の中間に於て王を送る。こゝに於て三十三天遙かに尼彌王の來る見、見已りて善と稱す、善く來れり大王、善く來れり大王。三十三天と共に住して娛樂すべしと。時に尼彌王三十三天の爲に而を頌も說きて曰く、

猶ほ假借して乘るが如し、　一時暫く車を求む。この處亦復然り、　謂く他の所有と爲す。
我彌薩羅に還りて當に無量の善を作すべし。　これに因りて天上に生じ福を作し資粮と爲さん。

阿難、昔の大天王は汝異人と謂ふや。この念を作すこと莫れ。當に知るべし、卽ち是我なり。阿難、我昔、子より子に至り孫より孫に至り族より族に至り我より展轉して八萬四千の轉輪王鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道し仙人王に學び梵行を修行し、この彌薩羅大天㮈林中に在り。阿難、我その時自ら饒益を爲し亦他を饒益し多人を饒益し世間を愍傷し天の爲、人の爲、義及び饒益を求め安隱快樂を求む。その時法を說きて究竟に至らず白淨を究竟せず、梵行を究竟せず、梵行を究竟し訖らず。その時生老病死啼哭憂慼を離れず、亦未だ一切の苦を脫するを得ること能はず。阿難、我今出世し如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛・衆祐と號す。我今自ら饒益を爲し亦他を饒益し多人を饒益し世間を愍傷し天の爲、人の爲、義及び饒益を求め安隱快樂を求む。我今法を說きて究竟に至るを得、白淨を究竟し梵行を究竟し梵行を究竟し訖る。我今生老病死啼哭憂慼を離るゝを得。我今已に一切の苦を脫するを得。阿難、我今汝が爲に相繼の法を轉ず。汝亦當にまた相繼の法を轉ずべし。佛種を斷ぜしむる莫れ。阿難、云何が我今汝が爲に相繼の法を轉じ、汝亦當にまた相繼の法を轉ずべく、佛種を繼せしむる莫らんや。謂く八支の聖道にして正見乃至正定を八と爲す。阿難、これを我今汝が爲に相繼の法を轉じ

を屈申する頃の如く、三十三天上に於て忽ち沒して現れず、已にこの尼彌王殿に來至す。こゝに於て尼彌王天帝釋を見、見已りて問ひて曰く、汝はこれ誰と爲すや」と。帝釋答へて曰く、大王、天帝釋有るを聞けりやと。答へて曰く、帝釋有るを聞くと。告げて曰く、我卽ちこれなり。大王、大善利有り大功德有り。所以者何。三十三天汝が爲に善法講堂に集坐し咨嗟稱歎して曰く、諸賢、韡陀提人大善利有り大功德有り。所以者何。彼の最後の王名づけて尼彌と曰ひ如法の法王にして行法如法に而も太子后妃婇女及び諸の臣民・沙門・梵志・乃至蜎蟲の爲に法齋を奉持し、月の八日・十四日・十五日に布施を修行し諸の窮乏せる沙門・梵志・貧窮・孤獨・遠來の乞者に施すに飮食・衣被・車乘・華鬘・散華・塗香・屋舍・床褥・氍氀・綩綖・給使・明燈を以てすと。大王、三十三天を見んと欲すやと。答へて曰く、見んと欲すと。帝釋また尼彌王に告げて曰く、我天上に還り、當に勅して千象車を嚴駕して來るべし。大王、車に乘り娛樂遊戲して天上に昇れと。時に尼彌王天帝釋の爲に默然として受く。こゝに於て帝釋尼彌王默然として受くるを知り、已りて猶ほ力士の臂を屈申する頃の如く、尼彌王殿に於て忽ち沒して現れず、已に還りて彼の三十三天に至る。帝釋到り已りて御者に告げて曰く、汝速かに千象車を嚴駕し往きて尼彌王を迎へ、到り已りて白して曰へ、大王、當に知るべし、天帝釋この千象車を遣し來りて大王を迎へしむ。この車に乘り娛樂遊戲して天上に昇りたまふべしと。王車に乘り已らばまた王に白して曰へ、王、我をして何れの道に從ひて送らしめんと欲したまふや。惡受惡報道に從ふと爲すや、妙受妙報道に從ふと爲すやと。こゝに於て御者帝釋の敎を受け已りて卽便ち千象車を嚴駕し尼彌王の所に往至し、到り已りて白して曰く、大王、當に知るべし、帝釋この千象車を遣はし來りて大王を迎へしむ。この車に乘り娛樂遊戲して天上に昇りたまふべしと。時に尼彌王彼の車に昇り已る。御者また王に白す、我をして何れの道に從ひて送らしめんと欲したまふや、惡受惡報道に從ふと爲すや、妙受妙報道に從ふと爲すやと。時に尼彌王御者に告げて

信に家を捨て家無くして學道すべし。太子、我今汝が爲にこの相繼の法を轉ず。汝亦當にまたこの相繼の法を轉ずべし。人民をして極邊に墮在せしむること莫れ。太子、云何が我今汝の爲にこの相繼の法を轉じ、汝亦當にまたこの相繼の法を轉ずべく、人民をして極邊に墮在せしむること莫らん。太子、若しこの國中に傳授の法絶えてまた續かざればこれを人民極邊に墮在すと名づく。太子、こゝを以ての故に我今汝が爲に轉ず。太子、我已に汝の爲にこの相繼の法を轉ず。汝亦當にまたこの相繼の法を轉ずべく、人民をして極邊に墮在せしむること莫れと。彼の轉輪王この國政を以て太子に付授し善く教勅し已りてすなはち鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道し仙人王に學び梵行を修行し、この彌薩羅大天㮈林中に在り。阿難、これを子より子に至り孫より孫に至り族より族に至り見より見に至り展轉して八萬四千の轉輪王と爲し、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道し、仙人王に學び梵行を修行し、この彌薩羅大天㮈林中に在り。彼の最後の王名づけて[15]尼彌と曰ふ。如法の法王にして行法如法に、而も太子后妃婇女及び諸の臣民・沙門・梵志乃至蜫蟲の爲に法齋を奉持し[16]月八日・十四日・十五日に布施を修行し諸の窮乏せる沙門・梵志・貧窮・孤獨・遠來の乞者に施すに飲食・衣被・車乘・華鬘・散華・塗香・屋舍・床褥・氍氀・綩綖・給使・明燈を以てす。彼の時三十三天善法講堂に集坐し尼彌王を咨嗟し稱歎して曰く、諸賢、鞞陀提人大善利有り大功德有り。所以者何。彼の最後の王名づけて尼彌と曰ひ如法の法王にして行法如法に、而も太子后妃婇女及び諸の臣民・沙門・梵志・乃至蜫蟲の爲に法齋を奉持し月八日・十四日・十五日に布施を修行し、諸の窮乏せる沙門・梵志・貧窮・孤獨・遠來の乞者に施すに飲食・衣被・車乘・華鬘・散華・塗香・屋舍・床褥・氍氀・綩綖・給使・明燈を以てすと。時に天帝釋亦衆中に在り。こゝに於て天帝釋三十三天に告げて曰く「諸賢、汝等卽ちこゝに在りて尼彌王を見るを得んと欲すやと。三十三天白して曰く、[17]拘翼、我等卽ちこゝに在りて彼の尼彌王を見るを得んと欲すと。その時帝釋猶ほ力士の臂

【一五】尼彌(Nimi)。

【一六】一月を白分黑分の二に分ち、各分の八日十四日十五日の三日に布薩會を行ひ、八齋戒を持つ、一箇月には六回なれば、これを六齋日といふ。

【一七】拘翼(Kosiyo)。帝釋天の一名。

の法を轉じ、汝亦當にまたこの相繼の法を轉ずべく、人民をして極邊に墮在せしむること莫からん。太子、若しこの國中に傳授の法絶えてまた續かざれば、これを人民極邊に墮在すと名づく。太子、こゝを以ての故に我今汝が爲に轉ず。太子我已に汝が爲にこの相繼の法を轉ず。汝亦當にまたこの相繼の法を轉ずべし。人民をして極邊に墮在せしむること莫れと。阿難、彼の大天王この國政を以て太子に付授し、善く敎勅し已りてすなはち鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道し仙人王に學び梵行を修行しこの彌薩羅大天王㮈林中に在り。彼の亦轉輪王七寶を成就し人の四種の如意の德を得き。云何が七寶を成就し人の四種の如意の德を得るや。前に說きし所の七寶、人の四種の如意の德を得るが如し。阿難、彼の轉輪王亦後時に於て剃鬚人に告ぐ汝若し我が頭に白髮を生ぜばすなはち我に啓すべしと。こゝに於て剃鬚人、王の敎を受け已りて後時に於て王の頭を沐浴し白髮を生ぜるを見、見已りて啓して曰く、天王、當に知るべし、天使已に至り頭に白髮を生ずと。彼の轉輪王また剃鬚人に告ぐ、汝金鑷を持ちて徐ろに白髮を拔き吾が手中に著けと。時に剃鬚人王の敎を聞り已りて卽ち金鑷を持ちて徐ろに白髮を拔きて王の手中に著く。阿難、彼の轉輪王手に白髮を捧げて頌を說きて曰く、

我が頭白髮を生じ、　壽命轉た衰滅す。　天使已に來り至る、　我今學道する時なり。

阿難、彼の轉輪王白髮を見已りて太子に告げて曰く、太子、當に知るべし、天使已に至り頭に白髮を生ず。太子、我已に人間の欲を得、今當にまた天上の欲を求むべし。太子、我鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道せんと欲す。我今この四天下を以て汝に付授す。汝當に如法に治化すべし。非法を以てすること莫れ。國中に諸の惡業非梵行の人有らしむること無かれ。太子、汝後に若し天使已に至り頭に白髮の生ぜるを見ば汝亦當にまたこの國政を以て汝の太子に授くべし。善くこれを敎勅し太子に國を授け已りて汝亦當にまた鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至

を愛念するに於て父の子を念ずるが如く、梵志・居士も亦復大天王を敬重すること子の父を敬するが如くなり。阿難、昔大天王園觀中に在りて御者に告げて曰く、徐々に車を御せ、我久しくして梵志・居士を見んと欲すと。梵志・居士亦御者に告ぐ、徐々に車を御せ、我等久しくして大天王を視んと欲すと。阿難、若し大天王常に梵志・居士を愛念するに於て、父の子を念ずるが如く梵志・居士も亦復我が大天王を敬重すること子の父を敬するが如くなりとせば、これを大天王の第四の如意の德と謂ふ。阿難、これを大天王人の四種の如意の德を得と謂ふ。阿難、彼の大天王則ち後時に於て剃鬚人に告ぐ、汝若し我が頭に白髮生ずるを見ば、すなはち我に啓すべしと。こゝに於て剃鬚人王の敎を受け已りて後時に於て王の頭を沐浴し白髮を生ぜるを見、見已り啓して曰く、天王、當に知りたまふべし、天使已に至り頭に白髮を生ずと。彼の大天王また剃鬚人に告ぐ、汝金鑷を持ちて徐ろに白髮を拔きて吾が手中に著けと。時に剃鬚人王の敎を聞き已りて卽ち金鑷を以て徐ろに白髮を拔き王の手中に著く。阿難、彼の大天王手に白髮を捧げて頌を說きて曰く、

[一四]我が頭白髮を生じ、　壽命轉た衰滅す。　天使已に來り至る、　我今學道の時なり。

阿難、彼の大天王白髮を見已りて太子に告げて曰く、太子、當に知るべし、天使已に至り、頭に白髮生ず。太子、我已に人間の欲を得、今當にまた天上の欲を求むべし。太子、我鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道せんと欲す。太子、我今この四天下を以て汝に付授す。汝當に如法に治化すべし。非法を以てすること莫れ、國中に諸の惡業非梵行の人有らしむることと無かれ。太子、汝後に若し天使已に至り頭に白髮生ずるを見ば汝當にまたこの國政を以て汝の太子に授くべし。善くこれを敎勅し太子に國を授け已りて汝亦當に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すべし。太子、我今汝が爲にこの相繼の法を轉ず。汝亦當にまたこの相繼の法を轉ずべし。人民をして極邊に墮在せしむること莫れ。太子、云何が我今汝が爲にこの相繼

【一四】 Uttamaṅgaruhā mayhaṁ ime jātā vayoharā, pātubhūtā devadūtā, pabbajjāsamayo mama. 「增一」の偈「於今我首上、已生衰耕毛、天使已來至、宜當侍出家。」

て餘は水中に還し著けたまへと。これを大天王是の如き居士の寶を成就すと謂ふ。(7)阿難、彼の大天王云何が主兵臣寶を成就するや。阿難、時に大天王主兵寶を生ず。彼の主兵臣聰明にして智慧あり辯才巧言多識分別あり。主兵臣寶大天王の爲に現世の義を設け勸めてこれを安立せしめ後世の義を設け勸めてこれを安立せしめ、現世の義後世の義を設け勸めてこれを安立せしむ。彼の主兵臣大天王の爲に軍衆を合せんと欲してすなはち能くこれを合せ解かんと欲してすなはち解き、大天王の四種の軍衆をして疲乏せしめず、及びこれを勸助せしめんと欲するに、諸臣亦然り。これを大天王是の如き主兵臣寶を成就すと謂ふ。阿難、これを大天王七寶を成就すと謂ふ。阿難、彼の大天王云何が人の[三]四種の如意の德を得るや。彼の大天王壽命極めて長く、八萬四千歲は童子の嬉戲を爲し八萬四千歲は小國王と作り八萬四千歲は大國王と爲り、八萬四千歲は鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道し仙人王に學び梵行を修行しこの彌薩羅に在りて大天㮈林中に住す。阿難、若し大天王壽命極めて長く、八萬四千歲は童子の嬉戲を爲し、八萬四千歲は小國王と作り、八萬四千歲は大國王と爲り、八萬四千歲は鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道し、仙人王に學び梵行を修行しこの彌薩羅に在りて大天㮈林中に住すとせばこれを大天王の第一の如意の德と謂ふ。また次に阿難、彼の大天王疾病有る無く平等食味の道を成就し冷からず熱からず安隱にして諍無し。これに由るの故にその飮食する所而も安消するを得。阿難、若し大天王疾病有る無く平等食味の道を成就し冷からず熱からず安隱にして諍無く、これに由るの故にその飮食する所、而も安消するを得とせばこれを大天王の第二の如意の德と謂ふ。また次に阿難、彼の大天王身體光澤あり皦潔明淨にして美色人に過ぎ小しく天に及ばず、端正姝好にして覩る者歡悅す。阿難、若し大天王身體光澤あり皦潔明淨にして美色人に過ぎ小しく天に及ばず、端正姝好にして覩る者歡悅すとせばこれを大天王の第三の如意の德と謂ふ。また次に阿難、彼の大天王常に梵志・居士

(7)主兵臣寶。

【三】Catasso iddhiyo, cf. D. ii. 177.

や。阿難、時に大天王而も珠寶を生ず。彼の珠寶は明淨自然にして造者有る無く八楞にして無垢、極めて好く磨治し、貫くに五色[卽ち]青・黃・赤・白・黑の繩を以てす。阿難、時に大天王內宮殿中にて燈明を得んと欲し卽ち珠寶を用ふ。阿難昔大天王珠寶を試むる時、すなはち四種の軍、象軍・馬軍・車軍・步軍を集む。四種の軍を集め已りて夜の闇の中に於て高幢を竪立し、珠を安じて上に置き、出でて園觀に至るに珠の光耀きて四種の軍を照し明の及ぶ所方半由延なり。これを大天王是の如き明珠の寶を成就すと謂ふ。(5)阿難、彼の大天王云何が名づけて女寶を成就すと爲すや。阿難、時に大天王而も女寶を生ず。彼の女寶は身體光澤あり皦潔明淨にして美色人に過ぎ、少しく天に及ばず、姿容端正にして覩る者歡悅す、口に芬馥の青蓮華香を出し、身諸の毛孔より栴檀馨を出し冬は則ち身溫く夏は則ち身涼し。彼の女至心に王に承事し、發言・悅樂・所作・捷疾・聰明にして智慧あり、歡喜して善を行ず。彼の女、王を念じて常に心を離れず、況や身口行をや。これを大天王是の如き美女の寶を成就すと謂ふ。(6)阿難、彼の大天王云何が居士の寶を成就するや。阿難、時に大天王居士寶を生ず。彼の居士寶極大豐富にして資財無量、多く畜牧封戶食邑有り種々福業の報を具足し而も天眼を得て諸の寶藏を見、【三】空有悉く見る、守護有り守護無き者を見、金藏・錢藏・作と不作と皆悉く、これを見る。阿難、彼の居士寶大天王に詣り白して曰く、天王、若し金及び錢寶を得んと欲せば天王、憂へたまふこと莫れ、我自ら時を知ると。阿難、昔大天王居士寶を試むる時彼の王船に乘り恒水中に入りて告げて曰く、居士、我金と錢寶を得んと欲すと。居士白して曰く、天王、願はくは船を岸に至らしめたまへと。時に大天王告げて曰く、居士、正にこの中にて得んと欲す、正にこの中にて得んと欲すと。居士白して曰く、天王、願はくは船をして住まらしめたまへと。阿難、時に居士寶船の前頭に至り長跪して手を申べ、すなはち水中より金藏・錢藏・作藏・不作藏の四藏を擧げ出し白して曰く、天王、意の欲する所に隨ひ金及び錢寶、その所用を恣にし、用ひ已り

(5)女寶。

(6)居士寶。

【三】寶藏の空なるものも滿ちたるものも皆その通りに見透すの意。

曰く、汝速かに象を御し極めて善く調し、若し象を調し已らばすなはち來りて我に白せと。その時象師王の敎を受け已りて象寶の所に至り、速かに象寶を御し[九]極めて善く調す。彼の時象寶極めて御治を受け、疾かに善調を得ること、猶ほ昔、良象壽無量百千歳にして無量百千歳を以て極めて御治を受け、疾かに善調を得しがごとし。彼の象寶者も亦復是の如く、極めて御治を受け疾かに善く調することを得。阿難、その時象師速かに象寶を御し極めて善く調し、象寶を調し已りてすなはち大天王の所に詣り白して曰く、天王、當に知るべし。我極めてこれを御治せしを以て象寶已に調せられ天王の意に隨はんと。阿難、昔大天王象寶を試むる時平旦日出でて象寶の所に至り彼の象寶に乘りて一切の地乃至大海に遊び、卽時速かに還りて本の王城に至る。これを大天王是の如く白象の寶を成就すと謂ふ。(3)阿難、彼の大天王云何が名づけて馬寶を成就すと爲すや。阿難、時に大天王而も馬寶を生ず。彼の馬寶は極めて紺青色にして[一〇]頭像烏の如く、毛もて身を嚴るを以て[一一]髦馬王と名く。天王見已りて歡喜踊躍し、若し調すべくば極めて賢善ならしめんと。阿難、彼の大天王則ち後時に於て馬師に告げて曰く、汝速かに馬を御し極めて善調し、若し馬を調し已らばすなはち來りて我に白せと。その時馬師王の敎を受け已りて馬寶の所に至り、速かに馬寶を御し極めて善く調す。彼の時馬寶極めて御治を受け疾かに善調を得ること、猶ほ昔良馬、壽無量百千歳にして無量百千歳を以て極めて御治を受け、疾かに善調を得たるがごとし。彼の馬寶者も亦復是の如く極めて御治を受け疾かに善く調することを得。阿難、その時馬師速かに馬寶を御し極めて善く調し、馬寶を調し已りてすなはち大天王の所に詣り白して曰く、天王、當に知るべし、我極めてこれを御治せしを以て馬寶已に調せられ天王の意に隨はんと。阿難、昔大天王馬寶を試むる時平旦日出でて馬寶の所に至り、彼の馬寶に乘りて一切の地乃至大海に遊び卽時に速かに還りて本の王城に至る。これを大天王是の如き紺馬の寶を成就すと謂ふ。(4)阿難、彼の大天王云何が名づけて珠寶を成就すと爲す

【九】令極善調の「令」を省きたり。以下これに倣ひたる箇所多し。

(3)馬寶。

【一〇】頭像烏(Kākasīsa)。烏の如き頭あり。

【一一】髦馬王(Valāhaka)。

(4)珠寶。

の軍、象軍・馬軍・車軍・歩軍を集め、四種の軍を集め已りて天の輪寶の所に詣り左手を以て輪を撫で右手もてこれを轉じてこの語を作す、天の輪寶に隨ひ天の輪寶の轉じ去る所に隨はんと。阿難、彼の天の輪寶轉じ已りて卽ち去りて東方に向ふ。時に大天王亦自ら後に隨ひ及び四種の軍「亦隨ひ」、若し天の輪寶所住する處有る時、大天王卽ち彼に止宿し及び四種の軍「亦止宿す」。こゝに於て東方の諸の小國王、彼「等」皆大天王の所に來詣して白して曰く、天王、善く來りたまふ。天王、この諸の國土極大豐樂にして多く人民有り。盡く天王に屬す。唯願はくは天王、法を以てこれを敎へたまへ。我等亦當に天王を輔佐すべしと。こゝに於て大天王諸の小王に告げて曰く、卿等、各々自ら境界を領じ皆當に法を以てすべし。非法を以てすること莫れ。國中に諸の惡業非梵行の人有らしむること無かれと。阿難、彼の天の輪寶東方を過ぎ去りて東の大海を度り迴りて南方・西方・北方に至る。阿難、天の輪寶周迴して轉じ去る時に隨ひて大天王亦自ら後に隨ひ及び四種の軍「亦隨ひ」若し天の輪寶所住する處有る時、大天王卽ち彼に止宿し及び四種の軍「亦止宿す」。こゝに於て北方の諸の小國王、彼「等」皆大天王の所に來詣して白して曰く、天王、善く來りたまふ。天王、この諸の國土極大豐樂にして多く人民有り。盡く天王に屬す。唯願はくは天王、法を以てこれを敎へたまへ。我等亦當に天王を輔佐すべしと。こゝに於て大天王諸の小王に告げて曰く、卿等、各々自ら境界を領じ皆當に法を以てすべし。非法を以てすること莫れ。國中に諸の惡業非梵行の人有らしむること無かれと。阿難、彼の天の輪寶北方を過ぎ去りて北の大海を度り卽時に速かに還りて本の王城に至る。彼の大天王正殿上に坐して財物を斷理する時、天の輪寶虛空に住す。これを大天王是の如き天輪の寶を成就すと謂ふ。(2)阿難、彼の大天王云何が名づけて象寶を成就すと爲すや。阿難、時に大天王而も象寶を生ず。彼の象極めて白くして七支有り、その象名づけて于娑賀と曰ふ。大天王見已りて歡喜踊躍し、若し調すべくば極めて賢善ならしめんと。阿難、彼の大天王則ち後時に於て象師に告げて

(2)象寶。
【八】 于娑賀(Uposatha)。

卷の第十四

六十七、[一]大天㮈林經第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]鞞陀提國に遊び大比丘衆と倶に[三]彌薩羅に往至し[四]大天㮈林中に住したまひぬ。その時世尊道を行き中路に欣然として笑ひたまひぬ。尊者阿難世尊の笑ひたまふを見、叉手を佛に向け白して曰く『世尊、何の因縁もて笑ひたまふや。諸の如來・無所著・等正覺若し因縁無ければ終に妄に笑ひたまはず。願はくはその意を聞かせたまへ』。彼の時世尊告げて曰はく『阿難、[五]在昔異時、この彌薩羅㮈林の中、彼に於て王有り、名づけて大天と曰ひ轉輪王と爲り聰明にして智慧あり、四種の軍有りて天下を整御し己に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就し、人の四種の如意の徳を得き。阿難、[六]彼の大天王七寶を成就しぬとは何の謂と爲すや。謂く輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶これを謂ひて七と爲す。(1)阿難、彼の大天王云何が名づけて輪寶を成就しぬと爲すや。阿難、時に大天王月十五日に於て[七]從解脫を說く時、沐浴澡洗して正殿上に昇るに、天の輪寶有りて東方より來る。輪に千輻有りて一切具足し清淨自然にして人の造る所に非ず、色火焰の如く光明昱爍たり。大天王見已りて歡喜踊躍し、心に自ら念じて曰く、賢輪寶を生じ妙輪寶を生ず。我亦曾て古人よりこれを聞く、若し頂生刹利王月十五日に於て從解脫を說く時、沐浴澡洗して正殿上に昇るに天の輪寶有りて東方より來る、輪に千輻有りて一切具足し、清淨自然にして人の造る所に非ず、色火焰の如く光明昱爍たらば彼必ず當に轉輪王と作るべしと。我將に轉輪王と作ること無きやと。阿難、昔大天王將に自ら天の輪寶を試みんと欲する時四種

【一】M. 83. Makhādeva-sutta, Jāt. 9. Makhādeva-jātaka, Bharhut 24 Maghādeviya.「增一阿含」序品(一卷)五〇品の四(四八卷)、「六度集經」八七、「法句譬喩經」四一。
【二】鞞陀提(Videha)。
【三】彌薩羅(Mithilā)。密絺羅(增一)。
【四】大天㮈林(Makhādeva-Ambavana)。
【五】昔過去世に於て。
【六】長阿含六卷「轉輪聖王修行經」參照。D.ii. 172
(1)天の輪寶。
【七】九卷「瞻波經」註を見よ。

彼必定して當に得べし。　伏する無く疑惑無く　生・老・病・死を斷じ、　無漏にして所作訖り、
　梵行を行ぜば彌勒の境界中の若し。
こゝに於て魔王また頌を説きて曰く、
彼必定して當に得べし。　名衣上妙服あり　旃檀を以て體に塗り、　身膺直姝長にして　雞頭城の螺王の境界中に在るが若し。
その時世尊また頌を説きて曰はく、
彼必定して當に得べし。　主無く亦家無し。　手に金寶を持たず、　無爲にして憂ふる所無く、
梵行を行ぜば彌勒の境界中の若し。
こゝに於て魔王また頌を説きて曰く、
彼必定して當に得べし、　名財好飲食あり　善く能く歌舞を解し樂を作し常に歡喜し　雞頭城の螺王の境界中に在るが若し。
その時世尊また頌を説きて曰はく、
彼必ず岸を度るを爲し、　鳥の網を破りて出づるが如し。　禪を得て自在に遊び、　樂を具して常に歡喜す。　汝魔必ず當に知るべし。　我已に相降伏しぬ。
こゝに於て魔王またこの念を作しぬ、世尊我を知る、善逝我を見ると。愁惱憂慼し住まるを得る能はず、即ち彼處に於て忽ち沒して現ぜざりき。『佛説是の如し。彌勒・阿夷哆・尊者阿難及び諸の比丘佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第十三

らん。汝この世・天及び魔・梵・沙門・梵志に於て人より天に至り、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶこと、猶ほ我が今この世・天及び魔・梵・沙門・梵志に於て人より天に至り、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶが如くならん。汝當に說法すべく、初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り具足し淸淨にして梵行を顯現すること、猶ほ我が今說法し初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り具足し淸淨にして梵行を顯現するが如くならん。汝當に梵行を廣演し流布し大會無量、人より天に至り善發顯現すべきこと、猶ほ我が今梵行を廣演し流布し大會無量、人より天に至り善發、顯現するが如くならん。汝當に無量百千の比丘衆有るべきこと、猶ほ我今無量百千の比丘衆あるが如くならん』。その時、尊者阿難拂を執りて佛に侍しぬ。こゝに於て世尊迴顧して告げて曰はく『阿難、汝金縷織成の衣を取り來れ。我今彌勒比丘に與へんと欲す』。その時尊者阿難世尊の敎を受け卽ち金縷織成の衣を取り來りて世尊に授與しぬ。こゝに於て世尊尊者阿難よりこの金縷織成の衣を受け已りて告げて曰はく『彌勒、汝如來よりこの金縷織成の衣を取りて佛・法・衆に施せ、所以者何。彌勒、諸の如來・無所著・等正覺は世間の護の爲に義及び饒益を求め安隱快樂を求めたまふ』。こゝに於て尊者彌勒、如來より金縷織成の衣を取り已りて佛・法・衆に施しぬ。時に[三]魔波旬すなはちこの念を作しぬ、この沙門瞿曇、波羅㮈仙人住處鹿野園中に遊び、彼弟子の爲に未來に因りて法を說く。我寧ろ往きてこれを嬈亂すべしと。時に魔波旬佛所に往至し到り已りて佛に向ひ卽ち頌を說きて曰く、

　彼必定して當に得べし、　容貌妙なること第一、　華鬘瓔珞身にして明珠をその臂に佩び、雞頭城の螺王の境界中に在るが若し。

こゝに於て世尊而もこの念を作したまひぬ、この魔波旬我が所に來到し相嬈亂せんと欲すと。世尊知り已りて魔波旬の爲に卽ち頌を說きて曰はく、

【三】 Māra Pāpimā°

り、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶこと、今世尊のこの世・天及び魔・梵・沙門・梵志に於て人より天に至り自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶが如くならん。我當に說法すべく、初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り具足し清淨にして梵行を顯現すること、今世尊の說法し初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り具足し清淨にして梵行を顯現するが如くならん。我當に梵行を廣演し流布し大會無量、人より天に至りて、善發顯現すべきこと、今世尊の梵行を廣演し流布し大會無量、人より天に至りて、善發顯現するが如くならん。我當に無量百千の比丘衆有るべきこと、今世尊の無量百千の比丘衆あるが如くならん。』こゝに於て世尊彌勒を歎じて曰く『善き哉、善き哉彌勒、汝發心極妙にして謂く大衆を領ぜん。所以者何。汝のこの念を作すが如き［謂く］世尊、我未來久遠、人壽八萬歲の時に於て成佛するを得べく、彌勒・如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と名づけ佛衆祐と號し今世尊、如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號するが如くならん。我この世・天及び魔・梵・沙門梵志に於て人より天に至り自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶこと、今世尊のこの世・天及び魔・梵・沙門・梵志に於て人より天に至り、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶが如くならん。我當に說法すべく、初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り具足し清淨にして梵行を顯現すること、今世尊の說法し、初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り具足し清淨にして梵行を顯現するが如くならん。我當に梵行を廣演し流布し大會無量、人より天に至りて善發顯現すべきこと、今世尊の梵行を廣演し流布し大會無量、人より天に至りて善發、顯現したまふが如くならんと』。佛また告げて曰はく『彌勒、汝未來久遠人壽八萬歲の時に於て當に佛となるを得べく、彌勒如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と名づけ佛衆祐と號すること、猶ほ我が今如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號するが如くな

を得しめ、大金幢有りて諸の寶もて嚴飾し、擧高千肘、圍十六肘ならん。汝當にこれを竪つべし。既にこれを竪てゝ後下してすなはち沙門・梵志・貧窮・孤獨・遠來の乞者に布施するに、飲食・衣被・車乘・華鬘・散華・塗香・屋舍・床褥・氍氀・綩綖・給使・明燈を以てせん。汝これを施し已りてすなはち鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道せん。汝族姓子の所爲「のごとく」、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すれば、唯無上の梵行訖り現法中に於て、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知らん』。佛諸の比丘に告げたまはく『未來久遠人壽八萬歲の時に當佛有るべし。彌勒・如來、無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と名づけ佛衆祐と號せん。猶ほ我今已に如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師成り、佛衆祐と號するが如し。彼この世・天及び魔・梵・沙門・梵志に於て人より天に至り、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ばん。猶ほ我今この世・天及び魔・梵・沙門梵志に於て人より天に至り、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶが如し。彼當に説法すべし。初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り具足し淸淨にして梵行を顯現せん。猶ほ我今説法し、初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り具足し淸淨にして梵行を顯現するが如し。彼當に梵行を廣演し流布し大會無量、人より天に至りて善發顯現すべし。猶ほ我今梵行を廣演し流布し大會無量、人より天に至りて善發顯現するが如し。彼當に無量百千の比丘衆有るべし。猶ほ我今無量百千の比丘衆あるが如し』。その時尊者彌勒彼の衆中に在りき。こゝに於て尊者彌勒卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、我未來久遠人壽八萬歲の時に於て成佛することを得べく、彌勒・如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と名づけ佛衆祐と號せん。今世尊、如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號するが如くなるん。我この世・天及び魔・梵・沙門・梵志に於て人より世に至

【三】彌勒如來（梵 Metteya, Maitreya)。

これを施し已りてすなはち鬚髮剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道せん。我族姓子の所爲「のごとく」、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すれば、唯無上の梵行訖り現法中に於て、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ、更に有を受けずと如眞を知らん』。こゝに於て世尊、尊者阿夷哆を訶して曰はく『汝愚癡の人、應に更に一たび死して再び終るを求むべし。所以者何。謂く汝この念を作す、世尊、我未來久遠人壽八萬歳の時に於て、王と作るを得べく、號名して螺と曰ひ、轉輪王と爲り聰明にして智慧あり、四種の軍有りて天下を整御し已に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶、これを七と爲す。我當に千子具足する有るべし。顏貌端正勇猛無畏にして能く他の衆を伏す。我當にこの一切の地乃至大海を統領すべし。刀杖を以てせずして法を以てし教令して安樂を得しめ、大金幢有りて諸の寶もて嚴飾し、擧高千肘、圍十六肘なり、我當にこれを竪つべし。既にこれを竪てゝ後下してすなはち沙門・梵志・貧窮・孤獨・遠來の乞者に布施するに飲食・衣被・車乘・華鬘・散華・塗香・屋舍・床褥・氍氀・綩綖・給使・明燈を以てせん。我これを施し已りてすなはち鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道せん。我族姓子の所爲「のごとく」鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すれば、唯無上の梵行訖り現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知らんと』。世尊告げて曰はく『阿夷哆、汝未來久遠人壽八萬歳の時に於て當に王と作るを得べし。號名して螺と曰ひ、轉輪王と爲り聰明にして智慧あり、四種の軍有りて天下を整御し已に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就せん。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶、これを七と爲す。汝當に千子具足する有るべし。顏貌端正勇猛無畏にして能く他の衆を伏せん。汝當にこの一切の地乃至大海を統領すべし。刀杖を以てせずして法を以てし教令して安樂

有り、村邑相近くして雞の一飛の如し。 諸の比丘、人壽八萬歳の時女年五百にして乃ち當に出でゝ嫁すべし。諸の比丘、人壽八萬歳の時唯是の如き病有り。謂く寒熱大小便飲食老にして更に餘患無し。諸の比丘、人壽八萬歳の時王有りて螺[一二]と名づけ轉輪王と爲り聰明にして智慧あり四種の軍有りて天下を整御し已に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就せん彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶、これを七と爲す、千子具足し顏貌端正勇猛無畏にして能く他の衆を伏す。彼當にこの一切の地乃至大海を統領すべし。刀杖を以てせずして法を以てし敎令して安樂を得しめ、大金幢有りて諸の寶もて嚴飾し擧高千肘、圍十六肘ならん。彼當にこれを竪つべし。既にこれを竪てゝ後下してすなはち沙門梵志貧窮孤獨遠來の乞者に布施するに、飲食・衣被・車乘・華鬘・散華塗香・屋舍・床褥・氍氀・綩綖・給使・明燈を以てせん。彼これを施し已りてすなはち鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道せん。 彼族姓子の所爲「のごとく」鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道すれば、唯無上の梵行訖り現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知らん』。その時尊者 阿夷哆[一三]衆中に在りて坐しぬ。ここに於て尊者阿夷哆即ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、我未來久遠人壽八萬歳の時に於て王と作るを得べく、號名して螺と曰ひ、轉輪王と爲り聰明にして智慧あり四種の軍有りて天下を整御し已に由りて自在、 如法の法王にして七寶を成就せん。 彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶・これを七と爲す。我當に千子を具足する有るべし。 顏貌端正勇猛無畏にして能く他の衆を伏す、我當にこの一切の地乃至大海を統領すべし。刀杖を以てせずして法を以てし敎令して安樂を得しめ、大金幢有りて諸の寶もて嚴飾し擧高千肘、圍十六肘ならん。我當にこれを竪つべし。既にこれを竪てて後下してすなはち沙門・梵志・貧窮・孤獨・遠來の乞者に布施するに、飲食・衣被・車乘・花鬘・散華・塗香・屋舍・床褥・氍氀・綩綖・給使・明燈を以てせん。 我

【一二】 螺(Sankha)「長阿含」にては儴伽。

【一三】 阿夷哆(Ajita)阿逸多、彌勒菩薩の名。

五 我憶ふに昔貧窮にして唯捃拾を仰ぎて活きぬ、己を闕きて沙門六 無患最上德に供し、これに因りて釋種に生じ名づけて阿那律と曰ふ、善く解して歌舞を能くし、樂を作して常に歡喜しぬ。我世尊正覺甘露の如くなるを見るを得、見已りて信樂を生じ家を棄捨して學道しぬ。我宿命を識るを得、本の所生を知る、三十三天に生じ七反彼に住しぬ。七 こゝに七、彼に亦七、世に生を受くること十四、人間及び天上にして初より惡處に墮せず。我今死生・衆生・往來の處を知り、他心の是非を知る。賢聖の五娛樂あり、八 五支禪定を得、常に息心靜默し、已に靜正住を得てすなはち淨天眼に逮る。爲に今學道し遠離して家を棄捨する所、我今この義を獲て佛の境界に入るを得。我死を樂しまず亦生を願はず、時に隨ひ適く所に任せ、正念智を建立し、九 耶離の竹林に隨はん。我が命彼に在りて盡き、當に竹林の下に在りて無餘般涅槃すべし。

その時世尊燕坐に在して淨き天耳の人[耳]を出過せるを以て諸の比丘、中食後に於て講堂に集坐して共にこの事を論ずるを聞きたまひぬ。世尊聞き已りてすなはち晡時に於て燕坐より起ちて講堂に往至し比丘衆の前に座を敷きて坐し、諸の比丘に問ひたまはく『汝等、今日何事を以て講堂に集坐するや』。時に諸の比丘白して曰く、『世尊、我等今日尊者阿那律陀過去の事に因りて法を說くを以ての故に講堂に集坐す』こゝに於て世尊諸の比丘に告げたまはく、『汝等今日佛に從ひて未來の事に因りて說法するを聞かんと欲するや』。諸の比丘白して曰く『世尊、今正にこの時なり。善逝、今正にこの時なり。若し世尊諸の比丘の爲に未來の事に因りて法を說きたまはゞ諸の比丘聞き已りて當に善く受持すべし。』世尊告げて曰はく『諸の比丘、諦かに聽け、諦かに聽け、善くこれを思念せよ、吾當に汝の爲に廣く分別して說くべし』。時に諸の比丘教を受けて聽きぬ。世尊告げて曰はく 一〇『諸の比丘、未來久遠に當に人民有りて壽八萬歲なるべし。人壽八萬歲の時この閻浮洲極大富樂にして多く人民

【五】 Thera-gāthā, 910-919. 當時彼は Annabhāra と呼びたり。「食を荷とす、」「食物を荷ふもの」との意。

【六】「譽高き沙門ウパリツタに供養を爲しき。」Uparitthaは「上位に立てる」の意なれば最上德と原語を同じうすとも解し得べし。

【七】 漢譯にては「七たび人主として國事を領理し、四方の主、勝利者、閻浮の洲の君として刀杖を用ひず、法を以て〔民を〕訓誡しき」の一偈を全然除けるが如し。

【八】 Visuddhimagga, P. 471 通常四禪と稱するものゝ中、第二禪即ち定生喜樂地を二分し尋(Vitakka)のみを超越したる分際を第二禪と稱へ、尋伺(Vicāra)の二ともに超越したる分際を第三禪と稱へ、元の第三禪を第四禪、元の第四禪を第五禪とするによりて五支禪定の名を生ず。

【九】「伐地族のエールヴ村にて命盡き、下の竹林中に於て我は無漏にて入滅せん。」耶離は毘耶離の毘を取りたる形にて Vesāli に當るか。毘耶離即ち毘舍離は伐地族の都なりしなり。

【一〇】 以下「長阿含」六卷「轉輪聖王修行經」參照。

の形に隨ふが如し。諸賢、我撮へるを持ち還りて家に到りて擔を捨て迴顧して視て、すなはち無患辟支佛來りて我が後を追尋し影の形に隨ふが如きを見ぬ。我彼を見已りてすなはちこの念を作しぬ、我旦に出づる時この仙人、城に入りて乞食するを見ぬ。今この仙人或は未だ食を得ざらん。我寧ろ自ら己の食分を闕きてこの仙人に與ふべしと。この念を作し已りて卽ち食分を持して辟支佛に與へ白して曰く、仙人當に知るべし。この食はこれ我が己の分なり。慈愍の爲の故に願はくはこれを哀受したまへと。時に辟支佛卽ち我に答へて曰はく、居士、當に知るべし、今年災旱早霜蟲蝗ありて五穀熟せず人民荒み儉しく、乞ひ求むるも得難し。汝半を減じて我が鉢の中に著くべし。汝自ら半を食し倶に存命するを得ん、是の如くんば好しと我また白して曰く、仙人、當に知るべし。我居家に在り自ら釜竈有り樵薪有り穀米有り。飲食早晩亦時節無し。仙人、當に我を慈愍するが爲の故に盡くこの食を受くべしと。時に辟支佛慈愍の爲の故にすなはち盡くこれを受けたまひぬ。諸賢、我彼に一鉢の食を施せる福に因りて七反天に生じて天王と爲るを得、七反人に生じてまた人王と爲りぬ。諸賢、我彼に一鉢の食を施せる福に因りてかくの如く釋種族の中に生ずるを得、大富豐饒にして諸の畜牧多く封戶食邑資財無量の珍寶具足しぬ。諸賢、我彼に一鉢の食を施せる福に因りて百千姟の金錢王を棄捨し出家學道す。況やまたその餘の種種の雜物をや。諸賢、我彼に一鉢の食を施せる福に因りて王・王臣・梵志・居士一切の人民の爲に識待せられ及び四部衆、比丘・比丘尼・優婆・塞・優婆夷に敬重せらる。諸賢、我彼に一鉢の食を施せる福に因りて常に人の爲に請求せられ、飲食衣被・氍氀・毾㲪・牀褥・綩綖・病瘦・湯藥、諸の生活の具を受けしめ請求せざるに非ず。若し我その時彼の沙門これ無著の眞人なりと知れば獲る所の福報當にまた轉た倍し大果報極妙の功德を受け明かに徹照せられ極廣甚大なるべし』。こゝに於て尊者阿那律陀無著の眞人として正解脫に逮り、この頌を說きて曰く、

の如し』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

六十六、[一]說本經第二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛波羅㮈に遊び仙人住處鹿野園中に在しぬ。時に諸の比丘中食後に於て小因緣を以て講堂に集坐し共にこの事を論じぬ、云何が諸賢、居士在家何者か勝れりと爲す、比丘等持戒妙法にして威儀を成就し家に入りて食を受くるを「勝れりと」爲すや。朝々益利百千萬倍なるを「勝れりと」爲すやと。或は比丘この說を作す者有り、諸賢、何ぞ益利百千萬倍なるを用ひん。若し比丘持戒妙法にして威儀を成就し家に入りて食を受くる有れば唯これ至要なり。朝々益利百千萬倍なるを「勝れりと」爲すに非ずと。この時[二]尊者阿那律陀亦衆中に在りき。こゝに於て尊者阿那律陀諸の比丘に告げぬ『諸賢、[三]益利百千萬倍なるも設しまたこれに過ぐるも何ぞ用ひん。若し比丘持戒妙法にして威儀を成就し家に入りて食を受くる有れば唯これ至要なり。朝々益利百千萬なるを「勝れりと」爲すに非ず。所以者何。憶ふに我昔時この波羅㮈國に在りて貧窮人と爲り唯捃拾客擔を仰ぎて生活しぬ。この時この波羅㮈國に災旱早霜蟲蝗ありて熟せず人民荒み儉しくて乞ひ求めて得難かりき。この時一辟支佛有り、名づけて無患と曰ひこの波羅㮈に依りて住したまひぬ。こゝに於て無患辟支佛夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持し波羅㮈に入りて乞食を行じたまひぬ。我その時に於て捃拾の爲の故に早く波羅㮈を出でぬ。諸賢、我登り出づる時無患辟支佛彼に入りたまふに逢見しぬ。時に無患辟支佛[四]淨鉢を持して入り本の如く淨鉢もて出でたまひぬ。諸賢、我時に捃ひ還りて波羅㮈に入りまた無患辟支佛の出でたまふを見ぬ。彼我を見已りてすなはちこの念を作したまひぬ、我且に入る時この人の出づるを見ぬ。我今還り出でゝまたこの人の入るを見る。この人或は能く未だ食を得ざるなり。我寧ろこの人に隨ひて去るべしと。時に辟支佛すなはち我を追尋して影

【一】「佛說古來世時經。」

【二】尊者阿那律陀（Āyasmant Anuruddha）。

【三】以下原文にて十二字、文字の位置を換へたり。

【四】未だ施物を鉢に受けざるが故に、鉢汚れざるなり。

烏の如きこと莫れ、非法に依りて以て自ら存命すること莫れ。當に身行を淨め口意行を淨むべし。無事の中に住し糞掃衣を著け常に乞食を行じ次第に乞食し少欲知足にして遠離に樂しみ住して精勤を習ひ、正念・正智・正定・正慧を立し常に當に遠離すべし。應に是の如きを學すべし。(7)彼の狌々獸この梵志と共にこれを論じ已りてすなはち捨て去りぬと、吾この喩を說くに何の義有りや。比丘有りて村邑に依りて行ずるが若し。比丘平旦衣を著け鉢を持し村に入りて乞食し善く身を護り諸根を守攝し正念を立し、彼村邑に從ひて乞食已に竟り食訖りて中後衣鉢を收擧し手足を澡洗し尼師檀を以て肩上に著け或は無事處に至り或は樹下に至り或は空屋中に至り尼師檀を敷きて結跏趺坐し正身正願にして反念向はず貪伺を斷除し心諍有ること無く他の財物諸の生活の具を見て貪伺を起し我が得ならしめんと欲せず。彼貪伺に於てその心を淨除す。是の加く瞋恚・睡眠・調悔「に於て亦然り」。疑を斷じ惑を度し善法中に於て猶豫有ること無し。彼疑惑に於てその心を淨除し、彼已にこの五蓋・心穢・慧羸を斷じ欲を離れ惡不善の法を離れ第四禪を成就して遊ぶを得るに至る。彼是の如き定心清淨無穢無煩を得、柔軟にして善く住し不動心を得、漏盡智通作證に趣向す。彼すなはちこの苦の如眞を知りこの苦の習を知りこの苦の滅を知りこの苦滅道の如眞を知る。彼是の如く知り是の如く見已ればすなはち欲漏心解脫し有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。猶ほ梵志の如し。狌々を見已りてこれに問ひて曰く、善く來りぬ狌々、汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと。答へて曰く、梵志、我園より園に至り觀より觀に至り林より林に至り清泉の水を飮み好果を噉ひ來る。我今去らんと欲し人を畏れずと。吾說く比丘も亦復是の如しと。こゝを以て比丘行じて獺の如きこと莫れ、行じて究暮の如きこと莫れ、行じて鷲の如きこと莫れ、行じて食吐鳥の如きこと莫れ、行じて豺の如きこと莫れ、行じて烏の如きこと莫れ。當に行じて狌々の如くなるべし。所以者何。世中無著の眞人狌々獸

に非ずして沙門と稱す。猶ほ梵志の如し。豺獸を見已りてこれに問ひて曰く、善く來りぬ豺獸、汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと。答へて曰く、梵志、我深澗より深澗に至り榛莽に至り僻靜より僻靜の處に至り來る。我今死象の肉、死馬・死牛・死人の肉を食はんと欲す。我去らんと欲し唯人を畏ると。吾說く比丘も亦復是の如しと。こゝを以て比丘行じて豺の如きこと莫れ。非法に依りて以て自ら存命すること莫れ。當に身行を淨め口意行を淨むべし。無事の中に住し糞掃衣を著け常に乞食を行じ次第に乞食し少欲知足にして遠離に樂しみ住して精勤を習ひ、正念・正智・正定・正慧を立し常に當に遠離すべしと、應に是の如きを學すべし。(6)彼の時烏鳥梵志を面訶し已りてすなはち捨て去りぬと吾この喩を說くに何の義有りや。比丘有り貧無事處に依りて夏坐を受くるが若し。彼若し村邑及び城郭中に多く智慧・精進・梵行者有るを知れば即便ち避け去り、若し村邑及び城郭中に智慧・精進・梵行者有る無きを知れば來りて中に住すること二月三月なり。諸の比丘見已りて問ひて曰く、賢者、何處に夏坐すやと。答へて曰く、諸賢、我今某貧無事處に依りて夏坐を受く。我彼の諸の愚癡の輩の如くならず床を作りて成就し五事を具足して中に住し、中前中後・中後中前、口その味に隨ひ、味その口に隨ひ、求めて而も求め、索めて而も索むと。時に諸の比丘聞き已りて即ちこの念を作す、この賢者難行して行ず。所以者何。この賢者乃ち能く某貧無事處に依りて夏坐を受くと。諸の比丘等すなはち共に恭敬・禮事・供養しこれに因りて衣被・飲食・床褥・湯藥、諸の生活の具を利するを得。彼利を得已りて染著觸猗して災患を見ず捨離する能はず意に隨ひて用ふ。彼の比丘惡戒を行じ惡法を成就し最もその邊に在りて弊腐敗を生じ梵行に非ずして梵行と稱し、沙門に非ずして沙門と稱す。猶ほ梵志の如し、烏鳥を見已りてこれに問ひて曰く、善く來りぬ烏鳥、汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと。答へて曰く梵志、汝强額癡狂にして何ぞ我に汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと問はんと爲るやと。吾說く比丘も亦復是の如しと。こゝを以て比丘行じて

喩を說くに何の義有りや。比丘有り村邑に依りて行ずるが若し。比丘平旦衣を著け鉢を持し村に入りて乞食し、身を護らず諸根を守らず正念を立せず。彼比丘尼の房に入りて敎化說法するに或は佛の所說或は聲聞の所說なり。彼の比丘尼若干の家に入りて好を說き惡を說きて信施物を受けて比丘に持與し、これに因りて衣被・飮食・床褥・湯藥、諸の生活の具を利するを得。彼利を得已りて染著觸猗して災患を見ず、捨離する能はず意に隨ひて用ふ。彼の比丘惡戒を行じ惡法を成就し最もその邊に在りて弊腐敗を生じ、梵行に非ずして梵行と稱し沙門に非ずして沙門と稱す。猶ほ梵志の如し。食吐鳥を見已りてこれに問ひて曰く、善く來りぬ食吐鳥、汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと。答へて曰く、梵志、汝向には鷲鳥の去るを見しや。我彼の吐を食ふ。我今去らんと欲し唯人を畏ると。吾說く比丘も亦復是の如しと。こゝを以て比丘行じて食吐鳥の如きこと莫れ、非法に依りて以て自ら存命すること莫れ。當に身行を淨め口意行を淨むべし。無事の中に住し糞掃衣を著け常に乞食を行じ少欲知足にして遠離に樂しみ住して精勤を習ひ、正念・正智・正定・正慧を立し常に當に遠離すべしと應に是の如きを學すべし。(5)時に彼の豺獸この梵志と共にこれを論じ已りてすなはち捨て去りぬと、吾この喩を說くに何の義有りや。比丘有りて貧村に依りて住するが若し。彼若し村邑及び城郭中に多く智慧・精進・梵行者有るを知れば卽便ち避け去り、若し村邑及び城郭中に智慧・精進・梵行者有る無きを知れば來りて中に住すること或は九月或は十月なり。諸の比丘見已りてすなはち問ふ。賢者何處に遊行するやと。彼卽ち答へて曰く、諸賢、我某處の貧村邑に依りて行ずと。諸の比丘聞き已りて卽ちこの念を作す、この賢者難行して行ず。所以者何。この賢者乃ち能く某貧村邑に依りて行ずと。諸の比丘等すなはち共に恭敬禮事供養し、これに因りて衣被・飮食・床褥・湯藥、諸の生活の具を利するを得。彼利を得已りて染著觸猗して災患を見ず、捨離する能はず意に隨ひて用ふ。彼の比丘惡戒を行じ惡法を成就し最もその邊に在りて弊腐敗を生じ、梵行に非ずして梵行と稱し沙門

より來り何れに去らんと欲すと爲すやと。答へて曰く、梵志この池本の時清泉盈ち溢れ、藕饒く華多く魚龜中に滿ち、我昔依りし所にして今枯竭す。梵志當に知るべし。我今去りて彼の死牛の聚處に依りて栖宿し或は死驢に依り或は死人の聚處に依りて栖宿せんと欲す。我今去らんと欲し、唯人を畏ると。吾說く比丘も亦復是の如しと。惡不善穢汚の法に依れば當來の有の本、煩熱苦の報、生・老・病・死の因と爲る。こゝを以て比丘行じて究暮の如きこと莫れ、非法に依りて以て自ら存命すること莫れ。當に身行を淨め口意行を淨むべし。無事の中に住し糞掃衣を著け常に乞食を行じ次第に乞食し、少欲知足にして遠離に樂しみ住して精勤を習ひ、正念・正智・正定・正慧を立し、常に當に遠離すべしと、應に是の如きを學すべし。(3)時に彼の鷲鳥この梵志と共に是を論じ已りてすなはち捨て去りぬと、吾この喩を說くに何の義有りや。比丘有り村邑に依りて行ずるが若し。比丘平旦衣を著け鉢を持し村に入りて乞食し、身を護らず諸根を守らず正念を立せず。彼他家に入りて敎化說法するに或は佛の所說或は聲聞の所說にしてこれに因りて衣被・飮食・牀褥・湯藥、諸の生活の具を利するを得。彼利を得已りて染著觸猗して、災患を見ず捨離する能はず意に隨ひて用ふ。彼の比丘惡戒を行じ惡法を成就し最もその邊に在りて弊腐敗を生じ、梵行に非ずして梵行と稱し沙門に非ずして沙門と稱す。猶ほ梵志の如し、鷲鳥を見已りてこれに問ひて曰く、善く來りぬ鷲鳥、汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと。答へて曰く、梵志、我大墓よりまた大墓に至り殺害して來る。我今死象の肉死馬・死牛・死人の肉を食はんと欲す。我今去らんと欲し唯人を畏ると。吾說く比丘も亦復是の如しと。こゝを以て比丘行じて鷲鳥の如きこと莫れ、非法に依りて以て自ら存命すること莫れ。當に身行を淨め口意行を淨むべし。無事の中に住し糞掃衣を著し常に乞食を行じ次第に乞食し少欲知足にして遠離に樂しみ住して精勤を習ひ正念・正智・正定・正慧を立し常に應に遠離すべしと、應に是の如きを學すべし。(4)彼の食吐鳥この梵志と共にこれを論じ已りてすなはち捨て去りぬと、吾この

しめんと欲す。汝等當に知るべし、この說義有り、(1)時に彼の獺獸この梵志と共に論じ已りてすなはち捨て去りぬと、吾この喩を說くに何の義有りや。比丘有り村邑に依りて行ずるが若し。比丘平旦衣を著け鉢を持し村に入りて乞食し身を護らず諸根を守らず正念を立せずして而も彼法を說くに或は佛の所說或は聲聞の所說にしてこれに因りて衣被・飮食・床褥・湯藥、諸 生活の具を利するを得。彼利を得已りて染著觸猗して災患を見ず捨離する能はず意に隨ひて用ふ。彼の比丘惡戒を行じ惡法を成就し最もその邊に在りて弊腐敗を生じ梵行に非ずして梵行と稱し、沙門に非ずして沙門と稱す。猶梵志の如し、獺獸を見已りてこれに問ひて曰く、善く來りぬ獺獸、汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと。答へて曰く、梵志この池本の時淸泉盈ち溢れ藕饒く華多く魚鼈中に滿ち我昔依りし所にして今枯熇す。梵志當に知るべし。我捨て去りて彼の大河に入らんと欲す。我今去らんと欲し唯人を畏ると。吾說く、比丘も亦復是の如しと。惡不善穢汚の法中に入りて當來の有の本、煩熱苦の報、生老病死の因と爲る。こゝを以て比丘行じて獺の如きこと莫れ、非法に依りて以て自ら存命すること莫れ。當に身行を淨め口意行を淨むべし。無事の中に住し糞掃衣を著け、常に乞食を行じ次第に乞食し少欲知足にして遠離を樂しみ住して精勤を習ひ、正念・正智・正定・正慧を立し常に當に遠離すべしと、應に是の如く學すべし。(2)彼の究暮鳥この梵志と共にこれを論じ已りてすなはち捨て去りぬと、吾この喩を說くに何の義有りや。比丘有りて村邑に依りて行ずるが若し。比丘平旦衣を著け鉢を持し村に入りて乞食し身を護らず諸根を守らず正念を立せず。彼他家に入りて敎化說法するに或は佛の所說或は聲聞の所說にして、これに因りて衣被・飮食・床褥・湯藥、諸の生活の具を利するを得。彼利を得已りて染著觸猗して災患を見ず、捨離する能はず意に隨ひて用ふ。彼の比丘惡戒「を行じ」惡法を成就し最もその邊に在りて弊腐敗を生じ、梵行に非ずして梵行と稱し沙門に非ずして沙門と稱す。猶ほ梵志の如し、究暮を見已りてこれに問ひて曰く、善く來りぬ究暮、汝何れ

に依りて棲宿し或は死驢に依り或は死人の聚處に依りて棲宿せんと欲す。我今去らんと欲し唯人を畏ると。彼の究暮鳥この梵志と共にこれを論じ已りてすなはち捨て去りぬ。梵志故に坐しぬ。(3)また鷲鳥有りて來りぬ。梵志見已りてこれに問ひて曰く、善く來りぬ鷲鳥、汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと。答へて曰く、梵志、我大墓よりまた大墓に至り殺害して來る。我今死象の肉、死馬・死牛・死人の肉を食はんと欲す。我今去らんと欲し唯人を畏ると。時に彼の鷲鳥この梵志と共にこれを論じ已りてすなはち捨て去りぬ。梵志故に坐しぬ。(4)また食吐鳥有りて來りぬ。梵志見已りて問ひて曰く、善く來りぬ食吐鳥、汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと。答へて曰く、梵志、汝向には鷲鳥の去るを見しや。我彼の吐を食ふ。我今去らんと欲し唯人を畏ると。彼の食吐鳥この梵志と共にこれを論じ已りてすなはち捨て去りぬ。梵志故に坐しぬ。(5)また豺獸有りて來りぬ。梵志見已りてこれに問ひて曰く、善く來りぬ豺獸、汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと。答へて曰く、梵志、我深澗より深澗に至り榛莽より榛莽に至り僻靜より僻靜の處に至り來る。我今死象の肉死馬死牛死人の肉を食はんと欲す。我今去らんと欲し唯人を畏ると。時に彼の豺獸この梵志と共にこれを論じ已りてすなはち捨て去りぬ。梵志故に坐しぬ。(6)また烏鳥有りて來りぬ。梵志見已りてこれに問ひて曰く、善く來りぬ烏鳥豺汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと。答へて曰く、梵志、汝强額、癡狂にして何ぞ我に汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと問ふことを爲すやと。彼の時烏鳥梵志を面訶し已りてすなはち捨て去りぬ。梵志故に生じぬ。(7)また狌々獸有りて來りぬ。梵志見已りてこれに問ひて曰く、善く來りぬ狌々獸、汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと。答へて曰く、我園より園に至り觀より觀に至り林より林に至り清泉の水を飲み好果を食ひ來る。我今去らんと欲し、人を畏れずと。彼の狌々獸この梵志と共にこれを論じ已りてすなはち捨て去りぬ』。佛諸の比丘に告げたまはく『吾この喩を說きて義を解せ

(3)鷲鳥を見る。

(4)食吐鳥を見る。

(5)豺獸を見る。

(6)烏鳥を見る。

(7)狌々獸を見る。

巻の第十三

王相應品第一（七經有り）

烏鳥喩・說本・〔大〕天㮏林・〔大〕善見〔王〕・三十喩・轉輪〔王〕・蜱肆最も後に在り。

六十五、烏鳥喩經第一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び竹林加蘭哆園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『昔轉輪王珠寶を試みんと欲せし時、すなはち四種の軍、象軍・馬軍・車軍・歩軍を集めぬ。四種の軍を集め已りて夜の闇中に於て高幢を竪立し、珠を安じて上に置き出で丶園觀に至るに、珠の光耀きて四種の軍を照し明の及ぶ所方半由延なりき。彼の時一梵志有りてこの念を作しぬ、我寧ろ往きて轉輪王及び四種の軍を見、琉璃珠を觀るべしと。その時梵志またこの念を作しぬ、且く轉輪王及び四種の軍を見、琉璃珠を觀るを置きて我寧ろ彼の林間に往止すべしと。こ丶に於て梵志すなはち林に往詣し、到り已りて中に入り一樹下に至り、坐し已りて久しからず、(1)一獺獸有りて來りぬ。梵志見已りてこれに問ひて曰く、善く來りぬ獺獸、汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと。答へて曰く、梵志、この池本の時清泉盈ち溢れ藕饒く華多く魚龜中に滿ち、我昔依りし所にして今枯熇す。梵志當に知るべし、我捨て去りて彼の大河に入らんと欲す。我今去らんと欲し唯人を畏ると。時に彼の獺獸この梵志と共にこれを論じ已りてすなはち捨て去りぬ。梵志故に坐しぬ。(2)また究暮鳥有りて來りぬ。梵志見已りてこれに問ひて曰く、善く來りぬ究暮鳥、汝何れより來り何れに去らんと欲すと爲すやと。答へて曰く、梵志、この池本の時清泉盈ち溢れ藕饒く華多く魚龜中に滿ち、我昔依りし所にして今枯熇す。梵志當に知るべし、我捨て去りて彼の死牛の聚處

【一】以下第二日誦に屬す。

(1)梵志獺獸を見る。

(2)究暮鳥を見る。

食邑種々具足す。彼云何と爲す。謂く刹利大長者族・梵志大長者族・居士大長者族なり。若し更に是の如き族有りて極大富樂にして資財無量、畜牧産業稱計すべからず封戸食邑種々具足すれば、是の如き家に生じ、生じ已りて覺根成就し、如來所說の正法の律に淨信を得んことを願ひ、淨信を得已りて鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道す。族姓子の所爲「のごとく」鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道すれば唯無上の梵行訖り現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知らんと。昔閻王園觀中に在りてこの願を作しぬ』。こゝに於て頌して曰はく、

天使の爲に訶せらる、　人故に放逸なれば　長夜に則ち憂慼す、　謂く弊欲に覆はれて。
天使の爲に訶せらる、　眞實上人有れば　終にまた放逸ならず、　善く妙聖法を說き　受を見て恐怖せしめ、　生老の盡くるを求願す。　受無く、　滅して餘無ければすなはち生老訖ると爲す。　彼安隱樂に到り、　現法に滅度を得、　一切の恐怖を度り、　亦世間の流を度る。

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第十二

舌を燒き已りて齗を燒き、齗を燒き已りて咽を燒き、咽を燒き已りて心を燒き、心を燒き已りて大腸を燒き、大腸を燒き已りて小腸を燒き、小腸を燒き已りて胃を燒き、胃を燒き已りて身より下り過ぐ。彼[等]是の如く逼迫せらるゝこと無量百千歲、極重の苦を受けて終に死するを得ず。要ず彼の惡不善の業をして盡きしむ。また次に彼の地獄の卒衆生に問ひて曰く、汝何れに去らんと欲するやと。衆生答へて曰く、我等何れの所に去らんと欲すと知らず。但大渴を患ふと。彼の地獄の卒すなはち衆生を捉へて熱鐵床の洞かに然え倶に熾なるに著け、强ひて上に坐せしめ熱鐵鉗を以てその口を鉗開し、沸洋銅を以てその口中に灌ぎ、彼の沸洋銅脣を燒き、脣を燒き已りて舌を燒き、舌を燒き已りて齗を燒き、齗を燒き已りて咽を燒き、咽を燒き已りて心を燒き、心を燒き已りて大腸を燒き、大腸を燒き已りて小腸を燒き、小腸を燒き已りて胃を燒き、胃を燒き已りて身より下り過ぐ、彼[等]是の如く逼迫せらるゝこと無量百千歲、極重の苦を受けて終に死するを得ず。要ず彼の惡不善の業をして盡きしむ。若し彼の衆生地獄にて惡不善の業悉く盡きず一切盡く盡きて餘無きにあらざれば、彼の衆生等また灰河の中に墮し、また鐵劍樹林大地獄を上下し、また鐵鍱林大地獄に入り、また糞屎大地獄に墮し、また峰巖大地獄に往來し、また四門大地獄の中に入る。若し彼の衆生地獄にて惡不善の業悉く盡き、一切盡く盡きて餘無ければ、彼[等]その後に於て或は畜生に入り或は餓鬼に墮し或は天中に生ず。若し彼の衆生本人爲りし時父母に孝ならず、沙門梵志を尊敬するを知らず、如實を行ぜず福業を作さず、後世の罪を畏れざれば彼是の如き愛せず念ぜず喜ばざるの苦報を受く。譬へば猶ほ彼の地獄の中の若し。若し彼の衆生本人爲りし時父母に孝順して沙門梵志を尊敬するを知り如實の事を行じ福德業を作し後生の罪を畏るれば、彼是の如き愛すべく念ずべく[八]喜ぶべきの樂報を受く。猶ほ虛空の神宮殿の中のごとし。昔閻王園觀中に在りてこの願を作しぬ。我この命終りて人中に生じ、若し族姓有りて極大富樂にして資財無量、畜牧產業稱計すべからず封戶

【八】大正藏「可喜」を誤りて「不喜」に作る。

て食ふ。彼の衆生等是の如く逼迫せらるゝこと無量百千歳、極重の苦を受けて終に死するを得ず。要ず彼の惡不善の業をして盡きしむ。また後時に於て極大久遠に彼の衆生等鐵鍱林大地獄より出で、鐵鍱林大地獄の次に鐵劍樹林大地獄に生ず。彼の大劍樹高さ一由延、刺の長さ尺六、彼の衆生をして緣りて上下せしむ。彼樹に上る時刺すなはち下向し若し樹を下る時刺すなはち上向す。彼の劍樹の刺衆生を貫刺し、手を刺し足を刺し或は手足を刺し、耳を刺し鼻を刺し或は耳鼻及び餘の支節を刺し、身を刺し血塗ること無量百千歳、極重の苦を受けて終に死するを得ず。要ず彼の惡不善の業をして盡きしむ。また後時に於て極大久遠に彼の衆生等鐵劍樹林大地獄より出で、鐵劍樹林大地獄の次に灰河に生ず。兩岸極めて高く周遍に刺を生じ沸灰湯その中に滿ちて極めて闇し。彼の衆生見已りて冷水想を起し、當に冷水有るべしと、彼[この]想を起し已りてすなはちこの念を作す、我等彼に往きて中に於て洗浴し、恣意に飽飲し快く涼樂を得んと。彼の衆生等競ひ走りて趣向してその中に入り樂處を求め所歸依を求めんと欲す。彼[等]若し集衆して無量百千となり已りてすなはち灰河に墮す。灰河に墮し已りて順に流れ逆に流れ或は順逆に流る。彼の衆生等順に流れ逆に流れ順逆に流るゝ時皮熟して墮落し肉熟して墮落し或は皮肉熟して時を俱にして墮落し唯骨體のみ在り。灰河の兩岸に地獄の卒有りて手に刀劍大棒鐵叉を捉へて彼の衆生等上岸に度らんと欲せば彼の時獄卒還りて中に推著す。また次に灰河の兩岸に地獄の卒有りて手に鉤羂を捉へ鉤けて衆生を挽き灰河より出して熱鐵地の洞かに燃え俱に熾なるに著け、彼の衆生を擧げて極めて撲ちて地に著け、地に在りて旋轉せしめて之に問ひて曰く、汝何れより來るやと。彼の衆生等僉共に答へて曰く、我等從來する所の處を知らず。但我等今唯大飢を患ふと。彼の地獄の卒すなはち衆生を捉へて熱鐵床の洞かに然え俱に熾なるに著け、强ひて上に坐せしめ熱鐵鉗を以てその口を鉗開し熱鐵丸の洞かに然え俱に熾なるを以てその口中に著く。彼の熱鐵丸脣を燒き、脣を燒き已りて舌を燒き、

【七】灰河 (Khārodakā-nadī)。

に滿ち煙無く焰無く、その上を行きて往來周旋せしむ。彼の兩足の皮肉及び血足を下せば則ち盡き足を擧ぐれば則ち生じ還りてまた故の如し。彼を[四]治すること是の如く、無量百千歲極重の苦を受け終に死するを得ず。要ず彼の惡不善の業をして盡きしむ。また後時に於て極大久遠に彼の衆生等蜂巖大地獄より出で、蜂巖大地獄の次に[五]糞屎大地獄に生ず。中に糞屎を滿し深さ無量百丈、彼の衆生等盡くその中に墮す。彼の糞屎大地獄中に衆多の蟲を生じ、蟲を凌瞿來と名づけ、身白く頭黑く、その觜針の如し。この蟲彼の衆生の足を鑽り破り、彼の足を破り已りてまた腨腸骨を破り、腨腸骨を破り已りてまた髀骨を破り、髀骨を破り已りてまた髖骨を破り、髖骨を破り已りてまた脊骨を破り、脊骨を破り已りてまた肩骨・頸骨・頭骨を破り、頭骨を破り已りて頭腦を食ひ盡す。彼の衆生等是の如く逼迫せらるゝこと無量百千歲、極重の苦を受け終に死するを得ず。要ず彼の惡不善の業をして盡きしむ。また後時に於て極大久遠に彼の衆生等糞屎大地獄より出で、糞屎大地獄の次に[六]鐵鍱林大地獄に生ず。彼の衆生見已りて清涼想を起し、すなはちこの念を作す、我等彼に往き快く清涼を得んと。彼の衆生等走り往きて趣向し、安處を求め所歸依を求めんと欲す。彼[等]若し集聚し無量百千となり已ればすなはち鐵鍱林大地獄の中に入る。彼の鐵鍱林大地獄中四方則ち大熱風の來る有り。熱風來り已りて鐵鍱すなはち落ち、鐵鍱落つる時手を截り足を截り或は手足を截り、耳を截り鼻を截り或は耳鼻及び餘の支節を截る、身を截りて血塗ること無量百千歲極重の苦を受けて終に死するを得ず。要ず彼の惡不善の業をして盡きしむ。また次に彼の鐵鍱林大地獄中に極大の狗を生じ、牙齒極めて長く彼の衆生を摑み、足より皮を剝ぎ頭に至りてすなはち食ひ、頭より皮を剝ぎ足に至りてすなはち食ふ。彼の衆生等是の如く逼迫せらるゝこと無量百千歲、極重の苦を受けて終に死するを得ず。要ず彼の惡不善の業をして盡きしむ。また次に彼の鐵鍱林大地獄中に大烏鳥を生じ兩頭鐵喙ありて衆生の額に住し生きながら眼を挑りて呑み喙もて頭骨を破り腦を取り

【四】療治するの意。
【五】糞屎大地獄 (Gūthaniraya)。
【六】鐵鍱林大地獄 (Asipattavana)。

ざりしや。彼の人答へて曰く、見しなり天王。閻王また問ふ、汝その後に識知する有りし時何ぞこの念を作さゞる、我今現に惡不善の法を見ると。彼の人白して曰く、天王、我了かに敗壞し長く衰へ永く失へるや。閻王告げて曰く、汝了かに敗壞し長く衰へ永く失ひぬ。今當に汝を考して放逸行放逸人を治するが如くすべし。汝のこの惡業父母の爲すに非ず、王に非ず天に非ず亦沙門梵志の所爲に非ず。汝本自ら惡不善の業を作しぬ。この故に汝今必ず當に報を受くべし。閻王この第五の天使を以て善く問ひ善く撿し善く敎へ善く訶し已りて卽ち獄卒に付す。獄卒すなはち捉へ持ちて四門大地獄中に著す。こゝに於て頌して曰く、

四柱四門有り、　壁方十二楞にして　鐵を以て垣墻と爲し、　その上に鐵もて覆蓋す。　地獄の內は鐵地にして熾燃せる鐵火もて布き　深さ無量由延にして乃至地底に住す。　極惡にして受くべからず火色視るべきこと難し　見已りて身毛竪ち、　恐懼怖して甚だ苦しむ。　彼地獄に墮生し、　脚上に頭下に在り。　[これ]諸の聖人の[自ら]調御し善く淸善なるを誹謗[せるによる]。

時有りて後極大久遠に於て彼の衆生の爲の故に四門の大地獄の東門すなはち開く、東門開き已りて彼の衆等來り趣向し、安處を求め所歸依を求めんと欲す。彼[等]若し集聚し無量百千となり已れば地獄の東門すなはち還りて自ら閉ぢ、彼[等]その中に於て極重の苦を受けて啼哭喚呼し心悶えて地に臥し終に死するを得ず。要ず彼の惡不善の業をして盡きしむ。極大久遠に南門・西門・北門、また開く。北門開き已りて彼の衆生等走り來りて趣向し、安處を求め所歸依を求めんと欲す。彼[等]若し集聚し無量百千となり已れば地獄の北門また還りて自ら閉ぢ、彼[等]その中に於て極重の苦を受け啼哭喚呼し心悶えて地に臥して終に死するを得ず。要ず彼の惡不善の業をして盡きしむ。また後時に於て極大久遠に彼の衆生等四門の大地獄より出で四門の大地獄の次に峰巖地獄に生ず。火その中

衰へ永く失ひぬ。今當に汝を考して放逸行放逸人を治するが如くすべし。汝この惡行父母の爲すに非ず王に非ず天に非ず亦沙門梵志の所爲に非ず。汝本自ら惡不善の業を作しぬ。この故に汝今當に報を受くべし。閻王この第三の天使を以て善く問ひ善く撿し善く敎へ善く訶し已りて(4)また第四の天使を以て善く問ひ善く撿し善く敎へ善く訶しぬ、汝頗し曾て第四の天使の來るを見しや。彼の人答へて曰く、見ざるなり天王。閻王また問ふ、汝本一村邑中或は男或は女若し死亡の時或は一二日、六七日に至り鳥鵄に啄まれ犲狼に食はれ、或は火を以て燒かれ或は地中に埋められ或は爛れ腐壞するを見ざりしや。彼の人答へて曰く、見しなり天王。閻王また問ふ、汝その後に於て識知する有りし時何ぞこの念を作さゞる、我自ら死法有り死を離れず。我應に妙身口意業を行ずべしと。彼の人白して曰く、我了かに敗壞し長く衰へ永く失へるや。閻王告げて曰く、汝了かに敗壞し長く衰へ永く失ひぬ。今當に汝を考して放逸行放逸人を治するが如くすべし。汝この惡業父母の爲すに非ず王に非ず天に非ず亦沙門梵志の所爲に非ず。汝本自ら惡不善の業を作しぬ。この故に汝今必ず當に報を受くべし。閻王この第四の天使を以て善く問ひ善く撿し善く敎へ善く訶し已りて、(5)また第五の天使を以て善く問ひ善く撿し善く敎へ善く訶しぬ、汝頗し曾て第五の天使の來るを見しや。彼の人答へて曰く、見ざるなり天王。閻王また問ふ、汝本王の人犯罪の人を捉へ種々考治し手を截り足を截り、或は手足を截り、耳を截り鼻を截り或は耳鼻を截り、或は臠々に割き鬚を拔き髮を拔き或は鬚髮を拔き或は檻中に著き衣に火を裹みて燒き、或は沙を以て草を壅ぎ、火を纒ひて燒き、或は鐵驢を腹中に内れ、或は鐵猪を口中に著し、或は鐵虎を口中に置きて燒き、或は銅釜中に安じ或は鐵釜中に著きて煮、或は段々に截り、或は利叉もて刺し、或は鉤を以て鈎り、或は鐵床に臥せしめて沸油を以て澆ぎ、或は鐵臼に坐せしめて鐵杵を以て擣ち、或は龍蛇蜇を以て或は鞭を以て鞭ち或は杖を以て撾ち、或は棒を以て打ち、或は生きながら高標上に貫き、或はその首を梟せるを見

の念を作さゞる、我自ら生法有りて生法を離れず。我應に妙身口意業を行ずべしと。彼の人白して曰く、天王、我了かに敗壞し長く衰へ永く失へるや。閻王告げて曰く、汝了かに敗壞し長く衰へ永く失ひぬ。今當に汝を考して放逸行・放逸人を治するが如くすべし。汝この惡業父母の爲すに非ず王に非ず天に非ず亦沙門梵志の所爲に非ず。汝本自ら惡不善の業を作しぬ。この故に汝今當に報を受くべし。閻王この初の天使を以て善く問ひ善く撿し善く敎へ善く訶し已りて、(2)また第二の天使を以て善く問ひ善く撿し善く敎へ善く訶しぬ、汝頗し曾て第二の天使の來るを見しや。彼の人答へて曰く、見ざるなり天王。閻王また問ふ、汝本一村邑中或は男或は女年耆極めて老い、壽過ぎ苦極まり命訖らんと欲するに垂として、齒落ち頭白く身曲り僂して歩み杖を拄へて行き、身體戰動するを見ざりしや。彼の人答へて曰く、見しなり天王。閻王また問ふ。汝本その後に於て識知する有りし時何ぞこの念を作さゞる、我自ら老法有りて老を離れず。我應に妙身口意業を行ずべしと。彼の人白して曰く天王、我了かに敗壞し長く衰へ永く失へるや。閻王告げて曰く、汝了かに敗壞し長く衰へ永く老いぬ。今當に汝を考して放逸行放逸人を治するが如くすべし。汝この惡業父母の爲すに非ず王に非ず天に非ず亦沙門梵志の所爲に非ず。汝本自ら惡不善の業を作しぬ。この故に汝今必ず當に報を受くべし。閻王この第二の天使を以て善く問ひ善く撿し善く敎へ善く訶し已りて、(3)また第三の天使を以て善く問ひ善く撿し善く敎へ善く訶しぬ、汝頗し曾て第三の天使の來るを見しや。彼の人答へて曰く、見ざるなり天王。閻王また問ふ、汝本一村邑中或は男或は女疾病困篤にして或は臥床に坐し或は臥榻に坐し或は地に坐臥し、身に極苦甚重苦を生じ愛念すべからず促命せしむるを見ざりしや。彼の人答へて曰く、見しなり天王。閻王また問ふ、汝その後に於て識知する有りし時何ぞこの念を作さゞる、我自ら病法有りて病を離れず。我應に妙身口意業を行ずべしと。彼の人白して曰く、天王、我了かに敗壞し長く衰へ永く失へるや。閻王告げて曰く、汝了かに敗壞し長く

人一處に住すれば出時入時を觀る。我亦是の如く淨き天眼の人[眼]を出過せるを以て、この衆生の死時・生時・好色・惡色・或は妙・不妙、善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見るに、若しこの衆生身惡行・口意惡行を成就し聖人を誹謗し、邪見にして邪見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて、必ず惡處に至り地獄の中に生ず。若し衆生身妙行・口意妙行を成就し、聖人を誹謗せず、正見にして正見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて、必ず善處に昇り乃ち天上に生ず。(5)若し目有る人高樓上に住すれば、下に於て人往來周旋し坐臥走踊するを觀る。我亦是の如く淨き天眼の人[眼]を出過せるを以てこの衆生の死時生時、好色・惡色、或は妙・不妙、善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見るに、若しこの衆生身惡行及び口意惡行を成就し、聖人を誹謗し邪見にして、邪見業を成就すれば彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。若しこの衆生身妙行・口意妙行を成就し聖人を誹謗せず正見にして正見業を成就すれば彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず善處に昇り乃ち天上に生ず。(6)若し衆生有り、人間に生じて父母に孝ならず沙門梵志を尊敬するを知らず如實を行ぜず福業を作さず後世の罪を畏れざれば彼これに因緣して身壞れ命終りて　閻王の境界に生じ、閻王の人收め送りて王の所に詣り白して曰く、天王、この衆生本人たりし時、父母に孝ならず、沙門梵志を尊敬するを知らず、如實を行ぜず福業を作さず、後世の罪を畏れざりき。唯願はくは天王、その罪を處當したまへと。こゝに於て閻王(1)初の天使を以て善く問ひ、善く撿し善く教へ善く訶し、汝頗し曾て初の天使の來るを見しやと。彼の人答へて曰く、見ざるなり天王、閻王また問ふ、汝本一村邑中或は男或は女、幼小嬰孩にして身弱く柔軟にして仰ぎ向きて、自ら大小便中に臥し、父母に語ぐる能はず、父母抱き移して不淨處を離れしめその身を澡浴して淨潔を得しむるを見ざりしやと。彼の人答へて曰く、見しなり天王。閻王また問ふ、汝その後に於て　識知する有りし時何ぞこ

【二】閻王(Yama-rāja)。閻羅・炎摩王・雙王。兄妹二人雙び王たるの義と解す。兄 Yama は妹 Yamī と婚し死者の靈を司配すといふ古信仰に出たるか。

【三】識知 (Viññutaṁ patta)。物事を辨別し得る年輩に達したる時。

觀るがごとし。我亦是の如く、淨き天眼の人[眼]を出過せるを以て、この衆生の死時・生時・好色・惡色・或は妙不妙、善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見るに、若しこの衆生身惡行・口意惡行を成就し、聖人を誹謗し、邪見にして邪見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。若しこの衆生身妙行・口意妙行を成就し、聖人を誹謗せず、正見にして正見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず善處に昇り乃ち天上に生ず。(2)猶ほ大雨の時雨墮の渧或は上り或は下り、若し目有る人一處に住すれば、上時・下時を觀るがごとし。我亦是の如く淨き天眼の人[眼]を出過せるを以て、この衆生の死時・生時、好色・惡色・或は妙不妙、善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見るに、若しこの衆生身惡行・口意惡行を成就し聖人を誹謗し、邪見にして邪見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて、必ず惡處に至り地獄の中に生ず。若しこの衆生身妙行・口意妙行を成就し聖人を誹謗せず、正見にして正見業を成就すれば、彼これに因緣して、身壞れ命終りて、必ず善處に昇り乃ち天上に生ず。(3)猶ほ琉璃珠の清淨にして、自然に生じて瑕穢無く八楞善く治し、貫くに妙繩を以てし、或は靑或は黃或は赤黑白にして、若し目有る人一處に住すればこの琉璃珠清淨にして、自然に生じて瑕穢無く、八楞善く治し、貫くに妙繩を以てし、或は靑或は黃或は赤黑白なるを觀るがごとし。我亦是の如く淨き天眼の人[眼]を出過せるを以てこの衆生の死時生時、好色・惡色、或は妙・不妙、善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見るに、若しこの衆生身惡行・口意惡行を成就し、聖人を誹謗し、邪見にして邪見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて、必ず惡處に至り地獄の中に生ず。若しこの衆生身妙行・口意妙行を成就し聖人を誹謗せず、正見にして正見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて、必ず善處に昇り乃ち天上に生ず。(4)猶ほ兩屋一門を共にして多人出入するが如し。若し目有る

諸賢、頻鞞王家國大にして事多く費用の處廣し。我かくの如きを知る。故を以て受けずと。佛阿難に告げたまはく、意に於て云何。その時童子優多羅は汝異人と謂ふや。この念を作すこと莫れ。當に知るべし。卽ちこれ我なり。阿難、我その時に於て自ら饒益を爲し、亦他を饒益し、多人を饒益し、世間を愍傷し天の爲、人の爲に義及び饒益を求め、安隱快樂を求めぬ。その時法を説きて究竟に至らず、白淨を究竟せず、梵行を究竟せず、梵行を究竟し訖らず、その時生・老・病・死、啼哭・憂慼を離れず亦一切の苦を脱することを得る能はざりき。阿難、我ば今出世・如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして、佛・衆祐と號す。我今自ら饒益し亦他を饒益し、多人を饒益し世間を愍傷し、天の爲、人の爲に、義及び饒益を求め、安隱快樂を求む。我今法を説きて究竟に至るを得、白淨を究竟し梵行を究竟し、梵行を究竟し訖りぬ。我今已に生・老・病・死、啼哭憂慼を離れ、我今已に一切の苦を脱するを得ぬ』。佛説是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。

六十四、[一]天使經第七

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我淨き天眼の人[眼]を出過せるを以てこの衆生の死時・生時・好色・惡色・或は妙・不妙、善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見るに、若しこの衆生身惡行・口意惡行を成就し、聖人を誹謗し、邪見にして邪見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。若しこの衆生身妙行・口意妙行を成就し、聖人を誹謗せず、正見にして正見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて、必ず善處に昇り乃ち天上に生ず。(1)猶ほ大雨の時水上の泡の或は生じ或は滅し、若し目有る人一處に住して生時滅時を

【一】M. 130 Devadūtasutta, A. i. 138. 「鐵城泥梨經」、「閻羅王五大天使經」。

母語げて曰く、諸賢、意に隨ひて持ち去れ。制する者有ること無しと。難提波羅陶師後に於て家に還り故き陶屋を挽壞せるを見父母に白して曰く、誰か我が故き陶屋を挽壞せるやと。父母答へて曰く、賢子、今日迦葉如來・無所著・等正覺の瞻侍の比丘故き陶屋を挽壞して束と作し持ち去りて用て迦葉如來・無所著・等正覺の屋を覆ひぬと。難提波羅陶師聞き已りて、すなはちこの念を作しぬ、我善利有り大功德有り。迦葉如來・無所著・等正覺我が家中に於て、意に隨ひて自在にしたまひぬと。彼こゝを以て歡喜し結跏趺坐し、息心靜默して七日に至り、十五日中に於て歡樂を得ぬ。その家の父母七日中に於て亦歡樂を得ぬ。大王、[一四]難提波羅陶師の故き陶屋夏四月を竟りて都て漏るを患へず。所以者何。佛の威神を蒙るが故なり。大王、難提波羅陶師忍ばざる有る無く、欲せざる有る無く、心憂慼無し。迦葉如來・無所著・等正覺我が家中に於て意に隨ひて自在にしたまひぬと。大王、汝忍ばざる有り汝欲せざる有り心大いに憂慼す、迦葉如來・無所著・等正覺我が請を受けこの波羅㮈に於て夏坐を受けたまはず、及び比丘衆「も亦受けず」と。こゝに於て迦葉如來・無所著・等正覺頻鞞王の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて坐より起ちて去りたまひぬ。時に頻鞞王迦葉如來・無所著・等正覺去りたまひし後に於て、久しからずしてすなはち侍者に勅しぬ、汝等五百乘の車を以て白粳米、王の食する所の種々諸の味を載滿し、載せて難提波羅陶師の家に至りて之に語げて曰ふべし、難提波羅、この五百乘の車は白粳米、王の食する所の種々、諸の味を載滿す、頻鞞王送り來りて汝に餉る。慈愍の爲の故に汝今當に受くべしと。時に彼の侍者王の敎を受け已りて五百乘の車を以て白粳米、王の食する所の種々諸の味を載滿し送りて難提波羅陶師の家に詣り、到り已りて語げて曰く、難提波羅陶師、この五百乘の車は白粳米、王の食する所の種々諸の味を載滿し、頻鞞王送り來りて汝に餉る。慈愍の爲の故に汝今當に受くべしと。こゝに於て難提波羅陶師辭讓して受けず、侍者に語げて曰く、

【一四】大正藏本「難提婆羅」に作る。

り、十五日中に於て歡樂を得、その家の父母七日中に於て亦歡樂を得ぬ。また次に大王、我昔時を憶ふに鞞婆陵耆村邑に依りて遊行しぬ。大王、我その時平旦、衣を著け鉢を持し、鞞婆陵耆村邑に入りて乞食し、次第に乞食し往きて難提波羅陶師の家に到りぬ。その時難提波羅小事の爲の故に出行して在らざりき。大王、我難提波羅陶師の父母に問ひて曰く、長老、陶師今何處に在りやと。彼我に答へて曰く、世尊、侍者小事の爲の故に暫らく出でゝ在らず。善逝、侍者小事の爲の故に暫らく出でゝ在らず。世尊、大釜中に糲米飯有り小釜中に羹有り。唯願はくは世尊、慈愍の爲の故に意に隨ひて自ら取りたまへと。大王、我すなはち欝單曰の法を受け、即ち大小釜中より羹飯を取りて去りぬ。難提波羅陶師後に於て家に還り、大釜中の飯少く小釜中の羹減ぜるを見て、父母に白して曰く、誰か大釜中より飯を取り小釜中より羹を取れるやと。父母答へて曰く、賢子、今日迦葉如來・無所著・等正覺こゝに至りて乞食したまひぬ。彼大小釜中より羹飯を取りて去りたまひぬと。難提波羅陶師聞き已りてすなはちこの念を作しぬ、我善利有り大功德有り。迦葉如來・無所著・等正覺我が家中に於て意に隨ひて自在にしたまひぬと。彼こゝを以て歡喜し結跏趺坐し、息心靜默して七日に至り、十五日中に於て歡樂を得ぬ。その家の父母七日中に於て亦歡樂を得ぬ。また次に大王、我昔時を憶ふに鞞婆陵耆村邑に依りて夏坐を受けぬ。大王、我その時新に屋を作りて未だ覆はず。難提波羅陶師故き陶屋を新に覆ひぬ。大王、我瞻侍の比丘に告げて曰く、汝等去りて難提波羅陶師の故き陶屋を壞ち持ち來りて我が屋を覆ふべしと。瞻侍の比丘即ち我が教を受け、すなはち去り往きて難提波羅陶師の家に至り、故き陶屋を挽壞して、束と作し持ち來りて用て我が屋を覆ひぬ。難提波羅陶師の父母、故き陶屋を壞つを聞き、聞き已りて問ひて曰く、誰か難提波羅の故き陶屋を壞つやと。比丘答へて曰く、長老、我等はこれ迦葉如來・無所著・等正覺の瞻侍の比丘なり。難提波羅陶師の故き陶屋を挽壞して束と作し用て迦葉如來・無所著・等正覺の屋を覆ふなりと。難提波羅の父

を斷じ彼高廣大床に於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師華鬘・瓔珞・塗香・脂粉を離れ華鬘・瓔珞・塗香・脂粉を斷じ、彼華鬘・瓔珞・塗香・脂粉に於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師歌舞倡妓及び往觀聽を離れ歌舞倡妓及び往觀聽を斷じ、彼歌舞倡妓及び往觀聽に於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師生色像寶を受くるを離れ、生色像寶を受くるを斷じ、彼生色像寶を受くるに於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師過中食を離れ、過中食を斷じ常に一食にして夜食、學時食せず、彼過中食に於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師形壽を盡くし鏵鍬を離れ自ら地を掘らず亦他をして[掘]ら敎めず。若し水岸の崩土及び鼠傷土は取り用ひて器と作し一面に擧著し賈者に語げて言はく、汝等若し豌豆・稻麥・大小麻豆・豍豆・芥子有らば瀉ぎ已りて器を持ちて去り意の欲する所に隨へと。大王、難提波羅陶師形壽を盡くして父母に供侍す。父母目無くして唯人を仰ぐ。この故に供侍す。大王、我昔時を憶ふに鞞婆陵耆村邑に依りて遊行しぬ。大王、我その時平旦、衣を著け鉢を持し、鞞婆陵耆村邑に入りて乞食し、次第に乞食して往きて難提波羅陶師の家に到りぬ。その時難提波羅小事の爲の故に出行して在らざりき。大王、我難提波羅陶師の父母に問ひて曰く、長老陶師今何處に在りやと。彼我に答へて曰く、世尊、侍者小事の爲の故に暫く出でゝ在らず。善逝、侍者小事の爲の故に暫らく出でゝ在らず。世尊、籮中に麥飯有り釜中に豆羹有り。唯願はくは世尊、慈愍の爲の故に意に隨ひて自ら取りたまへと。大王、我すなはち欝單曰の法を受け卽ち籮釜中より羹飯を取りて去りぬ。難提波羅陶師後に於て家に還り籮中の飯少く釜中の羹減ぜるを見、父母に白して曰く、誰か羹飯を取れるやと。父母答へて曰く、賢子、今日迦葉如來・無所著・等正覺こゝに至りて乞食したまひぬ。彼籮釜中より羹飯を取りて去りたまひぬと。難提波羅陶師聞き已りて、すなはちこの念を作しぬ、我善利有り大功德有り。迦葉如來・無所著・等正覺我が家中に於て意に隨ひて自在にしたまひぬと。彼これを以て歡喜し結跏趺坐し息心靜默にして七日に至

ひ、眞諦を樂しみ眞諦に住して移動せず、一切信ずべくして世間を欺かず、彼妄言に於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師兩舌を離れ兩舌を斷じ、不兩舌を行じ他を破壞せず、これに聞き彼に語げて、これを破壞せんと欲せず、彼に聞きこれに語げて、彼を破壞せんと欲せず、離るれば合せんと欲し合へば歡喜し、群黨を作さず群黨を樂しまず群黨を稱せず、彼兩舌に於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師麁言を離れ麁言を斷じ若し所言有りて辭氣麁獷惡聲にして耳に逆ひ衆の喜ばざる所、衆の愛せざる所にして他をして苦惱せしめ定を得ざらしむる、是の如き言を斷じ、若し所說有れば清和柔潤にして耳に順ひ、心に入り喜ぶべく愛すべくして他をして安樂ならしめ、言聲具し了り人をして畏れしめず、他をして定を得しむる、是の如き言を說き、彼麁言に於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師綺語を離れ綺語を斷じ時說・眞說・法說・義說・止息說・樂止息說し、事時に順ひて宜しきを得、善く敎へ善く訶し、彼綺語に於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師治生を離れ治生を斷じ稱量及び斗斛を棄捨し亦貨を受けず、人を縛束せず斗量を折るを望まず、小利を以て人を侵欺せず、彼治生に於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師、寡婦童女を受くるを離れ、寡婦童女を受くるを斷じ、彼寡婦童女を受くるに於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師奴婢を受くるを離れ奴婢を受くるを斷じ、彼奴婢を受くるに於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師、象馬牛羊を受くるを離れ、象馬牛羊を受くるを斷じ、彼象馬牛羊を受くるに於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師雞猪を受くるを離れ、雞猪を受くるを斷じ、彼雞猪を受くるに於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師田業店肆を受くるを離れ、田業店肆を受くるを斷じ、彼田業店肆を受くるに於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師、生稻麥豆を受くるを離れ、生稻麥豆を受くるを斷じ、彼生稻麥豆を受くるに於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師酒を離れ酒を斷じ、彼飮酒に於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師、高廣大床を離れ、高廣大床

喜せしめ已りたまふや、卽ち坐より起ち、偏に著衣を袒ぎ叉手して向ひ迦葉如來・無所著・等正覺に白して曰く、唯願はくは世尊、この波羅㮈に於て我が夏坐を受けたまへ、及び比丘衆「亦受けよ」。我世尊の爲に五百房、五百牀褥を作り、及び【三】拘執かくの如き白粳米、王の食する所の種々諸の味を施し世尊及び比丘衆を飯飼せんと。迦葉如來・無所著・等正覺、頻鞞王に告げて曰はく、止みね止みね、大王、但「わが」心喜べば足ると。頻鞞王是の如く再び三たびに至り叉手して向ひ、迦葉如來・無所著・等正覺に白して曰く、唯願はくは世尊、この波羅㮈に於て我が夏坐を受けたまへ。及び比丘衆「亦受けよ」。我世尊の爲に五百房、五百床褥を作り及び拘執かくの如き白粳米、王の食する所の種々諸の味を施し世尊及び比丘衆を飯飼せんと。迦葉如來・無所著・等正覺亦再び三たび頻鞞王に告げて曰はく、止みね止みね、大王、但「わが」心喜べば足ると。こゝに於て頻鞞王忍ばず欲せず、心大いに憂慼しぬ、迦葉如來・無所著・等正覺我が爲にこの波羅㮈に於て夏坐を受けたまふこと能はず、及び比丘衆「亦然り」と。この念を作し已りて頻鞞王、迦葉如來・無所著・等正覺に白して曰く、世尊、頗し更に在家白衣にして世尊に奉事すること我の如き者有りやと。迦葉如來・無所著・等正覺頻鞞王に告げて曰はく、在る有り。王の境界なる鞞婆陵耆村極大豐樂にして、多く人民を有す。大王、彼の鞞婆陵耆村中に難提波羅陶師有り。大王、難提波羅陶師佛に歸し法に歸し比丘衆に歸し、三尊を疑はず苦習滅道に惑はず、信を得、戒を持し、博聞にして惠施し、智慧を成就し、殺を離れ殺を斷じ刀杖を棄捨し、慚有り愧有り慈悲心有りて一切乃至蜫蟲を饒益し、彼殺生に於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師不與取を離れ不與取を斷じ、これを與ふれば乃ち取り、與取を樂しみ常に好く布施し歡喜して、悋むこと無くその報を望まず、彼不與取に於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師非梵行を離れ非梵行を斷じ梵行を勤修し妙行を精懃し清淨無穢にして欲を離れ婬を斷じ、彼非梵行に於てその心を淨除しぬ。大王、難提波羅陶師妄言を離れ妄言を斷じ眞諦を言

【三】「拘執」の意味明了ならず。

まへと。こゝに於て頻鞞王好車に乗り已りて波羅㮈より出でゝ仙人住處、鹿野園中に往詣しぬ。時に頻鞞王遙かに樹間を見るに迦葉如來・無所著・等正覺端正姝好にして猶ほ星中の月のごとく、光耀熠韡晃金山の若く、相好具足し威神巍々、諸根寂定して蔽礙有ること無く、調御を成就し、息心靜默したまひぬ。見已りて車を下り歩みて、迦葉如來・無所著・等正覺の所に詣り、到り已りて禮を作し、却きて一面に坐しぬ。頻鞞王一面に坐し已りて迦葉如來・無所著・等正覺彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて、彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて默然として住したまひぬ。こゝに於て頻鞞王、迦葉如來・無所著・等正覺、その爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、已りて卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手して向ひ、迦葉如來・無所著・等正覺に白して曰く、唯願はくは世尊、明に我が請を受けたまへ。及び比丘衆「も亦受けよ」と。迦葉如來・無所著・等正覺、頻鞞王の爲に默然として請を受けたまひぬ。こゝに於て頻鞞王迦葉如來・無所著・等正覺、默然として受けたまひぬと知り已りて稽首して禮を作し、繞三匝して去り、その家に還歸し夜に於て極美淨妙にして種々豐饒の食噉含消を施設し、卽ちその夜に於て供辦已に訖り、平旦床を敷き唱へて曰く、世尊、今時已に到り食具さに已に辦じぬ。唯願はくは世尊、時を以て臨顧したまへと。こゝに於て迦葉如來・無所著・等正覺夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持し諸の比丘衆世尊に侍從して頻鞞王の家に往詣し、比丘衆の上に在りて座を敷きて坐したまひぬ。こゝに於て頻鞞王、佛及び比丘衆の坐せるを見已りて自ら澡水を行じ極美淨妙にして種々豐饒の食噉含消を以て手もて自ら斟酌し飽滿するを得しめぬ。食し訖りて器を收め澡水を行じ、竟りて一小床を敷き別に坐して法を聽きぬ。頻鞞王坐し已りて迦葉如來・無所著・等正覺彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、已りて默然として住したまひぬ。こゝに於て頻鞞王、迦葉如來・無所著・等正覺その爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡

以ての故なりと。こゝに於て優多羅童子難提波羅に問ひぬ、我迦葉如來・無所著・等正覺に從ひて出家學道するを得、[一〇]具足〔戒〕を受け比丘と作りて、梵行を行ずるを得べきやと。こゝに於て難提波羅陶師及び優多羅童子卽ち彼の處よりまた迦葉如來・無所著・等正覺の所に往詣し、到り已りて禮を作し、却きて一面に坐し、難提波羅陶師迦葉如來・無所著・等正覺に白して曰く、世尊、この優多羅童子還り去りて遠からずして我に問ひて言はく、難提波羅、汝迦葉如來・無所著・等正覺に從ひて是の如き微妙の法を聞くを得て何の意にて家に住し、能く捨離して聖道を學せざるやと。世尊、我彼に答へて曰く、優多羅、汝自ら知る、我形壽を盡して父母を供養す。父母目無くして唯人を仰ぐ。我父母を供養し侍するを以ての故なりと。優多羅また我に問ひて曰く、難提波羅、我迦葉如來・無所著・等正覺に從ひて出家學道する得、具足〔戒〕を受け比丘と作りて梵行を行ずるを得べきやと。願はくは世尊、彼を度して出家學道せしめ具足〔戒〕を授與して比丘と作るを得しめたまへと。迦葉如來・無所著・等正覺難提波羅の爲に默然として受けたまひぬ。こゝに於て難提波羅陶師迦葉如來・無所著・等正覺默然として受けたまへるを知り、已りて卽ち坐より起ち、稽首して禮を作し、繞三匝して去りぬ。こゝに於て迦葉如來・無所著・等正覺難提波羅去りて後久しからずして、優多羅童子を度して出家學道せしめ具足〔戒〕を授與したまひぬ。出家學道せしめ具足〔戒〕を授與し已りて隨ひて住すること數日、衣鉢を攝持し大比丘衆と俱に共に遊行して[一一]波羅棕なる迦私國邑に至らんと欲し、展轉遊行してすなはち波羅棕なる迦私國邑に到り波羅棕、住仙人處、鹿野園中に遊びたまひぬ。こゝに於て[一二]頻鞞王、迦葉如來・無所著・等正覺、迦私國に遊行し大比丘衆と俱にこの波羅棕、住仙人處、鹿野園中に到りたまひぬと聞きぬ。頻鞞王聞き已りて、御者に告げて曰く、汝駕を嚴るべし。我今迦葉如來・無所著・等正覺の所に往詣せんと欲すと。時に彼の御者王の敎を受け、已りて卽便ち駕を嚴り、駕を嚴ること已に訖りて還りて王に白して曰く、已に好車を嚴りぬ。天王の意に隨ひた

〔一〇〕比丘の大戒をいふ、進具戒、圓具戒などともいふ、二百五十戒ありといへど傳によりて異り、巴利にては二百二十七戒なり。これを集めたるものを波羅提木叉又は從解脫といふ。

〔一一〕Bārāṇasi 今のベナレスなり、迦私(Kāsi)國の都城なり。

〔一二〕Kiki

事處に至り若干國來の諸の弟子等に敎へて、梵志書を讀ましめんと欲しき。こゝに於て優多羅童子遙かに難提波羅陶師の來るを見、見已りてすなはち難提波羅に問ひぬ、汝何れより來るやと。答へて曰く我今迦葉如來・無所著・等正覺の所より供養禮事し來れり。優多羅、汝我と共に迦葉如來・無所著・等正覺の所に往詣し、供養禮事すべしと。こゝに於て優多羅童子答へて曰く、難提波羅、我禿頭の沙門を見るを欲せず。禿沙門應に道を得べからず。道得難きが故に、と。こゝに於て難提波羅陶師優多羅童子の頭髻を捉へ牽きて車を下りしめぬ。こゝに於て優多羅童子すなはちこの念を作しぬ、この難提波羅陶師常に調笑せず狂せず癡ならず。今我が頭髻を捉ふ。必ず當に以有るべしと。念じ已りて語げて曰く、難提波羅、我汝に隨ひて去らん。我汝に隨ひて去らんと。難提波羅喜びてまた語げて曰く、去らば甚だ善しと。こゝに於て難提波羅陶師優多羅童子と共に迦葉如來・無所著・等正覺の所に往詣し、到り已りて禮を作し却きて一面に坐し、難提波羅陶師迦葉如來・無所著・等正覺に白して曰く、世尊、この優多羅童子これ我が朋友なり。彼常に見て愛し常に喜びて我を歡見し厭足有ること無し。彼世尊に於て信敬心無し。唯願はくは世尊、善く爲に法を說き彼をして歡喜して信敬心を得しめたまへと。こゝに於て迦葉如來・無所著・等正覺、難提波羅陶師及び優多羅童子の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、默然として住したまひぬ。こゝに於て難提波羅陶師及び優多羅童子、迦葉如來・無所著・等正覺その爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、卽ち坐より起ち迦葉如來・無所著・等正覺の足を禮し、繞三匝して去りぬ。こゝに於て優多羅童子還り去りて遠からずして問ひて曰く、難提波羅、汝迦葉如來・無所著・等正覺に從ひて是の如き微妙の法を聞くを得て、何の意にて家に住し、能く捨離して聖道を學せざるやと。こゝに於て難提波羅陶師答へて曰く、優多羅、汝自ら知る、我形壽を盡して父母を供養す。父母目無くして唯人を仰ぐ。我父母を供養し侍するを

雞猪を受くるを離れ、雞猪を受くるを斷じ、彼雞猪を受くるに於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師田業店肆を受くるを離れ、田業店肆を受くるを斷じ、彼田業店肆を受くるに於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師生稻麥豆を受くるを離れ、生稻麥豆を受くるを斷じ、彼生稻麥豆を受くるに於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師酒を離れ酒を斷じ、彼飲酒に於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師高廣大床を離れ高廣大床を斷じ、彼高廣大床に於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師華鬘・瓔珞・塗香・脂粉を離れ、華鬘・瓔珞・塗香・脂粉を斷じ、彼華鬘・瓔珞・塗香・脂粉に於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師歌舞倡妓及び往觀聽を離れ、歌舞倡妓及び往觀聽を斷じ、彼歌舞倡妓及び往觀聽に於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師生色像寶を受くるを離れ生色像寶を受くるを斷じ、彼生色像寶に於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師過中食を離れ過中食を斷じ常に一食にして夜食、學時食せず、彼過中食に於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師形壽を盡し手鏟鍬を離れ自ら地を掘らず、亦他をして[掘ら]敎めず、若し水岸の崩土及び鼠傷土は取り用ひて器を作り一面に擧著し買者に語げて曰く、汝等若し豌豆・稻麥・大小麻豆・豍豆・芥子有らば、瀉ぎ已りて器を持ちて去り、意の欲する所に隨へと。阿難、難提波羅陶師形壽を盡し父母に供侍しぬ。父母目無くして唯人を仰ぐ。この故に供侍しぬ。阿難、難提波羅陶師夜を過ぎて平旦、迦葉如來・無所著・等正覺の所に往詣し、到り已りて禮を作し却きて一面に坐しぬ。迦葉如來・無所著・等正覺彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、已りて默然として住したまひぬ。阿難、こゝに於て難提波羅陶師、迦葉如來・無所著・等正覺その爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、已りたまふや、卽ち坐より起ち、迦葉如來・無所著・等正覺の足を禮し已りて、繞三匝して去りぬ。その時優多羅童子白馬車に乘り、五百の童子と俱に夜を過ぎて平旦、鞞婆陵耆村邑より出で往きて、一無

【七】往きて見世物の類を觀、唱歌の類を聽くの意。
【八】金銀をいふ。
【九】沙彌比丘の別なし出家は正午以後八種の漿水外の堅き食物を攝ることを禁ぜらる、これを過中不食といふ。

悲心有りて、一切乃至蜫蟲を饒益し、彼殺生に於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師不與取を離れ不與取を斷じ、之を取[るべくば]乃ち取り與取を樂しみ、常に布施を好み歡喜して悋む無くその報を望まず。彼不與取に於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師非梵行を離れ非梵行を斷じて、梵行を勤修し妙行に精勤し清淨無穢にして欲を離れ婬を斷じ、彼非梵行に於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師妄言を離れ妄言を斷じて、眞諦を言ひ眞諦を樂しみ眞諦に住して移動せず、一切信ずべく世間を欺かず、彼妄言に於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師兩舌を離れ兩舌を斷じて、不兩舌を行じ他を破壞せず、これに聞きて彼に語り、これを破壞せんと欲せず、彼に聞きてこれに語り、彼を破壞せんと欲せず、離るれば合はんと欲し、合へば歡喜し群黨を作さず群黨を樂しまず群黨を稱せず、彼兩舌に於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師麁言を離れ麁言を斷じ、若し所言有れば辭氣麁獷惡聲にして耳に逆らひ、衆の喜ばざる所、衆の愛せざる所にして他をして苦惱せしめ定を得ざらしむ。是の如き言を斷じ、若し所說有れば、清和柔潤にして耳に順ひ、心に入り喜ぶべく愛すべく、他をして安樂ならしめ言聲具了して人をして畏れしめず、他をして定を得しむ。是の如き言を說き、彼麁言に於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師綺語を離れ綺語を斷じ、時說・眞說・法說・義說・止息說・樂止息說し、事時に順ひて宜しきを得、善く敎へ善く訶し彼綺語に於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師治生を離れ治生を斷じ、稱量及び斗斛を棄捨し、貨を受くるを棄捨し人を縛束せず、斗量を折るを望まず、小利を以て人を侵欺せず、彼治生に於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師寡婦童女を受くるを離れ寡婦童女を受くるを斷じ、彼寡婦童女を受くるに於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師奴婢を受くるを離れ奴婢を受くるを斷じ、彼奴婢を受くるに於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師象馬牛羊を受くるを離れ、象馬牛羊を受くるを斷じ、彼象馬牛羊を受くるに於てその心を淨除しぬ。阿難、難提波羅陶師

はせる通り吠陀はリグ、サーマ、ヤジュル〻三のみを取りてアタルヴァの一を除くを常とす。「中阿含經」中所所に「四典經」と言へるが如く四部を並べ擧ぐるは類少きことなり。

【五】 Nandipāla なるべし、しかし巴利文には Ghaṭīkāra Kumbhakāra となれり。

【六】 D. i. 4-5; 63-64 etc.; M. i. 179-180; 267-2?8

巻の第十二

六十三、[一]鞞婆陵耆[二]經第六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛拘薩羅國に遊びたまひぬ。その時世尊大比丘衆と倶に道を行き、中路に欣然として笑ひたまひぬ。尊者阿難世尊の笑ひたまへるを見、叉手を佛に向け白して曰く『世尊、何の因緣もて笑ひたまへるや。諸佛・如來・無所著・等正覺は若し因緣無くしては終に妄りに笑ひたまはず。願はくはその意を聞かん』。彼の時世尊告げて曰はく『阿難、此の處所中、迦葉如來・無所著・等正覺此の處に在りて坐し、弟子の爲に法を說きたまひぬ』。こゝに於て尊者阿難卽ち彼の處に在りて速疾かに座を敷き、叉手を佛に向け白して曰く『世尊、唯願はくは世尊亦この處に坐し、弟子の爲に法を說きたまへ。是の如くなればこの處二如來・無所著・等正覺の所行と爲らん』。その時世尊すなはち彼の處に於て尊者阿難の敷きし所の座に坐し、坐し已りて告げて曰はく『阿難、この處所中、迦葉如來・無所著・等正覺に講堂有りき。迦葉如來・無所著・等正覺中に於て坐し已りて弟子の爲に法を說きたまひぬ。阿難、この處所中、昔村邑有り、鞞婆陵耆と名づけ極大豐樂にして多く人民を有しぬ。阿難、鞞婆陵耆村邑の中に梵志大長者有りて名づけて無恚と曰ひ極大富樂にして資財無量、畜牧產業稱計すべからず。封戶食邑種々具足しぬ。阿難、梵志大長者無恚に子有りて[三]優多羅摩納と名づけ、父母の擧ぐる所と爲り受生淸淨乃至七世の父母種族を絕たず、生々惡無く、博聞總持にして[四]四典經を誦過し深く因緣・正文・戲・五句說に達しぬ。阿難、優多羅童子善朋友有りて[五]難提波羅陶師と名づけ、常に優多羅童子の愛念する所と爲り喜び見て厭ふこと無かりき。阿難、難提波羅陶師佛に歸し法に歸し比丘衆に歸して、三尊を疑はず苦習滅道を惑はず、信を得、戒を持し博聞惠施、智慧を成就し、[六]殺と離れ殺を斷じ刀杖を棄捨し、慚有り愧有り慈

【一】M. 81. Ghaṭīkāra-sutta

【二】鞞婆陵耆(Vebhaliṅga)

【三】Uttara なるべし、但巴利文にては Gotipāla māṇava なり。

【四】婆羅門の五典なり。
(一)四典經 Vedas (吠陀)
(二)因緣 Nighaṇḍu(語彙)。
(三)正文 Keṭubha(儀軌)。
(四)戲 Akkhara-Pabheda(字源)。
(五)五句說 Itihāsa(物語)。
この按配は必ずしもあたれりとは思はず。唯順序によりてあてたり。「長阿含」一三卷に「三部舊典」の語を以て言ひ表

法を見、法を得、白淨法を覺り、疑を斷じ、惑を度し、更に餘尊無く、また他に從はず、猶豫有ること無く、已に果證に住し、世尊の法に於て無所畏を得て、卽ち坐より起ち佛足に稽首し白して曰く『世尊、我今自ら佛・法・及び比丘衆に歸せん。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』佛說是の如し。摩竭陀王洗尼頻鞞娑邏及び八萬の天・摩竭陀人萬二千及び千の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第十一

謂く彼々の處に善惡業の報を受く。中に於て或はこの念を作す有り。こは相應せずこは住するを得ず。その行法の如く、これに因りて彼を生じ若しこの因無ければ、すなはち彼を生ぜず、これに因りて彼有り、若しこれ滅すれば彼すなはち滅す。所謂無明に緣りて行有り、乃至生に緣りて老死有り、若し無明滅すれば則ち行すなはち滅し、乃至生滅すれば則ち老死滅す。大王、意に於て云何。色有常と爲すや無常と爲すや』。答へて曰く『無常なり世尊』。また問ひて曰はく『若し無常ならばこれ苦なりや苦に非ざるや』。答へて曰く『苦變易なり、世尊』。また問ひて曰はく『若し無常苦變易の法ならばこれ多聞の聖弟子頗しこれ我なり、これ我所なり、我これ彼所なりと受くるや』。答へて曰く『不なり世尊』。『大王、意に於て云何。覺・想・行・識有常と爲すや無常と爲すや』。答へて曰く『無常なり世尊』。また問ひて曰はく『若し無常ならばこれ苦なりや苦に非ざるや』。答へて曰く『苦變易なり世尊』また問ひて曰はく『若し無常苦變易の法ならば、これ多聞の聖弟子頗しこれ我なりこれ我所なり我これ彼所なりと受くるや』。答へて曰く『不なり世尊』『大王、この故に汝當に是の如く學すべし、若し色有り或は過去に、或は未來に、或は現在に、或は內或は外、或は麁或は細、或は好或は惡、或は近或は遠、彼の一切我に非ず我所に非ず我彼所に非ずと。當に慧觀を以て如眞を知るべし。大王、若し覺・想・行・識有り或は過去に、或は未來に、或は現在に、或は內或は外、或は麁或は細、或は好或は惡、或は近或は遠、彼の一切我に非ず我所に非ず我彼所に非ずと、當に慧觀を以て如眞を知るべし。大王、若し多聞の聖弟子是の如く觀ずれば、彼すなはち色を厭ひ、覺・想・行・識を厭ひ、厭ひ已りてすなはち欲無く、欲を無くし已りてすはなち解脫するを得、解脫し已りてすなはち解脫を知り生已に盡き梵行已に立ち、所作已に辦じ、更に有を受けずと、如眞を知る。』佛この法を說きたまひし時摩竭陀王洗尼頻鞞娑邏塵を遠ざけ垢を離れ、諸法の法眼生じ、及び八萬の天・摩竭陀の諸人萬二千塵を遠ざけ垢を離れ、諸法の法眼生じぬ。こゝに於て摩竭陀王洗尼頻鞞娑邏

大王、若し族姓子色生滅するを知れば、すなはちまた當來の色を生ぜざるを知る。大王、若し族姓子覺・想・行・識生滅するを知れば、すなはちまた當來の識を生ぜざるを知る。大王、若し族姓子色如眞を知れば、すなはち色に著せず色を計せず色に染まず色に住せず、色これ我なりと樂しまず。大王、若し族姓子覺・想・行・識如眞を知れば、すなはち識に著せず識を計せず識に染まず、識に住せず、識これ我なりと樂しまず。大王、若し族姓子色に著せず色を計せず、色に染まず色に住せず、色これ我なりと樂しまざればすなはちまた更に當來の色を受けず。大王、若し族姓子覺・想・行・識に著せず識を計せず識に染まず、識に住せず、識これ我なりと樂しまざれば、すなはちまた更に當來の識を受けず。大王、この族姓子無量、不可計、無限に息寂を得、若しこの五陰を捨て已れば則ち更に陰を受けず』。こゝに於て諸の摩竭陀人而もこの念を作しぬ、若し色無常、覺・想・行・識無常たらしめば、誰か活き誰か苦樂を受けんと。世尊卽ち摩竭陀人の心の所念を知りてすなはち比丘に告げたまはく『愚癡の凡夫所聞有らず、我これ我なりと見て而も我に著す。但我無く我所無く我を空じ我所を空ず。法生ずれば則ち生じ法滅すれば則ち滅し、皆因緣に由りて合會して苦を生じ、若し因緣無ければ諸の苦すなはち滅す。衆生因緣會して相連續すれば則ち諸法を生ず。如來衆生相連續して生ずるを見已りて、すなはちこの說を作す、生有り死有りと。我淸淨なる天眼の人「眼」を出過せるを以て、この衆生の死時、生時好色惡色、或は妙不妙、善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見る。若しこの衆生身の惡行、口意の惡行を成就し聖人を誹謗し邪見にして邪見業を成就すれば、彼の因緣もてこの身壞れ命終りて、必ず惡處に至り地獄の中に生ぜん。若しこの衆生身の善行、口意の善行を成就し、聖人を誹謗せず正見にして正見業を成就すれば、彼の因緣もてこの身壞れ命終りて必ず善處に昇り、乃ち天上に至らんと、我彼の是の如きを知りて然も彼に語げず。こはこれ[七]我能く覺り、能く語り作し作起せしめ起さしむるが爲にして

【七】 二卷「漏盡經」註を見よ。

南・西・北方より虚空に飛騰し四種の威儀を現じぬ。一に行二に住三に坐四に臥なり。また次に火定に入りぬ。尊者鬱毘邏迦葉火定に入り已りて、身中にすなはち種々の火焔を出し、青黄赤白中に水精色あり、下身は火を出し上身は水を出し上身は火を出し下身は水を出しぬ。こゝに於て尊者鬱毘邏迦葉如意足を止め已りて佛の爲に禮を作し、白して曰く『世尊、佛はこれ我が師なり、我はこれ佛の弟子なり。佛に一切智あり我に一切智無し』。世尊告げて曰はく『是の如し迦葉、是の如し迦葉、我に一切智有り汝に一切智無し』。その時鬱毘邏迦葉自己に因るが故に頌を說きて曰く、

『昔所知無かりし時、解脫の爲に火に事へぬ、老ゆと雖も猶ほ生盲のごとく、邪にして眞際を見ず。我今上跡を見るに、無上ノ龍の所說 無爲にして 盡く苦を脫る。見已りて生死盡く』。

諸の摩竭陀人かくの如きを見已りて、すなはちこの念を作しぬ、沙門瞿曇・鬱毘邏迦葉に從ひて梵行を學せず。鬱毘邏迦葉沙門瞿曇に從ひて梵行を學するなりと。世尊諸の摩竭陀人の心の所念を知りたまひ、すなはち摩竭陀王洗尼頻鞞娑邏の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法ば說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、諸佛の法の如く先づ端正の法を說きたまひ、聞者歡悅しぬ。謂く施を說き戒を說き生天の法を說き、欲を毀呰して災患と爲し、生死を穢と爲し無欲を稱歎して妙道品 白淨と爲したまひぬ。世尊彼の大王の爲に之を說きたまひぬ。佛已に彼歡喜心・具足心・柔軟心・堪耐心・昇上心・一向心・無疑心・無蓋心有り、能有り力有りて正法を受くるに堪ふるを知りたまひ、謂く諸佛所說の正要の如く、世尊即ち彼の爲に苦習滅道を說きたまひぬ。『大王、色生滅す。汝當に色生滅すと知るべし。大王、覺・想・行・識生滅す。汝當に識生滅すと知るべし。大王、猶ほ大雨の時水上の泡或は生じ或は滅するが如し。大王、色生滅するも亦是の如し。汝當に色生滅すと知るべし。大王、覺・想・行・識生滅す。汝當に識生滅すと知るべし。

みて佛に詣り、到り已りて禮を作し、三たび自ら名姓を稱しぬ、世尊、我はこれ摩竭陀王、洗尼頻[四]婢裟邏なりと、是の如くすること三たびに至りぬ。こゝに於て世尊告げて曰はく『大王、是の如し是の如し。汝これ摩竭陀王、洗尼頻婢裟邏なり』。こゝに於て摩竭陀王洗尼頻婢裟邏再び三たび自ら名姓を稱し已りて佛の爲に禮を作し、却きて一面に坐しぬ。諸の摩竭陀人或は佛足を禮し却きて一面に坐し、或は佛に問訊し却きて一面に坐し、或は叉手を佛に向けて却きて一面に坐し、或は遙かに佛を見已りて默然として坐しぬ。その時[五]尊者欝毘邏迦葉亦衆に在りて坐しぬ。尊者欝毘邏迦葉はこれ摩竭陀人の意の係る所、謂く大尊師にしてこれ無著の眞人なりき。こゝに於て摩竭陀人悉くこの念を作しき『沙門瞿曇、欝毘邏迦葉に從ひて梵行を學するや、欝毘邏迦葉沙門瞿曇に從ひて梵行を學すと爲すや』と。その時世尊卽ち摩竭陀人の心の所念を知りたまひてすなはち尊者欝毘邏迦葉に向ひて頌を說きて曰はく、

『欝毘何等を見、　火を斷ち來りて此に就ける。　迦葉我が爲に火に事へざる所由を說け』。
『飲食種々の味、　欲の爲の故に火に事ふ。　[六]生中此の如きを見る、　この故に事[火]を樂まず』。『迦葉意に飲食種々の味を樂しまず、何ぞ天人を樂しまざる。　迦葉我が爲に說け』。
『寂靜滅盡を見、　無爲にして欲有にあらず、　更に尊天有る無し、　この故に火に事へず。
世尊を最勝と爲す、　世尊邪思せず、　了解して諸法を覺る、　我最勝の法を受けぬ』。

こゝに於て世尊告げて曰はく『迦葉、汝今當に爲に如意足を現じ、この衆會をして咸く信樂するを得しむべし』。こゝに於て尊者欝毘邏迦葉卽ち如其像もて如意足を作し、すなはち坐に在り、沒して東方より出で、虛空に飛騰し四種の威儀を現じぬ、一に行二に住三に坐、四に臥なり。また次に火定に入りぬ。尊者欝毘邏迦葉火定に入り已りて、身中にすなはち種々の火焰を出し、青黃赤白中に水精色あり、下身は火を出し上身は水を出し、上身は火を出し下身は水を出しぬ。是の如く

【四】洗尼頻鞞婆邏 (Seniya Bimbisāra)。
【五】欝毘邏迦葉 (Uruvela-Kassapa)。
【六】巴利文「有質にこの垢穢あることを悟り、由りて供犧と祭祀〻に染著せざりき」。

る』。こゝに於て彼の比丘佛の所說を聞き、善く受け善く持して卽ち坐より起ち佛足に稽首し、繞三匝して去りぬ。彼の比丘佛化を受け已りて、獨り遠離に住し、心放逸無く修行精勤しぬ。彼獨り遠離に住し、心放逸無く修行精勤し已りて族姓子の所爲たる、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すれば、唯無上の梵行訖り現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、更に有を受けずと如眞を知る、是の如く彼の比丘法を知り已りて乃至阿羅訶を得ぬ。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

六十二、[一] 頻鞞娑邏王迎佛經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛摩竭陀國に遊び大比丘衆と俱なりき。比丘一千悉く無著・至眞にして本[二]皆編髮せしと、王舍城[外]摩竭陀邑に往詣したまひぬ。こゝに於て摩竭陀王頻鞞娑邏世尊摩竭陀國に遊び大比丘衆と俱に、比丘一千悉く無著至眞にして本皆編髮せしと、この王舍城[外]摩竭陀邑に來りたまへるを聞きぬ。摩竭陀王頻鞞娑邏聞き已りて卽ち四種の軍、象軍・馬軍・車軍・步軍を集め、四種の軍を集め已りて無數の衆と俱に、長さ一由延となりて佛所に往詣しぬ。こゝに於て世尊遙かに摩竭陀王頻鞞娑邏の來れるを見て、卽便ち道を避けて善住尼拘類樹王の下に往至し尼師檀を敷きて結跏趺坐したまひぬ。及び比丘衆[亦然り]。摩竭陀王頻鞞娑邏遙かに世尊林樹の間に在し端正姝好にして猶ほ星中の月のごとく光耀煒曄として晃金山の若く相好具足し威神巍巍、諸根寂定して蔽礙有ること無く、調御を成就し息心靜默なるを見、見已りて車を下りぬ。若し諸王刹利水を以て頂に灑ぎ、人主と爲るを得て、大地を整御するに[三]五儀式有り、一には劍二には蓋三には天冠四には珠柄拂五には嚴飾屣なるを、一切除却し、及び四種の軍[をも除却し]、步み進

【一】 Vin. i. 35「佛說「頻毘沙羅王經」。

【二】 もと編髮の徒(Purāṇa-jaṭila)。

【三】 「增一阿含」三品の一には王の五飾と呼び、雜阿含四〇卷の一二經には五種の容飾と呼ぶ。

なり。比丘、彼の八萬四千の大象中而も一象有り擧體極めて白く七支盡く正しく于娑賀象王と名け、これ我が常に乘り至りて園觀を觀望せし所なり。比丘、我この念を作しぬ、これ何業の果にして何業の報と爲すや。我をして今日大如意足有り大威德有り、大福祐有り大威神有らしむと。比丘、我またこの念を作しぬ、これ三業の果にして三業の報爲り、我をして今日大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有らしむ。［三業とは］一には布施二には調御三には守護なりと。比丘、汝彼の一切の所有盡く滅し如意足亦失へるを觀る。比丘、意に於て云何。色有常と爲すや無常と爲すや』。答へて曰く『無常なり世尊』。また問ひて曰はく『若し無常ならばこれ苦なりや苦に非るや』。答へて曰く『苦變易なり世尊』。また問ひて曰はく『若し無常苦變易の法ならば、この多聞の聖弟子頗しこれ我なりこれ我所なり我これ彼所なりと受くるや』。答へて曰く『不なり世尊』。また問ひて曰はく『比丘、意に於て云何。覺・想・行・識有常と爲すや無常と爲すや』。答へて曰く『無常なり世尊』。また問ひて曰はく『若し無常ならばこれ苦なりや苦に非るや』。答へて曰く『苦變易なり世尊』。また問ひて曰はく『若し無常苦變易の法ならばこの多聞の聖弟子頗しこれ我なりこれ我所なり、我これ彼所なりと受くるや』。答へて曰く『不なり世尊』、『この故に比丘、汝應に是の如く學すべし。若し色有り或は過去に、或は未來に、或は現在に［有り］、或は內、或は外、或は麁、或は細、或は好、或は惡、或は近、或は遠、彼の一切我に非ず、我所に非ず、我は彼所に非ずと。當に慧觀を以て如眞を知るべし。若し覺・想・行・識有り或は過去に、或は未來に、或は現在に［有り］、或は內、或は外、或は麁、或は細、或は好、或は惡、或は近、或は遠、彼の一切我に非ず我所に非ず、我は彼所に非ずと、當に慧觀を以て如眞を知るべし。比丘、若し多聞の聖弟子是の如く觀れば、彼すなはち色を厭ひ覺・想・行・識を厭ひ、厭ひ已りてすなはち欲無く、欲無くし已りてすなはち解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き、梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けず』と如眞を知

[五]拘舍惒提王城を首と爲しぬ。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の樓有りて四種の寶樓・金・銀・琉璃及び水精にして[六]正法殿を首と爲しぬ。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の御座有りて四種の寶座、金・銀・琉璃及び水精にして、敷くに氍氀毾㲪を以てし、覆ふに錦綺羅縠を以てし、襯體被・兩頭安枕・[七]加陵伽波惒邏・波遮悉多羅那なりぬ。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の雙衣・[八]初摩衣・錦衣・繒衣・[九]劫貝衣・[一〇]加陵伽波惒邏衣有りぬ。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の女有りて身體光澤あり、皎潔明淨美色人に過ぎ、小しく天に及ばず、姿容端正にして覩る者歡悅し、衆寶瓔珞嚴飾具足し盡くし、刹利種の女餘族無量なりき。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千種の食有りて[一一]晝夜に常に供へ、我が爲の故に設け、我をして食せしめんと欲しぬ。比丘、彼の八萬四千種の食中一種の食有りて極美淨潔にして無量種の味あり、これ我が常に食する所なり。比丘、彼の八萬四千の女中、一刹利女有り最も端正姝好にして常に我に奉侍しぬ。比丘、彼の八萬四千の雙衣中、一雙衣有り或は初摩衣、或は錦衣、或は繒衣、或は劫貝衣、或は加陵伽波惒邏衣にして、これ我が常に著けし所なり。比丘、彼の八萬四千の御座中、一御座有り或は金、或は銀或は琉璃、或は水精にして敷くに氍氀毾㲪を以てし、覆ふに錦綺羅縠を以てし、襯體被・兩頭安枕有り、加陵伽波惒邏波遮悉多羅那にしてこれ我が常に臥せし所なり。比丘、彼の八萬四千の樓觀中一樓觀有り、或は金或は銀或は琉璃或は水精にして、正法殿と名づけこれ我が常に住せし所なり。比丘、彼の八萬四千の大城中而も一城有り極大富樂にして、多く人民を有し拘舍惒提と名づけ、これ我が常に居りし所なり。比丘、彼の八萬四千の車中、而も一車有り莊るに衆の好き師子、虎豹斑文の皮を以て織成し、雜色にして種々に莊飾し、極めて利疾にして樂聲車と名づけ、これ我が常に載り至りて園觀を觀望せし所なり。比丘、彼の八萬四千の馬中而も一馬有り體紺青色「にして」頭像烏の如くにして駋馬王と名づけ、これ我が常に騎り至りて園觀を觀望せし所

【五】拘舍惒提(Kusāvati)。
【六】正法殿 (Dhammapāsāda)。
【七】加陵伽波惒邏遮悉多羅那 (Kadalimigapavara-paccatthara a)カダリ鹿の皮にて作りたり優等の敷物。
【八】初摩衣(Khoma)。麻衣のこと。
【九】劫貝衣(Kappāsika)綿衣のこと。
【一〇】加陵伽波惒邏衣(Kadalimigappavara)。カダリ鹿の優等の皮にて作りたる衣。
【一一】「晝」字、大正藏本誤りて「盡」に作る。

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時一比丘有り、安靜處に在りて燕坐し思惟してこの念を作しぬ、頗しまた色の常住不變、而も一向樂にして恒久に存する有りや。頗し覺・想・行・識の常住不變、而も一向樂にして恒久に存する有りやと。彼の一比丘則ち晡時に於て燕坐より起ち、佛所に往詣し稽首して禮を作し、却きて一面に坐し白して曰く『世尊、我今安靜處に在りて燕坐し思惟してこの念を作しぬ、頗しまた色の常住不變、而も一向樂にして恒久に存する有りや。頗し覺・想・行・識の常住不變、而も一向樂にして恒久に存する有りやと』。佛比丘に告げたまはく『一色の常住不變、而も一向樂にして恒久に存する者有ること無く、覺・想・行・識の常住不變、而も一向樂にして恒久に存する者有る無し』。こゝに於て世尊手の指爪を以て少しの牛糞を抄り告げて曰はく『比丘、汝今我手の指爪を以て少しの牛糞を抄るを見るや』。比丘白して曰く『見るなり世尊』。佛また告げて曰はく『比丘、是の如く少しの色の常住不變、而も一向樂にして恒久に存する有る無し。是の如く少しの覺・想・行・識の常住不變、而も一向樂にして恒久に存する有る無し。所以者何。比丘、我昔時を憶ふに、長夜に福を作し長く福を作し已りて長く樂報を受く。比丘、我昔時に在りて七年慈を行じ七反成敗するもこの世に來らず、世敗壞する時、晃昱天に生じ世成立する時來り下りて空梵宮殿中に生じ、彼の梵中に於て大梵天と作り、餘處に千反自在天王と作り三十六反天帝釋と作り、また無量反刹利頂生王と作る。比丘、我刹利頂生王と作る時、八萬四千の大象有りて好乘具[を被り]衆寶校飾、白珠珞覆を被り[二]于娑賀象王を首と爲しぬ。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の馬有りて妙乘具、衆寶莊飾、金銀瑛珞を被り[三]髦馬王を首と爲しぬ。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の車有りて四種校飾し莊るに衆の好き師子・虎豹斑文の皮を以て織成し雜色にして種々に莊飾し、極めて到疾にして[四]樂聲車と名づくるを首と爲しぬ。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の大城有りて極大富樂にして多く人民を有し

【二】于娑賀象王(Uposatha)

【三】髦馬王(Valahaka,)。

【四】樂聲車(Vejayanta)。

命終り、頂生王欝單曰洲を得しも意滿足せずして命終り、頂生王諸天の集會を見しも意滿足せずして命終り、頂生王五欲の功德色聲香味觸を具足せしも意滿足せずして命終りぬと。若し梵志・居士及び臣人民來りて卿等に頂生王命終る時に臨みて、何等の事を說きぬと問はゞ卿等應當に是の如く之に答ふべしと』。こゝに於て世尊而も頌を說きて曰はく、

天の妙珍寶を雨らすも欲者厭足無し。　欲は苦にして樂有ること無し。　慧者應當に知るべし。　若し金積を得る有り、　猶ほ大雪山の如きも　一々足る有ること無し。　慧者この念を作せ。　天の妙なる五欲を得、　この五樂を以てせず、　愛を斷じ欲に著せざるは、　等正覺の弟子なり。

こゝに於て世尊告げて曰はく『阿難、昔の頂生王汝異人と謂ふや。この念を作すこと莫れ。當に知るべし、卽ちこれ我なり。阿難、我その時に於て自ら饒益を爲し亦他を饒益し多人を饒益し世間を愍傷し天の爲、人の爲に義及び饒益を求め安隱快樂を求めぬ。その時法を說きて究竟に至らず白淨を究竟せず、梵行を究竟せず梵行を究竟せずして訖りぬ。その時生老病死・啼哭憂慼を離れず、亦未だ一切の苦を脫するを得る能はざりぬ。阿難、我今出世し如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・號佛・衆祐なり。我今自ら饒益し亦他を饒益し、多人を饒益し世間を愍傷し、天の爲、人の爲に義及び饒益を求め、安隱快樂を求む。我今法を說きて究竟に至るを得、白淨を究竟し、梵行を究竟し、梵行を究竟し訖りぬ。我今生老病死・啼哭憂慼を離るゝを得、我今已に一切の苦を脫するを得ぬ』。佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

六十一、[1]牛糞喩經第四

【一】 S. iii. 143「雜阿含」一六四經。

見るやと。諸臣對へて曰く、見るなり天王と。王また告げて曰く、卿等知るや不や。これ三十三天の正法の堂なり。三十三天「の衆」この堂中に於て八日・十四日・十五日に天の爲人の爲法を思ひ義を思ふと。阿難、彼の頂生王卽ち三十三天に到る。彼の頂生王三十三天に到り已りて卽ち法堂に入る。こゝに於て天帝釋すなはち頂生王に半座を與へて坐せしめ、彼の頂生王卽ち天帝釋の半座に坐す。こゝに於て頂生王と天帝釋都て差別無く、光と光異る無く、色と色異る無く、形と形異る無く、威儀禮節及びその衣服亦異有ること無く　[九]唯眼眴のみ異れり。阿難、彼の頂生王後時に於て極大久遠にまたこの念を作す、我閻浮洲を有し極大富樂にして多く人民を有す。我七寶有り千子具足し及び宮中に於て寶を雨らすこと七日、積りて膝に至らしめ、我亦復瞿陀尼洲を有し、亦弗婆鞞陀提洲を有し、亦欝單曰洲を有す。我又已に三十三天の雲集大會を見、我已に諸天の法堂に入るを得、又天帝釋我に半座を與へ、我已に帝釋の半座に坐するを得。我帝釋と都て差別無く、光と光異る無く、色と色異る無く、形と形異る無く、威儀禮節及びその衣服亦異り有る無く、唯眼眴のみ異れり。我今寧ろ帝釋を驅りて去らしめ半座を奪取して天人の王と作り、己に由りて自在なるべしと。阿難、彼の頂生王適まこの念を發し覺えずして已に下りて、閻浮洲に在り、すなはち如意足を失ひ極重病を生じ命將に終らんとする時、諸臣頂生王の所に往詣し白して曰く、天王、若し梵志・居士及び臣人民有りて來りて我等に、頂生王命終る時に臨みて何等の事を說きぬと問はゞ天王、我等當に云何が梵志・居士及び臣人民に答ふべきやと。時に頂生王諸臣に告げて曰く、若し梵志・居士及び臣人民來りて、卿等に頂生王命終る時に臨みて何等の事を說きぬと問はゞ卿等應當に是の如く之に答ふべし、頂生王閻浮洲を得しも意滿足せずして命終り、頂生王七寶を得しも意滿足せずして命終り、千子具足せしも意滿足せずして命終り、頂生王七日寶を雨らせしも意滿足せずして命終り、頂生王瞿陀尼洲を得しも意滿足せずして命終り、頂生王弗婆鞞陀提洲を得しも意滿足せずして

【九】眼の動きかた。

り大威神有り、適ま心を發し已りて卽ち如意足を以て虚に乘じて去る。及び四種の軍「亦虚に乘じて去る」。阿難、彼の頂生王遙かに平地の白きを見て諸臣に告げて曰く、卿等、鬱單曰の平地白きを見るやと。諸臣對へて曰く、見るなり天王と。王また告げて曰く、卿等知るや不や。彼はこれ鬱單曰人の自然の粳米にして鬱單曰人の常に食する所の者、卿等亦應に共にこの食を食すべしと。阿難、彼の頂生王また遙かに鬱單曰洲中に若干種の樹の淨妙嚴飾にして種々の綵色、欄楯の裏に在るを見て、諸臣に告げて曰く、卿等、鬱單曰洲中に若干種の樹の淨妙嚴飾にして種々の綵色、欄楯の裏に在るを見るやと。諸臣對へて曰く、見るなり天王と。王また告げて曰く、卿等知るや不や。これ鬱單曰人の[七]衣樹にして鬱單曰人はこの衣を取りて著く。卿等亦應にこの衣を取りて著くべしと。阿難、彼の頂生王卽時に往きて鬱單曰洲に到り住す。阿難、彼の頂生王住し已りて鬱單曰洲を整御すること乃至無量百千萬歲、及び諸の眷屬を「整御す」。阿難、彼の頂生王後時に於て極大久遠にまたこの念を作す、我閻浮洲を有し、極大富樂にして多く人民を有す。我七寶有り千子具足し及び宮中に於て寶を雨ふらすこと七日、積りて膝に至らしめ、我亦復瞿陀尼洲を有し亦弗婆鞞陀提洲を有し亦鬱單曰洲を有す。我また曾て古人に從ひて之を聞く、天有り名づけて三十三天と曰ふと。我今往きて三十三天を見んと欲すと。阿難、彼の頂生王大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り、適ま心を發し已りて卽ち如意足を以て虚に乘じて往き及び四種の軍「亦往き」、日光に向ひて去る。阿難、彼の頂生王遙かに三十三天中須彌山王上猶ほ大雲の如きを見て諸臣に告げて曰く、卿等三十三天中須彌山王上猶ほ大雲の如きを見るやと。諸臣對へて曰く、見るなり天王と。王また告げて曰く、卿等知るや不や。これ三十三天の[八]晝度樹なり。三十三天「の衆」この樹下に在りて夏四月に於て五欲を具足して自ら娛樂すと。阿難、彼の頂生王また遙かに三十三天中須彌山王上南邊に近く猶ほ大雲の如きを見て諸臣に告げて曰く、卿等、三十三天中須彌山王上南邊に近く猶ほ大雲の如きを

【七】「增一阿含經」にては「劫波育樹衣」に作る。(Kappāsika)綿樹なり。

【八】一本「晝度樹經」本文及び註を見よ。

意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り、適ま心を發し已りて卽ち宮中に於て寶を雨らすこと七日、積りて膝に至らしむ。阿難、彼の頂生王後時に於て極大久遠にまたこの念を作す、我閻浮洲を有し極大富樂にして多く人民を有す。我七寶有り千子具足し及び宮中に於て寶を雨ふらすこと七日、積りて膝に至らしむ。我憶ふに曾て古人に從ひて之を聞く、西方に洲有り〔四〕瞿陀尼を名づけ極大富樂にして多く人民を有すと。我今往きて瞿陀尼洲を見、到り已りて整御せんと欲すと。阿難、彼の頂生王大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り、適ま心を發し已りて卽ち如意足を以て虛に乘じて去る。及び四種の軍「亦虛に乘じて去る」。阿難、彼の頂生王卽時に往きて瞿陀尼洲に到り住す。阿難、彼の頂生王住し已りて瞿陀尼洲を整御すること乃至無量百千萬歲なり。阿難、彼の頂生王後時に於て極大久遠にまたこの念を作す、我閻浮洲を有し極大富樂にして多く人民を有す、我七寶有り千子具足し及び宮中に於て寶を雨らすこと七日、積りて膝に至らしめ、我亦復瞿陀尼洲を有す。我また曾て古人に從ひて之を聞く、東方に洲有り〔五〕弗婆鞞陀提と名づけ極大富樂にして多く人民を有すと。我今往きて弗婆鞞陀提洲を見、到り已りて整御せんと欲すと。阿難、彼の頂生王大如意足有り大威德有り、大福祐有り、大威神有り、適ま心を發し已りて卽ち如意足を以て虛に乘じて去る。及び四種の軍「亦虛に乘じて去る」。阿難、彼の頂生王卽時に往きて弗婆鞞陀提洲に到り住す。阿難、彼の頂生王住し已りて、弗婆鞞陀提洲を整御すること乃至無量百千萬歲なり。阿難、彼の頂生王後時に於て極大久遠にまたこの念を作す、我閻浮洲を有し極大富樂にして多く人民を有す。我七寶有り千子具足し及び宮中に於て寶を雨らすこと七日、積りて膝に至らしめ、我亦復瞿陀尼洲を有し亦弗婆鞞陀提洲を有す。我また曾て古人に從ひて之を聞く、北方に洲有り〔六〕欝單曰と名づけ極大富樂にして多く人民を有すと。彼我想無く亦所受無しと雖も我今往きて欝單曰洲を見、到り已りて「整御し」及び諸の眷屬を整御せんと欲すと。阿難、彼の頂生王大如意足有り大威德有り大福祐有

【四】瞿陀尼(Apara-goyāni)

【五】弗婆鞞陀提 (Pubba-videha)。

【六】欝單曰(Uttara-kuru)。

流布して十方に周聞す』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

六十、四洲經第三[1]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時尊者阿難安靜處に在りて燕坐し思惟してこの念を作しぬ『世人甚だ少し。能く欲に於て滿足の意有るは少く、欲を厭患して命終る者有るは少し。世人欲に於て滿足の意有り、欲を厭患して命終る者甚だ得難しと爲す』尊者阿難則ち晡時に於て燕坐より起ち、佛所に往詣し、到り已りて禮を作し、却きて一面に住し白して曰く『世尊、我今安靜處に在りて燕坐し思惟してこの念を作しぬ。世人甚だ少し。能く欲に於て滿足の意有るは少く、欲を厭患して命終る者有るは少し。世人欲に於て滿足の意有り、欲を厭患して命終る者甚だ得難しと爲すと』佛阿難に告げたまはく『是の如し是の如し。世人甚だ少し。能く欲に於て滿足の意有るは少く、欲を厭患して命終る者有るは少し。阿難、世人欲に於て滿足の意有り欲を厭患して命終る者甚だ得難しと爲す。阿難、世人極めて甚だ得難し、極めて甚だ欲に於て滿足の意有り、欲を厭患して命終る者を得難し。阿難、但世間の人甚だ多く甚だ多く、欲に於て滿足の意無く、欲を厭患せずして命終るなり。所以者何。阿難、往昔王有り名づけて頂生[2]と曰ふ。轉輪王と作り聰明にして智慧あり四種の軍有りて天下を整御し己に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶、これを七と爲す。千子具足し顏貌端正、勇猛無畏にして能く他の衆を伏す、彼必ずこの一切の地乃至大海を統領するに、刀杖を以てせずして法を以てし敎令して安樂を得しむ。阿難、彼の頂生王後時に於て極大久遠にすなはちこの念を作す。我閻浮洲[3]を有し極大富樂にして多く人民を有す。我七寶有り千子具足す。我宮に於て寶を雨らすこと七日、積りて膝に至らしめんと欲すと。阿難、彼の頂生王大如

【一】Divyāvadāna, 210-226, Theragāthā 486-7「增一阿含」一七品の七、「佛說頂生王故事經」「佛說文陀竭王經。」

【二】頂生(Muddhāvasitta)。

【三】閻浮州(Jambu-dīpa)。

と謂ふ。(13)また次に大人陰馬の藏猶ほ良馬王のごとし。これを大人の大人相と謂ふ。(14)また次に大人身形圓好なること猶ほ尼拘類樹の如く上下圓くして相稱ふ。これを大人の大人相と謂ふ。(15)また次に大人身阿曲せず。身曲らずとは平立して手を伸べ以てその膝を摩すなり。これを大人の大人相と謂ふ。(16)また次に大人身黃金色にして紫磨金の如し。これを大人の大人相と謂ふ。(17)また次に大人身七處滿つ。七處滿つとは兩手兩足兩肩及び頸なり。これを大人の大人相と謂ふ。(18)また次に大人その上身大にして猶ほ師子の如し。これを大人の大人相と謂ふ。(19)また次に大人師子頰車なり。これを大人の大人相と謂ふ。(20)また次に大人脊背平直なり。これを大人の大人相と謂ふ。(21)また次に大人兩肩上連り通り頸平滿なり。これを大人の大人相と謂ふ。(22)また次に大人四十齒あり、(23)牙平にして、(24)齒疏ならず、(25)齒白くして齒通り、第一味を味ふ。これを大人の大人相と謂ふ。(26)また次に大人梵音愛すべく、(27)その聲猶ほ加羅毘伽の如し。これを大人の大人相と謂ふ。(28)また次に大人廣長舌なり。廣長舌とは舌口より出で、遍くその面を覆ふなり。これを大人の大人相と謂ふ。(29)また次に大人承淚處滿ちて猶ほ牛王の如し。これを大人の大人相と謂ふ。(30)また次に眼色紺青なり。これを大人の大人相と謂ふ。(31)また次に大人頂に肉髻有り團圓にして相稱ひ、髮は螺して右旋す。これを大人の大人相と謂ふ。(32)また次に大人眉間に毛を生じ潔白にして右縈す。これを大人の大人相と謂ふ。諸の比丘、大人この〔三〕三十二相を成就すれば、「行く」處必ず二有り、「こは」眞諦にして虛ならず。若し家に在らば必ず轉輪王と爲り聰明にして智慧あり四種の軍有りて天下を整御し、已に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶、これを七と爲す。千子具足し顏貌端正、勇猛無畏にして能く他の衆を伏す。彼必ずこの一切の地乃至大海を統領するに、刀杖を以てせずして法を以てし、敎令して安樂を得しむ。若し鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すれば、必ず如來・無所著・等正覺を得名稱

(13)陰馬藏 Kosohita-vattha-guyha。
(14)身形圓好 Nigrodha-parimaṇḍala。
(15)身不阿曲 Ṭhitakova pāṇihi j nukāni parimasati。
(16)身黃金色 Suvaṇṇa-vaṇṇa。
(17)身七處滿 Sattussada。
(18)身大猶如師子 Sīha-pubba-addhakāya。
(19)師子頰車 Sīha-hanu。
(20)脊背平直 Samavatta-kkhandha。
(21)兩肩上連通頸平滿 Cita-ntaraṁsa。
(22)四十齒 Cattārīsa-danta。
(23)牙平 Sama-danta。
(24)齒不疎 Avivara-danta。
(25)齒白 Susukka-d ṭha。
(26)梵音可愛 Brahmassara。
(27)聲猶如加羅毘伽 Karavīka-bhāṇī。
(28)廣長舌 Pahūta-jivha。
(29)承淚處滿 Gopamukha。
(30)眼色紺青 Abhinīlanetta。
(31)頂有肉髻
(32)眉間生毛 Uṇṇā bhamukantare jātā。
【三】 巴利文と一致せず、巴利文にては(25)の味第一味 Rasaggasaggī を別立して(31)の頂有肉髻を省く。

共に此の如き事を論ずるが故に講堂に集坐す』。こゝに於て世尊告げて曰はく『比丘、汝等如來に從ひて三十二相を聞くを得んと欲するや。謂く大人成ずる所、[行く]處必ず二有り、眞諦にして虚ならず。若し家に在れば必ず轉輪王と爲り、聰明にして智慧あり、四種の軍有りて天下を整御し、己に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶これを七と爲す。千子具足し顏貌端正、勇猛無畏にして能く他の衆を伏す。彼必ずこの一切の地乃至大海を統領するに、刀杖を以てせずして法を以てし、敎令して安樂を得しむ。若し鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すれば、必ず如來・無所著・等正覺を得、名稱流布して十方に周聞す』。時に諸の比丘聞き已りて白して曰く『世尊、今正にこの時なり。善逝、今正にこの時なり。若し世尊諸の比丘の爲に三十二相を説きたまはゞ、諸の比丘聞き已りて當に善く受持すべし』。世尊告げて曰はく『諸の比丘、諦かに聽け諦かに聽け、善くこれを思念せよ。吾當に汝の爲に廣く分別して說くべし』。時に諸の比丘敎を受けて佛の言を聽きぬ。『(1)大人足安平にして立つ。これを大人の大人相と謂ふ。(2)また次に大人足の下に輪を生じ輪に千輻有りて一切具足す。これを大人の大人相と謂ふ。(3)また次に大人足の指纖長なり。これを大人の大人相と謂ふ。(4)また次に大人足の周 正直なり。これを大人の大人相と謂ふ。(5)また次に大人足の跟 踝、後の兩邊平滿なり。これを大人の大人相と謂ふ。(6)また次に大人足の兩踝䐂し。これを大人の大人相と謂ふ。(7)また次に大人身毛上向す。これを大人の大人相と謂ふ。(8)また次に大人手足の網縵猶ほ鴈王の如し。これを大人の大人相と謂ふ。(9)また次に大人手足極妙にして柔弱軟敷なること猶ほ兜羅華のごとし。これを大人の大人相と謂ふ。(10)また次に大人肌皮軟細にして塵水著せず。これを大人の大人相と謂ふ。(11)また次に大人一々毛なり。一々毛とは身一孔に一毛生じ色紺靑の若くにして螺の如く右旋す。これを大人の大人相と謂ふ。(12)また次に大人鹿の蹲腸にして猶ほ鹿王の如し。これを大人の大人相

(1)足安平立 Suppatiṭṭhita-pāda。
(2)足下生輪 Pāda-talesu cakkāni jātāni。
(3) 足指纖長 Dīghaṅguli。
(4)足周正直 Brahm-ujju-gatta。
(5)足跟踝後兩邊平滿 Āyata-paṇhi。
(6)足兩踝䐂 Ussaṅkhapāda。
(7)身毛上向 Uddhagga-loma。
(8)手足網縵 Jālahatthapāda。
(9)手足極妙柔弱軟敷 Muduta-luna-hatthapāda。
(10)肌皮軟細 Sukhumacchavi。
(11)一孔一毛 Ekekaloma
(12)鹿蹲腸(コムラ) Eṇijaṅgha。

寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶これを七と爲す。千子具足し顏貌端正、勇猛無畏にして能く他の衆を伏す。彼必ずこの一切の地乃至大海を統領するに、刀杖を以てせずして法を以てし敎令して安樂を得しむ。若し鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すれば、必ず如來・無所著・等正覺を得、名稱流布して十方に周聞すと。その時（二）世尊燕坐に在し淨き天耳の人「耳」を出過せるを以て、諸の比丘中食後に於て講堂に集坐し、共にこの事を論ずるを聞きたまひぬ。諸賢、甚奇甚特なり。大人三十二相を成就すれば「行く」處必ず二有り、「こは」、眞諦にして虛ならず。若し家に在れば必ず轉輪王と爲り聰明にして智慧有り、四種の軍有りて天下を整御し、已に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶これを七と爲す。千子具足し顏貌端正、勇猛無畏にして能く他の衆を伏す。彼必ずこの一切の地乃至大海を統領するに、刀杖を以てせずして法を以てし敎令して安樂を得しむ。若し鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すれば、必ず如來・無所著・等正覺を得、名稱流布して十方に周聞すと。世尊聞き已りて則ち脯時に於て燕坐より起ち、講堂に往詣し比丘衆の前に座を敷きて坐し、諸の比丘に問ひたまひぬ『汝等今日共に何事を論じ講堂に集坐するや』。時に諸の比丘白して曰く『世尊、我等今日講堂に集坐し共にこの事を論じぬ。諸賢、甚奇甚特なり。大人三十二相を成就すれば、「行く」處必ず二有り、「こは」眞諦にして虛ならず。若し家に在れば必ず轉輪王と爲り聰明にして智慧あり、四種の軍有りて天下を整御し、已に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶これを七と爲す。千子具足し顏貌端正、勇猛無畏にして能く他の衆を伏す。彼必ずこの一切の地乃至大海を統領するに、刀杖を以てせずして法を以てし、敎令して安樂を得しむ。若し鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すれば、必ず如來・無所著・等正覺を得、名稱流布して十方に周聞すと。世尊、我等

【二】世尊は獨坐禪想中極めて清淨にして普通人間の耳には遙かに超え優れたる天耳を以ての意。三卷「惒波經」註を見よ。

卷の第十一

王相應品第六〔七經有り。王相應品本十四經有り。後の七經を分ちて第二誦に屬せしむ。〕

七寶・〔三十二〕相・四洲・牛糞〔喩〕・摩竭王・鞞婆〔羅〕陵耆・天使最も後に在り。

五十八、[一]七寶經第一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し轉輪王世に出づる時、當に知るべし、すなはち七寶有りて世に出づ。云何が七と爲す。輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶・これを謂ひて七と爲す。若し轉輪王世に出づる時、當に知るべし、この七寶有りて世に出づ。是の如く如來・無所著・等正覺世に出づる時、當に知るべし。亦[二]七覺支寶有りて世間に出づ。云何が七と爲す。念覺支寶・擇法覺支・精進覺支・喜覺支・息覺支・定覺支・捨覺支寶これを謂ひて七と爲す。如來・無所著・等正覺世に出づる時、當に知るべし。この七覺支寶有りて世間に出づ』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

五十九、[三]三十二相經第二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時諸の比丘中食後に於て講堂に集坐し共にこの事を論じぬ。諸賢、甚奇甚特なり。大人三十二相を成就すれば〔行く〕處必ず二有あり、〔こは〕眞諦にして虛ならず。若し家に在れば必ず轉輪王と爲り聰明にして智慧あり四種の軍有りて天下を整御し己に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪

【一】S. v. 99「佛說輪王七寶經」「雜阿含」七二一經、「增一阿含」三九品の七。

【二】二卷「漏盡經」註、八卷「阿修羅經」本文を見よ。

【三】D. iii. 142-79; cf D. ii. 17-19; Sn pp. 102-12, vs. 1000-1,003. 「長阿含」一卷初「大本經」、「大智度論」四卷、八八卷等參照。

知識と共に和合せば、當に知るべし、必ず惡露を修して欲を斷ぜしめ慈を修して恚を斷ぜしめ息出息入を修して亂念を斷ぜしめ無常想を修して我慢を斷ぜしむ。若し比丘無常想を得れば必ず無我想を得。若し比丘無我想を得ればすなはち現法に於て一切の我慢を斷じ息・滅・盡・無爲・涅槃を得』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第十

（卷十）郎爲比丘說經第十六

の習法と謂ふ。(3)また次に比丘、謂く說くべき所、聖にして義有り心を柔軟ならしめ心を無蓋ならしむ。謂く戒を說き定を說き慧を說き、解脫を說き解脫知見を說き、漸損を說き不樂聚會を說き、少欲を說き知足を說き、斷を說き無欲を說き、滅を說き燕坐を說き緣起得を說く。是の如きの比の沙門の所說の得易くして得難からざるを具す。心解脫未だ熟せず、熟せしめんと欲せばこれを第三の習法と謂ふ。(4)また次に比丘常に精進を行じ惡不善を斷じ諸の善法を修し恒に自ら意を起し專一堅固にして諸の善本の爲に方便を捨てず。心解脫未だ熟せず、熟せしめんと欲せばこれを第四の習法と謂ふ。(5)また次に比丘智慧を修行し、興衰の法を觀じ、是の如き智、聖慧明達を得、分別曉了し以て正に苦を盡くす。心解脫未だ熟せず熟せしめんと欲せばこれを第五の習法と謂ふ。彼この五習法を有し已りてまた四法を修す。云何が四と爲す。惡露を修して欲を斷ぜしめ慈を修して恚を斷ぜしめ、息出息入を修して亂念を斷ぜしめ、無常想を修して我慢を斷ぜしむ。若し比丘自ら善知識にして善知識と倶なり、善知識と共に和合せば當に知るべし、必ず禁戒を修習し、從解脫を守護し、又復善く威儀禮節を攝し、纖芥の罪を見て常に畏怖を懷き、學戒を受持す。若し比丘自ら善知識にして善知識と倶なり善知識と共に和合せば、當に知るべし、必ず說くべき所、聖にして義有り心を柔軟ならしめ心を無蓋ならしむるを得。謂く戒を說き定を說き、慧を說き解脫を說き解脫知見を說き、漸損を說き不樂聚會を說き、少欲を說き知足を說き斷を說き、無欲を說き滅を說き燕坐を說き緣起得を說く。是の如き比の沙門の所說の得易くして得難からざるを具す。若し比丘自ら善知識にして善知識と倶なり善知識と共に和合せば、當に知るべし。必ず精進を行じ惡不善を斷じ諸の善法を修し恒に自ら意を起し專一堅固にして諸の善本の爲に方便を捨てず。若し比丘自ら善知識にして善知識と倶なり、善知識と共に和合せば當に知るべし、必ず智慧を行じ興衰の法を觀じ此の如き智、聖慧明達を得、分別曉了し以て正に苦を盡くす。若し比丘自ら善知識にして善知識と倶なり、善

善く威儀禮節を攝し、纖芥の罪を見て常に畏怖を懷き、學戒を受持す。彌醯、若し比丘自ら善知識にして善知識と倶なり、善知識と共に和合せば當に知るべし、必ず說くべき所、聖にして義有り心を柔軟ならしめ心を無蓋ならしむるを得。謂く戒を說き定を說き慧を說き、解脫を說き解脫知見を說き、漸損を說き不樂聚會を說き、少欲を說き知足を說き、斷を說き無欲を說き滅を說き、燕坐を說き緣起得を說く。是の如き比の沙門の所說の得易くして得難からざるを具す。若し比丘自ら善知識にして善知識と倶なり善知識と共に和合せば、當に知るべし、精進を行じ惡不善を斷じ諸の善法を修し恒に自ら意を起し專一堅固にして諸の善本の爲に方便を捨てず。彌醯、若し比丘自ら善知識にして善知識と倶なり、善知識と共に和合せば當に知るべし、智慧を行じ興衰の法を觀じ、是の如き智、聖慧明達を得、分別曉了し以て正に苦を盡くす。彌醯、若し比丘自ら善知識にして善知識と倶なり、善知識と共に和合せば當に知るべし。必ず惡露を修して欲を斷ぜしめ、慈を修して恚を斷ぜしめ、息出息入を修して亂念を斷ぜしめ、無常想を修して我慢を斷ぜしむ。彌醯、若し比丘無常想を得れば必ず無我想を得。彌醯、若し比丘無我想を得ればすなはち現法に於て一切の我慢を斷じ息・滅・盡・無爲・涅槃を得。佛說是の如し。尊者彌醯及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

五十七、[一]卽爲比丘說經第十六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく、「心解脫未だ熟せず、熟せしめんと欲せば五習法有り。云何が五と爲す。(1)比丘自ら、善知識にして善知識と倶なり、善知識と共に和合す。心解脫未だ熟せず、熟せしめんと欲せばこれを第一の習法と謂ふ。(2)また次に比丘禁戒を修習し從解脫を守護し、又復善く威儀禮節を攝し、纖芥の罪を見て、常に畏怖を懷き學戒を受持す。心解脫未だ熟せず、熟せしめんと欲せばこれを第二

【一】 A. iv. 351. 前經參照。

【二】 習法(Upanisā bhāvanāya)。

に住してすなはち三惡不善の念を生じぬ。[謂く]欲念・恚念及び與害念なり。彼これに由るが故にすなはち世尊を念じぬ。こゝに於て彌醯則ち晡時に於て燕坐より起ち、佛所に往詣し稽首して足を禮し、却きて一面に住し白して曰く『世尊、我榛林に至り靜處に於て坐せるにすなはち三惡不善の念を生じぬ。[謂く]欲念・恚念・及び與害念なり。我これに由るが故にすなはち世尊を念じぬ』。世尊告げて曰はく『彌醯、心解脱未だ熟せず、熟せしめんと欲せば〔一〇〕五習法有り。云何が五と爲す。(1)彌醯、比丘は自ら善知識にして善知識と俱なり、善知識と共に和合す。彌醯、心解脱未だ熟せず、熟せしめんと欲せばこれを第一の習法と謂ふ。(2)また次に彌醯、比丘は禁戒を修習し、從解脱を守護し、又復善く威儀禮節を攝し、纎芥の罪を見て常に畏怖を懷き、學戒を受持す。彌醯、心解脱未だ熟せず、熟せしめんと欲せばこれを第二の習法と謂ふ。(3)また次に彌醯、比丘は謂く說くべき所、聖にして義有り心を柔軟ならしめ、心を無蓋ならしむ。謂く戒を說き定を說き慧を說き、解脱を說き解脱知見を說き、漸損を說き不樂聚會を說き、少欲を說き知足を說き斷を說き無欲を說き滅を說き燕坐を說き緣起得を說く。是の如き比の沙門の所說の得易くして得難からざるを具す。彌醯、心解脱未だ熟せず、熟せしめんと欲せばこれを第三の習法と謂ふ。(4)また次に彌醯、比丘は常に精進を行じ惡不善を斷じ、諸の善法を修し、恒に自ら意を起し專一堅固にして諸の善本の爲に方便を捨てず。彌醯、心解脱未だ熟せず、熟せしめんと欲せばこれを第四の習法と謂ふ。(5)また次に彌醯、比丘は智慧を修行し、興衰の法を觀じ、是の如き智、聖慧明達を得、分別曉了し以て正に苦を盡す。彌醯、心解脱未だ熟せず、熟せしめんと欲せばこれを第五の習法と謂ふ。彼この五習法を有し已りてまた〔一一〕四法を修す。云何が四と爲す。〔一二〕惡露を修して欲を斷ぜしめ、慈を修して恚を斷ぜしめ、〔一三〕息出・息入を修して亂念を斷ぜしめ、無常想を修して我慢を斷ぜしむ。彌醯、若し比丘自ら善知識にして善知識と俱なり、善知識と共に和合せば當に知るべし、必ず禁戒を修習し、從解脱を守護し、又復

【九】欲念(Kāma-vitakka)・恚念(Vyāpāda-v.)、與害念(Vihiṃsā-v.)

【一〇】未熟の心解脱を熟せしむるの法五あり。

【一一】四法(Cattāro dhammā)。

【一二】不淨〔想〕(Asubha)。

【一三】出息入息念(Ānāpāna-sati)。

て樂しむべく、清泉徐ろに流れ冷暖和適なるを見、見已りて歡喜してすなはちこの念を作しぬ、この地平正にして好椋林と名づけ、金鞞河の水極妙にして樂しむべく、清泉徐ろに流れ冷暖和適なり。若し族姓子[六]斷を學ばんと欲せば當に此處に於てすべし。[七]我亦所斷有り。寧ろこの靜處に在りて斷を學すべきやと。こゝに於て彌醯、食し訖りて中後に衣鉢を擧し已りて、手足を澡洗し尼師檀を以て肩上に著け、佛所に往詣し稽首して足を禮し、却きて一面に住し白して曰く『世尊、我今平旦衣を著け鉢を持し闍鬪村に入りて乞食を行じ、乞食已に竟りて金鞞河の邊に往至し地平正にして好椋林と名づけ、金鞞河の水極妙にして樂しむべく、清泉徐ろに流れ冷暖和適なるを見ぬ。我見て喜び已りて、すなはちこの念を作しぬ、この地平正にして好椋林と名づけ、金鞞河の水極妙にして樂しむべく、清泉徐ろに流れ冷暖和適なり。若し族姓子斷を學ばんと欲せば當に此處に於てすべし。我亦所斷有り。寧ろこの靜處に在りて斷を學ぶべきやと。世尊、我今彼の椋林の靜處に往至して斷を學ばんと欲す』。その時世尊告げて曰はく『彌醯、汝今知るや不や。我獨りにして人無く侍者有る無し。汝小しく住すべし。比丘來りて吾が侍者と爲るを須ち、汝すなはち去りて彼の椋林の靜處に至りて學ぶべし』。尊者彌醯乃至再び三たび白して曰く『世尊、我今彼の椋林の靜處に往至して斷を學ばんと欲す』。世尊亦復再たび三たび告げて曰はく『彌醯、汝今知るや不や。我獨りにして人無く侍者有る無し。汝小しく住すべし。比丘來りて吾が侍者と爲るを須ち、汝すなはち去りて彼の椋林の靜處に至りて學ぶべし』。彌醯また白して曰く『世尊[八]無爲・無作にして亦所觀無し。世尊、我有爲有作にして而も所觀有り。世尊、我彼の椋林の靜處に至りて斷を學ばん』。世尊告げて曰はく『彌醯、汝斷を求めんと欲せば我また何をか言はん。彌醯、汝去りて意の欲する所に隨へ』。こゝに於て尊者彌醯、佛の所説を聞きて善く受け善く持し而も善く誦習し卽ち佛足を禮し、繞三匝して去り彼の椋林に詣り林中に入り已りて一樹の下に至り尼師檀を敷きて結加趺坐しぬ。尊者彌醯椋林の中

【六】「精勤を窰める善男子の精勤するに足る」巴利語の Padahana（精勤）が Padāraṇa（分裂）、Padālana（開裂）に似たるよりして、これを「斷」と譯する例多し、四正勤を四正斷とするもその一例なり。

【七】自分にはまだ勉め勵むべきことがある。

【八】「大德、世尊のためには何事も更に爲すべきことなく、爲したるに更に加ふべきことなし。されど余のためには更に爲すべきことあり、爲したるに更に加ふべきことあり、若し世尊余を聽したまはば、余は精勤のために森林に入らん」

爲すと。生亦習有りて習無きに非ず。何をか生の習と謂ふ。答へて曰く、有を習と爲すと。有亦習有りて習無きに非ず。何をか有の習と謂ふ。答へて曰く、受を習と爲すと。受亦習有りて習無きに非ず。何をか受の習と謂ふ。答へて曰く、愛を習と爲すと。愛亦習有りて習無きに非ず。何をか愛の習と謂ふ。答へて曰く、覺を習と爲すと。覺亦習有りて習無きに非ず。何をか覺の習と謂ふ。答へて曰く、更樂を習と爲すと。更樂亦習有りて習無きに非ず。何をか更樂の習と謂ふ。答へて曰く、六處を習と爲すと。六處亦習有りて習無きに非ず。何をか六處の習と謂ふ。答へて曰く、名色を習と爲すと。名色亦習有りて習無きに非ず。何をか名色の習と謂ふ。答へて曰く、識を習と爲すと。識亦習有りて習無きに非ず。何をか識の習と謂ふ。答へて曰く、行を習と爲すと。行亦習有りて習無きに非ず。何をか行の習と謂ふ。答へて曰く、無明を習と爲すと。これを無明に緣りて行あり、行に緣りて識あり、識に緣りて名色あり、名色に緣りて六處あり、六處に緣りて、更樂あり、更樂に緣りて覺あり、覺に緣りて愛あり、愛に緣りて受あり、受に緣りて有あり、有に緣りて生あり、生に緣りて老死あり、老死に緣りて苦ありと爲す。苦を習へばすなはち信有り、信を習へばすなはち正思惟有り、正思惟を習へばすなはち正念・正智有り、正念・正智を習へばすなはち護諸根・護戒・不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脫有り、解脫を習へばすなはち涅槃を得」。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

五十六、[一]彌醯經第十五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]摩竭陀國に遊び[三]闍鬪村柰林窟に在しぬ。その時[四]尊者彌醯奉侍者たりき。こゝに於て尊者彌醯夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持し闍鬪村に入りて乞食を行じ、乞食已に竟りて[五]金鞞河の邊に往至し、地平正にして好柰林と名づけ、金鞞河の水極妙にし

【一】 A. iv. 354
【二】 Magadhā 恒河の南岸にあり、現今の南部ベハールに相當する大國。
【三】 Jantu-gāma
【四】 Meghiya
【五】 Kimilālā

五十五、涅槃經第十四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『涅槃習有りて習無きに非ず。何をか涅槃の習と謂ふ。答へて曰く、解脫を習と爲すと。解脫亦習有りて習無きに非ず。何をか解脫の習と謂ふ。答へて曰く、無欲を習と爲すと。無欲亦習有りて習無きに非ず。何をか無欲の習と謂ふ。答へて曰く、厭を習と爲すと。厭亦習有りて習無きに非ず。何をか厭の習と謂ふ。答へて曰く、如實を見、如眞を知るを習と爲すと。如實を見、如眞を知るに亦習有りて習無きに非ず。何をか如實を見、如眞を知るの習と謂ふ。答へて曰く、定を習と爲すと。定亦習有りて習無きに非ず。何をか定の習と謂ふ。答へて曰く、樂を習と爲すと。樂亦習有りて習無きに非ず。何をか樂の習と謂ふ。答へて曰く止を習となすと。止亦習有ありて習無きに非ず。何をか止の習と謂ふ。答へて曰く、喜を習と爲すと。喜亦習有りて習無きに非ず。何をか喜の習と謂ふ。答へて曰く、歡悅を習と爲すと。歡悅亦習有りて習無きに非ず。何をか歡悅の習と謂ふ。答へて曰く、不悔を習と爲すと。不悔亦習有りて習無きに非ず。何をか不悔の習と謂ふ。答へて曰く、戒を護るを習と爲すと。戒を護るに亦習有りて習無きに非ず。何をか戒を護るの習と謂ふ。答へて曰く、諸根を護るを習と爲すと。諸根を護るに亦習有りて習無きに非ず。何をか諸根を護るの習と謂ふ。答へて曰く、正念・正智を習と爲すと。正念・正智亦習有りて習無きに非ず。何をか正念・正智の習と謂ふ。答へて曰く、正思惟を習と爲すと。正思惟亦習有りて習無きに非ず。何をか正思惟の習と謂ふ。答へて曰く信を習と爲すと。信亦習有りて習無きに非ず。何をか信の習と謂ふ。答へて曰く、苦を習と爲すと。苦亦習有りて習無きに非ず。何をか苦の習と謂ふ。答へて曰く、老死を習と爲すと。老死亦習有りて習無きに非ず。何をか老死の習と謂ふ。答へて曰く、生を習と

をか善法を聞くの習と謂ふ。答へて曰く、往詣するを習と爲すと。往詣するに亦習有りて習無きに非ず。何をか往詣するの習と謂ふ。答へて曰く、奉事するを習と爲すと。若し善知識に奉事する者有れば未だ聞かざるはすなはち聞き、已に聞けるはすなはち利す。是の如く善知識に若し奉事せざればすなはち奉事するの習を害す、若し奉事すること無ければすなはち往詣するの習を害す。若し往詣すること無ければすなはち善法を聞くの習を害す。若し善法を聞かざればすなはち耳界の習を害す。若し耳界無ければすなはち法義を觀るの習を害す。若し法義を觀ること無ければすなはち法を受持するの習を害す。若し法を受持すること無ければすなはち法を諷誦するの習を害す。若し法を諷誦すること無ければすなはち法忍を觀るの習を害す。若し法忍を觀ること無ければすなはち信の習を害す。若し信無ければすなはち正思惟の習を害す。若し正思惟無ければすなはち正念正智の習を害す。若し正念・正智無ければすなはち護諸根・護戒・不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脫の習を害す。若し解脫無ければすなはち盡智の習を害す。若し善知識に奉事すれば未だ聞かざるはすなはち聞き已に聞けるはすなはち利す。是の如く善知識に若し奉事すればすなはち奉事するを習ひ、若し奉事する有ればすなはち往詣するを習ひ、若し往詣する有ればすなはち善法を聞くを習ひ、若し善法を聞く有ればすなはち耳界を習ひ、若し耳界有ればすなはち法義を觀るを習ひ、若し法義を觀る有ればすなはち法を受持するを習ひ、若し法を受持する有ればすなはち法を諷誦するを習ひ、若し法を諷誦する有ればすなはち法忍を觀るを習ひ、若し法忍を觀る有ればすなはち信を習ひ、若し信有ればすなはち正思惟を習ひ、若し正思惟有ればすなはち正念・正智を習ひ、若し正念・正智有ればすなはち護諸根・護戒・不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脫を習ひ、若し解脫有ればすなはち盡智を習ふ。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

と謂ふ。答へて曰く、無欲を習と爲すと。無欲亦習有りて習無きに非ず。何をか無欲の習と謂ふ。答へて曰く、厭を習と爲すと。厭亦習有りて習無きに非ず。何をか厭の習と謂ふ。答へて曰く、如實を見、如眞を知るを習と爲すと。如實を見、如眞を知るに亦習有りて習無きに非ず。何をか如實を見、如眞を知るの習と謂ふ。答へて曰く、定を習と爲すと。定亦習有りて習無きに非ず。何をか定の習と謂ふ。答へて曰く、樂を習と爲すと。樂亦習有りて習無きに非ず。何をか樂の習と謂ふ。答へて曰く、止を習と爲すと。止亦習有りて習無きに非ず。何をか止の習と謂ふ。答へて曰く、喜を習と爲すと。喜亦習有りて習無きに非ず。何をか喜の習と謂ふ。答へて曰く、歡悅を習と爲すと。歡悅亦習有りて習無きに非ず。何をか歡悅の習と謂ふ。答へて曰く、不悔を習と爲すと。不悔亦習有りて習無きに非ず。何をか不悔の習と謂ふ。答へて曰く、戒を護るを習と爲すと。戒を護るに亦習有りて習無きに非ず。何をか戒を護るの習と謂ふ。答へて曰く、諸根を護るを習と爲すと。諸根を護るに亦習有りて習無きに非ず。何をか諸根を護るの習と謂ふ。答へて曰く、正念・正智を習と爲すと。正念・正智亦習有りて習無きに非ず。何をか正念・正智の習と謂ふ。答へて曰く、正思惟を習と爲すと。正思惟亦習有りて習無きに非ず。何をか正思惟の習と謂ふ。答へて曰く、信を習と爲すと。信亦習有りて習無きに非ず。何をか信の習と謂ふ。答へて曰く、法忍[五]を觀るを習と爲すと。法忍を觀るに亦習有りて習無きに非ず。何をか法忍を觀るの習と謂ふ。答へて曰く、法を諷誦するを習と爲すと。法を諷誦するに亦習有りて習無きに非ず。何をか法を諷誦するの習と謂ふ。答へて曰く、法を受持するを習と爲すと。法を受持するに亦習有りて習無きに非ず。何をか法を受持するの習と謂ふ。答へて曰く、法義を觀るを習と爲すと。法義を觀るに亦習有りて習無きに非ず。何をか法義を觀るの習と謂ふ。答へて曰く、耳界を習と爲すと。耳界亦習有りて習無きに非ず。何をか耳界の習と謂ふ。答へて曰く、善法を聞くを習と爲すと。善法を聞くに亦習有りて習無きに非ず。何

【五】法忍(Dhammābhisamaya)。正法を了解すること、忍は認にて認知の意。

へて曰く、善法を聞くを食と爲すと。善法を聞くに亦食有りて食無きに非ず。何をか善法を聞くの食と謂ふ。答へて曰く、善知識に親近するを食と爲すと。善知識に親近するに亦食有りて食無きに非ず。何をか善知識に親近するの食と謂ふ。答へて曰く、善人を食と爲すと。大海亦食有りて食無きに非ず。何をか大海の食と謂ふ。答へて曰く、雨を食と爲すと。時に大雨有り。大雨已れば則ち山巖・溪澗・平澤の水滿ち、山巖・溪澗・平澤の水滿ち已れば則ち小川滿ち、小川滿ち已れば大川滿ち、大川滿ち已れば則ち小河滿ち、小河滿ち已れば則ち大河滿ち、大河滿ち已れば則ち大海滿つ。是の如く彼の大海は展轉して成滿す。是の如く善人を具し已りてすなはち善知識に親近するを具し、善知識に親近するを具し已りてすなはち善法を聞くを具し、善法を聞くを具し已りてすなはち信を生ずるを具し、信を生ずるを具し已りてすなはち正思惟を具し、正思惟を具し已りてすなはち正念・正智を具し、正念・正智を具し已りてすなはち諸根を護るを具し、諸根を護るを具し已りてすなはち三妙行を具し、三妙行を具し已りてすなはち四念處を具し、四念處を具し已りてすなはち七覺支を具し、七覺支を具し已りてすなはち明解脫を具す。是の如くこの明解脫は展轉して具成す』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

五十四、[一]盡智經第十三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]拘樓瘦に遊び[三]劍摩瑟曇なる拘樓の都邑に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『知有り見有ればすなはち漏盡を得、不知に非ず不見に非ず。云何が知見してすなはち漏盡を得るや。謂く苦の如眞を知見すればすなはち漏盡を得、苦習を知見し苦滅を知見し苦滅道の如眞を知見すれば、すなはち漏盡を得。盡智は[四]習有りて習無きに非ず。何をか盡智の習と謂ふ。答へて曰く、解脫を習と爲すと。解脫亦習有りて習無きに非ず。何をか解脫の習

【一】「何義經」「不思經」「念經」參照。

【二】【三】は第二卷「漏盡經」の註を見よ。

【四】習(Paccaya)原因なり。

か不信の食と謂ふ。答へて曰く、惡法を聞くを食と爲すと。惡法を聞くに亦食有りて食無きに非ず。何をか惡法を聞くの食と謂ふ。答へて曰く、惡知識に親近するを食と爲すと。惡知識に親近するに亦食有りて食無きに非ず。何をか惡知識に親近するの食と謂ふ。答へて曰く、惡人を食と爲すと。大海亦食有りて食無きに非ず。何をか大海の食と謂ふ。答へて曰く、雨を食と爲すと。時に大雨有り。大雨已れば則ち山巖・溪澗・平澤の水滿ち、山巖・溪澗・平澤の水滿ち已れば則ち小川滿ち、小川滿ち已れば則ち大川滿ち、大川滿ち已れば則ち小河滿ち、小河滿ち已れば則ち大河滿ち、大河滿ち已れば則ち大海滿つ。是の如く彼の大海は展轉して成滿す。是の如く惡人を具し已りてすなはち惡知識に親近するを具し、惡知識に親近するを具し已りてすなはち惡法を聞くを具し、惡法を聞くを具し已りてすなはち不信を生ずるを具し、不信を生ずるを具し已りてすなはち不正思惟を具し、不正思惟を具し已りてすなはち不正念・不正智を具し、不正念・不正智を具し已りてすなはち諸根を護らざるを具し、諸根を護らざるを具し已りてすなはち三惡行を具し、三惡行を具し已りてすなはち五蓋を具し、五蓋を具し已りてすなはち無明を具し、無明を具し已りてすなはち有愛を具す。是の如くこの有愛は展轉して具成す。明解脫亦食有りて食無きに非ず。何をか明解脫の食と謂ふ。答へて曰く、七覺支を食と爲すと。七覺支亦食有りて食無きに非ず。何をか七覺支の食と謂ふ。答へて曰く、四念處を食と爲すと。四念處亦食有りて食無きに非ず。何をか四念處の食と謂ふ。答へて曰く、三妙行を食と爲すと。三妙行亦食有りて食無きに非ず。何をか三妙行の食と謂ふ。答へて曰く、諸根を護るを食と爲すと。諸根を護るに亦食有りて食無きに非ず。何をか諸根を護るの食と謂ふ。答へて曰く、正念・正智を食と爲すと。正念・正智亦食有りて食無きに非ず。何をか正念・正智の食と謂ふ。答へて曰く、正思惟を食と爲すと。正思惟亦食有りて食無きに非ず。何をか正思惟の食と謂ふ。答へて曰く、信を食と爲すと。信亦食有りて食無きに非ず。何をか信の食と謂ふ。答

て食無きに非ず。何をか善知識に親近するの食と謂ふ。答へて曰く、善人を食と爲すと。これを善人を具し已りてすなはち善知識に親近するを具し、善知識に親近するを具し已りてすなはち善法を聞くを具し、善法を聞くを具し已りてすなはち信を生ずるを具し、信を生ずるを具し已りてすなはち正思惟を具し、正思惟を具し已りてすなはち正念・正智を具し、正念・正智を具し已りてすなはち諸根を護るを具し、諸根を護るを具し已りてすなはち三妙行を具し、三妙行を具し已りてすなはち四念處を具し、四念處を具し已りてすなはち七覺支を具し、七覺支を具し已りてすなはち明解脱を具すと爲す。是の如くこの明解脱は展轉して具成す』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

五十三、食經[下]第十二[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『有愛はその本際、本有愛無くして然も今有愛を生ずと知るべからず。すなはち有愛に因る所[ある]を知るを得べし。有愛は則ち食有りて食無きに非ず。何をか有愛の食と謂ふ。答へて曰く、無明を食と爲すと。無明亦食有りて食無きに非ず。何をか無明の食と謂ふ。答へて曰く、五蓋を食と爲すと。五蓋亦食有りて食無きに非ず。何をか五蓋の食と謂ふ。答へて曰く、三惡行を食と爲すと。三惡行亦食有りて食無きに非ず。何をか三惡行の食と謂ふ。答へて曰く、諸根を護らざるを食と爲すと。諸根を護らざるに亦食有りて食無きに非ず。何をか諸根を護らざるの食と謂ふ。答へて曰く、不正念・不正智を食と爲すと。不正念・不正智亦食有りて食無きに非ず。何をか不正念・不正智の食と謂ふ。答へて曰く、不正思惟を食と爲すと。不正思惟亦食有りて食無きに非ず。何をか不正思惟の食と謂ふ。答へて曰く、不信を食と爲すと。不信亦食有りて食無きに非ず。何を

【一】 A. v.113「本際經」及び「食經」[上]參照。

を具し、三妙行を具し已りてすなはち四念處を具し、四念處を具し已りてすなはち七覺支を具し、七覺支を具し已りてすなはち明解脫を具すと爲す。是の如くこの明解脫は展轉して具成す。大海亦食有りて食無きに非ず。何をか大海の食と謂ふ。答へて曰く、大河を食と爲すと。大河亦食有りて食無きに非ず。何をか大河の食と謂ふ。答へて曰く、小河を食と爲すと。小河亦食有りて食無きに非ず。何をか小河の食と謂ふ。答へて曰く、大川を食と爲すと。大川亦食有りて食無きに非ず。何をか大川の食と謂ふ。答へて曰く、小川を食と爲すと。小川亦食有りて食無きに非ず。何をか小川の食と謂ふ。答へて曰く、山巖・溪澗・平澤を食と爲すと。山巖・溪澗・平澤亦食有りて食無きに非ず。何をか山巖・溪澗・平澤の食と謂ふ。答へて曰く、雨を食と爲すと。時に大雨有り、大雨已れば則ち山巖・溪澗・平澤の水滿ち、山巖・溪澗・平澤の水滿ち已れば則ち小川滿ち、小川滿ち已れば則ち大川滿ち、大川滿ち已れば則ち小河滿ち、小河滿ち已れば則ち大河滿ち、大河滿ち已れば則ち大海滿つ。是の如く彼の大海は展轉して成滿す。是の如く明解脫亦食有りて食無きに非ず。何をか明解脫の食と謂ふ。答へて曰く、七覺支を食と爲すと。七覺支亦食有りて食無きに非ず。何をか七覺支の食と謂ふ。答へて曰く、四念處を食と爲すと。四念處亦食有りて食無きに非ず。何をか四念處の食と謂ふ。答へて曰く、三妙行を食と爲すと。三妙行亦食有りて食無きに非ず。何をか三妙行の食と謂ふ。答へて曰く、諸根を護るを食と爲すと。諸根を護るに亦食有りて食無きに非ず。何をか諸根を護るの食と謂ふ。答へて曰く、正念・正智を食と爲すと。正念・正智亦食有りて食無に非ず。何をか正念・正智の食と謂ふ。答へて曰く、正思惟を食と爲すと。正思惟亦食有りて食無きに非ず。何をか正思惟の食と謂ふ。答へて曰く、信を食と爲すと。信亦食有りて食無きに非ず。何をか信の食と謂ふ。答へて曰く、善法を聞くを食と爲すと。善法を聞くに亦食有りて食無きに非ず。何をか善法を聞くの食と謂ふ。答へて曰く、善知識に親近するを食と爲すと。善知識に親近するに亦食有り

すと。これを惡人を具し已りてすなはち惡知識に親近するを具し、惡知識に親近するを具し已りてすなはち惡法を聞くを具し、惡法を聞くを具し已りてすなはち不信を生ずるを具し、不信を生ずるを具し已りてすなはち不正思惟を具し、不正思惟を具し已りてすなはち不正念・不正智を具し、不正念・不正智を具し已りてすなはち諸根を護らざるを具し、諸根を護らざるを具し已りてすなはち三惡行を具し、三惡行を具し已りてすなはち五蓋を具し、五蓋を具し已りてすなはち無明を具し、無明を具し已りてすなはち有愛を具すと爲す。是の如くこの有愛は展轉して具成す。明解脫亦食有りて食無きに非ず。何をか明解脫の食と謂ふ。答へて曰く、七覺支を食と爲すと。七覺支亦食有りて食無きに非ず。何をか七覺支の食と謂ふ。答へて曰く、四念處を食と爲すと。四念處亦食有りて食無きに非ず。何をか四念處の食と謂ふ。答へて曰く、三妙行を食と爲すと。三妙行亦食有りて食無きに非ず。何をか三妙行の食と謂ふ。答へて曰く、諸根を護るを食と爲すと。諸根を護るに亦食有りて食無きに非ず。何をか諸根を護るの食と謂ふ。答へて曰く、正念・正智を食と爲すと。正念・正智亦食有りて食無きに非ず。何をか正念・正智の食と謂ふ。答へて曰く、正思惟を食と爲すと。正思惟亦食有りて食無きに非ず。何をか正思惟の食と謂ふ。答へて曰く、信を食と爲すと。信亦食有りて食無きに非ず。何をか信の食と謂ふ。答へて曰く、善法を聞くを食と爲すと。善法を聞くに亦食有りて食無きに非ず。何をか善法を聞くの食と謂ふ。答へて曰く、善知識に親近するを食と爲すと。善知識に親近するに亦食有りて食無きに非ず。何をか善知識に親近するの食と謂ふ。答へて曰く、善人を食と爲すと。これを善人を具し已りてすなはち善知識に親近するを具し、善知識に親近するを具し已りてすなはち善法を聞くを具し、善法を聞くを具し已りてすなはち信を生ずるを具し、信を生ずるを具し已りてすなはち正思惟を具し、正思惟を具し已りてすなはち正念・正智を具し、正念・正智を具し已りてすなはち諸根を護るを具し、諸根を護るを具し已りてすなはち三妙行

を具し已りてすなはち有愛を具すと爲す。是の如くこの有愛展轉して具成す。大海亦食有りて食無きに非ず。何をか大海の食と謂ふ。答へて曰く、大河を食と爲すと。大河亦食有りて食無きに非ず。何をか大河の食と謂ふ。答へて曰く、小河を食と爲すと。小河亦食有りて食無きに非ず。何をか小河の食と謂ふ。答へて曰く、大川を食と爲すと。大川亦食有りて食無きに非ず。何をか大川の食と謂ふ。答へて曰く、小川を食と爲すと。小川亦食有りて食無きに非ず。何をか小川の食と謂ふ。答へて曰く、山巖・溪澗・平澤を食と爲すと。山巖・溪澗・平澤亦食有りて食無きに非ず。何をか山巖・溪澗・平澤の食と謂ふ。答へて曰く、雨を食と爲すと。時に大雨有り、大雨已れば則ち山巖・溪澗・平澤の水滿ち、山巖・溪澗・平澤の水滿ち已れば則ち小川滿ち、小川滿ち已れば則ち大川滿ち、大川滿ち已れば則ち小河滿ち、小河滿ち已れば則ち大河滿ち、大河滿ち已れば則ち大海滿つ。是の如く彼の大海は展轉して成滿す。是の如く有愛亦食有りて食無きに非ず。何をか有愛の食と謂ふ。答へて曰く、無明を食と爲すと。無明亦食有りて食無きに非ず。何をか無明の食と謂ふ。答へて曰く、五蓋を食と爲すと。五蓋亦食有りて食無きに非ず。何をか五蓋の食と謂ふ。答へて曰く、三惡行を食と爲すと。三惡行亦食有りて食無きに非ず。何をか三惡行の食と謂ふ。答へて曰く、諸根を護らざるを食と爲すと。諸根を護らざるに亦食有りて食無きに非ず。何をか諸根を護らざるの食と謂ふ。答へて曰く、不正念・不正智を食と爲すと。不正念・不正智亦食有りて食無きに非ず。何をか不正念・不正智の食と謂ふ。答へて曰く、不正思惟を食と爲すと。不正思惟亦食有りて食無きに非ず。何をか不正思惟の食と謂ふ。答へて曰く、不信を食と爲すと。不信亦食有りて食無きに非ず。何をか不信の食と謂ふ。答へて曰く、惡法を聞くを食と爲すと。惡法を聞くに亦食有りて食無きに非ず。何をか惡法を聞くの食と謂ふ。答へて曰く、惡知識に親近するを食と爲すと。惡知識に親近するに亦食有りて食無きに非ず。何をか惡知識に親近するの食と爲す。答へて曰く、惡人を食と爲

五十二、[一]食經〔上〕第十一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『有愛はその本際、本有愛無くして然も今有愛を生ずと知るべからず。すなはち有愛に因る所［ある］を知るを得べし。有愛は則ち[二]食有りて食無きに非ず。何をか有愛の食と謂ふ。答へて曰く、無明を食と爲すと。無明亦食有りて食無きに非ず。何をか無明の食と謂ふ。答へて曰く、五蓋を食と爲すと。五蓋亦食有りて食無きに非ず。何をか五蓋の食と謂ふ。答へて曰く、三惡行を食と爲すと。三惡行亦食有りて食無きに非ず。何をか三惡行の食と謂ふ。答へて曰く、諸根を護らざるを食と爲すと。諸根を護らざるに亦食有りて食無きに非ず。何をか諸根を護らざるの食と謂ふ。答へて曰く、不正念・不正智を食と爲すと、不正念・不正智亦食有りて食無きに非ず。何をか不正念・不正智の食と謂ふ。答へて曰く、不正思惟を食と爲すと。不正思惟亦食有りて食無きに非ず。何をか不正思惟の食と謂ふ。答へて曰く、不信を食と爲すと。不信亦食有りて食無きに非ず。何をか不信の食と謂ふ。答へて曰く、惡法を聞くを食と爲すと。惡法を聞くに亦食有りて食無きに非ず。何をか惡法を聞くの食と謂ふ。答へて曰く、惡知識に親近するを食と爲すと。惡知識に親近するに亦食有りて食無きに非ず。何をか惡知識に親近するの食と謂ふ。答へて曰く、惡人を食と爲すと。これを惡人を具し已りてすなはち惡知識に親近するを具し、惡知識に親近するを具し已りてすなはち惡法を聞くを具し、惡法を聞くを具し已りてすなはち不信を生ずるを具し、不信を生ずるを具し已りてすなはち不正思惟を具し、不正思惟を具し已りてすなはち不正念・不正智を具し、不正念・不正智を具し已りてすなはち諸根を護らざるを具し、諸根を護らざるを具し已りてすなはち三惡行を具し、三惡行を具し已りてすなはち五蓋を具し、五蓋を具し已りてすなはち無明を具し、無明

【一】A. v.113「本際經」參照。
【二】Āhāra「本際經」に「習」といへるものと義同じ、因由の意。

を具し已りてすなはち諸根を護らざるを具し、諸根を護らざるを具し已りてすなはち三惡行を具し、三惡行を具し已りてすなはち五蓋を具し、五蓋を具し已りてすなはち無明を具し、無明を具し已りてすなはち有愛を具すと爲す。是の如くこの有愛は展轉して具成す。明解脫亦習有りて習無きに非ず。何をか明解脫の習と謂ふ。答へて曰く、[10]七覺支を習と爲すと。七覺支亦習有りて習無きに非ず。何をか七覺支の習と謂ふ。答へて曰く、[11]四念處を習と爲すと。四念處亦習有りて習無きに非ず。何をか四念處の習と謂ふ。答へて曰く、[12]三妙行を習と爲すと。三妙行亦習有りて習無きに非ず。何をか三妙行の習と謂ふ。答へて曰く、[13]諸根を護るを習と爲すと。諸根を護るに亦習有りて習無きに非ず。何をか諸根を護るの習と謂ふ。答へて曰く、正念・正智を習と爲すと。正念・正智亦習有りて習無きに非ず。何をか正念・正智の習と謂ふ。答へて曰く、[14]正思惟を習と爲すと。正思惟亦習有りて習無きに非ず。何をか正思惟の習と謂ふ。答へて曰く、[15]信を習と爲すと。信亦習有りて習無きに非ず。何をか信の習と謂ふ。答へて曰く、[16]善法を聞くを習と爲すと。善法を聞くに亦習有りて習無きに非ず。何をか善法を聞くの習と謂ふ。答へて曰く、[17]善知識に親近するを習と爲すと。善知識に親近するに亦習有りて習無きに非ず。何をか善知識に親近するの習と謂ふ。答へて曰く、[18]善人を習と爲すと。これを善人を具し已りてすなはち善知識に親近するを具し、善知識に親近するを具し已りてすなはち善法を聞くを具し、善法を聞くを具し已りてすなはち信を生ずるを具し、信を生ずるを具し已りてすなはち正思惟を具し、正思惟を具し已りてすなはち正念・正智を具し、正念・正智を具し已りてすなはち諸根を護るを具し、諸根を護るを具し已りてすなはち三妙行を具し、三妙行を具し已りてすなはち四念處を具し、四念處を具し已りてすなはち七覺支を具し、七覺支を具し已りてすなはち明解脫を具すと爲す。是の如くこの明解脫展轉して具成す』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

【一〇】第八卷「阿修羅經」の註(一五)を見よ。
【一一】第八卷「阿修羅經」の註(一〇)を見よ。
【一二】三妙行(Tīni sucaritāni)三善行ともいふ、身・口・意の三善業。
【一三】Guttindriya 六根門を護ること。
【一四】Yoniso manasikāra 第二卷「漏盡經」第十の註を見よ。
【一五】Saddhā 第九卷「手長者經」第十に出づ。
【一六】Saddhammasavana
【一七】Sappurisasaṃseva
【一八】Sappurisa

を具へて已に涅槃を具へんとは必ずこの處り有り』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

五十一、[一]本際經第十

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊、諸の比丘に告げたまはく『[二]有愛はその[三]本際、本有愛無くして然も今有愛を生ずと知るべからず。すなはち有愛に因る所［ある］を知るを得べし。有愛は則ち[四]習有りて習無きに非ず。何をか有愛の習と謂ふ。答へて曰く、無明を習と爲すと。無明亦習有りて習無きに非ず。何をか無明の習と謂ふ。答へて曰く、五蓋を習と爲すと。[五]五蓋亦習有りて習無きに非ず。何をか五蓋の習と謂ふ。答へて曰く、[六]三惡行を習と爲すと。三惡行亦習有りて習無きに非ず。何をか三惡行の習と謂ふ。答へて曰く、[七]諸根を護らざるを習と爲すと。諸根を護らざるに亦習有りて習無きに非ず。何をか諸根を護らざるの習と謂ふ。答へて曰く、不正念・不正智を習と爲すと。不正念・不正智亦習有りて習無きに非ず。何をか不正念・不正智の習と謂ふ。答へて曰く、[八]不正思惟を習と爲すと。不正思惟亦習有りて習無きに非ず。何をか不正思の習と謂ふ。答へて曰く、不信を習と爲すと。不信亦習有りて習無きに非ず。何をか不信の習と謂ふ。答へて曰く、惡法を聞くを習と爲すと。惡法を聞くに亦習有りて習無きに非ず。何をか惡法を聞くの習と謂ふ。答へて曰く、[九]惡知識に親近するを習と爲すと。惡知識に親近するに亦習有りて習無きに非ず。何をか惡知識に親近するの習と謂ふ。答へて曰く、惡人を習と爲すと。これを惡人を具し已りてすなはち惡知識に親近するを具し、惡知識に親近するを具し已りてすなはち惡法を聞くを具し、惡法を聞くを具し已りてすなはち不信を生ずるを具し、不信を生ずるを具し已りてすなはち不正思惟を具し、不正思惟を具し已りてすなはち不正念・不正智を具し、不正念・不正智

【一】A. v. 113「食經」上下、「本相猗致經」、「緣本致經」。
【二】有愛(Bhavataṇhā)。生有に對する渴愛。
【三】本際(Purimā Koṭi)。最初の端。
【四】習(Paccaya)。緣なり。
【五】五蓋(Pañcanīvaraṇā)貪欲・瞋恚・睡眠・掉擧・疑の五にて心法を蓋覆し、善法を生ぜざらしむるものをいふ。
【六】三惡行(Tīni duccaritāni)。身口意の三にて犯す邪業。
【七】不護諸根 (Aguttindriya)。六根の門を護らざること。
【八】不正思惟 (Ayonisomanasikāra)。
【九】惡友に親むこと。

して、已に學法を具へんとは必ずこの處り無し。學法を具へずして已に戒身を具へんとは必ずこの處り無し。戒身を具へずして已に定身を具へんとは必ずこの處り無し。定身を具へずして已に慧身を具へんとは必ずこの處り無し。慧身を具へずして已に解脫身を具へんとは必ずこの處り無し。解脫身を具へずして已に解脫知見身を具へんとは必ずこの處り無し。解脫知見身を具へずして已に涅槃を具へんとは必ずこの處り無し。若し比丘恭敬を行じ及び諸の梵行[者]を善觀し敬重して已に威儀法を具へんは必ずこの處り有り。威儀を具へて已に學法を具へんは必ずこの處り有り。學法を具へて已に戒身を具へんは必ずこの處り有り。戒身を具へて已に定身を具へんは必ずこの處り有り。定身を具へて已に慧身を具へんは必ずこの處り有り。慧身を具へて已に解脫身を具へんは必ずこの處り有り。解脫身を具へて已に解脫知見身を具へんは必ずこの處り有り。解脫知見身を具へて涅槃を具へんはこの處り有り』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

五十、[1]恭敬經[下]第九

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊、諸の比丘に告げたまはく『比丘當に恭敬を行じ及び諸の梵行人を善觀し敬重すべし。若し比丘恭敬を行ぜず、諸の梵行[者]を善觀せず敬重せずして已に威儀法を具へんとは必ずこの處り無し。威儀法を具へずして已に學法を具へんとは必ずこの處り無し。學法を具へずして已に護諸根・護戒・不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脫[を具へんとは必ずこの處り無し。]解脫を具へずして已に涅槃を具へんとは必ずこの處り無し。若し比丘恭敬を行じ及び諸の梵行[者]を善觀し敬重して已に威儀法を具へんとは必ずこの處り有り。威儀法を具へて已に學法を具へんとは必ずこの處り有り。學法を具へて已に護諸根・護戒・不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脫を具へ、解脫

【1】A. iii. 14, 15

樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脱を習ふ。若し解脱有ればすなはち涅槃を習ふ』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

四十八、戒經〔下〕第七[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時尊者舍梨子諸の比丘に告げぬ『諸賢、若し比丘戒を犯せばすなはち不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脱を害す。若し解脱無ければすなはち涅槃を害す。諸賢、猶ほ樹有るが如し。若し根を害せば則ち莖幹・心節・枝葉・華實皆成るを得ず。諸賢當に知るべし。比丘も亦復是の如く、若し戒を犯す有ればすなはち不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脱を害す。若し解脱無ければすなはち涅槃を害す。諸賢、若し比丘戒を持すればすなはち不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脱を習ふ。若し解脱有ればすなはち涅槃を習ふ。諸賢、猶ほ樹有るが如し。若し根を害せざれば則ち莖幹・心節・枝葉・華實・皆成就することを得。諸賢、當に知るべし。比丘も亦復是の如く、若し戒を持する有ればすなはち不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脱を習ふ。若し解脱有ればすなはち涅槃を習ふ』。尊者舍梨子の所說是の如し。彼の諸の比丘尊者舍梨子の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

四十九、恭敬經〔上〕第八[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『比丘當に恭敬を行じ及び諸の梵行の人を善觀し敬重すべし。[二]若し比丘恭敬を行ぜず諸の梵行〔者〕を善觀せず敬重せずして已に威儀法を具へんとは必ずこの處り無し。威儀法を具へず

〔一〕A. v. 5

〔一〕A. iii. 14, 15

〔二〕巴利文「同梵行者の間にありて敬重なく依從なく隨順行なければ威儀法を充實せんと、この處りあらず」。

厭・無欲・解脫を害す。若し解脫無ければすなはち涅槃を害す。諸賢、猶ほ樹有るが如し。若し外皮を害せば卽ち內皮成らず、內皮成らざれば則ち莖幹・心節・枝葉・華實皆成るを得ず。諸賢、當に知るべし。比丘も亦復是の如く、若し無慚・無愧なればすなはち愛恭敬を害し、若し愛恭敬無ければすなはちその信を害し、若しその信無ければすなはち正思惟を害し、若し正思惟無ければすなはち正念・正智を害し、若し正念正智無ければすなはち護諸根・護戒・不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脫を害し、若し解脫無ければすなはち涅槃を害す。諸賢、比丘慚有り愧有ればすなはち愛恭敬を習ひ、若し愛恭敬有ればすなはちその信を習ひ、若しその信有ればすなはち正思惟を習ひ、若し正思惟有ればすなはち正念・正智を習ひ若し正念・正智有ればすなはち護諸根・護戒・不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脫を習ひ、若し解脫有ればすなはち涅槃を習ふ。諸賢、猶ほ樹有るが如し。外皮を害せざれば則ち內皮成ることを得、內皮成ることを得れば則ち莖幹・心節・枝葉・華實皆成就することを得。諸賢、當に知るべし。比丘も亦復是の如く若し慚有り愧有ればすなはち愛恭敬を習ひ、若し愛恭敬有ればすなはちその信を習ひ、若しその信有ればすなはち正思惟を習ひ、若し正思惟有ればすなはち正念・正智を習ひ、若し正念・正智有ればすなはち護諸根・護戒・不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脫を習ひ、若し解脫有ればすなはち涅槃を習ふ』。尊者舍梨子の所說是の如し。彼の諸の比丘尊者舍梨子の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

四十七、戒經〔上〕第六 [一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し比丘戒を犯せばすなはち不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脫を害す。若し解脫無ければすなはち涅槃を害す。若し比丘戒を持すればすなはち不悔・歡悅・喜・止・

【一】A. v. 4 參照。

ればすなはち涅槃を害す。若し比丘多く忘れず正智有ればすなはち正念・正智を習ふ。若し正念・正智有ればすなはち護諸根・護戒・不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脫を習ふ。若し解脫有ればすなはち涅槃を習ふ』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

四十五、慚愧經〔上〕第四[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び。勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し比丘無慚・無愧なればすなはち愛恭敬を害す。若し愛恭敬無ければすなはちその信を害す。若しその信無ければすなはち正思惟を害す。若し正思惟無ければすなはち正念・正智を害す。若し正念・正智無ければすなはち、護諸根・護戒・不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脫を害す。若し解脫無ければすなはち涅槃を害す。若し比丘慚有り愧有ればすなはち愛恭敬を習ひ、若し愛恭敬有ればすなはちその信を習ひ、若しその信有ればすなはち正思惟を習ひ、若し正思惟有ればすなはち正念・正智を習ひ、若し正念・正智有ればすなはち護諸根・護戒・不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・解脫を習ふ。若し解脫有ればすなはち涅槃を習ふ』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

四十六、慚愧經〔下〕第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時尊者舍利子諸の比丘に告げぬ『諸賢、若し比丘無慚・無愧なればすなはち愛恭敬を害す。若し愛恭敬無ければすなはちその信を害す。若しその信無ければすなはち正思惟を害す。若し正思惟無ければすなはち正念・正智を害す。若し正念・正智無ければすなはち護諸根・護戒・不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・

【一】A. iv. 336 參照。

べからず。阿難、但法自然にして止有ればすなはち覺樂を得。阿難、樂有れば應に我をして定ならしむと思ふべからず。阿難、但法自然にして樂有ればすなはち定心を得。阿難、定有れば應に我をして如實を見、如眞を知らしむと思ふべからず。阿難、但法自然にして定有ればすなはち如實を見、如眞を知るを得。阿難、如實を見、如眞を知る有れば應に我をして厭はしむと思ふべからず。阿難、但法自然にして如實を見、如眞を知ればすなはち厭を得。阿難、厭有れば應に我をして無欲ならしむと思ふべからず。阿難、但法自然にして厭有ればすなはち無欲を得。阿難、無欲有れば應に我をして解脫せしむと思ふべからず。阿難、但法自然にして無欲有ればすなはち一切の婬怒癡を解脫するを得。阿難、これを持戒に因りてすなはち不悔を得、不悔に因りてすなはち歡悅を得、歡悅に因りてすなはち喜を得、喜に因りてすなはち止を得、止に因りてすなはち樂を得、樂に因りてすなはち定心を得と爲す。阿難、多聞の聖弟子定心有ればすなはち如實を見、如眞を知り、如實を見、如眞を知るに因りてすなはち厭を得、厭に因りてすなはち無欲を得、無欲に因りてすなはち解脫を得、解脫に因りてすなはち解脫を知り、生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、更に有を受けずと如眞を知る。阿難、これを法々相益し法々相因ると爲す。是の如くこの戒趣きて第一に至り、謂くこの岸を度り彼の岸に至るを得』。佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

四十四、念經第三[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し比丘多く忘れて正智無ければすなはち正念・正智を害す。若し正念・正智無ければすなはち護諸根・護戒・不悔・歡悅・喜・止・樂・定・見如實・知如眞・厭・無欲・解脫を害す。若し解脫無け

【一】A. iv. 336 參照。

尊答へて曰はく『阿難、如實を見、如眞を知るは[10]厭はしむるの義なり。阿難、若し如實を見、如眞を知る有ればすなはち厭を得』。また問ひぬ『世尊、厭は何の義と爲すや』。世尊答へて曰はく『阿難、厭は[11]無欲ならしむるの義なり。阿難、若し厭有ればすなはち無欲を得』。また問ひぬ『世尊、無欲は何の義と爲すや』。世尊答へて曰はく『阿難、無欲は[12]解脱せしむるの義なり。阿難、若し無欲有ればすなはち一切の婬怒癡を解脱することを得。これを阿難、持戒に因りてすなはち不悔を得、不悔に因りてすなはち歡悅を得、歡悅に因りてすなはち喜を得、喜に因りてすなはち止を得、止に因りてすなはち樂を得、樂に因りてすなはち定を得ると爲す。阿難、多聞の聖弟子定に因りてすなはち如實を見、如眞を知るを得、如實を見、如眞を知るに因りてすなはち厭を得、厭に因りてすなはち無欲を得、無欲に因りてすなはち解脱を得、解脱に因りてすなはち解脱を知り生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、更に有を受けずと如眞を知る。阿難、これを法法相益し法法相因ると爲す。是の如くこの戒趣きて第一に至り、謂くこの岸を度りて彼の岸に至るを得』。佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

四十三、[1]不思經第二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊告げて曰はく『阿難、持戒は應に我をして不悔ならしむと思ふべからず。阿難、但[2]法自然にして持戒はすなはち不悔を得。阿難、不悔有れば應に我をして歡悅せしむと思ふべからず。阿難、但法自然にして不悔有ればすなはち歡悅を得、阿難、歡悅有れば應に我をして喜ばしむと思ふべからず。阿難、但法自然にして歡悅有ればすなはち喜を得。阿難、喜有れば應に我をして止まらしむと思ふべからず。阿難、但法自然にして喜有ればすなはち止身を得。阿難、止有れば應に我をして樂しましむと思ふ

【10】厭(Nibbidā)。厭嫌なり、
【11】無欲(Virāga)。離欲のこと。
【12】解脱(Vimutti)。

【1】A. v. 2

【2】法自然(Dhammatā)。

習相應品第五

何義・不思・念・慚〔愧は〕二なり、戒・〔恭〕敬・各は二、及び本際と、二の食〔經〕・盡智・〔說〕涅槃と、彌醯・卽爲比丘說となり。

四十二、何[1]義經第一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時尊者阿難則ち晡時に於て燕坐より起ち佛所に往詣し、稽首して足を禮し、却きて一面に住し白して曰く『世尊、持戒は何の義と爲すや』。世尊答へて曰はく『阿難、持戒は[2]不悔ならしむるの義なり。阿難、若し持戒有ればすなはち不悔を得』。また問ひぬ『世尊、不悔は何の義と爲すや』。世尊答へて曰はく『阿難、不悔は[3]歡悅ならしむるの義なり。阿難、若し不悔有ればすなはち歡悅を得』。また問ひぬ『世尊、歡悅は何の義と爲すや』。世尊答へて曰はく『阿難、歡悅は[4]喜ばしむるの義なり。阿難、若し歡悅有ればすなはち喜を得』。また問ひぬ『世尊、喜は何の義と爲すや』。世尊答へて曰はく『阿難、喜は[5]止らしむるの義なり。阿難、若し喜有ればすなはち止身を得』。また問ひぬ。『世尊、止は何の義と爲すや』。世尊答へて曰はく、『阿難、止は[6]樂しましむるの義なり。阿難、若し止有ればすなはち[7]覺樂を得』。また問ひぬ『世尊、樂は何の義と爲すや』。世尊答へて曰はく『阿難、樂は[8]定らしむるの義なり。阿難、若し樂有ればすなはち定心を得』。また問ひぬ『世尊、定は何の義と爲すや』。世尊答へて曰はく『阿難、定は[9]如實を見、如眞を知らしむるの義なり。阿難、若し定有ればすなはち如實を見、如眞を知るを得』。また問ひぬ『世尊、如實を見、如眞を知るは何の義と爲すや』。世

【一】 A. v.1
【二】 不悔。(Avippaṭisāra)。
【三】 歡悅(Pāmujja)。
【四】 喜(Pīti)。
【五】 止身(Passaddhi) 輕安、猗息とも譯す。
【六】 樂(Sukha)。
【七】 樂を感ずるの意。
【八】 定(Samādhi)。手長者經〔下〕の註を見よ。
【九】 見如實・知如眞(Yathābhūtañāṇadassana)如實知見なり。

者自ら少欲にして他をして我が少欲を知らしむるを欲せず。信有り慚有り愧有り精進有り念有り定有り慧有り。手長者自ら慧有りて他をして我が慧有るを知らしむるを欲せず。手長者少欲有りとはこれに因るが故に說く。(2)手長者[四]信有りとはこれ何に因りて說くや。手長者得信堅固にして深く如來に著し、信根已に立ち終に外の沙門梵志若しは天・魔・梵及び餘の世間に隨はず。手長者信有りとはこれに因るが故に說く。(3)手長者[五]慚有りとはこれ何に因りて說くや。手長者常に慚恥を行じ慚を可とし慚を知る、惡不善の法は穢汚にして煩惱は諸の惡報を受け生死の本を造ると。手長者慚有りとはこれに因るが故に說く。(4)手長者[六]愧有りとはこれ何に因りて說くや。手長者常に愧を行じ羞愧を可とし愧を知る、惡不善の法は穢汚にして煩惱は諸の惡報を受け生死の本を造ると。手長者愧有りとはこれに因るが故に說く。(5)手長者[七]精進有りとはこれ何に因りて說くや。手長者常に精進を行じ、惡不善を除き、諸の善法を修し、恒に自ら意を起し、專一堅固にして諸の善本の爲に方便を捨てず。手長者精進有りとはこれに因るが故に說く。(6)手長者[八]念有りとはこれ何に因りて說くや。手長者[九]內身を觀じて身の如く、內覺心法を觀じて法の如し。手長者念有りとはこれに因るが故に說く。(7)手長者[一〇]定有りとはこれ何に因りて說くや。手長者欲を離れ、惡不善の法を離れ[乃至]、第四禪を得るに至り成就して遊ぶ。手長者定有りとはこれに因るが故に說く。(8)手長者[一一]慧有りとはこれ何に因りて說くや。手長者智慧を修行じ興衰の法を觀じかくの如き智聖慧明達を得て分別曉了し以て正しく苦を盡くす。手長者慧有りとはこれに因るが故に說く。手長者八未曾有法有りとはこれに因るが故に說く』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第九

【四】信(Saddhā)。

【五】慚(Hiri)。

【六】愧(Ottappa)。

【七】精進(viriyārambha)。

【八】念(Sati)。

【九】四念住・四念處、新譯には身受心法といふ、八卷「阿修羅經」及註を見よ。

【一〇】定(Samādhi)。三昧なり、等持とも譯す。

【一一】慧(Paññā)。

に遍滿し成就して遊ぶと。この時手長者默然として語らず、亦毘沙門大天王を觀視せず。所以者何。尊重定・守護定を以ての故にと』。こゝに於て手長者比丘に白して曰く『尊者、この時[八]白衣無きや』。比丘答へて曰く『白衣無し』。又[九]問ひて曰く『若し白衣有れば當に何の咎か有るべき』。長者答へて曰く『尊者、或は世尊の語を信ぜざる者有らば、彼當に長夜に不義不忍にして、極惡處に生じ苦を受くること無量なるべし。若し佛の語を信ずる者有れば、彼この事に因るが故にすなはち能く我を尊重し恭敬し禮事せん。尊者、我亦爾らしむるを欲せず。尊者、願はくはこゝに在りて食せよ』。彼の比丘手長者の爲の故に默然として請を受けぬ。手長者彼の比丘默然として受けしことを知り已りて、即ち坐より起ち自ら澡水を行じ極淨美の種々豐饒の食噉含消を以て自ら手づから斟酌し飽滿するを得しめぬ。食し訖りて器を收め澡水を行じ已りて一小床を取り別坐して法を聽きぬ。彼の比丘手長者の爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、坐より起ちて去り、佛所に往詣し稽首して足を禮し、却きて一面に坐し、謂く手長者と本共に論ぜし所を盡く佛に向ひて說きぬ。こゝに於て世尊諸の比丘に告げたまはく『我こゝを以ての故に手長者に七未曾有法有りと稱說しぬ。また次に汝等當に知るべし、手長者にまた第八未曾有法有り。手長者無求無欲なり』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて、歡喜奉行しぬ。

四十一、手長者經〔下〕第十[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]阿邏鞞伽邏に遊び恕林中に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『手長者に八未曾有法有り。云何が八と爲す。手長者少欲有り、信有り、慚有り、愧有り、精進有り、念有り、定有り、慧有り。(1)手長者[三]少欲有りとはこれ何に因りて說くや。手長

【八】白衣とは在家の人、出家は袈裟衣卽ち黃衣又は壞色衣なるに對す。
【九】比丘語を續けて問ふ。

【一】A. iv. 216
【二】註は手長者經〔上〕參照。
【三】少欲(Appicchatā)。

一切に普周く心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲喜「亦然り」。心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。今三十三天彼の爲に法堂に集在し手長者を咨嗟し稱歎す、大善利有り大功德有り、所以者何。諸賢、彼の手長者、佛爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りたまへば、卽ち坐より起ち佛の爲に禮を作し繞三匝して去り、その家に還歸し外門に到り已りて若し人有れば盡く爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、中門・內門及び入りて內に在りて、若し人有れば盡く爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、堂に昇り床を敷きて結加趺坐し、心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心慈と倶にして、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲喜「亦然り」。心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶと。こゝに於て毘沙門大天王色像巍々光耀暐曄として夜將に旦に向はんと「する時」手長者の家に詣り告げて曰く、長者、汝善利有り大功德有り。所以者何　今三十三天手長者の爲に法堂に集在し手長者を咨嗟し稱歎す、大善利有り大功德有り。所以者何。諸賢、彼の手長者、佛爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りたまへば、卽ち坐より起ち佛の爲に禮を作し繞三匝して去り、その家に還歸し外門に到り已りて若し人有れば盡く爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、中門・內門及び入りて內に在りて若し人有れば盡く爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、堂に昇り床を敷きて結加趺坐し、心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲喜「亦然り」。心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間

く悲喜〔亦然り〕心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶと。今毘沙門大天王色像巍々光耀暐曄として、夜將に旦に向はんと〔する時〕、手長者の家に詣りて告げて曰く、長者、汝善利有り大功德有り。所以者何。今三十三天、長者の爲に法堂に集在し手長者を咨嗟し稱歎す、大善利有り大功德有り。所以者何。諸賢、彼の手長者、佛爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りたまへば、卽ち坐より起ち佛の爲に禮を作し、繞三匝して去りその家に還歸し、外門に到り已りて若し人有れば盡く爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、中門・內門及び入りて內に在りて若し人有れば、盡く爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、堂に昇り床を敷きて結加趺坐し、心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心慈と倶にして、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲喜〔亦然り〕。心捨と倶にして、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶと』。こゝに於て一比丘有り。夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持して手長者の家に往詣しぬ。手長者遙に比丘の來るを見、卽ち坐より起ち叉手を比丘に向け白して曰く『尊者、善く來りぬ。尊者久しくこゝに來らず、願はくはこの床に坐せよ』。彼の時比丘卽ちその床に坐しぬ。手長者比丘の足を禮し、却きて一面に坐しぬ。比丘告げて曰く『長者、汝善利有り大功德有り。所以者何。世尊、汝が爲に無量百千の衆中に於て手長者を咨嗟し稱歎したまひぬ。手長者に七未曾有法有り。手長者、我爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已れば、卽ち坐より起ち我が爲に禮を作し繞三匝して去り、その家に還歸し外門に到り已りて、若し人有れば盡く爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、中門・內門及び入りて內に在りて、若し人有れば盡く爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、堂に昇り床を敷きて結加趺坐し、心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下

爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、堂に昇り床を敷きて結跏趺坐し、心慈と俱にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心慈と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲喜「亦然り」。心捨と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶと』。この時手長者默然として語らず、毘沙門大天王を觀ず視ざりき。所以者何。尊重定・守護定を以ての故に。その時世尊無量百千の衆中に於て手長者を咨嗟し稱歎したまひぬ、『手長者に七未曾有法有り。彼の手長者、我爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已れば、卽ち坐より起ち我が爲に禮を作し繞三匝し去りて、その家に還歸し、外門に到り已りて若し人有れば、盡く爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、中門・內門及び入りて內に在りて若し人有れば、盡く爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、堂に昇り床を敷きて結跏趺坐し、心慈と俱にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心慈と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲喜「亦然り」。心捨と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。今三十三天彼の爲に法堂に集在し手長者を咨嗟し稱歎す、大善利有り大功德有り。所以者何。諸賢、彼の手長者、佛爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りたまへば、卽ち坐より起ち、佛の爲に禮を作し繞三匝して去り、その家に還歸し外門に到り已りて、若し人有れば盡く爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、中門・內門及び入りて內に在りて若し人有れば、盡く爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、堂に昇り床を敷きて結加趺坐し、心慈と俱にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心慈と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして、善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如

たまふや、即ち坐より起ち佛の爲に禮を作し、繞三匝して去り、その家に還歸し外門に到り已りて、若し人有れば盡く爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、中門・內門及び入りて內に在りて若し人有れば盡く爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、堂に昇り床を敷きて結跏趺坐し、心慈と俱にして一方に遍滿し、成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心慈と俱にして、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊びぬ。是の如く悲喜「亦然り」。心捨と俱にして、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊びぬ。その時三十三天「の衆」法堂に集在し手長者を咨嗟し稱歎しぬ。諸賢、手長者大善利有り大功德有り。所以者何。彼の手長者、佛爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りたまへば、即ち坐より起ち佛の爲に禮を作し、繞三匝して去り、その家に還歸し、外門に到り已りて若し人有れば盡く爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、中門・內門及び入りて內に在りて若し人有れば、盡く爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、堂に昇り床を敷きて結跏趺坐し、心慈と俱にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心慈と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲喜「亦然り」。心捨と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶ』。こゝに於て[七]毘沙門大天王色像巍々光耀暐曄として、夜將に旦に向はんと「する時」、手長者の家に往詣し告げて曰く『長者、汝善利有り大功德有り。所以者何。今三十三天、長者の爲に法堂に集在し、手長者を咨嗟し稱歎す、大善利有り大功德有り。所以者何。諸賢、彼の手長者、佛爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りたまへば、即ち坐より起ち佛の爲に禮を作し、繞三匝して去りその家に還歸し、外門に到り已りて若し人有ればば盡く爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、中門・內門及び入りて內に在りて若し人有れば盡く

【七】毘沙門(Vessavana)多聞と譯す、Kuvera 倶吠羅ともいふ。四天王の中北方を護る神にして夜叉軍の主なり。

坐より起ち自ら澡水を行じ極淨美の種々豐饒なる食噉含消を以て自ら手もて斟酌し飽滿するを得しめぬ。食し訖りて器を收め澡水を行じ已りて、一小床を取り別坐して法を聽きぬ。尊者阿難彼の爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて坐より起ちて去りぬ。尊者阿難の所說是の如し。郁伽長者尊者阿難の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

四十、手長者經〔上〕第九[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛 阿邏鞞伽邏[二]に遊び 㲉林[三]中に在しぬ。その時 手長者[四]五百の大長者と俱に佛所に往詣し、稽首して足を禮し、却きて一面に坐しぬ。五百の長者も亦佛足を禮し、却きて一面に坐しぬ。世尊告げて曰はく『手長者、汝今この極めて大なる衆有り。長者、汝何の法を以てこの大衆を攝するや』。彼の時手長者白して曰く『世尊、謂く 四事攝[五]有り世尊の說の如し。一は惠施、二は愛言、三は以利、四は等利なり。世尊、我これを以て大衆を攝し、或は惠施を以てし、或は愛言を以てし、或は利を以てし、或は等利を以てす』。世尊歎じて曰はく『善き哉、善き哉、手長者、汝能く如法を以て大衆を攝し、又如門を以て大衆を攝し、如因緣を以て大衆を攝す。[六]手長者、若し過去に沙門・梵志有りて如法を以て大衆を攝せば、彼の一切卽ちこの四事攝にして中に於て或は餘有り。手長者、若し未來の沙門梵志有りて如法を以て大衆を攝せば、彼の一切卽ちこの四事攝にして中に於て或は餘有り。手長者、若し現在の沙門梵志有りて如法を以て大衆を攝せば、彼の一切卽ちこの四事攝にして中に於て或は餘有り』。こゝに於て世尊手長者の爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめたまひ、無量の方便もて彼の爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて默然として住したまひぬ。こゝに於て手長者は、佛ために說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已り

【一】 A. iv 218

【二】 阿邏鞞伽邏(Āḷavi)。

【三】 㲉林 (Aggāḷava Cetiya)。

【四】 手長者(Hatthaka)。

【五】 四事攝 (Cattāri saṅgahavatthūni)。(一)惠施、財施・法施の二種あり、一は物質的の施、一は精神的の施なり。(二)愛言、粗語の反對にして耳障りよき言語。(三) 利行、衆生のために利益ある行ひ。(四)同事、衆生と所作を同じくするをいふ。

【六】 巴利文「手〔長者〕よ、過去世に於て大集を攝したるものは彼等は總て同じくこの四攝法を以て大集を攝しぬ。」

(2)尊者阿難、我に但この法有るのみにあらず。尊者阿難、我僧園に詣る時、若し初めに一比丘を見れば、すなはち爲に禮を作し、若し彼の比丘經行すれば我も亦隨ひて經行し、若し彼坐せば我も亦一面に於て坐し、坐し已りて法を聽く。彼の尊我が爲に說法せば、我も亦彼の尊の爲に說法し、彼の尊我が事を問へば、我も亦彼の尊の事を問ひ、彼の尊我が事に答ふれば我も亦彼の尊の事に答ふ。尊者阿難、我未だ曾て上中下長老上尊比丘を輕慢せしことを憶はず。尊者阿難、我にこの法有り』。尊者阿難歎じて曰く『長者、若しこの法有れば甚奇甚特なり』。『また次に(3)尊者阿難、我に但この法有るのみにあらず。尊者阿難、我比丘衆に在りて布施を行ずる時、天虛空に住して我に告げて曰く、長者、こはこれ阿羅訶なり、こはこれ向阿羅訶なり、こはこれ阿那含なり、こはこれ向阿那含なり、こはこれ斯陀含なり、こはこれ向斯陀含なり、こはこれ須陀洹なりこはこれ向須陀洹なり、こはこれ精進なり、こは不精進なりと。尊者阿難、我比丘衆に施す時未だ曾て分別の意有りしを憶はず。尊者阿難、我にこの法有り』。尊者阿難歎じて曰く『長者、若しこの法有れば甚奇甚特なり』。『また次に(4)尊者阿難、我に但この法有るのみにあらず。尊者阿難、我比丘衆に在りて布施を行ずる時天虛空に住して我に告げて曰く『長者、如來・無所著・等正覺・世尊善く說法したまひ、六如來聖衆善く趣向する有りと。我彼の天の信に從はず、彼の欲樂に從はず、彼の所聞に從はず、但我自ら淨智有りて如來・無所著・等正覺・世尊善く說法したまひ、如來聖衆善く趣向する有るを知りぬ。尊者阿難、我にこの法有り』。尊者阿難歎じて曰く『長者、若しこの法有れば甚奇甚特なり』。『また次に(5)—(8)尊者阿難、我に但この法有るのみにあらず。尊者阿難、七我欲を離れ惡不善の法を離れ第四禪を得るに至り成就して遊ぶ。尊者阿難、我にこの法有り』。尊者阿難歎じて曰く『長者、若しこの法有れば甚奇甚特なり』。こゝに於て郁伽長者白して曰く『尊者阿難、願はくはこゝに在りて食せよ』。尊者阿難郁伽長者の爲の故に默然として請を受けぬ。郁伽長者、阿難尊者の默然として受けしを知り已りて卽ち

【六】「郁伽經」上の註を見よ。

【七】「欲を離れ惡不善の法を離る」は初禪にして、更に二禪・三禪を經て、四禪に及ぶなり。詳しくは一卷「晝度樹經」の註を見よ。

し、遠來の客に食を與へ、行人・病人・瞻病者に食を與へ、常に粥食を設け、常に飯食を設け、僧園を守る人に供給し、常に二十衆を食に請し、五日都て比丘衆を食に請し、是の如き大施を施設し、また海中に於て一船有りて滿貨を載せ還り、價直百千一時に沒失しぬ。長者、止むべし。また布施すること勿れ。長者、後に自ら當に知るべし』。長者白して曰く『尊者阿難、これ誰の語と爲すや』。尊者阿難、答へて曰く『長者、我比丘衆の語を宣べぬ』。長者白して曰く『若し尊者阿難比丘衆の語を宣べば、また論ずる所無し。若し自ら語らば或は能く大不喜を致さん。尊者阿難、若し我是の如く捨與し是の如く惠施し、一切の財物皆悉く竭き盡くるも、但我が願をして滿ちて[二]轉輪王の願の如くならしめよ』。尊者阿難、問ひて曰く『長者、云何が轉輪王の願なる』。長者答へて曰く『(1)尊者阿難、村中の貧人この念を作す、我をして村中に於て最も富ましめよと。即ちこれ彼の願なり。村中の富人この念を作す、我をしてこの邑中に於て最も富ましめよと。即ちこれ彼の願なり。邑中の富人この念を作す、我をして城中に於て最も富ましめよと。即ちこれ彼の願なり。城中の富人この念を作す、我をして城中に於て[三]宗正と作らしめよと。即ちこれ彼の願なり。城中の宗正この念を作す、我をして[四]國相と作らしめよと。即ちこれ彼の願なり。國相この念を作す、我をして[五]小王と作さしめよと。即ちこれ彼の願なり。小王この念を作す、我をして轉輪王と作らしめよと。即ちこれ彼の願なり。轉輪王この念を作す、我をして族姓子の所爲の如く、鬚髪を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道する者たらしめよ、謂く無上の梵行訖り、我をして現法中に於て、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち、所作已に辦じ更に有を受けずと、如眞を知らしめよと。即ちこれ彼の願なり。尊者阿難、若し我是の如く捨與し是の如く惠施し一切の財物皆悉く竭き盡くるも但我が願をして滿ちて轉輪王の願の如くならしめよ。尊者阿難、我にこの法有り』。尊者阿難、歎じて曰く『長者、若しこの法有らば甚奇甚特なり』。『また次に

【二】轉輪王（Cakkavatti-rāja）。世界統一の王者なり。
【三】一種の官職（？）。
【四】國相（Amacca）大臣。
【五】小王（Yuvarājā）副王。

客に語げん、長者、止むべし、また布施すること勿れ。長者、後に自ら當に知るべしと。諸賢、我等共に尊者阿難の所に往詣しかくの如き事を說かん』。こゝに於て衆多の上尊長老比丘、尊者阿難の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し語げて曰く『賢者阿難、知るや不や、郁伽長者是の如き大施を施設す。謂く遠來の客に食を與へ、行人・病人・瞻病者に食を與へ、常に粥食を設け、常に飯食を設け、僧園を守る人に供給し、常に二十衆を食に請し、五日都て比丘衆を食に請し、是の如き大施を施設す。また海中に於て一舶船有り滿貨を載せて還り。價直百千一時に沒失しぬ。我等共にこの議を作しぬ、誰か能く往きて郁伽長者に語げて而もこの語を作すや、長者、止むべし。また布施すること勿れ。長者、後に自ら當に知るべしと。またこの念を作しぬ、尊者阿難はこれ佛の侍者にして世尊の敎を受け佛に稱譽せられ、及び諸の智梵行の人[一]に稱譽せらる」。尊者阿難能く往きて郁伽長者に語げん、長者、止むべし。また布施すること勿れ。長者、後に自ら當に知るべしと。賢者阿難、郁伽長者に往詣して彼に語げて曰ふべし。長者、止むべし。また布施すること勿れ、長者、後に自ら當に知るべし』。と尊者阿難諸の長老上尊比丘に白して曰く『諸尊、郁伽長者はその性嚴整なり。若し我自ら語ることを爲さば儻ち能く大不喜を致さん。諸尊、我誰の爲にか語げん』。諸の長老上尊比丘答へて曰く『賢者、比丘衆の語と稱せよ。比丘衆の語と稱し已らば彼所言無けん』。尊者阿難すなはち默然として諸の長老上尊比丘の命を受けぬ。こゝに於て諸の長老上尊比丘、尊者阿難默然として許せしことを知り已りて、卽ち坐より起ち尊者阿難を繞りて、各自ら還り去りぬ。尊者阿難夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持して郁伽長者の家に往詣しぬ。郁伽長者遙に尊者阿難の來るを見、卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を尊者阿難に向け白して曰く『善く來れり尊者阿難、尊者阿難久しくこゝに來らず。願はくはこの床に坐せよ』。尊者阿難卽ちその床に坐しぬ。郁伽長者尊者阿難の足を禮し、却きて一面に坐しぬ。尊者阿難告げて曰く『長者、知るや不や、長者是の如き大施を施設

【一】これを誰の語として先方へ傳へようか。

は尊、こゝに在りて食せよ』。比丘郁伽長者の爲の故に默然として請を受けぬ。郁伽長者彼の比丘默然として受けしを知り已りて卽ち坐より起ち自ら澡水を行じ極淨美の種々豐饒の食噉含消を以て自ら手もて斟酌して飽滿するを得しめぬ。食し訖り器を收め澡水を行じ竟りて一小床を持して別坐にて法を聽きぬ。比丘長者の爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて坐より起ち、去りて佛所に往詣し稽首して足を禮し却きて一面に坐し、謂く郁迦長者と本共に論ぜる所を盡く佛に向ひて廣說しぬ。こゝに於て世尊諸の比丘に告げたまはく『我こゝを以ての故に郁伽長者を咨嗟し稱歎し八未曾有法有りと「說く」』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

三十九、郁伽長者經「下」第八

我が聞きしこと是の如し。ある時佛般涅槃の後久しからずして、衆多の上尊長老比丘鞞舍離に遊び獼猴水邊の高樓臺觀に在りき。その時郁伽長者是の如き大施を施設しぬ。謂く遠來の客に食を與へ、行人・病人・瞻病者に食を與へ常に粥食を設け、常に飯食を設け僧園を守る人に供給し、常に二十衆を食に請し、五日都て比丘衆を食に請し、是の如き大施を施設しぬ。また海中に於て一舶船有り滿貨を載せて還り、價直百千一時に沒失しぬ。衆多の上尊長老比丘郁伽長者是の如き大施を施設すと聞きぬ『謂く遠來の客に食を與へ、行人・病人・瞻病者に食を與へ常に粥食を設け、常に飯食を設け僧園を守る人に供給し、常に二十衆を食に請し五日都て比丘衆を食に請す』と。聞き已りて共にこの議を作しぬ『諸賢、誰か能く往きて郁伽長者に告ぐるや。長者、止むべし。また布施すること勿れ、長者、後に自ら當に知るべし』と。彼この念を作しぬ『尊者阿難はこれ佛の侍者にして、世尊の敎を受け佛に稱譽せられ、及び諸の智梵行の人に「稱譽せらる」。尊者阿難能く往きて郁伽長

を與へ、與ふる時に當りて都て悔心無し。尊者、我にこの法有り』。比丘歎じて曰く『長者、若しこの法有れば甚奇甚特なり』。『尊者、我に但この法有るのみにあらず。(5)また次に尊者、我[二]衆の園に詣る時若し初めて一比丘を見れば、すなはち禮を作し、若し彼の比丘經行すれば我も亦隨ひて經行し、若し彼坐すれば我も亦一面に於て坐し、坐し已りて法を聽く、彼の尊我が爲に說法せば、我も亦彼の尊の爲に說法し、彼の尊我が事を問へば、我も亦彼の尊の事を問ひ、彼の尊我が事に答ふれば我も亦彼の尊の事に答ふ。尊者、我未だ曾て上中下長老上尊比丘を輕慢せるを憶はず。尊者、我にこの法有り』。比丘歎じて曰く『長者、若しこの法有れば甚奇甚特なり』。『尊者、我に但この法有るのみにあらず。(6)また次に尊者、我比丘衆に在りて布施を行ぜる時、天虛空に住して、而も我に告げて曰く、長者、こはこれ阿羅訶なり、こはこれ向阿羅訶なり、こはこれ阿那含なりこはこれ向阿那含なり、こはこれ斯陀含なりこはこれ向斯陀含なり、こはこれ須陀洹なりこはこれ向須陀洹なり。こは精進なりこは不精進なりと。尊者、我比丘衆に施せる時未だ曾て分別意有りしを憶はず。尊者、我にこの法有り』。比丘歎じて曰く『長者、若しこの法有れば甚奇甚特なり』。『尊者、我に但この法有るのみにあらず。(7)また次に尊者、我比丘衆に在りて布施を行ぜる時、天有り虛空中に住して而も我に告げて曰く、長者、如來・無所著・等正覺・世尊善く說法したまひ、[三]如來の聖衆善く趣向する有りと。尊者、我彼の天の信に從はず彼の欲樂に從はず、彼の所聞に從はず、但我自ら淨智有りて如來・無所著・等正覺・世尊善く說法し如來聖衆善く趣向する有るを知る。尊者我この法有り』。比丘歎じて曰く『長者、若しこの法有れば甚奇甚特なり』。『尊者、我に但この法有るのみならず、また次に、尊者、謂く佛の所說は五下分結にして貪欲・瞋恚・身見・戒・取・疑なり。我この五を見、一として盡きずして我を縛してこの世間に還り胎中に入らしむる無し。尊者、我にこの法有り』。比丘歎じて曰く『長者、若しこの法有れば甚奇甚特なり』。郁伽長者比丘に白して曰く『願はく

【二】衆の園。僧伽藍摩(Saṅghārāma)即ち比丘衆の住める園林。

【三】如來の聖衆とは、四向四果の弟子たちをいふ、涅槃の道に於いてよく趣向するの意なり。

我亦是の如く卽ち坐中に於て四聖諦苦習滅道を見ぬ。尊者、我にこの法有り』。比丘歎じて曰く『長者、若しこの法有れば甚奇甚特なり』。『尊者、我に但この法有るのみにあらず。(3)また次に尊者、我法を見、法を得、白淨法を覺り、疑を斷じ惑を度し更に餘尊無くまた他に從はず、猶豫有ること無く、已に果證に住し世尊の法に於て無所畏を得ぬ。尊者、我その時卽ち坐より起ち、佛足に稽首し、世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん。世尊、我今日より世尊に從ひて自ら形壽を盡し梵行を首とせる五戒を受持せんと。尊者、若し、我世尊に從ひて自ら形壽を盡し梵行を首とせる五戒を受持してより未だ曾て己戒を犯せるを知らず。尊者、我にこの法有り』。比丘歎じて曰く『長者、若しこの法有れば甚奇甚特なり』。『尊者、我に但この法有るのみにあらず。(4)また次に尊者、我その時世尊に從ひて自ら形壽を盡し梵行を首とせる五戒を受持し已りて佛足に稽首し繞三匝して去り、[己]の家に還歸し諸の婦女を集め、集め已りて語げて曰く、汝等知るや不や。我世尊に從ひて自ら形壽を盡し、梵行を首とせる五戒を受持しぬ。汝等、こゝに住するを得んと欲する者は、すなはちこゝに住して施を行じ福を作すべし。若し住するを欲せざる者は、各自ら還歸せよ。若し汝嫁ぐを得んと欲せば我當に汝を嫁がしむべしと。こゝに於て最大夫人來りて我に白して曰く、若し尊、佛に從ひて自ら形壽を盡し、梵行を首とせる五戒を受持せば、すなはち我を以て彼の某甲に與ふべしと。尊者、我その時卽ち爲に彼の人を呼び、左手を以て大夫人の臂を執り、右手に金澡罐を執りて彼の人に語げて曰く、我今大夫人を以て汝に與へて婦と作さんと。彼の人聞き已りてすなはち大いに恐怖し身毛皆竪ちて我に白して曰く、長者、我を殺さんと欲するや、長者、我を殺さんと欲するやと。尊者、我彼に語げて曰く、汝を殺すを欲せず。然も我佛に從ひて自ら形壽を盡し梵行を首とせる五戒を受持しぬ。この故に我最大夫人を以て汝に與へて婦と作すのみと。尊者、我已に大夫人

り起ち偏に著衣を袒ぎ、叉手を比丘に向け白して曰く『尊者善く來りぬ。尊者久しくこゝに來らず。願はくはこの床に坐せよ』彼の時比丘即ちその床に坐しぬ。郁伽長者比丘の足を禮し却きて一面に坐しぬ。比丘告げて曰く『長者、汝善利有り大功德有り。所以者何。謂く世尊汝の爲に、無量百千の大衆に圍繞せられ、中に於て郁伽長者を咨嗟し稱歎したまひぬ、八未曾有法有りと。長者、汝何の法有りや』郁伽長者比丘に答へて曰く『尊者、世尊初より異を說きたまはず。然も我世尊何の因の爲に說きたまひしやを知らず。但尊者聽け。謂く我に法有り。(1)ある時世尊鞞舍離に遊び大林中に住したまひぬ。尊者、我その時に於て唯婦女のみ侍し從ひ我最も前に在りて鞞舍離を出で鞞舍離と大林との中間に於て、唯女妓の娛樂を作して王の如し。尊者、我その時に於て飲酒大醉し、諸の婦女を捨て大林中に至りぬ。尊者、我時に大醉し遙に世尊の林樹の間に在し、端正姝好猶ほ星中の月のごとく、光耀暐曄として晃金山の若く相好具足し威神巍々たり、諸根寂定にして、蔽礙有ること無く、成就し調御し息心して靜默なるを見ぬ。我佛を見已り即時に醉醒めぬ。尊者、我にこの法有り』比丘歎じて曰く『長者、若しこの法有らば甚奇甚特なり』『尊者、我に但この法有るのみにあらず。(2)また次に尊者、我醉醒め已りて、すなはち佛に往詣し、稽首して足を禮し、却きて一面に坐しぬ。世尊我が爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめたまひ、無量の方便もて我が爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、諸佛の法の如く先づ端正の法を說きたまひ、聞者を歡悅「せしめたまひぬ」。謂く施を說き戒を說き生天の法を說き、欲を毀呰して災患と爲し、生死を穢と爲し、無欲を稱歎して妙道品白淨と爲すと。世尊我が爲に是の如き法を說き已り、佛我に歡喜心・具足心・柔軟心・堪耐心・勝上心・一向心・無疑心・無蓋心有り、能有り力有りて、正法を受くるに堪ふるを知りたまひ、謂く諸佛正法の要を說きたまふ如く、世尊即ち我が爲に苦習滅道を說きたまひぬ。我その時即ち坐中に於て四聖諦苦習滅道を見、猶ほ白素の染めて色と爲し易きが如く、尊者、

【一】以下郁伽長者の八未曾有法を說く。

に苦習滅道を說きたまひぬ。彼の時郁伽長者卽ち坐中に於て四聖諦苦習滅道を見、猶ほ白素の染めて色と爲し易きが如し。郁伽長者も亦復是の如く、卽ち坐中に於て四聖諦苦習滅道を見ぬ。こゝに於て郁伽長者已に法を見、法を得、白淨法を覺り、疑を斷じ惑を度し更に餘尊無く、また他に從はず、猶豫有ること無く、已に果證に住し、世尊の法に於て無所畏を得て卽ち坐より起ち佛の爲に禮を作し白して曰く『世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん。世尊、我今日より世尊に從ひて自ら形壽を盡し[七]梵行を首とせる五戒を受持せん』郁伽長者世尊に從ひて自ら形壽を盡し梵行を首とせる五戒を受持し已りて佛足に稽首し繞三匝して去り、その家に還歸し卽ち[八]諸の婦人を集め、集め已りて語げて曰く『汝等知るや不や。我世尊に從ひて自ら形壽を盡し梵行を首とせる五戒を受持しぬ。汝等、こゝに住するを得んと欲する者は、すなはちこゝに住して施を行じ福を作すべし。若し住するを欲せざる者は各自ら還歸せよ。若し汝嫁ぐを得んと欲せば我當に汝を嫁がしむべし』。こゝに於て[九]最大夫人郁伽長者に白しぬ『若し尊、佛に從ひて自ら形壽を盡し梵行を首とせる五戒を受持せば、すなはち我を以て彼の某甲に與ふべし』。郁伽長者卽ち爲に彼の人を呼び、左手を以て大夫人の臂を執り、右手に金澡罐を執り彼の人に語げて曰く『我今大夫人を以て汝に與へて婦と作さん』。彼の人聞き已りてすなはち大いに恐怖し身毛皆竪ち、郁伽長者に白しぬ『長者、我を殺さんと欲するや、我を殺さんと欲するや』。長者答へて曰く『汝を殺さず。然も我佛に從ひて自ら形壽を盡し梵行を首とせる五戒を受持しぬ。この故に我最大夫人を以て汝に與へて婦と作すのみ』。郁伽長者已に大夫人を與へ、與ふる時に當りて都て悔心無し。この時世尊無量百千の大衆に圍繞せられ、中に於て郁伽長者を[一〇]咨嗟し稱歎したまひぬ、郁伽長者八未曾有法有りと。こゝに於て一比丘夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持して郁伽長者の家に往詣しぬ。郁伽長者遙に比丘の來るを見て卽ち坐よ

【七】 Brahmacariyapañcamāni sikkhāpadāni 梵行を第五とせる戒。通常五戒には單に邪婬卽ち不法の性交を誡しむるに止まれど、この場合はこれに代ふるに梵行卽ち淨行を以てして性交を全く斷つことを條件とす。

【八】 巴利文に四人の夫人ありしことを記す。

【九】 最上位の夫人。

【一〇】 なげきほむること。

目乾連、若し我が正法律は利利種の族姓子、鬚髮を剃除し袈裟衣を著し、至信に家を捨て、家無くして學道し、移動せずして心解脫し自ら作證し成就して遊ぶ。大目乾連、移動せずして心解脫するも、我が正法律中に於て增無く減無し。是の如く梵志種・居士種・工師種の族姓子鬚髮を剃除し袈裟衣を著し、至信に家を捨て、家無くして學道し、移動せずして心解脫し自ら作證し成就して遊ぶ。大目乾連、移動せずして心解脫するも我が正法律中に於て增無く減無くんば、これを我が正法律中の未曾有法と謂ふ』。佛說是の如し。尊者大目乾連及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

三十八、[一]郁伽長者經[上]第七

我が聞きしこと是の如し。ある時佛鞞舍離に遊び大林中に在しぬ。その時 [二]郁伽長者唯婦女のみ侍し從ひ諸女の前に在り、鞞舍離より出で鞞舍離と大林との中間に於て、[三]唯女妓の娛樂を作して王の如し。こゝに於て郁伽長者飮酒大醉し、諸の婦女を捨て大林中に至りぬ。郁伽長者飮酒大醉し、遙に世尊の林樹の間に在し、端正姝好猶ほ星中の月のごとく、光耀暐曄として晃金山の若く、相好具足し威神巍巍たり、諸根寂定にして蔽礙有ること無く、成就し調御し息心して靜默なるを見ぬ。彼佛を見已りて卽時に醉醒めぬ。郁伽長者醉既に醒め已りて、すなはち佛に往詣し、稽首して足を禮し却きて一面に坐しぬ。その時世尊彼の爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、諸佛の法の如く先づ端正の法を說きたまひ、聞者を歡悅[せしめたまひぬ]。謂く [四]施を說き戒を說き生天の法を說き、欲を毀呰して災患と爲し、生死を穢と爲し無欲を稱歎して妙道品白淨と爲すと。世尊彼の爲に是の如き法を說き已り、佛 [五]歡喜心・具足心・柔軟心・堪耐心・勝上心・一向心・無疑心・無蓋心有り、能有り力有りて正法を受くるに堪ふるを知りたまひ、謂く [六]諸佛正法の要を說きたまふ如く、世尊卽ち彼の爲

【一】 A. iv. 208, 212

【二】 郁伽(Ugga)。巴利文には長者に非ずして居士なり、巴利文にはこれに相當するもの二經あり、一を「毘舍離住」とし、一を「象村住」とす。

【三】 唯婦人のみにて男子を交へざる樂師又は舞師。

【四】 巴利文「布施の話、持戒の話、生天の話、諸欲の災患、卑陋、汚穢と出離の效果とを說きたまへり」。

【五】 巴利文 Kallacitta 具足心、Muducitta 柔軟心、Vinīvaraṇacitta 無蓋心、Udaggacitta 勝上心、Pasannacitta 無疑心の五を擧ぐ。

【六】 諸佛正法(Buddhānaṁ sāmukkaṁsikā dhammadesanā)。

麗・帝麗伽羅・提帝麗伽羅なるが如く、また次に大海中は甚奇甚特にして衆生の身體百由延有り二百由延有り三百由延有り七百由延に至る有り、身皆海中に居る「が如く」、大目乾連、我が正法律も亦復是の如く聖衆大神皆その中に居り、大神の名は謂く[一五]阿羅訶向・阿羅訶・阿那含向・阿那含・斯陀含向・斯陀含・須陀洹向・須陀洹なり。大目乾連、若し我が正法律は聖衆大神皆その中に居り、大神の名は謂く阿羅訶向・阿羅訶・阿那含向・阿那含・斯陀含向・斯陀含・須陀洹向・須陀洹ならば、これを我が正法律中の未曾有法と謂ふ。(7)また次に大目乾連、大海は清淨にして死屍を受けず、若し命終る者有れば夜を過ぎて風すなはち吹きて岸上に著くるが如く、大目乾連、我が正法律も亦復是の如く聖衆清淨にして死屍を受けず、若し不精進の人惡生ずる有り、非梵行にして梵行と稱し、非沙門にして沙門と稱せば、彼隨ひて聖衆の中に在りと雖も然も聖衆を去ること遠く、聖衆亦復彼を去離すること遠し。大目乾連、若し我が正法律は聖衆清淨にして死屍を受けず、若し不精進の人惡生ずる有り、非梵行にして梵行と稱し、非沙門にして沙門と稱せば彼隨ひて聖衆の中に在りと雖も、然も聖衆を去ること遠く聖衆亦復彼を去離すること遠ければ、これを我が正法律中の未曾有法と謂ふ。(8)また次に大目乾連、彼の大海は、閻浮洲中に[一六]五大河有り、一は曰く恒伽・二は曰く搖尤那・三は曰く舍牢浮・四は曰く阿夷羅婆提・五は曰く摩企にして皆大海に入り、及び大海中に龍水空より雨ふり墮ち滯りて[一七]車釧の如くなるも、この一切の水大海をして增減有らしむること能はざるが如く、大目乾連、我が正法律も亦復是の如く、刹利種の族姓子鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け、至信に家を捨て、家無くして學道し、移動せずして心解脫し、自ら作證し成就して遊ぶ。大目乾連、移動せずして心解脫するも、我が正法律中に於て增無く減無し。是の如く梵志種・居士種・工師種の族姓子鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て、家無くして學道し、移動せずして心解脫し、自ら作證し成就して遊ぶ。大目乾連、移動せずして心解脫するも、我が正法律中に於て增無く減無し。大

[一五] 八卷「阿修羅經」註を見よ。

[一六] 五大河に就ては、八卷「阿修羅經」註を見よ。

[一七] 宋・元・明三本には車軸に作る、これ正しきが如し。

彼の大海は下より上に至りて、周廻漸く廣く均調に轉じて上は以て岸を成し、その水常に滿ちて未だ曾て流出せざるが如く。大目乾連、我が[一二]正法律も亦復是の如く[一三]漸く作し漸く學び漸く盡し漸く教ふ。大目乾連、若し我が正法律、漸く作し漸く學び漸く盡し漸く教へば、之を我が正法律中の未曾有法と謂ふ。(2)また次に大目乾連、大海は潮未だ曾て時を失せざるが如く、大目乾連、我が正法律も亦復是の如く、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の爲に禁戒を施設し、諸の族姓子乃ち命盡くるに至るまで終に戒を犯さず。大目乾連、若し我が正法律、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の爲に禁戒を施設し、諸の族姓子乃ち命盡くるに至るまで終に戒を犯さゞれば、これを我が正法律中の未曾有法と謂ふ。(3)また次に大目乾連、大海の水甚だ深くして底無く、極めて廣くして邊無きが如く、大目乾連、我が正法律も亦復是の如く、諸法甚だ深く、甚だ深くして底無く、極めて廣くして邊無し。大目乾連、若し我が正法律は諸法甚だ深く、甚だ深くして底無く極めて廣くして邊無くば、これを我が正法律中の未曾有法と謂ふ。(4)また次に大目乾連、海水は鹹くして皆同一味なるが如く、大目乾連、我が正法律も亦復是の如く、無欲を味と爲し覺味・息味及び道味なり。大目乾連、若し我が正法律は無欲を味と爲し、覺味・息味及び道味ならば、これを我が正法律中の未曾有法と謂ふ。(5)また次に大目乾連、大海中は多く珍寶あり、無量の瑋異・種々の珍奇その中に充滿す、珍寶の名は謂く金・銀・水精・琉璃・摩尼・眞珠・碧玉・白珂・車渠・珊瑚・虎珀・馬瑙・瑇瑁・赤石・琁珠なるが如、く大目乾連、我が正法律も亦復是の如く多く珍寶あり、無量の瑋異・種々の珍琦その中に充滿す、珍寶の名は謂く[一三]四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺支・八支聖道なり。大目乾連、若し我が正法律は多く珍寶あり、無量の瑋異・種々の珍琦その中に充滿す、珍寶の名は謂く四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺支・八支聖道ならば、これを我が正法律中の未曾有法と謂ふ。(6)また次に大目乾連、大海中は大神の所居にして、大神の名は謂く[一四]阿修羅・乾沓惒・羅刹魚・摩竭・龜・鼉・婆留泥・帝

【一二】八巻「薄拘羅經」註を見よ。
【一三】漸學(Anupubbasikkha)漸作(Anupubbakiriya)。漸行(Anupubbapatipadā)。
【一三】以下「三十七助道品」の説明は八巻「阿修羅經」註に出づ。
【一四】八巻「阿修羅經」註を見よ。

たまひぬ。彼の一比丘再び坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、初夜已に過ぎ、中夜將に訖らんとす。佛及び比丘衆集坐してより來た久し。唯願はくは世尊、從解脫を說きたまへ』。世尊亦再び默然として答へたまはず。こゝに於て世尊また後夜に至るまで默然として坐したまひぬ。彼の一比丘三たび坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊〔六〕初夜既に過ぎ中夜また訖り後夜盡くるに垂んとし將に〔七〕欲明に向はんとし〔八〕明出づること久しからざらん。佛及び比丘衆集坐すること極めて久し。唯願はくは世尊、從解脫を說きたまへ』。その時世尊彼の比丘に告げたまはく『この衆中に於て一比丘有り已に不淨たり』。彼の時尊者大目乾連亦衆中に在りき。こゝに於て尊者大目乾連すなはちこの念を作しき『世尊何の比丘の爲に、而もこの衆中に一比丘有り已に不淨たりと說きたまふや。我寧ろ〔九〕如其像定に入り、如其像定他心の智を以て衆の心を觀察すべし』。尊者大目乾連即ち如其像定に入り、如其像定他心の智を以て衆の心を觀察し、尊者大目乾連すなはち世尊の比丘の爲にこの衆中に一比丘有り已に不淨たりと說きたまへる所を知りぬ。こゝに於て尊者大目乾連即ち定より起ちて彼の比丘の前に至り臂を牽きて將き出し門を開きて外に置き、『癡人遠く去れ、こゝに於て住すること莫れ。また比丘衆と會ふことを得ざれ、今より已去[汝は]これ比丘に非ず』。[とて]門を閉ぢ鑰を下し還りて佛所に詣り、佛足を稽首し却きて一面に坐して白して曰く『世尊、比丘の爲にこの衆中に一比丘有り已に不淨たりと說きたまひし所は我已に逐ひ出しぬ。世尊、初夜既に過ぎ中夜また訖り後夜盡くるに垂んとし、將に欲明に向はんとし明出づること久しからざらん。佛及び比丘衆集坐すること極めて久し。唯願はくは世尊、從解脫を說きたまへ』。世尊告げて曰はく『大目乾連、彼の愚癡の人當に大罪を得べし。世尊及び比丘衆を觸嬈しぬ。大目乾連、若使如來不淨衆に在りて從解脫を說かば、彼の人則便ち頭破れて七分せん。この故に大目乾連、汝等今より已後從解脫を說け、如來また從解脫を說かず。所以者何。〔一〇〕(1)大目乾連、

の守るべき戒條を集めたるもの。

【五】 現今の午後六時より午前六時まで十二時間を三分し、午後六時より十時までを初夜、十時より午前二時までを中夜、又は半夜、二時より六時までを後夜といへり。

【六】 巴利文「大德よ、夜は進み、後分は過ぎ去り、日昇らんとして喜ばしき夜色見ゆ」。

【七】 欲明(Nandimukhi ratti)「喜びの顏せる夜」、夜の明方の目と心を喜ばしめる光景を形容したる語。

【八】 太陽も遠からずして昇るべし。

【九】 巴利文「一時に尊者大目乾連は、一切具足の比丘衆をば心を以て心を捕へて思惟しぬ」。

【一〇】 以下八種の未曾有法を說く。

儀禮節も亦然り。若し彼義を問へば我彼に義を答へ、また次に我彼の爲に說法し、勸發・渴仰・成就歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて卽ち彼處に沒す。我既に沒し已れば彼「我が」誰なるを知らず、天と爲すや異天と爲すやと。阿難、是の如く甚奇甚特なり。如來・無所著・等正覺功德を成就し未曾有法を得。是の如く[五]三十三天・焰摩天・兜率哆天・化樂天・他化樂天・[六]梵身天・梵富樓天・[七]少光天・無量光天・晃昱天・少淨天・無量淨天・遍淨天・無罣礙天・受福天・果實天・無煩天・無熱天・善見天・善現天「亦然り」。阿難、我無量百千の色究竟天衆に往詣し共に坐して談論し彼の意共に坐定すべからしめ已りて彼の色像の如く我が色像も亦然り、彼の音聲の如く我が音聲も亦然り、彼の威儀禮節の如く我が威儀禮節も亦然り。若し彼義を問へば我彼に義を答へ、また次に我彼の爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ無量の方便もて彼の爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて卽ち彼處に沒す。我既に沒し已れば彼「我が」誰なりやを知らず、天と爲すや異天と爲すやと。阿難、是の如く甚奇甚特なり。如來・無所著・等正覺功德を成就し未曾有法を得』。佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

三十七、瞻波經第六[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]瞻波に遊び[三]恒伽池邊に在しぬ。その時世尊、月の十五日に[四]從解脫を說きたまへる時、比丘衆の前に於て座を敷きて坐したまひぬ。世尊坐し已りて卽便ち定に入り他心智を以て衆の心を觀察したまひ、衆の心を觀じ已りて[五]初夜竟るに至るまで、默然として坐したまひぬ。こゝに於て一比丘有り卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、初夜已に訖りぬ。佛及び比丘衆集坐してより來た久し。唯願はくは世尊、從解脫を說きたまへ』。その時世尊默然として答へたまはず。こゝに於て世尊また中夜に至るまで默然として坐し

【五】Tāvatiṁsā devā, Yāmā, Tusitā, Nimmānarati, Paranimmitavasavatti 四王天とこの五を併せて六欲天といふ。
【六】Brahmakāyikā, Brahmapurohitā これに大梵天、Brahmā を加へて色界初禪の三天とす。
【七】Parittābhā, Appamāṇābhā, Ābhassarā を第二禪の三天とす。
【八】Parittasubhā, Appamāṇasubhā, Subhakiṇhā を第三禪の三天とす。
【九】Anabhrakāḥ(梵), Puṇyaprasavāḥ(梵), Vehapphalā, Avihā, Atappā, Sudassā, Sudassī の七及び Akaniṭṭhā 色究竟を四禪の八天とす。但巴利文献には初の二天なく後の六天のみなり。

【一】A. iv. 204, Vin. ii. 236. 「恒水經」、「法海經」、「海八德經」、「五分律」三八卷。
【二】瞻波(Campā)。占波、中印度にあり、恒河に臨める國にして、その都城をも同じく瞻波と名く。
【三】恒伽池。Gaggarā と呼ぶ蓮池の呼。
【四】從解脫(Pātimokkha)。波羅提木叉、別解脫又は處々解脫と譯す、比丘並に比丘尼

れに因るが故に、この地所欲に隨ひその意に隨ひて、擾れ復擾れ、震ひ復震ふ。これを第二の因緣、地をして大いに動かしめ、地大いに動く時、四面に大風起り四方の彗星出で、屋舍牆壁皆崩壞し盡くと謂ふ。(3)また次に阿難、若し如來久しからず、三月を過ぎ已りて當に般涅槃すべくば、これに由るが故に地をして大に動かしめ、地大に動く時四面に大風起り四方に彗星出で屋舍牆壁皆崩壞し盡く。これを第三の因緣、地をして大に動かしめ、地大に動く時、四面に大風起り四方の彗星出で、屋舍牆壁皆崩壞し盡くと謂ふ』。こゝに於て尊者阿難この語を聞き已りて、悲泣涕零し叉手を佛に向け白して曰く『世尊、甚奇甚特なり。如來・無所著・等正覺功德を成就し未曾有法を得たまふ。所以者何。謂く如來は久しからず、三月を過ぎ已りて當に般涅槃したまふべく、この時地をして大に動かしめ、地大に動く時、四面に大風起り四方の彗星出で、屋舍牆壁皆崩壞し盡きん』。世尊尊者阿難に語げて曰はく『是の如し阿難是の如し阿難、甚奇甚特なり。如來・無所著・等正覺功德を成就し未曾有法を得。所以者何。謂く如來久しからず、三月を過ぎ已りて當に般涅槃すべく。この時地をして大に動かしめ、地大に動く時、四面に大風起り四方の彗星出で、屋舍牆壁皆崩壞し盡く。また次に阿難、我無量百千の刹利衆に往詣し共に坐して談論し、彼の意共に坐定すべからしめ已りて、彼の色像の如く我が色像も亦然り、彼の音聲の如く我が音聲も亦然り、彼の威儀禮節の如く我が威儀禮節も亦然り。若し彼義を問はば我彼に義を答ふ。また次に我彼の爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて卽ち彼處に沒す。我既に沒し已れば彼「我が」誰なるを知らず、人と爲すや非人と爲すやと。阿難、是の如く甚奇甚特なり、如來・無所著・等正覺功德を成就し未曾有法を得。是の如く梵志衆・居士衆・沙門衆「も亦然り」。阿難、我無量百千の[四]四王天衆に往詣し共に坐して談論し、彼の意共に坐定すべからしめ已りて、彼の色像の如く我が色像も亦然り、彼の音聲の如く我が音聲も亦然り、彼の威儀禮節の如く我が威

【四】四天王衆 (Cātummahārājikā devā)。

三十六、地[一]動經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛金剛國の城を曰地と名くるに遊びたまひぬ。その時彼の地大いに動きぬ。地大いに動ける時、四面に大風起り、四方の彗星出で、屋舍牆壁皆崩壞し盡きぬ。ここに於て尊者阿難地大いに動き、地大いに動ける時四面に大風起り、四方の彗星出で、屋舍牆壁皆崩壞し盡きたるを見ぬ。尊者阿難見已りて恐怖し、擧身の毛堅ち佛所に往詣し、稽首して足を禮し却きて一面に住し、白して曰く『世尊、今地大いに動きぬ。地大いに動ける時、四面に大風起り四方の彗星出で、屋舍牆壁皆崩壞し盡きぬ』。こゝに於て世尊、尊者阿難に告げて曰はく『是の如し阿難、今地大いに動きぬ。是の如し阿難、地大いに動ける時、四面に大風起り四方の彗星出で、屋舍牆壁皆崩壞し盡きぬ』。尊者阿難白して曰く『世尊、幾[何]の因緣有りてか、地をして大に動ぜしめ、地大に動く時、四面に大風起り四方の彗星出で、屋舍牆壁皆崩壞し盡くるや』。世尊答へて曰はく『阿難、三つの因緣有りて地をして大に動かしめ、地大に動く時、四面に大風起り四方の彗星出で、屋舍牆壁皆崩壞し盡く。云何が三と爲す。(1)阿難、この地は水上に止まり水は風上に止まり風空に依る。阿難、時有りて空中に大風起る。風起れば則ち水擾る。水擾るれば則ち地動く。これを第一の因緣、地をして大に動かしめ、地大いに動く時、四面に大風起り四方の彗星出で、屋舍牆壁皆崩壞し盡くと謂ふ。(2)また次に阿難、比丘大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り[二]心自在如意足[あり]。彼地に於て小想を作し、水に於て無量想を作す。彼これに因るが故に、この地所欲に隨ひその意に隨ひて、擾れ復擾れ、震ひ復震ふ。[三]護比丘天も亦復是の如く、大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り心自在如意足あり。彼地に於て小想を作し、水に於て無量想を作す。彼こ

【一】 A. iv. 312(VIII. 70. 10) 「増一阿含」四二品の五。

【二】 或は「心、如意足に自在なり」。

【三】 その比丘を保護する天子。

比丘をして見已りて中に樂しましむと謂ふ。婆羅邏、意に於て云何。若し我が正法律中に八未曾有法有り、若し汝の大海中に八未曾有法有れば この二種の未曾有法何者か上と爲し勝と爲し妙と爲し最と爲すや』。婆羅邏白して曰く『世尊、我が大海中に八未曾有法有るは如來の八未曾有法に及ばず、如かざること千倍萬倍にして、比ぶべからず喩ふべからず稱ふべからず數ふべからず。但世尊の八未曾有法を上と爲し勝と爲し妙と爲し最と爲す。世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ、今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。佛說是の如し。婆羅邏阿修羅王及び諸の比丘、佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第八

【一六】阿羅訶向・阿羅訶・阿那含向・阿那含・斯陀含向・斯陀含・須陀洹向・須陀洹なり。婆羅邏、若し我が正法律中聖衆大神皆その中に居り、大神の名は謂く、阿羅訶向・阿羅訶・阿那含向・阿那含・斯陀含向・斯陀含・須陀洹向・須陀洹ならば、これを我が正法律中の第六の未曾有法と謂ひ、諸の比丘をして見已りて中に樂しましむ。(7)また次に婆羅邏、大海は清淨にして死屍を受けず、若し命終る者有れば、夜を過ぎて風すなはち吹きて岸上に著くるが如く、婆羅邏、我が正法律も亦復是の如く、聖衆清淨にして死屍を受けず、若し不精進の人惡生する有りて梵行に非ずして梵行と稱し沙門に非ずして沙門と稱せば、彼墮して聖衆の中に有りと雖も、然も聖衆を去ること遠く聖衆も亦復彼を去離すること遠し。婆羅邏、若し我が正法律中聖衆清淨にして死屍を受けず、若し不精進の人惡生する有りて梵行に非ずして梵行と稱し沙門に非ずして沙門と稱せば、彼墮して聖衆の中に在りと雖も然も聖衆を去ること遠く聖衆も亦復彼を去離すること遠ければ、これを我が正法律中の第七の未曾有法と謂ひ、諸の比丘をして見已りて中に樂しましむ。(8)また次に婆羅邏、大海は、閻浮洲中に五大河有り、一に曰く恒伽、二に曰く搖尤那、三に曰く舍牢浮、四に曰く阿夷羅婆提、五に曰く摩企なり、悉く大海に入る。既に中に入り已りて各本の名を捨てゝ皆大海と曰ふが如く、婆羅邏、我が正法律も亦復是の如く、剎利種の族姓子鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道する「とき」、彼本の名を捨てゝ同じく沙門と曰ひ、梵志種・居士種・工師種の族姓子鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道する「とき」彼本の名を捨てて同じく沙門と曰ふ。婆羅邏、若し我が正法律中剎利種の族姓子鬚髮を剃除し至信に家を捨て家無くして學道する「とき」彼本の名を捨てゝ同じく沙門と曰ひ、梵志種・居士種・工師種の族姓子鬚髮を剃除し袈裟衣を著し至信に家を捨て家無くして學道する「とき」彼本の名を捨てて同じく沙門と曰はゞこれを我が正法律中の第八の未曾有法と謂ひ、諸の比丘をして見已りて中に樂しましむ。婆羅邏、これを正法律中に八未曾有法有りて、諸の

【一六】六卷「數化病經」註を見よ。

比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の爲に禁戒を施設し、諸の族姓子乃ち命盡き終るに至るまで、戒を犯さず。婆羅邏、若し我が正法律中比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の爲に禁戒を施設し諸の族姓子乃ち命盡き終るに至るまで、戒を犯さざれば、これを我が正法律中の第二の未曾有法と謂ひ、諸の比丘をして見已りて中に樂しましむ。(3)また次に婆羅邏、大海は水甚だ深くして底無く極めて廣くして邊無きが如く、婆羅邏、我が正法律も亦復是の如く、諸法甚だ深く、甚だ深くして底無く極めて廣くして邊無し。婆羅邏、若し我が正法律中の諸法甚だ深く、甚だ深くして底無く極めて廣くして邊無くば、これを我が正法律中の第三の未曾有法と謂ひ、諸の比丘をして見已りて中に樂しましむ。(4)また次に婆羅邏、大海は水鹹くして皆同一味なるが如く、婆羅邏、我が正法律も亦復是の如く無欲を味と爲す、覺味・息味及び道味なり。婆羅邏、若し我が正法律中無欲を味と爲し、覺味息味及び道味ならば、これを我が正法律中の第四の未曾有法と謂ひ、諸の比丘をして見已りて中に樂しましむ。(5)また次に婆羅邏、大海の中は多く珍寶有り無量の璝異、種種の珍琦、その中に充滿し、珍寶の名は謂く金・銀・水精・琉璃・摩尼・眞珠・碧玉・白珂・螺璧・珊瑚・虎珀・馬瑙・瑇瑁・赤石・琁珠なるが如く、婆羅邏、我が正法律も亦復是の如く多く珍寶有り、無量の璝異、種種の珍琦その中に充滿し、珍寶の名は謂く[10]四念處・[11]四正勤・[12]四如意足・[13]五根・[14]五力・[15]七覺支・八支聖道なり。婆羅邏、若し我が正法律中に多く珍寶有り、無量の璝異、種種の珍琦、その中に充滿し、珍寶の名は謂く四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺支・八支聖道ならばこれを我が正法律中の第五の未曾有法と謂ひ、諸の比丘をして見已りて中に樂しましむ。(6)また次に婆羅邏、大海中は大神の居所にして、大神の名は謂く、阿修羅・乾塔惒・羅刹魚・摩竭・龜・鼉・婆留泥・帝麑・帝麑伽羅・提帝麑伽羅なるが如く、また次に大海中は甚奇甚特にして衆生の身體百由延有り二百由延有り三百由延有り七百由延に至る有り身皆海中に居る「が如く」婆羅邏、我が正法律も亦復是の如く聖衆大神皆その中に居り、大神の名は謂く

【一〇】四念處(Cattāro satipaṭṭhānā)。四念住ともいふ、身受心法の四に於て次第に不淨・苦・無我・無常と觀ずる觀法。

【一一】四正勤(Cattāro sammappadhānā)。四意斷、四正斷ともいふ、已生の惡を滅せしめ、未生の惡を生ぜざらしめ、已生の善を增長せしめ、未生の善を生ぜしめんと精進努力するをいふ。

【一二】四如意足(Cattāro iddhipādā)。四神足ともいふ、欲・精進・心・思惟の四に於て修する定なり。

【一三】五根(Pañc'indriyāni)。信・進・念・定・慧の五は多くの善法を生ずる本となるが故に根といふ。

【一四】五力(Pañca balāni)。同じく信・進・念・定・慧の五は五障を治するの力を有するよりして五力といふ。

【一五】七覺支(Sattabojjhaṅgā)七菩提分法とも譯す。擇法・精進・喜・輕安・念・定・行捨の七をいふ。二卷「漏盡經」註を參照せよ。

中に居る。世尊、若し大海の中は大神の所居にして、大神の名は謂く阿修羅・乾塔惒・羅刹魚・摩竭・龜・鼉・婆留泥・帝麗・帝麗伽羅・提帝麗伽羅なり、また次に大海の中は甚奇甚特にして、衆生の身體百由延有り、二百由延有り、三百由延有り、七百由延に至る有り、身皆海中に居らば、これを我が大海中の第六の未曾有法と謂ひ、諸の阿修羅見已りて中に樂しむ。(7)また次に世尊、我が大海は清淨にして死屍を受けず、若し命終る者有れば、夜を過ぎて風すなはち吹きて岸上に著く。世尊、若し我が大海清淨にして死屍を受けず、若し命終る者有れば、夜を過ぎて風すなはち吹きて岸上に著けば、これを我が大海中の第七の未曾有法と謂ひ、諸の阿修羅見已りて中に樂しむ。(8)また次に世尊、我が大海は、閻浮洲中に五大河有り、一に曰く恒伽、二に曰く搖尤那、三に曰く舍牢浮、四に曰く阿夷羅婆提、五に曰く摩企なり、悉く大海に入る。既に中に入り已りて各本の名を捨てゝ皆大海と曰ふ。世尊、若し我が大海は、閻浮洲中に五大河有り、一に曰く恒伽、二に曰く搖尤那、三に曰く舍牢浮、四に曰く阿夷羅婆提、五に曰く摩企なり、悉く大海に入る。既に中に入り已りて各本の名を捨てゝ皆大海を曰はゞ、これを我が大海中の第八の未曾有法と謂ひ、諸の阿修羅、見已りて中に樂しむ。世尊、これを我が大海中に八未曾有法有りと謂ひ、諸の阿修羅見已りて中に樂しむ。世尊、佛の正法律中に於て幾つの未曾有法有りて諸の比丘をして見已りて中に樂しましむるや』。世尊答へて曰はく『婆羅邏、我が正法律中にも亦八未曾有法有りて諸の比丘をして見已りて中に樂しましむ。云何が八と爲す。(1)婆羅邏、大海は下より上に至りて、周迴漸く廣く均調に轉じて、上は以て岸を成しその水常に滿ちて未だ嘗て流出せざるが如く、婆羅邏、我が正法律も亦復是の如く、漸く作し漸く學び漸く盡し漸く敎ふ。婆羅邏、若し我が正法律中に漸く作し漸く學び漸く盡し漸く敎へば、これを我が正法律中の第一の未曾有法と謂ひ、諸の比丘をして見已りて中に樂しましむ。(2)また次に婆羅邏、大海は潮未だ嘗て時を失せざるが如く、婆羅邏、我が正法律も亦復是の如く

【九】所謂印度の五大河なり、第二卷「世間福經」第七の註を見よ。

阿修羅の色、阿修羅の樂、阿修羅の力に於て諸の阿修羅大海中を樂しむ』。世尊また問ひて曰はく『婆羅邏、大海中に幾つの未曾有法有りて諸の阿修羅をして見已りて中に樂しましむるや』。婆羅邏答へて曰く『世尊、我が大海中に八未曾有法有りて諸の阿修羅をして見已りて中に樂しましむ。云何が八と爲す。(1)世尊、我が大海は下より上に至りて、周迴漸く廣く均調に轉じ、上は以て岸を成しその水常に滿ちて未だ曾て流出せず。世尊、若し我が大海下より上に至りて、周迴漸く廣く均調に轉じ、上は以て岸を成しその水常に滿ちて未だ曾て流出せざればこれを我が大海中の第一の未曾有法と謂ひ、諸の阿修羅見已りて中に樂しむ。(2)また次に世尊、我が大海は潮未だ曾て時を失せず。世尊、若し我が大海潮未だ曾て時を失せざれば、これを我が大海中の第二の未曾有法と謂ひ、諸の阿修羅見已りて中に樂しむ。(3)また次に世尊、我が大海は水甚だ深くして底無く、極めて廣くして邊無し。世尊、若し我が大海甚だ深くして底無く、極めて廣くして邊無ければ、これを我が大海中の第三の未曾有法と謂ひ、諸の阿修羅見已りて中に樂しむ。(4)また次に世尊、我が大海水は、鹹くして皆同一味なり。世尊、若し我が大海水、鹹くして皆同一味なれば、これを我が大海中の第四の未曾有法と謂ひ、諸の阿修羅見已りて中に樂しむ。(5)また次に世尊、我が大海は中に多く珍寶有り無量の琦異、種種の琦その中に充滿す。珍寶の名は謂く金・銀・水精・琉璃・摩尼・眞珠・碧玉・白珂・螺蠘・珊瑚・琥珀・馬瑙・瑇瑁・赤石・琁珠なり。世尊、若し我が大海は中に多く珍寶有り、無量の琦異、種種の珍琦その中に充滿し珍寶の名は謂く、金・銀・水精・琉璃・摩尼・眞珠・碧玉・白珂・螺蠘・珊瑚・琥珀・馬瑙・瑇瑁・赤石・琁珠ならば、これを我が大海中の第五の未曾有法と謂ひ、諸の阿修羅見已りて中に樂しむ。(6)また次に世尊、我が大海の中は大神の所居なり。大神の名は謂く、阿修羅・乾塔惒・羅刹魚・摩竭・龜・鼉・婆留泥・帝麑・帝麑伽羅・提帝麑伽羅なり。また次に大海の中は甚奇甚特にして、衆生の身體百由延有り、二百由延有り、三百由延に至る有り、七百由延に至る有り、身皆海

【五】摩竭(Makara)。
【六】帝麑(Timi)。
【七】帝麑伽羅(Timingala)。
【八】提帝麑伽羅(Timi am-ti·gala)。

拘羅この說を作さばこれを尊者薄拘羅の未曾有法と謂ふ。また次に尊者薄拘羅この說を作しぬ『諸賢、我この正法律中に於て學道して已來八十年なり。未だ曾て沙彌を畜へるを憶はず、未だ曾て白衣の爲に說法せるを憶はず、乃至四句の頌も亦爲に說かず』。若し尊者薄拘羅この說を作さばこれを尊者薄拘羅の未曾有法と謂ふ。また次に尊者薄拘羅この說を作しぬ『諸賢、我この正法律中に於て學道して已來八十年なり。未だ曾て病み、乃至彈指の頃の頭痛せる者も有らず、未だ曾て藥乃至一片の[八]訶梨勒を服せるを憶はず』。若し尊者薄拘羅この說を作さばこれを尊者薄拘羅の未曾有法と謂ふ。また次に尊者薄拘羅この說を作しぬ『諸賢、結加趺坐し八十年に於て未だ曾て壁に猗り樹に猗らず』。若し尊者薄拘羅この說を作さばこれを尊者薄拘羅の未曾有法と謂ふ。また次に尊者薄拘羅この說を作しぬ『諸賢、我三日夜中に於て三達證を得ぬ』。若し尊者薄拘羅この說を作さばこれを尊者薄拘羅の未曾有法と謂ふ。また次に尊者薄拘羅この說を作しぬ『諸賢、我結加趺坐して般涅槃せん』。尊者薄拘羅すなはち結加趺坐して般涅槃す。若し尊者薄拘羅結加趺坐して般涅槃すればこれを尊者薄拘羅の未曾有法と謂ふ。尊者薄拘羅の所說是の如し。彼の時異學及び諸の比丘、所說を聞き已りて歡喜奉行しぬ。

三十五、阿修羅經第四[一]

我が聞きこと是の如し。ある時佛[二]鞞蘭若に遊び[三]黃蘆園に在しぬ。その時[四]婆羅邏阿修羅王、牟梨遮阿修羅子色像巍巍光耀暐曄として夜將に且に向はんとするとき、佛所に往詣し世尊の足を禮し却きて一面に住しぬ。世尊問ひて曰はく『婆羅邏、大海中に阿修羅衰退有ること無く、阿修羅の壽、阿修羅の色、阿修羅の樂、阿修羅の力[に於て]諸の阿修羅大海中を樂しむや』。婆羅邏阿修羅王、牟梨遮阿修羅子答へて曰く『世尊、我が大海中の諸の阿修羅衰退有ること無く、阿修羅の壽、

【八】 訶梨勒(Haritaki)。藥用果の名。

【一】 A. iv. 197「增一阿含」四二品三四。

【二】 鞞蘭若(Verañja)。

【三】 黃蘆園(Naḷerupucima-ṇḍa)。

【四】 婆羅邏(Pahārāda)。

憶ふや』。尊者薄拘羅異學に語げて曰く『汝この問を作すこと莫れ。更に餘の事を問へ、賢者薄拘羅、この正法律中に於て學道して已來八十年なり。頗し曾て欲想[六]を起せるを憶ふやと。異學、汝應にこの問を作すべし』。こゝに於て異學すなはちこの語を作しぬ、『我今更に賢者薄拘羅に問ふ、汝この正法律中に於て學道して已來八十年なり。若し曾て欲想を起せるを憶ふや』。こゝに於て尊者薄拘羅この異學の問に因りてすなはち諸の比丘に語げぬ『諸賢、我この正法律中に於て學道して已來八十年なり。こゝを以て貢高を起さんことは却つてこの想無し』。若し尊者薄拘羅この說を作さばこれを尊者薄拘羅の未曾有法と謂ふ。また次に尊者薄拘羅この說を作しぬ『諸賢、我この正法律中に於て學道して已來八十年なり。未だ曾て欲想有らず』。若し尊者薄狗羅この說を作さばこれを尊者薄拘羅の未曾有法と謂ふ。また次に尊者薄拘羅この說を作しぬ『諸賢、我糞掃衣を持してより來た八十年なり。若しこれに因りて貢高を起さんは都てこの相無し』。若し尊者薄拘羅この說を作さばこれを尊者薄拘羅の未曾有法と謂ふ。また次に尊者薄拘羅この說を作しぬ『諸賢、我糞掃衣を持してより來た八十年なり。未だ曾て居士衣を受けしことを憶はず、未だ曾て割截して衣を作らず、未だ曾て他の比丘を倩ひて衣を作らず、未だ曾て針を用ひて衣を縫はず、未だ曾て針を持ちて囊を縫ひ、乃至一縷もせず』。若し尊者薄拘羅この說を作さばこれを尊者薄拘羅の未曾有法と謂ふ。また次に尊者薄拘羅この說を作しぬ『諸賢、我乞食してより來た八十年なり。若しこれに因りて貢高を起さんは都てこの相無し』。若し尊者薄拘羅この說を作さばこれを尊者薄拘羅の未曾有法と謂ふ。また次に尊者薄拘羅この說を作しぬ『諸賢、我乞食してより來た八十年なり。未だ曾て居士の請を受けしを憶はず、未だ曾て超越[七]して乞食せず、未だ曾て大家に乞食し、中に於て當に淨好極妙豐饒の食噉含消を得べきに從はず。未だ曾て女人の面を視ず、未だ曾て比丘尼の坊中に入りしを憶はず、未だ曾て比丘尼と共に相問訊せるを憶はず、乃至道路にも亦共に語らず』。若し尊者薄

【六】欲想(Kāmasaññā)。欲へ。

【七】貧富、淨汚を問はず、己に好意あるとなきとを問はず、一戸も漏さず乞食して行くをいふ。

を息めん。

こゝに於て尊者阿難尊者金剛子の教を受け、衆を離れて獨り行じ、精進して亂るゝこと無し。彼衆を離れ獨り行じ精進して亂るゝこと無く、族姓子の所爲の「ごとく」鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道せば、唯無上の梵行訖り、彼即ち現法に於て、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。尊者阿難法を知り已りて乃至〔三〇〕阿羅訶を得、尊者阿難この説を作す、諸賢、我床上に坐し頭を下げ未だ枕に至らざる頃すなはち一切の漏を斷じ心解脫を得ぬと。若し尊者阿難この説を作さばこれを尊者阿難の未曾有法と謂ふ。尊者阿難またこの説を作す、諸賢、我當に結加趺坐して般涅槃すべしと。尊者阿難すなはち結加趺坐して般涅槃す。若し尊者阿難結加趺坐して般涅槃せばこれを尊者阿難の未曾有法と謂ふ』。佛説是の如し。彼の諸の比丘佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。

三十四、薄拘羅經第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛の般涅槃の後久しからずして〔二〕尊者薄拘羅王舍城に遊び竹林加蘭哆園に在りき。その時〔三〕一異學有り。これ尊者薄拘羅未だ出家せざる時の親善の朋友なり。中後に彷徉し尊者薄拘羅の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。異學曰く『賢者薄拘羅、我所問有らんと欲す。聽かれんと爲るや不や』。尊者薄拘羅答へて曰く『異學、汝の所問に隨ひ聞き已りて當に思ふべし』。異學問ひて曰く『賢者薄拘羅、この〔四〕正法律中に於て學道すること幾時ぞ』。尊者薄拘羅答へて曰く『異學、我この正法律中に於て學道して已來八十年なり』。異學また問ひて曰く『賢者薄拘羅、汝この正法律中に於て學道して已來八十年なり。頗し曾て〔五〕婬欲の事を行へるを

【三〇】阿羅訶(Arahan)。

【一】M. 124 Bakkulasutta

【二】薄拘羅(Bakkula)。

【三】「巴利經」によれば、この異學は Acela-Kassapa 即倮形梵志迦葉なり。

【四】正法律中(Dhammavinaya)。佛法、佛教といふほどの意。

【五】婬欲(Methuna dhamma)。婬事、性交。

審なること所説の如く、諦かにして異有ること無しと知る』。こゝに於て世尊、尊者阿難をして喜びて諸の比丘に告げしめんと欲したまふ『轉輪聖王四未曾有法を得、云何が四と爲す。刹利衆往きて轉輪王を見、若し默然たる時は見已りて歡喜し、若し所説ある時は聞き已りて歡喜す。梵志衆・居士衆・沙門衆・往きて轉輪王を見、若し默然たる時は見已りて歡喜し、若し所説ある時は聞き已りて歡喜す。阿難比丘亦復是の如く四未曾有法を得。云何が四と爲す。比丘往きて阿難を見、若し默然たる時は見已りて歡喜し、若し所説ある時は聞き已りて歡喜す。比丘尼衆・優婆塞衆・優婆私衆往きて阿難を見、若し默然たる時は見已りて歡喜し、若し所説ある時は聞き已りて歡喜す。また次に阿難衆の爲に説法するに四未曾有有り。云何が四と爲す。阿難比丘、比丘衆の爲に至心に説法し不至心に非ず。彼の比丘衆亦この念を作す、願はくは尊者阿難常に説法して中止せしむること莫れと。彼の比丘衆尊者阿難の説法を聞きて終に厭足すること無し。然も阿難比丘自ら默然として住す。[彼]比丘尼衆・優婆塞衆・優婆私衆の爲に至心に説法し不至心に非ず。優婆私衆亦この念を作す、願はくは尊者阿難常に説法して中止せしむること莫れと。優婆私衆尊者阿難の説を聞きて終に厭足すること無し。然も阿難比丘自ら默然として住す。また次にある時佛般涅槃の後久しからずして尊者阿難金剛に遊び金剛村中に住す。この時尊者阿難無量百千の衆に、前後を圍繞せられて爲に説法す。こゝに於て尊者金剛子亦衆中に在り。尊者金剛子心にこの念を作す、この尊者阿難、故これ學人にして未だ欲を離れざるや。我寧ろ如其像定に入り如其像定を以て尊者阿難の心を觀ずべし』と。こゝに於て尊者金剛子すなはち如其像定に入り如其像定を以て尊者阿難の心を觀ず。尊者金剛子即ち尊者阿難、故これ學人にして未だ欲を離れざるを知る。こゝに於て尊者金剛子三昧より起ち尊者阿難に向ひて頌を説きて曰く、

山林に靜思惟し　涅槃に入心せしむ、　瞿曇の禪亂るゝこと無くば　久しからずして　跡證

尊を奉見し供養禮事するを得ぬ。若し世尊の般涅槃を聞き已らば、すなはちまた來りて世尊を奉見し供養禮事せず、我亦隨時に佛を見て供養禮事するを得ざらん』。こゝに於て世尊諸の比丘に問ひたまはく、『阿難比丘今何處に在るや』。時に諸の比丘白して曰く『世尊、尊者阿難拂を執りて佛に侍し手を以て涙を拭ひ而もこの念を作す、本諸方の此丘衆有り、來りて世尊を見て供養禮事せんと欲せば皆隨時に世尊を奉見し供養禮事するを得ぬ。若し世尊の般涅槃を聞き已らばすなはちまた來りて世尊を奉見し供養禮事せず、我亦隨時に佛を見て供養禮事するを得ざらん』。こゝに於て世尊告げて曰はく『阿難、汝啼泣すること勿れ、亦憂慼すること莫れ。所以者何。阿難、汝我に奉侍し身行慈にして口意行慈なり、初より二心無く安樂無量・無邊無限なり。阿難、若し過去の時諸の如來・無所著・等正覺に奉侍者有らば汝に勝る無けん。阿難、若し未來の諸の如來・無所著・等正覺に若し侍者有れば亦汝に勝る無けん。阿難、我今現在の如來・無所著・等正覺に若し侍者有らば亦汝に勝る無けん。所以者何。阿難、善く時を知り、善く時を別ち、我これ如來を往見する時なりと知り、我如來を往見する時に非ずと知り、比丘衆・比丘尼衆これ如來を往見する時なりと知り、比丘衆・比丘尼衆如來を往見する時に非ずと知り、優婆塞衆・優婆私衆これ如來を往見する時なりと知り、優婆塞衆・優婆私衆如來を往見する時に非ずと知り、衆多の異學の沙門梵志これ如來を往見する時 なりと知り、衆多の異學の沙門梵志如來を往見する時に非ずと知り、この衆多の異學の沙門梵志能く如來と共に論ずと知り、この衆多の異學の沙門梵志如來と共に論ずる能はずと知り、この食噉含消を如來は食し已りて安隱饒益を得たまふと知り、この食噉含消を如來は食し已りて安隱饒益を得たまはずと知り、この食噉含消を如來は食し已りて辯才說法するを得たまふと知り、この食噉含消を如來は食し已りて辯才說法するを得たまはずと知る。また次に阿難、汝他心智無しと雖も、而も逆りて如來脯時に燕坐より起ち 預め人の爲に說く、今日如來の行是の如し、是の 如く現法に樂居し、

云何なるべき』。世尊答へて曰はく、『阿難、若し比丘村邑に依らば、夜を過ぎて平旦衣を著け鉢を持し村に入りて乞食し、善く身を護持し諸根を守攝し正念に立つ。彼村邑より乞食已に竟り、衣鉢を收擧し手足を澡洗し、尼師檀を以て肩上に著け、無事處に至り、或は樹下或は空室中に至りて、或は經行し、或は坐禪し、心中の諸の障礙の法を淨除す。晝、或は經行し或は坐禪して心中の諸の障礙の法を淨除し已り、また初夜に於て或は經行し或は坐禪して心中の諸の障礙の法を淨除す。初夜の時に於て或は經行し或は坐禪して心中の諸の障礙の法を淨除し已り、中夜の時に於て室に入りて臥せんと欲し、優哆邏僧[二六]を四疊して床上に敷著し僧伽梨[二七]を襞みて枕と作し右脅にして臥し、足と足と相累ね、意明相を係け正念・正智・恒念起想す。彼後夜の時速に臥より起ちて或は經行し或は坐禪し心中諸の障礙の法を淨除す。是の如きは比丘の師子臥法なり』。尊者阿難白して曰く、『世尊、是の如きは比丘の師子臥法なり』と。尊者阿難またこの說を作す『諸賢、世尊我に師子喩臥法を敎へたまひき。これより已來初よりまた左脅を以て臥せず』。若し尊者阿難この說を作さばこれを尊者阿難の未曾有法と謂ふ。(16)また次にある時世尊　拘尸那竭[二八]に遊び、惒跋單[二九]なる力士の娑羅林中に住したまひぬ。その時世尊最後に般涅槃を取らんと欲したまふ時告げて曰はく『阿難、汝往きて雙の娑羅樹の間に至り如來の爲に北首して床を敷くべし。如來中夜に當に般涅槃すべし』。尊者阿難如來の敎を受け卽ち雙樹に詣り雙樹の間に於て如來の爲に北首して床を敷き、床を敷き已訖りて還りて佛所に詣り、稽首して足を禮し却きて一面に住し、白して曰く『世尊、已に如來の爲に雙樹の間に於て北首して床を敷きぬ。唯願はくは世尊自ら當に時を知るべし』。こゝに於て世尊、尊者阿難を將ゐて雙樹の間に至り優哆邏僧を四疊して以て床上に敷き僧伽梨を襞みて枕と作し右脅にして臥し足と足と相累ねたまひぬ。最後の般涅槃の時尊者阿難拂を執りて佛に侍し手を以て淚を抆ひて而もこの念を作す、『本諸方の比丘衆有り、來りて世尊を見て供養禮事せんと欲せば皆隨時に世

【二六】　優哆邏僧（Uttarāsaṅga）。上衣。袈裟卽ち三衣中の一にして通常用ふべきもの。

【二七】　僧伽梨(Saṅghāṭi)。重衣、合衣。同じく三衣の一にして上衣に記せる上衣を二重縫ひ合せたるもの、防寒のため又は外出の折に用ふ。

【二八】　拘尸那竭(Kusinārā)。梵語にては Kuśinagara、末羅人の都城の名、佛はこの都城の附近にて入滅したまへり。

【二九】　惒跋單(Upavattana)。『遊行經』には生處と譯す。力士は末羅(Malla)なり。

衞國婆雞邏山中に在りき。この時尊者舍梨子問ひて曰く『賢者阿難、汝佛に奉侍してより來た二十五年、頗し時有りて欲心を起せるを憶ふや』。尊者阿難白して曰く『尊者舍梨子、我はこれ學人[二五]にして欲を離れず。尊者舍梨子また語げて曰く、『賢者阿難、我汝の學と無學とを問はず。我但汝佛に奉侍してより來た二十五年、汝頗し欲念を起せるを憶ふや[不や]を問ひぬ』。尊者舍梨子また再び三たび問ひて曰く、『賢者阿難、汝佛に奉侍してより來た二十五年、頗し時有りて欲心を起せるを憶ふや』。尊者阿難亦再たび三たびに至りて白して曰く、『尊者舍利子、我はこれ學人にして欲を離れず』。尊者舍梨子また語げて曰く、『賢者阿難、我汝の學と無學とを問はず、我但汝佛に奉侍してより來た二十五年、汝頗し欲心を起せること有るを憶ふや[不や]を問ひぬ』。こゝに於て尊者大目乾連語げて曰く、『賢者阿難、速に答へよ、速に答へよ、阿難、汝上尊長老を觸嬈すること莫れ』。こゝに於て尊者阿難答へて曰く『尊者舍梨子、我佛に奉侍してより來た二十五年、我初より曾て欲心を起せるを憶はず。所以者何、我常に佛に向ひて慚愧心有り。及び諸の智梵行人に[向ひても亦然り]』。若し尊者阿難この説を作さばこれを尊者阿難の未曾有法と謂ふ。(15)また次にある時世尊王舍城に遊び巖山中に在しぬ。この時世尊告げて曰はく『阿難、汝臥するに當に師子の臥法の如くすべし』。尊者阿難白して曰く『世尊、獸王師子の臥法云何』。世尊答へて曰はく『阿難、獸王師子は晝は食の爲に行き、行き已りて窟に入る。若し眠らんと欲する時は足と足と相累ね尾を伸ばして後に在り右脅にして臥す。夜を過ぎて平旦回顧して身を視る。若し獸王師子身體正しからざれば見已りて喜ばず。若し獸王師子その身周く正しければ見已りてすなはち喜ぶ。彼若し臥より起ち窟より出づれば出で已りて頻に呻る。頻に呻り已りて自ら身體を觀、自ら身を觀已りて四顧して望み、四顧して望み已りてすなはち再び三たび吼ゆ。再び三たび吼え已りてすなはち行きて食を求む。獸王師子の臥法是の如し』。尊者阿難白して曰く、『世尊、獸王師子の臥法是の如し。比丘の臥法當にまた

【二五】四向四果の中初の七を有學と呼び、後の一即ち阿羅漢果を無學と呼ぶ、有學とは尚ほ學ぶべきことあるの意。

た二十五年、初より非時に佛を見ずと。若し尊者阿難この說を作さば、これを尊者阿難の未曾有法と謂ふ。(7)尊者阿難またこの說を作す、諸賢、我佛に奉侍してより來た二十五年、未だ曾て佛の爲に呵責せらるゝ所あらず、その一過を除く。これ亦他の爲の故なりと。若し尊者阿難この說を作さば、これを尊者阿難の未曾有法と謂ふ。(8)尊者阿難またこの說を作す、我如來に從ひて八萬の法聚を受け、受持して忘れず。若しこれを以て貢高を起さんは、この相有ること無しと。若し尊者阿難この說を作さば、これを尊者阿難の未曾有法と謂ふ。(9)尊者阿難またこの說を作す、諸賢、我如來に從ひて八萬の法聚を受け初より再び問はず、その一句を除く。彼亦是の如く易からずと。若し尊者阿難この說を作さば、これを尊者阿難の未曾有法と謂ふ。(10)尊者阿難またこの說を作す、諸賢、我如來に從ひて八萬の法聚を受持し初より他人に從ひて法を受けしを見ずと。若し尊者阿難この說を作さば、これを尊者阿難の未曾有法と謂ふ。(11)尊者阿難またこの說を作す、諸賢、我如來に從ひて八萬の法聚を受持し、初よりこの心無し、我この法を受くるは他に教へ語げんが爲なり、諸賢、但自ら御し自ら息し自ら般涅槃せんと欲するが故なりと。若し尊者阿難この說を作さば、これを尊者阿難の未曾有法と謂ふ。(12)尊者阿難またこの說を作す、諸賢、こは甚奇甚特なり。謂く四部衆我が所に來詣して法を聽く。若し我これに因りて貢高を起さんは都てこの相無し　亦豫め作意せず、來り問ふ者有らば我當に是の如く是の如く答へんと。諸賢、但坐に在る時その義の應ずるに隨ふと。若し尊者阿難この說を作さばこれを尊者阿難の未曾有法と謂ふ。(13)尊者阿難またこの說を作す、諸賢、こは甚奇甚特なり、謂く衆多の異學の沙門梵志來りて我に事を問ふ。我若しこれを以て恐怖有り畏懼有りて身毛竪たんは都てこの相無し。亦豫め作意せず、來り問ふ者有らば我當に是の如く是の如く答ふべしと。諸賢、但坐に在る時その義の應ずるに隨ふと。若し尊者阿難この說を作さばこれを尊者阿難の未曾有法と謂ふ。(14)また次にある時、尊者舍梨子・尊者大目乾連・尊者阿難・舍

すれば以下後世の添加かとも思はる。

ん、阿難比丘衣の爲の故に世尊に奉侍すと。大目乾連、若し阿難比丘聰明にして智慧あり、豫め知る、當に議論するもの有るべし、〔即ち〕或は諸の梵行〔者〕是の如き語を作さん、阿難比丘衣の爲の故に世尊に奉侍すと。これを阿難比丘の未曾有法と謂ふ。(2)大目乾連、阿難比丘聰明にして智慧あり豫め知る、當に議論するもの有るべし、〔即ち〕或は諸の梵行〔者〕是の如き語を作さん、阿難比丘食の爲の故に世尊に奉侍すと。大目乾連、若し阿難比丘聰明にして智慧あり豫め當に議論するもの有るべし、〔即ち〕或は諸の梵行〔者〕是の如き語を作さん、阿難比丘食の爲の故に世尊に奉侍す、と知らば、これを阿難比丘の未曾有法と謂ふ。(3)大目乾連、阿難比丘善く時を知り、善く時を別ち、我これ如來を往見する時なりと知り、我如來を往見する時に非ずと知り、比丘衆・比丘尼衆これ如來を往見する時なりと知り、比丘衆・比丘尼衆如來を往見する時に非ずと知り、優婆塞・優婆私衆これ如來を往見する時なりと知り、優婆塞・優婆私衆如來を往見する時に非ずと知り、[二一]衆多の異學の沙門梵志これ如來を往見する時なりと知り、衆多の[二二]異學の沙門梵志如來を往見する時に非ずと知り、この衆多の異學の沙門梵志、能く如來と共に論ずと知り、この衆多の異學の沙門梵志・如來と共に論ずる能はずと知り、この食噉含消を如來は食し已りて安隱饒益なりと知り、この食噉含消を如來は食し已りて安隱饒益ならずと知り、この食噉含消を如來は食し已りて辯才說法するを得と知り、この食噉含消を如來は食し已りて辯才說法するを得ずと知る、これを阿難比丘の未曾有法と謂ふ。(4)大目乾連、阿難比丘[二三]他心智無しと雖も而も善く如來脯時に燕坐より起ち、豫め人の爲に說きたまふを知る、今日如來の行是の如しと。是の如く現法に樂居し、審かに所說の如く、諦かに異有ること無し。これを阿難比丘の未曾有法と謂ふ』。(5)[二四]尊者阿難この說を作す、諸賢、我佛に奉侍してより來た二十五年、若しこの心を以て貢高を起さんは、この相有ること無しと。若し尊者阿難この說を作さばこれを尊者阿難の未曾有法と謂ふ。(6)尊者阿難またこの說を作す、諸賢、我佛に奉侍してより來

〔二一〕異學は Aññatitthiya 外道と同じく、梵志は Brāhmaṇa 婆羅門をいふ。

〔二二〕六巻「敎化病經」の註を見よ。

【二三】阿難は佛在世中阿羅漢果を得ず、故に「未だ他心智を得ず」といはる。

【二四】以上は佛の語なること明かなるが、以下「尊者阿難」の語あり、第三者の記となる。「我佛に奉侍してより來た二十五年云々」の語あるより察

と。阿難、猶ほ村外遠からずして樓閣臺觀有り東に向ひて窻を開けば日出で光照らして西壁に在るがごとし。賢者阿難、世尊亦然り、賢者阿難を得て以て侍者と爲さんと欲したまふ、意阿難に在り「我が可非不可を瞻視し我が所說を受けて、その義を失せざらしめん」と。賢者阿難、汝今世尊の侍者と爲るべし』。尊者阿難白して曰く『尊者大目乾連、我世尊に奉侍するに堪任せず。所以者何。諸佛世尊可き難く侍り難きを謂ひて侍者と爲す。尊者大目乾連、猶ほ王の大雄象、年六十に滿ち憍發力盛にして牙足體具はり、可き難く近づき難きを謂ひて看視と爲すが如し。尊者大目乾連、如來・無所著・等正覺も亦復是の如く可き難く近づき難きを謂ひて侍者と爲す。尊者大目乾連、我こゝを以ての故に侍者「たる」に任へず』。尊者大目乾連また語げて曰く『賢者阿難、我が說喩を聽け、智者は喩を聞きて卽ちその義を解す。賢者阿難、猶ほ優曇鉢華、時に世に生ずるが如し。賢者阿難、如來・無所著・等正覺も亦復是の如く時々世に出でたまふ。賢者阿難、汝速に世尊の侍者と爲るべし。瞿曇[二〇]當に大果を得べし』。尊者阿難復白して曰く『尊者大目乾連、若し世尊我が三願を與したまはゞ我すなはち佛の侍者と爲るべし。云何が三と爲す。我願はくは佛の新故衣を著けず、願はくは別請の佛食を食はず、願はくは非時に佛を見ず。尊者大目乾連、若し世尊我にこの三願を與したまはゞ是の如く我すなはち佛の侍者と爲らん』。こゝに於て尊者大目乾連、尊者阿難に、侍者と爲ることを勸め已りて、卽ち坐より起ち尊者阿難を繞りて、すなはち還り去りて佛所に往詣し稽首して足を禮し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、我已に賢者阿難に佛の侍者と爲ることを勸喩しぬ。世尊、賢者阿難佛に從ひて三願を求む。云何が三と爲す。願はくは佛の新故衣を著けず、願はくは別請の佛食を食はず、願はくは非時に佛を見ざらん。尊者大目乾連、若し世尊我にこの三願を與したまはゞ、是の如く我すなはち佛の侍者と爲らんと』。世尊白して曰はく『(1)大目乾連、阿難比丘聰明にして智慧あり、豫め當に譏論するもの有るべきを知る、「卽ち」或は諸の梵行「者」是の如き語を作さ

〔二〇〕瞿曇(Gotama)は、釋迦一族の姓なり、こゝに「瞿曇」といふは阿難陀を呼びたるなり。

く『拘隣若、汝自ら年老い體轉た衰弊し壽過ぎて訖るに垂とす。汝亦自ら應に瞻視者を須ふべし。拘隣若、汝本の坐に還れ』。こゝに於て尊者拘隣若卽ち佛足を禮し、すなはち坐に還り復しぬ。是の如く、尊者阿攝貝・尊者跋提釋迦王・尊者摩訶男拘隷・尊者惒破・尊者耶舍・尊者邠耨・尊者維摩羅・尊者伽惒波提・尊者須陀耶・尊者舍梨子・尊者阿那律陀・尊者難提・尊者金毘羅・尊者隷婆哆・尊者大目乾連・尊者大迦葉・尊者大拘絺羅・尊者大周那・尊者大迦旃延・尊者邠耨加奕寫長老「亦是の如し」。尊者耶舍行籌長老卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、我願はくは可非不可を奉侍し、及び所說を受けその義を失せざらん』。世尊告げて曰はく『耶舍、汝自ら年老い體轉た衰弊し壽過ぎて訖るに垂とす。汝亦自ら應に瞻視者を須ふべし。耶舍、汝本の坐に還れ』。こゝに於て尊者耶舍卽ち佛足を禮し、すなはち坐に還り復しぬ。その時尊者大目乾連彼の衆中に在りて、すなはちこの念を作しぬ、世尊は誰を求めて侍者と爲さんと欲したまふや、意何比丘に在りて可非不可を瞻視し、及び所說を受けてその義を失せざらしめんと欲したまふや。我寧ろ如其像定に入りて衆の比丘の心を觀ずべしと。こゝに於て尊者大目乾連卽ち[一九]如其像定に入り衆の比丘の心を觀じぬ。尊者大目乾連、卽ち世尊賢者阿難を得て以て侍者と爲さんと欲し、意阿難に在りて可非不可を瞻視し及び所說を受けてその義を失せざらしめんと欲したまふことを知りぬ。こゝに於て尊者大目乾連卽ち定より起ちて衆の比丘に白して曰く『諸賢、知るや不や。世尊賢者阿難を得て以て侍者と爲さんと欲し、意阿難に在りて、可非不可を瞻視し及び所說を受けてその義を失せざらしめんと欲したまふ。諸賢、我等今應に共に賢者阿難の所に至り勸喩して世尊の侍者爲らしむべし』。こゝに於て尊者大目乾連及び諸の比丘共に尊者阿難の所に至り共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。この時尊者大目乾連坐し已りて語げて曰く『賢者阿難、汝今知るや不や、佛汝を得て以て侍者と爲さんと欲したまふ、意阿難に在り「我が可非不可を瞻視し我が所說を受けてその義を失せざらしめん」

【七】邠耨(Puṇṇa)富樓那。
【八】維摩羅(Vimala)。
【九】伽惒波提(Gavampati)
【一〇】阿那律(Anuruddha)。
【一一】難提(Nandi)。
【一二】金毘羅(Kimbila)。
【一三】隷婆哆(Revata)。
【一四】大拘絺羅　(Mahākoṭṭhita)。
【一五】大周那(Mahācunda)。
【一六】大迦旃延(Mahākaccāyana)。
【一七】籌とは今日の食券の如きものなり、耶舍長老はこれを周旋する役に當りたるか、行籌とは多分巴利語のSalākagāhāpaka　に當る。
【一八】Paṇṇasāli　木の葉を以て葺きたる家の意、一時用の寺院、今セイロンにて寺院をパンサラと呼ぶはこれより來れるなり。
【一九】如其像定・如其像形・如其像三昧正受・如其像如意定などの異譯あり。巴利語は「Tathārūpaṃ　iddhānubhāvaṃ[abhisaṅkharoti]にして、「そのやうなる神通を行ふ」の意。例之Vin. i. 16に「吾、長者なる居士がこゝに坐しながら、こゝに坐せる善男子耶舍を見ざらんやう、そのやうなる神通を行はんかな」とあり。如其像の語は　「Tathārūpaṃ」より譯出されしこと疑なし。

得る能はず、厭き已りて還りぬと。若し世尊、魔王六年世尊を隨逐しその長短を求めて便を得る能はず、厭き已りて還りぬとせば我これを世尊の未曾有法と受持せん。(24)我聞く、世尊七年身を念じ、常に念じて斷じたまはずと。若し世尊七年身を念じ、常に念じて斷じたまはずとせば、我これを世尊の未曾有法と受持せん』。こゝに於て世尊告げて曰はく『阿難、汝如來に從ひて更にこの未曾有法を受持せよ。阿難、如來は覺の生ずるを知り、住するを知り、滅するを知り、常に知りて知らざる時無し。阿難、如來は思想の生ずるを知り、住するを知り、滅するを知り、常に知りて知らざる時無し。この故に阿難、汝如來に從ひて更にこの未曾有法を受持せよ』。佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

三十三、侍者經第二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛、王舍城に遊びたまひぬ。その時多く識られたる名德、上尊長老比丘大弟子等、謂く、尊者[一]拘隣若・尊者[二]阿攝貝・尊者[三]跋提釋迦王・尊者[四]摩訶男拘隷・尊者[五]頞破・尊者[六]耶舍・尊者[七]邠耨・尊者[八]維摩羅・尊者[九]伽頞波提・尊者須陀耶・尊者舍梨子・尊者[一〇]阿那律陀・尊者[一一]難提・尊者[一二]金毘羅・尊者[一三]隷婆哆・尊者大日乾連・尊者大迦葉・尊者[一四]大拘絺羅・尊者[一五]大周那・尊者[一六]大迦旃延・尊者邠耨加兎寫長老・尊者[一七]耶舍行籌長老、是の如き比の餘の多く識られたる名德上尊長老比丘大弟子等も亦王舍城に遊び並に皆佛の[一八]葉屋の邊に近づきて住しぬ。この時世尊諸の比丘に告げたまはく『我今年老い體轉た衰弊し、壽過ぎて訖るに垂とす。宜しく侍者を須ふべし。汝等、見て爲に一侍者を擧げ、我が可非不可を瞻視し我が所說を受けてその義を失せざらしめよ』。こゝに於て尊者拘隣若卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、我願はくは可非不可を奉侍し、及び所說を受けてその義を失せざらん』。世尊告げて曰は

【一】拘隣若(Kondañña)。憍陳如。
【二】阿攝貝(Assaji)。阿說示、馬勝。
【三】跋提釋迦王(Bhaddiya) 跋提利迦、釋迦族出身なれば釋迦王と呼ぶ。
【四】摩訶男 (Mahānāma Kolita)。摩訶那摩なり、拘隷は拘利多族出身の意か。
【五】頞破(Vappa)婆頗、以上は所謂五比丘にて佛の初轉法輪に開悟せしもの『中本起經』にては頞波に代ふるに十力迦葉を以てす。
【六】耶舍(Yasa)。

の餘の樹影皆轉移するも、唯娑羅樹王のみ、その影移らず沙門瞿曇の身を蔭ふと。若し世尊日中の後一切の餘の樹影皆轉移するも、唯娑羅樹王のみ、その影移らず世尊の身を蔭ひぬとせば我これを世尊の未曾有法と受持せん。(21)我聞く、世尊ある時[一三]阿浮神室中に在しぬ。その時世尊夜を過ぎ平旦、衣を著け鉢を持して阿浮村に入り乞食を行じたまひ、乞食已に竟りて衣鉢を收擧し手足を澡洗し尼師檀を以て肩上に著け神室に入りて燕坐したまひぬ。その時天に大雷雨雹ありて四の牛と耕者二人を殺しぬ。彼の送葬の時大衆喧鬧し、その聲高大にして音響震動しぬ。こゝに於て世尊則ち晡時に於て燕坐より起ち、神室より出で露地に經行したまひし時、彼の大衆の中に一人有りて世尊の則ち晡時に於て燕坐より起ち神室より出で露地に經行したまふを見、卽ち佛に往詣し稽首して禮を作し佛に隨ひて經行しぬ。佛後に在るを見たまひ、彼の人に問ひて曰はく、何等を以ての故に大衆喧鬧しその聲高大にして音響震動するや、と。彼の人白して曰く、世尊、今日天に大雷雨雹ありて四の牛と耕者二人を殺しぬ。彼の送葬の時大衆喧鬧しその聲高大にして音響震動す。世尊、向に聲を聞きたまはざりしやと。世尊答へて曰はく、我聲を聞かずと。復問ひぬ、世尊、向に眠を爲したまひしやと。答へて曰はく、不なりと。復問ひぬ、世尊、時に寤めてこの大聲を聞きたまはざりしやと。答へて曰はく、是の如しと。その時彼の人すなはちこの念を作しぬ、甚奇甚特にして極息至寂なる[かな]、如來・無所著・等正覺の所行。所以者何。寤めて而もこの大音響を聞かずと。若し世尊寤めて而もこの大音聲を聞きたまはずとせば、我これを世尊の未曾有法と受持せん。(22)我聞く、[一四]世尊ある時[一五]鬱鞞羅[一六]尼連然河邊の[一七]阿闍惒羅尼拘類樹の下に在し、初めて佛道を得たまひぬ。その時大雨七日に至り、高下悉く滿ち潢滂横流しぬ。世尊中に於て露地に經行したまふに、その處塵起りぬと。若し世尊、潢滂横流するも世尊中に於て露地に經行したまふに、その處塵起りぬとせば我これを世尊の未曾有法と受持せん。(23)我聞く、摩王六年佛を逐ひ、その長短を求めて便を

[一三] 阿浮神(Ātumā)以下D. II.131『長阿含』三卷「遊行經」(大正藏、一の一九頁上欄)以下參照)。

[一四] Vin. i. 1『五分律』一五卷、『四分律』三一卷。

[一五] 鬱鞞羅(Uruvelā)。優樓頻羅林なり、佛陀伽耶の北、尼連禪河の西にあたる地點。

[一六] 尼連然河(Nelañjanā)尼連禪河とも書く。

[一七] 阿闍惒羅尼拘類(Ajapāla-Nigrodha)

く、世尊ある時鞞舍離の大林の中に遊びたまひぬ。その時諸の比丘鉢を露地に置きし時、世尊の鉢亦その中に在りき。一獼猴有り佛鉢を持ち去り、諸の比丘訶して佛鉢を破らんことを恐れき。佛諸の比丘に告げたまはく、止みね、止みね、訶すること莫れ。鉢を破らじと。時に彼の獼猴佛鉢を持ち去り一娑羅樹に至り徐々に樹に上り娑羅樹上に於て蜜を取りて鉢に滿し、徐々に樹を下り還りて佛所に詣り卽ち蜜鉢を以て世尊に奉上するに、世尊受けたまはざりき。時に彼の獼猴却きて一面に在り、樠を取り蟲を去り、旣に蟲を去り已りて、還り持ちて佛に上りぬ。佛復受けたまはざりき。獼猴復却きて一面に在り、水を取りて蜜の中に著け、持ち還りて佛に上りぬ。世尊すなはち受けたまひぬ。獼猴佛の蜜鉢を取りたまふを見已りて、歡喜踊躍し却行弄舞迴旋して去りぬと。若し世尊、彼の獼猴をして世尊の蜜鉢を取りたまふを見已りて歡喜踊躍し、却行弄舞迴旋して去らしめたまひぬとせば、我これを世尊の未曾有法と受持せん。(19)我聞く、世尊ある時鞞舍離の獼猴水邊の高樓臺觀に遊びたまひぬ。その時世尊〔一〇〕坐具を曝曬し抖擻拂拭したまひぬ。この時大なる非時の雲來り普く虛空を覆ひ雨らさんと欲して而も住まりて須待ちぬ。世尊、世尊坐具を曝曬し抖擻拂拭し一處に擧著し已りて掃箒を攝持し屋基上に住したまひぬ。こゝに於て大雲已に世尊の坐具を收擧したまへるを見、すなはち大雨を降し〔一一〕卑高の地に於て滂霈として平滿せしめぬと。若し世尊、彼の大雲已に世尊の坐具を收擧したまへるを見、すなはち大雨を下し卑高の地に於て滂霈として滿しぬとせば我これを世尊の未曾有法と受持せん。(20)我聞く、世尊ある時〔一二〕跋耆の中に遊び、溫泉林娑羅樹王の下に在りて坐したまひぬ。その時中後に一切の餘の樹影皆轉移するも、唯娑羅樹王のみ、その影移らず世尊の身を蔭ひぬ。すなはちこゝに於て羅摩園の主行きて園を視し時、日中後一切の餘の樹影皆轉移するも、唯娑羅樹王のみその影移らず世尊の身を蔭ふを見、すなはちこの念を作しぬ、沙門瞿曇甚奇甚特なり、大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。所以者何。日中の後一切

【一〇】坐具を日光に曝らしそれに附著せる塵を拂はれたるなり。

【一一】盛んに雨を降らせて卑き土地も高き土地も一面に水を漲したり。

【一二】跋耆（Vajji)。跋闍、伐地種族の名。

天の妓樂を鼓ち、天の青蓮華・紅蓮華・赤蓮華・白蓮華・天の文陀羅華及び細末の栴檀香もて世尊の上に散らしぬとせば、我これを世尊の未曾有法と受持せん。(16)我聞く、世尊ある時父白淨王の家に在し、晝田作を監し、閻浮樹の下に坐し、欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜樂ある初禪を得、成就して遊びたまひぬ。その時中後に一切の餘の樹影皆轉移するも、唯閻浮樹のみ、その影移らず世尊の身を蔭ひぬ。こゝに於て釋白淨往きて田作を觀、作人の所に至り問ひて曰く、作人、童子は何處ぞと。作人答へて曰く、天、童子今閻浮樹の下に在すと。こゝに於て釋白淨・閻浮樹に往詣しぬ。時に釋白淨・日中後一切の餘の樹影皆轉移するも、唯閻浮樹のみ、その影移らず世尊の身を蔭ふを見て、すなはちこの念を作しぬ、今この童子甚奇甚特なり、大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。所以者何。日中の後一切の餘の樹影皆轉移するも、唯閻浮樹のみ、その影移らず童子の身を蔭ふと。若し世尊日中の後一切の餘の樹影皆轉移するも唯閻浮樹のみ、その影移らず世尊の身を蔭ひぬとせば我これを世尊の未曾有法と受持せん。(17)我聞く、世尊ある時[七]鞞舍離の大林の中に遊びたまひぬ。こゝに於て世尊夜を過ぎ平旦に、衣を著け鉢を持して鞞舍離城に入り乞食を行じ、乞食已に竟りて衣鉢を收舉し、手足を澡洗し尼師檀を以て肩上に著け往きて林中に入り[八]一哆羅樹の下に至り尼師檀を敷きて結加趺坐したまひぬ。この時中後に一切の餘の樹影皆轉移するも、唯哆羅樹のみ、その影移らず世尊の身を蔭ひぬ。こゝに於て[九]釋摩訶男中後に仿佯して大林に往至しぬ。釋摩訶男日中後に一切の餘の樹影皆轉移するも、唯哆羅樹のみ、その影移らず世尊の身を蔭ふを見て、すなはちこの念を作しぬ、沙門瞿曇は甚奇甚特なり、大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。所以者何。日中の後一切の餘の樹影皆轉移するも、唯哆羅樹のみ、その影移らず沙門瞿曇の身を蔭ふと。若し世尊、日中の後一切の餘の樹影皆轉移するも、唯哆羅樹のみ、その影移らず世尊の身を蔭ひぬとせば、我これを世尊の未曾有法と受持せん。(18)我聞

【七】鞞舍離（Vesāli）毗（吠）舍離、大林（Mahāvana）。

【八】哆羅樹（Tāla）玄應音義二卷にいふ、「その形椶櫚に似たり、極めて高きものは七八十尺、果熟すれば、則ち赤きこと大石榴の如し。人多くこれを食ふ云云」貝多羅葉を作るはこの葉なり。

【九】釋摩訶男（Mahānāma）釋尊の從弟にして出家したるもの。

謂くこの日月は大如意足有り大威徳有り大福祐有り大威神有り、光の照さゞる所を彼盡く蒙耀しぬ。彼の衆生はこの妙光に因りて各々知を生じぬ、奇特の衆生生ずる有らん。奇特の衆生生ずる有らんと。[若し然らば]我これを世尊の未曾有法と受持せん。(9)我聞く、世尊體を舒べて母胎を出でたまひぬと。若し世尊體を舒べて母胎を出でたまひぬとせば我これを世尊の未曾有法と受持せん。(10)我聞く、世尊覆藏して母胎を出で血の汚す所と爲らず、亦精及び諸の不淨の汚す所と爲りたまはざりしと。若し世尊覆藏して母胎を出で血の汚す所と爲らず、亦精及び諸の不淨の汚す所と爲りたまはざりしとせば我これを世尊の未曾有法と受持せん。(11)我聞く、世尊初生の時[五]四天子有り手に極細衣を執りて、母の前に住し母をして歡喜せしめ、この童子甚奇甚特にして大如意足有り大威徳有り大福祐有り大威神有りと歎じぬと。若し世尊初生の時四天子有り手に細衣を執り、母の前に住し母をして歡喜せしめ、この童子甚奇甚特にして大如意足有り大威徳有り大福祐有り大威神有りと歎じぬとせば我、これを世尊の未曾有法と受持せん。(12)我聞く、世尊初生の時卽ち行くこと七歩、恐れず怖ぢず亦畏懼せずして、諸方を觀察したまひぬと。若し世尊初生の時卽ち行くこと七歩、恐れず怖ぢず亦畏懼せずして諸方を觀察したまひぬとせば我これを世尊の未曾有法と受持せん。(13)我聞く、世尊初生の時、則ち母の前に於て大池を生じその水岸に滿ち、母をして此に於て用ひて清淨なるを得しめぬと。若し世尊初生の時則ち母の前に於て大池を生じその水岸に滿ち、母をして此に於て用ひて清淨なるを得しめぬとせば、我これを世尊の未曾有法と受持せん。(14)我聞く、世尊初生の時上虛空中より雨水注ぎ下り一は冷、一は暖にして世尊の身に灌ぎぬと。若し世尊初生の時上虛空中より雨水注ぎ下り一は冷、一は暖にして世尊の身に灌ぎぬとせば我これを世尊の未曾有法と受持せん。(15)我聞く、世尊初生の時諸天上に於て天の妓樂を鼓ち、天の靑蓮華・紅蓮華・赤蓮華・白蓮華、天の[六]文陀羅華及び細末の栴檀香もて世尊の上に散らしぬと。若し世尊初生の時諸天上に於て

【五】四天子とは、いはく乾闥婆の主、東方持國天王、鳩槃茶の主、南方增長天王、那伽の主、西方廣目天王、夜叉の主、北方多聞天王これなり。

【六】文陀羅花(Mandirava) 曼陀羅・圓華・適意華。

世尊の未曾有法と受持せん。(4)我聞く、世尊兜瑟哆天に在し、彼に於て命終り知りて母胎に入りたまひぬ。この時一切の天地を震動し大妙光を以て普く世間を照したまふに、乃ち幽隱諸の闇冥處に至るまで、障蔽有ること無し。謂くこの日月は大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。[三]光の照さゞる所を彼盡く蒙耀しぬ。彼の衆生はこの妙光に因りて各々知を生じぬ、奇特の衆生生ずる有らん、奇特の衆生生ずる有らんと。(若し)[四]世尊兜瑟哆天に在し彼に於て命終り、知りて母胎に入りたまひぬ。この時一切の天地を震動し大妙光を以て普く世間を照したまふに、乃ち幽隱諸の闇冥處に至るまで障蔽有ること無し。謂くこの日月は大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り、光の照さゞる所を彼盡く蒙耀しぬ。彼の衆生はこの妙光に因りて各々知を生じぬ、奇特の衆生生ずる有らん、奇特の衆生生ずる有らんと。[若し然りとせば]我これを世尊の未曾有法と受持せん。(5)我聞く、世尊知りて母胎に住し右脇に依倚したまひぬと。若し世尊知りて母胎に住し右脇に依倚したまひぬとせば我これを世尊の未曾有法と受持せん。(6)我聞く、世尊體を舒べて母胎に住したまひぬと。若し世尊體を舒べて母胎に住したまひぬとせば、我これを世尊の未曾有法と受持せん。(7)我聞く、世尊覆藏して母胎に住し血の汚す所と爲らず、亦精及び諸の不淨の汚す所と爲りたまはざりしと。若し世尊覆藏して母胎に住し血の汚す所と爲らず、亦精及び諸の不淨の汚す所と爲りたまはざりしとせば、我これを世尊の未曾有法と受持せん。(8)我聞く、世尊知りて母胎を出でたまひぬ。この時一切の天地を震動し大妙光を以て普く世間を照したまふに乃ち幽隱諸の闇冥處に至るまで、障蔽有ること無し。謂くこの日月は大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り、光の照さゞる所を彼盡く蒙耀しぬ。彼の衆生はこの妙光に因りて各々知を生じぬ、奇特の衆生生ずる有らん、奇特の衆生生ずる有らんと。(若し)世尊知りて母胎を出でたまひぬ。この時一切の天地を震動し大妙光を以て普く世間を照したまふに、乃ち幽隱諸の闇冥處に至るまで障蔽有ること無し。

【三】日と月とは大威德大神通あるに拘らず、尙ほその光達せざる所あり、それをこの母胎に入りたる有情(卽ち後釋尊となるべき)は盡く照す。

【四】原漢文「若世尊在二兜瑟哆天一云云」この「若」をこの節の終に送りたり。

卷の第八

未曾有法品第四〔十經有り〕

未曾有・侍者・薄拘羅・阿修羅・地動及び瞻波・郁伽・手〔長者〕の二は各二あり。

三十二、未曾有法經第一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時尊者阿難則ち餔時に於て燕坐より起ちて、佛所に往詣し稽首して足を禮し、却きて一面に住し白して曰く『(1)世尊、我聞く、世尊迦葉佛の時、始めて佛道を願ひ梵行を行じたまひぬと。若し世尊迦葉佛の時、始めて佛道を願ひ梵行を行じたまひぬとせば、我これを世尊の未曾有法と受持せん。(2)我聞く、世尊迦葉佛の時始めて佛道を願ひ梵行を行じ兜瑟哆天に生じたまひぬと。若し世尊迦葉佛の時、始めて佛道を願ひ梵行を行じ、兜瑟哆天に生じたまひぬとせば、我これを世尊の未曾有法と受持せん。(3)我聞く、世尊迦葉佛の時、始めて佛道を願ひ梵行を行じ兜瑟哆天に生じたまふに、世尊後に生じて、天壽・天色・天譽の三事を以て前生の兜瑟哆天者に勝りたまひぬ。こゝを以ての故に、諸の兜瑟哆天歡喜踊躍し、この天子の甚奇甚特にして、大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神あるを歎じぬ。所以者何。彼後に來生して天壽・天色・天譽の三事を以て前生の兜瑟哆天者に勝る「が故なり」と。若し世尊迦葉佛の時、始めて佛道を願ひ梵行を行じ、兜瑟哆天に生じたまふに、世尊後に生じて天壽・天色・天譽の三事を以て前生の兜瑟哆天者に勝りたまひ、こゝを以ての故に、諸の兜瑟哆天歡喜し踊躍し、この天子の甚奇甚特にして、大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有るを歎じぬ。所以者何。彼後に來生し天壽・天色・天譽の三事を以て前生の兜瑟哆天者に勝る「が故なり」とせば、我これを

【一】M. 123 Acchariabbhutadhamma-sutta.

【二】兜瑟哆(Tusita)。

れを正命と名づく。諸賢、云何が[一八]正方便なる。謂く聖弟子苦はこれ苦なりと念ずる時、習はこれ習、滅はこれ滅、道はこれ道なりと念ずる時、或は本所作を觀、或は諸行を學念し、或は諸行の災患を見、或は涅槃止息を見、或は著無くして念觀し、善く心解脱する時、中に於て若し精進方便有れば、一向に精勤して求め、有力にして趣向し專著して捨てず、亦衰退せず、正にその心を伏す。これを正方便と名づく。諸賢、云何が[一九]正念なる。謂く聖弟子苦はこれ苦なりと念ずる時、習はこれ習、滅はこれ滅、道はこれ道なりと念ずる時、或は本所作を觀、或は諸行を學念し、或は諸行の災患を見、或は涅槃止息を見、或は著無くして念觀し善く心解脱する時、中に於て[二〇]若し順念を念じ、不向念に背き、遍念を念じ、復憶念を憶ひ、正しくして心の所應を忘れず。これを正念と名づく。諸賢、云何が[二一]正定なる。謂く聖弟子苦はこれ苦なりと念ずる時、習はこれ習、滅はこれ滅、道はこれ道なりと念ずる時、或は本所作を觀、或は諸行を學念し、或は諸行の災患を見、或は涅槃止息を見、或は著無くして念觀し、善く心解脱する時、中に於て若し心住し禪住し、順住して亂れず散らず、正定を攝止す。これを正定と名く。諸賢、過去時にこれ苦滅道聖諦なり。未來現在時にこれ苦滅道聖諦なり。眞諦にして虚ならず如を離れず、亦顚倒に非ず。眞諦審實にして如是諦に合ふ。聖の有する所、聖の知る所、聖の見る所、聖の了ずる所、聖の得る所、聖の等正覺する所なり。此の故に苦滅道聖諦を説く。是に於て頌して曰く、

佛諸法に明達し、　無量の善德を見、　苦習滅道諦を、　善く顯現分別す。

尊者舍梨子の所説是の如し。彼の諸の比丘尊者舍梨子の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第七

【一八】正方便(Sammāvāyāma)＝正精進。

【一九】正念(Sammāsati)。

【二〇】この一段讀み易からず、通じ易からず、三本の訂正に隨ひて次の如く譯せり。

【二一】正定(Sammāsamādhi)。

所なり。この故に愛滅苦滅聖諦を說く。(4)諸賢、云何が苦滅道聖諦なる。謂く正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定なり。諸賢、云何が[一三]正見なる。謂く聖弟子、苦は苦なりと念ずる時、習はこれ習、滅はこれ滅、道はこれ道なりと念ずる時、或は本所作を觀、或は諸行を學念し或は諸行の災患を見、或は涅槃止息を見、或は著無くして、善く心解脫を念觀する時、中に於て遍擇を擇び、擇法を決擇し、遍視を視、觀察明達す。これを正見と名づく。諸賢、云何が[一四]正志なる。謂く聖弟子苦はこれ苦なりと念ずる時、習はこれ習、滅はこれ滅、道はこれ道なりと念ずる時、或は本所作を觀、或は諸行を學念し、或は諸行の災患を見、或は涅槃止息を見、或は著無くして、念觀し、善く心解脫する時、中に於て心遍伺を伺し、隨順伺し、念ずべきは則ち念じ、望むべきは則ち望む。これを正志と名く。諸賢、云何が[一五]正語なる。謂く聖弟子苦はこれ苦なりと念ずる時、習はこれ習、滅はこれ滅、道はこれ道なりと念ずる時、或は本所作を觀、或は諸行を學念し、或は諸行の災患を見、或は涅槃止息を見、或は著無くして念觀し善く心解脫する時、中に於て口の四妙行を除ける諸の餘の口惡行を遠離除斷し、行ぜず作さず合はず會はず。これを正語と名づく。諸賢、云何が[一六]正業なる。謂く聖弟子苦はこれ苦なりと念ずる時、習はこれ習、滅はこれ滅、道はこれ道なりと念ずる時、或は本所作を觀、或は諸行を學念し、或は諸行の災患を見、或は涅槃止息を見、或は著無くして念觀し、善く心解脫する時、中に於て身三妙行を除ける諸の餘の身惡行を遠離除斷し、行ぜず作さず合はず會はず。これを正業と名づく。諸賢、云何が[一七]正命なる。謂く聖弟子苦はこれ苦なりと念ずる時、習はこれ習、滅はこれ滅、道はこれ道なりと念ずる時、或は本所作を觀、或は諸行を學念し、或は諸行の災患を見、或は涅槃止息を見、或は著無くして念觀し、心解脫する時、中に於て無理に求むるに非ず、多欲にして厭足無きを以てせず、種々の伎術・呪說・邪命もて活くるを爲さず、但法を以て衣を求めて非法を以てせず。亦法を以て食・床座を求めて非法を以てせず。こ

(4)道聖諦。
【一三】正見(Sammādiṭṭhi)。
【一四】正志(Sammāsaṅkappa)＝正思惟。
【一五】正語(Sammāvācā)。
【一六】正業(Sammākammanta)。
【一七】正命(Sammājīva)。

れを愛習苦習聖諦と謂ふ。是の如くこれを知るに、云何が知るや。若し妻子・奴婢・給使・眷屬・田地・屋宅・店肆・出息・財物を愛する有り、所作業を爲し愛有り膩有り染有り著有れば、これを名づけて習と爲す。彼この愛習苦習聖諦を知る。諸賢、過去時にこれ愛習苦習聖諦なり、未來現在時にこれ愛習苦習聖諦なり、眞諦にして虛ならず、如を離れず、亦顚倒に非ず。眞諦審實にして如是諦に合ふ。聖の有する所、聖の知る所、聖の見る所、聖の了ずる所、聖の得る所、聖の等正覺する所なり、この故に愛習苦習聖諦を說く。(3)諸賢、云何が愛滅苦滅聖諦なる。謂く衆生實に愛する內の六處有り。眼處・耳・鼻・舌・身・意處なり。彼若し解脫して、染まず著せず、斷じ捨て吐き盡し、欲無く滅し止沒すれば、これを苦滅と名づく、諸賢、多聞の聖弟子は、我是の如くこの法を知り、是の如く見、是の如く了じ、是の如く視、是の如く覺ると知る。これを愛滅苦滅聖諦と謂ふ。是の如く之を知るに云何が知るや。若し妻子・奴婢・給使・眷屬・田地・屋宅・店肆・出息・財物を愛せざる有り、所作業を爲さず、彼若し解脫して染まず著せず、斷じ捨て吐き盡し、欲無く滅し止沒すれば、これを苦滅と名づく。彼この愛滅苦滅聖諦を知る。是の如く外處・更樂・覺想・思愛亦復是の如し。諸賢、衆生實に六界を愛する有り。地界・水・火・風・空・識界なり。彼若し解脫して染まず著せず、斷じ捨て吐き盡し、欲無く滅し止沒すれば、これを苦滅と名づく。諸賢、多聞の聖弟子は我是の如くこの法を知り、是の如く見、是の如く了じ、是の如く視、是の如く覺ると知る。これを愛滅苦滅聖諦と謂ふ。是の如くこれを知る。云何が知るや。若し妻子・奴婢・給使・眷屬・田地・屋宅・店肆・出息・財物を愛せざる有り、所作業を爲さず、彼若し解脫して染まず著せず、斷じ捨て吐き盡し、欲無く滅し止沒すれば、これを苦滅と名づく。彼この愛滅苦滅聖諦を知る。諸賢、過去時にこれ愛滅苦滅聖諦なり。未來現在時にこれ愛滅苦滅聖諦なり。眞諦にして虛ならず如を離れず亦顚倒に非ず。眞諦審實にして如是諦に合ふ。聖の有する所、聖の知る所、聖の見る所、聖の了ずる所、聖の得る所、聖の等正覺する

(3)滅聖諦。

と。これ亦欲するを以て得べからず。諸賢、衆生實に樂を生じて而も愛念すべし。彼この念を作す、若し我樂を生じて愛念すべくばこれをして常恒久住にして不變易の法ならしむるを得んと欲すと。これ亦欲するを以て而も得べからず。諸賢、衆生實に思想を生じて而も樂しむべからず愛念すべからず。彼この念を作す、若し我思想を生じて而も樂しむべからず愛念すべからざれば、これを轉じて愛念すべからしむるを得んと欲すと。これ亦欲するを以て而も得べからず。諸賢、衆生實に思想を生じて而も愛念すべし。彼この念を作す、若し我思想を生じて愛念すべくば、これをして常恒久住にして、不變易の法ならしむるを得んと欲すと。これ亦欲するを以て而も得べからず。諸賢、所求不得苦を説くはこれに因るが故に説く。諸賢、略して五盛陰苦を説くはこれ何に因りて説くや。謂く色盛陰・覺想行識盛陰なり。諸賢、略して五盛陰は苦なりと説くはこれに因るが故に説く。諸賢、過去時にこれ苦聖諦なり。未來現在時にこれ苦聖諦なり。眞諦にして虚ならず如を離れず、亦顚倒に非ず。眞諦審實にして、如是諦に合ふ。聖の有する所、聖の知る所、聖の見る所、聖の了する所、聖の得る所、聖の等正覺する所なり。この故に苦聖諦を説く。(2)諸賢、云何が愛習苦習聖諦なる。謂く衆生實に愛する內の六處有り。眼處・耳・鼻・舌・身・意處なり。中に於て若し愛有り膩有り染有り著有れば、これを名づけて習と爲す。諸賢、多聞の聖弟子は我是の如くこの法を知り是の如く見、是の如く了じ、是の如く視、是の如く覺ると知る。これを愛習苦習聖諦と謂ふ。是の如くこれを知り、云何が知るや。若し妻子・奴婢・給使・眷屬・田地・屋宅・店肆・出息・財物を愛する有り、所作業を爲し、愛有り膩有り染有り著有れば、これを名づけて習と爲すと、彼この愛習苦習聖諦を知る。是の如く外處・更樂・覺想・思愛亦復是の如し。諸賢、衆生實に六界を愛する有り。地界・水・火・風・空・識界なり。中に於て若し愛有り膩有り染有り著有れば、これを名づけて習と爲す。諸賢、多聞の聖弟子は我是の如くこの法を知り是の如く見、是の如く了じ、是の如く視、是の如く覺ると知る。こ

【三】五盛陰苦。

(2)習聖諦。

惱・憂慼して遍受を受け遍覺を覺す。心壯熱・煩惱・憂慼して遍受を受け、遍覺を覺す。身心壯熱・煩惱・憂慼して、遍受を受け、遍覺を覺す。諸賢、死苦を說くはこれに因るが故に說く。諸賢、怨憎會苦を說くはこれ何に因りて說くや。諸賢、怨憎會は謂く、衆生實に內の六處有り。不愛の眼處・耳・鼻・舌・身・意處なり。彼同じく會ひて一となり、攝和習有り共に合ひて苦を爲す。是の如く外處・更樂・覺想・思愛亦復かくの如し。諸賢、衆生實に六界有り。不愛の地界・水・火・風・空・識界なり。彼同じく會ひて一となり、攝和習有り共に合ひて苦を爲す。これを怨憎會と名づく。諸賢、怨憎會苦とは謂く衆生怨憎に會ふ時、身苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。心苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。身心苦を受け、遍受を受け遍覺を覺す。諸賢、怨憎會苦を說くはこれに因るが故に說く。諸賢、愛別離苦を說くはこれ何に因りて說くや。諸賢、愛別離苦とは謂く衆生實に內の六處有り。愛の眼處・耳・鼻・舌・身・意處なり。彼異りて分散し相應するを得ず、別離して會はず攝せず習せず和合せずして苦を爲す。かくの如く外處・更樂・覺想・思愛亦復かくの如し。諸賢、衆生實に六界有り。愛の地界・水・火・風・空・識界なり。彼異りて分散し相應するを得ず別離して會はず攝せず習せず、和合せずして苦を爲す。これを愛別離と名づく。諸賢、愛別離苦とは謂く、衆生別離する時、身苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。心苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。身心苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。諸賢、愛別離苦を說くはこれに因るが故に說く。諸賢、所求不得苦を說くはこれ何に因りて說くや。諸賢、謂く衆生生の法にして生の法を離れず、我をして而も生せざらしむるを得んと欲せば、これ實に欲するを以て而も得べからず。老の法、死の法、愁「の法亦然り」。憂慼の法にして憂慼の法を離れず。我をして憂慼せざらしむるを得んと欲せば、これ亦欲するを以て而も得べからず。諸賢、衆生實に苦を生じて而も樂しむべからず愛念すべからず。彼この念を作す、若し我苦を生じて而も樂しむべからず、愛念すべからざれば、これを轉じて愛念すべからしむるを得んと欲す

【九】怨憎會苦。

【一〇】愛別離苦。

【一一】所求不得苦。

覺を覺す。諸賢、生苦を説くはこれに因るが故に説く。諸賢、[六]老苦を説くはこれ何に因りて説くや。諸賢、老とは彼の衆生、彼々の衆生種類、彼老耄のために、頭白く齒落ち、盛壯日に衰へ、身曲り脚戾り、體重く氣上り、杖に拄りて行き、肌縮み皮緩み、皺麻子の如く、諸根毀熟、顏色醜惡、これを名けて老となす。諸賢、老苦とは謂く衆生老ゆる時、身苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。心苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。身心苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。身熱して遍受を受け、遍覺を覺す。身心熱して遍受を受け、遍覺を覺す。身壯熱・煩惱・憂慼して遍受を受け、遍覺を覺す。心壯熱・煩惱・憂慼して遍受を受け、遍覺を覺す。身心壯熱・煩惱・憂慼して遍受を受け、遍覺を覺す。諸賢、老苦を説くはこれに因るが故に説く。諸賢、[七]病苦を説くはこれ何に因りて説くや。諸賢、病は謂く頭痛・眼痛・耳痛・鼻痛・面痛・脣痛・齒痛・舌痛・齶痛・咽痛・風喘・咳嗽・喝吐・喉痺・癲癇・癰癭・經溢・赤膽・壯熱・枯槁・痔瘻・下利なり。若し是の如き比、餘の種々の病ありて更樂觸より生じて心を離れず、身中に立在す。これを名けて病となす。諸賢、病は苦なりとは謂く、衆生病む時、身苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。心苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。身心苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。身熱して遍受を受け、遍覺を覺す、心熱して遍受を受け、遍覺を覺す。身心熱して遍受を受け遍覺を覺す。身壯熱・煩惱・憂慼して遍受を受け遍覺を覺す、心壯熱・煩惱・憂慼して遍受を受け、遍覺を覺す。身心壯熱・煩惱・憂慼して遍受を受け、遍覺を覺す。諸賢、病苦を説くはこれに因るが故に説く。諸賢、[八]死苦を説くはこれ何に因りて説くや。諸賢、死とは謂く彼の衆生、彼々の衆生種類、命終り無常にして死喪散滅し、壽盡き破壞して命根閉塞す。これを名けて死となす。諸賢、死苦とは謂く衆生死する時、身苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。心苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。身心苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。身熱して遍受を受け、遍覺を覺す。心熱して遍受を受け、遍覺を覺す。身心熱して遍受を受け、遍覺を覺す。身壯熱・煩

【六】老苦。
【七】病苦。
【八】死苦。

說法有り。謂く四聖諦なり。廣く攝せられ廣く觀られ分別發露せられ、開仰・施設・顯示・趣向せらる。舍梨子比丘は[三]聰慧・速慧・捷慧・利慧・廣慧・深慧・出要慧・明達慧・辯才慧あり。舍梨子比丘實慧を成就す。所以者何。謂く我略してこの四聖諦を說けば、舍梨子比丘則ち能く他の爲に廣く敎へ、廣く觀、分別發露し、開仰・施設・顯現・趣向す。舍梨子比丘この四聖諦を廣く敎へ、廣く示し、分別發露し、開仰・施設・顯現・趣向する時、無量の人をして觀るを得しむ。舍梨子比丘は能く正見を以て導御を爲し、目乾連比丘は能く最上眞際に立たしむ。謂く究竟漏盡なり。舍梨子比丘は諸の梵行を生ずること猶ほ生母の如し。目連比丘は諸の梵行を長養すること猶ほ養母の如し。こゝを以て諸の梵行者應に舍梨子目乾連比丘を奉事し供養し恭敬し禮拜すべし。所以者何。舍梨子・目乾連比丘は諸の梵行者の爲に義と饒益を求め安隱快樂を求む』。その時世尊是の如く說き已りて卽ち坐より起ち、室に入りて燕坐したまひぬ。こゝに於て尊者舍梨子諸の比丘に告げぬ『諸賢、世尊は我等の爲に出世したまへり。謂く他の爲にこの四聖諦を廣く敎へ、廣く示し、分別發露し、開仰・施設・顯現・趣向したまふ。云何が四となす。謂く苦聖諦・苦習・苦滅・苦滅道聖諦なり。(1)諸賢、云何が苦聖諦なる。謂く[四]生は苦なり、老は苦なり、病は苦なり、死は苦なり、怨憎と會ふは苦なり、愛「者」と別離するは苦なり、求むる所を得ざるは苦なり、略して五盛陰は苦なり。諸賢、[五]生苦を說くは、これ何に因りて說くや。諸賢、生は謂く彼の衆生、彼々の衆生種類、生ずれば則ち生じ、出れば則ち出で、成れば則ち成り、五陰を興起し已りて命根を得。これを名けて生となす。諸賢、生苦なるは謂く衆生生ずる時、身苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。心苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。身心苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。身熱して苦を受け、遍受を受け、遍覺を覺す。心熱して遍受を受け、遍覺を覺す。身心熱して遍受を受け、遍覺を覺す。身壯熱・煩惱・憂慼して遍受を受け、遍覺を覺す。心壯熱・煩惱・憂慼して遍受を受け、遍覺を覺す。身心壯熱・煩惱・憂慼して遍受を受け、遍

【三】この一連九語巴利文になし。六卷「梵志陀然經」並に「敎化病經」二九卷「請請經」にも出づ、何れも舍梨子に就て言はれたる語なり。

(1)苦聖諦。

【四】八苦。三卷「度經」註を見よ。

【五】生苦。

す。諸賢、世尊亦かくの如く說きたまふ、若し緣起を見ればすなはち法を見、若し法を見ればすなはち緣起を見る。所以者何。諸賢、世尊五盛陰を說きたまひ、「諸蘊は」因緣より生ず。色盛陰・覺想行識盛陰なりと。諸賢、若し內の耳・鼻・舌・身・意處壞れ、外法すなはち光明の所照と爲らざれば、すなはち念有る無く、意識生ずるを得ず。諸賢、若し內の意處壞れず、外法すなはち光明の所照と爲ればすなはち念有り、意識生ずるを得。諸賢、內意處及び法意識、外色法を知る。これ色陰に屬す。若し覺有ればこれ覺陰なり。若し想有ればこれ想陰なり。若し思有ればこれ思陰なり。若し識有ればこれ識陰なり。かくの如く陰を觀じて合會す。諸賢、世尊亦かくの如く說きたまふ、若し緣起を見ればすなはち法を見、若し法を見ればすなはち緣起を見ると。所以者何。諸賢、世尊五盛陰を說きたまひ、因緣より生ず。色盛陰・覺想行識盛陰なり。彼この過去未來現在の五盛陰を厭ひ、厭ひ已りてすなはち欲無く、無欲なり已ればすなはち解脫す。解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち、所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。諸賢、これを比丘一切大學すと謂ふ」。尊者舍梨子の所說の如し。彼の諸の比丘尊者舍梨子の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

三十一、分別聖諦經第十一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『こはこれ正行說法・謂く四聖諦なり。廣く攝せられ廣く觀られ分別發露せられ、開仰・施設・顯示・趣向せらる。過去の諸の如來・無所著・等正覺(彼)にも亦この正行說法有りき。謂く四聖諦なり。廣く攝せられ廣く觀られ、分別發露せられ開仰・施設・顯示・趣向せられき。未來の諸の如來・無所著・等正覺(彼)にも亦この正行說法有らん。謂く四聖諦なり。廣く攝せられ、廣く觀られ、分別發露せられ、開仰・施設・顯示・趣向せられん。我今現に如來・無所著・等正覺、亦この正行

【一】 M. 141. Saccavibhaṅga-sutta佛說「四諦經」「增一阿含」二七品の一。

【二】 巴利文には左の七語あり。
說話(Ācikkhanā)、
演說(Desanā)、
告示(Paññāpana)、
確立(Paṭṭhapanā)、
開顯(Vivaraṇā)、
分別(Vibhajanā)、
宣示(Uttānīkamma)。

安定して一心なり。我この身を受けて應に拳扠・石擲及び刀杖を加へらるゝを致すべし。但當に精勤して世尊の法を學ぶべしと。諸賢、世尊またかくの如く說きたまふ。賊來りて利き刀鋸を以て節節に身を解くあるが若し。若し汝賊の爲に利き刀鋸を以て節々に身を解かるゝ時、或は心變易し或は惡語言すれば汝則ち衰退す。汝當にこの念を作すべし、若し賊の來る有りて利き刀鋸を以て節々に我が身を解かばこれに因りて我が心をして變易せず惡語言せざらしめ、當に彼の節々に我が身を解く者の爲に哀愍心を起すべし。彼の人の爲の故に心慈と俱にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。かくの如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く、心慈と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして、善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶと。諸賢、彼の比丘若し佛・法・衆に因りて善相應の捨に任せざれば諸賢、彼の比丘應に慚愧羞厭すべし。我利に於て利無く德に於て、德無し。謂く我佛・法・衆に因りて善相應の捨に任せずと。諸賢、猶ほ初めて迎へたる新婦の如し。その姑嫜を見若しは夫主を見ては則ち慚愧羞厭す。諸賢、當に知るべし。比丘も亦復かくの如く應に慚愧羞厭すべし、我利に於て利無く德に於て德無し。謂く我佛・法・衆に因りて善相應の捨に任せずと。彼慚愧羞厭するに因るが故にすなはち善相應の捨に住す。これ妙息寂にして謂く一切の有を捨て愛を離れ欲無く滅盡して餘り無し。諸賢、これを比丘一切大學すと謂ふ。諸賢、猶ほ材木に因り、泥土に因り水草に因りて空を覆裹してすなはち屋の名を生ずるが如し。諸賢、當に知るべし。この身も亦復かくの如く筋骨に因り皮膚に因り肉血に因り、空を纏裹してすなはち身の名を生ず。諸賢、若し內の眼處壞れ、外色すなはち光明の所照と爲らざれば則ち念有る無く眼識生ずるを得ず。諸賢、若し內の眼處壞れず、外色すなはち光明の所照と爲ればすなはち念有り眼識生ずるを得。諸賢、內の眼處及び色・眼識ありて外の色を知る。これ色陰に屬す。若し覺有ればこれ覺陰なり。若し想有ればこれ想陰なり。若し思有ればこれ思陰なり。若し識有ればこれ識陰なり。是の如く陰を觀じて合會

風界なる。謂く內身中に在り、內の所攝にして風、風性動にして內の所受なり。これ云何と爲す。謂く上風・下風・腹風・掣縮風・刀風・蹖風・非道風・節々行風・息出風・息入風なり。かくの如き比「及び」この身中、餘に在る內の所攝にして風、風性動にして內の所受なる、諸賢、これを內風界と謂ふ。諸賢、外風界は謂く大これ、淨これ、不憎惡これなり。諸賢、時有りて外風界起る。風界起る時、屋を撥ひ、樹を拔き山を崩す。山巖を撥ひ已りてすなはち止み、纖毫も動かず。諸賢、外風界止みて後人民風を求むるに或はその扇を以てし、或は哆羅葉を以てし、或は衣を以て風を求む。この風界極大極淨極不憎惡なり。これ無常の法、盡の法、衰の法、變易の法なり。況やまたこの身暫らく住し愛の所受と爲るをや。謂く不多聞愚癡の凡夫而もこの念を作す。これ我、これ我所、我これ彼所なりと。多聞の聖弟子この念を作さず、これ我、これ我所、我これ彼所なりと。彼云何がこの念を作す。若し他人有りて罵詈捶打し瞋恚責數すればすなはちこの念を作す、我この苦を生ず。因緣より生じて因緣無きに非ず。云何が緣と爲す。苦更樂に緣ると。彼この更樂の無常を觀じ、覺想行識の無常を觀じ、彼の心、界に緣りて住し止り、一心と合し定んで移動せず。彼後時に於て他人來りて、柔辭軟言を語れば彼この念を作す、我この樂を生ず。因緣より生じて因緣無きに非ず。云何が緣と爲す。樂更樂に緣ると。彼この更樂の無常を觀じ、覺想行識の無常を觀じ彼の心、界に緣りて住し止り一心と合し定んで移動せず。彼後時に於て若し幼少・中年、長老來りて不可事を行ひ、或は拳を以て扠ち、或は石を以て擲ち、或は刀杖を加ふ。彼この念を作す、我この身を受く、色法麁質四大の種にして、父母より生じ、飲食長養し常衣被覆し、坐臥し按摩澡浴し强忍す。これ破壞の法なり、これ滅盡の法・離散の法なり。我この身に因りて拳扠、石擲及び刀杖を加へらる」を致すと。これに由るの故に彼極めて精勤して而も懈怠せず、正身正念にして忘れず癡ならず、安定して一心なり。彼この念を作す、我極めて精勤して懈怠せず、正身正念にして忘れず癡ならず、

文「象跡喩經」に出さず、Visuddhimagga 三五頁中に左の七種のみを出す。
Uddhaṅgamā vātā 上行風、
Adhogamā v tā 下行風、
Kucchisayā vātā 腹中に臥せる風(腸外)、
Koṭṭhāsayā vāt 胃中に臥せる風(腸內)、
Aṅgamaṅg'nusārino vātā 支節支節を巡行する風、
Assāso 息として內に入る風、
Passāso 息として外に出る風。

中年、長老來りて不可事を行ひ、或は拳を以て扠ち、或は石を以て擲ち、或は刀杖を加ふ。彼この念を作す、我この身を受く、色法麁質四大の種にして、父母より生じて飲食長養し、常衣被覆し、坐臥し按摩澡浴し强忍す。これ破壞の法なり、これ滅盡の法、離散の法なり。我この身に因りて拳扠・石擲及び刀杖を加へらるゝを致すと。これに由るの故に彼極めて精勤して而も懈怠せず、正身正念にして忘れず癡ならず、安定して一心なり。彼この念を作す、我極めて精勤して而も懈怠せず、正身正念にして忘れず癡ならず、安定して一心なり。我この身を受けて應に拳扠・石擲及び刀杖を加へらるゝを致すべし。但當に精勤して世尊の法を學すべしと。諸賢、世尊亦かくの如く說きたまふ、賊の來りて利き刀鋸を以て節々に身を解くあるが若し。若し汝賊の爲に利き刀鋸を以て節々に身を解かるゝ時、或は心變易し、或は惡語言すれば汝則ち衰退す。汝當にこの念を作すべし、若し賊の來る有りて利き刀鋸を以て節々に我が身を解かば、これに因りて我が心をして變易せず惡語言せざらしめ、當に彼の節々に我が身を解く者の爲に哀愍心を起すべし。彼の人の爲の故に、心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶと。諸賢、彼の比丘若し佛・法・衆に因りて善相應の捨に住せざれば諸賢、彼の比丘應に慚愧羞厭すべし、我利に於て利無く、德に於て德無し。謂く我佛・法・衆に因りて善相應の捨に住せずと。諸賢、猶ほ初めて迎へたる新婦の如し。その姑嫜を見、若しは夫主を見ては則ち慚愧羞厭す。諸賢、當に知るべし。比丘も亦復かくの如く應に慚愧羞厭すべし。我利に於て利無く德に於て德無し。謂く我佛・法・衆に因りて善相應の捨に住せずと。彼慚愧羞厭するに因るが故にすなはち善相應の捨に住す。これ妙息寂にして謂く一切の有を捨て愛を離れ欲無く滅盡して餘り無し。諸賢、これを比丘一切大學すと謂ふ。(4)諸賢、云何が風界なる。諸賢、謂く〔一〇〕風界に二有り。內風界有り外風界有り。諸賢、云何が內

(4)風界。
【一〇】これ等諸風の事は巴利

に於て德無し。謂く我佛・法・衆に因りて善相應の捨に住せずと。諸賢、猶ほ初めて迎へたる新婦の如し、その姑嫜を見、若しは夫主を見ては則ち慚愧羞厭す。諸賢、當に知るべし。比丘も亦復かくの如く應に慚愧羞厭すべし。我利に於て利無く、德に於て德無し。謂く我佛・法・衆に因りて善相應の捨に住せずと。彼慚愧羞厭するに因るが故にすなはち善相應の捨に住す。これ妙息寂にして謂く一切の有を捨て、愛を離れ欲無く滅盡して餘り無し。諸賢、これを比丘一切大學すと謂ふ。(3)諸賢、云何が火界なる。諸賢、謂く火界に二有りて內火界有り外火界有り。諸賢、云何が內火界なる。謂く內身中に在り、內の所攝にして火、火性熱にして內の所受なり。これを云何と爲す。[九]謂く身を暖め身を熱し煩悶・溫壯・飲食を消化す。かくの如き比、[及び]この身中、餘に在る內の所攝の火、火性熱にして內の所受なる。諸賢、これを內火界と謂ふ。諸賢、外火界は謂く大これ、淨これ、不憎惡これなり。諸賢、時有りて外火界起る。起り已りて村邑城郭山林曠野を燒く。彼を燒き已りて或は道に至り水に至り、受無くして而も滅す。諸賢、外火界滅して後人民火を求むるに、或は木を鑽り竹を截り或は珠燧を以てす。諸賢、この外火界・極大・極淨・極不憎惡なり。これ無常の法、盡の法、衰の法、變易の法なり。況やまたこの身暫く住し愛の所受と爲る。謂く不多聞愚癡の凡夫而もこの念を作す。これ我、これ我所、我これ彼所なりと。多聞の聖弟子この念を作さず、これ我、これ我所、我これ彼所なりと。彼云何がこの念を作す、若し他人有りて罵詈捶打し瞋恚責數すれば便ちこの念を作す、我この苦を生ず。因緣より生じて因緣無きに非ず。云何が緣と爲す。苦更樂に緣ると。彼この更樂の無常を觀じ、覺想行識の無常を觀じ彼の心、界に緣りて住し止り、一心と合し定んで移動せず。彼後時に於て他來りて柔辭軟言を語れば彼この念を作す、我この樂を生ず。因緣より生じて因緣無きに非ず。云何が緣と爲す。樂更樂に緣ると。彼この更樂の無常を觀じ、覺想行識の無常を觀じ彼の心、界に緣りて住し止り、一心と合し定んで移動せず。彼後時に於て若し幼少・

(3)火界。

【九】巴利文「よりて溫められ、よりて燒かれ、よりて熱せられ、よりて飲み食はれたるもの、よく消化するに至るもの。」

我これ彼所なりと。彼云何がこの念を作す。若し他人有りて罵詈捶打し瞋恚責數すればすなはちこの念を作す、我この苦を生ず。「これ」因緣より生じて因緣無きに非ず。云何が緣と爲す。苦更樂に緣ると。彼この更樂の無常を觀じ覺想行識の無常を觀じ彼の心、界に緣りて住し止り一心と合し定んで移動せず。彼後時に於て他人來りて柔辭軟言を語れば彼この念を作す、我この樂を生ず。因緣より生じ因緣無きに非ず。云何が緣と爲す。樂更樂に緣ると。彼この更樂の無常を觀じ覺想行識の無常を觀じ彼の心、界に緣りて住し止り一心と合し定んで移動せず。彼後時に於て若し幼少・中年、長者來りて不可事を行ひ、或は拳を以て扠ち、或は石を以て擲ち、或は刀杖を加ふ。彼この念を作す、我この身を受く、色法麁質四大の種なり、父母より生じて飲食長養し常衣被覆して坐臥し按摩浴澡して强忍す。これ破壞の法なり、これ滅盡の法、離散の法なり。我この身に因りて拳扠、石擲及び刀杖を加へらるゝを致すと。これに由るの故に彼極めて精勤して懈怠せず正身正念にして忘れず癡ならず、安定して一心なり。彼この念を作す、我極めて精勤にして懈怠せず、正身正念にして忘れず癡ならず、安定して一心なり。我この身を受け應に拳扠石擲及び刀杖を加へらるゝを致すべし。但當に精勤して世尊の法を學ぶべしと。諸賢、世尊亦かくの如く說きたまふ、賊の來りて利き刀鋸を以て節々に身を解くあるが若し。若し汝賊の爲に利き刀鋸を以て節々に身を解かるゝ時、或は心變易し或は惡語言すれば汝則ち衰退す。汝當にこの念を作すべし、若し賊の來る有りて利き刀鋸を以て節々に我が身を解くあらばこれに因りて我が心をして變易せず惡語言せざらしめ、當に彼の節々に我が身を解く者の爲に、哀愍の心を起すべし。彼の人の爲の故に心慈ゝ倶にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶと。諸賢、彼の比丘若し佛・法・衆に因りて善相應の捨に住せざれば諸賢、彼の比丘應に慚愧羞厭すべし。我利に於て利無く、德

世尊亦是の如く說きたまふ、賊の來りて利なる刀鋸を以て節々に身を解くあるが若し。若し汝賊の爲に利なる刀鋸を以て節々に身を解かるゝ時或は心變易し或は惡語言すれば汝則ち衰退す。汝當にこの念を作すべし、若し賊の來る有りて利なる刀鋸を以て節々に我が身を解くあらば、これに因りて我が心をして變易せず惡語言せざらしめ、當に彼の節々に我が身を解く者の爲に哀愍心を起すべし。彼の人の爲の故に心慈と俱にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。かくの如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心慈と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶと。諸賢、彼の比丘若し[六]佛・法・衆に因りて善相應の捨に任せざれば、諸賢、彼の比丘應に慚愧羞厭すべし、我利に於て利無く德に於て德無し。謂く我佛・法・衆に因りて善相應の捨に任せずと。諸賢、猶ほ初めて迎へたる新婦の如し、その姑嫜を見若しは夫主を見れば則ち慚愧羞厭す。諸賢、當に知るべし。比丘も亦復是の如く應に慚愧羞厭すべし、我利に於て利無く德に於て德無し。謂く我佛・法・衆に因りて善相應の捨に任せずと。彼慚愧羞厭するに因るが故に、すなはち善相應の捨に住す。これ妙息寂にして謂く、一切の有を捨て愛を離れ欲無く滅盡して餘り無し。[七]諸賢、これを比丘一切大學すと謂ふ。(2)諸賢、云何が水界なる。諸賢、謂く水界に二有り。內水界有り。外水界有り。諸賢、云何が內水界なる。謂く內身中に在り內の所攝にして水、水性潤にして內の所受なり。これを云何と爲す。謂く腦・腦根・淚・汗・涕・唾・膿・血・肪・髓・涎・膽・小便なり。是の如き比、[及び]この身中、餘に在る內の所攝にして水、水性潤にして內の所受なる、諸賢、これを內水界と謂ふ。諸賢、外水界は謂く大これ、淨これ、不憎惡これなり。諸賢、時有りて火災あり。この時外水界を滅す。諸賢、この外水界極大・極淨・極不憎惡なり。これ無常の法、盡の法、衰の法、變易の法なり。況やまたこの身暫らく住し愛の所受と爲るをや。謂く不多聞愚癡の凡夫而もこの念を作す、これ我、これ我所、我これ彼所なりと。多聞の聖弟子この念を作さず、これ我、これ我所、

【六】巴利文「諸賢、この比丘是の如く佛を念ひ、是の如く法を念ひ、是の如く僧を念へるに、若しかれの善に依れる捨、住立せざれば、彼はこれによりて心動き、心の不安を感ず。」

【七】巴利文「これだけにても諸賢、比丘は大に作したりといふ。」

(2)水界。

【八】洟(はな)の誤か。

内地界有り外地界有り。諸賢、云何が内地界なる。謂く[三]内身中に在り、内の所攝にして堅、堅性住にして内の所受なる。これを云何と爲す。謂く髮・毛・爪・齒・麁細の皮膚・肌肉・筋骨・心・腎・肝・肺・腸・胃・糞、かくの如き比、[及び]この身中、餘にある内の所攝にして[堅]、堅性住にして内の所受なる、諸賢、これを内地界と謂ふ。諸賢、外地界は謂く大これ、淨これ、不憎惡これなり。諸賢、時有りて火災あり。この時外地界を滅す。諸賢、この外地界は極大・極淨・極不憎惡なり。これ無常の法、盡の法、衰の法、變易の法なり。況やまたこの身暫く住して愛の所受と爲るをや。謂く不多聞愚癡の凡夫而もこの念を作す、これ我、これ我所、我はこれ彼所なりと。多聞の聖弟子この念を作さず、これ我、これ我所、我これ彼所なりと。彼云何がこの念を作す。若し他人有りて罵詈捶打し瞋恚責數すれば彼この念を作す、我この苦を生ずるは因緣より生じて因緣無きに非ずと。云何が緣と爲す。苦更樂に緣る。彼この更樂の無常を觀じ、覺想行識の無常を觀じ[四]彼の心、界に緣りて住し止り一心と合し定んで移動せず。彼後時に於て他人來りて柔辭軟言を語れば彼この念を作す、我この樂を生ず。因緣より生じて因緣無きに非ず。云何が緣と爲す。樂更樂に緣ると。彼この更樂の無常を觀じ、覺想行識の無常を觀じ、彼の心、界に緣りて住し止り一心と合し定んで移動せず。彼後時に於て若し幼少・中年・長老來りて不可事を行ひ、或は拳を以て扠ち、或は石を以て擲ち、或は刀杖を加ふ。彼この念を作す、我この身を受く、色法麁質にして四大の種なり。父母より生じて飲食長養し、常衣被覆し、坐臥し按摩澡浴し强忍す。これ破壞の法なり。これ滅盡の法、離散の法なり。我この身に因りて拳扠、石擲及び刀杖を加へらるゝを致すと。これに由るが故に彼極めて精勤して而も懈怠せず正身正念にして忘れず癡ならず安定して一心なり。彼この念を作す。[五]我極めて精勤して而も懈怠せず、正身正念にして忘れず、癡ならず安定して一心なり。我この身を受け應に拳扠、石擲及び刀杖を加へらるゝを致すべし。但當に精勤して世尊の法を學すべしと。諸賢、

【三】巴利文「内部的、個々的に固く、堅質に、[又はそれより]造られたる。」

【四】巴利文「界を所緣とせる彼の心は喜び、樂しみ、[界に]安立し、固着す。」

【五】巴利文「されど我精進を起して懶惰ならず、念を繋けて忘却せず、身安靜にして暴ならず、心定まりて一に歸す。」

定を八と爲す。これを行滅道の如眞を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有り、是の如く行の如眞を知り行習を知り行滅を知り行滅道の如眞を知れば、これを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ』。尊者舍梨子歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』。尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、若し比丘有り、無明已に盡き明已に生ぜばまた何等をか作さん』。尊者大拘絺羅答へて曰く『尊者舍梨子、若し比丘有り無明已に盡き明已に生ぜば、また作す所無し』。尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉。賢者大拘絺羅』。かくの如く彼の二尊更に互に義を說き、各歡喜奉行して坐より起ちて去りぬ。

三十、象跡喩經第十[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時尊者舍梨子諸の比丘に告げぬ『諸賢、若し無量の善法有るも彼の一切の法皆四聖諦に攝せられ、四聖諦中に來り入る。謂く四聖諦は一切の法に於て最も第一と爲す。所以者何。一切衆善の法を攝受するが故に、諸賢、猶ほ諸畜の跡象跡を第一と爲すが如し。所以者何。彼の象跡は最も廣大なるが故に。かくの如く諸賢、無量の善法彼の一切の法は皆四聖諦に攝せられ四聖諦中に來り入る。謂く四聖諦は一切の法に於て最も第一と爲す。云何が四と爲す。謂く苦聖諦・苦習・苦滅・苦滅道聖諦なり。諸賢、云何が苦聖諦なる。謂く生は苦なり、老は苦なり、病は苦なり、死は苦なり、怨憎會は苦なり、愛別離は苦なり、所求不得は苦なり。略して五盛陰は苦なり。[二]諸賢、云何が五盛陰は苦なる。謂く色盛陰と覺想行識盛陰となり。諸賢、云何が色盛陰なる。謂く色有り彼の一切は四大及び四大造なり。諸賢、云何が四大なる。謂く地界と水火風界となり。(1)諸賢、云何が地界なる。諸賢、謂く地界に二有り。

【一】M. 28 Mahā-Hatthi-padopama-sutta.

【二】第三卷、「度經」第三の註を見よ。

(1)地界。

名色滅道の如眞を知るや。謂く八支聖道、正見乃至正定を八と爲す。これを名色滅道の如眞を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有り是の如く名色の如眞を知り名色習を知り名色滅を知り名色滅道の如眞を知れば、これを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ』。尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』。尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法に入る「あり」や』。答へて曰く『有り、尊者舍梨子。(14)謂く比丘有りて識の如眞を知り識習を知り識滅を知り識滅道の如眞を知る。云何が識の如眞を知るや。謂く六識有り。[18]眼識・耳・鼻・舌・身・意識なり。これを識の如眞を知ると謂ふ。云何が識習の如眞を知るや。謂く行に因ればすなはち識有り。これを識習の如眞を知ると謂ふ。云何が識滅の如眞を知るや。謂く行滅すれば識すなはち滅す。これを識滅の如眞を知ると謂ふ。云何が識滅道の如眞を知るや。謂く八支聖道、正見乃至正定を八と爲す。これを識滅道の如眞を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有り是の如く識の如眞を知り識習を知り識滅を知り識滅道の如眞を知れば、これを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ』。尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』。尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法に入る「あり」や』。答へて曰く『有り、尊者舍梨子。(15)謂く比丘有りて行の如眞を知り行習を知り行滅を知り行滅道の如眞を知る。云何が行の如眞を知るや。謂く三行有り。身行・口行・意行なり。これを行の如眞を知ると謂ふ。云何が行習の如眞を知るや。謂く無明に因ればすなはち行有り。これを行習の如眞を知ると謂ふ。云何が行滅の如眞を知るや。謂く無明滅すれば行すなはち滅す。これを行滅の如眞を知ると謂ふ。云何が行滅道の如眞を知るや。謂く八支聖道、正見乃至正

(14)識の四諦。

【一八】眼識(Cakkhu-viññāṇa)耳(sota-)鼻(Ghāna-)舌(Jivhā-)身(Kāya-)意識(Mano-viññāṇa)。

(15)行の四諦。

ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有り是の如く更樂の如眞を知り更樂習を知り更樂滅を知り更樂滅道の如眞を知れば、これを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ』尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』。尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得正法に入る[あり]や』。答へて曰く『有り、尊者舍梨子。(13)謂く比丘有りて六處の如眞を知り六處習を知り六處滅を知り六處滅道の如眞を知る。云何が六處の如眞を知るや。謂く[一四]眼處・耳・鼻・舌・身・意處なり。これを六處の如眞を知ると謂ふ。云何が六處習の如眞を知るや。謂く名色に因りてすなはち六處有り。これを六處習の如眞を知ると謂ふ。云何が六處滅の如眞を知るや。謂く名色滅すれば六處すなはち滅す。これを六處滅の如眞を知ると謂ふ。云何が六處滅道の如眞を知るや、謂く八支聖道、正見乃至正定を八と爲す。これを六處滅道の如眞を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有り是の如く六處の如眞を知り六處習を知り六處滅を知り六處滅道の如眞を知れば、これを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ』尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』。尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法に入る[あり]や』。答へて曰く『有り、尊者舍梨子。謂く比丘有りて名色の如眞を知り名色習を知り名色滅を知り名色滅道の如眞を知る。云何が名色を知るや。謂く[一五]四非色陰を名と爲す。云何が色を知るや。謂く[一六]四大及び[一七]四大造を色と爲す。こゝに色を說き前に名を說きてこれを名色と爲す。これを名色の如眞を知ると謂ふ。云何が名色習の如眞を知るや。謂く識に因りてすなはち名色有り。これを名色習の如眞を知ると謂ふ。云何が名色滅の如眞を知るや。謂く識滅すれば名色すなはち滅す。これを名色滅の如眞を知ると謂ふ。云何が

(13)六處の四諦。

【一四】眼處(Cakkhu-āyatana) 耳(Sota-) 鼻(Ghāna-) 舌(Jivhā-) 身(Kāya-) 意處(Mano-āyatana)。

【一五】四非色陰 (Cattāro arūpakkhandhā) 受・想・行・識の四をいふ。

【一六】四大 (Cattāro mahābhūtā)地・水・火・風。

【一七】Catunnaṁ mahābhūtānaṁ upādāya rūpaṁ 四大より造られたる物體。

道の如眞を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有り是の如く愛の如眞を知り愛習を知り愛滅を知り愛滅道の如眞を知れば、これを比丘見を成就し正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ』。尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』。尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法に入る「あり」や』。答へて曰く『有り、尊者舍梨子。(11)謂く比丘有りて覺の如眞を知り覺習を知り覺滅を知り覺滅道の如眞を知る。云何が覺の如眞を知るや。謂く三覺有り。【一二】樂覺・苦覺・不苦不樂覺なり。これを覺の如眞を知ると謂ふ。云何が覺習の如眞を知るや。謂く更樂に因りてすなはち覺有り。これを覺習の如眞を知ると謂ふ。云何が覺滅の如眞を知るや。謂く更樂滅すれば覺すなはち滅す。これを覺滅の如眞を知ると謂ふ。云何が覺滅道の如眞を知るや。謂く八支聖道、正見乃至正定を八と爲す。これを覺滅道の如眞を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有り是の如く覺の如眞を知り覺習を知り覺滅を知り覺滅道の如眞を知れば、これを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ』。尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』、尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法に入る「あり」や』。答へて曰く『有り、尊者舍梨子。(12)謂く比丘有りて更樂の如眞を知り更樂習を知り更樂滅を知り更樂滅道の如眞を知る。云何が更樂の如眞を知るや。謂く三更樂有り。【一三】樂更樂・苦更樂・不苦不樂更樂なり。これを更樂の如眞を知ると謂ふ。云何が更樂習の如眞を知るや。謂く六處に因りてすなはち更樂有り。これを更樂習の如眞を知ると謂ふ。云何が更樂滅の如眞を知るや。謂く六處滅すれば更樂すなはち滅す。これを更樂滅の如眞を知ると謂ふ。云何が更樂滅道の如眞を知るや。謂く八支聖道、正見乃至正定を八と爲す。これを更樂滅道の如眞を知

(11)覺の四諦。Vedanā これ新譯にいふ所の受なり。

【一二】樂覺(Sukhavedanā)苦覺(dukkhavedanā)不苦不樂覺(Adukkhamasukhavedanā)樂受・苦受・不苦不樂受なり。

(12)更樂の四諦、新譯の觸なり。

【一三】樂更樂(Sukhasamphassa)苦更樂(Dukkhasamphassa)不苦不樂更樂(Adukkhamasukhasamphassa)。

るや。謂く八支聖道、正見乃至正法を八と爲す。これを有滅道の如眞を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有り是の如く有の如眞を知り有習を知り有滅を知り有滅道の如眞を知れば、これを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ』。尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』。尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子、また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法に入る[あり]や』。答へて曰く『有り、尊者舍梨子。(9)謂く比丘有り、受の如眞を知り受習を知り受滅を知り受滅道の如眞を知る。云何が受の如眞を知るや。謂く四受有り。[九]欲受・戒受・見受・我受なり。これを受の如眞を知ると謂ふ。云何が受習の如眞を知るや。謂く愛に因りてすなはち受有り。これを受習の如眞を知ると謂ふ。云何が受滅の如眞を知るや。謂く愛滅すれば受すなはち滅す。これを受滅の如眞を知ると謂ふ。云何が受滅道の如眞を知るや。謂く八支聖道、正見乃至正定を八と爲す。これを受滅道の如眞を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有り是の如く受の如眞を知り受習を知り受滅を知り受滅道の如眞を知れば、これを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ』。尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く「善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅」。尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得正法に入る[あり]や』。答へて曰く『有り、尊者舍梨子。(10)謂く比丘有りて愛の如眞を知り愛習を知り愛滅を知り愛滅道の如眞を知る。云何が愛の如眞を知るや。謂く三愛有り、[一〇]欲愛・色愛・無色愛なり。これを愛の如眞を知ると謂ふ。云何が愛習の如眞を知るや、謂く[一一]覺に因りてすなはち愛有り。これを愛習の如眞を知ると謂ふ。云何が愛滅の如眞を知るや。謂く覺滅すれば愛すなはち滅す。これを愛滅の如眞を知ると謂ふ。云何が愛滅道の如眞を知るや。謂く八支聖道、正見乃至正定を八と爲す。これを愛滅

(9)受の四諦、Upādāna 取といふを正しとなす。

【九】 佛性論に四取を出す。謂く、(一)欲取(Kāmupādāna)。(二)見取(Diṭṭhupādāna)。(三)戒取(Sīlabbatupādāna)。(四)我語取(Attavādupādāna)。これなり。

(10)愛の四諦。

【一〇】 欲愛(Kāmataṇhā) 色愛(Rūpataṇhā) 無色愛(Arūpataṇhā)。

【一一】 受といふを正しとす。

正見乃至正定を八と爲す。これを老死滅道の如眞を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有りて是の如く老死の如眞を知り老死習を知り老死滅を知り老死滅道の如眞を知れば、これを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ』。尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』。尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得正法に入る「あり」や』。答へて曰く『有り、尊者舍梨子、(7)謂く比丘有りて生の如眞を知り生習を知り生滅を知り生滅道の如眞を知る。云何が生の如眞を知るや。謂く彼の衆生、彼彼の衆生種類、生ずれば則ち生じ、出づれば則ち出で、成れば則ち成り、五陰を興起し已りて命根を得。これを生の如眞を知ると謂ふ。云何が生習の如眞を知るや。謂く有に因ればすなはち生有り。これを生習の如眞を知ると謂ふ。云何が生滅の如眞を知るや。謂く有滅すれば生すなはち滅す。これを生滅の如眞を知ると謂ふ。云何が生滅道の如眞を知るや。謂く八支聖道、正見乃至正定を八と爲す。これを生滅道の如眞を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有りて是の如く生の如眞を知り生習を知り生滅を知り生滅道の如眞を知れば、これを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ』。尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』。尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ、尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法に入る「あり」や』。答へて曰く『有り、尊者舍梨子。(8)謂く比丘有り有の如眞を知り有習を知り有滅を知り有滅道の如眞を知る。云何が有の如眞を知るや。謂く三有有り。欲有・色有・無有色有なり。これを有の如眞を知ると謂ふ。云何が有習の如眞を知るや。謂く受に因りてすなはち有有り。これを有習の如眞を知ると謂ふ。云何が有滅の如眞を知るや。受滅すれば有すなはち滅す。これを有滅の如眞を知ると謂ふ。云何が有滅道の如眞を知

(7)生の四諦。

(8)有の四諦。

【八】欲有(Kāmabhava) 色有(Rūpabhava) 無色有(Arūpabhava)。

て歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法に入る[あり]や』。答へて曰く『有り。尊者舍梨子、(5)謂く比丘有りて苦の如眞を知り苦習を知り苦滅を知り苦滅道の如眞を知る。云何が苦の如眞を知るや。謂く　生は苦、老は苦、病は苦、死は苦、怨憎會は苦、愛別離は苦、所求不得は苦、略して五盛陰は苦なり。これを苦の如眞を知ると謂ふ。云何が苦習の如眞を知るや。謂く老死に因ればすなはち苦有り。これを苦習の如眞を知ると謂ふ。云何が苦滅の如眞を知るや。謂く老死滅すれば苦すなはち滅す。これを苦滅の如眞を知ると謂ふ。云何が苦滅道の如眞を知るや。謂く八支聖道、正見乃至正定を八と爲す。これを苦滅道の如眞を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有り、是の如く苦の如眞を知り苦習を知り苦滅を知り苦滅道の如眞を知れば、これを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ』。尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』。尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得正法に入る[あり]や』。答へて曰く『有り、尊者舍梨子、(6)謂く比丘有りて老死の如眞を知り老死習を知り老死滅を知り老死滅道の如眞を知る。云何が老を知るや。謂く彼老耄して頭白く齒落ち盛壯日に衰へ身曲り脚戾り體重く氣上り杖を柱へて行き肌縮み皮緩み皺麻子の如く諸根毀熟し顏色醜惡なり。これを老と名づく。云何が死を知るや。謂く彼の衆生、彼々の衆生種類命終り無常にして死喪し散滅し壽盡き破壞し命根閉塞す。これを死と名づく、こゝに死を說き前に老を說く。これを老死と名づけ、これを老死の如眞を知ると謂ふ。云何が老死習の如眞を知るや。謂く生に因りてすなはち老死有り。これを老死習の如眞を知ると謂ふ。云何が老死滅の如眞を知るや。謂く生滅すれば老死すなはち滅す。これを老死滅の如眞を知ると謂ふ。云何が老死滅道の如眞を知るや。謂く八支聖道、

---

(5)苦の四諦。
【七】所謂八苦なり。三卷「度經」註を見よ。
(6)老死の四諦。

りて歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子また問ひて曰く「賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法に入る[あり]や』。答へて曰く『有り。尊者舍梨子、(3)謂く比丘有りて食の如眞を知り食習を知り食滅を知り食滅道の如眞を知る。云何が食如眞を知るや。謂く[二]四食有り。一には[三]摶食麁細、二には[四]更樂食、三には[五]意思食、四には識食なり。これを食の如眞を知ると謂ふ。云何が食習の如眞を知るや。謂く愛に因れば、すなはち食有り。これを食習の如眞を知ると謂ふ。云何が食滅の如眞を知るや。謂く愛滅すれば食すなはち滅す。これを食滅の如眞を知ると謂ふ。云何が食滅道の如眞を知るや。謂く八支の聖道、正見乃至正定を八と爲す。これを食滅道の如眞を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有りて是の如く、食の如眞を知り食習を知り食滅を知り食滅道の如眞を知ればこれを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得正法中に入ると謂ふ』。尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』。尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得て正法に入る[あり]や』。答へて曰く『有り。尊者舍梨子、(4)謂く比丘有りて漏の如眞を知り漏習を知り漏滅を知り漏滅道の如眞を知る。云何が漏如眞を知るや。謂く三漏有り、[六]欲漏・有漏・無明漏なり。これを漏の如眞を知ると謂ふ。云何が漏習の如眞を知るや。謂く無明に因ればすなはち漏有り。これを漏習の如眞を知ると謂ふ。云何が漏滅の如眞を知るや。謂く無明滅すれば漏すなはち滅す。これを漏滅の如眞を知ると謂ふ。云何が漏滅道の如眞を知るや。謂く八支聖道、正見乃至正定を八と爲す。これを漏滅道の如眞を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有り、是の如く漏の如眞を知り漏習を知り漏滅を知り漏滅道の如眞を知れば、これを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ。』尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』。尊者舍梨子歎じ已り

(3)食の四諦。

【二】四食。Cattāro āhārā: (1) Kabaḷiṅkāro āhāro oḷāriko va sukhumo va (摶食麁細) (2) Phasso(更樂食)、(3) Manosañcetanā (意思食) (4) Viññāṇaṁ (識食)、大正藏經にては摶を誤りて搏に作る。

【三】團食、段食といふ、摶め又は握り得べき食物の意、普通いふ所の食物。

【四】外境と接觸して身心資益を得るものをいふ。

【五】意思し分別することが身心の資益となるものをいふ。

(4)漏の四諦。

【六】欲漏(Kāmāsava)有漏(Bhavāsava)無明漏(Avijjāsava)第一卷「水喩經」註を參照せよ。

卷の第七

二十九、大拘絺羅經第九

我が聞きしことかくの如し。ある時佛王舍城に遊び、竹林加蘭哆園に在しぬ。その時尊者舍梨子則ち晡時に於て燕坐より起ち[一]尊者大拘絺羅の所に至り、共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。尊者舍梨子、尊者大拘絺羅に語げぬ『我所問有らんと欲す。我が問を聽すや』。尊者大拘絺羅答へて曰く『尊者舍梨子、問はんと欲せばすなはち我に問へ。聞き已りて當に思ふべし』。尊者舍梨子問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法に入る[あり]や』。答へて曰く『有り。尊者舍梨子、(1)謂く比丘有り不善を知り不善根を知る。云何が不善を知るや。謂く身惡行は不善にして口意惡行は不善なり。これを不善を知ると謂ふ。云何が不善根を知るや。謂く貪は不善根にして恚癡は不善根なり。これを不善根を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有り、是の如く不善及び不善根を知ればこれを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ』。尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』。尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者大拘絺羅、頗し更に事有り、この事に因れば比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法に入る[あり]や』。答へて曰く『有り。尊者舍梨子、(2)謂く比丘有り、善を知り善根を知る。云何が善を知るや。謂く身妙行は善にして口意妙行は善なり。これを善を知ると謂ふ。云何が善根を知るや。謂く無貪は善根にして無恚無癡は善根なり。これを善根を知ると謂ふ。尊者舍梨子、若し比丘有り是の如く善及び善根を知ればこれを比丘見を成就して正見を得、法に於て不壞淨を得、正法中に入ると謂ふ』。尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者大拘絺羅』。尊者舍梨子歎じ已

【一】 Mahā-Koṭṭhita

(1)不善及び不善根。

(2)善及び善根。

時世尊無量の大衆に前後を圍繞せられて爲に說法したまひぬ。世尊遙に尊者舍梨子の來るを見て諸の比丘に告げたまはく『舍梨子比丘聰慧・速慧・捷慧・利慧・廣慧・深慧・出要慧・明達慧・辯才慧あり、舍梨子比丘實慧を成就しぬ。所以者何。我略說する所四種の須陀洹なり。舍梨子比丘長者給孤獨の爲に十種に廣說し來れり』。佛說かくの如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第六

童子と或は價を斷じぬと言ひ或は斷ぜずと言ひ、大に共に諍訟し即便ち倶に舍衞國の大決斷處に往至しこの事を判論しぬ。時に舍衞國の大決斷人童子勝に語げて曰く、童子、已に自ら價數を決斷しぬ。但當に錢を取るべしと。尊者舍梨子、我即ち舍衞國に入り家に還りて錢を取り、象馬車を以て擧負輦載し、億々を出し地に布きて少處未だ遍せず。尊者舍梨子、我この念を作しぬ、當に何の藏を取りて大ならず小ならず、この餘處に持ち來りて布滿すべきやと。時に童子勝すなはち我に語げて曰く、長者、若し錢を悔いなば自ら相歸り園地は吾に還せと。我童子に語げぬ、實に悔いざるなり。但自ら當に何の藏を取り大ならず小ならず、この餘處に持ち來りて布滿すべきやを思念するのみと。時に童子勝すなはちこの念を作しぬ、佛は必ず大尊にして大德祐有らん。法及び比丘衆も亦必ず大尊にして大德祐有らん。所以者何。乃ち長者をして大施を施設せしめ財を輕んずること乃ち爾なり。吾今寧ろ即ち此處に於て門屋を造立して佛及び衆に施すべしと。時に童子勝すなはち吾に語げて曰く、長者且く止ね。また錢を出して此處に布くこと莫れ。吾此處に於て門屋を造立して佛及び衆に施さんと。尊者舍梨子、我慈愍の爲の故に即ち此處を以て童子勝に與へぬ。尊者舍梨子、我即ちこの夏に於て十六[一七]大屋・六十[一八]拘絺を起さしぬ。尊者舍梨子時に見て佐助したまひぬ。然るに尊者舍梨子教化病の法を說きて甚奇甚特なり。我この教化病法を聞き已りて極重の疾苦即ち除愈するを得て極めて快樂を生じぬ。尊者舍梨子、我今病無く極めて安隱を得ぬ。願はくは尊者舍梨子、こゝに於て飯食したまへ』。時に尊者舍梨子默然として請を受けぬ。こゝに於て長者尊者舍梨子の默然として受くるを知り已りて即ち坐より起ち自ら澡水を行じ、[一九]極美淨妙種々豐饒なる食噉含消を以て手もて自ら斟酌して充滿するを得せしめぬ。食訖りて器を擧げて澡水を行じ竟りて一小床を敷き別に坐して法を聽きぬ。長者坐し已りて尊者舍梨子、彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて坐より起ちて去りぬ。この

【一七】大屋。Vihāra（精舍）又は Pariveṇa（房舍）に當る。
【一八】拘絺。Koṭṭhaka（倉庫）に當る。
【一九】巴利文は「手づから上妙味の噉食（堅食）嚼食（軟食）を以て飽くまで謝するまで供養し。」食噉含消は巴利語 Khādanīya, bhojanīya を詮すが如し。食ひて噉み含みて消ゆるの意か。

らんと。尊者舍利子、我即ち叉手して白して曰く、世尊、願はくは我が請を受け舍衛國に於て夏坐を受けたまへ。及び比丘衆[亦然り]と。時に世尊我に問ひたまはく、汝何等と名づけ、舍衛國人汝を呼ぶこと云何と。我即ち答へて曰く、[一四]我須達哆と名づけ、我諸の孤獨者に供給するを以てこの故に舍衛國人我を呼びて[一五]給孤獨と爲すと。その時世尊また我に問ひて曰はく、舍衛國の中房舍有りや未だしやと。我また答へて曰く、舍衛國の中房舍有る無しと。その時世尊我に告げて曰はく、長者、當に知るべし。若し房舍有れば比丘往來するを得べく、住止するを得べしと。我また白して曰く、唯然り世尊、我當に是の如く爲に房舍を起すべし。比丘往來するを得べく、舍衛國に於て住止するを得べし。唯願はくは世尊、一佐助を差したまへと。その時世尊即ち尊者舍梨子を差し、尊者舍梨子を遣して見て佐助せしめたまひぬ。我その時に於て佛の所說を聞きて善く受け善く持し即ち坐より起ち佛の爲に禮を作し繞三匝して去り、王舍城に於て所作已に訖り尊者舍梨子と倶に舍衛國に往至し、舍衛城に入らず亦家に歸らず、すなはち城外に於て周遍く地を行きぬ、何處に於て往來極めて好く晝は喧鬧ならず夜は則ち寂靜にして蚊虻有ること無く亦蠅蚤無く、寒からず熱からずして房舍を立て佛及び衆に施す可きと爲すや[とて]。尊者舍梨子、我時に唯[一六]童子勝の園往來極めて好く晝は喧鬧ならず夜は則ち寂靜にして蚊虻有ること無く亦蠅蚤無く、寒からず熱からざるを見ぬ。我これを見已りてすなはちこの念を作しぬ、唯この處好く房舍を立てゝ佛及び衆に施すべしと。尊者舍梨子、我その時に於て舍衛國に入り竟に家に還らずすなはち先づ童子勝の所に往詣して白して曰く、童子、この園を賣りて持つて我に與ふべきやと。その時童子すなはち我に語げて曰く、長者、當に知るべし。吾園を賣らずと。かくの如く再び三たび白して曰く、童子、この園を賣りて持つて我に與ふべきやと。その時童子亦復再び三たび我に語げて曰く、吾園を賣らず。億々布滿するに至れと。我即ち白して曰く、童子、今已に價數を決斷しぬ。但當に錢を取るべしと。尊者舍梨子、我

【一四】Sudatta.

【一五】給孤獨（巴）Anāthapiṇḍika, 梵 Anāthapiṇḍada）。

【一六】童子。祇陀太子（Jeta-kumāra）。

と。尊者舍梨子、我またこの念を作しぬ、佛尊祐徳あり法及び比丘衆も亦尊祐徳あり。所以者何。乃至天に於て亦見せしめんと欲すと。尊者舍梨子、我この光明に因りて竹林加蘭哆園に往至しぬ。その時世尊夜その旦に向んとする[とき]禪室より出で露地に經行して我を待ちたまひぬ。尊者舍梨子、我遙に佛を見るに端正姝好にして猶ほ星中の月のごとく光耀暐曄晃金山の若く相好具足し威神巍巍として諸根寂定し蔽礙有ること無く調御を成就し息心靜默なり。見已りて歡喜し前みて佛所に詣り足に接して禮を作し佛に隨ひて經行し、長者の法を以て頌を說きて問訊しぬ。

世尊、寐めて安隱にして至竟の眠快なるや、梵志の滅度せる如く以て欲に染まず、一切の願を捨離し、至安隱に逮り得、心除きて煩熱無く、自ら樂しみ歡喜して眠るや。

こゝに於て世尊卽便ち經行道頭に往至し尼師檀を敷きて結加趺坐したまひぬ。尊者舍梨子、我佛足を禮し卻きて一面に坐しぬ。世尊我が爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて我が爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りたまひぬ。諸佛の法の如く先づ端正の法を說き、聞者歡悅す。謂く、[一二]施を說き戒を說き、生天法を說き、欲を毀呰して災患と爲し、生死を穢と爲し無欲を稱歎して妙道品白淨と爲したまひぬ。世尊我が爲にかくの如き法を說き已り、[一三]佛我歡喜心・具足心・柔軟心・堪耐心・昇上心・一向心・無礙心・無蓋心有り、能有り力有りて正法を受くるに堪ふるを知りたまひぬ。謂く、諸佛所說正要の如し。世尊卽ち我が爲に苦習滅道を說きたまひぬ。尊者舍利子、我卽ち坐中に於て四聖諦、苦習滅道を見ること猶ほ白素染めて色と爲し易きが如し。我また是の如く卽ち坐中に於て四聖諦、苦習滅道を見ぬ。尊者舍梨子、我已に法を見法を得、白淨の法を覺り疑を斷じ惑を度し更に餘尊無くまた他に從はず、猶豫有ること無く已に果證に住し世尊の法に於て無所畏を得、卽ち坐より起ちて佛の爲に禮を作し、世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至

【一二】九卷「郁伽長者經」註を見よ。
【一三】九卷、郁伽長者經」註を見よ。

に在す。往かんと欲せば意に隨へと。尊者舍梨子、我この念を作しぬ、若し速に曉とならば疾く往きて佛を見んと。尊者舍梨子、我時に至心に往いて佛を見んと欲し、卽ちその夜に於て[一二]晝明想を生じ、すなはち長者の家より出でゝ城息門に往至しぬ。この時城息門中に二直士有り、一直は初夜に外客を入らしめて礙有らしめず。一直は後夜に若し客[あれば]出でしめて礙ふることを作さず。尊者舍梨子、我またこの念を作しぬ、夜尙未だ曉ならず。所以者何。城息門中に二直士有り。一直は初夜に外客を入らしめて礙有らしめず。一直は後夜に若し[客あれば]出でしめて亦礙ふることを作さずと。尊者舍梨子、城息門を出で外に出でゝ久しからずして明滅して暗に還りぬ。尊者舍梨子、我すなはち恐怖して擧身毛竪ち、人非人來りて我に觸嬈せしむること莫れと[思念しぬ]。時に城息門に而も一天有り。王舍城より竹林加蘭哆園に至り光明もて普く照し來りて我に語げて言く、長者、怖るゝこと莫れ、長者、怖るゝこと莫れ。所以者何。我本前世はこれ汝の朋友にして密器と名づけ、年少の[ころ]極めて相愛念しぬ。長者、我本昔時尊者大目乾連の所に往詣し稽首して足を禮し卻きて一面に坐しぬ。尊者大目乾連、我が爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて我が爲に說法し勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて三自歸を賜ひ、五戒を授けられぬ。長者、我三歸し五戒を受持するに因りて身壞れ命終りて四天王天に生じ、この城息門中に住す。長者速に去れ、長者速に去れ。去るは實に住するに勝ると。彼の天我を勸めて而も頌を說きて曰く、

馬百・臣・女を得、　車百に珍寶を滿すも　佛に往詣すること一步するの十六分に當らず、　白象百・最上の金銀鞍勒被も　佛に往詣すること一步するの十六分に當らず。　女百・色端正にして瓔珞花もて身を嚴るも　佛に往詣すること一步するの十六分に當らず、　轉輪王の散する所の玉女寶第一も　佛に往詣すること一步するの十六分に當らず。

天頌を說き已りて而もまた勸めて曰く、長者速に去れ、長者速に去れ。去るは實に住するに勝る

【一二】未だ夜中なるを已に晝間なりと思ひ違へて。

差ゆることを得、平復して故の如く、臥より起ちて坐し尊者舍梨子を歎じて曰く『善き哉、善き哉、病の爲に法を說くこと甚奇甚特なり。尊者舍梨子。我今病差え平復して故の如し。尊者舍梨子、我往昔時少しく所爲有りて王舍城に至り[七]一長者の家に寄宿しぬ。時に彼の長者[八]明に當に佛及び比丘衆を飯すべかりき。[九]時に彼の長者夜を過ぎて曉に向んとする[とき]兒孫奴使眷屬に教勅しぬ。汝等早く起きて當に共に嚴辦すべしと。彼[等]各教を受け共に廚宰を設け餚饍種種の腆美を供辦しぬ。長者躬自ら高座を敷置し無量に嚴飾しぬ。尊者舍梨子、我既に見已りてすなはちこの念を作しぬ、今この長者婚姻の事を爲すや、迎婦・節會を爲すや、國王を請ぜんと爲るや、大臣を呼ばんと爲るや、齋會を作して大施を施設せんと爲るやと。尊者舍梨子、我既に念じ已りてすなはち長者に問ひぬ、汝婚姻の事を爲すや、迎婦・節會を爲すや、國王を請ぜんと爲るや、大臣を呼ばんと爲るや。齋會を作りて大施を施設せんと爲るやと。時に彼の長者而も我に答へて曰く吾婚姻の事無く、亦婦を迎へず、節會を爲さず、國王を請じ及び大臣を呼ばず。但齋會を爲し大施を施設し、明に當に佛及び比丘衆に飯すべしと。尊者舍梨子、我未だ曾て佛の名を聞かざりき。聞き已りて擧身毛竪ちぬ。卽ちまた問ひて曰く、長者佛を說く。何を名づけ佛と爲すやと。時に彼の長者而も我に答へて曰く、君聞かざるか。釋種の子有りて釋の宗施を捨て鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして道を學び無上等正覺を得ぬ。これを名づけて佛と爲すと。我また問ひて曰く、長者衆を說く。何を名づけて衆と爲すやと。時に彼の長者また我に答へて曰く、若干の[一〇]姓異名族有りて鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け、至信に家を捨て、家無くして佛に從ひて道を學ぶ。これを名づけて衆と爲す。この佛及び衆は吾の請する所なりと。尊者舍梨子、我卽ちまた彼の長者に問ひて曰く、世尊、今何處に在りと爲すや。我往見せんと欲すと。時に彼の長者また我に答へて曰く、世尊今この王舍城竹林加蘭哆園

【七】「賢愚經」一〇卷にはこの長者の名を護彌と呼び、「摩訶僧祇律」二三卷には醉處と呼ぶ。

【八】翌日佛及び比丘衆に食供養をすることに決って居た。

【九】以下須達長者(一)歸佛の因緣と(二)祇園精舍の建立の因緣として諸所に出づ、(一)は Vin. ii. 154。「雜阿含」二二卷の一七經、「別譯雜阿含」九卷の二六經、「五分律」二五卷、「四分律」五〇卷、「摩訶僧祇律」二三卷、「賢愚經」一〇卷、「中本起經」下卷、「衆許摩訶帝經」一一卷等に出で、(二)は Vin. ii. 158。「五分律」二五卷、「四分律」五〇卷、「賢愚經」一〇卷、「衆許摩訶帝經」一一卷等に出づ。

【一〇】拔出た姓名の家、名ある家柄。

莫れ。長者、怖るゝこと莫れ。所以者何。若し愚癡の凡夫は惡慧に因るが故に身壞れ命終りて惡處に趣き至り地獄の中に生ず。長者惡慧有ること無く唯善慧有り。長者、善慧に因るが故に或は苦痛を滅し極めて快樂を生じ、善慧に因るが故に或は斯陀含果或は阿那含果を得ん。長者本已に須陀洹を得ぬ。(6)長者、怖るゝこと莫れ、長者、怖るゝこと莫れ。所以者何。若し愚癡の凡夫は邪見に因るが故に身壞れ命終りて惡處に趣き至り、地獄の中に生ず。長者邪見有ること無く唯正見有り。長者、正見に因るが故に或は苦痛を滅し極めて快樂を生じ、正見に因るが故に或は苦痛を滅し或は斯陀含果或は阿那含果を得ん。長者本已に須陀洹を得ぬ。(7)長者、怖るゝこと莫れ、長者、怖るゝこと莫れ。所以者何。若し愚癡の凡夫は邪志に因るが故に身壞れ命終りて惡處に趣き至り地獄の中に生ず。長者邪志有ること無く唯正志有り。長者正志に因るが故に或は苦痛を滅し極めて快樂を生じ、正志に因る故に或は斯陀含果或は阿那含果を得ん。長者本已に須陀洹を得ぬ。(8)長者、怖るゝこと莫れ。長者、怖るゝこと莫れ。所以者何。若し愚癡の凡夫は邪解に因るが故に身壞れ命終りて惡處に趣き至り地獄の中に生ず。長者邪解有ること無く唯正解有り。長者、正解に因るが故に或は苦痛を滅し極めて快樂を生じ、正解に因るが故に或は斯陀含果或は阿那含果を得ん。長者本已に須陀洹を得ぬ。(9)長者、怖るゝこと莫れ、長者、怖るゝこと莫れ。所以者何。若し愚癡の凡夫は邪脫に因るが故に身壞れ命終りて惡處に趣き至り、地獄の中に生ず。長者邪脫有ること無く唯正脫有り。長者、正脫に因るが故に或は苦痛を滅し極めて快樂を生じ、正脫に因るが故に或は斯陀含果或は阿那含果を得ん。長者本已に須陀洹を得ぬ。(10)長者、怖るゝこと莫れ。長者、怖るゝこと莫れ。所以者何。若し愚癡の凡夫は邪智に因るが故に身壞れ命終りて惡處に趣き至り、地獄の中に生ず。長者邪智有ること無く唯正智有り。長者、正智に因るが故に或は苦痛を滅し極めて快樂を生じ、正智に因るが故に或は斯陀含果或は阿那含果を得ん。長者本已に須陀洹を得ぬ』。こゝに於て長者病卽ち

(6)長者には正見あり。
(7)長者には正志あり。
(8)長者には正解あり。
(9)長者には正脫あり。
(10)長者には正智あり。

しを知り已りて、卽ち坐より起ち稽首して禮を作し繞三匝して去りぬ。尊者舍梨子夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持して、長者給孤獨の家に往詣しぬ。長者給孤獨遙に尊者舍梨子の來るを見、見已りてすなはち床より起たんと欲しぬ。尊者舍梨子彼の長者の床より起たんと欲するを見てすなはち彼を止めて曰く『長者、起つこと莫れ、長者、起つこと莫れ。更に餘床有り我自ら別に坐せん』。尊者舍梨子卽ちその床に坐し、坐し已りて問ひて曰く『長者、所患今また何似。飲食多［きや］少［きや］、疾苦轉た損じて增すに至らざるや』。長者答へて曰く『所患至つて困しみ飲食進まず疾苦但增して損ずるを覺えず』。尊者舍梨子告げて曰く『(1)長者、怖るゝこと莫れ、長者、怖るゝこと莫れ。所以者何。若し愚癡の凡夫は不信を成就せば身壞れ命終りて惡處に趣き至り地獄の中に生ず。長者今日不信有ること無く唯上信有り。長者、上信に因るが故に或は苦痛を滅し極めて快樂を生じ、上信に因るが故に或は[六]斯陀含果或は阿那含果を得ん。長者本已に須陀洹を得ぬ。(2)長者、怖るゝこと莫れ、長者怖るゝこと莫れ。所以者何。若し愚癡の凡夫は惡戒に因るが故に身壞れ命終りて惡處に趣き至り地獄の中に生ず。長者惡戒有ること無く唯善戒有り。長者、善戒に因るが故に或は苦痛を滅し極めて快樂を生じ、善戒に因るが故に或は斯陀含果或は阿那含果を得ん。長者本已に須陀洹を得ぬ。(3)長者、怖るゝこと莫れ、長者、恐るゝこと莫れ。所以者何。若し愚癡の凡夫は多聞ならざるに因りて身壞れ命終りて惡處に趣き至り地獄の中に生ず。長者多聞ならざる無く唯多聞有り。長者、多聞に因るが故に或は苦痛を滅し極めて快樂を生じ、多聞に因るが故に或は斯陀含果或は阿那含果を得ん。長者本已に須陀洹を得ぬ。(4)長者、怖るゝこと莫れ、長者、怖るゝこと莫れ。所以者何。若し愚癡の凡夫は慳貪に因るが故に身壞れ命終りて惡處に趣き至り地獄の中に生ず、長者慳貪有ること無く、唯惠施有り。長者、惠施に因るが故に或は苦痛を滅し、極めて快樂を生じ、惠施に因るが故に或は斯陀含果或は阿那含果を得ん。長者本已に須陀洹を得。(5)長者、怖るゝこと

---

(1)長者には上信あり。

【六】(1)須陀洹、(2)斯陀含、(3)阿那含、(4)阿羅漢を四果といふ。巻「水喩經」の本文に示せる通り、身見・戒禁取見・疑の三結を盡して初果を得、須陀洹とは預流又は入流の義、凡夫位を去つて聖者の流に入るの意なり。三結を盡し、貪・瞋・癡の三毒を薄くして第二果を得、これを得れば天上人間に一たび往來するのみにて阿羅漢果を得るが故に、これを斯陀含卽ち一來といふ。更に(欲界)貪・瞋・身見・戒禁取見・疑の五下分結を盡し已れば第三果を得再びこの世に還り來ることなくして阿羅漢果を得る故、これを阿那含卽ち不還といふ。

(2)長者には善戒あり。

(3)長者は多聞なり。

(4)長者には惠施あり。

(5)長者には善慧あり。

疾病ありて危篤なりき。こゝに於て長者給孤獨一使人に告げぬ、汝佛[所]に往詣し我が爲に稽首して世尊の足を禮し、世尊に問訊せよ。聖體康强・安快無病にして起居輕便・氣力常の如くなりやと。[且]かくの如き語を作せ、長者給孤獨、佛足に稽首し世尊に問訊したてまつる。聖體康强・安快無病にして起居輕便・氣力常の如くなりやと。汝既に我が爲に佛に問訊し已りて尊者舍梨子の所に往詣し、我が爲に稽首して彼の足を禮し已りて尊者に問訊せよ。聖體康强・安快無病にして起居輕便・氣力常の如くなりや不や。[且]かくの如き語を作せ、長者給孤獨、尊者舍梨子の足に稽首して尊者に問訊したてまつる。聖體康强・安快無病にして起居輕便・氣力常の如くなりや不や。尊者舍梨子、長者給孤獨疾病ありて極めて困しみ今危篤に至れり。長者給孤獨至心に尊者舍梨子を見んと欲す。然れども體至つて羸乏し、力尊者舍梨子の所に來詣すべき無し。[二]善き哉、尊者舍梨子、慈愍の爲の故に願はくは長者給孤獨の家に往至したまへと』。こゝに於て使人長者給孤獨の教を受け已りて佛所に往詣し稽首して足を禮し却きて一面に住し、白して曰く『世尊、長者給孤獨佛足に稽首し世尊に問訊したてまつる。聖體康强・安快無病にして起居輕便・氣力常の如くなりやと』。その時世尊使人に告げて曰はく『長者給孤獨をして安隱快樂ならしめ、天及び人・[三]阿修羅・[四]揵塔惒・[五]羅刹及び餘の種種身をして安隱快樂ならしめん』。こゝに於て使人佛の所說を聞きて善く受け善く持し、佛足に稽首し繞三匝して去り、尊者舍梨子の所に往詣し、稽首して足を禮し、却きて一面に坐し、白して曰く『尊者舍梨子、長者給孤獨尊者舍梨子の足に稽首し、尊者に問訊したてまつる。聖體康强・安快無病にして起居輕便・氣力常の如くなり不や。尊者舍梨子、長者給孤獨疾病ありて極めて困しみ今危篤に至りぬ。長者給孤獨至心に尊者舍梨子を見んと欲す。然れども體至つて羸乏し、力尊者舍梨子の所に來詣すべき無し。善き哉、尊者舍梨子、慈愍の爲の故に長者給孤獨の家に往詣したまへ』。尊者舍梨子卽ち彼の爲の故に默然として受けぬ。こゝに於て使人尊者舍梨子默然として受け

【二】どうぞ舍梨子尊者不愍と思召されて。
【三】阿修羅(Asura)。阿素倫、非天と譯す、提婆卽ち天の敵なり。
【四】揵塔惒(Gandhabba)。乾闥婆、乾沓和、香神、尋香と譯す、音樂神。
【五】羅刹(Rakkhasa)。夜叉神に同じ。

多聞の聖弟子、心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く、心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲喜〔亦然り〕。心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。これを陀然、世尊、知見・如來・無所著・等正覺・四梵室を說くと謂ふ。謂く、族姓男・族姓女、修習し多く修習し欲を斷じ欲念を捨て身壞れ命終りて梵天中に生ずと』。こゝに於て尊者舍梨子陀然を敎化し、爲に梵天の法を說き已りて坐より起ちて去りぬ。尊者舍梨子、王舍城より出でゝ未だ竹林加蘭哆園に至らざるその中間に於て、梵志陀然四梵室を修習し欲を斷じ欲念を捨て身壞れ命終りて梵天中に生じぬ。この時世尊無量の大衆に前後圍遶せられて爲に說法したまひき。世尊遙かに尊者舍梨子の來るを見たまひて諸の比丘に告げたまはく『舍梨子比丘、聰慧・速慧・捷慧・利慧・廣慧・深慧・出要慧・明達慧・辯才慧あり。舍梨子比丘實慧を成就す。この舍梨子比丘梵志陀然を敎化し、爲に梵天の法を說き來る。若しまた上化すれば速かに法を知ること法の如くならん』。こゝに於て尊者舍梨子佛所に往詣し、稽首して足を禮し、却きて一面に坐しぬ。世尊告げて曰はく『舍梨子、汝何を以て梵志陀然に梵天を過ぐるの法を敎へざる。若し上化すれば速やかに法を知ること法の如くならん』。尊者舍梨子白して曰く『世尊、彼の諸の梵志長夜に〔一七〕梵天に愛著し梵天を樂しみ梵天を究竟とす。これ梵天を尊び、實に梵天有り、我が梵天と爲すなり。この故に世尊、我かくの如く應へぬ』。佛說かくの如し。尊者舍梨子及び無量百千の衆、佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二十八、〔一〕敎化病經第八

我が聞きしことかくの如し。ある時佛舍衛國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時長者給孤獨

【一七】梵天に愛著す。(Brahma-lokādhimutta)。

【一】M. 143. Anāthapiṇḍikovādasutt,

に餘床有り、我自ら別に坐せん』。こゝに於て尊者舍梨子卽ちその床に坐し、坐し已りて問ひて曰く『陀然、所患今は何似。飲食多[きや]少[きや]、疾苦轉た損じて增すに至らざるや』。陀然答へて曰く『所患至困にして飲食進まず、疾苦但增して損ずるを覺えず。尊者舍梨子、猶ほ力士利刀を以て頭を刺し、但極苦を生ずるが如し。我今頭痛亦かくの如し。尊者舍梨子、猶ほ力士緊索繩を以て頭に纒絡し但極苦を生ずるが如し。我今頭痛亦復かくの如し。尊者舍梨子、猶ほ牛兒を屠るに利刀を以て牛腹を破り但極苦を生ずるが如し。我今頭痛亦復かくの如し。尊者舍梨子、猶ほ兩力士一羸人を捉へ火上に在りて炙りて但極苦を生ずるがごとし。我今身痛み體を擧げて苦を生じ但增して減ぜざること亦復かくの如し』。尊者舍梨子告げて曰く『陀然、我今汝に問ふ。所解に隨ひて答へよ。梵志陀然、意に於て云何。地獄・畜生何者が勝れりと爲す』。陀然答へて曰く『畜生勝れり』。また問ひぬ『陀然、畜生・餓鬼何者が勝れりと爲す』。陀然答へて曰く『餓鬼勝れり』。また問ひぬ『陀然、餓鬼人に比して何者が勝れりと爲す』。陀然答へて曰く『人勝れりと爲す』。また問ひぬ『陀然、人と[一四]四王天と何者が勝れりと爲す』。陀然答へて曰く『四王天勝れり』。また問ひぬ『四王天と三十三天と何者が勝れりと爲す』。陀然答へて曰く『三十三天勝れり』。また問ひぬ『陀然、三十三天と焰摩天と何者が勝れりと爲す』。陀然答へて曰く『焰摩天勝れり』。また問ひぬ『陀然、焰摩天と兜率陀天と何者が勝れりと爲す』。陀然答へて曰く『兜率陀天勝れり』。また問ひぬ『陀然、兜率陀天と化樂天と何者が勝ると爲す』。陀然答へて曰く『化樂天勝れり』。また問ひぬ『陀然、化樂天と他化樂天と何者が勝れりと爲す』。陀然答へて曰く『他化樂天勝れり』。また問ひぬ『陀然、他化樂天と梵天と何者が勝れりと爲す』。陀然答へて曰く『梵天最も勝れり、梵天最も勝れり』。尊者舍梨子告げて曰く『陀然、[一五]世尊・知見・如來・無所著・等正覺[一六]、四梵室を說きたまふ。謂く、族姓男・族姓女、修習し、多く修習し、欲を斷じ欲念を捨て、身壞れ命終りて梵天中に生ずと。云何が四と爲す。陀然、

【一四】四王天以下天部に就ては二卷「七日經」註を見よ。

【一五】二卷「七日經」註を見よ。

【一六】二卷「七日經」註を見よ。

に惑ふが故に放逸と爲り大いに罪業を作しぬ。舍梨子、我今日より始めて端正婦を捨て自ら尊者舍梨子に歸せん』。尊者舍梨子答へて曰く『陀然、汝我に歸すること莫れ。我が歸する所の佛に汝應に自ら歸すべし』。梵志陀然白して曰く『尊者舍梨子、我今日より自ら佛・法、及び比丘衆に歸せん。唯願くは尊者舍梨子、我を受けて佛の優婆塞と爲したまへ。終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。こゝに於て尊者舍梨子、梵志陀然の爲に說法し [一一]勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて坐より起ち、去りて王舍城に遊び住すること數日を經て衣を攝り鉢を持し王舍城より出でゝ [一二]南山に往詣し、南山村の [一三]北戸攝惒林中に住しぬ。かの時一比丘有り。王舍城に遊び住すること數日を經て衣を攝り鉢を持し王舍城より出でゝ亦南山に至り、南山村の北戸攝惒林中に住しぬ。こゝに於て彼の一比丘、尊者舍梨子の所に往詣し稽首して足を禮し、却きて一面に坐しぬ。尊者舍梨子問ひて曰く『賢者、何處より來り何處に遊行せるや』。比丘答へて曰く『尊者舍梨子、我王舍城より來り王舍城に遊行しぬ』。また問ひぬ『賢者、王舍城に一梵志有り、名づけて陀然と曰ふ。これ我昔日未だ出家せざる[とき]の友なるを知るや』。答へて曰く『知るなり』。また問ひぬ『賢者、梵志陀然王舍城に住し身體康强・安快無病にして起居輕便・氣力常の如く、數ば佛を見、樂しみて法を聞かんと欲するや』。答へて曰く『尊者舍梨子、梵志陀然數ば佛を見んと欲し、數ば法を聞かんと欲す。但、安快ならずして氣力轉た衰へぬ。所以者何。尊者舍梨子、梵志陀然今は疾病にして極めて困じ危篤なり。或は能くこれに因りて命終るに至らん』。尊者舍梨子この語を聞き已りて卽ち衣を攝り、鉢を持し南山より出で王舍城に至り竹林加蘭哆園に住しぬ。こゝに於て尊者舍梨子夜を過ぎて平旦衣を著け鉢を持して梵志陀然の家に往詣しぬ。梵志陀然遙かに尊者舍梨子の來るを見ぬ。見已りてすなはち床より起たんと欲しぬ。尊者舍梨子梵志陀然の床より起たんと欲するを見て、すなはち彼を止めて曰く『梵志陀然、汝臥して起つこと勿れ。更

【一一】第二卷「七車經」第九註を見よ。
【一二】南山(Dakkhiṇāgiri)。
【一三】第三卷「伽藍經」第六註參照。

若し族姓子如法・如業・如功德もて錢財を得、尊重奉敬して父母に孝養し、福德業を行じて惡業を作さざれば、彼すなはち父母の愛念する所と爲り、而して「父母は」この言を作す、汝をして强健にして壽考窮り無からしめん。所以者何。我汝に由るが故に安隱快樂なり。陀然、若し人有りて極めて父母の爲に愛念せらるれば、その德日に進み終に衰退無し。陀然、族姓子如法・如業・如功德もて錢財を得、(2)妻子を愛念して供給瞻視し、福德業を行じて惡業を作さゞるを得べし。陀然、若し族姓子如法・如業・如功德もて錢財を得、妻子を愛念して供給瞻視し、福德業を行じて惡業を作さゞれば、彼すなはち妻子の尊重する所と爲り、而して「妻子は」この言を作す、願はくは尊、强健にして壽考窮り無かれ。所以者何。我尊に由るが故に安隱快樂なりと。陀然、若し人有りて極めて妻子の爲に尊重せらるれば、その德日に進み終に衰退無し。陀然、族姓子如法・如業・如功德もて錢財を得、(3)奴婢を愍傷して給恤瞻視し、福德業を行じて惡業を作さゞるを得べし。陀然、若し族姓子如法・如業・如功德もて錢財を得、奴婢を愍傷して給恤瞻視し、福德業を行じて惡業を作さゞれば、彼すなはち奴婢の尊重する所と爲り而して「奴婢は」この言を作す、願はくは大家をして强健にして壽考窮り無からしめよ。所以者何。大家に因るが故に〔一〇〕我安隱を得と。陀然、若し人有りて極めて奴婢の爲に尊重せらるれば、その德日に進み終に衰退無し。陀然、族姓子如法・如業・如功德もて錢財を得、(4)沙門梵志を尊重し供養し、福德業を行じて惡業を作さゞるを得べし。陀然、若し族姓子如法・如業・如功德もて錢財を得、沙門梵志を尊重し供養し、福德業を行じて惡業を作さゞれば、彼すなはち極めて沙門梵志の愛念する所と爲り而して「沙門梵志」はこの言を作す、施主をして强健にして壽考窮り無からしめよ。所以者何。我施主に由るが故に安穩快樂を得と。陀然若し人有りて極めて沙門梵志の爲に愛念せらるれば、その德日に進み終に衰退無し』。こゝに於て梵志陀然、即ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を尊者舍梨子に向け白して曰く『舍梨子、我愛婦有り、名づけて端正と曰ふ。我彼

(2)妻子を愛念す。

(3)奴婢を愍傷す。

〔一〇〕奴婢の場合に限り、單に安隱といひて快樂を省く。

(4)沙門・梵志を尊重供養す。

を得べからず、一向に法に從ふ』。こゝに於て尊者舍梨子告げて曰く『陀然、我今汝に問ふ。所解に隨ひて答へよ。梵志陀然、意に於て云何。若し人有り(1)父母の爲の故に作惡を行ふ。惡を行ふに因るが故に、身壞れ命終りて、惡處に趣き至り地獄の中に生ず。地獄に生じ已りて、獄卒執捉へて極めて苦治する時、彼獄卒に向ひてこの語を作す、獄卒、當に知るべし我を苦治すること莫れ。所以者何。我父母の爲の故に作惡を行じぬと。云何が陀然、彼の人地獄の卒より、この苦を脫れ得べきや』。答へて曰く『不なり』。また問ひぬ『陀然、意に於て云何。若しまた人有り(2)妻子の爲の故に作惡を行じ、惡を行ふに因るが故に、身壞れ命終りて、惡處に趣き至り地獄の中に生ず。地獄に生じ已りて獄卒執捉へて極めて苦治する時、彼獄卒に向ひてこの語を作す、獄卒、當に知るべし我を苦治すること莫れ。所以者何。我妻子の爲の故に作惡を行じぬと。云何が陀然、彼の人地獄の卒よりこの苦を脫るゝを得べきや』。答へて曰く『不なり』。また問ひぬ『陀然、意に於て云何。若しまた人有り(3)奴婢の爲の故に作惡を行じ、惡を行ふに因るが故に、身壞れ命終りて、惡處に趣き至り地獄の中に生ず。地獄に生じ已りて獄卒執捉へて極めて苦治する時、彼獄卒に向ひてこの語を作す、獄卒、當に知るべし、我を苦治すること莫れ。所以者何。我奴婢の爲の故に作惡を行じぬと。云何が陀然、彼の人地獄の卒よりこの苦を脫るゝを得べきや』。答へて曰く『不なり』。また問ひぬ『陀然、意に於て云何。若しまた人有り、(4)王の爲、天の爲、先祖の爲、沙門梵志の爲の故に作惡を行ず。惡を行ふに因るが故に、身壞れ命終りて、惡處に趣き至り地獄の中に生ず。地獄に生じ已りて獄卒執捉へて極めて苦治する時、彼獄卒に向ひてこの語を作す、獄卒、當に知るべし。我を苦治すること莫れ。所以者何。我王の爲、天の爲、先祖の爲、沙門梵志の爲の故に作惡を行じぬと。云何が陀然、彼の人地獄の卒よりこの苦を脫れ得べきや』。答へて曰く『不なり』。『陀然、族姓子 如法・如業・如功德もて錢財を得、尊重奉敬して(1)父母に孝養し、福德業を行じて惡業を作さざるを得べし。陀然、

(1) 父母。

(2) 妻子。

(3) 奴婢。

(4) 王・天・先祖・沙門梵志。

(1) 父母に孝養す。
【九】 巴利文「因を有し法に適へる作業他にあり、それによりて父母を養ひ福業道を踏み得べきも、邪業を行ふことを得ず。」

昔日未だ出家せざる［とき］の友なり。賢者、識るや』。答へて曰く『これを識る』。また問ひぬ『賢者、梵志陀然王舍城に住し、身體康强・安快無病にして起居輕便、氣力常の如く、數ば佛を見、樂しみて法を聞かんと欲するや』。答へて曰く『尊者舍梨子、梵志陀然、王舍城に住し、身體康强・安快無病にして起居輕便、氣力常の如く［なれど彼］佛を見るを欲せず、法を聞くを樂しまず。所以者何。尊者舍梨子、梵志陀然精進せずして禁戒を犯す。彼王に依傍し梵志居士を欺誑して梵志居士に依恃し王を欺誑す』。尊者舍梨子聞き已りぬ。［彼］舍衞國に於て夏坐を受け訖り三月を過ぎ已り衣を補治し竟り、衣を攝り鉢を持して舍衞國より王舍城に往詣し、竹林加蘭哆園に住しぬ。こゝに於て尊者舍梨子夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持して王舍城に入り、[六]次いで乞食を行じ、乞食し已竟りて梵志陀然の家に往至しぬ。この時梵志陀然その家より出で、[七]泉水の邊に至りて居民を苦治しぬ。梵志陀然遙かに尊者舍梨子の來るを見、坐より起ち偏に著衣を袒ぎ、叉手を尊者舍梨子に向け讃して曰く『善く來れり舍梨子。舍利子久しくこゝに來らず』。こゝに於て梵志陀然、敬心して尊者舍梨子を扶け抱き、將ゐて家中に入れ、爲に好床を敷き、請してすなはち坐せしめぬ。尊者舍梨子卽ちその床に坐しぬ。梵志陀然、尊者舍梨子の坐するを見已り、[八]金澡灌を執り、尊者舍梨子に食を請ひぬ。尊者舍梨子曰く『止ね止ね、陀然、但心喜べば足る』。梵志陀然また再び三たび食を請ひぬ。尊者舍梨子亦再び三たび語げて曰く『止ね止ね、陀然。但心喜べば足る』。この時梵志陀然問ひて曰く『舍梨子、何故にかくの如き家に入りて而も食を肯んぜざる』。答へて曰く『陀然、汝精進せずして禁戒を犯し、王に依傍して梵志居士を欺誑し、梵志居士に依傍して王を欺誑す』。梵志陀然答へて曰く『舍梨子、當に知るべし。我今家に在りて家業を以て事と爲す。我應に自ら安隱にして父母を供養し、妻子を瞻視し、奴婢に供給し、當に王租を輸り、諸天を祠祀し、先祖を祭餟し、及び沙門梵志に布施すべし。後天に生じて長壽を得、樂果報を得るが爲の故なり。舍梨子、この一切の事疑ふ

【六】次第乞食といふもの、一戸も殘さず乞食するをいふ。
【七】巴利經にては、彼は城外に於て牛の乳を搾りつつありき。
【八】金製の手洗瓶。

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び、竹林加蘭哆園に在し、大比丘衆と倶に〔二〕夏坐を受けたまひぬ。その時尊者舍梨子舍衛國に在りて亦夏坐を受けぬ。この時一比丘有り王舍城に於て夏坐を受け訖り、三月を過ぎ已り衣を補治し竟りて、衣を攝り鉢を持して王舍城より舍衛國に往き、勝林給孤獨園に住しぬ。彼の一比丘、尊者舍梨子の所に往詣し、稽首して足を禮し却きて一面に坐しぬ。尊者舍梨子問ひて曰く『賢者、何處より來り何に於て夏坐せるや』。彼の一比丘答へて曰く『(1)尊者舍梨子、我王舍城より來り王舍城に在りて夏坐を受けぬ』。また問ひぬ『賢者、世尊、王舍城に在して夏坐を受けたまひぬ。〔三〕聖體康强・安快無病にして、起居輕便、氣力常の如くあらせらるるや』。答へて曰く『是の如し尊者舍梨子。世尊、王舍城に在して夏坐を受けたまひ、聖體康强・安快無病にして、起居輕便、氣力常の如くあらせらる』。また問ひぬ。『賢者、(2)比丘衆・比丘尼衆、王舍城に在りて夏坐を受け、聖體康强・安快無病にして起居輕便、氣力常の如く、數ば佛を見、樂しみて法を聞かんと欲するや』。答へて曰く『是の如し尊者舍梨子、比丘衆・比丘尼衆・王舍城に在りて夏坐を受け、聖體康强・安快無病にして起居輕便、氣力常の如く、數ば佛を見、盡く樂しみて法を聞かんと欲す』。また問ひぬ『賢者、(3)優婆塞衆・優婆夷衆、王舍城に住し、〔四〕身體康强・安快無病にして起居輕便、氣力常の如く、數ば佛を見、樂しみて法を聞かんと欲するや』。答へて曰く『是の如し尊者舍梨子、優婆塞衆・優婆夷衆、王舍城に住し、身體康强・安快無病にして起居輕便、氣力常の如く、數ば佛を見、盡く樂しみて法を聞かんと欲す』。また問ひぬ『賢者、若干の(4)異學の沙門・梵志、王舍城に在りて夏坐を受け、身體康强・安快無病にして起居輕便、氣力常の如く、數ば佛を見、樂しみて法を聞かんと欲するや』。答へて曰く『是の如し尊者舍梨子、若干の異學の沙門・梵志、王舍城に在りて夏坐を受け、身體康强・安快無病にして起居輕便、氣力常の如く、數ば佛を見、盡く樂しみて法を聞かんと欲す』。また問ひぬ『賢者、王舍城に在りて一梵志有り、名づけて(5)〔五〕陀然と曰ふ。これ我が

〔二〕 第二卷「七車經」第九の註を見よ。

(1)世尊。

〔三〕 聖體康强(Arogo bala-vai)。無病にして强力なり。

(2)比丘・比丘尼衆。

(3)優婆塞・優婆夷衆。

〔四〕 これ及び次の場合「聖體」といはずして單に「身體」といふに注意せよ。

(4)異學の沙門・梵志。

(5)陀然。

〔五〕 陀然(Dhānañjāni)。

或は來りて息解脫して色を離れ、無色定に至るを問ふ有り。諸賢、若し無事の比丘無事を行じ息解脫して色を離れ無色定に至るを答ふることを知らざれば則ち、比丘の訶數、詰責するを致す。この賢、無事なるも何ぞ無事を行ずと爲さん。所以者何。この賢、無事にして無事を行じ息解脫して色を離れ無色定に至るを答ふることを知らず。若し衆中に至れば、亦比丘の訶數、詰責するを致す。この故に諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に共に息解脫して色を離れ、無色定に至るを論ずることを學すべし。(13)諸賢、無事の比丘、無事を行ずるには當に共に漏盡智通を論ずることを學すべし。何を以ての故に。諸賢、無事の比丘無事を行ずる時、或は來りて漏盡智通を問ふ有り。諸賢、若し無事の比丘無事を行じ漏盡智通を答ふるを知らざれば則ち比丘の訶數、詰責するを致す。この賢、無事なるも何ぞ無事を行ずと爲さん。所以者何。この賢、無事にして無事を行じ漏盡智通を答ふるを知らず。若し衆中に至れば亦比丘の訶數、詰責するを致す。この故に諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に共に漏盡智通を論ずることを學すべし』。この時尊者大目犍連亦衆中に在りき。大目乾連白して曰く『尊者舍梨子、但[一四]無事の比丘無事を行ずるに應に是の如き法を學すべくして、人間比丘を謂ふに非ざるや』。尊者舍梨子答へて曰く『尊者大目乾連、無事の比丘無事を行ずるすら尚かくの如き法を學ぶ。況やまた人間比丘をや』。是の如く二尊更に相稱說し、善い哉と讃歎し、所說を聞き已りて坐より起ちて去りぬ。

敬重にして調笑無く、　畜生論「せず」、傲ならず。　根を護りて食足るを知り、　精進にして
正念「正」智なり。　時と亦善坐とを知り、　律阿毘曇を論じ　及び息解脫を說き、　漏盡通亦
然り。

二十七、梵志陀然經第七[一]

(13) 當に共に漏盡智通を論ずることを學すべし。

[一四] 無事の比丘、即ち森林内に住する比丘は以上の事を學ぶべきが、人間の比丘即ち村里の中に住する比丘はその必要なきや。

[一] M. 97. Dhānañjanisutta.

致す。この賢、無事なるも何ぞ無事を行ずと爲さん。所以者何。この賢、無事にして無事を行じ多く正念無く正智無し。若し衆中に至れば亦比丘の訶數、詰責するを致す。この故に諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に正念及び正智を學すべし。(9)諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に時及び善時を知ることを學すべし。早く村に入りて乞食を行ぜず、亦晩く出でず。諸賢、若し無事の比丘無事を行じ、早く村邑に入りて乞食を行じ、又晩く出づれば則ち比尼の訶數、詰責するを致す。この賢、無事なるも何ぞ無事を行ずと爲さん。所以者何。この賢、無事にして無事を行じ早く村邑に入りて乞食を行じ又復晩く出づ。若し衆中に至れば亦比丘の訶數、詰責するを致す。この故に諸賢、無事の比丘、無事を行ずるには時と善時を知ることを學すべし。(10)諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に坐及び善坐を知ることを學すべし。[一]長老の坐に逼り小比丘を訶することを爲さず。諸賢、若し無事の比丘無事を行じ長老の坐に逼り小比丘を訶することを爲さば則ち比丘の訶數、詰責するを致す。この賢、無事なるも何ぞ無事を行ずと爲さん。所以者何。この賢、無事にして無事を行じ長老の坐に逼り小比丘を訶することを爲す。若し衆中に至れば亦比丘の訶數、詰責するを致す。この故に諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に坐及び善坐を知ることを學すべし。(11)諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に共に[二]律阿毘曇を論ずることを學すべし。何を以ての故に。諸賢、無事の比丘無事を行ずる時或は來りて律阿毘曇を問ふ有り。諸賢、若し無事の比丘無事を行じ律阿毘曇を答ふるを知らざれば則ち比丘の訶數、詰責するを致す。この賢、無事なるも何ぞ無事を行ずと爲さん。所以者何。この賢、無事にして無事を行じ律阿毘曇を答ふるを知らず。若し衆中に至れば亦比丘の訶數、詰責するを致す。この故に諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に共に律阿毘曇を論ずることを學すべし。(12)諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に共に[三]息解[脫]して色を離れ無色定に至るを論ずるを學すべし。何を以ての故に、諸賢、無事の比丘無事を行ずる時、

(9)當に時及び善時を知ることを學すべし。

(10)當に坐に善坐を取るを知ることを學すべし。

【一】十夏以上の比丘を長老といふ、その比丘の座に逼りて坐し、又は小比丘を叱責すべからず。

(11)當に律阿毘曇を論ずることを學すべし。

【二】律阿毘曇(Abhivinaya, abhidhamma)。律及び法(=經)を哲學的に取扱ふことをいふ。

(12)當に共に息解脫して色を離れ、無色定に至るを論ずることを學すべし。

【三】息解脫(Santa, vimokkha)。安息、解脫。

賢、無事の比丘無事を行ずるには當に不畜生論を學すべし。(4)諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に不憍慠及び少言說を學すべし。諸賢、若し無事の比丘無事を行じ、多く憍慠を行じ多く言說すれば、則ち比丘の訶數、詰責するを致す。この賢、無事なるも何ぞ無事を行ずと爲さん。所以者何。この賢、無事にして無事を行じ、多く憍慠を行じ及び多く言說す。若し衆中に至れば亦比丘の訶數、詰責するを致す。この故に諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に不憍慠及び少言說を學すべし。(5)諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に諸根を護ることを學すべし。諸賢、若し無事の比丘無事を行じ、多く諸根を護らざれば則ち比丘の訶數、詰責するを致す。この賢、無事なるも何ぞ無事を行ずと爲さん。所以者何。この賢、無事にして無事を行じ多く諸根を護らず、若し衆中に至れば亦比丘の訶數、詰責するを致す。この故に諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に諸根を護ることを學すべし。(6)諸賢、無事の比丘無事を行ずるには〔一〇〕當に食に止足を知ることを學すべし。諸賢、若し無事の比丘、無事を行じ、餘多の食を貪り、足ることを知らざれば則ち比丘の訶數、詰責するを致す。この賢、無事なるも何ぞ無事を行ずと爲さん。所以者何。この賢、無事にして無事を行じ、餘多の食を貪り止足を知らず。若し衆中に至れば亦比丘の訶數、詰責するを致す。この故に諸賢、無事の比丘、無事を行ずるには當に食に止足を知ることを學すべし。(7)諸賢、無事の比丘、無事を行ずるには當に精進して懈怠せざることを學すべし。諸賢、若し無事の比丘無事を行じ多く不精進にして懈怠せば則ち比丘の訶數、詰責することを致す。この賢、無事なるも何ぞ無事を行ずと爲さん。所以者何。この賢、無事にして無事を行じ多く不精進にして而も反つて懈怠す。若し衆中に至れば亦比丘の訶數、詰責するを致す。この故に諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に精進して懈怠せざることを學すべし。(8)諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に正念及び正智を學すべし。諸賢、若し無事の比丘無事を行じ多く正念無く正智無ければ則ち比丘の訶數、詰責するを

(4)當に不憍傲少言說を學すべし。
【九】高ぶり傲らず口數少きこと。
(5)當に諸根を護ることを學すべし。
(6)當に食に止足を知ることを學すべし。
【一〇】飲食物の分量を擇すること。
(7)當に精進して而も懈怠せざることを學すべし。
(8)當に正念及び正智を學すべし。

卷の第六

二十六、[一]瞿尼師經第六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び、[二]竹林迦蘭哆園に在しぬ。その時[三]瞿尼師比丘亦王舍城に遊び、無事室に在りて[四]調笑・憍慠・躁擾にして喜び忘れ、心獼猴の如し。瞿尼師比丘少緣の爲の故に王舍城に至りぬ。この時尊者舍梨子比丘衆と倶に中食し已りて後、小事に因るが故に講堂に集在しぬ。瞿尼師比丘王舍城に於て[五]所作已に訖りて講堂に往詣しぬ。尊者舍梨子、遙かに瞿尼師の來るを見已り、瞿尼師に因みて諸の比丘に告げぬ、『(1)諸賢、[六]無事の比丘[七]無事を行ずるには當に敬重して而も隨順に觀ずることを學すべし。諸賢、若し無事の比丘無事を行じて多く敬重せず、隨順に觀ぜざれば則ち比丘の訶數、詰責するを致す。この賢、無事なるも何ぞ無事を行ずと爲さん。所以者何。この賢、無事にして無事を行じ、多く敬重せず隨順に觀ぜず。若し衆中に至れば亦比丘の訶數、詰責するを致す。この故に諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に敬重を學び、隨順に觀ぜしむべし。(2)諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に調笑せず而も躁擾せざることを學すべし。諸賢、若し無事の比丘無事を行じ、多く調笑と而も躁擾とを行ぜば則ち比丘の訶數、詰責するを致す。この賢、無事なるも何ぞ無事を行ずと爲さん。所以者何。この賢、無事にして無事を行じ、多く調笑及び躁擾を行ず。若し衆中に至れば亦比丘の訶數、詰責するを致す。この故に諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に不調笑を學び、不躁擾ならしむべし。(3)諸賢、無事の比丘無事を行ずるには當に[八]不畜生論を學すべし。諸賢、若し無事の比丘、無事を行じて多く畜生論なれば則ち比丘の訶數、詰責するを致す。この賢、無事なるも何ぞ無事を行ずと爲さん。所以者何。この賢、無事にして無事を行じ、多く畜生論なり。若し衆中に至れば、亦比丘の訶數、詰責するを致す。この故に諸

【一】M. 69, Gulissāni-sutta

【二】第三卷、「羅云經」の註に出づ。

【三】瞿尼師(Gulissāni。

【四】戲れ笑ひ、高ぶり傲り、躁ぎ煩はしきこと。

【五】何かの用事。

【六】無事の比丘(āraññaka bhikkhu)森林住の比丘。

【七】巴利文には「林住の比丘にして大衆の中に交り、大衆中に住するものは同梵行者に對して尊重恭敬あるべし」とあり。

(1)當に敬重して而も隨順に觀ずることを學すべし。

(2)當に調笑せず而も躁擾せざることを學すべし。

(3)當に不畜生論を學すべし。

【八】畜生類に關する談話に耽らざること。

の如し。諸の比丘聞き已りて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第五

るを念ずべし。諸賢、若し慧者見て設し恚惱を生ぜば應にかくの如く除くべし。(4)諸賢、或は一人有り、身不淨行にして口意不淨行なり。若し慧者見て設し恚惱を生ぜば當に云何が除くべき。諸賢、猶ほ人有るが如し。遠く長路を渉り、中道に病を得、極困委頓するも獨りにして伴侶無し。後村は轉ずるに遠くして而も前村は未だ至らず。若し人有り、來りて一面に住し、この行人遠く長路を渉り、中道に病を得、極困委頓し獨りにして伴侶無く、後村は轉ずるに遠くして而も前村は未だ至らざるを見ば、彼若し侍人を得ば、迥野の中より將ゐて村邑に至り、妙湯藥・餔養・美食好き贍視者を與へん。是の如くせばこの人の病必ず差ゆることを得。謂ふに彼の人、この病人に於て極めて哀愍慈念の心有り。是の如く諸賢、或は一人有り。身不淨行にして口意不淨行なり。若し慧者見て、すなはちこの念を作す。この賢、身不淨行にして口意不淨行なり。この賢をして身不淨行、口意不淨行なるに因りて、身壞れ命終りて、趣かに惡處に至り、地獄の中に生ぜしむること莫れ。若しこの賢、善知識を得ば、身不淨行を捨てゝ身淨行を修し、口意不淨行を捨てゝ口意淨行を修せん。是の如くこの賢、身淨行、口意淨行なるに因りて身壞れ、命終りて必ず善處に至り、乃ち天上に生ぜんと。謂ふに彼の賢この賢の爲に極めて哀愍慈念の心有り。若し慧者見て、設し恚惱を生ぜば應に是の如く除くべし。(5)諸賢、或は一人有り。身淨行にして口意淨行なり。若し慧者見て設し恚惱を生ぜば當に云何が除くべき。諸賢、猶ほ村外遠からずして好き池水有り、既に淸く且つ美なり。その淵平滿にして翠草岸を被ひ、華樹四周す。若し人有り、來りて熱極まり、煩悶・飢渴・頓乏し、風熱に逼らる。彼池に至り衣を脫ぎて岸に置き、すなはち池中に入りて恣意に快く浴し、熱・煩悶・飢渴・頓乏を除くが如し。是の如く諸賢、或は一人有り、身淨行にして口意淨行なり。常に當に彼の身の淨行にして、口意の淨行なるを念ずべし。若し慧者見て、設し恚惱を生ぜば應に是の如く除くべし。諸賢、我向に說く所の五除惱法は、これに因るが故に說く』。尊者舍梨子の所說かく

(4)身不淨行、口意不淨行。

(5)身淨行、口意淨行。

一人有り、身浄行にして口意浄行なり、若し慧者見て、設し恚惱を生ぜば應當にこれを除くべし。(1)諸賢、或は一人有り、身不浄行にして口浄行なり。若し慧者見て、設し恚惱を生ぜば應當に云何が除くべき。諸賢、猶ほ[三]阿練若比丘、[四]糞掃衣を持するが如し。糞聚中に棄つる所の弊衣を見るに、或は大便汚、或は小便・涕唾及び餘の不浄の染汚する所あり。見已りて[五]左手にこれを執り、右手もて舒べ張り、若し大便・小便・涕唾及び餘の不浄の[六]所汚處に非ず、又穿たざればすなはち裂きてこれを取る。是の如く諸賢、或は一人有り、身不浄行にして口浄行なり。彼の身不浄行を念ずること莫れ。但當に彼の口の浄行を念ずべし。若し慧者見て、設し恚惱を生ぜば應當にかくの如く除くべし。(2)諸賢、或は一人有り。口不浄行にして身浄行なり。若し慧者見て、設し恚惱を生ぜば當に云何が除くべき。諸賢、猶ほ村外遠からずして深水の池有りて藁草に覆はる。若し人有り、來りて熱極まり煩悶飢渇頓乏し、風熱に逼らるれば、彼池に至り已りて衣を脫ぎ岸に置き、すなはち池中に入り兩手もて藁を披き恣意に快く浴し、熱・煩悶・飢渇・頓乏を除くが如く、是の如く諸賢、或は一人有り口不浄行にして身に浄行有るも、彼の口不浄行を念ずること莫れ、但當に彼の身の浄行を念ずべし。若し慧者見て設し恚惱を生ぜば應に是の如く除くべし。(3)諸賢、或は一人有り。身不浄行、口不浄行にして心少しく浄行有り。若し慧者見て、設し恚惱を生ぜば當に云何が除くべき。諸賢、猶ほ四衢道に牛跡の水有るがごとし。若し人有り來りて熱極まり煩悶・飢渇・頓乏し風熱に逼らるれば、彼この念を作す、この四衢道の牛跡の少水、我若し手を以て葉を以て取れば則ち擾れて渾濁し、我が熱極まり煩悶・飢渇・頓乏せるを除くことを得ざらん。我寧ろ跪きて手膝もて地を拍ち口を以て水を飲むべしと。彼即ち長跪し、手膝もて地を拍ち口を以て水を飲みて彼即ち熱極まり、煩悶・飢渇・頓乏せるを除くを得。是の如く諸賢、或は一人有り、身不浄行、口不浄行にして心少しく浄有るも、彼の身不浄行、口不浄行を念ずることを得ること莫れ。但、當に彼の心に少しく浄有

(1)身不淨行、口淨行。
【三】阿練若比丘(Araññaka bhikkhu)。森林內に住して精舎內に住せざる比丘。
【四】糞掃衣(Paṃsukūla)。塵土堆中より拾ひ取りたる布片を以て造りたる法衣。
【五】巴利文にては左足右足。
【六】大小便その他の不淨物に汚れざる部分、又は穴の出來ざる部分。
(2)口不淨行、身淨行。
(3)身不淨行、口不淨行、心少淨。

坐より起ち佛足に稽首し、世尊に白して曰く『[一七]過を悔いぬ世尊、自首すべし善逝、愚の如く癡の如く不定の如く、不善の如し。所以者何。謂く、我虛妄の言を以て淸淨梵行の舍梨子比丘を誣謗しぬ。世尊、我今過を悔ゆ。願はくは爲にこれを受けたまへ。見已り發露して後更に作さず』。世尊告げて曰はく『是の如し比丘、汝實に愚の如く癡の如く不定の如く不善の如し。所以者何。謂く汝虛妄の言の空にして眞實無きを以て淸淨梵行の舍梨子比丘を誣謗しぬ。[されど]汝能く過を悔いぬ、見已り發露して後更に作さずと。若し過を悔ゆる有りて、見已り發露して後更に作さゞれば、[一八]是の如く聖法律を長養すれば則ち衰退せず』是に於て佛尊者舍梨子に告げたまはく『汝速かに彼の癡人の過を悔ゆるを受け、彼の比丘をして卽ち汝の前に於て頭破れて七分ならしむること莫れ』尊者舍梨子卽ち彼の比丘を哀愍するがための故にすなはち過を悔ゆるを受けぬ。佛說かくの如し。舍梨子及び諸の比丘、佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二十五、[一]水喩經第五

我が聞きしことかくの如し。ある時佛舍衞國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時尊者舍梨子、諸の比丘に告げぬ『諸賢、我今汝が爲に[二]五除惱法を說かん。諦かに聽け、諦かに聽きて善く之を思念せよ』彼の諸の比丘教を受けて聽きぬ。尊者舍梨子言く『云何が五と爲す。諸賢、(1)或は一人有り、身不淨行にして口淨行なり。若し慧者見て、設し恚惱を生ぜば應當にこれを除くべし。(2)また次に諸賢、或は一人有り、口不淨行にして身淨行なり。若し慧者見て、設し恚惱を生ぜば應當にこれを除くべし。(3)また次に諸賢、或は一人有り、身不淨行、口不淨行にして心に少しく淨有り。若し慧者見て、設し恚惱を生ぜば應當にこれを除くべし。(4)また次に諸賢、或は一人有り身不淨行、口意不淨行なり。若し慧者見て、設し恚惱を生ぜば應當にこれを除くべし。(5)また次に諸賢、或は

【一七】巴利文「大德よ、われ罪を犯しぬ、愚の如く癡の如く不善の如く、非實虛妄非眞[の語]を以て尊者舍利弗を謗れり。大德世尊、余の罪を罪として受入れたまへ、未來の攝護のために。」

【一八】こは聖者の律に於て增長することにして減退することに非ず。

【一】A. iii. 186『雜阿含』六卷の七(四九七)參照。

【二】五除惱法(Pañca āghātapaṭivinayā)。瞋念を制止する五種の方法。

身念有り。我當に云何が一梵行[者]を輕慢して人間に遊ぶべき。世尊、猶ほ[一二]掃箒は淨と不淨と、大便・小便・涕唾悉く掃箒し、これを以て憎愛有らず、羞ぢず慚ぢず亦愧恥せざるが如く、世尊、我亦かくの如し。心掃箒の如く、結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。世尊、若し身身念無き者は彼すなはち、一梵行[者]を輕慢して人間に遊ばん。世尊、我善く身身念有り。我當に云何が一梵行[者]を輕慢して人間に遊ぶべき。世尊、猶ほ[一三]脯旃尼は淨と不淨と、大便・小便・涕唾悉く拭ひ、脯旃尼これを以ての故に憎愛有らず、羞ぢず慚ぢず亦愧恥せざるが如く、世尊、我亦かくの如し。心、脯旃尼の如く、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。世尊、若し身身念無き者は彼すなはち一梵行[者]を輕慢して人間に遊ばん。世尊、我善く身身念有り。我當に云何が一梵行[者]を輕慢して人間に遊ぶべき。世尊、猶ほ[一四]膏瓶處々裂け破れ、膏を盛り滿し已りて日中に著くに漏り、遍く漏り津ひ、遍く津ふ。若し目有る人、來りて一面に住し、この膏瓶處々裂け破れ、膏を盛り滿し已りて日中に著くに漏り、遍く漏り津ひ、遍く津ふを見るが如く、世尊、我またかくの如し。常にこの身を觀ずるに、九孔の不淨漏り、遍く漏り津ひ、遍く津ふ。世尊、若し身身念無き者は彼すなはち一梵行[者]を輕慢して人間に遊ばん。世尊、我善く身身念有り。我當に云何が一梵行[者]を輕慢して人間に遊ぶべき。世尊、猶ほ[一五]一自喜有り、年少にして沐浴澡洗し熏ずるに塗香を以てし白淨衣を著け、瓔珞もて自ら嚴り、鬚を剃り髪を治め頭に華鬘を冠れるに若し三屍[即ち]死蛇、死狗及び死人の青瘀膖脹し、極めて臭く、爛壞して不淨流漫せるを以て咽頸に繫著するに、彼羞慚を懷き極めて之を惡穢するがごとし。世尊、我亦かくの如し。常にこの身を觀ずるに臭處不淨なり、心に羞慚を懷き極めて之を惡穢す。世尊、若し身身念無き者は彼すなはち一梵行[者]を輕慢して人間に遊ばん。世尊、我善く身身念有り。我當に云何が一梵行[者]を輕慢して人間に遊ぶべき』。こゝに於て彼の[一六]比丘即ち

【一二】掃箒(Rajoharana)。

【一三】脯旃尼(Puñchani)。拭布、巴利文にはこの條なしと。

【一四】膏瓶(Medakathālika)。

【一五】一自喜。元・明・本には一自善に作る、何の意なるや考へ得ず、巴利文は「猶ほ大德よ、女子又は男子の弱齡壯年にして、莊飾を愛し、頭を沐ひたるもの、蛇狗又は人の屍をその首に懸けて苦しみ、羞ぢ厭ふが如く、大德よ、吾も亦この臭腐身のために苦しみ、羞ぢ且つ厭ふ」となれり。

【一六】即ちその一梵行者。

に至り、遊行する所、處として侵犯する所無きがごとし。世尊、我亦是の如し。心、手を截られたる旃陀羅子の如く、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量に善く修し、一切世間に遍滿し、成就して遊ぶ。世尊、若し身身念無き者は彼すなはち一梵行[者]を輕慢して人間に遊ばん。世尊、我善く身身念有り。我當に云何が一梵行[者]を輕慢して人間に遊ぶべき。世尊、猶ほ若し[八]地は淨と不淨と、大便・小便・涕唾悉く受け、地これを以て憎愛有らず、羞ぢず慚ぢず、亦愧恥せざるが如く、世尊、我亦是の如し。心、彼の地の如く、結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量にして、善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。世尊、若し身身念無き者は彼すなはち一梵行[者]を輕慢して人間に遊ばん。世尊、我善く身身念有り。我當に云何が一梵行 [者] を輕慢して人間に遊ぶべきや。世尊、猶ほ若し[九]水は淨と不淨と、大便・小便・涕唾悉く洗ひ、水これを以て憎愛有らず、羞ぢず慚ぢず亦愧恥せざるが如く、世尊、我亦是の如し。心、彼の水の如く、結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。世尊、若し身身念無き者は、彼すなはち一梵行[者]を輕慢して人間に遊ばん。世尊、我善く身身念有り。我當に云何が一梵行を輕慢して人間に遊ぶべき。世尊、猶ほ若し[一〇]火は淨と不淨と、大便・小便・涕唾悉く燒き、火これを以て憎愛有らず、羞ぢず慚ぢず亦愧恥せざるが如く、世尊、我亦是の如し。心、彼の火の如く、結無く、怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。世尊、若し身身念無き者は彼すなはち一梵行[者]を輕慢して人間に遊ばん。世尊、我善く身身念有り。我當に云何が一梵行[者]を輕慢して人間に遊ぶべき。世尊、猶ほ若し[一一]風は淨と不淨と、大便・小便・涕唾悉く吹く。風これを以て憎愛有らず、羞ぢず慚ぢず亦愧恥せざるが如く、世尊、我亦是の如し。心、彼の風の如く、結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。世尊、若し身身念無き者は彼すなはち一梵行[者]を輕慢して人間に遊ばん。世尊、我善く身

【八】地(Paṭhavi)。

【九】水(Āpa)。

【一〇】火(Teja)。

【一一】風(Vāya)。

前に在りて相違法を犯し、この語を作しぬ、世尊、今日尊者舍梨子、我を輕慢し已りて人間に遊行しぬと。一比丘教を受け已りて卽ち坐より起ち、佛を禮して去りぬ。是に於て尊者阿難、世尊の後に住し[五]拂を執りて佛に侍しぬ。一比丘去りて後久しからずして尊者阿難卽ち戶鑰を持し、遍ねく諸房に至り、諸の比丘を見てすなはちこの語を作しぬ、『善い哉、諸尊。速かに講堂に詣れ。今尊者舍梨子、當に佛前に在りて師子吼すべし。若し尊者舍梨子の所說甚だ深く、息中の息、妙中の妙、かくの如く說かば、諸尊及び我これを聞くを得、已りて當に善く誦習すべく、當に善く受持すべし』。彼の時諸の比丘、尊者阿難の語を聞き已りて、悉く講堂に詣りぬ。その時一比丘、尊者舍梨子の所に往詣し、白して曰く『世尊、汝を呼びたまふ。汝去りて久しからずして一梵行[者]有り、我が前に在りて相違法を犯し、この語を作しぬ、世尊、今日尊者舍梨子我を輕慢し已りて人間に遊行しぬと』。是に於て尊者舍梨子聞き已りて卽ち坐より起ち、すなはち還りて佛[所]に詣り、稽首して足を禮し却きて一面に坐しぬ。佛すなはち告げて曰はく、『舍梨子、汝去りて久しからずして一梵行[者]有り、我が前に於て相違法を犯してこの語を作しぬ、世尊、今日尊者舍梨子、我を輕慢し已りて人間に遊行しぬと。舍梨子、汝實に一梵行[者]を輕慢し已りて人間に遊べるや』。尊者舍梨子白して曰く『世尊、若し身身念無き者は彼すなはち一梵行[者]を輕慢して人間に遊ばん。世尊、我善く身身念有り。我當に云何が一梵行[者]を輕慢して人間に遊ぶべき。世尊、猶ほ[六]角を截りし牛の至忍溫良にして善く調せられ善く御せられ、村より村に至り、巷より巷に至り、遊行する所、處として侵犯する所無きがごとし。世尊、我亦是の如し。心、角を截りし牛の如く、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量に善く修し、一切世間に遍滿し、成就して遊ぶ。世尊、若し身身念無き者は彼すなはち一梵行[者]を輕慢して人間に遊ばん。我善く身身念有り、我當に云何が一梵行を輕慢して人間に遊ぶべき。世尊、猶ほ[七]旃陀羅子兩手を截られ、その意至下にして、村より村に至り邑より邑

【五】拂子。

【六】截角牛(Chinnavisāṇa-usabha)。

【七】旃陀羅子 (Caṇḍāla-kumāra)。

り、異文異句を以てこの義を答へんと』。世尊告げて曰はく『黑齒、是の如し、是の如し。若し我、一日一夜異文異句を以て舍梨子比丘にこの義を問はゞ、舍梨子比丘必ず能く我が爲に、一日一夜、異文異句を以てこの義を答へん。黑齒、若し我、二・三・四・七日七夜に至り、異文異句を以て舍梨子比丘にこの義を問はば、舍梨子比丘亦能く我が爲に、二・三・四・七日七夜に至り、異文異句を以てこの義に答へん。所以者何。黑齒舍梨子比丘深く法界に達するが故に』。佛說かくの如し。尊者舍梨子及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二十四、師子吼經第四[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊、大比丘衆と俱に舍衞國に於て[二]夏坐を受けたまひぬ。尊者舍梨子亦舍衞國に遊びて夏坐を受けぬ。是に於て尊者舍梨子舍衞國に夏坐を受け訖り三月を過ぎ已り、衣を補治し竟りて、衣を攝り鉢を持して佛所に往詣し、稽首して足を禮し却きて一面に坐し、白して曰く『世尊、我舍衞國に於て夏坐を受け訖りぬ。世尊、我[三]人間に遊行せんと欲す。』世尊告げて曰はく『舍梨子、汝去りて欲する所に隨へ。諸の未だ度せられざる者は當に得度せしむべく、諸の未だ[解]脫せざる者は當に得脫せしむべく、諸の未だ般涅槃せざる者は般涅槃を得せしめよ。舍梨子、汝去りて欲する所に隨へ』。是に於て尊者舍梨子、佛の所說を聞き、善く受け善く持し、卽ち坐より起ち、佛足を稽首し繞三匝して去り、還りて己の房に至り床座を收擧し、衣を攝り鉢を持し卽便ち出で去りて人間に遊行しぬ。尊者舍梨子去りて後久しからず、一梵行[者]有り、佛前に在りて[四]相違法を犯し、世尊に白して曰く『今日尊者舍梨子、我を輕慢し已りて人間に遊行しぬ』。世尊聞き已りて一比丘に告げたまはく、汝舍梨子の所に往きて舍梨子に語げよ、世尊汝を呼びたまふ。汝去りて久しからずして一梵行[者]有り。我が

【一】A. iv. 373

【二】二卷「七車經」註を見よ。

【三】人間に遊行す。安居中は森林僧院精舍の中に隱遁的生活を營めるものが、安居終れば村里城邑に出で托鉢生活を營む、これを人間に遊行すといふ。

【四】犯相違法（Khiyadhammaṁ āpanna）。巴利原典刊行會の辭書に「意氣銷沈の狀態に陷れる」と解すれど多少相異せるかと思ふ。

く惑無く是の如き守護を行じ、その如く守護し已りて不善漏を生ぜずと。世尊、若し諸の梵行[者]來りて是の如きことを問はば、我當に是の如く答ふべし』。世尊歎じて曰く『善き哉、善き哉、舍梨子、若し諸の梵行[者]來りて是の如きことを問はば、汝應に是の如く答ふべし。所以者何。かくの如く說かば當にこの義を知るべし』。世尊告げて曰はく『舍梨子、また次に義有り、この說略して答ふるを得べし。若し諸の結は沙門の所說なり。彼の結我が有に非ずと、是の如き守護を行じ、その如く守護し已りて不善漏を生ぜず。舍梨子、これをまた義有り、この說略して答ふるを得べしと謂ふ』。世尊是の如きことを說き已りて卽ち坐より起ち、室に入りて燕坐したまひぬ。世尊室に入りて久しからずして、尊者舍梨子、諸の比丘に告げぬ『諸賢、我始め未だ意を作さゞるに、而も世尊卒にこの義を問ひたまひぬ。我この念を作しぬ、恐らく答ふること能はざらんと。諸賢、我初め一義を說きしに、すなはち世尊の讃可したまふ所と爲りき。我またこの念を作しぬ、若し世尊一日一夜異文異句を以て我にこの義を問ひたまはば、我能く世尊の爲に、一日一夜異文異句を以てこの義を答へん。若し世尊、二・三・四・七日七夜に至り、異文異句を以て我にこの義を問ひたまはば、我亦能く世尊の爲に、二・三・四・七日七夜に至り、異文異句を以てこの義に答へんと』。黑齒比丘、尊者舍梨子、是の如きことを說くを聞き已りて、卽ち坐より起ち、疾かに佛所に詣り、世尊に白して曰く『世尊室に入りたまひてより久しからずして尊者舍梨子、所說至高にして一向に師子吼しぬ。諸賢、我始め未だ意を作さゞるに、世尊卒にこの義を問ひたまひぬ。我この念を作しぬ、恐らく答ふること能はざらんと。諸賢、我始め、一義を說きしに、すなはち世尊の讃可したまふ所と爲りぬ。我またこの念を作しぬ、若し世尊、一日一夜、異文異句を以て我にこの義を問ひたまはば、我能く世尊の爲に、一日一夜異文異句を以てこの義を答へんと。諸賢、若し世尊、二・三・四・七日七夜に至り、異文異句を以て我にこの義を問ひたまはば、我亦能く世尊の爲に、二・三・四・七日七夜に至

是の如く答ふべし、諸賢、謂く三覺有り、樂覺・苦覺・不苦不樂覺なり。中に於て樂欲し著するものの、これを謂ひて愛と爲すと。世尊、若し諸の梵行[者]來りて是の如きことを問はゞ、我當に是の如く答ふべし』。世尊、歎じて曰はく『善き哉、善き哉、舍梨子、若し諸の梵行[者]來りて是の如きことを問はゞ、汝應に是の如く答ふべし。所以者何。是の如く說かば當にこの義を知るべし』。世尊問ひて、曰はく『舍梨子、若し諸の梵行[者]來り汝に問ひて、尊者舍梨子、云何が知り云何が見て、三覺中に於て、樂欲し著すること無きやと言はゞ、汝これを聞き已りて當に云何が答ふべき』。尊者舍梨子白して曰く『世尊、若し諸の梵行[者]來り我に問ひて、尊者舍梨子、云何が知り云何が見て、三覺中に於て樂欲し著すること無きやと言はゞ、世尊、我これを聞き已りて當に是の如く答ふべし、諸賢、謂くこの三覺は無常法・苦法・滅法なり。無常法は卽ちこれ苦なり。苦を見已りてすなはち三覺に於て樂欲し著すること無しと。世尊、若し諸の梵行[者]來りてかくの如きことを問はゞ、我當に是の如く答ふべし』。世尊歎じて曰はく『善き哉、善き哉、舍梨子、若し諸の梵行[者]來りて是の如く問はゞ、汝應に是の如く答ふべし。所以者何。是の如く說かば當にこの義を知るべし』。その時世尊告げて曰はく、『舍梨子、この說また義有り、略して答ふるを得べし。舍梨子、また何の義有りて、この說略して答ふるを得べき。所覺・所爲卽ち皆これ苦なり。舍梨子、これをまた義有り、この說略して答ふるを得べしと謂ふ』。世尊問ひて曰はく『舍梨子、若し諸の梵行[者]來り汝に問ひて、尊者舍梨子、云何が脊き向はずして、自ら智を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと、如眞を知ると稱說するやと言はゞ[如何]。尊者舍梨子、白して曰く『世尊、若し諸の梵行[者]來り我に問ひて、尊者舍梨子、云何が脊き向はずして、自ら智を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと、如眞を知ると稱說するやと言はゞ、世尊、我これを聞き已りて當に是の如く答ふべし、諸賢、我自ら內に於て脊きて向はず、則ち諸愛盡き驚無く怖無く疑無

【八】三覺（Tisso vedanā: sukhaṃ, dukkhaṃ, Adukkhamasukhaṃ）。樂受・苦受・不苦不樂受卽ち捨受なり。

如く答ふべし』。世尊、歎じて曰はく『善き哉、善き哉、舍梨子、若し諸の梵行[者]來りて問ふこと是の如くならば、汝應にかくの如く答ふべし。所以者何。是の如く說かば當にこの義を知るべし』。世尊問ひて曰はく『舍梨子、若し諸の梵行[者]來りて汝に問ひて、尊者舍梨子、有は何に因り何に緣り、何より生ずると爲し、何を以て本と爲すやと言はゞ、汝これを聞き已りて、當に云何が答ふべき』。尊者舍梨子白して曰く『世尊、若し諸の梵行[者]來り我に問ひて、尊者舍梨子、有は何に因り何に緣り、何より生ずると爲し、何を以て本と爲すやと言はゞ、世尊、我これを聞き已りて當に是の如く答ふべし、諸賢、有は受[六]に因り受に緣り、受より生じ、受を以て本と爲すと。世尊、若し諸の梵行[者]來りて是の如きことを問はゞ、我當にかくの如く答ふべし』。世尊歎じて曰はく『善き哉、善き哉、舍梨子、若し諸の梵行[者]來りて是の如きことを問はゞ、應に是の如く答ふべし。所以者何。是の如く說かば當にこの義を知るべし』。世尊問ひて曰はく『舍梨子、若し諸の梵行[者]來り汝に問ひて、尊者舍梨子、受は何に因り、何に緣り、何より生ずると爲し、何を以て本と爲すやと言はゞ汝これを聞き已りて當に云何が答ふべき』。尊者舍梨子白して曰く『世尊、若し諸の梵行[者]來り我に問ひて、尊者舍梨子、受は何に因り、何に緣り、何より生ずると爲し、何を以て本と爲すやと言はゞ、世尊、我これを聞き已りて當に是の如く答ふべし、諸賢、受は愛[七]に因り愛に緣り、愛より生じ愛を以て本と爲すと。世尊、若し諸の梵行[者]來りて是の如きことを問はゞ、我當に是の如きことを答ふべし』。世尊歎じて曰はく『善き哉、善き哉、舍梨子、若し諸の梵行[者]來りて是の如きを問はゞ、汝應に是の如く答ふべし。所以者何。是の如く說かば、當にこの義を知るべし』。世尊問ひて曰はく『舍梨子、若し諸の梵行[者]來り汝に問ひて、尊者舍梨子、云何が愛と爲すやと言はゞ、汝これを聞き已りて當に云何が答ふべき』。尊者舍梨子白して曰く『世尊、若し諸の梵行[者]來りて我に問ひて、尊者舍梨子、云何が愛と爲すやと言はゞ、世尊、我これを聞き已りて當に

【六】受(Upādāna)。

【七】愛(Taṇhā)。

に往詣し稽首作禮し却きて一面に坐しぬ。世尊問ひて曰はく『舍梨子、汝今實に自ら智を得生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと、如眞を知ると稱說せしや』。尊者舍梨子白して曰く『世尊、この文を以てせず、この句を以てせず、我但義を說きぬ』。世尊告げて曰はく『舍梨子、族姓子その方便に隨ひて稱說し、智を得れば卽ち智を得と說く』。尊者舍梨子白して曰く、『世尊、我向に已に說くにこの文を以てせず、この句を以てせず。我但義を說きぬ』。世尊問ひて曰はく『舍梨子、若し諸の梵行[者]來りて汝に問ひて、尊者舍梨子云何が知り云何が見て、自ら智を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知ると稱說するやと言はゞ、舍梨子、汝これを聞き已りて、當に云何が答ふべき』。尊者舍梨子白して曰く『世尊、若し諸の梵行[者]來りて我に問ひて、尊者舍梨子、云何が知り云何が見て、自ら智を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知ると稱說するやと言はゞ、世尊、我これを聞き已りて當にかくの如く答ふべし、諸賢、[四]生は因有り。この生の因盡く。生の因盡くと知り已りて、我自ら智を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知ると稱說すと。世尊、若し諸の梵行[者]來りて問ふこと是の如くならば、我當に是の如く答ふべし』。世尊歎じて曰はく『善き哉、善き哉、舍梨子、若し諸の梵行[者]來りて問ふこと是の如くならば、汝應に是の如く答ふべし。所以者何。是の如く說かば、當にこの義を知るべし』。世尊問ひて曰はく『舍梨子、若し諸の梵行[者]來り汝に問ひて、尊者舍梨子、生は何に因り何に緣り、何より生ずると爲し、何を以て本と爲すやと言はば、汝これを聞き已りて當に云何が答ふべき』。尊者舍梨子白して曰く『世尊、若し諸の梵行[者]來り我に問ひて、尊者舍梨子、生は何に因り何に緣り、何より生ずると爲し、何を以て本と爲すやと言はゞ、世尊、我これを聞き已りて當に是の如く答ふべし、諸賢、生は[五]有に因り有に緣り、有より生じ有を以て本と爲すと。世尊、若し諸の梵行[者]來りて問ふこと是の如くならば、我當に是の

【四】生(Jāti)。

【五】有(Bhava.)。

からずして[得]。また次に白淨、舍梨子比丘智慧を修行し、興衰の法を觀じ、是の如き智・聖慧・明達を得、分別曉了し以て正しく苦を盡す。また次に白淨、舍梨子比丘諸漏已に盡き、また結有ること無く心解脫し慧解脫し、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。白淨、舍梨子比丘この五の法を成就す。汝等應に共に愛敬尊重すべし』。佛說かくの如し。尊者白淨、及び諸の比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二十三、[一]智經第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛、舍衛國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時、牟利破群兎比丘、戒を捨て道を罷めぬ。黑齒比丘、牟利破群兎比丘、戒を捨て道を罷めぬと聞き、卽ち尊者舍梨子の所に詣り、稽首して足を禮し却きて一面に坐しぬ。坐し已りて白して曰く『尊者舍梨子、當に知るべし、牟利破群兎比丘、戒を捨て道を罷めぬ』。尊者舍梨子曰く『牟利破群兎比丘この法中に於て愛樂するや』。黑齒比丘問ひて曰く『尊者舍梨子、この法中に於て愛樂するや』。尊者舍梨子答へて曰く『黑齒、我この法に於て疑惑有ること無し』。黑齒比丘卽ちまた問ひて曰く『尊者舍梨子、當來の事に於てまた云何』。尊者舍梨子答へて曰く『黑齒、我來事に於てまた猶預無し』。黑齒比丘、是の如きを聞き已りて卽ち坐より起ち、佛所に往詣し、稽首作禮し却きて一面に坐して白して曰く『世尊、尊者舍梨子、今自ら稱說して、智を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知ると[なす]』。世尊聞き已りて一比丘に告げたまはく『汝舍梨子の所に往きて舍梨子に語げよ、世尊汝を呼ぶと』。一比丘教を受け已りて卽ち坐より起ち、佛を禮して去り、尊者舍梨子の所に往詣して白して曰く『世尊、尊者舍梨子を呼びたまふ』。尊者舍梨子、聞き已りて卽ち佛[所]

【一】S. ii 50
【二】牟利破群兎 (Moliya-phagguna)。
【三】黑齒 (Kalāra-khattiya)。

(3)また次に世尊、長老比丘、四增上心を得、現法の樂居易くして得、難からずして[得]。世尊、禪伺の長老上尊比丘、諸の梵行者の爲に愛敬尊重せらる。(4)また次に世尊、長老比丘、智慧を修行し興衰の法を觀じ是の如き智・聖慧・明達を得、分別曉了し以て正しく苦を盡[せば]、世尊、智慧の長老上尊比丘、諸の梵行者の爲に愛敬尊重せらる。(5)また次に世尊、長老比丘、諸漏已に盡き、また結有ること無く心解脫し慧解脫し、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち、所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知[れば]、世尊、漏盡の長老上尊比丘、諸の梵行者の爲に愛敬尊重せらる。世尊、長老比丘若しこの五法を成就せば、諸の梵行者の爲に愛敬尊重せらる』。世尊問ひて曰はく『白淨、若し長老比丘この五の法無くば、當に何の義を以て諸の梵行者をして愛敬尊重せしむべきや』。尊者白淨白して曰く『世尊、若し長老比丘この五の法無くば、更に餘事の諸の梵行者をして愛敬尊重せしむる無し。唯老耄を以て頭白く齒落ち盛壯日に衰へ身曲り脚戾り體重く氣上り杖を柱へて行き肌縮み皮緩み皺麻子の如く諸根毀熟し顏色醜惡なり。彼これに因るが故に諸の梵行[者]をして愛敬尊重せしむ』。世尊告げて曰はく『是の如し是の如し、若し長老比丘、この五の法無くば更に餘事の諸の梵行[者]をして愛敬尊重せしむる無し。唯老耄を以て頭白く齒落ち盛壯日に衰へ身曲り脚戾り體重く氣上り杖を柱へて行き、肌縮み皮緩み皺麻子の如く諸根毀熟し顏色醜惡なり。彼これに因るが故に、諸の梵行[者]をして愛敬尊重せしむ。白淨、舍梨子比丘、この五法有り、汝等應に當に愛敬尊重すべし。所以者何。白淨、舍梨子比丘、禁戒を修習し從解脫を守護し又復善く威儀禮節を攝し、纖介の罪を見て常に畏怖を懷き學戒を受持す。また次に白淨、舍梨子比丘廣學多聞にして守持して忘れず、積聚博聞、所謂法は初め善く中善く竟も亦善くして、義有り文有り、具足清淨にして梵行を顯現す。是の如く諸法[に於て]、廣學多聞なり、翫習千に至り、意に惟觀する所明見深達なり。また次に白淨、舍梨子比丘四增上心を得、現法の樂居易くして得、難

に白して曰く『是なり、世尊』、世尊、烏陀夷を面訶して曰はく『汝愚癡の人、盲にして目有ること無し。何等を以ての故に甚深の　阿毘曇を論ずるや』。是に於て尊者烏陀夷、佛の爲に面訶せられ已りて、內に憂慼を懷き、低頭默然として辯を失ひ、無言にして所思有るが如し。世尊、尊者烏陀夷を面訶し已り、尊者阿難に語げて曰はく『上尊　名　德の長老比丘他の爲に詰らる。汝何を以ての故に縱にして撿せざる。汝愚癡の人、慈心有ること無く上尊名德の長老に捨背しぬ』。是に於て世尊、尊者烏陀夷及び尊者阿難を面訶し已りて諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、戒を成就し定を成就し慧を成就せば、すなはち現法に於て想知滅定に出入して必ずこの處有り。若し現法に於て究竟智を得ざれば、身壞れ命終りて、摶食天を過ぎ餘意生天中に生じ、彼に於て想知滅定に出入して必ずこの處有り』。佛說くこと是の如く、卽ち禪室に入り、宴坐して默然たり。その時尊者　白淨比丘衆中に在りき。尊者阿難、尊者白淨に白しぬ『これ他の所作にして而も我責を得。尊者白淨、世尊晡時に必ず禪室より出でゝ比丘衆の前に至り、座を敷きて坐し共にこの義を論じたまはん。尊者白淨、應にこの事に答ふべし、我極めて世尊の所及び諸の梵行[者]に慚愧す』。是に於て世尊、則ち晡時に於て禪室より出でゝ比丘衆の前に至り、座を敷きて坐し告げて曰はく『白淨、長老比丘、幾くの法有りて諸の梵行者の爲に愛敬尊重せらるゝや』。尊者白淨白して曰く『世尊、長老比丘、若し五の法有れば諸の梵行者の爲に愛敬尊重せらる。云何が五と爲す。(1)世尊、長老比丘、禁戒を修習し從解脫を守護し、又復善く威儀禮節を攝し、纖介の罪を見て常に畏怖を懷き、學戒を受持す[れば]、世尊、禁戒の長老上尊比丘、諸の梵行者の爲に愛敬尊重せらる。(2)また次に世尊、長老比丘、廣學多聞にして、守持して忘れず、積聚博聞す。所謂法は初め善く中善く竟も亦善くして、義有り文有り、具足淸淨にして梵行を顯現す。是の如く諸法[に於て]廣學多聞にして、翫習千に至り、意に惟觀する所、明見深達す[れば]、世尊、多聞の長老上尊比丘、諸の梵行者の爲に愛敬尊重せらる。

【七】阿毘曇(Abhidhamma) 達磨、卽ち法を概括的一般的に取扱ひたるもの、後世の阿毘曇、阿毘達磨とは多少異れり。

【八】白淨(Upavāna)。

共に衆中に在りき。尊者烏陀夷白して曰く『尊者舍梨子、若し比丘、餘意生天中に生じ想知滅定に出入せば〔六〕終にこの處無し』。尊者舍梨子、再び三たび諸の比丘に告げぬ『若し比丘、戒を成就し定を成就し慧を成就せば、すなはち現法に於て想知滅定に出入して必ずこの處有り。若し現法に於て究竟智を得ざれば、身壞れ命終りて、摶食天を過ぎ餘意生天中に生じ、彼に於て、想知滅定に出入して必ずこの處有り』。尊者烏陀夷亦復再び三たび白して曰く『尊者舍梨子、若し比丘、餘意生天中に生じ想知滅定に出入せば、終にこの處無し』。是に於て尊者舍梨子、すなはちこの念を作しぬ。この比丘乃至再び三たび我が所説を非とし、〔而も〕一比丘の我が所説を歎ずるある無し。我寧ろ世尊の所に往至すべしと。是に於て尊者舍梨子、佛所に往詣し、稽首作禮し卻きて一面に坐しぬ。尊者舍梨子去りて後久しからずして、尊者烏陀夷及び諸の比丘亦佛所に往詣し、稽首作禮し卻きて一面に坐しぬ。中に於て尊者舍梨子また諸の比丘に告げぬ『若し比丘、戒を成就し定を成就し慧を成就せば、すなはち現法に於て想知滅定に出入して必ずこの處有り。若し現法に於て究竟智を得ざれば、身壞れ命終りて、摶食天を過ぎ餘意生天中に生じ彼に於て想知滅定に出入して必ずこの處有り』。尊者烏陀夷また白して曰く『尊者舍梨子、若し比丘、餘意生天中に生じ想知滅定に出入せば、終にこの處無し』。尊者舍梨子、また再び三たび諸の比丘に告げぬ『若し比丘、戒を成就し定を成就し慧を成就せば、すなはち現法に於て想知滅定に出入して必ずこの處有り。若し現法に於て究竟智を得ざれば、身壞れ命終りて、摶食天を過ぎ餘意生天中に生じ彼に於て想知滅定に出入して必ずこの處有り』。尊者烏陀夷亦復再び三たび白して曰く『尊者舍梨子、若し比丘、餘意生天中に生じ、想知滅定に出入せば、終に此處無し』。尊者舍梨子またこの念を作しぬ、この比丘、世尊の前に於て再び三たび我が所説を非とし、〔而も〕亦一比丘の我が所説を歎ずるある無し。我宜しく默然すべしと。是に於て世尊問ひて曰はく『烏陀夷、汝説きて意生天はこれ色なりと爲すや』。尊者烏陀夷世尊

〔六〕餘意生天中に生れて居て想知滅定に出入するといふ道理なし。

歎じて曰はく『善き哉、善き哉。舍梨子。汝極めて甚だ善し。所以者何。汝昨夜に於て比丘衆と講堂に集在し、内結・外結に因りて諸の比丘の爲にその義を分別しぬ、諸賢、世に實に二種の人有り。内結の人、外結の人なりと。舍梨子、昨夜且に向はんとする[とき]、諸の等心天、我が所に來詣し、稽首し禮し已りて却きて一面に住し、我に白して言はく、世尊、尊者舍梨子、昨夜比丘衆と講堂に集在し、内結・外結に因りて諸の比丘の爲にその義を分別しぬ、諸賢、世に實に二種の人有り。内結の人、外結の人なりと。世尊、衆已に歡喜しぬ。唯願はくは世尊、慈哀愍念して講堂に往至したまへと。舍梨子、我すなはち彼の諸の等心天の爲に默然として許しぬ。諸の等心天、我が默然として許可せるを知りて我が足に稽首し、繞三匝し已りて卽ち彼の處に沒しぬ。舍梨子、諸の等心天、或は十・二十、或は三十・四十、或は五十・六十、共に[四]錐頭處に住して各相妨げず。舍梨子、諸の等心天本人爲りし時、已に善心を修すること極廣甚大なりき。これに因るが故に諸の等心天、或は十・二十、或は三十・四十、或は五十・六十をして共に錐頭處に住して、各相妨げざらしむ。この故に舍梨子、當に寂靜を學ぶべし。諸根寂靜・心意寂靜・身口意業寂靜にして、世尊及び諸の智[者]梵行[者]に向はん。舍梨子、虛僞の異學は長く衰へ永く失はん。所以者何。謂く是の如き妙法を聞くを得ず』と。佛說是の如し。彼の諸の比丘、佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二十二、成就戒經第二[一]

我が聞きしことかくの如し。ある時佛舍衞國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時、尊者舍梨子、諸の比丘に告げぬ『若し比丘、戒を成就し定を成就し慧を成就せば、すなはち現法に於て[二]想知滅定に出入して[三]必ずこの處有り。若し現法に於て究竟智を得ざれば、身壞れ命終りて、[四]摶食天を過ぎ、餘意生天中に生じ、彼に於て想知滅定に出入して必ずこの處有り』この時尊者[五]烏陀夷、

【四】錐頭處は、錐の尖端。

【一】A. iii. 192

【二】想知滅定。(S. saññāvedayitanirodha)。滅受想定なり、滅盡定ともいふ、意識感覺の作用を停止するの定。

【三】……出入するといふ道理あり。

【四】「等心經」註を見よ。

【五】烏陀夷(Udāyī)。

た一人有り、禁戒を修習し穿無く缺無く穢無く濁無く極めて多く難無く聖に稱譽せられ、善く修し善く具す。彼禁戒を修習し穿無く缺無く穢無く濁無く極めて多く難無く聖に稱譽せられ、善く修し善く具するに因るが故にまた[九]色有斷貪斷業を學び、[一〇]欲捨離を學ぶ。色有斷貪斷業を學び欲捨離を學ぶに因るが故に息・心解脱を得。得已りて樂中に愛惜して離れず、現法に於て究竟智を得ず、身壞れ、命終りて摶食天を過ぎ、餘意生天中に生ず。旣に彼に生じ已りて、すなはちこの念を作す、我本人爲りし時、禁戒を修習し穿無く缺無く穢無く濁無く極めて多く難無く聖に稱譽せられ、善く修し善く具しぬ。禁戒を修習し穿無く缺無く穢無く濁無く極めて多く難無く聖に稱譽せられ、善く修し善く具するに因るが故に、また色有斷貪斷業を學び、欲捨離を學びぬ。色有斷貪斷業を學び、欲捨離を學ぶに因るが故に息・心解脱を得ぬ。得已りて樂中に愛惜して離れず。現法中に於て究竟智を得ず、身壞れ、命終りて、摶食天を過ぎ、餘意生天に生じてこの中に在り。諸賢、これを內結の人、阿那含にしてこの間に還らずと謂ふ。諸賢、云何が外結の人、阿那含に非ずしてこの間に還り來る。若し一人有り、[一一]禁戒を修習し、從解脱を守護し、又復善く威儀禮節を攝し、纖介の罪を見て常に畏怖を懷き、學戒を受持す。諸賢、これを外結の人、阿那含に非ずしてこの間に還り來ると謂ふ』こゝに於て衆多くの[一二]等心天、色像巍々、光輝暐曄として、夜將に旦に向はんとする[とき]、佛所に來詣し、稽首作禮し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、尊者舍梨子、昨夜比丘衆と講堂に集在し、內結・外結に因りて諸の比丘の爲にその義を分別しぬ。諸賢、世に實に二種の人有り。內結の人、外結の人なりと。世尊、衆已に歡喜しぬ。唯願はくは世尊、慈哀愍念して講堂に往至したまへ。』彼の時世尊、諸の等心天の爲に默然として許したまひぬ。諸の等心天、世尊默然として許可したまへるを知り、佛足に稽首し、[一三]繞三匝し、已りて卽ち彼の處に沒しぬ。諸の等心天去りて後久しからず。是に於て世尊、講堂に往至し比丘衆の前に座を敷きて坐したまひぬ。世尊坐し已りて

【九】 色有卽ち色界生存の本となる業と、貪を斷ずるの業。
【一〇】 欲捨離とは、欲を捨離すること。
【一一】 巴利文「波羅提木叉の攝護によりて〔自ら〕攝護して住し、善良行爲を具し瑣細の過失にも怖畏を見、學處（戒條）に於てよくそれを持ちて自ら制す。」
【一二】 等心天（Samacitta devatā）。心を同じくする天子等。
【一三】 繞三匝（Padakkhiṇa）。合掌して長者の周圍を右方に三回週る禮。右遶三匝ともいふ。

巻の第五

舍利子相應品第三。

等心・得戒・智・師子〔吼〕・水喩・瞿尼〔師〕・陀然梵〔志〕・教〔化〕病・拘絺〔羅〕・象跡喩・分別四諦は最も後に在り。

二十一、等心經第一〔一〕

我が聞きしことかくの如し。ある時佛舍衛國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時、尊者舍利子、比丘衆と夜講堂に集まり、〔二〕內結外結に因りて、諸の比丘の爲にその義を分別しぬ、『諸賢、世に實に二種の人有り。云何が二と爲す。內結の人有り、〔三〕阿那含にして此の間に還らず。〔四〕外結の人有り、阿那含に非ずしてこの間に還り來る。諸賢、云何が內結の人、阿那含にしてこの間に還らざる。若し一人有り、〔五〕禁戒を修習し穿無く缺無く穢無く濁無く極めて多く難無く、聖に稱譽せられ善く修し善く具す。彼禁戒を修習し穿無く缺無く穢無く濁無く極めて多く難無く聖に稱譽せられ、善く修し善く具するに因るが故に、また欲を厭ひ欲無く欲を斷ずることを學ぶ。欲を厭ひ欲無く欲を斷ずることを學ぶに因るが故に、〔六〕息・心解脱を得、得已りて樂中に愛惜して離れず、現法中に於て究竟智を得ず。身壞れ、命終りて、〔七〕摶食天を過ぎ、〔八〕餘意生天に生ず。既に彼に生じ已りてすなはちこの念を作す、我本人爲りし時禁戒を修習し穿無く缺無く穢無く濁無く極めて多く難無く、聖に稱譽せられ善く修し善く具しぬ。禁戒を修習し穿無く缺無く穢無く濁無く、極めて多く難無く、聖に稱譽せられ善く修し善く具するに因るが故にまた欲を厭ひ、欲無く、欲を斷ずることを學びぬ。欲を厭ひ、欲無く欲を斷ずることを學ぶに因るが故に息・心解脱を得ぬ。得已りて樂中に愛惜して離れず、現法中に於て究竟智を得ず、身壞れ命終りて摶食天を過ぎ、餘意生天に生じて、この中に在りと。諸賢、ま

【一】A. i.63. 67.
【二】內結(Ajjhattasaṃyojana) 外結(Bahiddhāsaṃyojana)。
【三】阿那含(Anāgāmī anāgantā itthattaṃ)。不還果に達して再び人間として生れ來ることなし。
【四】Āgāmī āgantā itthattaṃ)。
【五】禁戒。戒破れず裂けず、斑點なく汚點なく、清淨にして智者に稱歎せられ、穢なく三昧の助となるもの。
【六】息(Santa)。心解脱(cetovimutti)。
【七】摶食天(Kabaliṅkārāhārabhakkha)。團食(段食)卽ち摶食を食ひて生くるもの欲界の有情、こゝにては欲界の天部。
【八】餘意生天(Manomayaṃ sabbaṅgapaccaṅgī ahīnindriyaṃ)。意所造にして總て大小の支節あり、諸根完具す。

截斷剉し剝裂剬割し、一肉段を作り一分一積するは、これに因りて惡業有りこれに因りて惡業の報有り。恒水の南岸に殺斷し煮去り、恒水の北岸に施與し齋を作し呪說して來るも、これに因りて罪有り福有り、これに因りて罪福報有り。施與・調御・守護・攝持・稱譽・饒益し、惠施・愛言・利及び等利すれば、これに因りて福有り、これに因りて福報有りと。若し沙門梵志の所說眞實ならば、我世の怖と不怖とを犯さず、常に當に一切世間を慈愍すべし。我が心衆生と共に諍はず濁無くして歡悅す。我無上人上の法を得、昇進して[安]樂居を得。謂く、遠離は法の定なり。彼沙門梵志の所說に於て是ならず非ならず。是ならず非ならざれば、已に內心止まるを得。伽彌尼、これを法の定名づけて遠離と曰ふと謂ふ。汝この定に因りて正念を得べく一心を得べし。是の如く現法に於てすなはち疑惑を斷じて昇進するを得』。この法を說きし時、波羅牢伽彌尼塵を遠ざけ垢を離れ、諸法の淨眼生じぬ。こゝに於て波羅牢伽彌尼法を見、法を得、白淨法を覺り、疑を斷し惑を度し更に餘尊無く、また他に從はず猶豫有ること無く、已に果證に住し、世尊の法に於て無所畏を得ぬ。卽ち坐より起ち、佛足を稽首して白して曰く『世尊、我今佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し、乃ち命盡くるに至らん』。佛說かくの如し。波羅牢伽彌尼及び諸の比丘、佛の所說を聞きて、歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第四

殺斷し煮去り恒水の北岸に施與し齋を作し呪說して來るも、これに因りて罪無く福無く、これに因りて罪福報無し。施與・調御・守護・攝持・稱與・饒益し、惠施・愛言・利及び等利するも、これに因りて福無く、これに因りて福報無しと。若し沙門梵志の所說眞實ならば我、世の怖と不怖とを犯さず、常に當に一切世間を慈愍すべし。我が心衆生と共に諍はず、濁無くして歡悅す。我今無上人上の法を得、昇進して安樂居を得。謂く、遠離は法の定なり。彼、沙門梵志の所說に於て是ならず、非ならず。是ならず、非ならざれば已に內、心止まるを得。伽彌尼、これを法の定名づけて遠離と曰ふと謂ふ。汝この定に因りて正念を得べく一心を得べし。是の如く汝現法に於てすなはち疑惑を斷じて而も昇進するを得。また次に伽彌尼、多聞の聖弟子、殺を離れ殺を斷じ、不與取・邪婬・妄言を斷じ、邪見を斷じて正見を得るに至る。彼晝日に於て田作耕稼を敎へ暮に至りて放息し、室に入りて定に坐す。夜を過ぎて曉時に、この念を作す、我殺を離れ殺を斷じ、不與取・邪婬・妄言を斷じ、邪見を斷じて正見を得るに至りぬと。彼すなはち自ら我十惡業道を斷じ十善業道を念ずるを見る。彼自ら十惡業道を斷じて十善業道を念ずるを見已りて、すなはち歡悅を生ず。歡悅を生じ已りてすなはち喜を生ず。喜を生じ已りてすなはち身を止息す。身を止息し已りてすなはち身樂を覺る。身樂を覺り已りてすなはち一心を得。伽彌尼、多聞の聖弟子、一心を得已れば則ち心捨と俱にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く、二・三・四方・四維・上下、一切に普周く心捨と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。彼この念を作す、若し沙門梵志有りて、是の如く見、是の如く說く、自ら作し作さしめ、自ら斷じ斷ぜしめ、自ら煮、煮しめ、愁煩憂慼し搥胸懊惱啼哭し、愚癡にして殺生・不與取・邪婬・妄言・飲酒し、墻を穿ち藏を開き他巷に至りて劫め、村を害し邑を壞し城を破り國を滅ぼす。かくの如きを作す者、實に惡を作すと爲す。又鐵輪利にして剃刀の如きを以て彼この地の一切衆生に於て、一日中に斫

世彼世有り、父有り母有り、世に眞人善處に往至し此世彼世に善く去り善く向ひ、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶこと有りと。若し彼の沙門梵志の所說眞實ならば、我世の怖と不怖とを犯さず、常に常に一切世間を慈愍すべし。我が心衆と共に諍はず濁無くして歡悅す。我無上人上の法を得、昇進して安樂居を得。謂く遠離は法の定なり。彼の沙門梵志の所說是ならず非ならず。是ならず非ならざれば已に內心止まるを得。伽彌尼、これを法の定名づけて遠離と曰ふと謂ふ。汝この定に因りて正念を得べく一心を得べし。是の如く現法に於てすなはち疑惑を斷じて而も昇進するを得。また次に伽彌尼、多聞の聖弟子、殺を離れ殺を斷じ、不與取・邪婬・妄言を斷じ邪見を斷じて正見を得るに至る。彼晝日に於て田作耕稼を敎へ暮に至りて放息し、室に入りて定に坐す。夜を過ぎて曉時にこの念を作す、我殺を離れ殺を斷じ、不與取・邪婬・妄言を斷じ邪見を斷じて正見を得るに至りぬと。彼すなはち自ら我十惡業道を斷じ十善業道を念ずるを見る。彼すなはち自ら十惡業道を斷じ十善業道を念ずるを見已りてすなはち歡悅を生ず。歡悅を生じ已りてすなはち喜を生ず。喜を生じ已りてすなはち身を止息す。身を止息し已りてすなはち身樂を覺る。身樂を覺り已りてすなはち一心を得。伽彌尼、多聞の聖弟子、一心を得已れば則ち心喜と倶にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く心喜と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。彼この念を作す、若し沙門梵志有りて是の如く見、是の如く說く、自ら作し作さしめ、自ら斷じ斷ぜしめ、自ら煮、煮しめ、愁煩憂慼し槌胸懊惱啼哭し、愚癡にして殺生・不與取・邪婬・妄言・飮酒し、墻を穿ち藏を開き他巷に至りて劫め村を害し邑を壞し城を破り國を滅ぼす。是の如きを作す者、實に惡を爲さずと爲す。又鐵輪利にして剃刀の如きを以て、彼この地の一切衆生に於て、一日中に於て斫截斬剉し剝裂剬割し一肉段を作り一分一積するも、これに因りて惡業無く、これに因りて惡業の報無し。恒水の南岸に

已りてすなはち一心を得。伽彌尼、多聞の聖弟子、一心を得已れば則ち[一三]心慈と倶に一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く。心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。彼この念を作す、若し沙門梵志有り、是の如く見、是の如く說く、施無く齋無く、呪說有る無く、善惡業無く善惡業の報無く此世彼世無く、父無く、母無く世に眞人善處に往至し此世彼世に善く去り善く向ひ、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶと。若し彼の沙門梵志の所說眞實ならば、我世の怖と不怖とを犯さず、常に當に一切世間を慈愍すべし。我が心衆生と共に諍はず、濁無くして歡悅せん。我今無上人上の法を得、昇進して安樂居を得。謂く、遠離は法の定なり。彼の沙門梵志の所說、是ならず非ならず。是ならず非ならざれば已に內心止まるを得。伽彌尼、これを法の定を名づけて遠離と曰ふと謂ふ。汝この定に因りて正念を得べく一心を得べし。是の如く汝現法に於てすなはち疑惑を斷じて而も昇進するを得。また次に伽彌尼、多聞の聖弟子、殺を離れ殺を斷じ、不與取・邪婬・妄言を斷じ、邪見を斷じて正見を得るに至る。彼晝日に於て田作耕稼を敎へ、暮に至りて放息し、室に入りて定に坐す。夜過ぎて曉時に、この念を作す、我殺を離れ殺を斷じ、不與取・邪婬・妄言を斷じ、邪見を斷じて正見を得るに至りぬと。彼すなはち自ら我十惡業道を斷じ十善業道を念ずるを見る。彼自ら十惡業道を斷じ十善業道を念ずるを見已りてすなはち歡悅を生ず。歡悅を生じ已りてすなはち喜を生ず。喜を生じ已りてすなはち身を止息す。身を止息し已りてすなはち身樂を覺る。身樂を覺り已りてすなはち一心を得。伽彌尼、多聞の聖弟子、一心を得已れば則ち心悲と倶にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。かくの如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心悲と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。彼この念を作す、若し沙門梵志是の如く見、是の如く說く、施有り齋有り亦呪說有り、善惡業有り善惡業の報有り此

【一三】 三卷「思經」を見よ。

し、愚癡にして、殺生・不與取・邪婬・妄言・飲酒し、墻を穿ち藏を開き他巷に至りて刧め、村を害し邑を壞し城を破り國を滅ぼす。是の如きを作す者、實に惡を作すと爲す。又鐵輪利にして剃刀の如きを以て、彼この地の一切衆生に於て、一日中に於て斫截斬剉し、剁裂剬割し、一肉段を作り、一分一積すれば、これに因りて惡業有り、これに因りて惡業の報有り。恒水の南岸に殺斷し煮去り、恒水の北岸に施與し齋を作し呪說し來るも、これに因りて罪有り福有り、これに因りて罪福の報有り。施與・調御・守護・攝持・稱譽・饒益し、惠施・愛言・利及び等利するも、これに因りて福有り、これに因りて福報有りと。瞿曇、我これを聞き已りてすなはち疑惑を生じぬ。この沙門梵志、誰か眞實を說き、誰か虛妄を說くやと』。世尊告げて曰はく『伽彌尼、汝疑惑を生ずること莫れ。所以者何。疑惑有るに因りてすなはち猶豫を生ず。伽彌尼、汝自ら淨智無くして後世有りと爲し後世無しと爲す。伽彌尼、汝又淨智無くして所作惡と爲し所作善と爲す。伽彌尼、法の定有り、名づけて遠離と曰ふ。汝この定に因りて正念を得べく一心を得べし。是の如く汝現法に於てすなはち疑惑を斷ちて而も昇進するを得』。こゝに於て波羅牢伽彌尼また坐より起ち、偏に著衣を袒き叉手を佛に向け、世尊に白して曰く『瞿曇、云何が法の定名づけて遠離と曰ひ、我をして、これに因りて正念を得べく、一心を得べく是の如く我をして、現法に於てすなはち疑惑を斷じて而も昇進するを得せしむるや』。世尊告げて曰はく『伽彌尼、多聞の聖弟子、殺を離れ殺を斷じ、不與取・邪婬・妄言を斷じ、邪見を斷じて正見を得るに至る。彼晝日に於て田作耕稼を敎へ、暮に至りて放息し、室に入りて定に坐し、夜を過ぎて曉時に而もこの念を作す。我殺を離れ殺を斷じ、不與取・邪婬・妄言を斷じ、邪見を斷じて正見を得るに至りぬと。彼すなはち、自ら我十惡業道を斷じ、十善業道を念ずるを見る。彼自ら十惡業道を斷じ、十善業道を念ずるを見已りてすなはち歡悅を生ず。歡悅を生じ已りてすなはち喜を生ず。喜を生じ已りてすなはち身を止息す。身を止息し已りてすなはち身樂を覺る。身樂を覺り

言を說けば、汝意に信ずるや不や』。答へて曰く『信ぜざるなり、瞿曇』。世尊歎じて曰はく『善き哉、善き哉。伽彌尼』。こゝに於て波羅牢伽彌尼即ち坐より起ち、偏に著衣を袒ぎ、叉手を佛に向け、世尊に白して曰く『甚だ奇なり。瞿曇、說く所極めて妙にして、善く喩へ善く證す。瞿曇、我北村中に於て高堂を造作し、床褥を敷設し、水器を安立し、大明燈を然し、若し精進の沙門梵志有り來りて高堂に宿れば、我その力に隨ひて、所須を供給す。四論士有り、所見各異り更に相違反するもの高堂に來り集まりぬ。中に於て[一]論士是の如く見、是の如く說きぬ、施無く、齋無く呪說有ること無く、善惡業無く善惡業の報無く此世彼世無く、父無く母無く世に眞人善處に往至し、此世彼世に善く去り、善く向ひ、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶこと無しと。第二の論士正見有りて、第一の論師の所見・所知に反し、是の如く見、是の如く說きぬ、施有り齋有り亦呪說有り、善惡業有り善惡業の報有り此世彼世有り、父有り母有り世に眞人善處に往至し此世彼世に善く去り善く向ひ、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶこと有りと。[二]第三の論士是の如く見、是の如く說きぬ、自ら作して作さしめ、自ら斷じて斷ぜしめ、自ら煮て煮しめ、愁煩憂慼し、搥胸懊惱啼哭し、愚癡にして殺生・不與取・邪婬・妄言・飮酒し、墻を穿ち藏を開き他巷に至りて刼め、村を害し邑を壞し城を破り國を滅ぼす。是の如きを作す者、惡を作さずと爲す。又鐵輪利にして剃刀の如きを以て、彼この地の一切衆生に於て、一日中に於て斫截斬剉し、剝裂剬割し、一肉段を作し、一分一積するも、これに因りて惡業無く、これに因りて惡業の報無し。恒水の南岸に殺斷し煮去り、恒水の北岸に施與して齋を作し、呪說して來るもこれに因りて罪無く福無く、これに因りて罪福の報無し。施與・調御・守護・攝持・稱譽・饒益し、惠施・愛言・利・及び等利するも、これに因りて福無く、これに因りて福報無しと。第四の論士正見有りて、第三の論士の所知所見に反し是の如く見、是の如く說きぬ、自ら作し作さしめ、自ら斷じ斷ぜしめ、自ら煮、煮しめ、愁煩憂慼し、搥胸懊惱啼哭

【一】六師外道の第二阿耆多翅舍欽婆羅の說、『長阿含』一七卷「沙門果經」、『中阿含』三卷「思經」參照。

【二】六師外道の第一富蘭那迦葉の說、『長阿含』一七卷「沙門果經」參照。

す。若し問者有り。この人何の罪ありて王の爲に戮せらるゝやと。或は答ふる者有り。この人王國に於て而も不與取しぬ。こゝを以て王是の如く刑を行はしむと。伽彌尼、汝是の如く見、是の如く聞くや不や』。答へて曰く『見るなり、瞿曇、已に聞きぬ、當に聞くべし』。『伽彌尼、若し沙門梵志有りて、是の如く見、是の如く說く。若し不與取有れば、彼の一切卽ち現法に於て報を受け、彼に因りて憂苦を生ずと。彼眞說を爲すや、虛妄の言を爲すや』答へて曰く『妄言なり、瞿曇』。『若し彼妄言を說けば、汝意に信ずるや不や』。答へて曰く『信ぜざるなり、瞿曇』。世尊歎じて曰はく『善き哉、善き哉、伽彌尼』。また伽彌尼に問ひたまはく『意に於て云何。若し村邑中に或は一人有り。頭に華鬘を冠り雜香もて身に塗り、而も倡樂を作して歌舞し、自ら娛しみ唯女妓を作し歡樂王の如し。若し問者有り。この人本何等を作して、今頭に華鬘を冠り、雜香もて身に塗り、而も倡樂を作して歌舞し、自ら娛しみ唯女妓を作し歡樂王の如きやと。或は答ふる者有り。この人妓を作し、能く戲れ調べ笑ふ。彼妄言を以て王をして歡喜せしむ。王歡喜し已りて卽ち賞賜を與ふ。こゝを以てこの人頭に華鬘を冠り、雜香もて身に塗り、而も倡樂を作して歌舞し、自ら娛しみ唯女妓を作し歡樂王の如しと。伽彌尼、汝是の如く見、是の如く聞くや不や』。『見るなり瞿曇、已に聞きぬ、當に聞くべし』。『伽彌尼、又復王の罪人を收捕するを見る。棒を用て打ち殺し、盛るに木檻を以てし、露車之を載せ、北城門を出で、塹中に棄著す。若し問者有り。この人何の罪ありて、王の爲に殺さるゝやと。或は答ふる者有り、この人王の前に在りて妄りに所證有り。彼妄言を以て王を欺誑しぬ。こゝを以て王取りてかくの如く作さしむと。伽彌尼、汝是の如く見、是の如く聞くや不や』。答へて曰く『見るなり、瞿曇、已に聞きぬ、當に聞くべし』。『伽彌尼、意に於て云何。若し沙門梵志有りて、是の如く見、是の如く說く、若し妄言有れば、彼の一切卽ち現法に於て報を受け、彼に因りて憂苦を生ずと。彼眞說を爲すや、虛妄の言を爲すや』。答へて曰く『妄言なり瞿曇』。『若し彼妄

若し問者有り。この人本何等を作して今頭に華鬘を冠り雜香もて身に塗り、而も倡樂を作して歌舞し、自ら娛しみ、唯女妓を作し歡樂王の如きやと。或は答ふる者有り。この人王の爲に怨家を殺害しぬ。王歡喜し已りて卽ち賞賜を與へぬ。こゝを以てこの人頭に華鬘を冠り雜香もて身に塗り、而も倡樂を作して歌舞し、自ら娛しみ唯女妓を作し、歡樂王の如しと。伽彌尼、汝かくの如く見、かくの如く聞くや不や』。答へて曰く『見るなり瞿曇、已に聞きぬ、當に聞くべし』。『伽彌尼、又復王の罪人を收捕するを見る。兩手を反縛し、鼓を打ち唱令して南城門を出で、高標の下に坐せしめてその首を梟す。若し問者有り、この人何の罪ありて王の爲に戮せられしやと。或は答ふる者有り。この人王家に過無きの人を枉殺しぬ。こゝを以て王是の如く刑を行はしむと。伽彌尼、汝是の如く見、是の如く聞くや不や』。答へて曰く『見るなり、瞿曇、已に聞きぬ、當に聞くべし』。『伽彌尼、若し沙門梵志有りて、是の如く見、是の如く說く。若し殺生有れば、彼の一切卽ち現法に於て報を受け、彼に因りて憂苦を生ずと。彼眞說を爲すや、虛妄の言を爲すや』。答へて曰く『妄言なり、瞿曇』。『若し彼妄言を說けば、汝意に信ずるや不や』。答へて曰く『信ぜざるなり、瞿曇』。世尊歎じて曰はく『善き哉、善き哉、伽彌尼』。また伽彌尼に問ひたまはく、『意に於て云何。若し村邑中に或は一人有り。頭に華鬘を冠り雜香もて身に塗り、而も倡樂を作して歌舞し、自ら娛しみ唯女妓を作し、歡樂王の如し。若し問者有り。この人本何等を作して、今頭に華鬘を冠り雜香もて身に塗り、而も倡樂を作して歌舞し自ら娛しみ唯女妓を作し、歡樂王の如きやと。或は答ふる者有り。この人他國の中に於て而も〔一〇〕不與取す。こゝを以てこの人頭に華鬘を冠り雜香もて身を塗り、而も倡樂を作して歌舞し、自ら娛しみ唯女妓を作し、歡樂王の如しと。伽彌尼、汝是の如く見、是の如く聞くや不や』。答へて曰く『見るなり、瞿曇、已に聞きぬ、當に聞くべし』。『伽彌尼、又復王の罪人を收捕し兩手を反縛するを見る。鼓を打ち唱令して南城門を出で、高標の下に坐せしめて、その首を梟

【一〇】竊盜を働きたるなり。

し、唯惡法を行ふを知りて、然もこゝを以て禁戒を犯し唯惡法を行ふを爲さず。如來何を以て幻を知りて而も自ら幻[者]に非ざるを得ざらん。所以者何。我幻を知り幻人を知り[九]幻報を知り幻を斷ずるを知る。伽彌尼、我亦殺生を知り殺生の人を知り殺生の報を知り殺生を斷ずるを知る。伽彌尼、我不與取を知り不與取の人を知り不與取の報を知り不與取を斷ずるを知る。伽彌尼、我妄言を知り妄言の人を知り妄言の報を知り妄言を斷ずるを知る。伽彌尼、我是の如く知り、是の如く見る。若しこの說を作す有り、沙門瞿曇、幻を知る。卽ちこれ幻者なりと。彼未だこの語を斷ぜざるに、彼の心、彼の欲、彼の願、彼の聞、彼の念、彼の觀を聞くこと臂を屈伸する頃の如し。命終れば地獄の中に生ず』。波羅牢伽彌尼聞き已りて怖懼戰慄し、身毛皆竪ちぬ。卽ち坐より起ち、頭面もて足を禮し、長跪叉手して世尊に白して曰く『過を悔ゆ、瞿曇、自首す善逝。愚の如く癡の如く不定の如く不善の如し。所以者何。我、妄りに沙門瞿曇はこれ幻[者]なりと說くを以てなり。唯願はくは瞿曇、我が過を悔い、罪を見て發露するを受けたまへ。我、過を悔い已り、護りて更に作さず』。世尊告げて曰はく『是の如し伽彌尼、汝實に愚の如く癡の如く不定の如く不善の如し。所以者何。謂く汝、如來・無所著・等正覺に於て、妄りにこれ幻[者]なりと說きぬ。然るに汝能く過を悔い、罪を見て發露し、護りて更に作さず。是の如く伽彌尼、若し過を悔い、罪を見て發露し、護りて更に作さざる有れば、則ち聖法を長養して而も失有ること無し』。こゝに於て波羅牢伽彌尼、叉手を佛に向け、世尊に白して曰く『瞿曇、一沙門梵志有り。是の如く見、是の如く說く、若し殺生有れば、彼の一切卽ち現法に於て報を受け、彼に因りて憂苦を生ず。若し不與取・妄言有れば、彼の一切卽ち現法に於て報を受け、彼に因りて憂苦を生ずと。沙門瞿曇、意に於て云何』。世尊告げて曰はく『伽彌尼、我今汝に問ふ。解する所に隨ひて答へよ。伽彌尼、意に於て云何。若し村邑中に或は一人有り頭に華鬘を冠り雜香もて身に塗り、而も倡樂を作して歌舞し、自ら娛しみ、唯女妓を作し歡樂王の如し。

【九】幻事の齎す所の果報。

息心靜默なり。波羅牢伽彌尼遙かに佛を見已りて、前みて佛所に至り共に相問訊し、却きて一面に坐し世尊に白して曰く『我、[七]沙門瞿曇、幻は是幻と知ると聞く。瞿曇、若し是の如く、沙門瞿曇は幻は是幻と知ると說けば、彼沙門瞿曇を誹毀せざるや、彼、眞實を說くや、彼是法を說くや、彼法如法を說くや、如法に於て過無く難詰無きや』。世尊答へて曰はく『伽彌尼、若しかくの如く、沙門瞿曇は幻は是幻と知ると說けば、彼沙門瞿曇を誹毀せず、彼眞實を說き彼是法を說き彼法如法を說き法に於て過無く亦難詰無し。所以者何。伽彌尼、我、彼の幻を知る、我自ら幻［者］に非ず』。波羅牢說きて曰く『彼の沙門梵志の所說眞實なるも、而も我彼の沙門瞿曇は幻は是幻と知ると說くを信ぜず』。世尊告げて曰はく『伽彌尼、若し幻を知らば卽ちこれ幻［者］なるや』。波羅牢白して曰く、『是の如し世尊、是の如し善逝』。世尊告げて曰はく『伽彌尼、汝自ら誤りて我を誹毀すること莫れ。若し我を誹毀すれば、則便ち自ら損じ、諍有り犯有り聖賢の惡む所にして而も大罪を得。所以者何。これ實に汝の所說の如くならず。伽彌尼、汝拘麗瘦に［兵］卒有るを聞くや』。答へて曰く『有りと聞く』。『伽彌尼、意に於て云何、拘麗瘦この卒を用ひて［何を］爲すや』。答へて曰く『瞿曇、使を通じ賊を殺す。この事を爲すが故に拘麗瘦はこの卒を畜ふなり』。『伽彌尼、意に於て云何。拘麗瘦の卒、戒有りと爲すや、戒無しと爲すや』。答へて曰く『瞿曇、若し世間に戒德無き者有れば、拘麗瘦の卒に過ぎたるは無し。所以者何。拘麗瘦の卒極めて禁戒を犯し、唯惡法を行ふ』。また問ひたまはく、『伽彌尼、汝是の如く見、是の如く知る。我汝に問はず。若し他、汝波羅牢伽彌尼に問ひ、拘麗瘦の卒極めて禁戒を犯し、唯惡法を行ふを知る。この事に因るが故に波羅牢伽彌尼、極めて禁戒を犯し、唯惡法を行ふと。若し是の如く說かば、眞說と爲すや』。答へて曰く『非ざるなり、瞿曇。所以者何。拘麗瘦の卒は見異り欲異り所願亦異る。拘麗瘦の卒極めて禁戒を犯し、唯惡法を行ふ。我は極めて戒を持し、惡法を行はず』。また伽彌尼に問ひたまはく『汝、拘麗瘦の卒極めて禁戒を犯

【七】「大德、吾これを聞く、沙門瞿曇は幻を知ると」

【八】巴利文「盜賊を防ぎ使命を運ぶ。」

るが故に心に憂苦を生ず。疑惑の纒を除き已れば憂苦すなはち滅す。疑惑纒はるに因りて心に憂苦を生ず。現法中に於て而も究竟を得、煩無く、熱無く、常住不變なり。これ聖所知、聖所見なり。これを五因緣もて心憂苦を滅すと謂ふ。また次に、更に現法に有りて而も究竟を得、煩無く、熱無く、常住不變なり。これ聖所知、聖所見なり。云何が更に現法に有りて而も究竟を得、煩無く、熱無く、常住不變にして、これ聖所知、聖所見なるや、謂く八支正道なり。正見乃至正定これを八と爲す。これを更に現法に有りて而も究竟を得、煩無く熱無く常住不變にして、これ聖所知、聖所見なりと謂ふ』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二十、[一]波羅牢經第十

我が聞きしこと是の如し。ある時、佛[二]拘麗瘦に遊び、大比丘衆と倶に[三]北村に往至し、北村の北、[四]尸攝惒林中に住したまひぬ。その時[五]波羅牢伽彌尼、沙門瞿曇[六]なる釋種の子、釋の宗族を捨て出家學道し拘麗瘦に遊び、大比丘衆と倶にこの北村に至り、北村の北、尸攝惒林中に住す。彼の沙門瞿曇・大名稱有りて十方に周聞す。沙門瞿曇・如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛・衆祐と號す。彼この世・天及び魔・梵・沙門・梵志、人より天に至るに於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶ。彼若し說法せば初め善く中ろ善く竟亦善くして義有り文有り、具足淸淨にして梵行を顯現す。若し[この]如來・無所著・等正覺を見、尊重・禮拜・供養・承事すれば快く善利を得と聞き、彼この念を作しぬ、我應に往きて沙門瞿曇を見、禮事供養すべしと。波羅牢伽彌尼聞き已りて、北村より出で、北行して尸攝惒林に至り、世尊を見、禮事供養せんと欲しき。波羅牢伽彌尼、遙に世尊の林樹間に在すを見るに、端正姝好、猶ほ星中の月の如し。光耀暐曄、晃めきて金山の若し。相好具足し威神巍巍として、諸根寂定し、蔽礙有ること無く調御を成就し、

【一】 S. iv. 340

【二】 拘麗瘦(Koliyesu)。語尾の瘦即ちsu は釋羇瘦・拘樓瘦の瘦と同じく於格複數の語尾を示す。

【三】 北村(Uttara)。

【四】 尸攝惒林(Siṃsapa)。

【五】 波羅牢伽彌尼 (Pāṭaliya-gāmaṇi)。第三卷「伽藍經」參照。

【六】 三卷「伽藍經」の初を參照せよ。

欲漏心解脫し、有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。如來かくの如く正心解脫して五[三〇]稱譽を得、如法にして諍無く愛すべく敬すべし。云何が五と爲す。彼の衆生は受くる所の苦樂皆、本作に因る。若し爾れば如來本妙業有り、彼に因るが故に如來今に於て聖無漏樂、寂靜止息して而も[三一]樂覺を得。これを如來、第一の稱譽を得と謂ふ。また次に衆生、受くる所の苦樂皆合會に因る。若し爾れば、如來本妙合會あり、彼に因るが故に如來今に於て聖無漏樂、寂靜止息して而も樂覺を得。これを如來、第二の稱譽を得と謂ふ。また次に衆生、受くる所の苦樂皆爲命に因る。若し爾れば如來本妙爲命あり。彼に因るが故に如來今に於て聖無漏樂、寂靜止息して樂覺を得。これを如來、第三の稱譽を得と謂ふ。また次に衆生、受くる所の苦樂皆見に因る。若し爾れば、如來本妙見あり。彼に因るが故に如來今に於て聖無漏樂、寂靜止息して而も樂覺を得。これを如來、第四の稱譽を得と謂ふ。また次に衆生、受くる所の苦樂皆尊祐の造に因る。若し爾れば、如來本妙尊祐なり。彼に因るが故に、如來今に於て聖無漏樂、寂靜止息して而も樂覺を得、これを如來、第五の稱譽を得と謂ふ。これを如來本妙業・妙合會・妙爲命・妙見・妙尊祐なりと爲し、妙尊祐所造と爲す。彼に因るが故に、如來今に於て聖無漏樂、寂靜止息して而も樂覺を得。この事を以ての故に、如來今に於て五稱譽を得。五因緣有りて心に憂苦を生ず。云何が五と爲す。婬欲纏はれば、婬欲纏はるに因るが故に心に憂苦を生ず。是の如く瞋恚・睡眠・掉悔[も亦然り]。疑惑纏はれば、疑惑纏はるに因るが故に心に憂苦を生ず。これを五因緣もて心に憂苦を生ずと謂ふ。五因緣有りて心、憂苦を滅す。云何が五と爲す。若し婬欲纏はれば、婬欲纏はるに因るが故に心に憂苦を生ず。婬欲の纏を除き已れば憂苦すなはち滅す。婬欲纏はるに因りて心に憂苦を生ず 。現法中に於て而も究竟を得、煩無く熱無く、常住不變なり。これ聖所知、聖所見なり。是の如く瞋恚・睡眠・掉悔[亦然り]。若し疑惑纏はれば、疑惑纏はるに因

【三〇】稱譽(Pasaṃsaṭṭhā)。
【三一】樂覺(Sukha-vedanā)。

しみ自ら憂ふるに因るが故にすなはち彼女に愛念染著を爲すを斷ず。若し彼の女人故らに他と語り共に相問訊し往來し止宿せば、その人後に於て身心寧ろ當にまた苦惱極憂感を生ずべきや』。比丘答へて曰く『不なり世尊。所以者何。その人女に於てまた愛念染著の情無し。若し彼の女人故らに他と語り共に相問訊し往來し止宿せば、若しその人をしてこれに因りて身心また苦惱極憂感を生ぜしむるは、この處り然らず。是の如く、比丘すなはちこの念を作す、所爲に隨ひ所行に隨ひて不善の法生じて而も善法滅す。若し自らその苦を斷ずれば不善の法滅して而も善法生ず。我今寧ろ自らその苦を斷ずべしと。すなはち自ら苦を斷ず。自ら苦を斷じ已りて不善の法滅して而も善法生じ、また苦を斷ぜず。所以者何。本、爲す所はその義已に成る。若しまた苦を斷ずるはこの處り然らず。彼またこの念を爲す、若し所因有りてその苦を斷ずるは、我すなはち已に斷ず。然るに我、欲に於て猶ほ故の如く、未だ斷ぜず。我今寧ろ欲を斷ずるを求むべしと。すなはち欲を斷ずるを求む。彼欲を斷ずるが爲の故に、獨住遠離して無事處に在り、或は樹下・空・安靜處・山巖・石室・露地・[二四]穰積に至り、或は林中に至り、或は塚間に在り。彼已に無事處に在り、或は樹下・空・安靜處に至り、[二五]尼師檀を敷き、結加趺坐し、正身正願にして反念向はず、[二六]貪伺を斷除し、心に諍有ること無く、他の財物諸生活具を見て貪伺を起し、我が得ならしめんと欲せず。彼、貪伺に於てその心を淨除す。是の如く瞋恚・睡眠・掉悔[を除き]、疑を斷じ、惑を度し、諸の善法に於て猶豫有ること無し。彼、疑惑に於てその心を淨除す。彼已にこの五蓋の[二七]心穢・[二八]慧羸を斷じ欲を離れ惡・不善の法を離れ、[二九]第四禪を得るに至り成就して遊ぶ。彼かくの如き定心清淨にして穢無く煩無きを得、柔軟にして善く住し不動心を得、漏盡智通に趣向して作證す。彼すなはちこの苦の如眞を知り、この苦の習を知り、この苦の滅を知り、この苦滅道の如眞を知り、亦、この漏の如眞を知り、この漏の習を知り、この漏の滅を知り、この漏滅道の如眞を知る。彼、かくの如く知り、かくの如く見已れば則ち

【二四】 藁積のこと。

【二五】 一卷「木積喩經」註。

【二六】 貪欲・瞋恚・睡眠・掉悔・疑を五蓋といふ。

【二七】 心穢 (Cetaso upakkilesa)。心を穢すもの。

【二八】 慧羸(Paññāya dubbalīkaraṇa)。般若即ち慧を弱くするもの。

【二九】 「欲を離れ惡不善の法を離れ」は初禪に屬す、この文は初禪より後三禪の分を中略したるなり。一卷「蓍度樹經」註を見よ。

善業を捨てて、身の善業を修し、口意の不善業を捨てて、口意の善業を修す。彼未來の苦に於てすなはち自ら我、未來の苦無きを知る。如法に樂を得て而も樂捨せず。彼或は〔三三〕苦因行欲を斷ぜんと欲し、或は苦因行捨欲を斷ぜんと欲す。彼若し苦因行欲を斷ぜんと欲せば、卽ちその行欲を修し、已に斷ずれば苦すなはち盡くるを得。彼若し苦因行捨欲を斷ぜんと欲せば卽ちその行捨欲を修し、已に斷ずれば苦すなはち盡くるを得。若し彼の比丘すなはちこの念を作す、所爲に隨ひ、所行に隨ひて、不善の法生じて而も善法滅す。若し自ら苦を斷ずれば不善の法滅して而も善法生ず。我今寧ろ自らその苦を斷ずべしと。すなはち自ら苦を斷ず。自ら苦を斷じ已りて不善の法滅して而も善法生じ、また苦を斷ぜず。所以者何。比丘、本爲す所はその義已に成る。若しまた苦を斷ずるはこの處り然らず。比丘、猶ほ箭工の檢を用ひて箭を撓むるが如し。その箭已に直ければまた檢を用ひず。所以者何。彼の人本爲す所はその事已に成る。若しまた檢を用ふるはこの處り然らず。是の如く比丘すなはちこの念を作す、所爲に隨ひ所行に隨ひて、不善の法生じて而も善法滅す。若し自ら苦を斷ずれば、不善の法滅して而も善法生ず。我今寧ろ自らその苦を斷ずべしと。すなはち自ら苦を斷ず。自ら苦を斷じ已りて不善の法滅して而も善法生じ、また苦を斷ぜず。所以者何。本爲す所はその義已に成る。若しまた苦を斷ずるは、この處り然らず。比丘、猶ほ人有るが如し。愛念染著して彼の女を敬待す。然るに彼の女人更に他と語り、共に相問訊し往來し止宿す。その人これに因りて身心苦惱を生じ、極めて憂慼するや』。比丘答へて曰く『是の如し世尊』。『所以者何。その人女に於て愛念染著し、極めて相敬待す。而も彼の女人更に他と語り共に相問訊し往來し止宿す。その人身心何ぞ苦惱憂慼を生ぜざるを得ん。比丘、若しその人をして而もこの念を作さしむ、我唐しく愛念して、彼の女を敬待す。然るに彼の女人更に他と語り共に相問訊し往來し止宿す。我今寧ぞ自ら苦しみ自ら憂ふるに因るが故に彼の女に愛念染著を爲すを斷ずべきやと。その人後に於て自ら苦

〔三三〕巴利文「苦を因緣とせるこのわれ行を勤修するや、行を勤修することよりして離欲あり……苦を因緣とし善觀せるわれ捨を增修することよりして離欲あり。」

の二報有り。信・樂・聞・念・見・善・觀なり。諸の尼乾、人自ら虚妄の言有り、これを信ずべく、樂しむべく、聞くべく、念ずべく、見善觀すべきやと。彼、我に答へて言く、是の如し瞿曇と。我また彼の諸の尼乾に語げて曰く、この虚妄の言、何を信ずべく、何を樂しむべく、何を聞くべく、何を念ずべく、何を善觀すべきや。謂く人自ら虚妄の言有り、信有り樂有り聞有り念有り善觀有りと。若し諸の尼乾、この說を作さば如法中に於て、五詰責を得て[一七]憎惡すべしと爲す、云何が五と爲す。今この衆生、受くる所の苦樂皆[一八]本作に因る。若し爾れば諸の尼乾等本惡業を作しぬ。所以者何。彼に因るが故に諸の尼乾、今に於て極重の苦を受く。これを尼乾の第一可憎惡と謂ふ。また次に衆生、受くる所の苦樂皆[一九]合會に因る。若し爾れば、諸の尼乾等本惡合會しぬ。所以者何。彼に因るが故に諸の尼乾、今に於て極重の苦を受く。これを尼乾の第二可憎惡と謂ふ。また次に衆生、受くる所の苦樂皆[二〇]爲命に因る。若し爾れば諸の尼乾等本惡爲命たり。所以者何。彼に因るが故に諸の尼乾、今に於て極重の苦を受く。これを尼乾の第三可憎惡と謂ふ。また次に衆生、受くる所の苦樂皆[二一]見に因る。若し爾れば諸の尼乾等本惡見有りぬ。所以者何。彼に因るが故に諸の尼乾、今に於て極重の苦を受く。これを尼乾の第四可憎惡と謂ふ。また次に衆生、受くる所の苦樂皆[二二]尊祐の造に因る。若し爾れば諸の尼乾等本惡尊祐なりき。所以者何。彼に因るが故に諸の尼乾、今に於て極重の苦を受く。これを尼乾の第五可憎惡と謂ふ。若し諸の尼乾、本の所作惡業・惡合會・惡爲命・惡見・惡尊祐に因りて惡尊祐の所造と爲す。彼に因るが故に諸の尼乾、今に於て極重の苦を受く。これを、彼の事に因るが故に諸尼乾等、可憎惡と爲すと謂ふ。我自ら知り自ら覺る所の法、汝が爲に說かば、若しは沙門梵志、若しは天・魔・梵及び餘の世間皆能く伏する無く、皆能く穢す無く、皆能く制する無し。云何が我、自ら知り自ら覺る所の法、汝が爲に說かば、[若しは]沙門梵志、若しは天・魔・梵及び餘の世間の爲に能く伏せられ、能く穢され、能く制せらるゝに非さるや。若し比丘有り身の不

【一七】憎惡(Gārayha)。

【一八】(1)本作(Pubbekatahetu)。前註參照。

【一九】(3)合會 (Saṅgatibhāvahetu)。

【二〇】(4)爲命(Abhijātihetu)。

【二一】(5)見(Diṭṭhadhammupakkamahetu)。

【二二】(2)尊祐(Issaranimmānahetu)。

に答へて瞿曇、是の如し是の如くならずと言ふを見ず。また次に我、諸の尼乾に問ひて曰く、諸の尼乾、若し[10]樂報業有り、彼の業寧ろ斷に因り苦行に因りて轉じて[11]苦報と作すべきやと。彼、我に答へて言く、不なり瞿曇と。諸の尼乾、若し苦報業有り。彼の業寧ろ斷に因り苦行に因りて轉じて樂報と作すべきやと。彼、我に答へて言く、不なり瞿曇と。諸の尼乾、若し[12]現法報業有り、彼の業寧ろ斷に因り苦行に因りて轉じて後生報と作すべきや。我、彼に答へて言く、不なり瞿曇と。諸の尼乾、若し[13]後生報業有り、彼の業寧ろ斷に因り苦行に因りて轉じて現法報と作すべきやと。彼、我に答へて言く、不なり瞿曇と。諸の尼乾、若し[14]不熟報業有り。彼の業寧ろ斷に因り苦行に因りて轉じて[15]熟報と作すべきやと。彼、我に答へて言く、不なり瞿曇と。諸の尼乾、若し熟報業有り、彼の業寧ろ斷に因り苦行に因りて轉じて異と作すべきやと。彼、我に答へて言く、不なり瞿曇と。諸の尼乾、これを樂報業、彼の業、斷に因り苦行に因りて轉じて苦報と作すべからずと爲す。諸の尼乾、苦報業[あり]、彼の業、斷に因り苦行に因りて轉じて樂報と作すべからず。諸の尼乾、現法報業[あり]、彼の業、斷に因り苦行に因りて轉じて後生報と作すべからず。諸の尼乾、後生報業[あり]、彼の業、斷に因り苦行に因りて轉じて現法報と作すべからず。諸の尼乾、不熟業[あり]、彼の業、斷に因り苦行に因りて轉じて熟報と作すべからず。諸の尼乾、熟報業[あり]、彼の業、斷に因り苦行に因りて轉じて異者と作すべからず。是を以ての故に、諸の尼乾、虛妄の方便もて空しく斷じて獲る無しと。彼の諸の尼乾すなはち我に報じて言く、瞿曇、我に尊師有り、[16]親子尼乾と名づく。是の如きの說を作す、諸の尼乾、汝等若し本惡業を作さば、彼の業皆この苦行に因りて而も滅盡するを得べし。若し今身・口・意を護れば、これに因りて復更に惡業を作さずと。我また彼の諸の尼乾に問ひて曰く、汝等、尊師親子尼乾を信じて疑惑せざるやと。彼我に答へて言く、瞿曇、我尊師親子尼乾を信じて疑惑有ること無しと。我また彼の諸の尼乾に語げて曰く、五種の法、現世

【一〇】 樂の果報を受くべき業。
【一一】 苦の果報。
【一二】 現法報業(Diṭṭhadhammavedanīya kamma)。現在世に於て果報を齎すべき業。順現業・順現受業・順現法受業。
【一三】 後生報業(Samparāyavedanīya kamma)。未來世に至りて果報を齎すべき業、順後業・順後受業。
【一四】 不熟報業(Aparipakkavedanīya kamma)。
【一五】 熟報業(Paripakkavedanīya kamma)。
【一六】 親子尼乾(Nigaṇṭha Nātaputta)。耆那敎の開創者摩訶毘羅自身を指す。三卷「梵破經」註を見よ。

金を求むる時また極苦を生じぬ。金を求め得已りて卽便ち拔出しぬ。拔出に因る時また極苦を生じぬ。金を拔き出し已りて、薄瘡纏裹しぬ。裹瘡に因る時また極苦を生じぬ。我、箭金を拔きし後に於て力を得、患無く諸根を壞せず、平復して故の如しと。是の如く尼乾、若し汝等自ら淨智有りて、我本有と爲し、我本無と爲し、我本作惡と爲し、[我]不作惡と爲し、我[自ら]苦とする所盡くと爲し、[自ら]苦とする所盡きずと爲し、若し盡き已ればすなはち盡を得、卽ち現世に於て諸の不善を斷じ、衆善法を得て修習作證せば尼乾、汝等この說を作すを得べし。謂く、人の受くる所皆本作に因る。若しその故業、苦行に因りて滅し、新[業]造られざれば則ち諸業盡く。諸業盡き已れば則ち苦盡を得。苦盡を得已れば卽ち苦邊を得と。我が問ひしこと是の如し。諸の尼乾能く我に答へて、瞿曇、是の如し、是の如くならずと言ふを見ず。また次に我、諸の尼乾に問ひて曰く、若し諸の尼乾、上斷上苦行有ればその時諸の尼乾、上苦を生ずるやと。彼我に答へて言く、是の如し瞿曇と。若し中斷中苦行有れば、その時諸の尼乾、中苦を生ずるやと。彼我に答へて言く、是の如し瞿曇と。若し下斷下苦行有れば、その時諸の尼乾、下苦を生ずるやと。彼我に答へて言く、是の如し瞿曇と。これを諸の尼乾、上斷上苦行有れば、その時諸の尼乾、則ち上苦を生ず。中斷中苦行有れば、その時諸の尼乾、則ち中苦を生ず。下斷下苦行有れば、その時諸の尼乾、則ち下苦を生ずと爲す。若し諸の尼乾をして上斷上苦行有らしめば、その時諸の尼乾、上苦を止息し、中斷中苦行有らしめば、その時諸の尼乾、中苦を止息し、下斷下苦行有らしめば、その時諸の尼乾、下苦を止息す。若し是の如く作し是の如く作さずして、極苦甚重苦を止息せば當に知るべし、諸の尼乾、卽ち現世に於て苦を作す。但諸の尼乾、癡の爲に覆はれ、癡の爲に纏はれて而してこの說を作す、謂く人の受くる所は皆本作に因る。若しその故業、苦行に因りて滅し、新[業]造られざれば則ち諸業盡く。諸業盡き已れば則ち苦盡を得。苦盡を得已れば則ち苦邊を得と。我問ひしこと是の如し。諸の尼乾、能く我

くと爲すや、[自ら]苦とする所盡きずと爲すや、若し盡き已ればすなはち盡を得、卽ち現世に於て、諸の不善を斷じ、衆善法を得て修習作證するやと。彼我に答へて言く不なり瞿曇と。我また彼の尼乾に語ぐ、汝等自ら淨智無くして、我本有と爲し、我本無と爲し、我本作惡と爲し、[我]不作惡と爲し、我[自ら]苦とする所盡くと爲し、[自ら]苦とする所盡きずと爲し、若し盡き已ればすなはち盡を得、卽ち現世に於て、諸の不善を斷じ、衆善法を得、修習作證す。而もこの說を作す、人の受くる所は皆本作に因る。若しその故業、苦行に因りて滅し、新[業]造られざれば則ち諸業盡く。諸業盡き已れば則ち苦盡を得、苦盡を得已れば則ち苦邊を得と謂ふ。尼乾、若し汝等自ら淨智有りて、我本有と爲し、我本無と爲し、我本作惡と爲し、不作惡と爲し、我[自ら]苦とする所盡くと爲し、[自ら]苦とする所盡きずと爲し、若し盡き已ればすなはち盡を得、卽ち現世に於て諸の不善を斷じ、衆善法を得、修習作證せば、尼乾、汝等この說を作すを得べし。謂く、人の受くる所は皆本作に因る。若しその故業、苦行に因りて滅し、新[業]造られざれば則ち諸業盡く、諸業盡き已れば則ち苦盡を得、苦盡を得已れば則ち苦邊を得と。尼乾、猶人有り身に毒箭を被るが如し。毒箭を被るに因りて則ち極苦を生ず。彼、親屬に憐念愍傷せらる。饒益安隱を欲するが故に卽ち拔箭金醫を呼ぶ。箭金醫來りてすなはち利刀を以て開瘡を爲す。開瘡に因る時また極苦を生ず。既に開瘡し已りて箭金を求む。箭金を求むる時また極苦を生ず。金を求め得已りて卽便ち拔出す。拔出に因る時また極苦を生ず。金を拔き出し已りて、[九]薄瘡纒裹す。裹瘡に因る時また極苦を生ず。彼箭金を拔きし後に於て力を得、患無く諸根を壞せず平復して故の如し。尼乾、彼の人自ら淨智有りてすなはちこの念を作す。我本毒箭を被り、毒箭を被るに因りて則ち極苦を生じぬ。我が諸親屬見て憐念愍傷し、我を饒益し安隱ならしめんと欲するが故に卽ち拔箭金醫を呼びぬ。箭金醫來りてすなはち利刀を以て我が爲に開瘡しぬ。開瘡に因る時また極苦を生じぬ。既に開瘡し已りて、箭金を求めぬ。箭

[九] 瘡口の小さくなりたるを纒ひ裹む。

尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸して乃ち命盡くるに至らん。世尊、猶ほ、人有り不良の馬を養ひ、その利を得んと望みて徒らに自ら疲勞して而も利を獲ざるが如し。世尊、我も亦是の如くなりき。彼の愚癡なる尼乾、善く曉了せず、自ら知る能はず、良田を識らずして而も自ら審かならざるを長夜に奉敬し、供養し、禮事し、その利を得んと望みて唐じく苦しみて益無かりき。世尊、我今再び自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し、乃ち命盡くるに至らん。世尊、我本知無く、愚癡なる尼乾に於て信有り、敬有りしも、今日より斷ぜん。所以者何。我を欺誑するが故に。世尊、我今三たび自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し、乃ち命盡くるに至らん』。佛説是の如し。師子大臣及び諸の比丘、佛の所説を聞きて、歡喜奉行しぬ。

[一]十九、尼乾經第九

我が聞きしこと是の如し。ある時、佛[二]釋羇瘦に遊び、[三]天邑中に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『諸の[四]尼乾等是の如く見、是の如く説く、人の受くる所は皆[五]本作に因る。若しその故業、苦行に因りて滅し、新[業]造られざれば則ち諸業盡く。諸業盡き已れば則ち[六]苦盡を得。苦盡を得已れば則ち[七]苦邊を得と謂ふ。我すなはち彼に往き、到り已りて卽ち問ふ。尼乾、汝等實に是の如く見、是の如く説き、人の受くる所は皆本作に因る。若しその故業、苦行に因りて滅し、新[業]造られざれば則ち諸業盡く。諸業盡き已れば則ち苦盡を得、苦盡を得已れば則ち苦邊を得と謂ふやと。彼我に答へて言く、是の如し瞿曇と。我また彼の尼乾に問ふ、汝等自ら淨智有りて、我本有と爲すや、我本無と爲すや、我本作惡と爲すや、[我]不作惡と爲すや、[八]我[自ら]苦とする所盡

【一】M. 101, Devadaha-sutta
【二】三卷「惒破經」註を見よ。
【三】天邑城(Devadaha)。天臂城。
【四】四卷「師子經」註を見よ。
【五】人間のこの世にありて感ずる所は總て前世に作したる業の因による。
【六】苦盡(Dukkhakkhaya) 苦の滅盡。
【七】苦邊(Dukkha-nijjiṇṇa)。苦の朽壞。
【八】原文には「我爲ニ苦所レ苦盡」以下これに倣ひて知れ。

らしむ。この故に我、苦行す。師子、これを事有り、この事に因るが故に、沙門瞿曇は苦行を宗本とし、亦人の爲に苦行の法を說くと「いふも」如實の法に於て「彼を」謗毀する能はずと謂ふ。(7)師子、云何がまた事有り、この事に因るが故に、如實の法に於て謗毀する能はざるや、沙門瞿曇は不入於胎を宗本とし、亦人の爲に不入胎の法を說くとて。師子、若し沙門梵志有り、當來の胎生を知り斷じ滅盡してその根を拔絕し、竟に生ぜざるに至らしむとせば、我、彼の不入於胎を說く。師子、如來・無所著・等正覺は當來の有胎生を知り、斷じ滅盡してその根を拔絕し、竟に生ぜざるに至らしむ。この故に我、胎に入らず。師子、これを事有り、この事に因るが故に、沙門瞿曇は不入於胎を宗本とし、亦人の爲に不入胎の法を說くと「いふも」如實の法に於て「彼を」謗毀する能はずと謂ふ。

(8)師子、云何がまた事有り、この事に因るが故に、如實の法に於て謗毀する能はざるや、沙門瞿曇は安隱を宗本とし、亦人の爲に安隱の法を說くとて。師子、族姓子の、爲にする所ありて、鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け至信にして家を捨て、家無くして道を學ぶ、唯「その」無上梵行訖る。我、現法に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じて、更に有を受けずと如眞を知り、我、自ら安隱にして、亦他の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を安隱ならしめ、我、已に彼を安んじてすなはち生法の衆生、生法より解脫し、老法・病法・死法・憂慼染汚の法の衆生、憂慼染汚の法より解脫すと爲す。師子、これを事有り、この事に因るが故に、沙門瞿曇は安隱を宗本とし、亦人の爲に安隱の法を說くと「いふも」如實の法に於て「彼を」謗毀する能はずと謂ふ』。師子大臣、世尊に白して曰く『瞿曇、我已に知る。善逝、我已に解す。瞿曇、猶ほ、明目の人、覆へれるは之を仰がしめ、覆はれたるは之を發き、迷者に道を示し、闇中に明を施すが如し、若し眼有る者はすなはち色を見んとて。沙門瞿曇も亦また是の如し。我が爲に無量の方便もて法を說き、その諸の道に隨ひて義を現したまふ。世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世

以て衣と爲し、或は瓶を以て水を取らず、或は[一八]魁を以て水を取らず、[一九]刀杖もて劫抄するの食を食はず、欺妄の食を食はず、[二〇]自往せず、[二一]遣信せず、[二二]來尊せず、善尊せず、住尊せず、若し二人の食有れば中に在りて食はず、懷妊の家にて食はず、狗を畜ふ家にて食はず、設使、家に糞蠅有りて飛來せばすなはち食はず。魚を噉はず、肉を食はず、酒を飲まず、惡水を飲まず。或は都て所飲無く、無飲の行を學び、或は一口を噉ひ、一口を以て足れりと爲し、或は二口、三・四・乃至七口［を噉ひ］、七口を以て足れりと爲し、或は[二三]一得を食し、一得を以て足れりと爲し、或は二・三・四・乃至七得［を食ひ］、七得を以て足れりと爲し、或は日に一食し、一食を以て足れりと爲し、或は二・三・四・五・六・七日・半月・一月に一食し、一食を以て足れりと爲し、或は菜茹を食し、或は[二四]稗子を食し、或は[二五]穄米を食し、或は雜𪍿を食し、或は[二六]頭頭邏食を食し、或は麁食を食し、或は無事處に至り、無事に依り、或は根を食し、或は果を食し、或は[二七]自落果を食し、或は連合衣を持し、或は毛衣を持し、或は[二八]頭舍衣を持し、或は毛頭舍衣を持し、或は全皮を持し、或は穿皮を持し、或は全穿皮を持し、或は散髮を持し、或は編髮を持し、或は散編髮を持し、或は剃髮する有り、或は剃鬚する有り、或は鬚髮を剃り、或は拔髮する有り、或は拔鬚する有り、或は鬚髮を拔き、或は住立して坐を斷じ、或は[二九]蹲行を修し、或は刺に臥する有りて刺を以て床と爲し、或は[三〇]果に臥する有りて果を以て床と爲し、或は水に事ふる有りて晝夜に[三一]手抒し、或は火に事ふる有りて竟昔より之を然やし、或は日月に事へ、尊祐大德叉手して彼に向ふ。かくの如き比、無量の苦を受け、煩熱の行を學ぶ。師子、この苦行有り。我無しと說かず。[三二]師子、然もこの苦行、下賤の業と爲し、苦に至り、困に至り、凡人の所行にして、この聖道に非ず。師子、若し沙門梵志あり、彼の苦行の法を知り、斷じ、滅盡してその根を拔絶し、竟に生ぜざるに至らしむとせば、我［また］彼の苦行を說く。師子、如來・無所著・等正覺は彼の苦行の法を知り斷じ滅盡してその根を拔絶し、竟に生ぜざるに至

【一八】宋・元・明の三本樋に作る、水を容るゝ器の如くなるも如何なるものなりや考へ得ず。

【一九】刀や杖を以て劫して掠め取りたる食物。

【二〇】招がれて往いて供養を受けず。

【二一】指定して供養されたるは受けず。

【二二】「來れ尊者よ、善哉尊者よ、住まれ尊者よ」と言ひて供養さるゝには應ぜず。

【二三】一度得たるだけのものを食ひ、それを以て滿足す。

【二四】稗子(Sâmaka)。

【二五】穄米(Nivâra)(?)。

【二六】頭頭邏(Daddula)。

【二七】自然に落ちたる果物。

【二八】頭舍衣(Dussa)。至つて粗末なる衣服。

【二九】うづくまりながら行く。

【三〇】實は板なり、Phalaka を Phala と誤りて果と譯したるか。

【三一】手を以て酌むの意か。

【三二】S.iv. 330. v. 420. Vin. i.10.巴利文は「諸欲の上に欲樂耽著すること、これ低劣野鄙、凡夫的にして聖者的ならず、非利を伴ふものなり。」

沙門瞿曇は可作を宗本とし、亦人の爲に可作の法を説くと[いふも彼を]謗毀する能はずと謂ふ。(3)師子、云何がまた事有り、この事に因るが故に如實の法に於て謗毀する能はざるや。沙門瞿曇は斷滅を宗本とし、亦人の爲に斷滅の法を説くとて。師子、我、身の惡行は應に斷滅すべく、口・意の惡行も亦應に斷滅すべしと説く。師子、若し是の如きの比無量の不善穢汚の法は、當來有の本たり、煩熱の苦報あり、生・老・病・死の因たり。師子。我この法盡く應に斷滅すべしと説く。師子、これを事有り、この事に因るが故に、沙門瞿曇は斷滅を宗本とし、亦人の爲に斷滅の法を説くと[いふも]如實の法に於て[彼を]謗毀する能はずと謂ふ。(4)師子、云何がまた事有り、この事に因るが故に如實の法に於て謗毀する能はざるや、沙門瞿曇は可惡を宗本とし、亦人の爲に可憎惡の法を説くとて。師子、我、身の惡行は憎惡すべく、口・意の惡行も亦憎惡すべしと説く。師子、若し是の如きの比無量の不善穢汚の法は、當來有の本たり、煩熱の苦報あり、生・老・病・死の因たり。師子、我この法盡く憎惡すべしと説く。師子、これを事有り、この事に因るが故に沙門瞿曇は可惡を宗本とし、亦人の爲に可憎惡の法を説くと[いふも]如實の法に於て[彼を]謗毀する能はずと謂ふ。(5)師子、云何がまた事有り、この事に因るが故に如實の法に於て謗毀する能はざるや、沙門瞿曇は法律を宗本とし、亦人の爲に法律の法を説くとて。師子、我、貪婬を斷ずるが爲の故に而も法律を説き、瞋恚・愚癡を斷ずるが故に而も法律を説く。師子、若し是の如きの比無量の不善穢汚の法は、當來有の本たり、煩熱の苦報あり、生・老・病・死の因たり。師子、我、彼を斷ずるが爲の故に而も法律を説く。これを事有り、この事に因るが故に沙門瞿曇は法律を宗本とし、亦人の爲に法律の法を説くと[いふも]如實の法に於て[彼を]謗毀する能はずと謂ふ。(6)師子、云何がまた事有り、この事に因るが故に如實の法に於て謗毀する能はざるや、沙門瞿曇は苦行を宗本とし、亦人の爲に苦行の法を説くとて[一七]師子、或は沙門梵志有り。裸行にして衣無く、或は手を以て衣と爲し、或は葉を以て衣と爲し、或は珠を

【一七】以上 A.i. 241, 295; ii. 206「長阿含」三卷「散陀那經」參照。

また事有り、この事に因るが故に、如實の法に於て誹毀する能はず、沙門瞿曇は[八]可作を宗本とし、亦人の爲に可作の法を説くとて。(3)師子、また事有り、この事に因るが故に、如實の法に於て誹毀する能はず、沙門瞿曇は[九]斷滅を宗本とし、亦人の爲に斷滅の法を説くとて。(4)師子、また事有り、この事に因るが故に、如實の法に於て誹毀する能はず、沙門瞿曇は[一〇]可惡を宗本とし、亦人の爲に可憎惡の法を説くとて。(5)師子、また事有り、この事に因るが故に、如實の法に於て誹毀する能はず、沙門瞿曇は[一一]法律を宗本とし、亦人の爲に法律の法を説くとて。(6)師子、また事有り、この事に因るが故に、如實の法に於て誹毀する能はず、沙門瞿曇は[一二]苦行を宗本とし、亦人の爲に苦行の法を説くとて。(7)師子、また事有り、この事に因るが故に、如實の法に於て誹毀する能はず、沙門瞿曇は[一三]不入於胎を宗本とし、亦人の爲に不入胎の法を説くとて。(8)師子、また事有り、この事に因るが故に、如實の法に於て誹毀する能はず、沙門瞿曇は[一四]安隱を宗本とし、亦人の爲に安隱の法を説くとて。(1)師子、[一五]云何が事有り、この事に因るが故に、如實の法に於て誹毀する能はざるや、沙門瞿曇は不可作を宗本とし、亦人の爲に不可作の法を説くとて。師子、我身の惡行は作すべからず、口・意の惡行も亦作すべからずと説く。師子、若し是の如きの比無量の不善穢汚の法は當來有の本たり、煩熱の苦報あり、生・老・病・死の因たり。師子、我この法盡く作すべからずと説く。師子、これを事有り、[一六]この事に因るが故に、沙門瞿曇は不可作を宗本とし、亦人の爲に不可作の法を説くと[いふも]、如實の法に於て[彼を]誹毀する能はずと謂ふ。(2)師子、云何がまた事有り、この事に因るが故に如實の法に於て誹毀する能はざるや、沙門瞿曇は可作を宗本とし、亦人の爲に可作の法を説くとて。師子、我身の妙行は作すべく、口・意の妙行も亦作すべしと説く。師子、若し是の如きの比無量の善法は樂果を與へ、樂報を受けしめ、善處に生ぜしめ、而も長壽を得せしむ。師子、我この法盡く應に作すべきなりと説く。師子、これを事有り、この事に因るが故に

【八】可作(Kiriyavāda)。
【九】斷滅(Ucchedavāda)。
【一〇】可惡 (Jegucchi)。
【一一】法律(Venayika)。
【一二】苦行(Tapassi)。
【一三】不入於胎(Apagabbha)。
【一四】安隱(Assattha)。
【一五】沙門瞿曇は不可作を宗本として、又人のために不可作の法を説くといへば、それは眞實際彼を誹毀することになるべき筈と思はれるが別段彼を誹毀するわけにはならない事情がある。その事情とは何であるか。
【一六】この一段原文の辭句を改置したり。以下同斷。

卷の第四

十八、師子經第八[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]鞞舍離に遊び、[三]獼猴水邊の高樓臺觀に在しぬ。その時衆多くの鞞舍離の[四]麗掣、聽堂に集在し、數ば佛を稱歎し、數ば法及び比丘衆を稱歎しぬ。彼の時[五]尼乾の弟子、[六]師子大臣も亦衆の中に在りき。この時師子大臣、往いて佛を見、供養禮事せんと欲しき。師子大臣則ち先づ諸の尼乾の所に往詣し、尼乾に白して曰く『諸尊、我往いて沙門瞿曇を見んと欲す』。彼の時尼乾、師子を訶して曰く『汝、沙門瞿曇を見んと欲すること莫れ。所以者何。沙門瞿曇は[七]不可作を宗本とし、亦人の爲に不可作の法を説く。師子、若し不可作を宗本[とするもの]を見るは則ち吉利ならず。供養禮事するも亦吉利ならず』。彼の衆多くの鞞舍離の麗掣、再び三たび聽堂に集在し、數ば佛を稱歎し、數ば法及び比丘衆を稱歎しぬ。彼の時尼乾の弟子、師子大臣も亦再び三たび彼の衆の中に在りき。時に師子大臣、亦また再び三たび往いて佛を見、供養禮事せんと欲しき。師子大臣、すなはち尼乾に辭せずして即ち佛に往詣し、共に相問訊し、却きて一面に坐し、而もこの語を作しぬ『我聞く、沙門瞿曇は不可作を宗本とし、亦人の爲に不可作の法を説くと。瞿曇、若し是の如く説き、沙門瞿曇は不可作を宗本とし、亦人の爲に不可作の法を説くと[いはば]、彼沙門瞿曇を誹毀せざるや、彼眞實を説くや、彼是法を説くや、彼法如法を説くや、如法に於て過無く、難詰無きや』。世尊答へて曰はく『(1)師子、若し是の如く説き、沙門瞿曇は不可作を宗本とし、亦人の爲に不可作の法を説くと[いはば]、彼沙門瞿曇を誹毀せず、彼眞實を説き、彼是法を説き、彼如法を説き、法に於て過無く亦難詰無し。所以者何。師子、事有りこの事に因るが故に、如實の法に於て誹毀する能はず、沙門瞿曇は不可作を宗本とし、亦人の爲に不可作の法を説くとて。(2)師子、

【一】A. iv. 179, Vin. i. 233

【二】鞞舍離(Vesāli)。第二卷「七日經」註に出づ。

【三】玄應音義第十四卷によれば獼猴は末迦吒にして、池は賀邏駄、卽 Markaṭahrada なり、但この名稱巴利文學中に發見せず。

【四】麗掣(Licchavi)。離奢梨車、栗呫婆。毘舍離を中心として、住みたる一民族。

【五】第三卷「和破經」の註を見よ。

【六】師子(Sīha)。

【七】不可作(Akiriyavāda)。

の十善業道白くして白報有り、自然に上に昇り、必ず善處に至る。伽彌尼、猶ほ村を去ること遠からずして深き水淵有り。彼に於て、人有りて、酥油の瓶を以て水に投じて破るに、滓瓦は下に沈み、酥油は上に浮くが如し。是の如く伽彌尼、彼の男女等、精進勤修して而も妙法を行ひ、十善業道を成じ、殺を離れ殺を斷じ、不與取・邪婬・妄言・乃至邪見を離れ、邪見を斷じて正見を得。彼の命終る時、謂く身麁色、四大の種、父母より生じ、衣食・長養・坐臥・按摩・澡浴・强忍、これ破壞の法なり、これ滅盡の法、離散の法なり。彼の命終りて後、或は烏鳥啄み、或は虎狼食ひ、或は燒かれ、或は埋められ、盡く粉塵となる。彼の心意識は常に信の爲に熏ぜられ、精進・多聞・布施・智慧の爲に熏ぜられ、彼これに因り、これに緣りて、自然に上に昇り、善處に生ず。伽彌尼、彼の殺生の者、殺を離れ殺を斷ずるに、[六]園觀の道、昇進の道、善處の道あり。伽彌尼、不與取・邪婬・妄言・乃至邪見の者、邪見を離れ、正見を得るに、園觀の道、昇進の道、善處の道あり。伽彌尼、また園觀の道、昇進の道、善處の道あり。伽彌尼、云何がまた園觀の道、昇進の道、善處の道有りや。謂く、八支の聖道。正見乃至正定、これを八と爲す。伽彌尼、これをまた園觀の道、昇進の道、善處の道有りと謂ふ』。佛說是の如し。伽彌尼及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第三

【六】原語は梵語の Udyāna-Mārga なるが、Udyāna には上行、向上の意と苑囿の意とあり、それよりして向上の道などと譯すべきを園觀之道となせるかと思はる。

こと遠からずして深き水淵有り。彼に於て人有り、大なる重き石を以て水中に擲著す。若し衆人來り各叉手して向ひ、稱歎求索して、是の如き語を作す、願はくは石浮び出でよと。伽彌尼、意に於て云何、この大なる重き石、寧ろ衆人各叉手して向ひ、稱歎求索するが爲に、これに因り、これに縁りて而も當に出づべきや』。伽彌尼答へて曰く『不なり、世尊』『是の如く伽彌尼、彼の男女等懈り精進せずして而も惡法を行ひ、十種の不善業道を成就す。[そは]、殺生・不與取・邪婬・妄言乃至邪見なり。若し衆人各叉手して向ひ、稱歎求索するが爲に、これに因り、これに縁りて、身壞れ命終りて、善處に至り、天上に生ずるを得んは、この處り然らず。所以者何。謂く、この十種の不善業道、黑くして黑報有り、自然に下に趣き、必ず惡處に至る。伽彌尼、意に於て云何。若し村邑中に或は男女有り。精進勤修して而も妙法を行ひ、十善業道を成じ殺を離れ殺を斷じ、不與取・邪婬・妄言・乃至邪見を離れ、邪見を斷じて正見を得。彼命終る時、若し衆人來り各叉手して向ひ、稱歎求索して是の如きの語を作す、汝男女等、精進勤修して而も妙法を行ひ、十善業道を成じ、殺を離れ殺を斷じ、不與取・邪婬・妄言・乃至邪見を離れ邪見を斷じて正見を得ぬ。汝等これに因り、これに縁りて、身壞れ命終りて、當に惡處に至り、地獄の中に生ずべしと。伽彌尼、意に於て云何。彼の男女等精進勤修して而も妙法を行ひ、十善業道を成じ、殺を離れ殺を斷じ、不與取・邪婬・妄言・乃至邪見を離れ邪見を斷じて正見を得ぬ。寧ろ衆人各叉手して向ひ、稱歎求索すが爲に、これに因り、これに縁りて、身壞れ命終りて、惡處に至り、地獄の中に生ずるを得るや』。伽彌尼答へて曰く『不なり、世尊』。世尊歎じて曰はく『善き哉、伽彌尼。所以者何。彼の男女等、精進勤修して而も妙法を行ひ、十善業道を成じ、殺を離れ殺を斷じ、不與取・邪婬・妄言・乃至邪見を離れ邪見を斷じて正見を得ぬ。若し衆人各叉手して向ひ、稱歎求索するが爲に、これに因り、これに縁りて、身壞れ命終りて、惡處に至り、地獄の中生ずるを得んは、この處り然らず。所以者何。伽彌尼、謂くこ

【五】十惡の反對なる十善なり。

說是の如し。一切の伽藍人及び諸の比丘、佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。

十七、伽彌尼經第七

我が聞きしこと是の如し。ある時佛、[一]那難陀園に遊び、[二]墻村捺林に在しぬ。その時、阿私羅天に子有り、[三]伽彌尼と名づく、色像巍巍として光耀煒曄たり。夜將に旦に向はんとする[時]、佛の所に往詣し、佛足を稽首し、却きて一面に住しぬ。阿私羅天の子伽彌尼、白して曰く『世尊、梵志自ら高ろし、若干天に事へ、若し衆生命終れば、彼能く自在に善處に往來し、天上に生ぜしむ。世尊は法主たり。唯願はくは世尊、衆生をして命終りて善處に至り、天中に生ずるを得せしめたまへ』。世尊告げて曰はく『伽彌尼、我今汝に問ふ。解する所に隨ひて答へよ。伽彌尼、意に於て云何。若し村邑中に或は男女有り懈りて精進せずして而も惡法を行ひ、[四]十種の不善業道を成就す。[十種とは]殺生・不與取・邪婬・妄言乃至邪見なり。彼、命終る時、若し衆人來りて各叉手して向ひ、稱歎求索して、是の如きの語を作す、汝等男女、懈り精進せずして而も惡法を行ひ、十種の不善業道を成就しぬ、[そは]殺生・不與取・邪婬・妄言・乃至邪見なり。汝等此に因り、此に緣りて、身壞れ命終れば必ず善處に至り乃ち天上に生ぜんと。是の如く伽彌尼、彼の男女等、懈り精進せずして而も惡法を行ひ、十種の不善業道を成就す。[そは]、殺生・不與取・邪婬・妄言・乃至邪見なり。寧ろ、衆人各叉手して向ひ、稱歎求索するが爲に、これに因り、これに緣りて、身壞れ命終りて、善處に至り、天上に生ずるを得るや』。伽彌尼答へて曰く『不なり、世尊』。世尊歎じて曰はく『善き哉、伽彌尼、所以者何。彼の男女等、懈り精進せずして而も惡法を行ひ、十種の不善業道を成就す[。そは]、殺生・不與取・邪婬・妄言乃至邪見なり。若し衆人各叉手して向ひ、稱歎・求索するが爲に、これに因り、これに緣りて、身壞れ命終りて、善處に至り乃ち天上に生ずるを得んは、この處り然らず。伽彌尼、猶ほ村を去る

【一】那難陀(Nālandā)。
【二】墻村、捺林 (Pāvārikā ambavana)。
【三】伽彌尼(Gāmiṇi)。
【四】十惡なり、「伽藍經」に委しく説明せり。

し。これを第二安隱住處を得と謂ふ。(3)また次に伽藍[人]、若し所作有れば必ず惡を作さず、我惡を念ぜず。所以者何。自ら惡を作さず、苦何に由りてか生ぜん。是の如く伽藍[人]、多聞の聖弟子、心結無く怨無く恚無く諍無し。これを第三安隱住處を得と謂ふ。(4)また次に伽藍[人]、若し所作有れば必ず惡を作さず。我世の怖と不怖とを犯さず。常に當に一切世間を慈愍すべし。我が心衆生と共に諍はず、濁無くして歡悅す。是の如く伽藍[人]、多聞の聖弟子、心に結無く怨無く恚無く諍無し。これを第四安隱住處を得と謂ふ』。伽藍[人]、世尊に白して曰く『是の如く瞿曇、多聞の聖弟子、心結無く怨無く恚無く諍無くして、四安隱住處を得。云何が四と爲す。此世彼世有り、善惡業の報有り。我この正見相應の業を受持具足し得、身壞れ命終りて必ず善處に至り、乃ち天上に生れん。是の如く瞿曇、多聞の聖弟子、心結無く怨無く恚無く諍無し。これを第一安隱住處を得と謂ふ。また次に瞿曇、若し此世彼世無く、善惡業の報無きも我現法中に於て、ここを以ての故に、他の爲に毀らるゝに非ず、但、正智[の人]、の稱譽する所と爲り、精進の人、正見の人、それ有りと說く。是の如く瞿曇、多聞の聖弟子、心結無く怨無く恚く諍無し。これを第二安隱住處を得と謂ふ。また次に瞿曇、若し所作有れば必ず、惡を作さず、我惡を念ぜず。所以者何。自ら惡を作さず、苦何に由りてか生ぜん。是の如く瞿曇、多聞の聖弟子、心結無く怨無く恚無く諍無し。これを第三安隱住處を得と謂ふ。また次に瞿曇、若し所作あれば、必ず惡を作さず。我世の怖と不怖とを犯さず、常に當に一切世間を慈愍すべし。我が心衆生と共に諍はず、濁無くして歡悅す。是の如く瞿曇、多聞の聖弟子、心に結無く怨無く恚無く諍無し。これを第四安隱住處を得と謂ふ。是の如く瞿曇、多聞の聖弟子、心結無く怨無く恚無く諍無し。これを四安隱住處を得と謂ふ。瞿曇、我已に知りぬ。善逝、我已に解しぬ。世尊、我等盡く自ら佛・法・及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我等を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し、乃ち命盡くるに至らん。』佛

【一八】世の怖ろしきこと、怖ろしからざることの意か。

〔人〕、多聞の聖弟子、綺語を離れ、綺語を斷じ、[一三]時說・眞說・法說・義說・止息說をなし、止息說を樂しみ、事時に順ひ宜しきを得、善く敎へ、善く訶す。彼、綺語に於て、その心を淨除す。伽藍〔人〕、多聞の聖弟子、[一四]貪伺を離れ、貪伺を斷じ、心に諍を懷かず、他の財物諸生活の具を見て、貪伺を起し、我が得たらしめんと欲せず。彼貪伺に於て、その心を淨除す。伽藍〔人〕、多聞の聖弟子、恚を離れ恚を斷じ、慚有り愧有り、慈悲心有りて、一切乃至蜫蟲を饒益す。彼、嫉恚に於て、その心を淨除す。伽藍〔人〕、多聞の聖弟子、邪見を離れ、邪見を斷じ、正見を行ひて顚倒せず、是の如く見、是の如く說き、[一五]施有り齋有り亦呪說有り、善惡の業報有り、此世彼世有り、父有り母有り、世に眞人有りて善處に往至し、此世彼世に善く去り、善く向ひ、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶと。彼、邪見に於て、その心を淨除す。是の如く伽藍〔人〕、多聞の聖弟子、身淨業を成就し、口意淨業を成就し、恚を離れ諍を離れ睡眠を除去し、調貢高無く、疑を斷じ慢を度し、正念正智にして、愚癡有る無し。[一六]彼の心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是くの如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く、心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲喜心「亦然り」捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く伽藍〔人〕、多聞の聖弟子、心結無く怨無く恚無く諍無く、すなはち [一七]四安隱住處を得。云何が四と爲す。(1)此世彼世有り、善惡業の報有り。我この正見相應の業を受持し具足するを得、身壞れ命終りて必ず善處に至り、乃ち天上に生る。是の如く伽藍〔人〕、多聞の聖弟子、心結無く怨無く恚無く諍無し。これを第一安隱住處を得と謂ふ。(2)また次に伽藍〔人〕、此世彼世無く、善惡業の報無し。是の如くなるも、我現法中に於て、こゝを以ての故に、他の爲に毀らるゝに非ず、但正智「の人」の稱譽する所と爲り、精進の人、正見の人、それ有りと說く。是の如く伽藍〔人〕、多聞の聖弟子、心に結無く怨無く恚無く諍無

【一三】(1)時に適せる說、(2)眞實の說、(3)法に合へる說、(4)義に合へる說、(5)律に合へる說。

【一四】貪伺(Kāma-vitakka)。

【一五】三卷「思經」註參照。

【一六】三卷「思經」註を見よ。

【一七】安隱住處 (Cattāro assāsā)。

業の因習本有なり。伽藍[人]、恚及び癡はこれ諸の業の因習本有なり、伽藍[人]、貪あれば、貪の爲に[三]心覆はれ厭足無く、或は殺生し、或は與へられざるを取り、或は邪婬を行ひ、或は知り已りて妄言し、或はまた飲酒す。伽藍[人]、恚あれば、恚の爲に心覆はれ、厭足無く、或は殺生し、或は與へられざるを取り、或は邪婬を行ひ、或は知り已りて、妄言し、或はまた飲酒す。伽藍[人]、癡あれば、癡の爲に心を覆はれ、厭足無く、或は殺生し、或は與へられざるを取り、或は邪婬を行ひ、或は知り已りて妄言し、或はまた飲酒す。伽藍[人]、多聞の聖弟子、殺を離れ、殺を斷じ、刀杖を棄捨し、慚有り愧有り、慈悲心有りて、一切乃至蜫蟲を饒益す。彼殺生に於て、その心を淨除す。伽藍[人]、多聞の聖弟子、不與取を離れ、不與取を斷じ、之を與ふれば乃ち取り、與られたるを取るを樂しみ、常に布施を好み、歡喜して悋しむ無く、その報を望まず。彼不與取に於て、その心を淨除す。伽藍[人]、多聞の聖弟子、非梵行を離れ、非梵行を斷じ、梵行を勤修し、妙行を精勤し、清淨無穢にして、欲を離れ婬を斷ず。彼、非梵行に於て、その心を淨除す。伽藍[人]、多聞の聖弟子、妄言を離れ、妄言を斷じ、眞諦を言ひ、眞諦を樂しみ、眞諦に住して、移動せず、一切信ずべくして世間を欺かず。彼妄言に於て、その心を淨除す。伽藍[人]、多聞の聖弟子、兩舌を離れ、兩舌を斷じ、不兩舌を行じ、他を破壞せず、此に聞き彼に語りて此を破壞せんと欲せず、彼に聞き此に語りて彼を破壞せんと欲せず、離るれば合せんと欲し、合へば歡喜し、群黨を作らず、群黨を樂しまず、群黨を稱せず。彼、兩舌に於て、その心を淨除す。伽藍[人]、多聞の聖弟子、麁言を離れ、麁言を斷ず、若し所言有りて、辭氣麁獷惡聲なれば耳に逆ひ、衆の喜ばざる所衆の愛せざる所、他をして苦惱せしめ、定を得ざらしむ。是の如きの言を斷じ、若し所說有れば清和柔潤にして耳に順ひて心に入り、喜ぶべく愛すべく、他をして安樂ならしめ、言聲具はり了りて、人をして畏れしめず、他をして定を得せしむ。是の如きの言を說く。彼、麁言に於て、その心を淨除す。伽藍

【三】 Lobhena abhibhūto apariyādinnacitto

族を捨て、出家學道して伽藍園に遊び、大比丘衆と倶に來りて、この羇舍子に至り、羇舍子村の北、尸攝惒林の中に住す。彼の沙門瞿曇、大名稱有りて十方に周聞す。沙門瞿曇は、如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解無上士・道法御・天人師にして佛・衆祐と號す。彼はこの世天及び魔・梵・沙門・梵志に於て、人より天に至るまで自ら知り、自ら覺り、自ら作證し成就して遊ぶ。彼若し說法せば、初善く中善く竟も亦善くして、義有り文有り、清淨を具足し、梵行を顯現す。若し如來・無所著・等正覺を見、尊重し禮拜し供養し承事すれば、快く善利を得。我等應に供に往きて沙門瞿曇を見、禮事供養すべしと聞きぬ。羇舍子の伽藍の人聞き已りて、各等類眷屬と與に相隨ひて、羇舍子より出で、北行して尸攝惒林に至り、世尊を見て禮事供養せんと欲し、佛に往詣し已りぬ。彼の伽藍人(八)或は佛足に稽首して却きて一面に坐し、或は佛と問訊し却きて一面に坐し、或は叉手を佛に向けて却きて一面に坐し、或は遙かに佛を見已りて默然として坐しぬ。彼の時伽藍人各坐し已りて定まりぬ。佛爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、默然として住したまひぬ。時に伽藍人、佛爲に說法し、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りたまひければ、各坐より起ちて(一〇)著衣を偏に袒き、叉手を佛に向けて、世尊に白して曰く『瞿曇、一沙門梵志有り、伽藍に來り詣りて、但自ら己の所知見を稱歎して而も他の所知所見を呰毀す。瞿曇、また一沙門梵志有り、伽藍に來り詣りて、亦自ら己の所知見を稱歎して而も他の所知所見を呰毀す。瞿曇、我等聞き已りてすなはち疑惑を生ず。この沙門梵志、何者か實と爲し、何者か虛と爲す』と。世尊告げて曰はく『伽藍「人」、汝等疑惑を生ずること莫れ。所以者何。疑惑有るに因りてすなはち猶豫を生ず。伽藍「人」、汝等自ら淨智無くして、後世有りと爲し、後世無しと爲す。伽藍「人」、汝等亦淨智無くして、所作罪有り、所作罪無しとす。伽藍「人」、當に知るべし。諸の業に三つの(一一)因習本有り。云何が三と爲す。伽藍「人」、謂く、貪はこれ諸の

【三】 羇舍子(K̄saputta)村の名。
【四】 尸攝惒林(Simsapā)勝舍婆、尸尸婆、堅實と譯す、樹木の名。
【五】 釋の宗族(Sakya-kula)釋迦といふ種族。
【六】 大へんによき評判。
【七】 二卷「七日經」註を見よ。
【八】 以下五種致敬法の中四を擧ぐ、巴利長部三二經アーターナーチイヤに出づ「(1)或は世尊を敬禮して一方に坐し ぬ、(2)或は世尊と共に會釋し、喜ばしき懇なる會釋の語を交したる後一方に坐しぬ、(3)或は世尊の居たまへる方へ合掌を向けて一方に坐しぬ、(4)或は「己の」名と姓とを告げて一方に坐しぬ、(5)或は默したるまま一方に坐しぬ、」この「伽藍經」にては(4)を省きたり。
【九】 第二卷、「七車經」第九の註に出づ。
【一〇】 偏袒右肩といふに同じ、二卷「世間福經」註を見よ。
【一一】 因習本有(Bhavyarūpatā)。

に出りてか生ぜん。是を以て、男女、在家出家、常に當に慈心解脱を勤修すべし。若し彼の男女、在家出家、慈心解脱を修せば、この身を持して、彼の世に往至せず、但、心に隨ひて此を去る。比丘應にこの念を作すべし、我本、放逸にして不善業を作しぬ、この一切、今報を受くべくして、終に後世にあらずと。若し是の如く慈心解脱を行ずること無量にして善く修する者有れば、必ず[一五]阿那含を得、或は[一六]また上を得。是の如く[一七]悲喜[亦然り]心捨と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。彼はこの念を作す、我本この心少く善く修せざりき。我今この心無量にして善く修すと。多聞の聖弟子、その心是の如く無量にして善く修す。若し本惡知識に因りて、放逸の行を爲し、不善業を作さば、彼將ち去る能はず、穢汚す能はず、また相隨はず。若し幼少の童男童女有りて、生れてすなはち能く捨心解脱を行ずる者は、而も後時に於て、彼身・口・意に寧ろまた不善業を作すべきや』。比丘答へて曰く『不なり、世尊』所以者何。自ら惡業を作さず。惡業何に出りてか生ぜん。是を以て男女。在家出家、常に當に捨心解脱を勤修すべし。若し彼の男女、在家出家、捨心解脱を修せば、この身を持して、彼の世に往至せず。但、心に隨ひて此を去る。比丘應にこの念を作すべし、我本、放逸にして不善業を作しぬ。この一切、今報を受くべくして、終に後世にあらずと。若し是の如く捨心解脱を行ずること無量にして、善く修する者有れば、必ず阿那含を得、或はまた上を得』。佛說是の如し。彼の諸の比丘、佛の所說を聞きて、歡喜奉行しぬ。

十六、伽[一]藍經第六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]伽藍園に遊び、大比丘衆と俱に[三]羇舍子に至り、羇舍子村の北[四]尸攝惒林の中に住したまひぬ。その時羇舍子の伽藍の人、沙門瞿曇なる釋種の子、釋の宗[五]

【一五】阿那含(Anāgāmi)。四果中の第三なり、不還と譯す。
【一六】阿那含以上とは第四の阿羅漢果なり。
【一七】悲(Karuṇā)喜(Muditā)捨(Upekkhā)四無量心中慈の一を前に擧げたれば他の三を一括して擧ぐ。

【一】A. i. 188
【二】伽藍園(Kālāma)。カーラーマ人、又はカーラーマ族、カーラーマのアーラーマに因はれて園と譯したるか。

是の如きの言を說く。四に曰く、綺語。彼時に非ずして說き、眞實ならずして說き、義無くして說き、法に非ずして說き〔一〇〕止息せずして說き、又また不止息の事を稱歎し、時に違脊して、善く敎へず、亦善く訶せず。これを口故作の四業と謂ひ、不善にして苦果を與へ、苦報を受けしむ。(3)云何が意故作に三業ありて、不善にして苦果を與へ、苦報を受けしむるや。曰く、貪。他の財物諸生活の具を伺ひ見て、常に伺ひ求め望みて、我が得たらしめんと欲す。二に曰く、嫉恚。意に憎嫉を懷きて而もこの念を作す。彼の衆生は應に殺すべく、應に縛すべく、應に收むべく、應に免ずべく、應に逐ひて擯出すべしと。その彼をして無量の苦を受けしめんと欲す。三に曰く、邪見。所見顚倒し、是の如く見、是の如く說く、〔一一〕施無く、齋無く、呪說有る無く、善惡業無く、善惡業報無く、此世彼世無く、父無く、母無く、〔一二〕眞人の善處に往至し、善く去り、善く向ひ、自ら知り、自ら覺り、自ら作證し成就して遊ぶ無しと。これを意故作の三業と謂ひ、不善にして苦果を與へ、苦報を受けしむ。多聞の聖弟子、身不善業を捨てゝ、身善業を修し、口意不善業を捨てゝ、口意善業を修す。彼の多聞の聖弟子、是の如く精進戒德を具足し、身淨業を成就し、口意淨業を成就し、恚を離れ、諍を離れ、睡眠を除去し、〔一三〕調貢高無く、疑を斷ち、慢を度し、正念正智にして愚癡有ること無く、彼の心、〔一四〕慈と俱にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心、慈と俱にして結無く、怨無く、恚無く、諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。彼この念を作す、我本この心少く、善く修せざりき。我今この心無量にして善く修すと。多聞の聖弟子、その心是の如く無量にして善く修す。若し本惡知識に因りて、放逸の行を爲し、不善業を作さば、彼、將ち去る能はず、穢汚する能はず、また相隨はず、若し幼少の童男童女有りて、生れてすなはち能く慈心解脫を行ふ者は、而も後時に於て、彼身口意に寧ろまた不善業を作すべきや』。比丘答へて曰く『不なり、世尊』。『所以者何。自ら惡業を作さず。惡業何

〔一〇〕Avinaya-vādi 非律を談ずるもの、律に非ずして說くもの、不止息を說くものと讀むも可。

〔一一〕施與・供養・齋食を行ひてもそれに功德なしといふ。六師外道の中の阿耆多翅舍欽婆羅の說。

〔一二〕巴利文「世に沙門婆羅門の相和合し、善く行ひ、この世、他の世をば自ら知り悟りて〔他にも〕敎へ知らしむるなし」。

〔一三〕掉擧又は單に、掉といふに同じ、精神の昂奮して安靜を得ざるをいふ。

〔一四〕慈(Mettā)。以下四無量心の觀法を明す。

佛說是の如し。尊者羅云及び諸の比丘、佛の所說を聞きて、歡喜奉行しぬ。

十五、[一]思經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し[二]故作業有れば、我、彼必ずその報を受く、或は現世に受け、或は後世に受くと說く。若し不故作業は我、これ必ずしも報を受けずと說く。中に於て、身故作に三業あり。不善にして苦果を與へ、苦報を受けしむ。口に四業有り、意に三業有り、不善にして苦果を與へ、苦報を受けしむ。(1)云何が身故作に三業あり、不善にして苦果を與へ、苦報を受けしむるや。[三]一に曰く、殺生。[四]極惡飮血、その傷害を欲し、衆生乃至蜫蟲を慈しまず。二に曰く、不與取。他の財物に著し、偸意を以て取る。三に曰く、邪婬。彼に或は[五]父の所護、或は母の所護、或は父母の所護、或は姉妹の所護、或は兄弟の所護、或は婦の父母の所護、或は親々の所護、或は同姓の所護有り、或は他の婦女たり、[六]鞭罰の恐怖有り、及び名[七]假賃至華鬘親有り。かくの如き女を犯す。これを身故作の三業と謂ひ、不善にして苦果を與へ、苦報を受けしむ。(2)云何が口故作に四業あり、不善にして苦果を與へ、苦報を受けしむるや。一に曰く、妄言。彼或は衆[中]に在り、或は眷屬[の間]に在り、或は王家に在り。若し彼を呼びて、汝知らばすなはち說けと問ふに、彼知らずして知ると言ひ、知りて知らずと言ひ、見ずして見ると言ひ、見て見ずと見ひ、己の爲に、他の爲に、或は財物の爲に[八]知り已りて妄言す。二に曰く、兩舌。他を離別せしめんと欲し。此に聞きて彼に語り、此を破壞せんと欲し、彼に聞きて此に語り、彼を破壞せんと欲す。合ふ者は離れんと欲し、離るゝ者はまた離れて而も群黨を作し、群黨を樂しみ、群黨を稱說す。三に曰く、[九]麁言。彼若し言有れば、辭氣麁獷惡聲にして耳に逆ひ、衆の喜ばざる所、衆の愛せざる所、他をして苦惱せしめ、定を得ざらしむ。

【一】A.v. 292-301

【二】故作業 (Sañcetanika kamma)。故意を以て作したる業、卽ち思業なり。これに身三・口四・意三の十種あり、その善なるを十善といひ、惡なるを十惡といふ。

【三】以下 (M. 114, Sevitabba-asevitabba-sutta) 參照。

【四】極惡飮血 (Ludda Lohitapāṇi)「兇惡にして、その掌は血に[塗れたり]」Pāṇi 又は Pāniya 飮、飮料を pāṇi と混淆して飮血と譯したるなり。

【五】その婦人は父母その他のものに保護監督されてあり。

【六】それを犯せば鞭罰を受くるの恐ある女。

【七】巴利文「……乃至華鬘を以て卷けるをも、是の如き等[の婦女子]に對しては[非]行を犯すなり。」名假賃至華鬘親の七字讀む能はず。

【八】前經の註に出づ。

【九】麁言 (Pharusavācā) 惡口又は惡言といふ、罵詈誹謗の言。

行に因るが故に當に意業を生ずべくば、彼の意業は不淨なり、或は自らの爲に、或は他の爲に、善にして樂果を與へ、樂報を受けしむと知らば、羅云、汝當に彼の未來の意業を受くべし。羅云、現在の行に因るが故に現に意業を生ぜば即ちこの意業を觀よ。若し現在の行に因るが故に現に意業を生ぜば、この意業、淨と爲すや、不淨と爲すや、自らの爲にするや、他の爲に爲すやと。羅云、若し觀る時則ち現在の行に因るが故に現に意業を生ぜば、この意業は淨なり、或は自らの爲に、或は他の爲に、不善にして苦果を與へ、苦報を受けしむと知らば、羅云、汝當にこの現在の意業を捨つべし。羅云、若し觀る時則ち現在の行に因るが故に現に意業を生ぜば、この意業は不淨なり、或は自らの爲に、或は他の爲に、善にして樂果を與へ、樂報を受けしむと知らば、羅云、汝當にこの現在の意業を受くべし。羅云、若し過去の沙門梵志の身・口・意業有れば、已に觀て觀、已に淨くして淨し。彼の一切は卽ちこの身・口・意業、已に觀て觀、已に淨くして淨し。羅云、若し未來の沙門梵志の身・口・意業有れば當に觀るべくして觀、當に淨かるべくして淨し。彼の一切は卽ちこの身・口・意業、當に觀るべくして觀、當に淨かるべくして淨し。羅云、若し現在の沙門梵志の身・口・意業有れば、現に觀て觀、現に淨くして淨し。彼の一切は卽ちこの身・口・意業、現に觀て觀、現に淨くして淨し。羅云、汝當に是の如く學すべし。我も亦卽ちこの身・口・意業、現に觀て觀、現に淨くして淨し』と。是に於て、世尊また頌を說きて曰はく、

身業・口業・意業、羅云、　善不善の法、汝應に常に觀ずべし。　知り已りて妄言を、羅云、說くこと莫れ。　本、他に從りて活く、何ぞ妄言すべけんや。　沙門の法を覆へし、空しくして眞實無きは、　謂く、妄言を說き、　その口を護らざるなり。　故に妄言せざるは、正覺の子、　この沙門の法、羅云、當に學すべし。　方方豐樂、安隱無怖、　羅云、彼に至りて、他を害するを爲す莫れ。

にこの現に作す身業を受くべし。羅云、若し汝已に身業を作さば即ち彼の身業を觀よ、若し我已に身業を作さば、彼の身業は已に過去に滅盡し變易しぬ。淨と爲すや不淨と爲すや、自らの爲にするや、或は他の爲にするやと。羅云、若し觀る時則ち我已に身業を作せり。彼の身業は已に過去に滅盡し變易しぬ。彼の身業は淨なり、或は自らの爲に、或は他の爲に、不善にして苦果を與へ、苦報を受けしむと知らば、羅云、汝當に善知識梵行人の所に詣るべし。彼の已に作せる身業を至心に發露して、應に過を悔いて說くべし。愼しみて覆藏すること莫れ、更に善く持し護れ。羅云、若し觀る時則ち我已に身業を作せり。彼の身業は已に過去に滅盡し變易しぬ。彼の身業は不淨なり、或は自らの爲に、或は他の爲に、善にして樂果を與へ、樂報を受けしむと知らば、羅云、汝當に晝夜に歡喜し、正念正智に住すべし。口業も亦復是の如し。羅云、過去の行に因るが故に已に意業を生ぜば即ち彼の意業を觀よ。若し過去の行に因るが故に已に意業を生ぜり。彼の意業、淨と爲すや、不淨と爲すや、自らの爲にし、他の爲に爲すやと。羅云、若し觀る時則ち過去の行に因るが故に已に意業を生ぜり。彼の意業は已に過去に滅盡し變易しぬ。彼の意業は淨なり、或は自らの爲に、或は他の爲に、不善にして苦果を與へ、苦報を受けしむと知らば、羅云、汝當に彼の過去の意業を捨つべし。羅云、若し觀る時則ち過去の行に因るが故に已に意業を生じ、已に過去に滅盡し變易しぬ。彼の意業は不淨なり、或は自らの爲に、或は他の爲に、善にして樂果を與へ、樂報を受けしむと知らば、羅云、汝當に彼の過去の意業を受くべし。羅云、未來の行に因るが故に當に意業を生ずべくば、即ち彼の意業を觀よ。若し未來の行に因るが故に當に意業を生ずべくば、彼の意業、淨と爲すや、不淨と爲すや、自らの爲にするや、他の爲にするやと。羅云、若し觀る時則ち未來の行に因るが故に當に意業を生ずべくば、彼の意業は淨なり、或は自らの爲に、或は他の爲に、不善にして苦果を與へ、苦報を受けしむと知らば、羅云、汝當に彼の未來の意業を捨つべし。羅云、觀る時則ち未來の

知り已りて妄言し、羞ぢず、悔いず、無慚無愧なれば、羅云よ、我、彼も亦惡として作さゞる無しと説く。この故に羅云よ、當にこの學を作すべし。戲笑妄言するを得ざれ。是に於て世尊即ち頌を説きて曰はく、

【七】人一法を犯す、謂く妄言是なり　後世を畏れざれば、惡として作さゞる無し。　【八】寧ろ鐵丸のその熱、火の如きを噉ふも、　犯戒を以て、世の信施を受けず。　若し苦を畏れて、愛念せざれば、隱顯處に於て、惡業を作すこと莫れ。　若し不善業を、已に作し、今作さば、　終に脱るゝことを得ず、亦避くる處無けん。

佛頌を説き已りて、また羅云に問ひたまひぬ、『意に於て云何。人、鏡を用ひて「何をか」爲すや』。尊者羅云答へて曰く『世尊、その面を觀て、淨不淨を見んと欲するなり。』『是の如く羅云、若し汝將に身業を作さんとせば即ち彼の身業を觀よ、我將に身業を作さんとす。彼の身業、淨と爲すや不淨と爲すや、自らの爲にし、他の爲にするやと。羅云、若し觀る時則ち我將に身業を作さんとす。彼の身業は淨なり、或は自らの爲に、或は他の爲に、不善にして苦果を與へ、苦報を受けしむと知らば、羅云、汝當に彼の將に作さんとするの身業を捨つべし、羅云、若し觀る時則ち我將に身業を作さんとす。彼の身業は不淨なり、或は自らの爲に、或は他の爲に、善にして樂果を與へ、樂報を受けしむと知らば、羅云、汝當に彼の將に作さんとするの身業を受くべし。羅云、若し汝現に身業を作さば、即ちこの身業を觀よ、若し我現に身業を作さば、この身業、淨と爲すや、不淨と爲すや、自らの爲に、他の爲に爲すやと。羅云、若し觀る時則ち我現に身業を作す。この身業は淨なり、或は自らの爲に、或は他の爲に、不善にして苦果を與へ、苦報を受けしむと知らば、羅云、汝當にこの現に作す身業を捨つべし。羅云、若し觀る時則ち我現に身業を作す。この身業は不淨なり、或は自らの爲に、或は他の爲に、善にして樂果を與へ、樂報を受けしむと知らば、羅云、汝當

【七】巴利文『法句經』一七六「唯一の法を超え、妄語を吐く人、來世を等閑に思へるものは罪として犯さざるなし。」

【八】巴利文『法句經』三〇八「戒を破り自制心なくして信施を受くるよりは熱して火焔に似たる鐵丸を噉むぞ勝れる。」

て、問ひて曰はく『羅云、汝また我少水の器を取りて盡く瀉棄せるを見るや』。羅云答へて曰く『見るなり、世尊』。佛羅云に告げたまはく『我彼の道盡く棄つと說くこと亦復是の如し。謂く、知り已りて妄言し、羞ぢず、悔いず、無慚無愧なり。羅云よ、彼も亦惡として作さゞる無し。この故に羅云よ、當にこの學を作すべし。戲笑妄言するを得ざれ』。(3)世尊またこの空の水器を取り、地に覆著し已りて、問ひて曰はく『羅云、汝また我空の水器を取りて地に覆著せるを見るや』。羅云、答へて曰く『見るなり、世尊』。佛羅云に告げたまはく『我彼の道覆ると說くこと亦復是の如し。謂く、知り已りて妄言し、羞ぢず、悔いず、無慚無愧なり。羅云よ、彼も亦惡として作さゞる無し。この故に羅云よ、當にこの學を作すべし。戲笑妄言するを得ざれ』。(4)世尊またこの覆れる水器を取り、發して仰むかしめ已りて、問ひて曰はく『羅云、汝また我覆れる水器を取りて發して仰むかしめしを見るや』。羅云答へて曰く『見るなり、世尊』。佛羅云に告げたまはく『我彼の道仰ぐと說くこと亦復是の如し。謂く、知り已りて妄言し、羞ぢず、悔いず、不慚不愧なり。羅云よ、彼も亦惡として作さゞる無し。この故に羅云よ、當にこの學を作すべし。戲笑妄言するを得ざれ。羅云よ、猶ほ、王に大象有りて、陣鬪に入る時の如し。[彼]前脚・後脚・尾・骼・脊・脇・項・額・耳・牙を用ひ、一切皆用ひて、唯鼻を護る。象師見已りて、すなはちこの念を作す。この王の大象猶ほ故らに命を惜しむ。所以者何。この王の大象陣鬪に入る時、前脚・後脚・尾・骼・脊・脇・項・額・耳・牙を用ひ、一切皆用ひて、唯鼻を護る。羅云よ、若し王の大象陣鬪に入る時、前脚・後脚・尾・骼・脊・脇・項・額・耳・牙・鼻を用ひ、一切盡く用ひば、象師見已りてすなはちこの念を作す。この王の大象また命を惜まず。所以者何。この王の大象陣鬪に入る時、前脚・後脚・尾・骼・脊・脇・項・額・耳・牙・鼻を用ひ、一切盡く用ふ。羅云よ、若し王の大象陣鬪に入る時、前脚・後脚・尾・骼・脊・脇・項・額・耳・牙・鼻を用ひ、一切盡く用ひば、羅云よ、我、この王の大象陣鬪に入る時、惡として作さゞる無しと說く。是の如く羅云よ、謂く、

れを苦の如眞を知るゝ謂ふ。云何が苦の習の如眞を知るや。謂く、この[一七]愛受・當來に樂欲有りて、共に倶に[一八]彼々の有を求む。これを苦の習の如眞を知ると謂ふ。云何が苦の滅の如眞を知るや。謂く、この愛受、當來に樂欲有りて、共に倶に彼々の有の斷じて餘無く、捨・吐・盡・無欲・滅・止沒を求む。是を苦の滅の如眞を知ると謂ふ。云何が苦滅の道の如眞を知るや。謂く、[二〇]八支の聖道あり。正見乃至正定、これを八と爲す。これを苦滅の道の如眞を知ると謂ふ。比丘當に[二一]苦の如眞を知るべく、當に苦の習を斷ずべく、當に苦滅の證を作すべく、當に苦滅の道を修すべし。若し比丘苦の如眞を知り、苦の習を斷じ、苦滅を作證し、苦滅の道を修すれば、これを比丘一切の漏盡き、諸の[二二]結已に解け、能く正智を以て而も苦際を得と謂ふ』。佛說是の如し。彼の諸の比丘、佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

十四、[一]羅云經第四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び、[二]竹林迦蘭哆園に住したまひぬ。その時[三]尊者羅云も亦王舍城[四]溫泉林中に遊びぬ。是に於て世尊夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持し、王舍城に入りて乞食を行じ、乞食已に竟りて、溫泉林の羅云の住處に至りたまひぬ。尊者羅云遙かに佛の來たまへるを見、卽ち往きて迎へ、佛の衣鉢を取り、爲に坐具を敷き、水を汲みて[五]足を洗ひぬ。佛、足を洗ひ已りて、羅云の座に坐したまひぬ。(1)是に於て世尊卽ち水器を取り、少水を瀉留し已りて、問ひて曰はく『羅云、汝今我この水器を取りて、少水を瀉留するを見るや』。羅云答へて曰く、『見るなり、世尊』佛羅云に告げたまはく『我彼の道少しと說くこと亦復是の如し。謂く、[六]知り已りて妄言し、羞ぢず、悔いず、無慚無愧なり。羅云よ、彼も亦惡として作さゞる無し。この故に羅云よ、當にこの學を作すべし。戲笑妄言するを得ざれ』(2)世尊またこの少き水器を取り、盡く瀉棄し已り

【一七】愛受(Taṇhā)

【一八】未來をいふ。

【一九】此處彼處に生れ出んことを求む、生有愛なり。

【二〇】八正道に就ては七卷「分別聖諦經」を見よ。

【二一】苦は知るべく、集(習)は斷ずべく、滅は證すべく、道は修すべし。

【二二】第一卷「木積喩經」の註を見よ。

【一】M. 61, Rāhulovādasuttanta

【二】竹林迦蘭哆園(Veḷuvana Kalandaka nivāpa)。竹林精舍と呼べるもの、迦蘭哆ニヷーパは栗鼠飼養所の意。

【三】尊者羅云(Āyasmant Rāhula)。羅睺羅尊者は佛在俗時代の兒、後出家して十大弟子の一人となれり。

【四】溫泉林中(Tapodārāma)。王舍城舊趾附近には今尙溫泉あり、古昔ここに精舍ありしか。

【五】佛の御足を羅睺羅が洗ひたるなり、素より長者に對するの禮なり。

【六】妄言を妄言なりと知りながら、故らに妄言を吐く。

なりと謂ふやと。彼答へて爾りと言はゞ、我また彼に語げん、若し是の如くならば、諸賢等皆これ殺生なり。所以者何。その一切皆無因無縁なるを以ての故なり。是の如く諸賢は皆これ不與取・邪婬・妄言乃至邪見なり。所以者何。その一切皆無因無縁なるを以ての故なり。諸賢、若し一切皆無因無縁なりと如眞に見ば、內因內の作と不作とに於て都て欲無く、方便無けん。諸賢、若し作と不作とに於て、如眞を知らざればすはなち正念を失ひ、正智無ければ則ち以て敎ふべき無し。沙門の法の如き、是の如く說かば乃ち理を以て彼の沙門梵志を伏すべし。我自ら知り、自ら覺る所の法、汝が爲に說かば、若しは沙門梵志、若しは天・魔・梵及び餘の世間、皆能く伏する無く、皆能く穢す無く、皆能く制する無し。云何が我自ら知り、自ら覺る所の法、汝が爲に說きて、沙門梵志、若しは天・魔・梵及び餘の世間の爲に能く伏せられ、能く穢され、能く制せらるゝに非ざるや。謂く、六處の法有り。我自ら知り、自ら覺る所にして、汝が爲に說きて、沙門梵志、若しは天・魔・梵及び餘の世間の爲に能く伏せられ、能く穢され、能く制せらるゝに非ざるなり。また六界の法有り。我自ら知り、自ら覺る所にして、汝が爲に說きて、沙門梵志、若しは天・魔・梵及び餘の世間の爲に能く伏せられ、能く穢され、能く制せらるゝに非ざるなり。云何が六處の法、我自ら知り、自ら覺る所にして、汝が爲に說くや。謂く眼處・耳・鼻・舌・身・意處なり。これを六處の法と謂ひ、我自ら知り、自ら覺る所にして、汝が爲に說くなり。云何が六界の法、我自ら知り、自ら覺る所にして、汝が爲に說くや。謂く、地界・水・火・風・空・識界なり。これを六界の法と謂ひ、我自ら知り、自ら覺る所にして、汝が爲に說くなり。六界合するを以ての故にすなはち母胎より生ず。六界に因りてすなはち六處有り、六處に因りてすなはち[一一]更樂有り。更樂に因りてすなはち[一二]覺有り。比丘若し覺有ればすなはち苦の如眞を知り、苦の習を知り、苦の滅を知り、苦滅の道の如眞を知る。云何が苦の如眞を知るや。謂く生苦・老苦・病苦・死苦・[一三]怨憎會苦・[一四]愛別離苦・[一五]所求不得苦・略して[一六]五盛陰の苦なり。こ

【一一】更樂(Phassa)。觸。
【一二】覺(Vedanā)。受。
【一三】怨み憎めるものと合會するの苦。以下四苦に就ては十卷「分別聖諦經」を見よ。
【一四】愛せるものと別れ離るるの苦。
【一五】求むる所のものを得ざるの苦。
【一六】略して約めて言へば、この五蘊身の存在するが故に受くるの苦、五蘊盛苦、五陰苦、五取蘊苦とも云ふ。

見、是の如く說き、人の所爲は一切皆[四]尊祐の造に因ると謂ふ。また、沙門梵志有り、是の如く見、是の如く說き、人の所爲は一切皆[五]無因無緣なりと謂ふ。(1)中に於て、若し沙門梵志有りて是の如く見、是の如く說き、人の所爲は、一切皆宿命の造に因ると謂はゞ、我すなはち彼に往き、到り已りて卽ち問はん、諸賢、實に是の如く見、是の如く說き、人の所爲は一切皆宿命の造に因ると謂ふや」と。彼答へて爾りと言はゞ、我また彼に語げん、若し是の如くならば、[六]諸賢等皆これ殺生なり。所以者何。その一切皆宿命の造に因るを以ての故なり。是の如く諸賢は皆これ[七]不與取、[八]邪婬、妄言[九]乃至邪見なり。所以者何。その一切は皆宿命の造に因るを以ての故なり。諸賢、若し一切皆宿命の造に因ると如眞に見ば、[一〇]內因內の作と不作とに於て都て欲無く、方便無けん。諸賢、若し作と不作とに於て、如眞を知らざればすなはち正念を失ひ、正智無ければ則ち以て教ふべき無し。沙門の法の如き、是の如く說かば乃ち理を以て彼の沙門梵志を伏すべし。(2)中に於て、若し沙門梵志有りて、是の如く見、是の如く說き、人の所爲は一切皆尊祐の造に因ると謂はゞ、我すなはち彼に往き、到り已りて卽ち問はん、諸賢、實に是の如く見、是の如く說き、人の所爲は一切皆尊祐の造に因ると謂ふやと。彼答へて爾りと言はゞ、我また彼に語げん、若し是の如くならば、諸賢等皆これ殺生なり。所以者何。その一切皆尊祐の造に因るを以ての故なり。是の如く諸賢は皆これ不與取、邪婬、妄言乃至邪見なり。所以者何。その一切皆尊祐の造に因るを以ての故なり。諸賢、若し一切皆尊祐の造に因ると如眞に見ば、內因內の作と不作とに於て都て欲無く、方便無けん。諸賢、若し作と不作とに於て、如眞を知らざればすなはち正念を失ひ、正智無ければ則ち以て教ふべき無し。沙門の法の如き、是の如く說かば乃ち理を以て彼の沙門梵志を伏すべし。(3)中に於て、若し沙門梵志有りて、是の如く見、是の如く說き、人の所爲は一切皆無因無緣なりと謂はゞ、我すなはち彼に往き、到り已りて卽ち問はん、諸賢、實に是の如く見、是の如く說き、人の所爲は一切皆無因無緣

【四】尊祐（Issara-nimmāna-hetu）。
【五】無因無緣（Ahetu-appaccaya）。
【六】諸君自身は殺生せじと思ひても、宿世の因緣に押されて止まれず、殺生するに至るならん。
【七】與へられざるを取るの意、偸盜と同じ。
【八】欲邪行、諸欲に於て邪に縱に行ふの意。
【九】十惡を擧げんとして中間なる惡口・兩舌・綺語・貪・瞋の五を省略したるなり。
【一〇】宿世に作したる因を本質的に追へるものは自身作すべきことを作さん、作すべからざることを作さざらんといふ欲望も起すまじく、努力もせまじ。

六善住處を得』。是に於て梵破世尊に白して曰く『瞿曇、我已に知る。善逝我已に解す。瞿曇、猶ほ明目の人、覆へれるは之を仰むけ、覆はれたるは之を發き、迷者に道を示し、暗中に明を施すが如し。若し眼あるものはすなはち色を見んとて。沙門瞿曇も亦復是の如し。我が爲に無量の方便もて法を說き義を現すに、その諸の道に隨ふ。世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて[一七]優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん。世尊、猶ほ人有りて不良の馬を養ひてその利を得んと望み、徒らに自ら疲勞して而も利を獲ざるが如し。世尊、我も亦是の如くなりき。彼の愚癡なる尼乾、善く曉了せず、解知する能はず、[一八]良田を識らず而も自ら審かにせざるを長夜に奉敬し、供養し禮事してその利を得んと望み、唐しく苦しみて益無かりき。世尊、我今再び自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん。世尊、我本無知にして愚癡なる尼乾に於て信有り敬有りしも、今日より斷たん。所以者何。我を欺誑するが故なり。世尊、我今三たび自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん。』佛說是の如し。釋梵破及び諸の比丘、佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

十三、[一]度經第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『[二]三度處有り、姓を異にし、名を異にし、宗を異にし說を異にす。謂く有慧者善く受け、極持して而も他の爲に說き、然も利を獲ず。云何が三と爲す。或は沙門梵志有り、是の如く見、是の如く說き、人の所爲は一切皆[三]宿命の造に因ると謂ふ。また、沙門梵志有り、是の如く

【一七】優婆塞(Upāsaka)在家の佛弟子。

【一八】善良なる福田、卽ち福業を植付くるの田地の善良なるもの、ここにては三寶を意味す。

【一】A. i. 173; cf. A. i 249-53

【二】教派の據となれるもの、これに三種あるなり。

【三】宿命の造(Pubbe katahetu)。

見ず』。世尊歎じて曰はく『善き哉、惒破。云何が惒破、若し比丘有りて無明已に盡き、明已に生ず、彼の無明已に盡き、明已に生ず。〔一二〕後身覺を生じてすなはち後身覺を生ぜりと知り、〔一三〕後命覺を生じてすなはち後命覺を生ぜりと知る。身壞れ命終り壽已に畢り訖れば即ち現世に於て一切の所覺便ち盡く止息し、當に知るべし、竟に冷やかなるに至る。猶ほ惒破、樹に因りて影有るが如し。若し人有りて利斧を持ち來りて彼の樹根を斫り、段々に斬り截破して十分と爲し、或は百分と爲し、火に燒きて灰と成し、或は大風吹き、或は水中に著かしむ。惒破の意に於て云何。影は樹に因りて有り。彼の影これに從ひて已に絕ゆ。その因滅して生ぜざるや』。惒破答へて曰く『是の如し瞿曇』。『惒破、當に知るべし。比丘も亦復是の如し。無明已に盡き、明已に生ず。彼の無明已に盡き、明已に生ず。後身覺を生じてすなはち後身覺を生ぜりと知り、後命覺を生じてすなはち後命覺を生ぜりと知り、身壞れ命終り、壽已に畢り訖りて卽ち現世に於て一切の所覺すなはち盡く止息し、當に知るべし、竟に冷やかなるに至る。惒破、比丘是の如く〔一四〕正心解脫してすなはち〔一五〕六善住處を得。云何が六と爲す。惒破、比丘眼に色を見て喜ばず憂へず、〔一六〕求を捨て無爲にして正念正智なり。惒破、比丘是の如く正心解脫す。是を第一善住處を得と謂ふ。是の如く耳・鼻・舌・身［も亦然り］。意に法を知りて喜ばず憂へず、求を捨て無爲にして正念正智なり。惒破、比丘是の如く正心解脫す。是を第六善住處を得と謂ふ。惒破、比丘是の如く正心解脫して、この六善住處を得』。惒破白して曰く『是の如し、瞿曇、多聞の聖弟子は是の如く正心解脫し六善住處を得。云何が六と爲す。瞿曇、多聞の聖弟子眼に色を見て喜ばず憂へず、求を捨て無爲にして正念正智なり瞿曇、多聞の聖弟子、是の如く正心解脫す。是を第一善住處を得と謂ふ。是の如く耳・鼻・舌・身［も亦然り］。意に法を知りて喜ばず憂へず、求を捨て無爲にして正念正智なり。是の如く瞿曇、多聞の聖弟子、是の如く、正心解脫す。是を第六善住處を得と謂ふ。是の如く瞿曇、多聞の聖弟子、是の如く正心解脫しこの

〔一二〕 身を極とせる、身を限度とせる覺の意にて、五根、肉體の感覺。

〔一三〕 命を極とせる、命を限度とせる覺の意にて、意根を指す。

〔一四〕 正心解脫（Sammāvimuttacitta）十分に心解脫を得たる。

〔一五〕 六善住處（Cha satatavihārā）平等平靜にして變化なき生活狀態。

〔一六〕 求を捨て（Upekkhaka）單に「捨」といふだけにて可、卽ち不喜不憂の心理狀態をいふ。

至り、共に相問訊し、却きて一面に坐しぬ。我問ひしこと是の如し。想破の意に於て云何。若し比丘身・口・意に護る有れば、汝頗るこの處り[即ち]これに因りて不善漏を生じ、後世に至らしむるを見るやと。尼乾の弟子なる釋想破即ち我に答へて言はく、若し比丘身・口・意に護る有れば、我この處り[即ち]これに因りて不善漏を生じ、後世に至らしむるを見る。大目乾連、若し前世に不善行を行ふ有ればこれに因りて不善漏を生じ、後世に至らしむと。世尊、向に尼乾の弟子なる釋想破と共に論ぜしこと是の如し。この事を以ての故に講堂に集まり坐しぬ』。是に於て世尊、尼乾の弟子なる釋想破に語げて曰はく『若し我が說く所是ならば汝當に是なりと言ふべく、若し是ならずば當に是ならずと言ふべし。汝疑ふ所有らばすなはち我に問ふべし。沙門瞿曇、これに何事か有り、これに何の義か有るやと。我が說く所に隨ひて汝若し能く受くれば、我汝と共にこの事を論ずべし』。想破答へて曰く『沙門瞿曇、若し說く所是なれば我當に是なりと言ふべく、若し是ならずば當に是ならずと言ふべし。我若し疑有れば當に瞿曇に問ふべし、瞿曇、これに何事か有り、これに何の義か有るやと。沙門瞿曇の說く所に隨ひて我則ち受持せん。沙門瞿曇、但當に我と共にこの事を論ずべし』。世尊問ひて曰はく『想破の意に於て云何。若し比丘不善身行の漏・煩熱・憂慼を生ずる有れば、彼、後時に於て不善身行滅して、更に新業を造らず、故業を棄捨し、即ち現世に於てすなはち究竟するを得て而も煩熱無く、常住不變にして聖慧の所見、聖慧の所知と謂ふ。身に不善を生じ、口に不善を行じ、意に不善を行じ、無明行の漏・煩熱・憂慼あれば、彼は後時に於て不善の無明行滅して、更に新業を造らず、故業を棄捨し、即ち現世に於てすなはち究竟するを得て而も煩熱無く、常住不變にして、聖慧の所見、聖慧の所知と謂ふ。云何が想破、是の如く比丘身・口・意に護る[ある]も汝頗るこの處り[即ち]これに因りて不善漏を生じ、後世に至らしむるを見るや』。想破答へて曰く『瞿曇、若し比丘是の如く身・口・意に護る有れば、我この處り[即ち]これに因りて不善漏を生じ、後世に至らしむるを

利文は「こゝに身を護り、語意を護り、無明より離れ、明を生ずることより、それを因緣として苦[果]を感ずべき諸漏(即ち煩惱)の未來世にその人に起るといふ理由を汝は見ざるや」なり。

【一〇】 閑靜な箇所にありて獨坐冥想するをいふ。

【一一】 天耳通の普通人間の耳根即ち聽覺に勝れたるもの。

萬も亦主の爲に縛せられずと謂ふ。是の如く人有り不善業を作せば必ず苦果現法の報を受く。云何が人有りて不善業を作せば必ず苦果現法の報を受くるや。謂く、一人有り、身を修し、戒を修し、心を修し、慧を修し、壽命極めて長し。是を人有りて不善業を作せば必ず苦果現法の報を受くと謂ふ。彼は[九]現法に於て設し善惡業の報を受くるも而も輕微なり』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

十二、[一]惒破經第二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]釋羇瘦、[三]迦維羅衛に遊び、[四]尼拘類園に在しぬ。その時尊者[五]大目乾連は比丘衆と倶に中食後に於て、所爲有るが故に講堂に集まり坐しぬ。この時[六]尼乾の一弟子なる釋種有り。名づけて[七]惒破と曰ふ。中後彷徉して尊者大目乾連の所に至り共に相[八]問訊し、却きて一面に坐しぬ。是に於て尊者大目乾連は此の如き事を問ひぬ『惒破の意に於て云何。[九]若し比丘身・口・意に護る有れば、汝頗るこの處り「即ち」、これに因りて不善漏を生じ、後世に至らしむるを見るや』。惒破答へて曰く『大目乾連、若し比丘身・口・意に護る有れば、我この處り「即ち」これに因りて不善漏を生じ、後世に至らしむるを見る。大目乾連、若し前世に不善行を行ふ有れば、これに因りて不善漏を生じ、後世に至らしむ』。[一〇]後時世尊靜處に宴坐し、淨き天耳の人「耳」を出過せるを以て、尊者大目乾連、尼乾の弟子釋惒破と共に是の如きことを論ずるを聞きたまひぬ。世尊聞き已りて則ち晡時に於て宴坐より起ちて講堂に往詣し、比丘衆の前に座を敷きて坐したまひぬ。世尊、坐し已りて問ひて曰はく『目乾連、向に尼乾の弟子なる釋惒破と共に何事をか論じ、また何事を以て講堂に集まり坐するや』。尊者大目乾連白して曰く『世尊、我今日比丘衆と倶に中食後に於て、所爲有るが故に講堂に集まり坐しぬ。この尼乾の弟子なる釋惒破、中後に彷徉して我が所に來り

【九】 第二卷「善人往經」註を見よ。

【一】 A. ii. 196

【二】 釋羇瘦(Sakkesu)。釋迦族の間に、釋迦族の國にの意、「瘦」字は於格の複數を表はす語尾なり、「羇」或は「翅」に作る。

【三】 迦維羅衛 (Kapilavatthu)。

【四】 尼拘類園 (Nigrodhaārāma)。迦毘維城外に佛のために釋族のものの建てたる精舍ありたり。

【五】 大目乾連 (Mahāmoggallāyana)。摩訶目乾連尊者は舍利弗尊者と共に釋尊の二大弟子と算へられたり。

【六】 尼乾 (巴 Nigaṇṭha Nātaputta 梵 Nirgrantha Jñātiputra)。所謂六師外道の一にして、釋尊より少しく先に世に出たる摩訶毘羅の開創又は改革したるもの、今これを Jainism といふ。

【七】 惒破(Vappa)。

【八】 第二卷「七車經」註を見よ。

【九】 この一段に相當する巴

るを以ての故に竊む者を收縛し還りて奪ひて羊を取る。是を人有り他の羊を竊むと雖も主還りて奪取すと謂ふ。是の如く人有り不善業を作せば必ず苦果現法の報を受く。云何が人有り不善業を作せば必ず苦果現法の報を受くるや。謂く、一人有り、身を修し、戒を修し、心を修し、慧を修し、壽命極めて長し。是を人有り不善業を作せば必ず苦果現法の報を受くと謂ふ。(5)また次に人有り、不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受く。云何が人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受くるや。謂く、一人有り、身を修せず、戒を修せず、心を修せず、慧を修せず、壽命甚だ短し。是を人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受くと謂ふ。猶ほ人有りて他に五錢を負ひ、主の爲に縛せられ、乃至一錢も亦主の爲に縛せらるゝが如し。云何が人有り他に五錢を負ひ、主の爲に縛せられ、乃至一錢も亦主の爲に縛せらるゝや。謂く、負債の人は貧にして力勢無し。彼貧にして力無きが故に他に五錢を負ひ、主の爲に縛せられ、乃至一錢も亦主の爲に縛せらる。是を人有り他に五錢を負ひ、主の爲に縛せられ、乃至一錢も亦主の爲に縛せらると謂ふ。是の如く人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受く。云何が人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受くるや。謂く、一人有り、身を修せず、戒を修せず、心を修せず、慧を修せず、壽命甚だ短し。是を人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受くと謂ふ。(6)また次に人有り不善業を作せば必ず苦果現法の報を受く。云何が人有り、不善業を作せば必ず苦果現法の報を受くるや。謂く、一人有り、身を修し、戒を修し、心を修し、慧を修し、壽命極めて長し。是を人有り不善業を作せば必ず苦果現法の報を受くと謂ふ。猶ほ人有り百錢を負ふと雖も主の爲に縛せられず、乃至千萬も亦主の爲に縛せられざるが如し。云何が人有り百錢を負ふと雖も主の爲に縛せられず、乃至千萬も亦主の爲に縛せられざるや。謂く、負債の人產業無量にして極めて勢力有り。彼は是を以ての故に百錢を負ふと雖も主の爲に縛せられず、乃至千萬も亦主の爲に縛せられず。是を人有り百錢を負ふと雖も主の爲に縛せられず、乃至千

【八】恆河の水

せば必ず苦果現法の報を受くと謂ふ。猶ほ人有り一兩の鹽を以て恆水の中に投じて水をして鹹くして飲むを得べからざらしめんと欲するが如し。意に於て云何。この一兩の鹽能く恆水をして鹹くして飲み叵からしむるや』。答へて曰く『不なり、世尊』。『所以者何。恆水は甚だ多くして一兩の鹽は少し、この故に鹹くして飲み叵からしむること能はず。是の如く人有り不善業を作せば必ず苦果現法の報を受く。云何が人有り不善業を作せば必ず苦果現法の報を受くるや。謂く、一人有り、身を修し、戒を修し、心を修し、慧を修し、壽命極めて長し。是を人有り不善業を作せば必ず苦果現法の報を受くと謂ふ。(3)また次に人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受く。云何が人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受くるや。謂く、一人有り、身を修せず、戒を修せず、心を修せず、慧を修せず、壽命甚だ短し。是を人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受くと謂ふ。猶ほ人有り他の羊を奪取するが如し。云何が人有り他の羊を奪取するや。謂く、羊を奪ふ者は或は王[或は]王臣にして極めて威勢有り。彼の羊の主は貧賤にして無力なり。彼は無力を以ての故にすなはち種々に承望し、叉手求索してこの説を作す、尊者羊を還へさる可し。若しくは直を與へられよと。是を人有り他の羊を奪取すと謂ふ。是の如く人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受く。云何が人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受くるや。謂く、一人有り、身を修せず、戒を修せず、心を修せず、慧を修せず、壽命甚だ短し。是を人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受くと謂ふ。(4)また次に人有りて不善業を作せば必ず苦果現法の報を受く。云何が人有りて不善業を作せば必ず苦果現法の報を受くるや。謂く、一人有り、身を修し、戒を修し、心を修し、慧を修し、壽命極めて長し。是を人有り不善業を作せば必ず苦果現法の報を受くと謂ふ。猶ほ人有り他の羊を竊むと雖も主還りて奪取するが如し。云何が人有り他の羊を竊むと雖も主還りて奪取するや。謂く、羊を竊む者は貧賤にして勢無く、彼の羊の主は或は王[或は]王臣にして極めて威力有り。力有

巻の第三

業相應品第二（十經あり）

〔十經とは〕、鹽喩・惒破・度・羅云・思・伽藍・伽彌尼・尼乾・波羅牢〔これなり〕

十一、鹽喩經第一[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『人の[二]所作業に隨へば則ちその報を受く。是の如くなれば、梵行を行はず、盡苦を得ず。若しこの説を作さば、人の[四]所作業に隨へば則ちその報を受く。是の如くなれば、梵行を修行すればすなはち盡苦を得。所以者何。(1)若し人有りて不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受く。云何が人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受くるや。謂く、一人有り、身を修せず、戒を修せず、心を修せず、慧を修せず、[五]壽命甚だ短し。是を人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受くと謂ふ。猶ほ人有り一兩の鹽を以て少水の中に投じ、水をして鹹くして飲むを得べからざらしめんと欲するが如し。意に於て云何。この一兩の鹽能く少水をして鹹くして飲み叵からしむるや』。答へて曰く『是の如し、世尊』。『所以者何。鹽多く水少し、この故に能く鹹くして飲むべからざらしむ。是の如く人有り不善業を作せば必ず苦界地獄の報を受く。云何が人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受くるや。謂く、一人有り、身を修せず、戒を修せず、心を修せず、慧を修せず、壽命甚だ短し。是を人有り不善業を作せば必ず苦果地獄の報を受くと謂ふ。(2)また次に人有り不善業を作せば必ず[六]苦果現法の報を受く。云何が人有り不善業を作せば必ず苦果現法の報を受くるや。謂く、一人有り、身を修し、戒を修し、心を修し、慧を修し、[七]壽命極めて長し。是を人有り不善業を作

【一】A. i. 249; cf. A. i. 173.

【二】人はその作せる業Kamma に隨ひて、それぞれ果報を受くるものなりの意。

【三】梵行を行ふことも無意味の事なるべく、苦惱を盡すことも有り得べからざる事なるべし。

【四】果報を受くべき業(Vedanīya kamma)を作せば人はそれぞれその作したる所に隨ひて果報を受くるものなりの意。

【五】壽命極めて短し(Appadukkhavihārī)。少しの惡業によりて苦しき生活をなすもの。

【六】現在この世にありて苦惱の果報に逢ふ。

【七】壽命極めて長し(Appamāṇavihārī)。無量住者の意、慈・悲・喜・捨の四無量心を修して日を送るものをいふ。

が故に、安隱無病の故なり、若し用ひざれば則ち煩惱憂慼を生じ、用ふれば則ち煩惱憂慼を生ぜず。これをある漏は用に從りて斷ずといふ。(5)云何がある漏は[一九]忍に從りて斷ずるや。比丘精進して惡不善を斷じ善法を修するが故に、常に起想あり、專心精勤にして、身體・皮肉・筋骨・血髓をして皆乾竭せしめ、精進を捨てず、要ず所求を得て乃ち精進を捨つ。比丘復當に飢渴・寒熱・蚊虻蠅蚤虱を堪忍すべく、風日に逼られ、惡聲捶杖亦能くこれを忍び、身諸病に遇ひ極めて苦痛たり、命絶えんと欲するに至る、諸の不可樂皆能く堪忍す。若し忍ばざれば則ち煩惱憂慼を生じ、忍べば則ち煩惱憂慼を生ぜず。これをある漏は忍に從りて斷ずといふ。(6)云何がある漏は[二〇]除に從りて斷ずるや。比丘[二一]欲念を生じて除斷捨離せず、恚念・害念を生じて除斷捨離せず、若し除かざれば則ち煩惱憂慼を生じ、除けば則ち煩惱憂慼を生ぜず。これをある漏は除に從りて斷ずといふ。(7)云何がある漏は[二二]思惟に從りて斷ずるや。比丘初念覺支を思惟し、離に依り無欲に依り滅盡に依り趣かに[二三]出要に至る。法・精進・喜・息・定[亦然り]。第七捨覺支を思惟し、離に依り無欲に依り滅盡に依り趣かに出要に至る。若し思惟せざれば則ち煩惱憂慼を生じ、思惟すれば則ち煩惱憂慼を生ぜず。これをある漏は思惟に從りて斷ずといふ。若し比丘をしてある漏の見に從りて斷ずるは則ち見を以て斷じ、ある漏の護に從りて斷ずるは則ち護を以て斷じ、ある漏の離に從りて斷ずるは則ち離を以て斷じ、ある漏の用に從りて斷ずるは則ち用を以て斷じ、ある漏の忍に從りて斷ずるは則ち忍を以て斷じ、ある漏の除を以て斷ずるは則ち除を以て斷じ、ある漏の思惟に從りて斷ずるは則ち思惟を以て斷ぜば、これを比丘、一切の漏盡き、諸の結已に解け、能く正智を以て苦際を得といふ』。佛說是の如し、彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第二

[一九] 忍(Adhivāsana)。

[二〇] 除(Vinodhana)。

[二一] Kāmavitakka, vyāpādavitakka, vihiṁsavitakka

[二二] 思惟(Bhāvanā)。

[二三] 生死を出離すること。

疑の三結盡き已りて、須陀洹を得、惡法に墮せず、定んで正覺に趣き、極めて七有を受く。天上人間に七たび往來し已りてすなはち苦際を得。若し知見せざれば則ち煩惱憂慼を生じ、知見すれば則ち煩惱憂慼を生ぜず。これをある漏は見に從りて斷ずといふ。(2)云何がある漏は〔一六〕護に從りて斷ずるや。比丘眼に色を見、眼根を護るは正思惟不淨觀を以てするなり。眼根を護らざるは不正に思惟し淨觀を以てするなり。若し護らざれば則ち煩惱憂慼を生じ、護れば則ち煩惱憂慼を生ぜず。是の如く耳・鼻・舌・身〔然り〕。意に法を知り、意根を護るは正思惟不淨觀を以てするなり、意根を護らざるは不正に思惟し淨觀を以てするなり。若し護らざれば則ち煩惱憂慼を生じ、護れば則ち煩惱憂慼を生ぜず。これをある漏は護に從りて斷ずといふ。(3)云何がある漏は〔一七〕離に從りて斷ずるや。比丘惡象を見れば則ち當に惡馬惡牛・惡狗惡蛇・惡道溝坑・屏厠江河・深泉山巖・惡知識惡朋友・惡異道惡閭里惡居止を遠離すべし。若し諸の梵行〔者〕それと同處し、〔人〕疑なきもの疑あらしめば比丘たる者當に惡知識惡朋友、惡異道惡閭里惡居止を離るべし。若し諸の梵行〔者〕それと同處し、〔人〕疑なきもの疑あらしめば、盡く當に遠離すべし。若し離れざれば則ち煩惱憂慼を生じ、離るれば則ち煩惱憂慼を生ぜず。これをある漏は離に從りて斷ずといふ。(4)云何がある漏は〔一八〕用に從りて斷ずるや。比丘若し衣服を用ひば利のための故に非ず、貢高を以ての故に非ず、嚴飾のための故に非ず、但蚊虻・風雨・寒熱のための故に、慚愧を以ての故なり。若し飲食を用ひば利のための故に非ず、貢高を以ての故に非ず、肥悅のための故に非ず、但身をして久しく住し、煩惱憂慼を除かしめんがための故に、梵行を行ずるを以ての故に、故病斷じ、新病生ぜざらしめんと欲するが故に、久住安隱無病の故なり。若し居止・房舍・床褥・臥具を用ひば、利のための故に非ず、貢高を以ての故に非ず、嚴飾のための故に非ず、但疲惓に止息を得んがための故に、靜坐を得るが故なり。若し湯藥を用ひば利のための故に非ず、貢高を以ての故に非ず、肥悅のための故に非ず、但病惱を除かんがための故に、命根を攝御する

〔一六〕 護(Saṁvara)。

〔一七〕 離(Parivajjana)。

〔一八〕 用(Paṭisevana)。

廣がる。正しく思惟すれば未生の欲漏は而も生ぜず、已生[の欲漏]はすなはち滅す。未生の有漏・無明漏は而も生ぜず、已生[の有漏・無明漏]はすなはち滅す。如眞の法を知り已りて、念ずべからざる法は念ぜず、念ずべき法はすなはち念ず。念ずべからざる法は念ぜず、念ずべき法はすなはち念ずるが故に、未生の欲漏は而も生ぜず、已生[の欲漏]はすなはち滅す。未生の有漏・無明漏は而も生ぜず、已生[の有漏・無明漏]はすなはち滅す。七の[六]斷漏煩惱憂感の法あり、云何が七となす。ある漏は見に從りて斷じ、ある漏は護に從りて斷じ、ある漏は離に從りて斷じ、ある漏は用に從りて斷じ、ある漏は忍に從りて斷じ、ある漏は除に從りて斷じ、ある漏は思惟によりて斷ず。(1)云何がある漏は[七]見に從りて斷ずるや。凡夫愚人正法を聞くを得ず、眞知識に値はず、聖法を知らず、聖法に[己を]調御せず、如眞の法を知らず、不正に思惟するが故に、すなはちこの念を作す、我に過去世ありしや、我に過去世なかりしや、我何に因りて過去世[ありし]や、我云何が過去世[ありし]や。我に未來世ありや、我に未來世なきや、我何に因りて未來世[あり]や、我云何が未來世[あり]や。自ら疑ふ、己身を何と謂ひ、是は云何が是なるや。今この衆生何所より來り、當に何所に至るべき。本何によりてか有り、當に何に因りて有るべき。彼是の如く不正に思惟をなし、六見中に於て、その見生ずるに隨ひて[八]眞有神を生ず。この見生じて[九]眞無神を生じ、この見生じて[一〇]神見神を生じ、この見生じて[一一]神見非神を生じ、この見生じて[一二]非神見神を生じ、この見生じてこれこの[一三]神を生ず、[この神]能く語り能く知り能く[一四]作し、作起せしめ起生せしめ、彼彼の處に善惡の報を受け、定んで從來する所なく、定んで有らず、定んで有るべからず。これを見の弊と謂ひ、見のため動かされ見結に繫がる。凡夫愚人是を以ての故にすなはち生・老・病・死の苦を受く。多聞の聖弟子正法を聞くを得、眞知識に値ひ、聖法に[己を]調御し、如眞の法を知り、苦の如眞を知り、苦の習を知り、苦の滅を知り、苦滅の道の如眞を知る。是の如く如眞を知り已れば則ち[一五]三結盡く。身見・戒取[見]・

【六】　煩惱憂感を斷ずる法に七種ありの意。
【七】　見(Dassana)。
【八】　眞有神(Atthi me attā)「吾に我あり」といふ意見。
【九】　眞無神　(Natthi me attā)「吾に我なし」といふ意見。
【一〇】　神見神(Attanā va attānaṁ sañjānāti)「我によりて我を知る」といふ意見。
【一一】　神見非神　(Attanā va anattānaṁ sañjānāti)「我によりて無我を知る」といふ意見。
【一二】　非神見神　(Anattā va attānaṁ sañjānāti)「無我によりて我を知る」といふ意見。
【一三】　第六見の巴利文至つて長し、よりて譯文のみを次註に擧ぐ。
【一四】　この一段意味不明瞭、且つ誤譯あるが如し、增一阿含にては「我は卽ち是れ、今世亦後世常に世に存し、而も朽敗せず亦變易せず、復移動せず。」巴利文にては「吾がこの語り知り此處彼處に善惡業の果報を受くる我、これこの我は常住堅固永恒不變の法にして天地と同じくこのまゝ存立せん」
【一五】　「水喩經」註を見よ。

隨時往いて見、隨時禮拜せん』。是の如く二賢更に相稱說し更に相讃善し已りて歡喜奉行し、即ち座より起ちて各所止に還りぬ。

十、漏盡經第十

我が聞きしこと是の如し。ある時佛拘樓瘦[一][二]に遊び、劍磨瑟曇[三][といふ]拘樓の都邑に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『知を以て見を以ての故に諸漏盡ることを得、不知に非ず不見に非ざるなり。云何が知を以て見を以ての故に諸漏盡ることを得るや。正思惟[四]と不正思惟とあり、若し不正に思惟すれば未生の[五]欲漏は而も生じ、已生[の欲漏]はすなはち增す廣がる。未生の有漏・無明漏は而も生じ、已生[の欲漏・無明漏]はすなはち增す廣がる。若し正しく思惟すれば未生の欲漏は而も生ぜず、已生[の欲漏]はすなはち滅す。未生の有漏・無明漏は而も生ぜず、已生[の有漏・無明漏]はすなはち滅す。然るに凡夫愚人は正法を聞かず、眞知識に値はず、聖法を知らず、聖法に[己を]調御せず、如眞の法を知らず。不正に思惟すれば未生の欲漏は而も生じ、已生[の欲漏]はすなはち增す廣がる。未生の有漏・無明漏は而も生じ、已生[の有漏・無明漏]はすなはち增す廣がる。正しく思惟すれば未生の欲漏は而も生ぜず、已生[の欲漏]はすなはち滅す。未生の有漏・無明漏は而も生ぜず、已生[の有漏・無明漏]はすなはち滅す。如眞の法を知らざるが故に法を念ずべからずして而も念じ、法を念ずべくして而も念ぜず。法を念ずべからずして而も念じ、法を念ずべくして而も念ぜざるが故に、未生の欲漏は而も生じ、已生[の欲漏]はすなはち增す廣がる。未生の有漏・無明漏は而も生じ、已生[の有漏無明漏]はすなはち增す廣がる。多聞の聖弟子は正法を聞くことを得、眞知識に値ひ、聖法に[己を]調御し、如眞の法を知る。不正に思惟すれば未生の欲漏は而も生じ、已生[の欲漏]はすなはち增す廣がる。未生の有漏・無明漏は而も生じ、已生[の有漏・無明漏]はすなはち增す

【一】 M. 2, Sabbāsava sutta 『增一阿含』四〇品の六。
【二】 拘樓瘦(Kuru)國、更に適切にいへばクル人の國、瘦は文法上於格複數の語尾。
【三】 劍磨瑟曇。Kammāssa-dhamma と名くる拘樓人の邑。
【四】 正思惟(Yoniso Manasikāra)。正しく思量し分別することにして不正思惟(Ayoniso manasikāra) は不正に思惟分別することとなり。
【五】 欲漏 (Kāmāsava)。 有漏 (bhavāsava)。 無明漏 (avijjāsava)。 第一巻第四經「水喩經」參照。

斯匿群臣の所問に答對すること是の如くなりき。是の如く賢者、戒淨を以ての故に心淨を得、心淨を以ての故に見淨を得、見淨を以ての故に疑蓋淨を得、疑蓋淨を以ての故に道非道知見淨を得、道非道知見淨を以ての故に道跡知見淨を得、道跡知見淨を以ての故に道跡斷智淨を得、道跡斷智淨を以ての故に世尊無餘涅槃を施設す』。是に於て尊者舍梨子尊者滿慈子に問ふ『賢者、何等と名け、諸［三一］梵行人は云何が賢者を稱するや』。尊者滿慈子答へて曰く『賢者、我［三二］滿と號し、我が母を［三三］慈と名くるが故に、諸の梵行人我を稱して滿慈子となす』。尊者舍梨子［三四］歎じて曰く『善き哉、善き哉、賢者滿慈子、如來の弟子となりて所作智辯聰明決定し、安隱無畏調御を成就し、大辯才に逮り、甘露幢を得、甘露界に於て自ら作證し成就して遊ぶ。以て賢者に問ふに、甚深の義盡く能く報ずるが故に、賢者滿慈子、諸梵行人大利を得るとなす、賢者滿慈子に値ふを得、隨時往いて見、隨時禮拜す。我今亦大利を得、隨時往いて見、隨時禮拜せん。諸の梵行人應當に衣を頂上に紮ひ賢者滿慈子を戴くべし、大利を得んがために。我今亦大利を得、隨時往いて見、隨時禮拜せん』。尊者滿慈子尊者舍梨子に問ふ『賢者、何等と名け、諸の梵行人は云何が賢者を稱するや』。尊者舍梨子答へて曰く『賢者、我が字は［三五］優波鞮舍にして、我が母を［三六］舍梨と名くるが故に、諸の梵行人我を稱して舍利子となす』。尊者滿慈子歎じて曰く『我今世尊の弟子と共に論じて知らず、第二［三七］尊と共に論じて知らず、［三八］法將と共に論じて知らず、［三九］轉法輪復轉の弟子と共に論じて知らず、若し我尊者舍梨子を知らば一句も答ふる能はじ。況んや復爾の深く論ずる所をや。善き哉、善き哉、尊者舍梨子、如來の弟子となりて所作智辯聰明決定し、安隱無畏調御を成就し、大辯才に逮り、甘露幢を得、甘露界に於て自ら作證し成就して遊ぶ。尊者甚深甚深の問を以ての故に、諸の梵行人大利を得るとなす。尊者舍梨子に値ふを得、隨時往いて見、隨時禮拜す。我今亦大利を得、隨時往いて見、隨時禮拜せん。諸の梵行人應當に衣を頂上に紮ひ、尊者舍梨子を戴くべし、大利を得んがために。我今亦大利を得、

［三一］同じく梵行を修行せる人たち即ち同行者たちは賢者を何といふ名前にて呼ぶや。
［三二］即ち富樓那(Punna)。
［三三］彌多羅尼(Mantani)。
［三四］この長き問答の間その對手は平生景慕したる富樓那尊者なることを知らず、是に至りて初めて知りたるなり。
［三五］優波鞮舍(Upatissa 梵 Upatisya)。
［三六］舍梨(巴Sāri 梵 Śāri)。
［三七］世尊の次位に立つべき人。
［三八］法將 (Dhammasenāpati)。舍梨子の異稱。
［三九］世尊の轉ぜられたる法輪を再び轉ずる弟子の意。これも舍梨子の異稱。

を以ての故に道跡知見淨を得、道跡知見淨を以ての故に道跡斷智淨を得、道跡斷智淨を以ての故に世尊沙門瞿曇は無餘涅槃を施設するなり。賢者、復聽け、昔拘薩羅王[二六]波斯匿、舍衛國に在りしが[二七]娑雞帝に於て事ありき。彼この念を作さく、何の方便を以て一日行にして舍衛國より娑雞帝に至らしめんやと。復この念を作さく、我今寧ろ舍衛國より娑雞帝に至り、その中間に於て七車を布置すべしと。その時卽ち舍衛國より娑雞帝に至り、その中間に於て七車を布置しぬ。七車を布き已りて舍衛國より出で、初車に至り、初車に乘りて第二車に至り初車を捨てぬ。第二車に乘りて第三車に至り第二車を捨てぬ。第三車に乘りて第四車に至り第三車を捨てぬ。第四車に乘りて第五車に至り第四車を捨てぬ。第五車に乘りて第六車に至り第五車を捨てぬ。第六車に乘りて第七車に至り[二八]第六車を捨てぬ。第七車に乘り一日中に於て娑雞帝に至りぬ。彼娑雞帝に於てその事を辨じ已り、大臣に圍繞せられて王の正殿に坐しぬ。群臣白して曰く云何天王、一日行を以て舍衛國より娑雞帝に至るや。王の曰く、是の如し。云何天王、第一車に乘り一日舍衛國より娑雞帝に至るや。王の曰く不なり。第二車に乘りて、第三車に乘りて、第七車に至り舍衛國より娑雞帝に至るや。王の曰く不なり。[二九]云何賢者、拘薩羅王波斯匿の群臣復問はゞ當に云何が說くべき。王群臣に答ふ、我舍衛國に在りしが娑雞帝に事ありき。我この念を作さく何の方便を以て一日行にして舍衛國より娑雞帝に至らしめんやと。我復この念を作さく我今寧ろ舍衛國より娑雞帝に至り、その中間に於て七車を布置すべしと。我時に卽ち舍衛國より娑雞帝に至り、その中間に於て七車を布置しぬ。七車を布き已りて舍衛國より出で、初車に至り、初車に乘りて第二車に至り初車を捨てぬ。第二車に乘りて第三車に至り第二車を捨てぬ。第三車に乘りて第四車に至り第三車を捨てぬ。第四車に乘りて第五車に至り第四車を捨てぬ。第五車に乘りて第六車に至り第五車を捨てぬ。第六車に乘りて第七車に至り[三〇]第六車を捨てぬ。第七車に乘り一日の中に於て娑雞帝に至りぬと。是の如く賢者、拘薩羅王波

【二六】波斯匿（巴）Pasenadi 梵 prasena. jit)。

【二七】娑雞帝（Sāketa）。大正藏本娑雞帝の娑は婆の誤なること明なり。

【二八】捨第六車の四字麗本にはありといふ。巴利文に對照するに四字を存する方正しきが如し。

【二九】以上は波斯匿王が七臺の車を次々に用ひ非常なる速力を以て舍衛城より娑雞帝城へ旅行し得たることを述べ、以下それを復說するなり。

【三〇】註（二八）を見よ。

淨を以ての故に、[二〇]疑蓋淨を以ての故に、[二一]道非道知見淨を以ての故に、[二二]道跡知見淨を以ての故に、[二三]道跡斷智淨を以ての故に沙門瞿曇に從ひて梵行を修するや』。答へて曰く『不なり』。又復問ひて曰く『我向に賢者に問ふ、沙門瞿曇に從ひて梵行を修するやと、[賢者]則ち言ふ、是の如しと。今賢者に問ふ、戒淨を以ての故に沙門瞿曇に從ひて梵行を修するやと、[賢者]すなはち言ふ、不なりと。心淨を以ての故に、見淨を以ての故に、疑蓋淨を以ての故に、道非道知見淨を以ての故に、道跡知見淨を以ての故に、道跡斷智淨を以ての故に沙門瞿曇に從ひて梵行を修するやと、[賢者]すなはち言ふ不なりと。然らば何の義を以て沙門瞿曇に從ひて梵行を修するや』。答へて曰く『賢者、[二四]無餘涅槃を以ての故に』。又復問ひて曰く『云何賢者、戒淨を以ての故に沙門瞿曇無餘涅槃を施設するや』。答へて曰く『不なり』。『心淨を以ての故に、見淨を以ての故に、疑蓋淨を以ての故に、道非道知見淨を以ての故に、道跡知見淨を以ての故に、道跡斷智淨を以つての故に、沙門瞿曇は無餘涅槃を施設するや』答へて曰く『不なり』。又復問ひて曰く『我向に仁に問ふ云何、賢者、戒淨を以ての故に沙門瞿曇は無餘涅槃を施設するやと、賢者言ふ不なりと、心淨を以ての故に、見淨を以ての故に、疑蓋淨を以ての故に、道非道知見淨を以ての故に、道跡知見淨を以ての故に、道跡斷智淨を以ての故に沙門瞿曇は無餘涅槃を施設するやと、賢者言ふ不なりと。賢者の所說これ何の義となす。云何が知るを得ん』。答へて曰く『賢者、若し戒淨を以ての故に世尊沙門瞿曇無餘涅槃を施設せば則ち[二五]有餘を以て無餘を稱說し、心淨を以ての故に、見淨を以ての故に、疑蓋淨を以ての故に、道非道知見淨を以ての故に、道跡知見淨を以ての故に、道跡斷智淨を以ての故に、世尊沙門瞿曇無餘涅槃を施設せば則ち有餘を以て無餘と稱說す。賢者若しこの法を離れて世尊無餘涅槃を施設せば則ち凡夫も亦當に般涅槃すべし。凡夫も亦この法を離るゝを以ての故に。賢者、但戒淨を以ての故に心淨を得、心淨を以ての故に見淨を得、見淨を以ての故に疑蓋淨を得、疑蓋淨を以ての故に道非道知見淨を得、道非道知見淨

【二〇】 疑蓋淨(Kaṅkhāvitaraṇa-visuddhi)。疑を除くことより得られる淸淨。

【二一】 道非道知見淨(Maggāmaggañāṇa-dassana-visuddhi)。正しき道、正しからざる道をよく知ることより來る淸淨。

【二二】 道跡知見淨(Paṭipadāñāṇa-dassana-visuddhi)。行くべき道をよく知ることより來る淸淨。

【二三】 道跡斷智淨(Ñāṇadassana-visuddhi)。巴利文にては單に「知見淨」行くべき道と斷智卽ち煩惱を斷ずべき智慧を得ることより來る淸淨。

【二四】 無餘涅槃(Anupādā-nibbāna)。有餘涅槃に對するの語、有餘とはあらゆる煩惱を斷じ盡しても尙ほ依身存するをいひ、無餘とは煩惱を斷じ盡すと共にこの有漏の依身をも殘存せざる事をいふ。こは死と共に得るものなり。しかしこゝにては有餘と無餘とは煩惱殘存するとせざるとに就きて不完全涅槃・完全涅槃の意に取りたるが如し。第二卷「善人往經」參照。

【二五】 註二四を見よ。

勧發・渇仰・成就・歡喜を稱說す［となす］』。尊者舍梨子復この念をなす『何時か當に賢者滿慈子と共に聚集し、會まその少義を問ふことを得べき。彼或は能く我の所問を聽かん』。その時世尊王舍城に於て夏坐を受け訖りて、三月を過ぎ已りて、衣を補治し竟りて、衣を攝り鉢を持し、王舍城より出で、舍衞國に向ひ、展轉進前して舍衞國に至り、卽ち勝林給孤獨園に住したまひぬ。尊者舍梨子生地の諸比丘と王舍城に於て共に住すること少日にして、衣を攝り鉢を持し舍衞國に向ひ、展轉進前して舍衞國に至り共に勝林給孤獨園に住しぬ。この時尊者滿慈子生地に於て夏坐を受け訖りて、三月を過ぎ已りて、衣を補治し竟りて衣を攝り鉢を持し、生地より出で、舍衞國に向ひ、展轉進前して舍衞國に至り、亦勝林給孤獨園に住しぬ。尊者滿慈子世尊の所に詣りて稽首して禮を作し、如來の前に於て[一一]尼師壇を敷き[一二]結跏趺坐しぬ。時に尊者舍梨子餘の比丘に問ふらく『諸賢、何者かこれ賢者滿慈子なりや』。諸の比丘白して曰く『尊者舍梨子、唯然り、尊者は世尊の前に在りて坐す、白皙隆鼻、鸚鵡の嘴の如き卽ちその人なり』。時に尊者舍梨子滿慈子の色貌を知り已りて則ち善く記念す。滿慈子夜を過ぎ平旦に衣を著け鉢を持し、舍衞國に入りて乞食を行ひ、食訖りて中後還りて衣鉢を擧げ、手足を澡洗し尼師壇を以て肩上に著け、[一三]安陀林[一四]經行の處に至りぬ。尊者舍梨子も亦夜を過ぎ平旦に衣を著け鉢を持し、舍衞國に入りて乞食を行ひ、食訖りて中後還りて衣鉢を擧げ、手足を澡洗し尼子壇を以て肩上に著け、安陀林經行の處に至りぬ。時に尊者滿慈子安陀林に到り、一樹の下に於て尼師壇を敷き結跏趺坐しぬ。尊者舍梨子も亦安陀林に至り、滿慈子を離るゝこと遠からず、一樹の下に於て尼師壇を敷き結跏趺坐しぬ。尊者舍梨子則ち晡時に於て[一五]燕坐より起ち、尊者滿慈子の所に往詣して共に相[一六]問訊し、却き一面に坐して則ち尊者滿慈子に問ひて曰く『賢者、沙門瞿曇に從ひて梵行を修するや』。答へて曰く『是の如し』。『云何が賢者[一七]戒淨を以ての故に沙門瞿曇に從ひて梵行を修するや』。答へて曰く『不なり』。『[一八]心淨を以ての故に、[一九]見

【一〇】賢者は巴利語のāvuso に當る、同輩又は下輩に對して用ひらる。尊者は同じくāyasmā に當る、慧命・具壽と譯されたるもの、こは長上を呼ぶ時又は一般に比丘を擧ぐる時に用ひらる。
【一一】『木積喩經』註を見よ。
【一二】『木積喩經』註を見よ。
【一三】安陀林(Andha-vana)。
【一四】坐禪して疲れ又は睡眠を催したる時、同一箇所を幾度も往返して疲勞を去り睡眠を防ぐを經行といひ、これを行ふため土を盛上げて作りたる所を經行處といふ。
【一五】又宴坐とも書く、獨り默坐して禪思すること第二卷第七經「世間福經」註を見よ。
【一六】互に起居を問ふこと、但巴利文にては常に「喜ばしき懇なる會釋の語を交し終りて」となせり。
【一七】戒淨(Sīla-visuddhi)。戒行清淨卽ち生活の淨化。
【一八】心淨(Citta-visuddhi)。心の淸淨。
【一九】見淨(Diṭṭhi-visuddhi)。見の淸淨。

九、[一]七車經第九

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]王舍城に遊び、[三]竹林精舍に在し、大比丘衆と共に[四]夏坐を受けたまひぬ。尊者[五]滿慈子も亦[六]生地に於て夏坐を受けぬ。この時生地の諸の比丘は夏坐を受け訖りて、三月を過ぎ已りて、衣を補治し竟りて衣を攝り、鉢を持し、生地より出でゝ王舍城に向ひ、展轉進前して王舍城に至り、王舍城竹林精舍に住しぬ。この時生地の諸の比丘世尊の所に詣り、稽首して禮を作し、却いて一面に坐しぬ。世尊問ひて曰く『諸比丘よ、何所より來り、何處に夏坐せし』。生地の諸の比丘白して曰く『世尊、生地より來り、生地に於て夏坐しぬ』。世尊問ひて曰く『彼の生地の諸の比丘の中に於て、何等の比丘か諸の比丘のために共に稱譽せらる。自ら少欲知足にして少欲知足を稱說し、自ら閑居して閑居を稱說し、自ら精進して精進を稱說し、自ら正念にして正念を稱說し、自ら一心にして一心を稱說し、自ら智慧ありて智慧を稱說し、自ら漏盡にして漏盡を稱說し、自ら[七]勸發・渴仰・成就・歡喜して勸發・渴仰・成就・歡喜を稱說するや』。生地の諸の比丘白して曰く『世尊、尊者滿慈子は彼の生地に於て諸の比丘のために共に稱譽せられ、自ら少欲知足にして少欲知足を稱說し、自ら閑居して閑居を稱說し、自ら精進して精進を稱說し、自ら正念にして正念を稱說し、自ら一心にして一心を稱說し、自ら智慧ありて智慧を稱說し、自ら漏盡にして漏盡を稱說し、自ら勸發・渴仰・成就・歡喜して勸發・渴仰・成就・歡喜を稱說す』。この時尊者[八]舍梨子是の如きの念をなす『世尊[九]事の如く彼の生地の諸の比丘輩に問ひたまひ、生地の諸の比丘は極めて大に[一〇]賢者滿慈子を稱譽して、[彼]自ら少欲知足にして少欲知足を稱說し、自ら閑居して閑居を稱說し、自ら精進して精進を稱說し、自ら正念にして正念を稱說し、自ら一心にして一心を稱說し、自ら智慧ありて智慧を稱說し、自ら漏盡にして漏盡を稱說し、自ら勸發・渴仰・成就・歡喜して

【一】M. 24, Rathavinita-sutta『增一阿含』三九品の一〇。
【二】王舍城(巴 Rājagaha 梵、Rājagṛiha)。摩竭陀國の首都。
【三】竹林精舍(巴 Veḷuvana 梵 Veṇuvana)。摩竭陀國王頻毘沙羅が佛に供養せし林園。
【四】夏安居をすること。
【五】マンターニ女(Mantāṇī)の子プンナ(Puṇṇa)即ち富樓那をいふ。
【六】生地(Jātibhūmi)。生れたる土地の意、此處にては地方又は田舍の意か。
【七】この四連の語は、通常示敎利喜と譯せるものに當る。『雜阿含』にては常に示敎照喜と譯し、『佛本行集經』には(一)方便敎化、(二)說法顯示(三)令其解信、(四)令歡喜已と譯し。敎示し、鼓舞し、激勵し、悅喜せしむるの意。
【八】舍梨子(巴 Sāriputta 梵 Sāriputra)。舍梨(Sāri)は母の名、舍梨の子の意、後段にて舍梨子自身この名の由來を說く。
【九】巴利文(Anumāssa)。(これに)觸れ(かれに)觸れての意、一事一事といふほどの意。

し欲を捨離し、彼命終し已りて梵天に生ずるを得き。我その時に於てこの念を作しき「我弟子等と同じく倶に後世に至り共に一處に生ずべからず。我今寧ろ更に増上慈を修すべく、増上慈を修し已り、命終して晃昱天中に生ずるを得ん」と。我後時に於て更に増上慈を修しき。増上慈を修し已り命終して晃昱天中に生ずることを得き。その時に於て我及び諸の弟子學道虚しからず大果報を得き。我その時に於て親ら斯の道を行じて自の饒益をなし、亦他を饒益し、多人を饒益し、世間を愍傷し、天のため、人のため義及び饒益を求め、安隱快樂を求めき。その時說法究竟に至らず、白淨を究竟せず、梵行を究竟せず、梵行を究竟せずして訖りき。生・老・病・死・啼哭・憂慼を離れず、亦一切苦を脫するを得る能はざりき。我今出世して如來[26]・無所著[27]・等正覺[28]・明行成爲[29]・善逝[30]・世間解[31]・無上士[32]・道法御[33]・天人師[34]・佛・衆祐[35]と號す。我今自ら饒益し亦他を饒益し、多人を饒益し、世間を愍傷し、天のため人のため、義及び饒益を求め、安隱快樂を求む。我今說法して究竟に至るを得、白淨を究竟し、梵行を究竟し、梵行を究竟し訖りて我今已に生・老・病・死・啼哭・憂慼を離る。我今已に一切の苦を脫することを得たり」。佛說是の如く、彼の諸の比丘は佛の所說を聞きて歡喜奉行しき。

【二四】四梵室（Catubrahma-vihāra）。通常四梵住と呼ぶ、慈・悲・喜・捨（＝護）の四種の觀法なり。これを修すれば梵天に生るゝを得といふより、これを梵住と呼べるなり。梵室・梵堂（『長阿含、衆集經』）と譯せるは vihāra の語に囚はれたるなり。四無量（『大集法門經』上卷）ともいふ、慈・悲・喜・捨の四種の心を無限量無邊際に擴大して觀ずることより斯く名けたるなり。

【二六】如來（Tathāgata）。いろいろの解釋可能なれども、眞理（多他）に達したる（阿竭多）人と解するを新しとす。

【二七】無所著（Arahan）。阿羅漢・應供・應眞、價ある尊き人の意と解す。

【二八】等正覺（Sammāsambuddha）。三藐三佛陀。正偏知・等正覺。

【二九】明行成爲（Vijjācaraṇasampanna）。明行足・明行悉宿住・天眼・漏盡の三種の明即ち智慧と身・口・意三業の德行とが完全に具はりたる人。

【三〇】善逝（Sugata）。善く眞理に達したる人の意。

【三一】世間解（Lokavidū）。知世間・世間解。有情・非情の世界の事を知れる人。

【三二】無上士（Anuttara）。この上なき人の意。

【三三】道法御（Purisadammasārathi）。調御丈夫、調伏せらるべき男子の御者の意。

【三四】天人師（Satthā devāmanussānaṁ）。天人及び人間の師。

【三五】衆祐（Bhagavā）。吉祥を有する人、祥者・福者の意。

速變易の法、不可猗の法なり。是の如き諸行は當に樂著すべからず、當にこれを患厭すべく、當に捨離を求むべく、當に解脱を求むべし。我今汝がために說く、須彌山王當に崩壞して盡くべしと。誰か能く信ずるあらん、唯[15]諦を見る者のみ。我今汝がために說く、一切大地當に燒燃して盡くべしと。誰か能く信ずるあらん、唯諦を見る者のみ。所以はいかん。比丘[等]、昔大師あり、[16]善眼と名く、外道仙人の師宗とする所たり。欲愛を捨離し[17]如意足を得たり。善眼大師に無量百千の弟子あり、善眼大師諸の弟子のために[18]梵世法を說く。若し善眼大師ために梵世法を說く時、諸の弟子等法を具足奉行せざるものあれば彼命終し已りて或は[19]四王天に生れ、或は[20]三十三天に生れ、或は[21]焰摩天に生れ、或は[22]兜率哆天に生れ、或は[23]化樂天に生れ、或は[24]他化樂天に生る。(若)善眼大師ために梵世法を說く時、諸の弟子等もし法を具足奉行するものあれば、彼[25]四梵室を修し欲を捨離し、彼命終し已りて梵天に生ずるを得。彼の時善眼大師この念をなす「我弟子等と同じく俱に後世に至り共に一處に生ずべからず。我今寧ろ更に增上慈を修すべし。增上慈を修し已り、命終して晃昱天中に生ずるを得ん。」彼の時善眼大師則ち後時に於て、更に增上慈を修しき。增上慈を修し已り、命終して晃昱天中に生ずるを得き。善眼大師及び諸の弟子學道虛しからず、大果報を得き。諸比丘[等]、意に於て云何、昔、善眼大師は外道仙人の師宗とする所たり、欲愛を捨離し如意足を得たるもの、汝[等これを]異人なりと謂へりや。この念を作す莫れ。當に知るべし[そは]卽ち是我なりき。我その時に於て善眼大師と名け外道仙人の師宗とする所たり、欲愛を捨離し、如意足を得き。我その時に於て無量百千の弟子ありき。我その時に於て諸の弟子のために梵世の法を說きき。我梵世の法を說きし時諸の弟子等[の中]法を具足奉行せざるものあれば彼命終し已りて或は四王天に生れ、或は三十三天に生れ、或は焰摩天に生れ、或は兜率哆天に生れ、或は化樂天に生れ、或は他化樂天に生れき。我梵世法を說きし時諸の弟子等若し法を具足奉行するものあれば、四梵室を修

【一五】四諦の理を如實に見得たるもの、意にて涅槃を得たる人なり。
【一六】善眼(Sunettā)。
【一七】禪定・智慧・均等の力によりて所願皆悉く意の如く得る力をいふ。
【一八】梵天界に伴たるための法、梵天に生れ出るの道。
【一九】四天王(Cātummahārājikā)。及びその眷屬の住める世界欲界最下の天なり。
【二〇】忉利天(Tāvatiṁsā)と呼べるもの、四王天の上、須彌山の頂にあり、忉利天の主は帝釋天なり。
【二一】焰摩天(Yamā, Suyāmā)。耶摩、須耶摩。時分、善時分と譯す。欲界空居天の最下位にあり。
【二二】兜率哆天(Tusita)。兜術・都率・覩史多。知足、妙足と譯す、耶摩天の上にあり
【二三】化樂天(Nimmānarati)樂變化天ともいふ
【二四】他化樂天(Paranimmitavasavatti)。單に他化天ともいふ。四王天以下欲界に屬する天に六あり、よりてこれを總稱して六欲天といふ。他化自在天はその最高位にあれば第六天とも呼ぶ。卽ち魔王なり。

樹、轉た減じて乃ち七多羅樹に至る。五日出る時海水餘りて七多羅樹あり、轉た減じて乃ち一多羅樹に至る。五日出る時海水減ずること[一〇]一人[量]、轉た減じて乃ち七人[量]に至る。五日出る時海水餘りて七人[量]あり。轉た減じて乃ち一人[量]に至る。五日出る時海水減じて頸に至り、肩に至り、腰に至り、胯に至り、膝に至り、踝に至り、時ありては海水消盡して指を沒するに足らず。この故に一切行は無常、不久住の法、速變易の法、不可猗の法なり。是の如き諸行は當に樂著すべからず、當にこれを患厭すべく、當に捨離を求むべく、當に解脫を求むべし。(6)時に六日世に出ることあり。六日出る時一切大地と[一一]須彌山王と、皆悉く烟起り、合して一烟となる。譬へば陶師の初めて竈を襲く時皆悉く烟起り、合して一烟となるが如く、是の如く六日出る時一切大地と須彌山王と皆悉く烟起り、合して一烟となる。この故に一切行は無常、不久住の法、速變易の法、不可猗の法なり。是の如き諸行は當に樂著すべからず、當にこれを患厭すべく、當に捨離を求むべく、當に解脫を求むべし。(7)また次に時に七日世に出ることあり。七日出る時一切大地と須彌山王と、洞かに燃え倶に熾り、合して一焰となる。是の如く七日出る時一切大地と須彌山王と、洞かに燃え倶に熾り、合して一焰となり、風火焰を吹いて乃ち[一二]梵天に至る。この時[一三]晃昱諸天の始めて[この]天に生ざざる者は世間の[一四]成敗を聞かず、世間の成敗を見ず、世間の成敗を知らざれば、大火を見已りて皆恐怖し[身]毛竪ち、而してこの念をなす、「火此に來至せずや、火此に來至せずや」と。前に生ぜし諸天は世間の成敗を聞き、世間の成敗を見、世間の成敗を知れば、大火を見已り諸天を慰勞して曰く「恐怖を得ること莫れ、火の法彼に齊しくして終に此に至らず」と。七日出る時須彌山王百由延崩散壞滅し盡く。二百由延・三百由延、乃至七百由延崩散壞滅し盡く。七日出る時須彌山王及びこの大地燒壞消滅して灰燼をも餘すなし。[譬へば]酥油を燃すに煎熬消盡して烟墨をも餘すなきが如く、是の如く七日出る時須彌山王及びこの大地灰燼をも餘すなし。この故に一切行は無常、不久住の法、

【一〇】 一人の人間の丈だけ。

【一一】 須彌山(Sumeru)。修迷樓妙高と譯す、印度の世界說にて世界の中心たる山にて、一說に水中水上共に八萬由旬ありといふ。

【一二】 色界初禪の終天にして通常大梵天（Mahā-brahmā）と呼べるもの。

【一三】 晃昱諸天（Ābhassara-devā）。通常光音天と呼べるもの、第二禪の終天なり。初禪天の破壞する時有情は皆この天に集まりて世界の再成を待つといふ。

【一四】 世に成・住・壞・空あることを知らざるなり。

八、七日經第八

我が聞きしこと是の如し。ある時　佛[二]鞞舍離に遊び、[三]㮈氏樹園に在しぬ。その時佛諸の比丘に告げたまはく『一切行は　[四]無常、不久住の法、速變易の法、不可猗の法なり。是の如き諸行は樂著すべからず、當にこれを患厭すべし、當に捨離を求むべく、當に解脱を求むべし。所以はいかん。(1)時に雨らざることあり。雨らざる時に當りて一切の諸樹、百穀藥木皆悉く枯槁し、摧碎滅盡して[五]常住を得ず。この故に一切行は無常、不久住の法、速變易の法、不可猗の法なり。是の如き諸行は當に樂著すべからず、當にこれを患厭すべし、當に捨離を求むべく、當に解脱を求むべし。(2)また次に時に二日世に出づることあり。二日出る時諸の溝渠川流皆悉く竭盡して常住を得ず、この故に一切行は無常、不久住の法、速變易の法、不可猗の法なり。是の如き諸行は當に樂著すべからず、常にこれを患厭すべく、當に捨離を求むべく、當に解脱を求むべし。(3)また次に時に三日世に出ることあり。三日出る時　諸の大江河皆悉く竭盡して常住を得ず、この故に一切行は無常、不久住の法、速變易の法、不可猗の法なり。是の如き諸行は當に樂著すべからず、當にこれを患厭すべく、當に捨離を求むべく、當に解脱を求むべし。(4)また次に時に四日世に出ることあり。四日世に出る時、諸の大泉源、[六]閻浮洲より出る所の　[七]五河、一に曰く恒伽、二に曰く搖尤那、三に曰く舍牟浮、四に曰く阿夷羅婆提、五に曰く摩企。彼の大泉源皆　悉く竭盡して常住を得ず、この故に一切行は無常、不久住の法、速變易の法、不可猗の法なり。是の如き諸行は當に樂著すべからず、當にこれを患厭すべく、當に捨離を求むべく、當に解脱を求むべし。(5)また次に時に五日世に出ることあり。五日出る時大海の水減ずること一百[八]由延、轉た減じて乃ち七百由延に至る。五日出る時海水餘りて七百由延あり、轉た減じて乃ち一百由延に至る。五日出る時大海の水減ずること　[九]一多羅

【一】A. iv. 100佛說「薩鉢多酥哩踰捺野經」「增一阿含」四〇品の一。

【二】鞞舍離(梵 Vaiśāli 巴、Vesāli)。離車族の首都なり、この種族佛時代には恒河の北にありて、南岸なる摩竭陀族と對時したり。

【三】㮈氏樹園(巴Ambapāli)。菴婆波利と呼べる遊女の樹園。

【四】巴利原典にては (anicca) 無常、(addhuva)不堅固、(anassāsika)不可慰の三を擧ぐ。

【五】單に「存在せず」の意。

【六】印度の古き世界說によれば須彌山を中心としてその四方に四大洲あり、その南にあるを閻浮洲(Jambudīpa)といふ。しかし閻浮洲は通常印度の異名として用ひられ居るが如し。

【七】上なる「世間福經」註を見よ。

【八】第一卷、第二經晝度樹經を見よ。

【九】多羅(Tāla)。一多羅樹の高さの量。高さを計るに用ふ。

り踊躍を懷く、周那よ、これを第一の出世間福と謂ひ、大福祐を得、大果報を得、大名譽を得、大功德を得。(2)また次に周那よ、信[心の]族姓男・族姓女有り、如來[または]如來の弟子彼より此に至らんと欲すと聞く、聞き已りて歡喜極まり、踊躍を懷く。周那よ、これを第二の出世間の福と謂ひ、大福祐を得、大果報を得、大名譽を得、大功德を得。(3)また次に周那よ、信[心の]族姓男・族姓女有り、如來[または]如來の弟子已に彼より此に至ると聞く。聞き已りて歡喜極まり踊躍を懷き、清淨心を以て躬ら往きて奉見・禮敬・供養す。供養し已りて[一]三自歸を得。(4)佛(5)法及び(6)比丘衆に受け、而して[二](7)禁戒を受く。周那よ、これを第七の出世間の福と謂ひ、大福祐を得、大果報を得、大名譽を得、大功德を得。周那よ、信[心の]族姓男・族姓女若しこの七の世間福を得、及び更に七の出世間福有ればその福數ふべからず。その福とする所、その福とする所の果、その福とする所の報有る、唯大福の數を限るべからず、量るべからず、得べからず。周那よ、譬へば閻浮洲より五の河流有り、[三]一に恒伽と曰ひ、二に搖尤那と曰ひ、三に舍勞浮と曰ひ、四に阿夷羅婆提と曰ひ、五に摩企と曰ふが、大海に流入するにその中間に於て水數ふべからず、その斗斛する所有る、唯大水の數を限るべからず、量るべからず、得べからざるが如く、周那よ、是の如く信[心の]族姓男・族姓女若しこの七の世間福を得、及び更に七の出世間福有ればその福數ふべからず、その福とする所、その福とする所の果、その福とする所の報有る、唯大福の數を限るべからず、量るべからず、得べからず』。

その時世尊頌を說いて曰はく

恒伽の河は清淨にして渡り易く、　海は珍寶多く衆水中の王たり。　猶ほ河水の如く、　世人敬奉す、　諸川の歸する所、　引いて大海に入る。　是の如き人は衣・飲食・床榻・茵褥及び諸の坐具を施せば、　無量の福報將つて妙處に至る、　猶ほ河水の引いて大海に入るが如し。

佛說、是の如し。尊者摩訶周那及び諸の比丘佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

[一] 佛・法・僧の三寶に歸依すること、歸依三寶なり。

[二] 五戒なり。

[三] 恒伽(Gaṅgā)。搖尤那(Yamunā)舍勞浮(Sarabhū)阿夷羅婆提(Aciravatī)摩企(Mahī)これを印度の五大河と呼び、屢々佛典中に現はる。

して曰く、『世尊、世間の福を施設するを得べしや』。世尊告げて曰はく『得べし、周那、七の世間福有り、大福祐を得、大果報を得、大名譽を得、大功德を得。云何が七と爲す。(1)周那よ、信[心の][六]族姓男・族姓女有り比丘衆に房舍・堂閣を施す。周那よ、これを第一の世間福と謂ひ、大福祐を得、大果報を得、大名譽を得、大功德を得。(2)また次に周那よ、信[心の]族姓男・族姓女有り、房舍の中に於て床座[七]氍毹毾㲪氈褥臥具を施與す。周那よ、これを第二の世間福と謂ひ、大福祐を得、大果報を得、大名譽を得、大功德を得。(3)また次に周那よ、信[心の]族姓男・族姓女有り、房舍の中に於て一切新淨の妙衣を施與す。周那よ、これを第三の世間福と謂ひ、大福祐を得、大果報を得、大名譽を得、大功德を得。(4)また次に周那よ、信[心の]族姓男・族姓女有り、房舍の中に於て常に[比丘]衆に朝粥中食を施し、(5)又園民を以て供給使令せしめ、(6)若し風雨寒雪には躬ら園所に往きて增施供養し、(7)諸の比丘をして風雨寒雪に衣服を沾漬するを患へず、晝夜に安樂に禪寂思惟せしむ。これを第七の世間福と謂ひ大福祐を得、大果報を得、大名譽を得、大功德を得。周那よ、信[心の]族姓男・族姓女の已にこの七の世間福を得るもの〻若は去り、若は來り、若は立ち、若は坐し、若は眠り、若は覺めたるに、若は晝に若は夜に、その福、常に生じ、轉た增し轉た廣がる。譬へば[八]恒伽の水の源より流出して大海に入るに、その中間に於て轉た深く轉た廣きが如く、周那よ、是の如く信[心の]族姓男・族姓女の已にこの七の世間福を得るもの〻、若は去り、若は來り、若は立ち、若は坐し、若は眠り、若は覺めたるに、若は晝に若は夜に、その福常に生じ、轉た增し轉た廣がる』。こ〻に於て尊者摩訶周那卽ち座より起ち[九]偏へに右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、[一〇]長跪叉手して白して曰く、『世尊、出世間の福を施設するを得べきや』。世尊告げて曰はく『得べし、周那よ、更に七の福の世間より出る有り、大福祐を得、大果報を得、大名譽を得、大功德を得。云何が七と爲す。(1)周那よ、信[心の]族姓男・族姓女有り、如來[または]如來の弟子、某所に遊ぶと聞く。聞き已りて歡喜極ま

---

ma)。瞿史羅園。

【三】摩訶周那(Mahācunda)。

【四】晡時とは、申の刻。午後四時。

【五】燕坐とも書く。獨り居て坐禪すること。

【六】善男子善女人の異譯、良族の出の男子及び女子の意にて人を貴びて呼ぶに用ふる語。

【七】種種の毛織の敷物又は蒲團。

【八】恒伽(Gaṅgā)。今ガンヂス河と呼べる大河なり。

【九】「ひとへに(或はかたへに)右の肩をはだぬぐ」と讀む。袈裟衣を左の肩だけに掛けて右の肩を露はし、長者の前にてその命ずるまゝに行はんとする態度を示す。一種致敬の法なり。

【一〇】長跪は、胡跪といふに同じく兩膝を地に著け、兩足の指頭を以て地を支へて立つこと。しかし右膝を地に著くるの語あるより察すればこれは、互跪といふものにて左の膝は立てたるものか。

に飛び、多くの薪草の上に墮ちて、若しは烟り若しは燃え、燃え盡き已りて滅するが如し。比丘も亦復是の如し。少しの慢未だ盡きず、五下分結已に斷じて[八]無行般涅槃を得。これを第六の善人所往至處と謂ひ、世間諦かに有るが如し。(7)また次に比丘行ふこと當に是の如くなるべし、我には我無く亦我所無し、當來も我無く亦我所無けん、已有はすなはち斷ぜんと。已に斷ずれば[彼]捨を得、有の樂には染せず合會には著せず。行ふこと是の如くなるものは無上・息・迹は慧の見る所、然も未だ證を得ず。比丘行ふこと是の如くなれば、何れの所にか往至する。譬へば鐵の洞かに燃え俱に熾なるをば椎を以てこれを打てば、迸火空に飛び多くの薪草の上に墮ちて、若しは烟り若しは燃え、燃え已りてすなはち村邑・城郭・山林・曠野を燒き、村邑・城郭・山林・曠野を燒き已りて、或は道に至り水に至り平地に至りて、滅するが如し。當に知るべし、比丘も亦復是の如し。少しの慢未だ盡きず、五下分結已に斷じて[九]上流阿迦膩吒般涅槃を得。これを第七の善人所往至處と謂ひ、世間諦かに有るが如し。云何が無餘涅槃なる。比丘行ふこと當に是の如くなるべし、我には我無く亦我所無し、當來も我無く亦我所無けん、已有はすなはち斷ぜんと。已に斷ずれば捨を得、有の樂には染せず合會には著せず。行ふこと是の如くなるものは無上・息・迹は慧の見る所にして、已に證を得たり。我說く彼の比丘は東方に至らず、西方・南方・北方・四維・上下に至らず、すなはち[一〇]現法中に於て息・迹・滅度を[得]。我が向に說く所の七の善人所往至處及び無餘涅槃はこれに因るが故に說く』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

七、世間福經第七

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[一]拘舍彌に遊び[二]瞿沙羅園に在しぬ。その時尊者[三]摩訶周那すなはち[四]晡時に於て[五]宴坐より起ちて佛所に往詣し、到り已りて禮を作し、却きて一面に坐して白

【八】無行般涅槃(Asaṅkhāraparinibbāna)。

【九】上流阿迦膩吒般涅槃(Uddhaṁsoto akaniṭṭhagāma)

【一〇】現在世の中にありて。

【一】拘舍彌(Kosam)。憍賞彌とも書く。跋蹉國の首都なり。

【二】瞿沙羅園(Ghositārā-

ず。比丘行ふこと是の如くなれば何れの所にか往至する。譬へば若し鐵の洞かに燃え倶に熾なるをば椎を以てこれを打てば迸火空に飛び、上より來り還つて未だ地に至らずして滅するが如し。當に知るべし、比丘も亦復是の如し。少しの慢未だ盡きず、五下分結已に斷じて中般涅槃を得。これを第三の善人所往至處と謂ひ、世間諦かに有るが如し。(4)また次に比丘行ふこと當に是の如くなるべし、我には我無く亦我所無し、當來も我無く亦我所無けん、已有はすなはち斷ぜんと。已に斷ずれば[彼]捨を得、有の樂には染せず、合會には著せず。行ふこと是の如くなるものは無上・息・迹は慧の見る所、然も未だ證を得ず。比丘行ふこと是の如くなれば何れの所にか往至する。譬へば鐵の洞かに燃え倶に熾なるをば椎を以てこれを打てば、迸火空に飛び地に墮ちて滅するが如し。當に知るべし、比丘も亦復是の如し。少しの慢未だ盡きず、五下分結已に斷じて[六]生般涅槃を得。これを第四の善人所往至處と謂ひ、世間諦かに有るが如し。(5)また次に比丘行ふこと當に是の如くなるべし、我には我無く亦我所無し、當來も我無く亦我所無けん、已有はすなはち斷ぜんと。已に斷ずれば[彼]捨を得、有の樂に染せず合會には著せず。行ふこと是の如くなるものは無上・息・迹は慧の見る所、然も未だ證を得ず。比丘行ふこと是の如くなれば何れの所にか往至する。譬へば鐵の洞かに燃え倶に熾なるをば椎を以てこれを打てば、迸火空に飛び少しの薪草の上に墮ち、若しは烟り、若しは燃え、燃え已りてすなはち滅するが如し。當に知るべし、比丘も亦復是の如し。少しの慢未だ盡きず、五十分結已に斷じて[七]行般涅槃を得。これを第五の善人所往至處と謂ひ、世間諦かに有るが如し。(6)また次に比丘行ふこと當に是の如くなるべし、我には我無く亦我所無し、當來も我無く亦我所無けん、已有はすなはち斷ぜんと。已に斷ずれば[彼]捨を得、有の樂には染せず合會には著せず。行ふこと是の如きものは無上・息・迹は慧の見る所、然も未だ證を得ず。比丘行ふこと是の如くなれば何れの所にか往至する。譬へば鐵の洞かに燃え倶に熾なるを椎を以てこれを打てば迸火空

槃を得。(５)上流阿迦膩吒とは色界の例へば無想天に生れ其處に一生を送りたる後、上へ上へと昇りて生れ、終に阿迦膩吒天に至りて後般涅槃するをいふ。

【六】生般涅槃（Upahacca-parinibbāna）。上註參照。

【七】行般涅槃（Saṅkhāra-parinibbāna）。

卷の第二

六、善人往經第六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『我當に汝[等]が爲に七善人所往至處及び[二]無餘涅槃を說くべし。諦かに聽け、諦かに聽け、善くこれを思念せよ』と。時に諸の比丘教を受けて聽きぬ。佛言はく『云何が七と爲す。(1)比丘行ふこと當に是の如くなるべし、我には我無く亦我所無し、當來も我無く亦我所無けん、已有はすなはち斷ぜんと。已に斷ぜば[彼]捨を得、[三]有の樂には染せず、合會には著せず。是の如く行ふものは無上、息、迹は慧の見る所、然も未だ證を得ず。比丘行ふこと是の如くにして何れの所にか往至する。譬へば燒きたる麩の纔かに燃えてすなはち滅するが如し。當に知るべし。比丘も亦復是の如し。少しの慢未だ盡きず、[四]五下分結已に斷じて[五]中般涅槃を得。これを第一の善人所往至處と謂ひ、世間諦かに有るが如し。(2)また次に比丘行ふこと當に是の如くなるべし、我には我無く亦我所無し、當來も我無く亦我所無けん、已有はすなはち斷ぜんと。已に斷ずれば[彼]捨を得、有の樂には染せず、合會には著せず。是の如く行ずるものは無上・息・迹は慧の見る所、然も未だ證を得ず。比丘行ふこと是の如くにして何れの所にか往至する。譬へば若しは鐵の洞かに燃えて倶に熾なるをば椎を以てこれを打てば逆火空に飛び上り、已りて卽ち滅するが如し。當に知るべし、比丘も亦復是の如し。少しの慢未だ盡きず、五下分結已に斷じて中般涅槃を得。これを第二の善人所往至處と謂ひ、世間諦かに有るが如し。(3)また次に比丘行ふこと當に是の如くなるべし、我には我無く亦我所無し、當來も我無く亦我所無けん、已有はすなはち斷ぜんと。已に斷ずれば[彼]捨を得、有の樂には染せず、合會には著せず。行ふこと是の如きものは無上・息・迹は慧の見る所、然も未だ證を得

【一】A. iv. 70.

【二】小乘教の說く所の涅槃に(1)有餘(2)無餘の二種あり(1)は有餘依の意にて煩惱(惑)をば總て斷じ盡したれど、尙ほこの五蘊の依身(苦)殘存せるをいひ、(2)は煩惱を斷じたるのみならず、五蘊の依身も殘されず、身心都て滅する涅槃をいふ。無餘涅槃に就てはこの經の末尾の文を參照せよ。

【三】巴利文「彼は有(生存)に染まず、生出に染まず、最上義、道・息(無上・息・迹なり、三共に涅槃の義)をば正智を以て見る。」

【四】「水喩經」註【七】を見よ。

【五】中般涅槃(Antarāparinibbāna)。以下擧ぐるは五種不還果人なり。(1)中般とは欲界に死して色界に生れんとする中有の間にありて、殘りの煩惱を斷じ盡して般涅槃に入る、卽ち羅漢果を得。(2)生般とは色界の例へば無想天に生れ五百劫を經て般涅槃に入る。(3)有行般とは色界に生じ已りて後努力し、その効によりて般涅槃す。(4)無行般とは色界に生じ已りて後努力なく懈怠にして而も解脫涅

愚癡の人これに因りて長夜に不善不義にして惡法の報を受け、身壞れ命終りて至惡處に趣き、地獄の中に生れん。この故に汝等當に自の義を觀、彼の義を觀、兩の義を觀るべく、當にこの念を作すべし、我出家して學ぶこと虛ならず、空ならず、果有り報有り、極安樂有り。諸の善處に生れて長壽を得、人の信施の衣被・飲食・床褥・湯藥を受け諸の施主をして大福祐を得、大果報を得、大光明を得しめんものなりと。當にこの學を作すべし』。〔佛〕この法を說きたまひし時、六十の比丘は、漏盡き結解けしが、六十の比丘は戒を捨てゝ家に還りぬ。所以者何。世尊の教誡は甚だ深く甚だ難く、學道亦復甚だ深く甚だ難きが故なり。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第一

〔八〕漏も結も共に煩惱の異名。

を失はしめざらんが[ため]なり。汝[等]無上の梵行を成ぜんと欲せんものは寧ろ力士をして鐵銅床の洞かに燃え倶に熾なるを以て强ひて逼りて人をしてその上に坐臥せしめよ。彼これによりて苦を受け或は死すと雖も、然もこれを以て身壞れ命終りて至惡處に趣き、地獄の中に生れず。若し愚癡の人戒を犯し精進せず、惡不善の法を生じ、非梵行にして梵行と稱し、非沙門にして沙門と稱し、刹利・梵志・居士・工師よりその信施の床褥臥具を受けば、彼の愚癡の人これに因りて長夜に不善不義にして惡法の報を受け、身壞れ命終りて至惡處に趣き、地獄中に生れん。この故に汝等當に自の義を觀、彼の義を觀、兩の義を觀るべく、當にこの念を作すべし、我出家して學ぶこと虛ならず空ならず、果有り報有り、極安樂有り、諸の善處に生じて長壽を得、人の信施の衣被・飮食・床褥・湯藥を受けては、諸の施主をして大福祐を得、大果報を得、大光明を得せしめんと。當にこの學を作すべし』。世尊また諸の比丘に告げたまはく、(7)『[汝等]意に於て云何。若しは力士有りて大なる鐵銅の釜の洞かに燃え倶に熾なるを以て人を撮擧し已りて釜中に倒著すると、若しは刹利・梵志・居士・工師より信施の房舍・泥治堊灑・窻戶牢密・爐火熅暖を受くると何れをか樂しと爲す』。時に諸の比丘白して曰く『世尊、若しは力士有り大なる鐵銅の釜の洞かに燃え倶に熾なるを以て人を撮擧し、已りて釜中に倒著するは甚だ苦し、世尊。[これに反して]若しは刹利・梵志・居士・工師より信施の房舍・泥治堊灑・窻戶牢密・爐火熅暖を受くるは甚だ樂し、世尊』。世尊告げたまはく『我汝[等]が爲に說くは汝等學沙門をして沙門道を失はしめざらんが[ため]なり。汝[等]無上の梵行を成ぜんと欲せんものは寧ろ力士をして大なる鐵銅の釜の洞かに燃え倶に熾なるを以て人を撮擧し已りて釜中に倒著せしめよ。彼これに因りて苦を受け或は死すと雖も、然もこれを以て身壞れ命終りて至惡處に趣き地獄の中に生れず。若し愚癡の人戒を犯し精進せず、惡不善の法を生じ、非梵行にして梵行と稱し、非沙門にして沙門と稱し、刹利・梵志・居士・工師より信施の房舍・泥治堊灑・窻戶牢密・爐火熅暖を受くれば彼の

【七】泥を塗り白堊水を洒ぎかけて壁を修理し、窻や戶を固くして雨や風の入らぬ樣にし、爐中に火を焚きて室內を暖くすること、これ等も亦供養の一形式なり。

りて舌を燒き、舌を燒き已りて齗を燒き、齗を燒き已りて腸胃を燒き、腸胃を燒き已りて下に過ぐるは甚だ苦し、世尊。[これに反して]若し刹利・梵志・居士・工師より信施の食、無量の衆味を受くるは甚だ樂し、世尊』。世尊告げたまはく『我汝[等]が爲に說くは汝等學沙門をして沙門道を失はしめざらんが[ため]なり。汝[等]無上の梵行を成ぜんと欲せんものは、寧ろ力士をして熱せる鐵鉗を以てその口を鉗開し、すなはち鐵丸の洞かに燃えて俱に熾なるを以て、その口中に著けしめよ。彼の熱せる鐵丸は脣を燒き、脣を燒き已りて舌を燒き、舌を燒き已りて齗を燒き、齗を燒き已りて咽を燒き、咽を燒き已りて心を燒き、心を燒き已りて腸胃を燒き、腸胃を燒き已りて下に過ぐ。彼これに因りて苦を受け或は死すと雖も、然もこれを以て身壞れ命終りて至惡處に趣き、地獄の中に生れず。若し愚癡の人戒を犯し精進せず、惡不善の法を生じ、非梵行にして梵行と稱し、非沙門にして沙門と稱し、刹利・梵志・居士・工師より信施の食、無量の衆味を受くれば彼の愚癡の人これに因りて長夜に不善不義にして惡法の報を受け、身壞れ命終りて至惡處に趣き、地獄の中に生れん。この故に汝等當に自の義を觀、彼の義を觀、兩の義を觀るべく、當にこの念を作すべし、我出家して學ぶこと虛ならず空ならず、果有り報有り、極安樂有り。諸の善處に生じて長壽を得、人の信施の衣被・飲食・床褥・湯藥を受け、諸の施主をして大福祐を得、大果報を得、大光明を得しめんものなりと。當にこの學を作すべし』。世尊また諸の比丘に告げたまはく、(6)『[汝等]意に於て云何。若しは力士有りて鐵銅床の洞かに燃え、俱に熾なるを以て强ひて逼りて人をしてその上に坐臥せしむると、若しは刹利・梵志・居士・工師よりその信施の床榻臥具を受くると何れをか樂しと爲す』。時に諸の比丘白して曰く『世尊、若し力士有りて鐵銅床の洞かに燃え、俱に熾なるを以て强ひて逼りて人をしてその上に坐臥せしむるは甚だ苦し、世尊。[これに反して]若し刹利・梵志・居士・工師よりその信施の床榻臥具を受くるは甚だ樂し、世尊』。世尊告げたまはく『我汝[等]が爲に說くは汝等學沙門をして沙門道

【六】 腰をかける椅子と臥るに用ふる寢具。

く(4)『[汝等]意に於て云何。若しは力士有りて鐵銅の鍱の洞かに燃え倶に熾なるを以てその身に纒絡すると、若しは刹利・梵志・居士・工師より信施の衣服を受くると何れをか樂しと爲す』。時に諸の比丘白して曰く『世尊、若し力士有りて鐵銅の鍱の洞かに燃え倶に熾なるを以てその身を纒絡するは甚だ苦し、世尊。[之に反して]若し刹利・梵志・居士・工師より信施の衣服を受くるは甚だ樂し世尊』。世尊告げたまはく『我汝[等]が爲に說くは汝等學沙門をして沙門道を失はしめざらんが[ため]なり。汝[等]無上梵行を成ぜんと欲せんものは寧ろ力士をして鐵銅の鍱の洞かに燃え倶に熾なるを以てその身を纒絡せしめよ。彼はこれによりて苦を受け、或は死すと雖も、然もこれを以て身壞れ命終りて至惡處に趣き地獄の中に生れず。若し愚癡の人戒を犯し精進せず、惡不善の法を生じ、非梵行にして梵行と稱し、非沙門にして沙門と稱し、刹利・梵志・居士・工師より信施の衣服を受けば、彼の愚癡の人これに因りて、長夜に不善不義にして、惡法の報を受け、身壞れ命終りて至惡處に趣き、地獄の中に生れん。この故に汝等當に自の義を觀、彼の義を觀、兩の義を觀るべく、當にこの念を作すべし、我出家して學ぶこと虛ならず空ならず、果有り報有り、極安樂有り。諸の善處に生じて長壽を得、人の信施の衣被・飲食・床褥・湯藥を受け、諸の施主をして大福祐を得、大果報を得、大光明を得しめんものなりと。當にこの學を作すべし』。世尊また諸の比丘に告げたまはく(5)『[汝等]意に於て云何。若しは力士有りて熱せる鐵鉗を以てその口を鉗開し、すなはち鐵丸の洞かに燃え倶に熾なるを以てその口中に著け、彼の熱鐵丸脣を燒き、脣を燒き已りて舌を燒き、舌を燒き已りて齗を燒き、齗を燒き已りて咽を燒き、咽を燒き已りて心を燒き、心を燒き已りて腸胃を燒き、腸胃を燒き已りて下に過ぐると、若しは刹利・梵志・居士・工師より信施の食、無量の衆味を受くると、何れをか樂しと爲す』。時に諸の比丘白して曰く『世尊、若し力士有りて熱せる鐵鉗を以てその口を鉗開し、すなはち鐵丸の洞かに燃え倶に熾なるを以てその口中に著け、彼の熱鐵丸の脣を燒き、脣を燒き已

の人、戒を犯し、精進せず、惡不善の法を生じ、非梵行にして梵行と稱し、非沙門にして沙門と稱し、刹利・梵志・居士・工師よりその信施を受け、身體・支節・手足を按摩せしめば、彼の愚癡の人これに因りて長夜に不善不義にして惡法の報を受け、身壞れ命終りて至惡處に趣き地獄の中に生ぜん。この故に汝等當に自の義を觀、彼の義を觀、兩の義を觀るべく、當にこの念を作すべし、我出家して學ぶこと虛ならず空ならず、果有り報有り極安樂有り、諸の善處に生じて長壽を得、人の信施の衣被・飲食・床褥・湯藥を受け、諸の施主をして大福祐を得、大果報を得、大光明を得しめんものなりと。當にこの學を作すべし』。世尊また諸の比丘に告げたまはく(3)『「汝等」意に於て云何。若しは力士有りて瑩磨の利刀を以てその髀を截斷すると、若しは刹利・梵志・居士・工師より信施・禮拜・恭敬・將迎を受くると何れをか樂しと爲す』。時に諸の比丘白して曰く『世尊、若し力士有り瑩磨の利刀を以てその髀を截斷するは甚だ苦し、世尊。「これに反して」若し刹利・梵志・居士・工師より信施・禮拜・恭敬・將迎を受くるは甚だ樂し世尊』。世尊告げたまはく『我汝等が爲に說くは汝等學沙門をして沙門道を失はしめざらんが「ため」なり。汝等無上梵行を成ぜんと欲するものは寧ろ力士をして瑩磨の利刀を以てその髀を截斷せしめよ。彼これに因りて苦を受け、或は死すと雖も然もこれを以て身壞れ命終りて、至惡處に趣き地獄の中に生れず。若し愚癡の人、戒を犯し精進せず、惡不善の法を生じ、非梵行にして梵行と稱し、非沙門にして沙門と稱し、刹利・梵志・居士・工師より信施・禮拜・恭敬・將迎を受けば、彼の愚癡の人これに因りて長夜に不善不義にして惡法の報を受け、身壞れ命終りて至惡處に趣き、地獄の中に生れん。この故に汝等當に自の義を觀、彼の義を觀、兩の義を觀るべく、當にこの念を作すべし、我出家して學ぶこと虛ならず空ならず、果有り報有り、極安樂有り、諸の善處に生じて而も長壽を得、人の信施の衣被・飲食・床褥・湯藥を受け、諸の施主をして大福祐を得、大果報を得、大光明を得しめんものなりと。當にこの學を作すべし。世尊また諸の比丘に告げたまは

坐し若しは臥すべし。彼此に因りて苦を受け、或は死すと雖も然もこれを以て身壞れ命終りて至[五]惡處に趣き、地獄の中に生れず。若し愚癡の人戒を犯して精進せず、惡不善の法を生じ、非梵行にして梵行と稱し、非沙門にして沙門と稱するもの、若し刹利の女、梵志・居士・工師の女の年盛時にあるが、沐浴し香もて薰じ、明淨衣を著け、華鬘・瓔珞もてその身を嚴飾せるを抱きて、若しは坐し若しは臥せば、彼の愚癡の人はこれに因りて長夜に不善不義にして惡法の報を受け、身壞れ命終りて至惡處に趣き地獄の中に生ぜん。この故に汝等當に自の義を觀、彼の義を觀、兩の義を觀るべく、當にこの念を作すべし、我出家して學ぶこと虛ならず空ならず、果有り報有り、極安樂有り。諸の善處に生じ長壽を得、人の信施の衣被・飲食・床褥・湯藥を受け、諸の施主をして大福祐を得、大果報を得、大光明を得しめんものなりと、當にこの學を作すべし。世尊また諸の比丘に告げたまはく、(2)『[汝等]意に於て云何。若しは力士有りて緊索毛繩を以てその腨を絞勒して皮を斷ち、皮を斷ち已りて肉を斷ち、肉を斷ち已りて筋を斷ち、筋を斷ち已りて骨を斷ち、骨を斷ち已りて髓に至りて住まると、若しは刹利・梵志・居士・工師よりその信施を受け、身體・支節・手足を按摩せしむると、何れをか樂しと爲す』。時に諸の比丘白して曰く『世尊、若し力士有りて緊索毛繩を以てその腨を絞勒して皮を斷ち、皮を斷ち已りて肉を斷ち、肉を斷ち已りて筋を斷ち、筋を斷ち已りて骨を斷ち、骨を斷ち已りて髓に至りて住まるは甚だ苦し、世尊。[これに反して]若し刹利・梵志・居士・工師よりその信施を受け、身體・支節・手足を按摩せしむるは甚だ樂し、世尊』。世尊告げたまはく『我汝[等]が爲に說くは汝等學沙門をして沙門道を失はしめざらんが[ためなり]」。汝[等]無上の梵行を成ぜんと欲せんものは寧ろ力士をして緊索毛繩を以てその腨を絞勒して皮を斷ち、皮を斷ち已りて肉を斷ち、肉を斷ち已りて筋を斷ち、筋を斷ち已りて骨を斷ち、骨を斷ち已り髓に至りて住まらしめよ。彼これに因りて苦を受け、或は死すと雖も、然もこれを以て[彼は]身壞れ命終りて至惡處に趣き地獄中に生ぜず。若し愚癡

【五】趣至惡處の四字(1)惡處に趣至す、(2)至惡處に趣く。(3)趣(すみや)かに惡處に至る、と三通りに讀まる。「大正新修藏經」にては(1)、「卐字藏經」にては(3)により て訓點せり。

住し、住し已りて觀、觀已りて渡り、渡り已りて彼岸に至り、彼岸に至り已りて岸に住する梵志と謂ふ。猶ほ、人有り水に溺れ、出で已りて住し、住し已りて觀、觀已りて渡り、渡り已りて彼岸に至り、彼岸に至り已りて岸に住する人と謂ふがごとく、我彼の人を說く亦復是の如し。これを第七水喩の人と謂ひ、世間諦かに有るが如し。我が向に言ふ所、當に汝[等]が爲に七水人を說くべしとはこれに因るが故に說く』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

五、[一]木積喩經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時、佛[二]拘薩羅に遊び、人間に在して大比丘衆と翼從して行きたまひぬ。その時世尊すなはち中路に於て忽ち一所に大木積有り、洞かに燃えて倶に熾なるを見たまひぬ。世尊見已りてすなはち道側に下り、更に餘樹に就きて[三]尼師檀を敷き、結加趺坐[四]したまひぬ。世尊坐し已りて諸の比丘に告げたまはく『汝等、彼に大木積あり、洞かに燃えて倶に熾なるを見るや』。時に諸の比丘答へて曰く『見るなり、世尊』。世尊また諸の比丘に告げたまはく(1)『汝[等]意に於て云何。謂く大木積の洞かに燃えて倶に熾なるを若しは抱きて、若しは坐し若しは臥すと、謂く剎利の女、梵志・居士・工師の女の年盛時にあるが、沐浴して香もて熏じ、明淨衣を著け、華鬘瓔珞もてその身を嚴飾せるを、若しは抱きて、若しは坐し若しは臥すと、何れをか樂しと爲す』。時に諸の比丘白して曰く『世尊、謂く大木積の洞かに燃えて倶に熾なるを、若しは抱きて、若しは坐し若しは臥すは甚だ苦し世尊。[これに反して]謂く剎利の女、梵志・居士・工師の女の年、盛時にあるが、沐浴して香もて熏じ、明淨衣を著け、華鬘瓔珞もてその身を嚴飾せるを、若しは抱きて、若しは坐し若しは臥すは甚だ樂し、世尊』。世尊告げたまはく、『我汝[等]が爲に說くは、汝等學沙門をして沙門道を失はしめざらんが[ため]なり。汝等無上梵行を成ぜんと欲するものは、寧ろ木積の洞かに燃え倶に熾なるを抱きて、若しは

【一】 A. iv. 128. 『增一阿含經』三三品の一〇。

【二】 拘薩羅(Kosala)。佛の時代恒河の北岸に國せし一大民族にしてその東南に國せし摩竭陀人と相匹敵せり。この民族の首都を舍衞城と呼べり。

【三】 尼師檀(梵、Nisidana)。坐臥の時下に敷きて身を護りたるもの。

【四】 趺を左右の膝の上に置きて坐る坐法なり。

て失はず、善法中に住し、苦の如眞を知り、苦の習を知り、苦の滅を知り、苦滅の道の如眞を知る。[彼]是の如く知り是の如く見れば三結すなはち盡く。「三結とは」謂く身見と戒[禁]取[見]と疑となり。三結已に盡くれば [六]婬・怒・癡薄く、一たび天上人間に往來することを得、一たび往來することを得已りてすなはち苦際を得。これを人有り出で已りて住し、住し已りて觀、觀已りて渡ると謂ふ。猶ほ人の水に溺れ出で已りて住し、住し已りて觀、觀已りて渡るがごとく、我彼の人を說く亦復是の如し。これを第五水喩の人と謂ふ。世間諦かに有るが如し。(6)云何が人有り出で已りて住し、住し已りて觀、觀已りて渡り、渡り已りて彼岸に至る。謂く人旣に出でて信善法を得、持戒・布施・多聞・智慧にして善法を修習す。彼後時に於て信固くして失はず、持戒・布施・多聞・智慧堅固にして失はず、善法中に住して苦の如眞を知り、苦の習を知り、苦の滅を知り、苦滅の道の如眞を知る。[彼]是の如く知り、是の如く見れば [七]五下分結盡く。[五下分結とは]謂く貪欲・瞋恚・身見・戒[禁]取[見]・疑これなり。五下分結已に盡くれば [八]彼間に生じてすなはち般涅槃し、不退法を得てこの世に還らず。これを人有り出で已りて住し、住し已りて觀、觀已りて渡り、渡り已りて彼岸に至ると謂ふ。猶ほ人有り水に溺れ、出で已りて住し、住し已りて觀、觀已りて渡り、渡り已りて彼岸に至るがごとく、我彼の人を說く亦復是の如し。これを第六水喩の人と謂ひ、世間諦かに有るが如し。(7)云何が人有り出で已りて住し、住し已りて觀、觀已りて渡り、渡り已りて彼岸に至り、彼岸に至り已りて岸に住する梵志と謂ふ。謂く人旣に出でて信善法を得、持戒・布施・多聞・智慧にして善法を修習す。彼後時に於て信固くして失はず。持戒・布施・多聞・智慧堅固にして失はず。善法中に住して苦の如眞を知り、苦の習を知り、苦の滅を知り、苦滅の道の如眞を知る。[彼]是の如く知り是の如く見れば、[九]欲漏心解脫し、有漏・無明漏・心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知る。生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、更に有を受けずと如眞を知る。これを人有り出で已りて

【六】貪欲と瞋恚と愚癡なり。新譯に貪・瞋・癡といひ舊譯に婬・怒・癡といふ。

【七】有情を三界中の下なる欲界に結び繫ぐ五種の煩惱をいひ、次に出る貪欲・瞋恚・身見・戒禁取見・疑を指す。

【八】彼の天上の世界をいふ。彼の世界より他へ退轉することなき故「不退法を得」といふ。

【九】漏と煩惱の異名。これに(1)欲、(2)有、(3)無明の三種あり、欲漏とは貪欲といふ煩惱、有漏とは有即ち生存に就ての煩惱、無明漏とは無明といふ煩惱の意。この三漏より心の解脫するを欲漏心解脫等といふ。

す。謂く或は人有り、不善法の覆蓋するところとなり、染汚に染せられ、惡法の報を受け、生死の本を造る。これを人有り常に臥すと謂ふ。猶ほ人の沒溺して水中に臥すがごとく、我彼の人を說く亦復是の如し。これを初水喩の人と謂ひ、世間諦かに有るが如し。(2)云何が人有り出で已りてまた沒す。謂く人既に出でて、信善法を得、持戒・布施・多聞・智慧にして善法を修習す。彼後時に於て信を失ひて固からず、持戒・布施・多聞・智慧を失ひ、而も堅固ならず。これを人有り出で已りてまた沒すと謂ふ。猶ほ人の水に溺れ既に出でゝまた沒するがごとく、我彼の人を說く亦復是の如し。これを第二水喩の人と謂ひ、世間諦かに有るが如し。(3)云何が人有り出で已りて而も住す。謂く人既に出でて信善法を得、持戒・布施・多聞・智慧にして善法を修習す。彼後時に於て信固くして失はず。持戒・布施・多聞・智慧堅固にして失はず、これを人有り出で已りて而も住すと謂ふ。猶ほ人有り水に溺れ、出で已りて而も住するがごとく、我彼の人を說く亦復是の如し。これを第三水喩人と謂ひ、世間諦かに有るが如し。(4)云何が人有り出で已りて住し、住し已りて觀る。謂く人既に出でて信善法を得、持戒・布施・多聞・智慧にして善法を修習す。彼後時に於て信固くして失はず、持戒・布施・多聞・智慧堅固にして失はず、善法の中に住し、苦の如眞を知り、苦の習を知り、苦の滅を知り、苦滅の道の如眞を知る。彼是の如く知り、是の如く見れば[三]三結すなはち盡く。[三結とは]謂く身見と戒[禁]取[見]と疑となり。三結已に盡くれば[四]須陀洹を得、惡法に墮せず、定んで正覺に趣く。[五]極めて七有を受け、天上人間に七往來し已りてすなはち苦際を得、これを人有り出で已りて住し、住し已りて觀ると謂ふ。猶ほ人有り、水に溺れ出で已りて住し、住し已りて觀るがごとく、我彼の人を說く亦復是の如し。これを第四水喩の人と謂ひ、世間諦かに有るが如し。(5)云何が人有り出で已りて住し、住し已りて觀、觀已りて渡る。謂く人既に出でて信善法を得、持戒・布施・多聞・智慧にして善法を修習す。彼後時に於て信固くして失はず、持戒・布施・多聞・智慧堅固にし

【三】三種の煩惱の意。身見とは身に實我ありと執する邪見。戒禁取見とは戒卽ち牛戒又は狗戒などを生天又は解脫の道なりと執し、禁卽ち外道の苦行などを正しき淸き道なりと執する邪見、疑は疑惑をいふ。

【四】須陀洹とは、四向四果の第一、預流又は入流と譯す。これにて初めて聖道の流に入るが故に名づく。第二を斯陀含といふ。一來と譯す。天上界及び人間界に一度往來したるのみにて涅槃に入るべきを以ての故に名づく。第三を阿那含といふ。不還と譯す。再び欲界に還り來ることなき故なり。第四を阿羅漢といふ。不生・應供など譯す。煩惱を斷じ盡して再び生を受くることなきなり。

【五】最も多くして七たび生れ代り。卽ち天上・人間兩界に七たび往來して「苦際を得」あらゆる煩惱を斷じ盡すの意。

四、水喩經第四[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時、佛、舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『我當に汝[等]が爲に七水人を說くべし。諦かに聽け、諦かに聽け、善くこれを思念せよ』。時に諸の比丘教を受けて聽きぬ。佛言はく『云何が七と爲す。(1)或は一人有り、常に水中に臥す。(2)或はまた人有り、水を出でゝ、また沒す。(3)或はまた人有り、水を出でゝ住す。(4)或はまた人有り、水を出でゝ住し、住し已りて觀る。(5)或はまた人有り、水を出でゝ住し、住し已りて觀、觀已りて渡る。(6)或はまた人有り、水を出でゝ住し、住し已りて觀、觀已りて渡り、渡り已りて彼の岸に至る。(7)或はまた人有り、水を出でゝ住し、住し已りて觀、觀已りて渡り、渡り已りて彼岸に至り、彼岸に至り已りて[二]岸に住する人と謂ふ。是の如く我當に汝[等]が爲に七水喩人を說くべし。諦かに聽け、諦かに聽け、善くこれを思念せよ』。時に諸の比丘教を受けて聽きぬ。佛言はく、『云何が七と爲す。或は人有り、常に臥す。或はまた人有り、出で已りてまた沒す。或はまた人有り、出で已りて住す。或はまた人有り、出で已りて住し、住し已りて觀る。或はまた人有り、出で已りて住し、住し已りて觀、觀已りて渡る。或はまた人有り、出で已りて住し、住し已りて觀、觀已りて渡り、渡り已りて彼岸に至る。或はまた人有り、出で已りて住し、住し已りて觀、觀已りて渡り、渡り已りて彼岸に至り、彼岸に至り已りて岸に住する梵志と謂ふ。この七水喩人我略して說きしこと上の說の如く、上の施設の如し。汝[等]何の義を知り、何の分別する所、何の因緣か有る』。時に諸の比丘世尊に白して曰く『世尊を法の本と爲し、世尊を法の主と爲し、法は世尊に由る。唯願はくはこれを說きたまへ』。佛すなはち告げたまはく『汝等諦かに聽け、善く思念せよ。我當に汝[等]が爲にその義を分別すべし』。時に諸の比丘教を受けて聽きぬ。佛言はく『(1)云何が人有り常に臥

【一】A. iv. 11. 佛說『鹹水喩經』、『增一阿含經』三九品之三。

【二】この經中「住岸人」「住岸梵志」の二語あり。巴利語原典にて Thale tiṭṭhati brāhmaṇo「婆羅門は陸に立つ」は、この二に當るかと思ふ。

聞にして翫習すること千に至り、意の惟觀ずる所明見深達なり。これを聖弟子多聞の軍器を得、惡不善を除き諸の善法を修すと謂ふ。(6)王の邊城に守門の大將を立つ。[彼]明略智辯あり、勇毅奇謀にして、善なれば則ち入るを聽し、不善なれば則ち[入るを]禁じ、內の安隱を爲し外の怨敵を制するが如く、是の如く聖弟子常に念を行じ、正念を成就し、久しく曾て習ふ所、久しく曾て聞く所、恒に憶うて忘れず。これを聖弟子念の守門の大將を得、惡不善を除き、諸の善法を修すと謂ふ。(7)王の邊城に高墻を築立し、極めて牢固ならしめ、泥塗堊灑[以て]、內の安隱を爲し、外の怨敵を制するが如く、是の如く聖弟子智慧を修行し、興衰の法を觀、此の如きの智、聖慧明達を得、分別曉了、以て正しく苦を盡す。これを聖弟子智慧の牆を得、惡不善を除き諸の善法を修すと謂ふ。(1)王の邊城水草樵木の資豫備有り、內の安隱を爲し外の怨敵を制するが故く、是の如く聖弟子欲を離れ、惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂と[あり]、初禪に逮り成就して遊ぶ。樂住乏しきなく、安隱快樂にして自ら涅槃を致す。(2)王の邊城多く稻穀を收め及び麥を儲畜して、內の安隱を爲し外の怨敵を制するが如く、是の如く聖弟子覺と觀と已に息み、內靜・一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂と[あり]、第二禪に逮り成就して遊ぶ。樂住乏しき無く、安隱快樂にして自ら涅槃を致す。(3)王の邊城に多く秥豆及び大小豆を積み、內の安隱を爲し外の怨敵を制するが如く、是の如く聖弟子喜欲より離れ、捨・無求にして遊び、正念・正智にして、而も身に樂を覺ふ。謂く聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空にして、第三禪に逮り成就して遊ぶ。樂住乏しき無く、安隱快樂にして自ら涅槃を致す。(4)王の邊城酥油蜜及び甘蔗餳を畜へ、魚鹽・脯肉一切充足し、內の安隱を爲し外の怨敵を制するが如く、是の如く聖弟子樂滅し苦滅し、喜と憂とは本已に滅せり。不苦不樂、捨あり念あり清淨にして、第四禪に逮り成就して遊ぶ。樂住乏しき無く安隱快樂にして自ら涅槃を致す」。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

ふ。謂く聖［者］の說く所の（聖）所捨・念・樂住・空［あり］、第三禪に逮り成就して遊ぶ。これを聖弟子第三增上心に逮り、易く［得］、難からずして得と謂ふ。(4)また次に聖弟子樂滅し苦滅し、喜憂は本已に滅し、不苦不樂、捨あり念あり、淸淨にして第四禪に逮り成就して遊ぶ。これを聖弟子第四增上心に逮り、易く［得］、難からずして得と謂ふ。是の如く聖弟子七善法を得、四增上心に逮り、易く［得］、難からずして得て、魔王の便を得る所とならず。また惡不善の法に隨はず、染汚に染せられず、また更に生を受けず。(1)王の邊城、樓櫓を造立し、地を築き堅くして毀壞すべからさらしめ、內の安隱を爲し外の怨敵を制するが如く、是の如く聖弟子堅固信を得、深く如來に著し、信根已に立ちて終に外の沙門梵志、若しは天・魔・梵及び餘の世間に隨はず。これを聖弟子信の樓櫓を得、惡不善を除き、諸の善法を修すと謂ふ。(2)王の邊城池塹を掘鑿し、極めて深廣にして修備依るべからしめ、內の安隱を爲し外の怨敵を制するが如く、是の如く聖弟子常に慚恥を行じ惡不善の法は穢汚煩惱にして諸の惡報を受け、生死の本を造るを慚づべく慚づるを知る。これを聖弟子慚の池塹を得、惡不善を除き、諸の善法を修すと謂ふ。(3)王の邊城周匝に道を通じ、開除平博にして內の安穩を爲し、外の怨敵を制するが如く、是の如く聖弟子常に羞愧を行じ、惡不善の法は穢汚煩惱にして、諸の惡報を受け生死の本を造るを愧づべく愧づるを知る。これを聖弟子愧の平道を得て惡不善を除き、諸の善法を修すと謂ふ。(4)王の邊城四種の軍力、象軍・馬軍・車軍・步軍を集め、內の安隱を爲し外の怨敵を制するが如く、是の如く聖弟子常に精進を行じ、惡不善を斷ち諸の善法を修し、恒に自ら意を起し專一堅固にして諸善の本を爲し方便を捨てず。これを聖弟子精進の軍力を得、惡不善を除き諸の善法を修すと謂ふ。(5)王の邊城、軍器・弓矢・鉾戟を豫備し、內の安隱を爲し外の怨敵を制するが如く、是の如く聖弟子廣學多聞にして守持して忘れず、積聚博聞なり、所謂法とは初め善く、中ろ善く、竟り亦善し、義有り文有り、具足淸淨にして梵行を顯現す。是の如く諸法廣學多

難からずして得れば、[是故に]聖弟子魔王の便を得る所と爲らず、また惡不善の法に隨はず、染汚の爲に染せられず。また更に生を受けず。云何にしてか聖弟子七善法を得る。謂く(1)聖弟子堅固信を得、深く如來に著して信根已に立ち、終に外の沙門梵志若しは天・魔・梵及び餘の世間に隨はず。これを聖弟子一の善法を得ると謂ふ。(2)また次に聖弟子常に慚恥を行じ、惡不善の法は穢汚煩惱にして諸の惡報を受け、生死の本を造るを慚づべく慚づるを知る。これを聖弟子二の善法を得ると謂ふ。(3)また次に聖弟子常に羞愧を行じ、惡不善の法は穢汚煩惱にして諸の惡報を受け、生死の本を造るを愧づべく愧づるを知る。これを聖弟子三の善法を得ると謂ふ。(4)また次に聖弟子常に精進を行じ、惡不善を斷ち諸の善法を修し、恒に自ら意を起し專一堅固にして諸の善本の爲に方便を捨てず。これを聖弟子四の善法を得ると謂ふ。(5)また次に聖弟子廣學多聞にして守持して忘れず、積聚博聞なり。所謂法とは初め善く、中ろ善く、竟り亦善く、義有り、文有り、具足し清淨にして梵行を顯現す。是の如きの諸法廣學多聞にして翫習すること千に至り、意の惟觀ずる所明見深達なり。これを聖弟子五の善法を得ると謂ふ。(6)また次に聖弟子常に念を行じ、正念を成就し、久しく曾て習ひし所、久しく曾て聞きし所、恒に憶ひて忘れず。これを聖弟子六の善法を得ると謂ふ。(7)また次に聖弟子智慧を修行し、興衰の法を觀じ、此の如きの智・聖慧明達を得、分別曉了して以て正しく苦を盡す。これを聖弟子七の善法を得ると謂ふ。云何にしてか聖弟子四の增上心に逮り易く[得]、難からずして得る。謂く(1)聖弟子[三]欲を離れ、惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂と[あり]、初禪に逮り成就して遊ぶ。これを聖弟子初增上心に逮り、易く[得]、難からずして得と謂ふ。(2)また次に聖弟子覺と觀とは已に息み、內靜・一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂と[あり]、第二禪に逮り成就して遊ぶ。これを聖弟子第二の增上心に逮り、易く[得]、難からずして得と謂ふ。(3)また次に聖弟子喜欲より離れ捨・無求にして遊び、正念・正智にして而も身に樂を覺

【三】『晝度樹經』及び註を參照せよ。

内自ら壊るゝを除き)外敵の爲には破られざるが如し。云何にしてか王城は七事具足する。謂く(1)王の邊城樓櫓を造立し地を築き堅くして毀壊すべからざらしめ、内の安隱を爲し外の怨敵を制す。これを王城の一事具足と謂ふ。(2)また次に王の邊城池塹を掘鑿し、極めて深廣にして、修備依るべからしめ、内の安隱を爲し外の怨敵を制するが如き、これを王城の二事具足といふ。(3)また次に王の邊城周匝に道を通じ開除平博にして、内の安隱を爲し外の怨敵を制するが如き、これを王城の三事具足と謂ふ。(4)また次に王の邊城四種の軍力・象軍・馬軍・車軍・歩軍を集めて、内の安隱を爲し、外の怨敵を制するが如き、これを王城の四事具足と謂ふ。(5)また次に王の邊城軍器・弓矢・鉾戟を豫備して、内の安隱を爲し外の怨敵を制するが如き、これを王城の五事具足と謂ふ。(6)また次に王の邊城守門の大將を立つ。[彼]明略智辯あり、勇毅奇謀にして善なれば則ち入るを聽し、不善なれば則ち[入るを]禁じて、内の安隱を爲し外の怨敵を制するが如き、これを王城の六事具足と謂ふ。(7)また次に王の邊城高墻を築立して極めて牢固ならしめ、泥塗堊灑[以て]内の安隱を爲し外の怨敵を制するが如き、これを王城の七事具足と謂ふ。云何にしてか王城は四食豐饒、易く[得]、難からずして得る。謂く(1)王の邊城、水草樵木の資、豫備有りて内の安隱を爲し外の怨敵を制す。これを王城の一食豐饒、易く[得]難からずして得と謂ふ。(2)また次に王の邊城、多く稻穀を收め及び麥を儲畜して、内の安隱を爲し外の怨敵を制するが如き、これを王城の二食豐饒、易く[得]難からずして得と謂ふ。(3)また次に王の邊城、多く秥豆及び大小豆を積みて、内の安隱を爲し外の怨敵を制するが如き、これを王城の三食豐饒、易く[得]難からずして得と謂ふ。(4)また次に王の邊城、酥油蜜及び甘蔗餹魚鹽脯肉を畜へて内の安隱を爲し外の怨敵を制するが如き、これを王城の四食豐饒、易く[得]難からずして得と謂ふ。是の如くなれば王城は七事具足し四食豐饒、易く[得]難からずして得、(唯内自ら壊るゝを除き)外敵の爲には破られず。是の如く若し聖弟子亦七善法を得、四增上心に逮り、易く[得]、

【一】 A. iv. 106.「增一阿含經」三九品四。
【二】 巴利原典の文によれば「望むに隨ひて得、勞なくして得、苦なくして得。」

晝度樹の葉還生ずるがごとし。(4)また次に聖弟子[九]覺・觀已に息み內靜・一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂と[あり]、第二禪を得、成就して遊ぶ。この時聖弟子名づけて「生網」と爲す。猶ほ三十三天なる晝度樹の網を生ずるがごとし。(5)また次に聖弟子[一〇]喜欲より離れ、捨無求にして遊び、正念・正智にして而も身に樂を覺ふ。謂く[彼]の聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空[あり]、第三禪を得、成就して遊ぶ。この時聖弟子「生如鳥喙」と名づく。猶ほ三十三天なる晝度樹の如鳥喙のごとし。(6)[一一]また次に聖弟子樂滅し、苦滅し、喜・憂も已に滅し、不苦・不樂にして捨あり念あり、清淨にして第四禪を得、成就して遊ぶ。この時聖弟子「生如鉢」と名づく。猶ほ三十三天の晝度樹の如鉢のごとし。(7)また次に聖弟子[一二]諸漏已に盡き、心解脫し、慧解脫し、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し、成就して遊ぶ。[一三]生已に盡き、梵行已に立ち所作已に辨じ、更に有を受けずと、如眞を知る。この時聖弟子「盡敷開」と名づく。猶ほ三十三天なる晝度樹の盡く敷開するがごとし。彼漏盡の阿羅訶比丘となるや、三十三天[の衆等]集りて[一四]善法正殿に在り咨嗟稱歎すらく、某なる尊弟子は某の村邑に於て鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け、至信にして家を捨て、家無くして學道し、諸漏已に盡き、心解脫し、慧解脫し、現法中に於て、自ら知り自ら覺り自ら作證し、成就して遊ぶ。生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、更に有を受けずと、如眞を知る。これを「漏盡阿羅訶共集會」と謂ふ。三十三天[の衆等]晝度樹下に共に集り會するが如し』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

三、[一]城喩經第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『王の邊城七事具足し、四食豐饒、易く[得]、難からずして得。この故に王城は(唯

りてこれを離生喜樂地と呼ぶ。

【九】第二禪には內靜・喜・樂及び一心の四支あり。定より生ずる喜と樂とあるによりてこれを定生喜樂地をいふ。

【一〇】第三禪は捨・念・慧・樂・心の五支あり。これを離喜妙樂地と呼ぶ。この一節は極めて難解なれば、巴利文より譯出して解し易からしむ、曰く「彼は喜より離れ、捨あり、正念・正智にして住し(日を送り)、樂は亦身を以て享く。彼の聖者たちの說きて捨の人、正念、樂住の人といふ、その第三禪に逮りて住す。」

【一一】第四禪には不苦・不樂、捨・念・一心の四支あり。これを捨念清淨地と呼ぶ。

【一二】漏とは煩惱。心の障礙となるもの除かれ、智慧の障礙となるもの除かれ、心解脫慧解脫を得。

【一三】諸の煩惱盡きて、解脫を得れば阿羅漢となり、現身已後更に生れ出ることなし。故に「生已に盡く」といふ。羅漢となるための修行たる梵行も終りに達したれば「梵行已に立つ」といふ。更に作すべきことなければ「所作已に辨ず」といひ、この人更に生れ出ることなければ「更に有を受けず」といふ。

【一四】善法正殿(Sudhammā)。帝釋天の宮殿。

二、晝度樹經第二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『(1)若し[二]三十三天なる[三]晝度樹の葉萎黃すれば、この時三十三天「の衆等」悅樂歡喜す、晝度樹の葉久しからずして當に落つべしとて。(2)また次に三十三天なる晝度樹の葉已に落つれば、この時三十三天「の衆等」悅樂歡喜す、晝度樹の葉久しからずして當に還生ずべしとて。(3)また次に三十三天なる晝度樹の葉已に還生ずれば、この時三十三天「の衆等」悅樂歡喜す、晝度樹久しからずして當に[四]網を生ずべしとて。(4)また次に三十三天なる晝度樹已に網を生ずれば、この時三十三天「の衆等」悅樂歡喜す、晝度樹久しからずして當に[五]如鳥喙を生ずべしとて。(5)また次に三十三天なる晝度樹已に如鳥喙を生ずれば、この時三十三天「の衆等」悅樂歡喜す、晝度樹久しからずして當に開きて鉢の如くなるべしとて。(6)また次に三十三天なる晝度樹已に開きて鉢の如くなれば、この時三十三天「の衆等」悅樂歡喜す、晝度樹久しからずして當に盡く敷開すべしとて。(7)若し晝度樹已に盡く敷開すれば光の照す所、色の映ずる所、香の薰ずる所、百[六]由延に周し。この時三十三天「の衆等」中夏四月に於て天の[七]五欲功德を以て具足し而して自ら娛樂す。これを三十三天「の衆等」晝度樹の下に於て集會娛樂すといふ。

『是の如き義は聖弟子亦復爾り。(1)「彼」出家を思念す、この時聖弟子名けて「葉黃」と爲す。猶ほ三十三天なる晝度樹の葉萎黃するがごとし。(2)また次に聖弟子鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信にして家を捨て家無くして學道す。この時聖弟子名けて「葉落」と爲す。猶ほ三十三天なる晝度樹の葉落つるがごとし。(3)また次に聖弟子欲を離れ、惡不善の法を離れ、[八]覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂と「あり」、初禪を得、成就して遊ぶ。この時聖弟子「葉還生」と名づく。猶ほ三十三天なる

【一】 A.iv.117. 佛說園生經、增一阿含三九品之二。
【二】 梵語 Trāyastriṁśat、巴利語 Tāvatiṁsa 忉利天、欲界第二の天にして須彌山の絕頂にあり、帝釋天及びその眷屬の住む所。その宮殿はこの天の最高所に有り。
【三】 晝度樹。巴利語にて Pāricchattaka といふ。忉利天に生ふると想像されたる一種の樹。波利質多羅・香遍樹。
【四】 『增一阿含』にては「羅網」と譯せり。蕾なり。
【五】 『增一阿含』にては「雹節」と譯せり。蕾の脹らみ尖りて鳥の喙の如くなるをいふ。
【六】 由延(Yojana)。由旬、踰闍那、踰繕那(距離の名稱)七哩又は八哩の里程。
【七】 五欲功德(Pañcakāma-guṇa)といふ、guṇaには德・功德・成素・種類などの意義あり、こゝに「五欲功德」と譯しあれど實は五種の欲樂の意なり。
【八】 これを初禪定と名づく。覺(新譯の尋、心をして麁に境を分別せしむる作用)觀(新譯の伺、細に分別せしむる作用)喜、樂及び心一境性(心を一の境に住止せしむる性)と、これを初禪の五支といふ。離即ち他人と離れ遠ざかることより生ずる喜と樂とあるによ

法の如くにこれを行ふ有り、法を知らず義を知らず、法に向ひ法に次せず法に隨順せず、法の如くに行はざる有り。若し法を知り義を知り、法に向ひ法に次し法に隨順し、法の如くに行ふものは勝り、法を知らず義を知らず、法に向ひ法に次せず法に隨順せず、法の如くに行はざるものは如かずと爲す。謂く(九)法を知り義を知り、法に向ひ法に次し法に隨順し、法の如く行ふ人にまた二種有り。自ら饒益しまた他を饒益し、多人を饒益し世間を愍傷し、天の爲、人の爲、義及び饒益を求め、安隱快樂を求むる有り、自ら饒益せず、また他を饒益せず、多人を饒益せず世間を愍傷せず、天の爲、人の爲、義及び饒益を求めず、安隱快樂を求めざる有り。若し自ら饒益し、また他を饒益し、多人を饒益し世間を愍傷し、天の爲、人の爲、義及び饒益を求め、安隱快樂を求むるものは、この人は彼の人[人]の中に於て極第一と爲し、大と爲し上と爲し、最と爲し勝と爲し、尊と爲し妙と爲す。譬へば(一九)牛に因りて乳有り、乳に因りて酪有り、酪に因りて生酥有り、生酥に因りて熟酥有り、熟酥に因りて(二〇)酥精有り。酥精は彼の中に於て極第一と爲し、大と爲し上と爲し、最と爲し勝と爲し、尊と爲し妙と爲すが如し。是の如く若し人自ら饒益し、また他を饒益し、多人を饒益し、世間を愍傷し、天の爲、人の爲、義及び饒益を求め、安隱快樂を求めば、この二人は上の所說の如く、上の分別の如く上の施說の如く、これを第一と爲し、大と爲し上と爲し、最と爲し勝と爲し、尊と爲し妙と爲す。これを比丘人の勝如を知ると謂ふ』。佛說是の如し、彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。」

【一三】下相・高相・捨相。下等の事相、高等の事相、中等の事相の意か。「七知經」には「この時は寂滅想を惟ふべく、この時は受行想を惟ふべく、この時は愼護想を惟ふべしと知る。」とあり、巴利文には「こは說示の時なり、こは質問の時なり、こは專心努力の時なり、こは燕坐の時なりと知る。」とあり。この二文によりて大體の意を窺ひ得べし。

【一四】『七知經』「知レ節」、『增一』「知二止足一」、(巴、Mattaññu)「量を知る」の意にて飲食、睡眠その他の事に度を過さざる用心あるをいふ。

【一五】『增一』には「籌二量睡眠一」とあり、全く眠らざることには非ず。

【一六】巴利文「われは信仰によりては、持戒・學問・施與・知慧・理解によりてはこの程度なりと知る。」『中阿含』二三卷住法經の「比丘者若有二篤信・禁戒・博聞・布施・智慧・辯才・阿含及其所得一」この文を參照せよ。この巴利文には「阿含及所得」に當る語なし。しかし他所に出る Āgama-adhigama の語がこれに當るは疑ひなし。これは「聖典に通ずること」の意。

【一七】刹利は四種族中の武士族、梵志衆は婆羅門、卽ち僧族。

【一八】解釋上(一一)に出づ。

【一九】所謂五味なり。通常、乳・酪・生酥・熟酥・醍醐の五をいふ。

【二〇】醍醐味なり。

知ると爲すや。謂く比丘こは[17]刹利衆、こは梵志衆、こは居士衆、こは沙門衆なり。我彼の衆に於て應に是の如く去り、是の如く住し、是の如く坐し、是の如く語り、是の如く默すべきなりと知る。これを比丘、衆を知ると爲すと謂ふ。若し比丘有りて衆を知らざれば、謂く[彼]こは刹利衆、こは梵志衆、こは居士衆、こは沙門衆なり。我彼の衆に於て應に是の如く去り、是の如く住し、是の如く坐し、是の如く語り、是の如く默すべきなりと知らず。是の如きを比丘、衆を知らずと爲す。若比丘有りて善く衆を知れば謂く[彼]こは刹利衆、こは梵志衆、こは居士衆、こは沙門衆なり。我彼の衆に於て應に是の如く去り、是の如く住し、是の如く坐し、是の如く語り、是の如く默すべきなりと知る。これを比丘善く衆を知ると謂ふ。(7)云何が比丘[18]人の勝如を知るや。謂く(一)比丘二種の人あるを知る、信あると不信あると。若し信ずるものは勝り、信ぜざるものは如かずと爲す。謂く(二)信人また二種有り、數ば往きて比丘を見る有り。數ば往きて比丘を見ざる有り。若し數ば往きて比丘を見るものは勝り、數ば往きて比丘を見ざるものは如かずと爲す。謂く(三)數ば往きて比丘を見る人にまた二種有り。比丘を禮敬する有り、比丘を禮敬せざる有り。若し比丘を禮敬するものは勝り、比丘を禮敬せざるものは如かずと爲す。謂く(四)比丘を禮敬する人にまた二種有り。經を問ふ有り經を問はざる有り。若し經を問ふものは勝り、經を問はざるものは如かずと爲す。謂く(五)經を問ふ人にまた二種有り、一心に經を聽く有り、一心に經を聽かざる有り。若し一心に經を聽くものは勝り、一心に經を聽かざるものは如かずと爲す。謂く(六)一心に經を聽く人にまた二種有り、聞きて法を持つ有り、聞きて法を持たざる有り。若し聞きて法を持つものは勝り、聞きて法を持たざるものは如かずと爲す。謂く(七)聞きて法を持つ人にまた二種有り。法を聞きて義を觀る有り、法を聞きて義を觀ざる有り。若し法を聞きて義を觀るものは勝り、法を聞きて義を觀ざるものは如かずと爲す。謂く(八)法を聞きて義を觀る人にまた二種有り。法を知り義を知り、法に向ひ法に次し法に隨順し、

を指す。(2)Geyya 祇夜、重頌・歌詠・散文韻文を混ぜる佛の說教。(3)Veyyākaraṇa 和伽羅那、受記・授記說、問に對する返答說明の如き體裁の佛說。(4)Gāthā 伽陀、偈他・頌・不重頌。これは前の祇夜とは異なり、唯偈文のみより成れる經。(5)Nidāna 尼陀那、緣起・因緣、佛の諸の教法の緣起、因緣。(6)Apadāna とは阿羅漢の過去及び現在に於ける因緣物語。(7)Iti-vuttaka 伊帝目多迦、育多伽・如是語・本起、「こは實に世尊によりて說かれたり」の語を以て初まる百十經。(8)Udāna 優陀那、鳥陀那・此說・喜頌。感興に應じて唱へたる頌並に其因緣八十篇を集めたるもの。(9)Jātaka 闍多迦、本生經・生傳・生處。釋尊の前生に關する物語を集めしもの。(10)Vedalla 廣解、智と滿足とを得て問ひたる經。(11)Abbhutadhamma 阿浮陀達磨、未曾有法。「阿難には四未曾有法あり」等の如く未曾有の法と關聯せる經。(12)Upadesa 優波提舍、說義・論義經。經の註解又はその意義を布衍して說きたるもの。以上は十二部經にしてこの中(5)(6)(12)を除きたるを九分敎といふ。

と謂ふ。これを比丘善く法を知ると謂ふ。(2)云何が比丘義を知ると爲すや。謂く比丘彼彼の說の義、これは彼の義、これは此の義なりと知る。これを比丘義を知ると爲すと謂ふ。若し比丘有りて義を知らざれば、彼彼の說の義、これは彼の義、これは此の義なりと知らずと謂ふ。是の如きを比丘義を知らずと爲す。若し比丘有りて善く義を知れば彼彼の說の義これは彼の義、これは此の義なりと知ると謂ふ。これを比丘善く義を知ると謂ふ。(3)云何が比丘時を知ると爲すや。謂く比丘この時は、[一三]下相を修し、この時は高相を修し、この時は捨相を修す「べきなり」と知る。これを比丘時を知ると爲すと謂ふ。若し比丘有りて時を知らざれば、「彼」この時は下相を修し、この時は高相を修し、この時は捨相を修す「べきなり」と知らずと謂ふ。是の如きを比丘時を知らずと爲す。若し比丘有りて善く時を知れば「彼は」この時は下相を修し、この時は高相を修し、この時は捨相を修す「べきなり」と知る。これを比丘善く時を知ると謂ふ。(4)云何が比丘[一四]節を知ると爲すや。謂く比丘節を知る、若は飮、若は食、若は去、若は住、若は坐、若は臥、若は語、若は默、若は大小便、[一五]睡眠を捐除して正智を修行す。これを比丘節を知ると爲すと謂ふ。若比丘有りて節を知らざれば、謂く「彼」若は飮、若は食、若は去、若は住、若は坐、若は臥、若は語、若は默、若は大小便、睡眠を捐除して正智を修行することを知らず。是の如きを比丘節を知らずと爲す。若比丘有りて善く節を知れば、謂く「彼」若は飮、若は食、若は去、若は住、若は坐、若は臥、若は語、若は默、若は大小便、睡眠を捐除し正智を修行することを知る。これを比丘善く節を知ると謂ふ。(5)云何が比丘己を知ると爲すや。謂く比丘自ら我その[一六]所信・戒・聞・施・慧・辯・阿含及び所得有りと知る。これを比丘己を知ると爲すと謂ふ。若し比丘有りて己を知らざれば「彼」自ら我その所信・戒・聞・施・慧・辯・阿含及び所得有りと知らずと謂ふ。是の如きを比丘己を知らずと爲す。若し比丘有りて善く己を知れば、謂く「彼」自ら我その所信・戒・聞・施・慧・辯・阿含及び所得有りと知る。これを比丘善く己を知ると謂ふ。(6)云何が比丘、衆を

を參照。

【八】舍衞國（梵、Śrāvastī 巴］Sāvatthi）。昔の拘薩羅國の首都。その南門外に祇園精舍ありたり。今ゴンダのマヘットは舍衞城の跡にしてサヘットは祇園の跡なりといふ。

【九】勝林（梵・巴 Jetavana）。もと祇陀太子所有の林園なりしを須達長者が購うて、佛に奉りしもの故祇陀林・祇園・祇樹・逝多林と呼び、意譯して勝林ともいふ。祇陀は勝者の意なり。給孤獨とは、須達長者の異名、彼慈悲心厚くして鰥寡孤獨の恃怙なき輩に衣食を給せる故にこの名を得しといふ。

【一〇】漏は、煩惱の異名。漏盡とは、煩惱なき狀態。羅漢果のこと。

【一一】「知人勝如」（巴、Puggalaparoparaññu）。增一には「知二衆人根原一」七知經には「知レ人」種々多樣の人を知るもの。人の種類を知るものゝ意。

【一二】これは所謂十二部經と稱するもの。佛の敎を（一）その內容により（二）その作品により（三）その形式又は文體によりて九種に分ちたるを九分敎と呼び十二種に分ちたるを十二部經と呼ぶ。（1）Sutta は、修多羅・素怛纜・契經・正經、經は、經律兩藏中散文體の佛說

中阿含經

卷の第一

東晉の孝武〔帝〕及び安帝の世、隆安元年十一月より二年六月に至りて了り、東亭寺に於て、[一]罽賓[二]三藏　瞿曇僧伽提婆譯し、道祖[四]筆受しぬ。

[五]七法品第一（十經あり）　[六]初一日誦

〔十經とは〕善法・晝度樹・城〔喩〕・水〔喩〕・木積喩・善人往・世〔間〕福・七日・〔七〕車・漏盡〔これなり〕

[七]一、善法經第一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛　舍衞國に遊び、[九]勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し比丘ありて七の法を成就せば、すなはち賢聖〔道〕に於て歡喜樂を得、正しく[一〇]漏盡に趣かん。云何が七となす。謂く比丘法を知り、義を知り、時を知り、節を知り、己を知り、衆を知り、人の[一一]勝如を知る〔ことこれなり〕。(1)云何が比丘法を知ると爲すや。謂く比丘[一二]正經・歌詠・記說・偈咃・因緣・撰錄・本起・此說・生處・廣解・未曾有法及び說義を知る。これを比丘法を知ると爲すと謂ふ。若し比丘有りて法を知らざれば〔彼〕正經・歌詠・記說・偈咃・因緣・撰錄・本起・此說・生處・廣解・未曾有法及び說義を知らずと謂ふ。是の如きを比丘法を知らずとなす。もし比丘有りて善く法を知れば〔彼〕正經・歌詠・記說・偈咃・因緣・撰錄・本起・此說・生處・廣解・未曾有法及び說義を知る

【一】北方印度の國名、後世迦濕彌羅（Kaśmira）と呼べり。
【二】經・律・論の三藏に精通せる學僧にして特に翻譯に從事せし人に與へたる稱號なり。
【三】瞿曇僧伽提婆（梵Gautama Saṅghadeva）衆天と譯す。傳は「高僧傳」一卷に出づ。
【四】譯者の語を受けてそれを漢文に筆錄することをいふ。
【五】或本には各品名の上に「中阿含」の三字を冠せるが本譯にてはこれを取り除きたり。
【六】誦は、巴利語にてbhāṇavāra といふ。結集の時これ等の經典を誦出するに要せし回數と、毎回の誦出分量とを示すものと、後日それ等の經典を讀誦する時毎回讀誦する分量と全經を讀誦するに要する度數を示すものとあり。この中阿含は1初一日誦（五品半六十經を含む）2第二日誦（四品半五十二經）3第三一日誦（二品二十五經）4第四一日誦（三品半三十五經）5第五日誦（三品半三十六經）の五に分たる。
【七】或本には、これ以下各經題の上に「中阿含」の三字を冠せるが、これも取り除きて單に「善法經」「晝度樹經」等となしたり。本經に就ては A. iv. 113 七知經、增一阿含三九品の一、失譯般泥洹經上卷

（二〇〇）阿梨吒經 M. 22. Alagaddūpama-sutta
（二〇一）嗏帝經 M. 38. Mahātaṇhāsaṅkhaya-sutta
（二〇二）持齋經 A. VIII. 43.
（二〇三）晡利多經 M. 54. Potaliya-sutta
（二〇四）羅摩經 M. 26. Ariyapariyesana-sutta
（二〇五）五下分結經 M. 64. Mahāmāluṅkya-sutta
（二〇六）心穢經 M. 16. Cetokhila-sutta
（二〇七）箭毛經 M. 77. Mahāsakuludāyi-sutta
（二〇八）箭毛經 M. 79. Cūlasakuludāyi-sutta
（二〇九）鞞摩那修經 M. 80. Vekhanassa-sutta
（二一〇）法樂比丘尼經 M. 44. Cūlavedalla-sutta
（二一一）大拘絺羅經 M. 43. Mahāvedalla-sutta
（二一二）一切智經 M. 90. Kaṇṇakatthala-sutta
（二一三）法莊嚴經 M. 89. Dhammacetiya-sutta
（二一四）鞞訶提經 M. 88. Bāhitika-sutta
（二一五）第一得經 A. X. 29
（二一六）愛生經 M. 87 Piyajātika-sutta
（二一七）八城經 M. 52. Aṭṭhakanāgara-sutta
（二一八）阿那律陀經
（二一九）阿那律陀經 A. VII. 51
（二二〇）見經
（二二一）箭喩經 M. 63. Cūlamāluṅkya-sutta
（二二二）例經

三　巴利「中部」と漢譯『中阿含』

四　「中阿含」各經の異譯

五　各經の大意

六　索引

以上四項は二卷及び三卷の卷首に出す筈である。

中阿含經六十卷を三冊と分つには二十卷づゝとするは形式上最も適當な分け方のやうなれど國譯一切經一冊の分量上よりいへば初冊には十八卷しか收められず、品の分け方よりいへば十六卷又は二十一卷を初冊とするが適當である。しかし十六卷十八卷又は二十一卷共に何れにか障害あることを察し、六十卷を三冊二十卷づゝに分けるといふ比較的穩健なる方法と思はれるものに隨ふことゝした。

漢文と巴利文との對照の上に尙ほ不十分の點あり。更に一年を假されたらばと思つたが左樣に悠々たることは出版社に於て許されず、不十分を承知しつゝ原稿を送ることにした。

原始佛教聖典の成立及び『中阿含』の特質に就て此處に一言すべき筈であるが、前者に就ては椎尾博士が國譯『雜阿含』の卷頭に述べられる筈で、此處にはこれに觸れることを謝せられて居り、後者に就ては本國譯第三卷の卷首に擧ぐべき各經大意を參照されんことを望む。

昭和四年七月廿五日

譯者　立花俊道識

(一三八)福經 A. VII. 58
(一三九)息止道經 cf. Sn. Vijaya-sutta
(一四〇)至邊經 It. 91
(一四一)喩經 S. III. 2 (7-8)
(一四二)雨勢經 A. VII. 20
(一四三)傷歌邏經 A. III. 60
(一四四)算數目揵連經 M. 107. Gaṇaka-moggallāna-sutta
(一四五)瞿默目揵連經 M. 108. Gopaka-moggallāna-sutta
(一四六)象跡喩經 M. 27. Cūla-hatthipadopama-sutta
(一四七)聞德經
(一四八)何苦經 A. V. 31
(一四九)何欲經 A. VI. 52
(一五〇)欝瘦歌邏經 M. 96. Esukāri-sutta
(一五一)阿攝惒經 M. 93. Assalāyana sutta
(一五二)鸚鵡經 M. 99. Subha-sutta
(一五三)鬚閑提經 M. 75. Mahāgandiya-sutta
(一五四)婆羅婆堂經 D. 27. Aggañña-suttanta
(一五五)須達哆經 A. IX. 20
(一五六)梵波羅延經 Sn. pp. 50-55
(一五七)黃蘆園經 A. VIII. 51
(一五八)頭那經 A. V. 192
(一五九)阿伽羅訶那經
(一六〇)阿蘭那經 A. VII. 70
(一六一)梵摩經 M. 91. Brahmāyu-sutta
(一六二)分別六界經 M. 140. Dhātuvibhaṅga-sutta
(一六三)分別六界經 M. 137. Saḷāyatana-sutta
(一六四)分別觀法經 M. 138. Uddesavibhaṅga-sutta
(一六五)溫泉林天經 M. 133. Kaccāna-bhaddekaratta-sutta
(一六六)釋中禪室尊經 M. 134. Lomasakaṅgiya-bhaddekaratta-sutta
(一六七)阿難說經 M. 132. Ānanda-bhaddekaratta-sutta
(一六八)意行經 M. 120. Saṅkhāruppatti-sutta
(一六九)拘樓瘦無諍經 M. 139. Araṇavibhaṅga-sutta
(一七〇)鸚鵡經 M. 135. Cūlakammavibhaṅga-sutta
(一七一)分別大業經 M. 136. Mahākammavibhaṅga-sutta
(一七二)心經 A. IV. 186
(一七三)浮彌經 M. 126. Bhūmija-sutta
(一七四)受法經 M. 45. Dhammasamādāna-sutta
(一七五)受法經 M. 46. Dhammasamādāna-sutta
(一七六)行禪經
(一七七)說經
(一七八)獵師經 M. 25. Nivāpa-sutta
(一七九)五支物主經 M. 78. Samaṇamaṇḍika-sutta
(一八〇)瞿曇彌經 M. 142. Dakkhiṇāvibhaṅga-sutta
(一八一)多界經 M. 115. Bahudhātuka-sutta
(一八二)馬邑經 M. 39. Mahāassapura-sutta
(一八三)馬邑經 M. 40. Cūlaassapura-sutta
(一八四)牛角娑羅林經 M. 32. Mahāgosiṅga-sutta
(一八五)牛角娑羅林經 M. 31. Cūlagosiṅga-sutta
(一八六)求解經 M. 47. Vīmaṃsaka-sutta
(一八七)說智經 M. 112. Chabbisodhana-sutta
(一八八)阿夷那經 A. X. 116, A. X. 115
(一八九)聖道經 M. 117. Mahācattārīsaka-sutta
(一九〇)小空經 M. 121. Cūlasuññatā-sutta
(一九一)大空經 M. 122. Mahāsuññatā-sutta
(一九二)加樓烏陀夷經 M. 66. Laṭukikopama-sutta
(一九三)牟犂破群那經 M. 21. Kakacūpama-sutta
(一九四)跋陀和利經 M. 65. Bhaddāli-sutta
(一九五)阿濕貝經 M. 70. Kiṭāgiri-sutta
(一九六)周那經 M. 104. Sāmagāma-sutta
(一九七)優婆離經 Vin. i. IX 6 (1-8)
(一九八)調御地經 M. 125. Dantabhūmi-sutta
(一九九)癡慧地經 M. 129. Bālapaṇḍita-

(六六)說本經	cf. Theragāthā 910-919
(六七)大天㮈林經	M. 83. Makhādeva-sutta
(六八)大善見王經	D. 17. Mahāsudassana-suttanta
(六九)三十喩經	
(七〇)轉輪王經	D. 26. Cakkavattisīhanāda-suttanta
(七一)蜱肆經	D. 23. Pāyāsi-suttanta
(七二)長壽王本起經	M. 128. Upakkilesiya-sutta
(七三)天經	A. VIII. 64
(七四)八念經	〃 〃 30
(七五)淨不動道經	M. 106. Āṇañjasappāya-sutta
(七六)郁伽支羅經	
(七七)娑雞帝三族姓子經	M. 68. Naḷakapāna-sutta
(七八)梵天請佛經	M. 49. Brahmanimantanika-sutta
(七九)有勝天經	M.127. Anuruddha-sutta
(八〇)迦絺那經	
(八一)念身經	M. 119. Kāyagatāsati-sutta
(八二)支離彌梨經	A. VI. 60.
(八三)長老上尊睡眠經	A. VII. 58.
(八四)無刺經	A. X. 72.
(八五)眞人經	M. 113. Sappurisa-sutta
(八六)說處經	M. 148. Chachakka-sutta
(八七)穢品經	M. 5. Anaṅgana-sutta
(八八)求法經	M. 3. Dhammadāyāda-sutta
(八九)比丘請經	M. 15. Anumāna-sutta
(九〇)知法經	A. X. 24
(九一)周那問見經	M. 8. Sallekha-sutta
(九二)青白蓮華喩經	
(九三)水淨梵志經	M. 7. Vatthūpama-sutta
(九四)黑比丘經	A. X. 87
(九五)住法經	cf. A. X. 17, 18
(九六)無經	
(九七)大因經	D. 15. Mahānidāna-sutta
(九八)念處經	M. 10. Satipaṭṭhāna-sutta
(九九)苦陰經	M.13. Mahādukkhakkhandha-sutta
(100)苦陰經	M.14. Cūladukkhakkhandha-sutta
(101)增上心經	M. 20, Vitakkasaṇṭhāna-sutta
(102)念經	M. 19. Dvedhāvitakka-sutta
(103)師子吼經	M. 11. Cūla-Sīhanāda-sutta
(104)優曇婆邏經	D.25. Udumbarika-Sīhanāda-sutta
(105)願經	M. 6. Ākaṅkheyya-sutta
(106)想經	M. 1. Mūlapariyāya-sutta
(107)林經	M. 17. Vanapattha-sutta
(108)林經	〃
(109)自觀心經	A. X. 51, 54
(110)自觀心經	〃
(一一一)達梵行經	A. VI. 63
(一一二)阿奴波經	A. VI 62
(一一三)諸法本經	A. VIII. 83, X. 58
(一一四)優陀羅經	S. XXXV. 103
(一一五)蜜丸喩經	M. 18. Madhupiṇḍika-sutta
(一一六)瞿曇彌經	A. VIII. 51
(一一七)柔軟經	A. III. 38,39
(一一八)龍象經	A. VI. 43
(一一九)說處經	A. III. 67
(一二〇)說無常經	S. XXII, 76
(一二一)請請經	S. VIII. 7
(一二二)瞻波經	A. VIII. 10
(一二三)沙門二十億經	A. VI. 55
(一二四)八難經	A. VIII. 29
(一二五)貧窮經	A. VI. 45
(一二六)行欲經	A. X. 91
(一二七)福田經	A. II. 44
(一二八)優婆塞經	A. V. 179
(一二九)怨家經	A. VII. 60
(一三〇)教曇彌經	A. VI. 54
(一三一)降魔經	M. 50. Māratajjaniya-sutta
(一三二)賴吒恕羅經	M. 82. Raṭṭhapāla-sutta
(一三三)優婆離經	M. 56. Upāli-sutta
(一三四)釋問經	D. 21. Sakkapañha-suttanta
(一三五)善生經	D. 31 Siṅgālovāda-suttanta
(一三六)商人求財經	Jāt. 196
(一三七)世間經	A. IV. 23

にその對經を見出し得べきものが亦百經强、而して他の約二十經はまだその對經の見出し得られざるものである。これは發見の望全くないのもあるが、意外の場所に發見せられる例も亦往々ある。對經として擧げたもの丶中には唯一部が似て居るだけで、全體としては對經として見るは無理かと思はれるのもある。而して兩者を比較して見て感ずることは兩者は原文譯文といふ關係を有つては居まいといふことである。

(一)善法經	A. VII. 64
(二)晝度樹經	〃 〃 65
(三)城喩經	〃 〃 63
(四)水喩經	〃 〃 15
(五)木積喩經	〃 〃 68
(六)善人往經	〃 〃 52
(七)世間福經	
(八)七日經	〃 〃 62
(九)七車經	M. 24 Rathavinīta-sutta
(一〇)漏盡經	M. 2 Sabbāsava-sutta
(一一)鹽喩經	A. III. 99
(一二)恕破經	〃 IV. 195
(一三)度經	〃 III. 61
(一四)羅云經	M. 61. Rāhulovāda-sutta
(一五)思經	A. X. 206-208
(一六)伽藍經	〃 III. 65
(一七)伽彌尼經	
(一八)師子經	A. VIII. 12; Mahāvagga VI 31, 10-11
(一九)尼乾經	M. 101. Devadaha-sutta
(二〇)波羅牢經	S. XLII. 13
(二一)等心經	A. II. 4. 5-6
(二二)成就戒經	A. V. 166
(二三)智經	S. XII. 32
(二四)師子吼經	A. IX. 11
(二五)水喩經	A. V. 162
(二六)瞿尼師經	M. 69. Gulissāni-sutta
(二七)梵志陀然經	〃 97. Dhānañjani-sutta
(二八)教化病經	〃 143. Anāthapiṇḍika-sutta
(二九)大拘絺羅經	
(三〇)象跡喩經	〃 28. Mahāhatthipadopama-sutta
(三一)分別聖諦經	M. 141. Saccavibhaṅga-sutta
(三二)未曾有法經	〃123. Acchariyabbhuta-dhamma-sutta
(三三)侍者經	
(三四)薄拘羅經	〃 124. Bakkula-sutta
(三五)阿修羅經	A. VIII. 19
(三六)地動經	〃 〃 70
(三七)瞻波經	〃 〃 20
(三八)郁伽長者經	〃 〃 21
(三九)郁伽長者經	
(四〇)手長者經	〃 〃 24
(四一)手長者經	A. VIII. 23
(四二)何義經	〃 X. 1
(四三)不思經	〃 〃 2
(四四)念經	〃 VIII. 81
(四五)慚愧經	cf 〃 〃 〃
(四六)慚愧經	〃 X. 3
(四七)戒經	cf 〃 〃 3
(四八)戒經	〃 〃 4
(四九)恭敬經	〃 V. 21-20
(五〇)恭敬經	〃 〃 〃
(五一)本際經	A. X. 61-62
(五二)食經	〃 〃 〃
(五三)食經	〃 〃 〃
(五四)盡智經	
(五五)涅槃經	
(五六)彌醯經	A. IX. 3
(五七)即爲比丘說經	〃 〃 1
(五八)七寶經	S. XLVI. 42
(五九)三十二相經	D. 30 Lakkhaṇa-suttanta
(六〇)四洲經	Divyāvadāna, pp 210-226
(六一)牛糞喩經	S. XXII. 96
(六二)頻鞞娑邏王迎佛經	Mahāvagga I. 22
(六三)鞞婆陵耆經	cf. M. 81. Ghaṭīkāra-sutta
(六四)天使經	〃 130, Devadūta-sutta
(六五)烏鳥喩經	

提婆は冀州の沙門法和と共に洛陽に入り、其處で四五年間落ちついて經典を講じたり漢語を習つたりして居る中に兩阿含の飜譯に不十分の點あることに氣がついた。隆安元年彼が京師に遊んだ時、東亭侯優婆塞王元琳といふ人があつたが、これは譯經に深き興味を有てる人で、そのために精舍を建立し、四方の學徒を招集したこともあつた。そこで揚州建康縣の界なる彼の精舍中に於て『中阿含』を譯することゝなり隆安元年十一月より二年六月に至る（西紀三九七―三九八年）約七ケ月の間に果して了つた。

上記の諸書に現はるゝ僧伽提婆の傳や道慈法師の作なる『中阿含』序文には罽賓沙門僧伽羅叉（Saṅgharakṣa 此に衆護といふ）に請うて胡本を譯せしめ、僧伽提婆（又は和）に請うて胡を轉じて晋となし、豫州沙門道慈筆受し、吳國の李寶、唐（或は康）化共に書したといつてある。偶ま又々兵難が興つたゝめ、この譯本を十分校定の上書寫流傳せしむることが出來ず、これが果されたのは實に隆安五年（西紀四〇一年）のことであつた。

『中阿含』の傳譯に就ては年代、卷數、その他に關して問題とされることは殆どないといつてよい。但飜譯者が僧伽提婆と麗々しく銘打たれて出て居るのは聊か異とするに足るといへよう。この經の飜譯には僧伽羅叉は梵本を執り、僧伽提婆は飜じて晋言となした。卽ち前者は執本又は譯主と呼ばれ、後者は譯語又は傳語と呼ばるべきものである。隨つて譯者として擧げられるのは當然僧伽羅叉でなければならぬ筈であるが、如何したものか譯者卽ち譯主は僧伽提婆といふことになつて居る。これ恐くはこの僧伽羅叉に就ては殆ど知られる所がなく、反之僧伽提婆に就てはその傳記も可なり詳しく判つて居り『中阿含經』の飜譯に關しては彼獨り功勞ある人のやうに言ひ傳へられた結果であらう。しかしこの種の錯誤は譯經史上、少からず例あることのやうである。但この國譯には從來の傳說によりて僧伽提婆を譯者として置いた。

二　漢巴兩中阿含の對照

巴利聖典の中で、漢譯『中阿含經』に相當するものは Majjhima-Nikāya である。「中集」の意、漢譯を『中阿含』と呼ぶに對して通常巴利文のを『中部』と呼んで居る。漢譯が二百二十二經あるに比してこれは唯百五十二經である。今兩者が如何ほどまで一致するかを示すため次なる表を作つた。これは次卷の首に出すべき「巴漢兩中阿含の對照」卽ち巴利『中部』の各經に漢譯經を對照したものと比較すれば更に判然とわかる筈である。これによりて漢巴兩中阿含の一致するのが百經弱で、『增一部』以下他の巴利聖典中

中阿含經解題

一　飜譯次第

『中阿含經』の漢譯は前後二回行はれたやうである。その第一譯は『出三藏記集』十三卷に兜佉勒國（Tokhara 覩貨邏、吐火羅）の沙門曇摩難提（Dhammandi 秦に法喜といふ）が前秦の符堅の建元二十年から姚萇の建初六年まで（西紀三八四—三九一年）の間に、長安城內に於て增一及び中の二阿含凡そ一百卷を出したとある、それで、これは增一阿含が四十一卷に中阿含が五十九卷であつたらしい。これには難提は胡本を口誦し、竺佛念が譯出したやうに同集同卷及び三卷に書いてある。但三卷には增一阿含は三十三卷のやうにいつてあるのは如何いふものか。

更に『高僧傳』一卷には、符堅の臣に武威太守趙正といふものあり、道のために身を忘れ、慕容沖の叛逆のために關中擾動せるをも意とせず、長安城中に於て義學の僧を集め、難提に請して中增一兩阿含その他を譯出せしめた。後姚萇が寇して關內に逼り、人情危阻なるに及び難提は辭して西域に還り、その終る所を知らずといつてある。これが第一譯であるが、疾くに失はれて今日に傳はらぬからして、果して如何なものであつたか窺ひ知ることは出來ない。『出三藏記集』三卷に現存『中阿含』のことを記して「曇摩難提の出す所と大に同じからず」といひ、『大唐內典錄』三卷に「第二譯は曇摩難提の出と同じからず」といへるを見て、吾吾はこの失はれた第一譯は現存の第二譯とはよほど異つて居たことを彷彿し得るのみである。

第二譯は罽賓國（Kaśmīra 迦濕彌羅、羯濕弭羅）出身の瞿曇僧伽提婆（Saṅgha-deva 此に衆天といふ）が譯出したと傳ふる、それで、六十卷あり、今此に國譯したものである。提婆の傳は『出三藏記集』十三卷、『開元釋敎錄』三卷、『高僧傳』一卷に出で、大體大同小異である。彼は符堅の建元年間に長安に來つて法化を宣流した。當時長安には釋道安があつて秦主符堅の特遇を蒙り、その贊助を受けて硏講飜譯の事業を監督して居た。曇摩難提が二阿含を譯したのも一部はこの道安の慫慂によるもので あるらしい。『出三藏記集』一三卷に「乃ち安公と共に請うて經を出さしむ」といつてある。しかし慕容沖の兵難の折ではあり、道安は建元二十一年（西紀三八五年）俄に世を棄てたので折角譯したものゝこれを訂正するに及ばなかつた。後山東も追々淸平に歸したので僧伽

目次

（本丁）（通頁）

(35)

阿含部　四

立花俊道譯

(35)

國譯一切經

大東出版社藏版

月報第八號
編輯發行人　栗本俊道
東京芝公園地七ノ一
大東出版社

阿含經の種類と内

◇阿含經とは何か

●阿含經については既
で林谷大教授が
阿含經